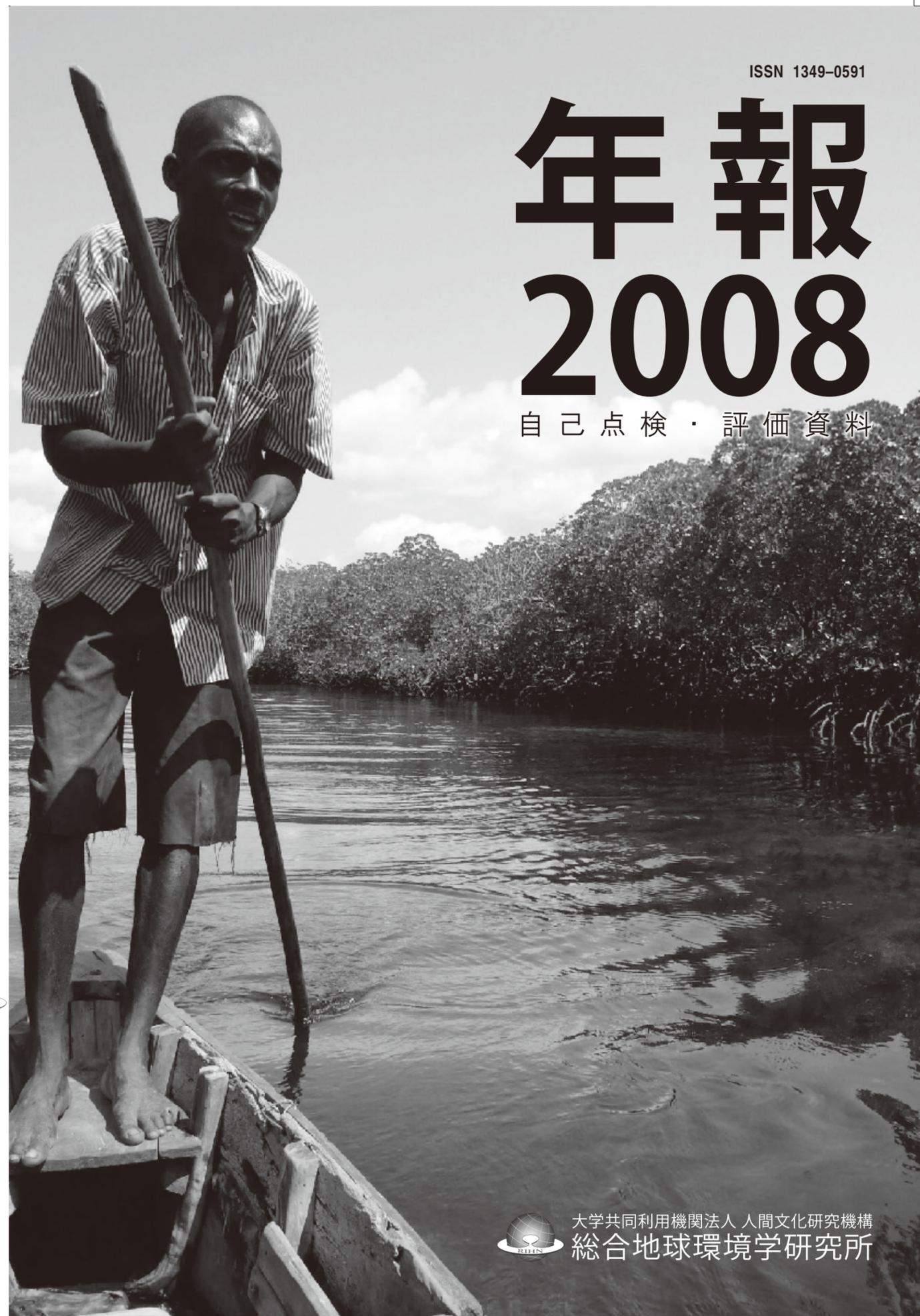


ISSN 1349-0591

年報 2008

自己点検・評価資料

年報
2008



総合地球環境学研究所



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457 番地 4
TEL.075-707-2100(代表) FAX.075-707-2106(代表)
E-mail : info@chikyu.ac.jp
U R L : <http://www.chikyu.ac.jp>

発行：2010年3月



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所

目次

・研究プロジェクト一覧	1
本研究	3
プレリサーチ	107
予備研究	122
インキュベーション研究	126
・研究推進戦略センターの概要と活動	129
・研究成果の発信	
地球研国際シンポジウム	130
地球研フォーラム	131
地球研市民セミナー	132
地球研地域セミナー	132
研究プロジェクト発表会	134
地球研セミナー	134
談話会	134
出版活動	135
プレス懇談会	136
・連携研究	137
・個人業績一覧	139
個人業績紹介（50音順）	142
・付録	
付録1 研究プロジェクトの参加者の構成（所属機関）	
付録2 研究プロジェクトの参加者の構成（研究分野）	
付録3 研究プロジェクトの主なフィールド	

研究プロジェクト一覧

●本研究

- | | |
|---|--------|
| プロジェクト番号：C-04（プロジェクトリーダー・白岩 孝行） | 3 ページ |
| プロジェクト名：北東アジアの人間活動が北太平洋の生物生産に与える影響評価 | |
| プロジェクト番号：C-05（プロジェクトリーダー・谷口 真人） | 9 ページ |
| プロジェクト名：都市の地下環境に残る人間活動の影響 | |
| プロジェクト番号：C-06（プロジェクトリーダー・川端 善一郎） | 18 ページ |
| プロジェクト名：病原生物と人間の相互作用環 | |
| プロジェクト番号：D-02（プロジェクトリーダー・湯本 貴和） | 24 ページ |
| プロジェクト名：日本列島における人間－自然相互関係の歴史的・文化的検討 | |
| プロジェクト番号：D-03（プロジェクトリーダー・奥宮 清人） | 30 ページ |
| プロジェクト名：人の生病老死と高所環境－3大「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応 | |
| プロジェクト番号：D-04（プロジェクトリーダー・山村 則男） | 41 ページ |
| プロジェクト名：人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生 | |
| プロジェクト番号：E-02（プロジェクトリーダー・関野 樹） | 46 ページ |
| プロジェクト名：流域環境の質と環境意識の関係解明－土地・水資源利用に伴う環境変化を契機として－ | |
| プロジェクト番号：E-03（プロジェクトリーダー・高相 徳志郎） | 51 ページ |
| プロジェクト名：亜熱帯島嶼における自然環境と人間社会システムの相互作用 | |
| プロジェクト番号：E-04（プロジェクトリーダー・梅津 千恵子） | 55 ページ |
| プロジェクト名：社会・生態システムの脆弱性とレジリエンス | |
| プロジェクト番号：H-02（プロジェクトリーダー・佐藤 洋一郎） | 60 ページ |
| プロジェクト名：農業が環境を破壊するとき－ユーラシア農耕史と環境－ | |
| プロジェクト番号：H-03（プロジェクトリーダー・長田 俊樹） | 65 ページ |
| プロジェクト名：環境変化とインダス文明 | |
| プロジェクト番号：H-04（プロジェクトリーダー・内山 純蔵） | 71 ページ |
| プロジェクト名：東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史 | |
| プロジェクト番号：R-03（プロジェクトリーダー・窪田 順平） | 91 ページ |
| プロジェクト名：民族／国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明－中央ユーラシア半乾燥域の変遷 | |
| プロジェクト番号：R-04（プロジェクトリーダー・門司 和彦） | 97 ページ |
| プロジェクト名：熱帯アジアにおける環境変化と感染症 | |

●プレリサーチ

プロジェクト番号：C-07（プロジェクトリーダー・井上 元） 107 ページ
 プロジェクト名：温暖化するシベリアの自然と人 ―水環境をはじめとする陸域生態系変化への社会の適応―

プロジェクト番号：R-05（プロジェクトリーダー・縄田 浩志） 110 ページ
 プロジェクト名：アラブ社会におけるなりわい生態系の研究―ポスト石油時代に向けて

●予備研究

プロジェクト番号：C-FS1（FS 責任者・村松 伸） 122 ページ
 プロジェクト名：都市をめぐる循環と多様性：人類と地球環境を架橋する巨大で複雑なシステムの未来可能性

プロジェクト番号：C-FS2（FS 責任者・中野孝教）
 プロジェクト名：水質の地域多様性の探究：循環を基軸にした水管理に向けて

プロジェクト番号：H-FS（FS 責任者・渡辺千香子）
 プロジェクト名：メソポタミア文明における王朝の興亡と環境

●インキュベーション研究

126 ページ

1. 中央アジアにおける遊牧民と農民の環境史学
宇野隆夫（国際日本文化研究センター 教授）
2. 全球結合モデルによる飢餓指標の開発
松村寛一郎（関西学院大学総合政策学部メディア情報学科 准教授）
3. 温暖化の緩和と地球環境～循環型家族・コミュニティ・価値観の視点から～
山岸治男（大分大学教育福祉科学部 教授）
4. 急激に変化する中国・長江流域の人間活動と自然の相互作用
田中広樹（名古屋大学 研究機関研究員）
5. 東南アジア沿岸域における生物資源の持続的利用に向けた提言
―科学的研究成果と地域住民意識の調和への取り組み―
石川智士（東海大学海洋学部 准教授）
6. 開発と自然・社会環境変化に対する移民・流動人口・難民の生活適応と環境影響
須田一弘（北海学園大学人文学部 教授）
7. 急激な新興作物の導入がもたらす生態系の不安定化と汚染
―ウォーレス地域と周辺島嶼部におけるバイオエタノール用作物の場合を中心に―
佐藤雅志（東北大学大学院生命科学研究所 准教授）
8. 持続千年首都・平安京の生態智の総合的研究と世界平安都市モデル構想
鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター 教授）
9. 人口動態解析に基づく自然共生型流域・沿岸域ネットワーク社会の形成
大森浩二（愛媛大学沿岸環境科学研究センター 准教授）
10. 危機に瀕している沿岸地帯の環境システムに関する研究
―GIS とリモートセンシングを用いた海洋大陸における環境気候とリスクの解析―
SANGA-NGOIE Kazadi（立命館アジア太平洋大学 教授）

本研究**プロジェクト番号: C-04****プロジェクト名: 北東アジアの人間活動が北太平洋の生物生産に与える影響評価****プロジェクト名(略称): アムール・オホーツクプロジェクト****プロジェクトリーダー: 白岩孝行****プログラム/研究軸: 循環領域プログラム****ホームページ: <http://www.chikyu.ac.jp/AMORE/>****キーワード: 魚付林、土地利用、陸面改変、物質循環、溶存鉄、植物プランクトン、オホーツク海、アムール川、親潮****○研究目的と内容(2008年4月～2009年3月)**

本プロジェクトの目的は、オホーツク海、及び北部北太平洋における生物生産に対するアムール川の役割とアムール川流域における人為的陸面改変が海洋生態系に与える影響を評価することである。より具体的には、1) オホーツク海・北部北太平洋の生物生産を規定する「溶存鉄」がアムール川流域からオホーツク海および親潮域に河川と海流によって如何に輸送されるか、2) 「溶存鉄」の供給がどの程度オホーツク海と親潮域の基礎生産を律速しているか、3) いかにして陸面の土地利用改変がアムール・オホーツクシステムの物質循環に影響を与えるか、4) 人為的なインパクトがこのシステムを将来どう変化させ得るか、5) この国境を横断する環境システムを如何にして保全することができるか、という5点を解明する。これらの5つの疑問に答えることにより、新たな地球環境学的概念である「巨大魚つき林(きょだいうおつきりん)」を提案し、中国、ロシア、モンゴル、そして日本が共同してこのシステムの保全を目指すための学問的基盤を整備したい。

○進捗状況(2008年4月～2009年3月)

プロジェクト終了まで残り一年となった今、これまでの進捗状況を整理して以下記す。

1) 「巨大」魚付林(GFBF)仮説の検証

GFBFの各所における溶存鉄および全鉄の年間平均フラックスを見積り、これらの鉄がアムール川流域に起源をもち、親潮域にまで連続的に輸送されていることを確認した。年間 $1.1 \pm 0.7 \times 10^{11}$ g/yrの溶存鉄がアムール川から汽水域に輸送され、そのうち95%が汽水域とサハリン湾で凝集して沈降する。アムール川河口から親潮域へは二つの鉄輸送経路があることが判明した。ひとつは、海洋表面を通る鉄の輸送であり、他のひとつは北太平洋中層水に沿った輸送である。前者はオホーツク海の植物プランクトンに利用され、後者は親潮で利用される。親潮域においては、約 $1.2 \sim 1.5 \times 10^8$ g/yrの溶存鉄が大気と北太平洋中層水からそれぞれ供給されている。親潮域において植物プランクトンの春季ブルームに利用される鉄のうち、40%は北太平洋中層水から供給され、残りの60%は微生物ループを通じて再利用される鉄である。大気起源の鉄について、我々はまだ植物プランクトン生成への貢献度を定量化できていない。その理由は、大気起源の鉄が空間的にも時間的にもたいへん不均一であるためである。親潮域においては、時折、栄養塩(硝酸)が豊富であるにもかかわらず、鉄の不足によって植物プランクトンの生成が止まることがあり、このことから、親潮域では鉄が植物プランクトンの生成を律速していることを確認した。

2) GFBFに対する人為的影響

溶存鉄濃度に与える土地利用変化の影響は、湿原、水田、畑における土壌水分中の溶存鉄濃度についての通年観測から明らかとなった。また、森林火災の影響を受けた流域では、自然林の流域よりも低い濃度の溶存鉄が流出していることも実験流域における観測から明らかとなった。三江平原においては、ウスリー川の支流ナオリ川における鉄濃度の経年観測データから、1964年以降、一貫して鉄濃度が減少していることが明らかとなった。それゆえ、研究対象地域では人為的な活動が確かに溶存鉄濃度を減少させていることを確認した。

一方、アムール川本流においては、鉄濃度の減少が経年データに表れていないことも明らかとなった。ハバロフスクで観測された溶存鉄濃度の経年データにおいては、1990年以降、濃度が上昇している傾向さえ見えた。この事実は、三江平原において1980年代以降、湿原が大規模に干拓されてきた事実と矛盾する。現在のところ、この原因について、我々は次のようなシナリオを考えている。1990年以降、三江平原では水田耕作のために過剰な地下水を揚水した。地下水にもともと濃度の高い溶存鉄が含まれており、この鉄が地下水の揚水によって表層に集積していた。そして、1997-1998年に生じた松花江流域における大規模な洪水が、この集積した鉄を下流域にもたらした。我々の社会科学班の研究によれば、三江平原では水田の開発に伴って地下水位が急激に減少していることが判明している。そ

れゆえ、三江平原の水田耕作自体、このまま地下水を利用しつづける限り、持続可能な土地利用形態とは言い難い。

3) GFBBの保全

ロシア極東の森林は持続可能とは言い難い森林開発、森林火災、森林管理によって劣化しつつある。ロシアから中国への急速な木材輸出やロシアの森林政策における混乱も加速する森林劣化の原因となっている。一方、中国によるアムール川流域における農地開発は、20世紀後半の急速な拡大期を経て、現在は安定的な状態にある。しかし、灌漑水の不足による地下水の大規模揚水は、三江平原の地下水位を急速に低下させている。

このようなGFBBの現状に基づき、(1)我々はGFBBの保全のためのアジェンダ設定の検討を開始した、(2)このアジェンダは、国際法や政策、およびそれぞれの国々の政治・経済状況を反映した現実的あるいは特定の枠組みを包含し、一括した形で作成する、そして、(3)我々は単なる政策上の道具としてではなく、理論的かつ洗練されたGFBBの保全策を提示する予定である。

4) 予期せぬ成果

2008年7月に開催された北海道洞爺湖サミットにおいて、日露首脳会談が実施された。日露両首脳は、この会談において、北方四島周辺の生態系を保全する協定に合意した。本プロジェクトでは、この協定の作成過程において、アムール川がオホーツク海や親潮域の海洋生態系に与える影響を説明し、協定の一部にアムール川の保全を考える項目を挿入することに成功した。これはおそらく、RIHNのプロジェクトが実際の政策に反映された最初の例ではないだろうか。

一方、環日本海経済研究所がとりまとめた政策提言レポートにおいて、将来の極東地域における環境保全の必要性に関連して、GFBBの保全についての記述を盛り込むことができた。

○共同研究者(所属・役職・研究分担事項)

◎ 白岩 孝行 (総合地球環境学研究所・准教授・総括・陸面地理情報・氷コア解析)

グループ1:オホーツク海・北太平洋の海洋物理学

- 大島慶一郎 (北海道大学低温科学研究所・教授・海洋の物理構造解析)
- 若土 正暁 (北海道大学低温科学研究所・名誉教授・海洋の物理構造解析)
- 深町 康 (北海道大学低温科学研究所・助手・海洋の物理構造解析)
- 安田 一郎 (東京大学海洋研究所・教授・海洋の物理構造解析)

グループ2:オホーツク海と北部北太平洋における地球化学及び生物学

- 中塚 武 (名古屋大学大学院環境学研究科・教授・海洋の地球化学)
- 久万 健志 (北海道大学大学院水産科学研究院・教授・オホーツク海の鉄分析)
- 杉江 恒二 (北海道大学大学院地球環境科学院・大学院生・海洋生物地球化学)
- 鈴木 光次 (北海道大学大学院地球環境科学研究院・准教授・海洋生物地球化学)
- 関 宰 (北海道大学大学院地球環境科学研究院・学術振興会特別研究員(PD)・海底堆積物分析)
- 宗林 留美 (静岡大学理学部・助教・動物プランクトン)
- 津田 敦 (東京大学海洋研究所・准教授・北部北太平洋のプランクトン分析)
- 中村 洋平 (北海道大学大学院環境科学院・大学院生・生物地球化学)
- 西岡 純 (北海道大学低温科学研究所・准教授・海洋の微量金属分析)
- 松永 勝彦 (四日市大学環境情報学部・教授・海の鉄分析)
- 芳村 毅 (財団法人電力中央研究所環境科学研究所・主任研究員・生物地球化学)

グループ3:アムール川からオホーツク海への生物地球化学的な物質の輸送

- 長尾 誠也 (北海道大学大学院地球環境科学研究院・准教授・腐植物質分析)
- 川東 正幸 (日本大学生物資源科学部・講師・土壌科学、土壌生態学)
- 兒玉 宏樹 (佐賀大学総合分析実験センター・准教授・土壌の生物地球化学)
- 寺島 元基 (独立行政法人日本原子力研究開発機構・特定課題推進員・腐植物質分析)

グループ4:アムール川流域からアムール川への生物地球化学的輸送メカニズム

- 柴田 英昭 (北海道大学北方生物圏フィールド科学センター・准教授・陸面生物地球化学過程)
- 楊 宗興 (東京農工大学農学部・准教授・土壌の生物地球化学)

グループ5:アムール川流域における人為的影響の背景

- 柿澤 宏昭 (北海道大学大学院農学研究院・教授・森林管理政策)
- 岩下 明裕 (北海道大学スラブ研究センター・教授・中国、ロシアの政治背景)

- 坂下 明彦 (北海道大学大学院農学研究院・教授・農業経済学と土地利用の歴史)
 朴 紅 (北海道大学大学院農学研究院・准教授・三江平原の農業経済)
 山根 正伸 (神奈川県自然環境保全センター研究部・専門研究員・森林変化背景解析)

グループ6:アムール川流域における土地利用変化の空間的・歴史の変遷の把握

- 春山 成子 (三重大学大学院生物資源学研究所・准教授・土地利用変化の空間分布解析)
 ○ 近藤 昭彦 (千葉大学環境リモートセンシング研究センター・教授・陸面変化解析)
 氷見山幸夫 (北海道教育大学教育学部旭川校・教授・土地利用変化とその背景解析)
 室岡 瑞恵 (北海道立網走水産試験場・研究職員・衛星による陸面改変解析)
 山縣耕太郎 (上越教育大学学校教育学部・准教授・陸面の時間変化復元)

グループ7:大気を通じた陸起源物質の輸送過程

- 的場 澄人 (北海道大学低温科学研究所・助手・氷コア中の微量元素分析)
 ○ 植松 光夫 (東京大学海洋研究所・教授・エアロゾル解析)
 □ 中尾 正義 (大学共同利用機関法人人間文化研究機構・理事・ダスト変動解析)
 □ 成田 英器 (北海道大学低温科学研究所・研究補佐員・雪氷物理学)
 南 秀樹 (東海大学生物理工学部・准教授・エアロゾル分析)
 安成 哲平 (総合地球環境学研究所・研究員・気象学、雪氷学、気候学)
 佐々木央岳 (北海道大学大学院環境科学院・大学院生・アイスコアを用いた古環境復元)

グループ8:アムール川流域における水文気象学的、及び水文化学的状態の自然変動

- 大西 健夫 (総合地球環境学研究所・プロジェクト上級研究員・水文化学モデリング)
 立花 義裕 (三重大学大学院生物資源学研究所・教授・アムール川の流量解析)
 窪田 順平 (総合地球環境学研究所・准教授・河川水文のモデリング)
 高原 光 (京都府立大学大学院生命環境科学学研究所・教授・花粉分析によるアムール川流域の植生変動解析)

グループ9:オホーツク海、及び、北部北太平洋における生物生産のモデリング

- 三寺 史夫 (北海道大学大学低温科学研究所・教授・海洋循環モデリング)
 ○ 岸 道郎 (北海道大学大学院水産科学研究所・教授・海洋生態系モデリング)
 ○ 松田 裕之 (横浜国立大学大学院環境情報研究院・教授・海洋の水産資源変動理論)
 荒井 信雄 (北海道大学スラブ研究センター・教授・極東の水産経済分析)
 齊藤 誠一 (北海道大学大学院水産科学研究所・教授・衛星による一次生産評価)
 杉本隆成 (東海大学海洋学部清水校舎・教授・沿岸海洋物理学)

グループ 10 "巨大"魚付林の持続可能な利用の為の制度構築 (仮称)

- 花松 泰倫 (総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員・国際法)
 堀口 健夫 (北海道大学大学院公共政策学連携研究部・准教授・国際法)
 遠藤 崇浩 (総合地球環境学研究所・助教・流域管理政策)

海外研究者

- BAKLANOV, Peter Ya. (ロシア科学アカデミー極東支部太平洋地理学研究所・所長・経済地理学)
 陳 欣 Chen Xin (中国科学院応用生態研究所・副所長・土壌地球化学)
 陈利军 CHEN, Lijun (中国科学院応用生態研究所・教授・土壌地球化学)
 迟光宇 GUANGYU, Chi (中国科学院応用生態研究所・助手・土壌地球化学)
 蔡 体久 CAI Tijiu (東北林業大学林学院(中国)・教授・森林水文学)
 GANZEI, Sergry S. (ロシア科学アカデミー極東支部太平洋地理学研究所・副所長・アムール川の土地利用変化)
 GAVRILOV, Alexandr V. (極東水文気象局(ロシア)・局長・水文気象データの管理)
 谷 金鋒 GU Jinfeng (東北林業大学林学院(中国)・研究員・森林学)
 国 喜 GUO qingxi (東北林業大学林学院(中国)・教授・森林水文学とGISモデリング)
 胡 海清 HU Haiqing (東北林業大学林学院(中国)・教授・アムール川の森林火災)
 KIM, Vladimir (ロシア科学アカデミー極東支部水・生態学研究所・研究員・生物地球化学)
 KONDRATJEVA, Lyubov (ロシア科学アカデミー極東支部水・生態学研究所・教授・アムール川の汚染)
 MAKHINOV, Alexey N. (ロシア科学アカデミー極東支部水・生態学研究所・副所長・アムール川水文学)
 SERGIRNKO, Valentine (ロシア科学アカデミー極東支部・議長・大気化学)
 SHAMOV, Vladimir V. (ロシア科学アカデミー極東支部水・生態学研究所・主任研究員・森林水文学)
 SHCHEKA, Oleg (ロシア沿海州国際協力観光局・局長・微量元素)
 Shesterkin. Vladimir P. (ロシア科学アカデミー極東支部水・生態学研究所・主任研究員・生物地球化学)

- 石 福臣 SHI Fuchen(南開大学生命科学学院 (中国) ・教授・森林生態学)
 VOLKOV, Yuri N. (ロシア極東水文気象研究所・所長・海洋物理学)
 VORONOV, Boris A. (ロシア科学アカデミー極東支部水・生態学研究所・所長・アムール川流域保全)
 MISHINA, Natalya (ロシア科学アカデミー太平洋地理研究所・研究員・地理学)
 Ishonin, Mikhail (極東水文気象局 (ロシア) ・所長・水文気象データの管理)
 張 柏 (中国科学院東北地理・農業生態研究所・副所長 (教授) ・森林生態学)
 王 宗明 (中国科学院東北地理・農業生態研究所・助教授・地理学)
 Yaroslav D. Muravyev(ロシア科学アカデミー極東支部火山地震学研究所・副所長・火山地震学)
 閻 百興 Zhang Bai (中国科学院東北地理農業生態研究所・教授・土壌地球化学)
 徐 小牛 Xu Xiaoniu(安徽農業大学林学・造園学園 (中国) ・教授・森林生態学・造林学)

○当初の計画

本プロジェクトの最終年である2009年度は、以下の4点の課題に全力挙げて取り組む。

1) GFBFシステムの自然科学的機構の完全なる理解

- a) アムール川の鉄フラックスと太平洋親潮域の一次生産との間にある直接・間接的なつながりを、親潮域において計測されている栄養塩の時系列データと衛星による空間情報の二つから解明する。
- b) オホーツク海と親潮の一次生産に対する河川起源と大気起源の鉄の貢献度を、海洋中の種々の鉄の同位体比測定から解明する。
- c) アムール川の溶存鉄の季節・年変動を、河川水位、溶存有機物、溶存鉄の三者の関係から説明する。
- d) 土地利用変化が溶存鉄生成・流出に与える影響を異なる土地利用シナリオに基づいて数値モデルによって評価する。
- e) 三江平原において活発化する農業活動の影響が、長期的に溶存鉄の動態にどのような影響を与えるか解明する。
- f) 土地被覆の保全が溶存鉄の生成に与える影響を数値モデルによって評価する。
- g) 鉄循環を取り入れた海洋モデルを構築し、鉄が一次生産に与える影響を計算する。

2) GFBFシステムの社会・経済的側面の定性的理解

- a) 森林政策改革の実現とそれが森林管理（森林火災を含む）に与える影響の評価
- b) ロシア極東における木材貿易構造の変化とそれが森林管理と森林産業に与える影響の評価
- c) 三江平原における灌漑システムと地下水揚水量との間にある関係の解明

3) GFBF保全のためのアジェンダ策定

- a) 「北東アジア巨大魚附林パートナーシップ」を構築し、利害享受者がGFBFの保全を進めるための動機付けを行う。
- b) GFBF保全のためのアジェンダを一括して提示する。

4) 2009年10月に京都において国際シンポジウム“Dilemma of Boundaries”を主催し、GFBFの視点にたつて、陸水と海水の共同管理の有効性を学術的な視点から検討する。

5) 2009年11月に札幌において国際シンポジウムを開催し、日中露の研究者を中心としたGFBF保全の議論を行うネットワークとして、「アムール・オホーツクコンソーシアム」を立ち上げる。

6) 2010年1月に京都においてプロジェクトの最終的なとりまとめを行うための国際シンポジウムを開催し、GFBF保全のためのアジェンダを関係者で採択する。

プロジェクトの成果は、書籍、プロジェクトレポート、学術論文、そして口頭・ポスター発表などを通じて学会および公共の場で公表する。

○これまでの研究成果と今後の課題

これまでの研究成果については、進捗状況（2008年4月～2009年3月）において詳述したので、以下、現在直面している課題を2点挙げる。

1. ロシアからのサンプル輸出の制限

2007年まではアムール川流域において採取した種々のサンプルを国外に持ち出すことは基本的に不可能であった。このため、我々はロシア科学アカデミー極東支部の協力により、2008年以降はウラジオストックからサンプルの一部を日本に持ち帰った。一方、日本からロシアへ分析機器（全炭素分析計）を輸出し、ロシアでサンプルの分析を開始した。また、新たに必要な分析を進めるため、ロシア科学アカデミーシベリア支部のV.N. シュカチェフ森林研究所との共同研究を開始した。これにより、有機物の蛍光スペクトル分析と原子吸光分析が可能となった。

2. ロシアと中国における野外調査の困難について

両国において日本人が野外調査を行うことは年々困難になりつつある。中国は、2007年5月1日に水文条例を制定し、国务院の許可無く外国人が中国国内において水文研究に従事することを原則禁止とした。ロシアにおいては、最近、オホーツク海の海洋物理観測に必須の係留計の設置が許可されない。これらの問題は政治上の問題であり、研究者が独自に解決することは難しい。それゆえ、越境する環境問題の解決を目指し、日中露の各国がより緊密な連携をとれるような国と国との連携が進むことを期待している。

著書（執筆等）

【分担執筆】

- ・山根正伸 2008年07月 ロシア材輸入国の動向、中国。国際環境NGOFoE Japan、地球・人間環境フォーラム編著編フェアウッド、森林を破壊しない木材調達。日本林業調査会，pp.164-171.

論文

【原著】

- ・Ooki, A., J. Nishioka, T. Ono, and S. Noriki Feb, 2009 Size dependence of iron solubility of Asian mineral dust particles. *J. Geophys. Res.* 114(D03202). DOI:10.1029/2008JD010804.
- ・Saitoh, Y., K. Kuma, Y. Isoda, H. Kuroda, H. Matsuura, T. Wagawa, H. Takata, N. Kobayashi, S. Nagao and T. Nakatsuka Dec, 2008 Processes influencing iron distributions in the coastal waters of the Tsugaru Strait, Japan.. *J. Oceanogr.* 64 :815-830. DOI:10.1007/s10872-008-0068-3. (査読付) .
- ・久万健志、松村由起子、千木良充、齋藤誠一 2008年11月 南東部ベアリング海陸棚斜面域における夏期植物プランクトンブルームを支える鉄と栄養塩. 月刊海洋 号外50 :138-143. (査読付) .
- ・大島慶一郎・小野純・小野数也・勝又勝郎 2008年11月 オホーツク海の潮流の観測. 月刊海洋 号外50 :28-33. (査読付) .
- ・鈴木光次・伊佐田智規・Hongbin Liu・飯田高大 2008年11月 夏季のオホーツク海および千島列島海域における基礎生産過程の特徴. 月刊海洋 号外50 :99-106. (査読付) .
- ・西岡純・中塚武・小野数也 2008年11月 千島海峡の混合過程の生物地球化学的重要性 -西部北太平洋阿寒帯域の鉄：栄養塩比に与える影響. 月刊海洋 :107-114. (査読付) .
- ・中塚 武・西岡 純・白岩孝行 2008年11月 内陸と外洋の生態系の河川・陸棚・中層を介した物質輸送による結びつき. 月刊海洋 号外50 :68-76. (査読付) .
- ・Tachibana, Y., K. Oshima, and M. Ogi Aug, 2008 Seasonal and interannual variations of Amur River discharge and their relationships to large-scale atmospheric patterns and moisture fluxes. *J. Geophys. Res.* 113(D16102). DOI:10.1029/2007JD009555. (査読付) .
- ・Sugie, K. and K. Kuma Jul, 2008 Resting spore formation in the marine diatom *Thalassiosira nordenskiöldii* under iron- and nitrogen-limited conditions.. *J. Plankton Res.* 30 :1245-1255. DOI:10.1093/plankt/fbn080. (査読付) .
- ・Hayakawa, M., Suzuki, K., Saito, H., Takahashi, K., and Ito, S. May, 2008 Differences in cell viabilities of phytoplankton between spring and late summer in the northwest Pacific Ocean. *J. Exp. Mar. Biol. Ecol.* 360 :63-70. DOI:10.1016/j.jembe.2008.03.008. (査読付) .
- ・大島慶一郎・小野純・清水大輔 2008年 オホーツク海における漂流物の粒子追跡モデル実験. 沿岸海洋研究 45 :115-124. (査読付) .

- Kanamori, S., C. S. Benson, M. Truffer, S. Matoba, D. J. Solie, T. Shiraiwa 2008 Seasonality of snow accumulation at Mount Wrangell, Alaska, USA. *J. Glaciology* 54(185) :273-278. DOI:10.3189/002214308784886081. (査読付) .
- Mizue Murooka, Shigeko Haruyama and Yoshitaka Masuda 2008 Land Cover Detected by Satellite Data in the Agricultural Development Area of the Sanjiang Plain, China. *Journal of Rural Planning* 26 :197-202.
- 室岡瑞恵. 春山成子 2008年 三江平原における耕地開発に伴う緑地変化. 農村計画学会春期学術研究発表会要旨集. :49-50.
- Minami H., T Okazaki, Y.Konishi, J. Nishioka, T. Nakatsuka, S. Nagao and Y. Kato 2008 Accumulation processes of metals in the Sea of Okhotsk. The 7th marine environment and coastal environment repair technique symposium proceedings 7 :1-4.
- Uchimoto, K., T. Nakamura, J. Nishioka and H. MITSUDERA 2008 Modeling the circulation of the intermediate layer in the Sea of Okhotsk. *Proceedings of the 4th PICES workshop 2008* .
- Mitsudera, H 2008 Environmental problems in the Pan Pkhotsk Region. *Slavic Eurasian Studies* 19 :137-166.
- Onishi, T., Shibata, H., Yoh, M. And Nagao, S. 2008 Mechanism for the production of dissolved iron in the Amur River basin - a modeling study of the Naoli River of the Sanjiang Plain.. M. Taniguchi, Y. Fukushima, W.C. Burnett, M. Haigh & Y. Umezawa (ed.) *From Headwaters to the Ocean: Hydrological Change and Watershed Management.*. Taylor & Francis, pp.355-360. (査読付) .
- 大島 慶一郎・中野渡 拓也・若土 正暁 2008年 温暖化によるオホーツク海及び北太平洋のオーバーターン弱化. *月刊地球* 30(3) :127-133.

その他の出版物

【報告書】

- Ohshima, K. I., T. Nakanowatari, T. Nakatsuka, J. Nishioka, and M. Wakatsuchi 2008 Changes in the Sea of Okhotsk due to global warming ? -Weakening pump function to the North Pacific-. 4th PICES Workshop on "The Okhotsk Sea and adjacent areas". , pp.34-35. August 27-29, 2008, Tokyo University of Agriculture, Abashiri, Japan.
- Nakanowatari, T., H. Mitsudera, T. Motoi, K. I. Ohshima, and I. Ishikawa 2008 50-yr scale change in the intermediate water temperature in the western North Pacific simulated by an eddy resolving sea-ice coupled OGCM. 4th PICES Workshop on "The Okhotsk Sea and adjacent areas" . , .August 27-29, 2008, Tokyo University of Agriculture, Abashiri, Japan .
- Hiroaki Kakizawa 2008 Russia. Effective timber production, distribution and processing system and related policy in foreign countries. , .Fujitsu Research Institute.
- Hiroaki Kakizawa 2008 Forest resource data system in Russia. Econometric assess illegal logging . , .Forest and Forest Products Research Institute.

本研究**プロジェクト番号: C-05****プロジェクト名: 都市の地下環境に残る人間活動の影響****プロジェクト名(略称): 地下環境プロジェクト****プロジェクトリーダー: 谷口真人****プログラム/研究軸: 循環領域プログラム****ホームページ: <http://www.chikyu.ac.jp/USE/>****キーワード: 地下環境、都市、地下水、地下熱、地下水汚染、地盤沈下、循環、ヒートアイランド、GRACE、アジア、東京、大阪、バンコク、ジャカルタ、マニラ、ソウル、台北****○研究目的と内容(2008年4月～2009年3月)****1. 研究の目的**

- 1) 現在及び将来の人間社会にとって重要であるがまだ評価されていない「地下環境」に与える人間活動の影響を、特に人口増加と集中および地下利用の増大が激しいアジア沿岸都市において評価する。
- 2) 様々な地下の環境問題は、都市の発達の程度に応じて、アジアの各都市で時間遅れを伴って次々と発生していることから、都市の発達段階と地盤沈下・地下水汚染・地下熱汚染など様々な地下環境問題との関係を明らかにする。
- 3) 将来の発展と人間の幸せのために、地下水と地下環境の持続可能な利用について提言する。

2. 研究の内容

- 1) 都市の発達段階と様々な地下環境問題との関係について、社会経済学的指標による解析と、歴史資料を用いた都市と水環境の復原により明らかにする。
- 2) 水文地球化学データと現地及び衛星GRACEを用いた重力観測によって、地下水流動系と地下水貯留量の変動を明らかにし、可能地下水涵養量を評価することによって持続可能地下水利用量を評価する。また地下環境災害と水資源転換との関係について評価する。
- 3) 地中水と堆積物中の水文化学・同位体分析とトレーサビリティによって、地下環境の蓄積汚染量の評価と、地下水流動による物質輸送を含めた沿岸域への汚染物質負荷の評価を行う。
- 4) 孔内地下水温度の逆解析を用いた地表面温度履歴の復元と気象データを用いて、都市化に伴うヒートアイランド現象による地下熱汚染について評価する。
- 5) 人間活動の影響が残りやすい地下環境指標を用いて、「気候変動影響」・「人間活動影響」・「都市基盤と社会政策」の評価の観点から、過去の自然と都市の復原（現在から過去）を行うとともに、自然－社会統合概念（過去から現在・未来）をとおして、将来の都市と地下環境のあり方の提言を行う。
- 6) 衛星を用いた地下水環境変化の推定や、現在の地下熱環境情報を用いた気候変動復原・都市化の影響評価、地下物質環境変化指標による汚染環境の拡大推定など、各種の地下環境情報を用いて都市と水・熱・物質環境との関係を明らかにする。
- 7) 東京・大阪・バンコク・ソウル・台北・マニラ・ジャカルタの都市域地下環境を研究対象の中心とするが、地下水・熱・物質は流動系を通して連続しており、上流・下流を含めた流域レベルを対象範囲とする。なお地下環境変動と人間活動の関係を明らかにする研究対象時間は過去100年をめぐとする。

○進捗状況(2008年4月～2009年3月)

- (1) 野外共同観測と現地データ収集調査を行い、都市の発達段階に応じた地下環境モニタリングを7都市（バンコ

ク・ジャ カルタ・マニラ・ソウル・タイペイ・東京・大阪) で継続した。

(2) 地下環境に関する自然・社会環境データのアセスメントと、GISを基にしたデータベースの構築を継続し、アジア7都市の3時代区分(1930年, 1970年, 2000年)の土地利用図を0.5kmメッシュで完成させた。

(3) GRAPHICやGWS P, IAHSなどの国際機関と連携し、気候変動・人間活動の地下水資源への影響評価成果を行った。

また、国際シンポジウムHydrChnage2008を開催し、源流域から海までの統合水管理に関する本(論文集)を出版した。

(4) 宗教と地下水に関する調査をバンコクで行い、寺院の存在と地下水流出の関係、標高・土壌と宗教施設との関係を確認した。

(5) 7都市地下環境比較モデルの構築を開始し、各班サブテーマとの統合を継続した。

(6) 国際学術誌STOTEN (Science of the Total Environment, Elsevier)の特集号として、プロジェクト成果の一部を公表(overview paper 1編、original papers 15編)した。

(7) ニュースレターVol.5 (April 2008), Vol.6 (October 2008)を刊行し、研究成果の速報を行った。

○共同研究者(所属・役職・研究分担事項)

- ◎ 谷口 真人 (総合地球環境学研究所・准教授・プロジェクト総括)
- 小野寺真一 (広島大学大学院総合科学研究科・准教授・物質輸送解析)
- 金子 慎治 (広島大学大学院国際協力研究科・准教授・社会経済解析)
- 嶋田 純 (熊本大学理学部・教授・地下水解析)
- 福田 洋一 (京都大学大学院理学研究科・教授・重力衛星解析)
- 山野 誠 (東京大学地震研究所・准教授・地下熱測定・解析)
- 吉越 昭久 (立命館大学文学部・教授・都市の復原・都市地理解析)
- 安達 一 (国際協力機構総務部・参事役・アジア都市の社会・水環境解析)
- 江原 幸雄 (九州大学大学院工学研究院・教授・地下熱解析)
- 井川 怜欧 (独立行政法人産業技術総合研究所・研究院・同位体分析)
- 一ノ瀬俊明 (独立行政法人国立環境研究所・主任研究員・都市熱解析)
- 今井 剛 (山口大学工学部・教授・都市環境解析)
- 梅澤 有 (長崎大学水産学部・助教・物質輸送解析)
- 香川 雄一 (滋賀県立大学環境科学部・講師・都市社会地理解析)
- 片岡 久美 (独立行政法人国立環境研究所・NIESアシスタントフェロー・都市熱解析)
- 加藤 政洋 (立命館大学文学部・准教授・文化地理学・都市研究)
- 河本 和明 (長崎大学環境学部・准教授・気候水循環解析)
- 玄地 裕 (産業技術総合研究所ライフサイクルアセスメント研究センター・主任研究員・都市熱解析・都市LCA解析)
- 後藤 秀作 (産業技術総合研究所地圏資源環境研究部門・研究員・地下熱測定・解析)
- 佐倉 保夫 (千葉大学理学部・教授・地下熱解析)
- ZHANG Junyi (広島大学大学院国際協力研究科・准教授・都市計画解析)
- 白木 洋平 (総合地球環境学研究所・研究員)
- 鈴木 和哉 (国際協力機構タイ事務所・所員・地下水解析)
- 竹田 一彦 (広島大学大学院生物圏科学研究科・准教授・微量金属分析)
- 田中 勝也 (広島大学大学院国際協力研究科・助教・社会経済解析)
- 谷川 寛樹 (和歌山大学システム工学部・准教授・マテリアルストック解析)
- 谷口 智雅 (立正大学地球環境科学部・非常勤講師・都市の復原・都市地理解析)
- 辻村 真貴 (筑波大学大学院生命環境科学研究科・准教授・同位体分析)
- 徳永 朋祥 (東京大学大学院新領域創成科学研究科・准教授・地下水解析)
- 仲江川敏之 (気象研究所気候研究部・主任研究員・衛星気象解析)
- 中野 孝教 (総合地球環境学研究所・教授・堆積環境解析)
- 西島 潤 (九州大学大学院工学研究院・助教・重力測定による地下水調査)
- 白 迎玖 (東北公益文科大学公益学部・准教授・都市気候分析)
- JAGO-ON Karen Ann (広島大学大学院国際協力研究科・研究員・環境システム解析)
- 林 美鶴 (神戸大学内海城環境教育研究センター・准教授・堆積環境解析)
- 林 武司 (東京大学大学院新領域創成科学研究科・助手・地下水解析・地下水解析)
- 藤井 智康 (奈良教育大学教育学部・准教授・沿岸海洋環境解析)

藤倉 良	(法政大学人間環境学部・教授・環境政策解析)
藤原 章正	(広島大学大学院国際協力研究科・教授・環境政策解析)
細野 高啓	(秋田大学工学資源学部・助教・堆積環境解析)
松本 亨	(北九州市立大学国際環境工学部・准教授・都市LCA・環境システム解析)
宮越 昭暢	(産業技術総合研究所地圏資源環境研究部門・研究員・水文解析)
馬原 保典	(京都大学原子炉実験所・教授・同位体分析)
百島 則幸	(九州大学アイソトープ総合センター・教授・同位体分析)
安元 純	(総合地球環境学研究所・研究員)
山下亜紀郎	(酪農学園大学環境システム学部・講師・GIS解析)
山中 勤	(筑波大学陸域環境研究センター・准教授・地下水解析)
山本 圭香	(総合地球環境学研究所・研究員)
清水 裕太	(広島大学大学院総合科学研究科・大学院生)
利部 慎	(熊本大学大学院自然科学研究科・大学院生)
愛知 正温	(東京大学大学院工学系研究科・大学院生)
長谷川 崇	(京都大学大学院理学研究科・大学院生)
WANG Chun-Ho	(台湾・台湾中央研究院地球科学研究所・グループ長・地下水調査・解析)
SIRINGAN Fernando	(フィリピン・フィリピン大学・教授・水文地質調査・解析)
WATTAYAKORN Gullaya	(タイ・チュラロンコン大学・准教授・地球化学調査・解析)
LORPHENSRI Oranuj	(タイ・タイ王国天然資源・環境省地下水資源局・研究員・水資源解析)
LEE Backjin	(韓国・韓国国土研究院・研究員・都市計画解析)
LEE Kang-Kun	(韓国・ソウル国立大学・教授・地下環境調査・解析)
NESS Gayl D.	(アメリカ・ミシガン大学・教授・都市計画解析)
DELINOM Robert	(インドネシア・インドネシア科学研究所・グループ長・地下環境調査・解析)
HUANG Shaopeng	(アメリカ・ミシガン大学・研究員・地下熱解析)
BUAPENG Somkid	(タイ・タイ王国天然資源・環境省地下水資源局・グループ長・水資源解析)
PIROMLERT Sopot	(タイ・タイ王国天然資源・環境省地下水資源局・主任研究員・地下水解析)
BURNETT William C.	(アメリカ・フロリダ州立大学海洋学部・教授・沿岸海洋解析)

○当初の計画

当初の研究計画からの変更点

6 サブグループ（社会経済・都市地理・地下水・重力・物質環境・地下熱）とモデルワーキンググループ・GIS/データベースワーキンググループに加え、法制度・宗教のワーキンググループを立ち上げ、各サブグループ間の有機的連携を強める体制を強化した。

○これまでの研究成果と今後の課題

1. 成果の概要

7 都市における地下環境調査とモニタリングおよびデータ収集により、都市の発達段階と地下環境の関係が明らかになってきた。都市化によるヒートアイランドが地下の熱環境に与える影響評価では、都市化の大きさと開始時期が地下の温度分布に保存されていることが明らかになった。各種同位体を用いた地下環境調査・解析では、地下水の起源と汚染の種類およびその程度が明らかになった。衛星GRACEの解析と現場重力測定により、流域レベルで地下環境の変化がモニターできる可能性があることが明らかになった。また土地利用解析により、地下水涵養量・地下熱貯留量の変動要因などが明らかになった。

2. 今後の課題

- (1) サブテーマ間のクロスカッティングとして、法・制度と地表水(公水)・地下水(私水)問題をテーマに調査を行い、ドキュメント年表と実測データの統合を行う。
- (2) 統合モデルによるクロスカッティングを継続し、地下水貯留変動を決める要因を明らかにするとともに、社会経済・水資源・環境負荷・対策/政策に関する地下環境統合指標の確立を行う。
- (3) 地下環境変化を決定する要因としての土地利用・被覆の3時代7都市GISデータを用いて、地下水涵養量・地下熱貯留量・地下汚染要因としての物質負荷量の変動解析を行う。

論文

【原著】

- Fukuda, Y., K. Yamamoto, T. Hasegawa, T. Nakaegawa, J. Nishijima and M. Taniguchi 2008 Monitoring groundwater variation by satellite and implications for in-situ gravity measurements. *Science of The Total Environment* . DOI:10.1016/j.scitotenv.2008.05.018. (査読付) .
- 吉越 昭久 2008年 都市域の水文環境研究の視点. *日本水文科学会誌* 38(2) :99-104. (査読付) .
- Nakaegawa, T. 2008 Reproducibility of the seasonal cycles of hydrological variables in Japanese 25-year Re-Analysis. *Hydrological Research Letters* 2 :18-21. (査読付) .
- T. Endo 2008 A Comparative Policy Analysis for Headwater Management. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M. Haigh, Y. Umezawa (ed.) *From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management* . Taylor & Francis Group, pp.131-136. (査読付) .
- Akihisa Yoshikoshi, Itsu Adachi, Tomomasa Taniguchi, Yuichi Kagawa, Masahiro Kato, Akio Yamashita, Taiko Todokoro, Makoto Taniguchi 2008 Hydro-environmental changes and their influence on the subsurface environment in the context of urban development. *Science Of The Total Environment* 407(5) :3105-3111. (査読付) .
- T. Hosono, Y. Umezawa, S. Onodera, C-H. Wang, F. Siringan, S. Buapeng, R. Delinom, T. Nakano, M. Taniguchi 2008 Comparative study on water quality among Asian megacities based on major ion concentrations. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M. Haigh, Y. Umezawa (ed.) *From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management*. Taylor & Francis Group, pp.295-300. (査読付) .
- K. Yamamoto, T. Hasegawa, Y. Fukuda, T. Nakaegawa, M. Taniguchi 2008 Improvement of JLG terrestrial water storage model using GRACE satellite gravity data. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M. Haigh, Y. Umezawa (ed.) *From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management*. Taylor & Francis Group, pp.369-374. (査読付) .
- H. Hamamoto, M. Yamano, S. Kamioka , J. Nishijima, V. Monyrath, S. Goto, M. Taniguchi 2008 Estimation of the past ground surface temperature change from borehole temperature data in the Bangkok area. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M. Haigh, Y. Umezawa (ed.) *From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management*. Taylor & Francis Group, pp.535-539. (査読付) .
- R. F. Lubis, A. Miyakoshi, M. Yamano, M. Taniguchi, Y. Sakura, R. Delinom 2008 Reconstructions of climate change and surface warming at Jakarta using borehole temperature data. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M. Haigh, Y. Umezawa (ed.) *From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management* . Taylor & Francis Group, pp.541-545. (査読付) .
- M. Taniguchi, J. Shimada, Y. Fukuda, S. Onodera, M. Yamano, A. Yoshikoshi, S. Kaneko, Y. Umezawa, T. Ishitobi, K. Jago-on 2008 Degradation of subsurface environment in Asian coastal cities. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M. Haigh, Y. Umezawa (ed.) *From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management* . Taylor & Francis Group, pp.605-610. (査読付) .
- M. Taniguchi, T. Ishitobi, W. C. Burnett 2008 Global assessment of submarine groundwater discharge. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M. Haigh, Y. Umezawa (ed.) *From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management*. Taylor & Francis Group, pp.613-617. (査読付) .
- M. Saito, S. Onodera, K. Okada, M. Sawano, K. Miyaoka, M. Taniguchi 2008 Evaluation of denitrification potential in coastal groundwater using simple in situ injection experiment. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M. Haigh, Y. Umezawa (ed.) *From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management*. Taylor & Francis Group, pp.653-658. (査読付) .
- N. Peterson, W.C. Burnett, I.R. Santos, M. Taniguchi, T. Ishitobi, J. Chen 2008 Bohai Sea coastal transport rates and their influence on coastline nutrient inputs. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M. Haigh, Y. Umezawa (ed.) *From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management*. Taylor & Francis Group, (査読付) .
- T. Endo 2008 A Comparative Policy Analysis for Headwater Management. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y.

- Fukushima, M. Haigh, Y. Umezawa (ed.) From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management. Taylor & Francis Group, pp.131-135. (査読付) .
- Karen Ann B. JAGO-ON, S. Kaneko 2008 Long-term urban growth and water demand in Asia. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M. Haigh, Y. Umezawa (ed.) From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management. Taylor & Francis Group, pp.483-489. (査読付) .
 - Yonghai Xue, T. Matsumoto 2008 Impact of Municipal Waste and Waste Water Management Change on Nutrients Flow to Surface Water and Ground Water in Asian Mega-cities. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M. Haigh, Y. Umezawa (ed.) From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management. Taylor & Francis Group, pp.491-496. (査読付) .
 - F. P. Lansigan 2008 Frequency analysis of extreme hydrologic events and assessment of water stress in a changing climate in the Philippines.. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M. Haigh, Y. Umezawa (ed.) From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management . Taylor & Francis Group, pp.497-501. (査読付) .
 - M. Yamano, H. Hamamoto, S. Goto, A. Miyakoshi 2008 Long-term temperature monitoring in boreholes for studies of the ground surface thermal environment and groundwater flow. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M. Haigh, Y. Umezawa (ed.) . Taylor & Francis Group, pp.523-527. (査読付) .
 - A. Miyakoshi, T. Hayashi, V. Monyrath, R. F. Lubis, Y. Sakura (2008 Subsurface thermal environment change due to artificial effects in the Tokyo metropolitan area, Japan. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M. Haigh, Y. Umezawa (ed.) From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management . Taylor & Francis Group, pp.547-552. (査読付) .
 - T. Hayashi, A. Miyakoshi 2008 Land expansion with reclamation and groundwater exploitation in a coastal urban area: A case study from the Tokyo Lowland, Japan. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M. Haigh, Y. Umezawa (ed.) From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management. Taylor & Francis Group, pp.553-558. (査読付) .
 - T. Taniguchi 2008 The restoration of Historical Hydro-environment from Historical Materials and Topographical Maps in Tokyo, Japan. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M. Haigh, Y. Umezawa (ed.) From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management. Taylor & Francis Group, pp.565-569. (査読付) .
 - A. Yamashita 2008 Urbanization and the change of water use in Osaka City - Spatio-temporal analysis with data maps. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M. Haigh, Y. Umezawa (ed.) . Taylor & Francis Group, pp.571-575. (査読付) .
 - Y. Kagawa 2008 Urbanization in Asian Metropolis and the Changes of hydrological environment in and around Bangkok. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M. Haigh, Y. Umezawa (ed.) From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management. Taylor & Francis Group, pp.571-575. (査読付) .
 - T. Imai, C. Vitoonpanyakij, S. Kessomboon, P. Banjongproo, S. Kaneko, R. Fujikura, T. Matsumoto 2008 A comparative study on history of sewage works construction between Bangkok and Tokyo.. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M. Haigh, Y. Umezawa (ed.) From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management. Taylor & Francis Group, pp.583-589. (査読付) .
 - H. Tanikawa, R. Inadu, S. Hashimoto, S. Kaneko 2008 Estimation of historical / spatial changes in subsurface Material Stock related to the construction sector of urban areas in Japan. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M. Haigh, Y. Umezawa (ed.) From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management. Taylor & Francis Group, pp.591-597. (査読付) .
 - Saito, M., Onodera, S., Sawano, M 2008 Effect of surface and groundwater interaction on nitrate reduction process in a small alluvial fan catchment, western Japan. IAHS Publ 321 :76-82. (査読付) .
 - M Taniguchi, J Shimada, Y Fukuda, M Yamano, S Onodera, S Kaneko, A Yoshikoshi 2008 Anthropogenic effects on the subsurface thermal and groundwater environments in Osaka, Japan and Bangkok, Thailand. Science of The Total Environment 404(Issues 2-3, 15) :1-12.

- Hayashi, T., Tokunaga, T., Aichi, M., Shimada, J., and Taniguchi, M. 2008 Effects of human activities and urbanization on groundwater environments: As example from the aquifer system of Tokyo and the surrounding area. *Science of the Total Environment* . (査読付) .
- Shin-ichi Onodera, Mitsuyo Saito, Misa Sawano, Takahiro Hosono, Makoto Taniguchi, Jun Shimada, Yu Umezawa, Rachmat Fajar Lubis, Somkid Buapeng and Robert Delinom 2008 Effects of intensive urbanization on the intrusion of shallow groundwater into deep groundwater: Examples from Bangkok and Jakarta. *Science of The Total Environment* 404 :401-410.
- Yu Umezawa, Takahiro Hosono, Shin-ichi Onodera, Fernando Siringan, Somkid Buapeng, Robert Delinom, Chikage Yoshimizu, Ichiro Tayasu, Toshi Nagata and Makoto Taniguchi 2008 Sources of nitrate and ammonium contamination in groundwater under developing Asian megacities. *Science of The Total Environment* 404 :361-376.
- Takahiro Hosono, Reo Ikawa, Jun Shimada, Takanori Nakano, Mitsuyo Saito, Shin-ichi Onodera, Kang-Kun Lee and Makoto Taniguchi 2008 Human impacts on groundwater flow and contamination deduced by multiple isotopes in Seoul City, South Korea. *Science of The Total Environment* . (査読付) .
- 谷口 智雅 2008年 近代文学で描かれた東京の河川環境. *アジア遊学* 113 :60-67.
- W.C. Burnett, R. Peterson, M. Taniguchi, G. Wattayakorn, S. Chanyotha, F. Siringan 2008 Importance of groundwater discharge in developing urban centers of Southeast Asia. M.Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M.Haigih, Y.Umezawa (ed.) *From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management*. Taylor & Francis, pp.289-294. (査読付) .
- Taniguchi, M., Stieglits, T, and Ishitobi, T 2008 Temporal variability of SGD quality in Ubatuba coastal area. *Coastal and Shelf Science* 76 :484-492. (査読付) .
- Taniguchi, M., W.C. Burnett, H. Dulaiova, F. Siringan, J. Foronda, G. Wattayakorn, S. Rungsupa, E. Kontor, and T. Ishitobi 2008 Groundwater discharge as an important land-sea pathway into Manila bay, Philippines. *J. Coastal Res* 24(1a) :15-24. (査読付) .

その他の出版物

【報告書】

- Yamamoto K, T. Nakaegawa, T. Hasegawa, Y.Fukuda and M. Taniguchi 2008 Validation of JRA-JCDAS LDA and GRiveT Terrestrial Water Storage Model Using GRACE Satellite Gravity Data, Extended Abstracts for Third WCRP International Conference on Reanalysis. *World Climate Reanalysis Programme*. , .
- 吉越昭久・安達一・谷口智雅・香川雄一・加藤政洋・山下亜紀郎・戸所泰子・谷口真人 2008年 都市の発展に伴う水環境の変化と地下に及ぼす影響. *東京大学空間情報科学研究センターDiscussion Paper*. , pp.1-11.

会合等での研究発表

【口頭発表】

- 香川 雄一 川崎臨海部における環境運動のいない手の変遷. 日本地理学会, 2008年10月, 盛岡市.
- 今井 剛 A comparative study on history of sewage works construction between Bangkok and Tokyo. *HydroChange2008*, 2008年10月, 京都市.
- 香川 雄一 Urbanization in Asian Metropolis and the Changes of hydrological environment in and around Bangkok. *HydroChange2008*, 2008年10月, 京都市.
- 山下 亜紀郎 Urbanization and the change of water use in Osaka City - Spatio-temporal analysis with data maps.. *HydroChange2008*, 2008年10月, 京都市.
- 細野 高啓 Comparative study on water quality among Asian megacities based on major ion concentrations. *HydroChange2008*, 2008年10月, 京都市.
- 利部 慎 CFC s を用いた地下水滞留時間の推定と採水後の時間経過に伴うCFC s 分解について. 日本水文科学会, 2008年09月, 千葉市.
- 山本 圭香 Study of terrestrial water storage in Africa using GRACE satellite gravity data and JLG

- terrestrial water storage model. Groundwater & Climate in Africa - an international conference, 2008年06月, カンパラ、ウガンダ.
- ・一ノ瀬 俊明 日本の都市気候・都市熱環境研究のアジア・世界への貢献. 日本気象学会大会, 2008年05月, 横浜市.
 - ・香川 雄一 バンコクにおける都市化と水路網の分布について. 日本地理学会, 2009年03月, 東京.
 - ・谷口 真人 Human Impacts on Subsurface Environment in Asian Mega Cities. IGS-TH2009, 2009年02月, バンコク、タイ.
 - ・濱元 栄起 Estimation of the Past Ground Surface Temperature Change from Borehole Temperature Data in Bangkok. IGS-TH2009, 2009年02月, バンコク、タイ.
 - ・山中 勤 Assessment of Enhanced Recharge of Confined Groundwater in and around the Bangkok Metropolitan Area: Numerical Experiments and Multiple Tracer Studies. IGS-TH2009, 2009年02月, バンコク、タイ.
 - ・Rachmat Fajar LUBIS Assessment of Urban Groundwater Heat Contaminant in Jakarta, Indonesia. IGS-TH2009, 2009年02月, バンコク、タイ.
 - ・Chung-Ho WANG Correlation Between Groundwater Level Variations and Land Subsidence in the Choshuichi Alluvial Fan, Taiwan. IGS-TH2009, 2009年02月, バンコク、タイ.
 - ・今井 剛 Historical Comparisons of Technology Development on Sewage in Asian Megacities: Bangkok and Tokyo. IGS-TH2009, 2009年02月, バンコク、タイ.
 - ・安元 純 鳥海山沿岸域におけるラドンを用いた海底地下水湧出量の推定. 日本地下水学会秋季講演会, 2008年11月, 福岡市.
 - ・白木 洋平 ヒートアイランドが地下温度に与える影響評価. 日本地下水学会秋季講演会, 2008年11月, 福岡市.
 - ・山本 圭香 Recovery of basin-scale landwater variations using GRACE data for the correction of groundwater monitoring with in-situ gravimetry. IAH Congress 2008, 2008年11月, 富山市.
 - ・愛知 正温 Estimation of the spatio-temporal change of the groundwater recharge in the Kanto Plain, Japan, from numerical simulation. IAH2008, 2008年10月, 富山市.
 - ・山下 亜紀郎 アジアのメガシティにおける5万分の1地形図からの土地利用メッシュマップ作成. 地理情報システム学会, 2008年10月, 東京.
 - ・利部 慎 年代トレーサーを用いたJakarta地域における地下水の滞留時間の考察. 日本地下水学会, 2008年10月, 福岡市.
 - ・谷口 真人 Degradation of subsurface environment in Asian coastal cities. HydroChange 2008, 2008年10月, 京都市.
 - ・山本 圭香 Improvement of JLG terrestrial water storage model using GRACE satellite gravity data. HydroChange2008, 2008年10月, 京都市.
 - ・濱元 栄起 Estimation of the past ground surface temperature change from borehole temperature data in the Bangkok area. HydroChange2008, 2008年10月, 京都市.
 - ・R. F. Lubis Reconstructions of climate change and surface warming at Jakarta using borehole temperature data. HydroChange2008, 2008年10月, 京都市.
 - ・遠藤 崇浩: A Comparative Policy Analysis for Headwater Management. HydroChange2008, 2008年10月, 京都市.
 - ・Karen Ann B. JAGO-ON Long-term urban growth and water demand in Asia. HydroChange2008, 2008年10月, 京都市.
 - ・F. P. Lansigan frequency analysis of extreme hydrologic events and assessment of water stress in a changing climate in the Philippines. HydroChange2008, 2008年10月, 京都市.
 - ・山野 誠 Long-term temperature monitoring in boreholes for studies of the ground surface thermal environment and groundwater flow. HydroChange2008, 2008年10月, 京都市.

- ・ 林 武 Land expansion with reclamation and groundwater exploitation in a coastal urban area: A case study from the Tokyo Lowland, Japan. HydroChange2008, 2008年10月, 京都市.
- ・ 谷口 智雅 The restoration of Historical Hydro-environment from Historical Materials and Topographical Maps in Tokyo, Japan. HydroChange2008, 2008年10月, 京都市.
- ・ 谷口 智雅 荒川における河川景観の空間的特徴. 日本陸水学会第73回大会, 2008年10月, 札幌市.
- ・ 福田 洋一 統合測地観測手法によるインドネシア3都市での地盤沈下の研究. 日本測地学会第110回講演会, 2008年10月, 北海道.
- ・ 片岡 久美 アジア諸都市における過去100年の都市温暖化の比較. 環境科学会年会, 2008年09月, 東京.
- ・ 吉越 昭久 水文科学の新しい視点—歴史水文学の可能性—. 日本水文科学会, 2008年09月, 千葉市.
- ・ 山下 亜紀郎 Urban development and its influences for water and thermal environment in Asian mega cities. 31st International Geographical Congress, 2008年08月, チェニス.
- ・ 谷口 智雅 アジアの大都市の水景と水利用. 立正地理学会シンポジウム「海外の景観を地理教材として活かすために」, 2008年07月, 熊谷市.
- ・ 遠藤 崇浩 Hard" Solutions and "Soft" Solutions: Institutional Response to Urban Water Problems. KRIHS and RIHN Joint International Symposium on Urban Sustainability in Asia, 2008年06月, ソウル、韓国.
- ・ 谷口 真人 Human Impacts on Subsurface Environment in Asian Mega Cities. AOGS 2008, 2008年06月, 釜山、韓国.
- ・ Fernando SIRINGAN Metal Pollution History of Metro Manila, Philippines from Depth Profiles of Sediments from Three Water Bodies. AOGS2008, 2008年06月, 釜山、韓国.
- ・ 細野 高啓 Vertical variation of the heavy metal concentrations in the sediment core collected from the Osaka Bay, Jakarta Bay, and Manila Bay. AOGS2008, 2008年06月, 釜山、韓国.
- ・ 小野寺 真一 Seawater Recirculation and Dissolved Nitrogen in Tidal Flat. AOGS2008, 2008年06月, 釜山、韓国.
- ・ 西島 潤 大分県滝上地熱発電所における重力変動観測による地下流体モニタリング -A10-017絶対重力計を用いた地下流体流動検出の試み-. 地球惑星科学連合2008年大会, 2008年05月, 幕張メッセ、千葉市.
- ・ 山本 圭香 Kaula則による GRACE重力場の時間変動成分のスケーリングについて. 地球惑星科学連合2008年大会, 2008年05月, 幕張メッセ、千葉市.

【ポスター発表】

- ・ 香川 雄一 The Distribution of Temples along the Canal and the Changes of Hydrological Environment in Bangkok.. IGS-TH2009, 2009年02月, バンコク、タイ.
- ・ 山本 圭香 Study of Sub-basin Scale Groundwater Variations in Asia Using GRACE, Satellite Altimetry and in-situ Data. 2008 AGU Fall Meeting, 2008年12月, サンフランシスコ、アメリカ.
- ・ 安元 純 Evaluation of submarine groundwater discharge in coastal aquifers at Osaka Bay, Japan by numerical simulation. 2008 AGU Fall Meeting, 2008年12月, サンフランシスコ、アメリカ.
- ・ 利部 慎 Groundwater flow system determined by multiple age tracers and stable isotopes in Jakarta area. 2008 AGU Fall Meeting, 2008年12月, サンフランシスコ、アメリカ.
- ・ 福田 洋一 Groundwater and Land Subsidence Monitoring in 3 Mega-Cities, Indonesia, by Means of Integrated Geodetic Methods. 2008 AGU Fall Meeting, 2008年12月, サンフランシスコ、アメリカ.
- ・ 谷口 智雅 荒川における河川景観の空間的特徴. 日本陸水学会第73回大会, 2008年10月, 札幌市.
- ・ 安元 純 Tidal effect on submarine groundwater discharge in coastal aquifers at Osaka Bay. IAH2008, 2008年10月, 富山市.
- ・ 愛知 正温 広域地下水流動と地下水流動・地盤変形の連結モデルを用いた関東平野中北部の地盤沈下再現解析. 日本応用地質学会2008, 2008年10月, 札幌市.
- ・ 遠藤 崇浩 A Comparative Study on Countermeasures against Land Subsidence Problem, - Japan and

Thailand. IAH2008, 2008年10月, 富山市.

- ・西島 潤 重力変動観測による地下流体モニタリング – A10絶対重力計を用いた地下流体流動検出の試み–. 日本地球学会平成20年金沢大会, 2008年10月, 金沢市.
- ・谷川 寛樹 Estimation of historical / spatial changes in subsurface Material Stock related to the construction sector of urban areas in Japan. HydroChange2008, 2008年10月, 京都市.
- ・山本 圭香 GRACE衛星重力 データによるJRA-JCDAS LDA and GRiveT Terrestrial Water Storage Modelの検証. 地球惑星科学連合2008年大会, 2008年05月, 幕張メッセ、千葉市.
- ・愛知 正温 Simulation of the ground movement caused by groundwater extraction using a nested modeling scheme to integrate regional groundwater flow and local groundwater flow/land subsidence; an example from Tokyo. EGU General Assembly 2008, 2008年04月, オーストリア.
- ・山本 圭香 Validation of JRA-JCDAS LDA and GRiveT Terrestrial Water Storage Model Using GRACE Satellite Gravity Data. Third WCRP International Conference on Reanalysis, 2008年, 東京都.

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- ・谷口 真人 Effects of human impacts on urban subsurface environment in Asia. AOGS2008, 2008年06月, 釜山、韓国.

調査研究活動

【国内調査】

- ・地下水の滞留時間を測定するためのKr回収. 釜石, 2009年02月.
- ・大阪平野地下水の汚染状況調査. 大阪湾周辺, 2009年02月.
- ・御前浜周辺ラドン調査. 大阪 兵庫, 2008年10月.
- ・クリプトン-85分離手法の検証と分析. 青森県, 2008年07月.
- ・有明海に流入する地下水流出量の時空間変動を推定. 有明海, 2008年07月.
- ・絶対重力計試験測定. 大分県九重町, 2008年04月.

【海外調査】

- ・地下水採集と自動地下水浮出計の設置. バンコク (タイ), 2009年03月.
- ・地下水湧出の計測のための試験地作り及び測器の設置. ジャカルタ (インドネシア), 2009年03月.
- ・統計資料収集 General survey . ジャカルタ (インドネシア), 2009年03月.
- ・マニラにおける地下水汚染調査. マニラ (フィリピン), 2009年03月.
- ・温度計測装置回収・設置及び孔内温度分布測定. 台北・台中・台南 (台湾), 2009年01月.
- ・統計資料収集 General survey . ソウル (韓国), 2008年11月.
- ・地下水汚染の現状評価と海洋への影響を調査. マニラ (フィリピン), 2008年09月.
- ・一般水質・安定同位体・溶存フロンガス分析サンプル採取. バンコク (タイ), 2008年08月.
- ・General survey 統計資料収集. ジャカルタ (インドネシア), 2008年08月.
- ・地下水、土壌、沿岸堆積物の採取. バンコク (タイ), 2008年07月.

本研究

プロジェクト番号: C-06

プロジェクト名: 病原生物と人間の相互作用環

プロジェクト名(略称): 環境疾患プロジェクト

プロジェクトリーダー: 川端善一郎

プログラム/研究軸: 循環領域プログラム

ホームページ: <http://www.chikyu.ac.jp/z/>

キーワード: 水域生態系 環境改変 KHV コイ KHV感染症 感染経路 伝播 人間活動 相互作用環 病原生物 感染症 モデル

○研究目的と内容(2008年4月～2009年3月) 研究目的と内容

「研究目的」

近年の新たな感染症の発生・拡大が直接的・間接的に人間生活の脅威となっている現状をふまえて、コイヘルペスウイルス感染症をモデルとして、(1)人間による環境改変、(2)感染症の発生・拡大、(3)人間生活の変化、という3者間の相互作用環を明らかにして、感染症の大規模な発生と拡大を未然に防ぐ環境と、人間と病原生物の共存のあり方を提案する。

「研究の背景」

近年、ヒトや家畜から野生生物に至るまで、感染症が発生している。このような感染症の拡大は、人間を直接死に至らしめるだけでなく、経済的損失や生態系の崩壊を引き起こす可能性があり、人類が直面するきわめて深刻な地球環境問題である。

世界の感染症対策は、感染症の診断法や感染症が起きた後の拡大の防止法の研究に力が注がれている。感染症発症の病理メカニズムの解明は進展しているが、自然環境中における病原生物の動態と病原生物を生み出す背景と考えられる人間・環境相互作用環の理解が著しく遅れている。その理由は、(1)既存学問分野において、このような研究課題が緊急かつ重要な研究課題であるとは考えられなかったこと、(2)研究を進める方法論の開発が遅れていること、(3)実証研究が困難であること、(3)分子生物学から、環境学、人間社会までレベルの異なるシステムの繋がりに注目し、総合研究を進めようとする研究者や研究チームが少なかったことが挙げられる。

本研究は環境-病原生物-人間の相互作用環のモデルシステムの研究であり、感染症の発生・拡大を未然に防ぐ予防医学をめざした概念を作るための実証的研究である。このような研究の進め方は世界的に見ても新規性のある研究と考えられる。

「地球環境問題の解決のどう資する研究なのか？」

感染症の大規模な発生と拡大という地球環境問題に対して、本プロジェクトでは、実験可能で、かつ様々な感染症に共通する基本的パラメーターを有すると考えられる、1998年から急速に世界中へ拡大したコイヘルペスウイルス(KHV)感染症を研究モデルとしてとりあげ、KHV感染症の発生を予見する方法と、大規模な発生と拡大を未然に防ぐ環境と、KHVとコイと人間の共存のあり方を具体的に提案する。このことによって、直接的には、人類にとって貴重な食糧や生態系の構成種としてのコイの保全に貢献し、さらに間接的には、本研究方法と成果を他の感染症に適用し、感染症の発生・拡大を未然に防ぐことをめざした学問の方向性を示し、予防医学野観点から環境問題の解決に資する。

○進捗状況(2008年4月～2009年3月) 進捗状況

「研究体制」

研究体制は、以下のように研究グループ5班および統括班からなる。

1班(人間による環境改変班)人間による環境改変のうち、富栄養化、水辺環境改変、生物多様性の低下および食物網の変化を取り上げ、これらの相互関係を実験的に明らかにする。

2班(病原生物・宿主生態班)病原生物であるKHVと宿主であるコイ(Cyprinus carpio carpio)の動態と、これらに係る環境要因を明らかにする。

3班(感染経路・生態系影響班)KHV感染症伝播の経路と機構を明らかにする。

4班(経済・文化班)KHV感染症が起きた場合の経済的、生態的および文化的資源価値の消失とその代償的価値の創出過程を明らかにする。

5班(フィードバック班)「病原生物KHVと人間の相互作用環」の数理モデルを構築し、経済・文化の変化がさらなる環境変化に与える影響を明らかにする。総括班 各研究班の研究課題の関連性を検討し、調整する。「KHVと人間の相互作用環」モデルを他の感染症へ適用する。

「全研究プロセスにおける本年度の課題と成果」

1) 本年度の研究課題

2008年度に設定した研究課題は以下の通りで、全ての研究項目について現在研究が続けられていて、成果が出つつある。

- (1) テレメトリーを用いてコイの行動を明らかにする。
- (2) KHV感染履歴となるKHV抗体の有無別にコイの行動を明らかにし、どのような場所で感染が起きやすいかを明らかにする。
- (3) 琵琶湖においてKHVの分布を明らかにする。
- (4) KHVとコイの存在場所が一致する環境特性を明らかにする。
- (5) 水温環境とストレスの関係を実験的に明らかにする。
- (6) コイの消失の経済的影響を評価する。
- (7) KHVと人間の相互作用環の骨格モデルを作る。
- (8) 他の感染症(レジオネラ感染症、非結核性マイコバクテリア感染症、抗生物質耐性菌による感染症)の事例を人間との相互作用から解析する。
- (9) 中国雲南省の湖、アーハイの環境調査を行う。
- (10) 病原生物と人間の相互作用環を住民の立場から多面的に評価する。
- (11) DIVERSITAS(生物多様性科学国際共同研究計画)との研究を進める。
- (12) 病原生物と人間の相互作用環の国際シンポジウムを開催する。

今年度発生した研究課題は以下の通り。

- (1) コイの水温選択性を明らかにするための実験を野外設置水槽で行う。
- (2) コイの生態系影響を調べるための予備実験を野外設置水槽で行う。
- (3) 琵琶湖以外の水域におけるKHVの有無を調べる。
- (4) 自然環境水中のKHVの活性の有無を調べる。

2) 本年度に挙げ得た成果

自然水域中のKHV検出法の開発に成功した。これまで、KHV感染症に感染したコイ個体以外に、KHVがどこに存在するかは分かっていなかったが、この手法を用いて河川と湖沼の調査の結果、KHV感染症のアウトブレイク終息後にも、長期にわたって水中にKHVが存在することが世界で初めて明らかになった。(Minamoto, et al., 2008 Veterinary Microbiology, in press; Honjo et al., 投稿中)。人間の水辺改変によって水温の時空間分布が変化することが明らかになった(Yamanaka, et al., 投稿中)。この水温分布の変化が、コイの行動、KHVにたいする免疫獲得、コイのストレスに影響をあたえることが考えられた。体長30 cm以上のコイはKHVの免疫を持っていることが明らかになった(Uchii, et al., 投稿中)。成長に伴うコイの行動がKHV感染症の起きる場所と拡大に重要な要因となっていることが考えられた。水中のストレス物質を定量する方法を確立した(Suzuki, et al., 準備中)。この方法によって、採血なしでコイのストレスを定量化する方法の開発に道を開いた。

KHVと宿主であるコイの出会いがKHV感染症が起きる最初のイベントである。KHV感染症の起こる可能のある場所と時期の可視化を行うために、KHVとコイの存在場所が一致する場所を特定しようとした研究は、KHVの活性が維持される場所の特定とその場所の環境特性を明らかにする研究に変更すればよいことが明らかになった。

本年6月に国際シンポジウム”Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages”を開催した。その成果を発展させ、このシンポジウムの演者の研究グループ(イスラエル、ヘブライ大学)とKHV関連の共同研究を開始した。

○共同研究者(所属・役職・研究分担事項)

- ◎ 川端善一郎 (総合地球環境学研究所・教授・リーダー・プロジェクト総括)
- 浅野 耕太 (京都大学大学院人間・環境研究科・准教授・経済波及効果モデル)

- 板山 朋聡 (国立環境研究所・研究員・ナノテクによる微生物測定)
 ○ 呉 徳意 (上海交通大学 (中国) ・准教授・湖沼管理)
 ○ 大森 浩二 (愛媛大学沿岸環境科学研究センター・准教授・環境改変)
 ○ 奥田 昇 (京大大学生態学研究センター・准教授・魚類の食物網解析)
 ○ 梯 正之 (広島大学大学院保健学研究科・教授・感染症拡大予測モデル)
 ○ 孔 海南 (上海交通大学 (中国) ・教授・湖沼管理)
 ○ 源 利文 (総合地球環境学研究所・プロジェクト上級研究員・ウイルスの生態)
 ○ 松井 一彰 (近畿大学・理工学部・講師・ウイルスの生態)
 ○ 松岡 正富 (滋賀県朝日漁業共同組合・監事・魚類の活用法)
 神松 幸弘 (総合地球環境学研究所研究推進センター・助教・魚類のストレス)
 伊吹 直美 (総合地球環境学研究所・プロジェクト研究推進支援員・プロジェクト研究推進支援)
 内井喜美子 (総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員・魚類の免疫)
 鈴木 新 (総合地球環境学研究所・派遣研究員・魚類のストレス)
 奥宮 清人 (総合地球環境学研究所・助教授・医学)
 近藤 倫生 (龍谷大学理工学部・講師・システム安定性解析)
 高原 輝彦 (九州大学・研究員・代謝生理)
 陀安 一郎 (京大大学生態学研究センター・准教授・安定同位体分析)
 中野 孝教 (総合地球環境学研究所・教授・安定同位体分析)
 ○ 那須 正夫 (大阪大学大学院薬学研究科・教授・病原生物の環境動態)
 朴 虎東 (信州大学理学部・教授・水質汚濁)
 本庄 三恵 (総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員・ウイルスの生態)
 三木 健 (国立台湾大学海洋研究所・助教・微生物動態モデル)
 安永 照雄 (大阪大学微生物病研究所付属遺伝情報実験センター・教授・インフォマティクス)
 山内 淳 (京大大学生態学研究センター・准教授・感染症伝播数理モデル)
 山中 裕樹 (総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員・魚類の生息環境)
 米倉 竜次 (岐阜県河川環境研究所・主任研究員・魚類のストレス)
 曾我部 篤 (愛媛大学沿岸環境科学研究センター・COE研究員・環境改変)
 菱田 達也 (京大大学生態学研究センター・大学院生・魚類の食物網解析)
 大西秀二郎 (愛媛大学沿岸環境科学研究センター・技術補佐員・環境改変)
 一條 知昭 (総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員・衛生学)
 酒井陽一郎 (京都大学大学院理学研究科 (京大大学生態学研究センター) ・大学院生・水域生態学)
 白江 祐介 (京都大学大学院人間・環境学研究科・大学院生・経済学)
 田中 伸幸 (独立行政法人国立環境研究所・アシスタントスタッフ・農学)
 陀安 一郎 (京大大学生態学研究センター・准教授・生態系生態学)
 中野 伸一 (京大大学生態学研究センター・教授・微生物生態学)
 DIVERSITAS (国際生物多様性科学委員会メンバー (事務局フランス・9カ国11人) ・事務局・病気と生物多様性)
 NAIMAN, Robert (Univ. Washington, Fishery Science (アメリカ合衆国) ・教授・魚類の生態)
 SOTO, Doris (Fishery Department, FAO, UN, Rome (イタリア) ・Senior Fishery Resources Officer・資源経済解析)
 Arndt Telschow (Westfalian Wilhelms University, Muenster (ドイツ) ・ポスドク研究員・数理生態学)
 Marakkale Manage (University of sri Jayawardenepura University (スリランカ) ・上級講師・環境保全)
 David J. Rapport (EcoHealth Consulting (カナダ) ・代表・環境医学)
 Luisa Maffi (Terralingua (国際 NGO, カナダ) ・代表・社会学)
 Moshe Kotler (Hebrew University-Hadassah Medical School (イスラエル) ・教授・医学)

○当初の計画

「当初の計画」と「当初の計画からの変更点」

PR (2006年) ・FR1 (2007年) の計画からの変更点は特になし。

2008年度に設定した研究課題に関しては、すべて計画通りに進行している。

○これまでの研究成果と今後の課題

「本年度に挙げ得た成果」

自然環境水中のKHV検出手法の開発という基礎研究に力をいれた。

先端研究を行っている研究者との情報交換と既存研究のレビューを行い、未開拓であり、かつ従来の考え方を考える研究は何か常に留意し、オリジナルの研究成果を出すことに留意した。

「来年度以降への課題」

本年度の研究の遂行からこのプロジェクトとして得られた、課題は、KHV感染症の発生と拡大を予測するために、自然環境水中のKHVの活性を現場で測定する技術が必要になった。現在、ナノテク技術を駆使したシステムの開発の準備にとりかかった。コイの生産消費動向の経済文化的要因の分析が必要になった。生産消費が急激に減少している日本と、反対に増加している中国の例を比較しその原因を知るために、中国の研究者の協力が必要になってきた。現在、中国の経済文化分野の研究者と研究計画を検討している。

著書（執筆等）

【単著・共著】

- ・ 諸富徹・浅野耕太・森晶寿 2008年06月 環境経済学講義—持続可能な発展をめざして。有斐閣ブックス，453。有斐閣，東京，296pp.

【分担執筆】

- ・ 梯 正之 2008年09月 . 「数」の数理生物学. 日本数理生物学会. 共立出版，東京，pp.117-134.
- ・ 梯 正之 2008年09月 理論疫学：数理モデルにおける感染症流行の分析. 「数」の数理生物学. 日本数理生物学会. 共立出版，pp.117-134.

論文

【原著】

- ・ Minamoto, T., Honjo, M. N., Uchii, K., Yamanaka, H., Suzuki, A. A., Kohmatsu, Y., Iida, T., Kawabata, Z. Mar,2009 Detection of cyprinid herpesvirus 3 DNA in river water during, after an outbreak. *Veterinary Microbiology* 135 :261-266. DOI:10.1016/j.vetmic.2008.09.081.. (査読付) .
- ・ Matsui, K., Honjo, M., Kohmatsu, Y., Uchii, K., Yonekura, R. and Kawabata, Z. 2008 Detection and significance of koi herpesvirus (KHV) in freshwater environments. *Freshwater Biology* 53 :1262-1272. (査読付) .
- ・ 姚志红, 孔海南, 靳志成, 王臣, 潘伟. 2008 改进遗传神经网络及其在水体富营养化和藻类生长预测中的应用. *上海交通大学学报* 42 :262-265. (中国語)
- ・ 黄莹莹, 陈雪初, 孔海南, 李春杰, 丁炜. 2008 曝气对遮光条件下藻类消亡的影响. *环境污染与防治* 30(44) :47 . (中国語)
- ・ 黄莹莹, 陈雪初, 孔海南, 李春杰, 丁炜. 2008 曝气对遮光条件下藻类消亡的影响. *环境污染与防治* 30 :44-47. (中国語)
- ・ 陈雪初, 孔海南. 2008 泽雅水库混合深度的年内变化及其对藻类生消影响. *生态科学* 27 :414-417. (中国語)

会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・ 内井喜美子, 川端善一郎 外来病原微生物コイヘルペスウイルスの在来宿主個体群への定着機構. 日本生態学会第56回大会, 2009年03月17日-2009年03月21日, 盛岡市. (本人発表).
- ・ 源利文・本庄三恵・川端善一郎 琵琶湖におけるコイヘルペスウイルスの分布と季節変化 . 第56回日本生態学会大会, 2009年03月17日-2009年03月21日, 盛岡市.
- ・ 山中裕樹・神松幸弘・源利文・本庄三恵・内井喜美子・鈴木新・川端善一郎 湖岸形態と水温分布：魚類への影響の考察. 日本生態学会第56回全国大会, 2009年03月17日-2009年03月21日, 岩手県滝沢村、盛岡市.
- ・ 梯正之 ヒト-家畜-病原体システムの問題：BSE-vCJDの分析から. 研究集会「鳥インフルエンザを中心とする感染症の数理モデリングと解析」, 2009年02月21日-2009年02月22日, 京都産業大学、京都.
- ・ 内井喜美子, 石原猛, 浅野耕太, 川端善一郎 コイヘルペスウイルスの侵入とコイ産業. 日本陸水学会第73回大会, 2008年10月10日-2008年10月13日, 札幌市.

- ・本庄三恵・源利文・松井一彰・内井喜美子・山中裕樹・鈴木新・神松幸弘・飯田貴次・川端善一郎 環境水中に存在するコイヘルペスウイルスの定量．日本陸水学会第73回大会，2008年10月10日-2008年10月13日，札幌市。
- ・Tanaka, N., Itayama, T., Honjo, M., Minamoto, T., Kawabata, Z. Development of a Rapid Concentration System for Virus in Environmental Water. 12th International Conference on Integrated Diffuse Pollution Management (IWA DIPCON 2008), Aug 27, 2008, Khon Kaen City, Thailand.
- ・Kawabata, Z., Minamoto, T., Honjo, M. N., Uchii, K., Yamanaka, H., Suzuki, A. A., Kohmatsu, Y. KHV-carp-human linkages: a case study in Lake Biwa, Japan. International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages, Jun 11, 2008-Jun 12, 2008, Kyoto, Japan.

【ポスター発表】

- ・一條知昭、井上尚子、見坂武彦、山口進康、那須正夫 水環境中の*Legionella pneumophila*の多様性. 日本薬学会第129年会，2009年03月26日-2009年03月28日，京都市。
- ・一條知昭、和泉陽子、山口進康、那須正夫 Auramine O-CTC二重染色法による呼吸活性をもつ抗酸菌の特異的検出. 日本薬学会第129年会，2009年03月26日-2009年03月28日，京都市。
- ・山中裕樹・神松幸弘・源利文・本庄三恵・内井喜美子・鈴木新・川端善一郎 湖岸形態と水温分布：魚類への影響の考察. 日本生態学会第56回全国大会，2009年03月17日-2009年03月21日，盛岡市。
- ・一條知昭、馬場貴志、見坂武彦、山口進康、那須正夫 水環境に存在する*Legionella pneumophila*の膜タンパク質の遺伝子型. 第82回日本細菌学会総会，2009年03月12日-2009年03月14日，名古屋市。
- ・松井一彰、本庄三恵、川端善一郎、内井喜美子 大腸菌における遺伝子水平伝播経路を指標にした淡水環境特性の評価．第24回微生物生態学会，2008年11月25日-2008年11月28日，札幌市。
- ・一條知昭、山口進康、那須正夫 ビーズアッセイ法による水環境中の細菌の同時検出. 日本微生物生態学会第24回大会，2008年11月25日-2008年11月28日，札幌市。
- ・一條知昭、山口進康、那須正夫 ビーズアッセイ法による水系感染症起因菌の迅速・特異的検出. フォーラム2008：衛生薬学・環境トキシコロジー，2008年10月17日-2008年10月18日，熊本市。
- ・Honjo, M. N., Minamoto, T., Matsui, K., Uchii, K., Yamanaka, H., Suzuki, A. A., Kohmatsu, Y., Iida, T., Kawabata, Z. Quantification method of Koi herpesvirus (KHV) in environmental water using cation-coated filter method and external standard virus.. International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages, Jun 11, 2008-Jun 12, 2008, Kyoto.
- ・Itayama, T., Tanaka, N., Honjo, M. N., Minamoto, T., and Kawabata, Z. Development of an on site rapid concentration system for virus in environmental water. International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages, Jun 11, 2008-Jun 12, 2008, Kyoto.
- ・Minamoto, T., Honjo, M. N., Uchii, K., Yamanaka, H., Suzuki, A. A., Kohmatsu, Y., Kawabata, Z. Detection of koi herpesvirus DNA from natural river water. International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages, Jun 11, 2008-Jun 12, 2008, Kyoto.
- ・Yamanaka, H., Sogabe, A., Kohmatsu, Y., Minamoto, T., Honjo, M. N., Uchii, K., Suzuki, A. A., Omori, K., Kawabata, Z. Relationship of lake morphometry and shore configuration to the temperature distribution in lagoons, and implications for its effect on fish health. International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages, Jun 11, 2008-Jun 12, 2008, Kyoto.

調査研究活動

【国内調査】

- ・全国の一級河川における病原微生物の生態調査（源利文）．全国，2008年07月-2008年08月，2008年07月-2008年08月。
- ・琵琶湖における病原微生物の生態調査（源利文）．滋賀県・琵琶湖一帯，2008年04月-2008年04月。
- ・由良川における病原微生物の生態調査（源利文）．京都府・由良川流域，2008年04月-2009年03月。

【海外調査】

- ・水質調査（川端・山中・白江・呉）．中国雲南省大理市アーハイ，2009年02月23日-2009年03月03日。

-
- ・ 岸辺環境改変調査（現地視察）．浙江省 太湖，中国，2008年07月10日-2008年07月14日．

本研究

プロジェクト番号: D-02

プロジェクト名: 日本列島における人間-自然相互関係の歴史的・文化的検討

プロジェクトリーダー: 湯本貴和

プログラム/研究軸: 多様性領域プログラム

ホームページ: <http://www.chikyu.ac.jp/retto/retto.htm>

○研究目的と内容(2008年4月～2009年3月)

研究目的: 日本列島で人間の存在が確認されている最終氷期以降において、人間活動の影響で自然がいかに変遷してきたか、その過程で生物相の変化はどうであったのか、また、自然や個々の生物に関する人間の認識・知識・技術はいかなるものであったかを歴史的過程として復元し、今後の人間-自然相互関係がいかにあるべきかを考える礎を提示するとともに、とくに近い将来での生物の大量絶滅をどのように予防するかについて具体的な方策を示すことを目的とする。同時に、日本列島各地で培われてきた**生物資源の持続的利用に関する知識**と、過剰利用を抑制してきた**重層する環境ガバナンス**のあり方を類型化し、グローバル化した現代社会に適合する新たな環境ガバナンスとはいかなるものかを提言する。

研究の背景: 現在、全世界において生物の大量絶滅による**生物多様性の喪失**が懸念されているとともに、**地域の自然風土に合った文化多様性**も急速に失われようとしている。本プロジェクトでは、生物多様性のホットスポットのひとつである日本列島において、適度な人間活動が日本の持続可能な生物資源と豊かな生物相を支えてきたとされる見解を古環境変遷と人間活動の相互関係を歴史的に検証し、生態系サービスの持続的利用に関する成功事例と失敗事例の要因を解明することで、**生態系サービスや生物多様性を損なわず、環境負荷が低い**、人間-自然相互関係の再構築についての道筋を提案することをめざしている。

研究内容

本プロジェクトでは、北海道、東北、中部、近畿、九州、沖縄の6つの地域を調査地として、花粉を含む生物遺体、考古遺物、古文書、民俗資料などを用いて、それぞれの地域での人間-自然相互関係の歴史的変遷を明らかにするとともに、人間の社会的・経済的背景や自然・生物を扱う知識と技術の変遷を探り、とくに人間の生業に大きく関わる、針葉樹とブナ科樹木、大型陸生哺乳類(クマ、オオカミ、カモシカ、シカ、イノシシ、サル)に焦点を当てて、それらの個体群の消長との関係を明らかにする。それぞれの地域は、1) 花粉堆積コアが採取できる堆積盆、2) 縄文期から近世までの遺跡群、3) 古文書などの歴史史料、4) 伝統的な生業と生活を最近まで残してきた集落、を他地域と比較可能な程度に含む範囲とする。先史時代に北海道と陸続きであったサハリンについては、考古・古環境・生物地理に関する限定的な班を構成し、北海道班を補完する。

以上の研究を遂行するために次のような班を設ける。

1) 方法論に基づいて日本列島を縦断的に研究する手法班

生態班: 花粉分析や大型植物遺体の解析により、古環境を証拠に基づいて解明する。

植物地理班: 現在の主要植物の分子系統的な解析に基づいて、過去の植物の移動を解明する。

古人骨班: 人間の身体に刻み込まれた環境である食生活の復元を安定同位体分析で解明する。

2) 地域ごとの人間-自然関係を研究する地域班

サハリン班: 主として旧石器時代における古環境復元と人間生活を解明する。

北海道班: 後志地域で近世以降の松前支配から北海道開拓における人間-自然関係を解明する。

東北班: 本州北限の大型ほ乳類の消長を人間-自然関係として解明する。

中部班: 秋山を対象に本州山村における人間-自然関係を解明する。

近畿班: 古代より都市近郊であった近畿における森林利用の歴史を解明する。

九州班: 阿蘇くじゅうの草原の歴史を人間-自然関係として解明する。

奄美・沖縄班: 琉球弧における自然資源の利用の歴史を解明する。

3) 総括班

地域班で検討される課題を、手法班が横断的に研究することによって、それぞれの地域班をつなぐとともに、保全生物学、経済学、哲学などの研究者からなる総括グループと共同して、概念構築や政策提言にまとめる。

地球環境問題の解決にどう資する研究なのか？

現在進行中の地球環境問題は、世界規模の物流革命によって、衣食住の地産地消が消滅し、地域の自然風土に適した環境負荷の低いライフスタイルが、グローバルスタンダードという、**地域によってはきわめて高い環境負荷をもつライフスタイル**に置き換わりつつあることから生じていると考える。日本列島における多様な自然環境における人間の営みとその帰結の連鎖を解明し、そのなかでの生物多様性と文化多様性の創生・維持とその役割を明らかにするとともに、過去数百年から数千年にわたる歴史から培われてきた、**地域の再生天然資源の枯渇や生態系サービスの劣化を回避してきた「賢明な知恵」とそれを実現する重層した環境ガバナンス**を発展的に継承することを目標としている。このプロセスで行われる、環境負荷を抑えた、しかし豊かな生活を実現する未来可能性を提案するための方法論の開発と概念構築は、世界の他地域にも適用可能であり、このことによって地球環境問題の解決に資する。

領域プログラムにおける位置づけ

日本列島は**生物多様性のホットスポット**のひとつであり、長年の人口稠密地域でありながら、豊かな生物相を保持した地域である。いっぽう、現在のグローバル化した世界では、世界中から第一次産品を大量に輸入し、各地の生物多様性に悪影響を与えている可能性もきわめて高い。世界10位の人口をもつ日本において、生物多様性を損なわず、環境負荷が低い、人間－自然相互関係の再構築することが地球環境問題を軽減することに直結するとともに、他地域にも適用可能な理論的枠組みを提案する。

このことは、地球研の多様性領域プログラムにおいて、世界的に生物多様性が喪失していくメカニズムの解明と喪失速度の低減に関する理論構築に資するとともに、地球環境問題のなかで、地球上のさまざまな環境に適応して生まれてきた**文化多様性の役割を再評価し、環境負荷の小さい生活を実現するために文化多様性を保持する必要がある**ことを主張する根拠をつくることとなる。2010年10月に名古屋で開催が予定されている生物多様性条約締結国会議COP10で、地球環境問題を人間文化の問題としてアプローチする地球研の成果発信に、大きく貢献できると考えている。

○進捗状況(2008年4月～2009年3月)

本年度の研究課題

1) FRの3年目である本年度は、中間報告で行ったこれまでの達成度に関する自己評価と外部評価を踏まえて、最終的なプロジェクト全体の到達点を見定めた。

(2) これまでは一部を除いて、地域ごと、あるいは手法ごとにある程度、独立して研究テーマを設定して研究を進めてきたが、残されたプロジェクトの期間で達成可能なことと達成不可能なことを見極め、それぞれの班の成果を全体の統合的成果としてまとめるように、**生物資源の持続的利用に関する知識をそれぞれの生態系の特性と人々に求められる生態系サービスの歴史的変遷の焦点をあてて整理することにした。**

(3) いっぽうで、それぞれの地域でターゲットとしている具体的な生態系について、**日本というガバナンスがそれぞれに地域の自然と文化に与えてきた影響の歴史的変遷と地域差を解析するために、重層する環境ガバナンスを明示する環境史年表の編纂に着手した。**

(1) 日本列島の環境史を1)『野と原の環境史』、2)『林と里の環境史』、3)『海・森・島の環境史』、4)『山と森の環境史』という4つの生態系ベースで考えることとして、生物資源の持続的利用に関する知識とそれを実現する重層する環境ガバナンスについて、従来の1) サハリン班と九州班、2) 近畿班、3) 北海道班と奄美・沖縄班、4) 東北班と中部班の成果をそれぞれ統合的に扱い、地域の気候や歴史による個別性と、生態系や生物群の特性による一般性を抽出するプロセスに入った。それに加えて、5) 安定同位体分析を主とする古人骨班、花粉分析を主とする古生態班、DNA分析を主とする植物地理班の3つの手法班の成果を統合して、日本列島全体を通観する5)『日本列島の環境史』という視点を提示することにした。また、重層的な環境ガバナンスに関する時系列データを取りまとめるツールとして、人間文化研究機構で開発中の時間軸統合ツールの利用可能性を検討し、データ収集と入力などを行う環境史年表WGを立ち上げた。

進捗状況

(1) いわゆる理科系中心の手法班は、それぞれ確実にデータを出し、査読付きの学術論文をどんどん出版している。理由としては、前述のとおり、所内の実験設備を活用して所外の共同研究者が効率的に実験できるように、プロジェ

クト研究員や京都大学の大学院生をじゅうぶんに配置している結果であり、もともと複数著者の共同研究・共同発表という方式に慣れていたのであると考えている。

(2) いわゆる文科系中心の地域班も、本研究2年を経て、ようやく本格的な共同研究の意義への理解が深まってきた。とくに今年度は、それぞれの地域に住む市民にわかるような公開講演会や公開シンポジウムの開催を積極的に推奨したため、その企画段階や実行段階でお互いの研究内容への理解が進むとともに、公開のパネルディスカッションが実質的な学際的対話や議論となつて、共同でめざすべき研究の方向が定まってきたようにみえる。また、平成22年度にシリーズ本の出版というかたちで、共同研究の成果が世に問われるという、文科系の研究者としてもわかりやすい目標を設定したために、大幅にグループ内、グループ間の学問的な対話・議論が進んできた。

○共同研究者(所属・役職・研究分担事項)

- ◎ 湯本 貴和 (総合地球環境学研究所研究部・教授・プロジェクトの統括)
- ◎ 高原 光 (京都府立大学農学研究科・教授・古生態班の統括, 近畿・山陰・シベリア・北海道地域の花粉分析)
 - 五十嵐八枝子 (北方圏古環境研究室・代表・古生態班: 北海道・極東ロシアの花粉分析)
 - 小椋 純一 (京都精華大学人文学部・教授・古生態班: 北海道・極東ロシアの花粉分析)
 - 叶内 敦子 (明治大学文学部・非常勤講師・古生態班: 関東・東海・中部の花粉分析)
 - 紀藤 紀夫 (北海道教育大学函館校・准教授・古生態班: 北海道の花粉分析)
 - 長谷 義隆 (御所浦白亜紀資料館・館長・古生態班: 九州の花粉分析, 大型植物遺体分析)
 - 南木 睦彦 (流通科学大学・教授・古生態班: 大型植物遺体分析)
 - 百原 新 (千葉大学園芸学研究科・准教授・古生態班: 大型植物遺体分析)
 - 守田 益宗 (岡山理科大学自然植物園・准教授・古生態班: 東北・北海道の花粉分析)
- 村上 哲明 (首都大学東京牧野標本館・教授・植物地理班の統括, 現生の植物の遺伝構造・植生の歴史的成立過程の解明)
 - 青木 京子 (京都大学大学院人間・環境学研究科・日本学術振興会特別研究員PD・植物地理班: 現生の植物の遺伝構造・植生の歴史的成立過程の解明)
 - 阿部 純 (北海道大学農学研究院・准教授・植物地理班: 栽培植物に関するフィールド調査と遺伝的多様性の解析)
 - 丑丸 敦史 (神戸大学人間発達環境学研究科・准教授・植物地理班: 植物と共生関係にあるマルハナバチの生息地の条件および生息地環境の歴史的変遷の解明)
 - 須賀 丈 (長野県環境保全研究所・研究員・植物地理班: 植物と共生関係にあるマルハナバチの生息地の条件および生息地環境の歴史的変遷の解明)
 - 瀬戸口浩彰 (京都大学大学院人間・環境学研究科・准教授・植物地理班: 現生の植物の遺伝構造・植生の歴史的成立過程の解明)
 - 田中 洋之 (京都大学霊長類研究所・助教・植物地理班: 植物と共生関係にあるマルハナバチの生息地の条件および生息地環境の歴史的変遷の解明)
 - 田村 実 (大阪市立大学大学院理学研究科・准教授・植物地理班: 現生の植物の遺伝構造・植生の歴史的成立過程の解明)
 - 舘田 英典 (九州大学大学院理学研究院・教授・植物地理班: 現生の植物の遺伝構造・植生の歴史的成立過程の解明)
 - 津村 義彦 (森林総合研究所森林遺伝研究領域・室長・植物地理班: 現生の植物の遺伝構造・植生の歴史的成立過程の解明)
 - 戸丸 信弘 (名古屋大学大学院生命農学研究科・教授・植物地理班: 現生の植物の遺伝構造・植生の歴史的成立過程の解明)
 - 中山祐一郎 (大阪府立大学生命環境科学研究科・助教・植物地理班: 人里環境の雑草から昇格した植物の利用と多様性解析)
 - 藤井 紀行 (熊本大学大学院自然科学研究科・准教授・植物地理班: 現生の植物の遺伝構造・植生の歴史的成立過程の解明)
- 山口 裕文 (大阪府立大学生命環境科学研究科・教授・植物地理班: 栽培植物とその雑草系統・野生種に関するフィールド研究および総括)
 - 山根 京子 (大阪府立大学生命環境科学研究科・助教・植物地理班: 栽培植物の起源と系統分化に関する集団遺伝学・進化生物学的解析)
- 米田 穰 (東京大学大学院新領域創成科学研究科・准教授・古人骨班の統括, 食生活の時代変遷の解明)
 - 石丸恵利子 (京都大学大学院人間・環境学研究科・大学院生・古人骨班: 食生活の時代変遷の解明)

- 片山 一道 (京都大学大学院理学研究科・教授・古人骨班：食生活の時代変遷の解明)
- 陀安 一郎 (京都大学生態学研究センター・准教授・古人骨班：食生活の時代変遷の解明)
- 中野 孝教 (総合地球環境学研究所研究部・教授・古人骨班：食生活の時代変遷の解明)
- 兵藤不二夫 (スウェーデン農科大学・日本学術振興会海外特別研究員・古人骨班：食生活の時代変遷の解明)
- 藤澤 珠織 (京都大学大学院理学研究科・大学院生・古人骨班：食生活の時代変遷の解明)
- 佐藤 宏之 (東京大学人文社会系研究科・教授・サハリン班の統括、全体統括・旧石器文化の民族考古学的検討)
- 出穂 雅実 (札幌市埋蔵文化財センター・文化財調査員・サハリン班：旧石器遺跡の地考古学的検討)
- 小田 寛貴 (名古屋大学・助教・サハリン班：AMS年代測定)
- 佐々木史郎 (国立民族学博物館・教授・サハリン班：北方少数民族の文化人類学的研究)
- 高橋 啓一 (琵琶湖博物館・総括学芸員・サハリン班：動物化石による動物相の復元)
- 増田 隆一 (北海道大学創成科学共同研究機構・准教授・サハリン班：動物化石のDNA分析)
- 山田 哲 (北見市教育委員会・学芸員・サハリン班：旧石器遺跡の遺跡間変異解析)
- 田島 佳也 (神奈川大学経済学部・教授・北海道班の統括、北海道における人間-自然相互関係を解明)
- 右代 啓視 (北海道開拓記念館・課長・北海道班：北海道における人間-自然相互関係を解明)
- 児島 恭子 (昭和女子大学、早稲田大学・非常勤講師・北海道班：北海道における人間-自然相互関係を解明)
- 小杉 康 (北海道大学・准教授・北海道班：北海道における人間-自然相互関係を解明)
- 中野 泰 (筑波大学大学院人文社会科学研究科・講師・北海道班：北海道における人間-自然相互関係を解明)
- 麓 慎一 (新潟大学人文社会・教育科学系・准教授・北海道班：北海道における人間-自然相互関係を解明)
- 三浦 泰之 (北海道開拓記念館・学芸員・北海道班：北海道における人間-自然相互関係を解明)
- 池谷 和信 (国立民族学博物館・教授・東北班の統括、東北地方におけるクマ・シカと人の関係を解明)
- 伊沢 紘生 (帝京科学大学生命環境学部・教授・東北班：東北地方におけるサルと人の関係を解明)
- 岡 恵介 (東北文化学園大学総合政策学部・教授・東北班：東北地方における大型ほ乳類と人の関係ならびに焼畑の利用の歴史を解明)
- 菊池 勇夫 (宮城学院女子大学・教授・東北班：東北地方におけるクマ・オオカミと人の関係ならびに牛馬と放牧の歴史を解明)
- 西崎 伸子 (福島大学行政政策学類・准教授・東北班：東北地方におけるイノシシと人の関係を解明)
- 三戸 幸久 (NPOニホンザル・フィールドステーション・東北班：東北地方におけるサルと人の関係を解明)
- 白水 智 (中央学院大学法学部・准教授・中部班の統括、前近代山村の資源利用をめぐる社会的諸関係)
- 荒垣 恒明 (東京工業高等専門学校・非常勤講師・中部班：巢鷹・御林をめぐる山地利用と規制の諸相)
- 井上 卓哉 (富士市立博物館・学芸員・中部班：近現代における林野利用技術の変化)
- 佐々木明彦 (東北大学・大学院生・中部班：地形変動と土地利用の関係)
- 関戸 朋子 (群馬大学・准教授・中部班：近現代における林野利用の変遷と集落)
- 田口 洋美 (東北芸術工科大学芸術学部・教授・中部班：狩猟民俗・鳥獣資源管理)
- 中澤 克昭 (長野工業高等専門学校・准教授・中部班：古代～中世における狩猟の実像と心性)
- 長谷川裕彦 (明治大学・非常勤講師・中部班：地形変動と土地利用の関係)
- 吉村 郊子 (国立歴史民俗博物館・助教・中部班：近現代の生業活動と土地利用)
- 大住 克博 (森林総合研究所関西支所・地域研究監・近畿班の統括、森林利用による植生変化の解明)
- 伊東 宏樹 (森林総合研究所多摩森林科学園・主任研究員・近畿班：猪名川町・京阪奈丘陵の里山利用による植生変化の解明)
- 井之本 泰 (京都府立丹後郷土資料館・資料課長・近畿班：京都府北部での植物利用民俗の記録・民具などからの里山利用体系の解明)
- 奥 敬一 (森林総合研究所関西支所・主任研究員・近畿班：宮津市上世屋集落・琵琶湖西岸地域の

- 土地利用の実態と植生、景観変化の解明)
- 佐久間大輔 (大阪市立自然史博物館・学芸員・近畿班：猪名川町・京阪奈丘陵における植物利用の実態と植生変化の解明)
- 水野 章二 (滋賀県立大学人間文化学部・教授・近畿班：植物資源の所有や利用、規制や取引に関する研究)
- 深町加津枝 (京都府立大学人間環境科学研究科・准教授・近畿班：宮津市上世屋集落・琵琶湖西岸地域の森林利用の実態および住民の認識の解明)
- 堀内 美緒 (京都大学農学研究科・大学院生・近畿班：琵琶湖西岸地域における文献資料を用いた住民の村落空間の利用様態、資源利用様態)
- 森本 仙介 (奈良県立民俗博物館・学芸員・近畿班：山村民具からみた近畿南部の山林利用)
- 飯沼 賢司 (別府大学文学部・教授・九州班の統括、中世の土地利用)
- 生野喜和人 (別府大学文学部・非常勤講師・九州班：実験野焼き)
- 上野 淳也 (別府大学文学部・非常勤講師・九州班：歴史考古学)
- 大山 琢央 (別府大学文学部・非常勤講師・九州班：近代の野利用)
- 小田 毅 (別府大学文学部・非常勤講師・九州班：実験野焼き)
- 後藤 宗俊 (別府大学文学部・教授・九州班：歴史考古学)
- 佐々木 章 (別府大学文学部・非常勤講師・九州班：古環境の復元)
- 下村 智 (別府大学文学部・教授・九州班：弥生時代)
- 篠籪マリア (別府大学文学部・非常勤講師・九州班：考古学・人類学)
- 高 陽一 (別府大学付属明豊高校・教員・九州班：中世の土地利用)
- 橋 昌信 (別府大学文学部・教授・九州班：旧石器・縄文時代)
- 玉川 剛司 (別府大学文学部・非常勤講師・九州班：古墳時代)
- 段上 達雄 (別府大学文学部・教授・九州班：野焼き)
- 永松 敦 (宮崎公立大学人文学部・教授・九州班：狩と野)
- 中山 昭則 (別府大学文学部・准教授・九州班：観光と野の利用)
- 服部 英雄 (九州大学比較文化研究院・教授・九州班：動物地名と野)
- 春田 直紀 (熊本大学教育学部・准教授・九州班：地名と土地利用)
- 宮縁 育夫 (森林総合研究所九州支所・主任研究員・九州班：火山灰層序・地形)
- 安溪 遊地 (山口県立大学・教授・奄美・沖縄班の統括、近世の物々交換経済のネットワークの復元)
- 安溪 貴子 (山口大学・非常勤講師・奄美・沖縄班：ソテツ等の利用からみた奄美・沖縄の文化史)
- 蛭原 一平 (京都大学・大学院生・奄美・沖縄班：島嶼環境におけるイノシシと人間の相互関係)
- 木下 尚子 (熊本大学・教授・奄美・沖縄班：6-8世紀のヤコウガイ大量出土遺跡の検討)
- 当山 昌直 (沖縄県教育委員会文化課・文化財班長・奄美・沖縄班：空中写真を用いた山林利用史の復元研究)
- 渡久地 健 (琉球大学・非常勤講師・奄美・沖縄班：サンゴ礁の利用の奄美・沖縄の比較研究)
- 早石 周平 (琉球大学・非常勤講師・奄美・沖縄班：陸上動物相とその利用からみた奄美・沖縄史)
- 盛口 満 (沖縄大学・准教授・奄美・沖縄班：奄美・沖縄の自然と人をめぐる環境教育の開拓)
- 安部 浩 (京都大学大学院人間・環境学研究科・准教授・総括班：プロジェクトの理論的枠組み形成)
- 今村 彰生 (京都学園大学バイオ環境学部・講師・総括班：プロジェクトの理論的枠組み形成)
- 佐々木尚子 (総合地球環境学研究所研究部・プロジェクト研究員・総括班：プロジェクトの情報統合)
- 清水 勇 (京都大学生態学研究センター・教授・総括班：プロジェクトの理論的枠組み形成)
- 瀬尾 明弘 (総合地球環境学研究所研究部・プロジェクト研究員・総括班：プロジェクトの情報統合)
- 辻野 亮 (総合地球環境学研究所研究部・プロジェクト研究員・総括班：プロジェクトの情報統合)
- 中井 精一 (富山大学人文学部・准教授・総括班：プロジェクトの情報統合)
- 松田 裕之 (横浜国立大学大学院環境情報研究院・教授・総括班：プロジェクトの理論的枠組み形成)
- 村上由美子 (総合地球環境学研究所研究部・プロジェクト研究員・総括班：プロジェクトの情報統合)
- 矢原 徹一 (九州大学大学院理学研究院・教授・総括班：プロジェクトの理論的枠組み形成)

○当初の計画

○これまでの研究成果と今後の課題

本年度にあげた成果

- 1) 『野と原の環境史』に関しては、8月9日に公開講演会「忠類にはナウマンゾウとマンモスゾウがいた！」（幕別町、北海道）と発掘現場の観察会を開催した。9月13日～15日に公開シンポジウム・ワークショップ「阿蘇・くじゅうの草原の歴史と未来をさぐる」（阿蘇市、熊本）で草原の火入れの歴史や黒ボク形成などについて、11月22日～23日に国際シンポジウム「環日本海北部地域の後期更新世における人類生態系の構造変動」（東京大学、東京）で、最終氷期の草原、最終氷期のサハリン、沿海州、北海道の共通点と相違点などについて議論を行った（それぞれ報告書を作成）。
- 2) 『林と里の環境史』に関しては、8月23日に公開シンポジウム「民家が語る里山の価値」（宮津市、京都）を開催し、丹後半島でおこなった古民家解体の中間報告と地域資源活用や山村と都市住民の交流について議論した（報告書を取りまとめ中）。
- 3) 『海・森・島の環境史』に関しては、10月18日に「海・森・人-北海道の文化としての資源を考える」（北海道開拓記念館、北海道）を開催した。来年2月13日～14日には地球研地域セミナーとして「やんばるに生きる一自然・文化・景観のゆたかさを育む地域と観光」（名護市・国頭村、沖縄）を開催予定である（ブックレットを作成中）。
- 4) 『山と森の環境史』に関しては、来年3月に長野県栄村で現地報告会を開催予定である（昨年度の現地報告会の報告書を作成し、ウェブで公開）。

(2)上記の1)から5)までの『xxの環境史』については、最終年度である平成22年度に全5（～6）巻のシリーズ本として出版予定であり、それぞれの巻については、章立てと執筆者の決定、分担章の摘要・キーワード抽出までの作業がほぼ終了している。このシリーズは、日本列島における生物資源の持続的利用に関する知識と、過剰利用を抑制あるいは促進してきた重層する環境ガバナンスのあり方を類型化する、これまでにない分離融合型の研究成果を世に問うものであり、同時にこれからの日本列島における人間と自然のよりよい関係とそれを支える新しい環境ガバナンスを提示するものであると位置づけている。

(3) 人間文化研究機構で開発中の時間軸統合ツールに本プロジェクトの成果を投入して環境史年表を作成し、それを重層するガバナンスという観点で解析することは、地図をGISで置き換えたように、年表という概念を大きく変革するものである。今年度はそれぞれの地域班から、班の成果を確実に反映するように責任者を決めて、データ収集とデータ入力を行う仕組みを確立した。

本研究**プロジェクト番号: D-03****プロジェクト名: 人の生老病死と高所環境－3大「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応****プロジェクトリーダー: 奥宮清人****プログラム/研究軸: 多様性領域プログラム**

○研究目的と内容(2008年4月～2009年3月)**研究目的:**

本研究の目的は、高地で人はいかに生存し生活しているのか(生老病死)、という問いに対し新たな視点を切り拓くことにある。地球規模で進行する高齢化とそれに伴う生活習慣病を「身体に刻み込まれた地球環境問題」と考え、ここに焦点をあてる。高地環境に対する人間の医学生理的適応と「高地文明」とも呼びうる生態・文化的適応を明らかにし、近年の生活様式の変化がいかに老人のQuality of lifeに影響を及ぼしているかを解明し、人間・自然作用環の高地モデルを提唱する。

背景:

人体への酸素の供給が停止されたとき、5分以内で脳に不可逆的ダメージを与えうるといわれている。高地は、人間活動に必須である酸素の希薄さや食物確保の限界性、という厳しい側面をもつ環境であり、そこで人間は長年に渡り医学生理学的にも文化的にも適応してきた。その文化的適応は「高地文明」と呼びうるものである。地球規模で起こっている近年の急激な生活様式の変化の波は、一部、高地にも及んでいる。生活習慣病の代表疾患である心筋梗塞や糖尿病は、元来高地では少ないとされてきたが、生活様式の変化によりその増加が推測されている。心筋梗塞や糖尿病は酸素を全身に送りこむ循環を脅かし、これは、低酸素適応という観点から見れば、逆行する側面をもち、酸素の薄い高地での影響が危惧される。一方で、生活様式の変化が老人の生活に快適さをもたらす面もある。本プロジェクトは、ここ数十年の生活の変化が高地に暮らす老人のwell-beingに及ぼす影響を研究する。

地球環境問題の解決にどう資する研究なのか? :

近年、高地住民が直面しはじめたグローバル化とそれともなう生態、文化的な変容が、人の疾病や老化のありさまとしてあらわれると考え、それらを「身体に刻み込まれた環境問題」として位置づける。具体的には、生業の変化にともなう自然利用の変化が、内なる自然としての身体に影響をもち、生活習慣病と老化の促進、さらに老人の生活障害やwell-beingの低下という問題をひきおこすことにより、人間の問題としてたち現れるのであり、それが高地においては、顕著な縮図として現れると考えている。我々が地球環境問題と考える生活習慣病は、予防が重要な疾患である。対象地域の住民に、早期に介入することにより、後に起こりうる生活習慣病を未然に防ぐことが可能といえる。生活習慣病の予防にもつながる過度な生活の便利さ、巨大消費を追求する生活様式を見直すことは、生活習慣病だけにとどまらず、温暖化などその他の地球環境問題の原因を見直すことに通じる、と認識している。

○進捗状況(2008年4月～2009年3月)

ラダックDomkhar村では、老人への聞き取りにより、生活様式の変化、環境の変化、老人のwell-beingに関わる情報を得たため、客観的なデータの照合を測っているところである。また、地域住民の糖尿病の罹患率は低いことが示唆されたが、僧侶には多いことが推測された。さらに、個々の診察により、日本では完治しうる疾患が放置され、老人のwell-beingを悪化している例を経験した。青海省海晏県においては、2年間に及ぶ準備が功を奏し、高地環境への医学生理学的適応、生活習慣病、老人のwell-beingに関する漢民族とチベット人の違いを示す様々な知見が得られた。糖尿病が元来少ないとされていた高地においても、生活習慣によっては、かなり高頻度に糖尿病を発症する可能性が示唆されたことは、今後、対象地域で、予防をはかる上でも重要であると考えられる。老人の日常生活自立度は、日本の土佐町の老人と比較して低かったが、健康以外の主観的な生活への満足度は、日本の土佐町の老人に比較してチベット人は高いことがわかった。このことは、我々が、日本の香北町縦断調査で、日本人の客観的な身体的生活自立度が改善したにも関わらず、主観的な幸福感にあまり改善をみなかったことへの答えのヒントとなりうるのではないか。我々の対象とした高地住民は、土佐町の老人に比べ、集団としてみた場合、家族関係、友人関係への満足度が高かった。そして、一見質素な生活をしている彼らの経済的な満足度までが高かったのである。

○共同研究者(所属・役職・研究分担事項)

- ◎ 奥宮清人 (総合地球環境学研究所・准教授・総括)
- 松林公蔵 (京都大学東南アジア研究所・教授・総括、病気と文明、高所適応と疾患)
- 石根昌幸 (京都大学東南アジア研究所・研究員・生活習慣病)
- 大塚邦明 (東京女子医科大学東医療センター・教授・循環器疾患)
- 和田泰三 (京都大学東南アジア研究所・研究員・メンタルヘルス)
- 藤澤道子 (京都大学霊長類研究所・助教・進化医学)
- 笠原順子 (京都大学大学院医学研究科・博士課程院生・フィールド医学、看護学)
- 木村友美 (京都大学大学院医学研究科・修士課程院生・フィールド医学、栄養学)
- 石本恭子 (京都大学大学院医学研究科・博士課程院生・フィールド医学、看護学)
- 山本紀夫 (元国立民族学博物館、高地研究所・名誉教授・山岳人類学)
- 坂本龍太 (総合地球環境学研究所・研究員・公衆衛生学)
- 稲村哲也 (愛知県立大学文学部・教授・牧畜論、環境利用)
- 本江昭夫 (帯広畜産大学畜産環境科学科・教授・家畜飼育)
- 重田眞義 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授・植物利用、農耕文化)
- 大山修一 (首都大学東京都市環境学部地理学科・准教授・環境変動にともなう生業構造の変化)
- 藤倉雄司 (帯広畜産大学地域共同研究センター・産学官連携コーディネーター・草地利用)
- 川本芳 (京都大学霊長類研究所・准教授・動物の進化学的高地適応)
- 安藤和雄 (京都大学東南アジア研究所・准教授・総括、在地農業、農村開発)
- 河合明宣 (放送大学産業・技術学部・教授・持続的農業、農村開発)
- 宇佐見晃一 (山口大学農学部・教授・農村生業経済、アジア農村市場)
- 水野一晴 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授・高地環境植生変遷)
- 大西信弘 (京都学園大学バイオ環境学部・准教授・アジア環境保全、観光資源)
- 宮本真二 (琵琶湖博物館・研究員・古環境)
- 小坂康之 (京都大学東南アジア研究所・研究員・植物利用)
- 羅二虎 (上海大学・教授・古代生業)
- 月原敏博 (福井大学教育学部・教授・高所と低所の流通、超高所牧畜)
- 平田昌弘 (帯広畜産大学畜産科学科・准教授・乳加工体系)
- 池田菜穂 (防災科学技術研究所・研究員・ヤクの移牧)
- 竹田晋也 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授・総括、森林資源利用)
- 加藤真 (京都大学大学院地球環境学堂・教授・生物相と生物資源)
- 鈴木玲治 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・助教・土壌、土地利用)
- 生方史教 (京都大学東南アジア研究所・助教・資源利用、集合行為)
- 山口哲由 (京都大学地域研究統合情報センター・研究員・森林資源利用)
- 山田勇 (京都大学東南アジア研究所・名誉教授・森林とエコツーリズム)
- 佐々木綾子 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・特別研究員・森林資源利用)
- 小林尚礼 (小林写真事務所・写真家・高地と人の写真撮影)
- 斎藤清明 (総合地球環境学研究所・教授・高所民の自然観)
- 白館戒雲 (大谷大学文学部仏教学科・名誉教授・チベット文明と仏教)
- 谷田員亜紀代 (総合地球環境学研究所・助教・高地気候変遷)
- 白岩孝行 (総合地球環境学研究所・准教授・高所環境評価、雪氷)
- 木下鉄矢 (総合地球環境学研究所・教授・中国思想史)

○当初の計画

当初の計画：

フィールド医学班は、すべての3大高地全域の高所住民の評価を行い、横断的かつ、年次を追って縦断的に、フォローアップする。山岳人類学班は、アンデスを中心に調査を続けながら、エチオピア高地に対象を広げ、3大高地の文明比較に進める。高所・低所インタラクション班、農業生態・環境変遷班、森林生態班は、ヒマラヤ・チベットを主体に調査を続ける。自然学班は、3大高地の自然観の比較を順次行う。1年目は、各班のフィールド組織と体制の強化を行い、2年目より、各班が合同して、ひとつの高地文明の共同調査を行う。2008年は、アンデスの共同調査を、2009年は、ヒマラヤ・チベットの共同調査を、2010年は、エチオピア高地の共同調査を進める。5年目は、3大高地文明の相互比較を行い、6年目には、総合的なまとめを行う計画であった。

当初の計画からの変更点：

当初エチオピア、ヒマラヤ・チベット、アンデスの3大高地を対象地域としていたが、今年度は、ヒマラヤ・チベッ

ト地域に焦点をしばった。因果関係をより深く掘り下げ、プロジェクトの成果を社会への貢献につなげるために、3大高地のうち、対象をヒマラヤ・チベットにしぼり、そこでの研究を中心とするプロジェクトに変更した。医学班、文化班、生態班の連携を強化するために、老人のwell-being、高地適応、生活習慣病を共通の課題とし、調査項目を具体化し、調査対象を一致させ、情報を個人レベル、村レベルで照合することで改善をはかることとし、その役割を担うべく各班のリーダーと統括班をおくこととした。3班からそれぞれの地域に長期間滞在して調査をする研究員を配置し、医学班は、各地域を訪ね定期的にフォローアップ調査を行うこととした。これらの解決策によって、各班の連携が可能になるだけでなく、地域の比較や研究成果の統合が可能になると考えている。

○これまでの研究成果と今後の課題

本年度に挙げ得た成果：

ラダック：

LEDeG (Ladakh Ecological Development Group：ラダックの環境保護NGO) 及び LIP (Ladakh Institute of Prevention：ラダックの住民の健康予防NGO) をカウンターパートとして予備調査を行った。対象地としてDomkhar村を選んだ。標高が2900mから4000mにまたがること、村の規模が195世帯、人口1316人ほどであること、などが主な理由である。世帯調査によりメンバーの把握と他の市街部などへの移動と各人の職業と教育の把握を開始した。住民54人の診察を行い、平均年齢は65.5歳、収縮期血圧の平均値は147.6mmHg、拡張期血圧の平均値は91.9mmHg、血液中の酸素飽和度の平均値は89.1%であった。診察により、手関節骨折や大腿骨頸部骨折など日本では完治可能な疾患が放置されたことにより、偽関節化し、手指運動障害や歩行障害を来し、主観的な生活満足度を著しく悪化させている実例を認めた。カウンターパートであるLIPは、ラダック全域では、ランダムサンプリングにより、ラダック市街部500人と多数の農村部500人を、インタビュー（心血管疾患、消化器疾患、神経疾患などのくわしい症状と疾患の既往、やライフスタイル）と検診（血圧、老年者の包括的機能評価、心電図、血液検査（血糖、脂質）、動脈硬化測定）を進めており、すでに750人近くが検診を終えている。

青海省：

三江源を有する青海省のうち、2000年前の前漢のチベットへの最前線であった三角城跡という歴史を有する、青海湖畔の海晏県（標高3000-3300m）で調査を行った。農耕地帯と放牧地帯の境界の地として、また、7世紀には、唐と吐蕃の境界と定められた、日月山に近接する地でもある。市街および近郊部に居住する、60歳以上の住民401人と60歳未満の数人を対象に施行した。漢族（248人）、藏族（97人）、蒙古族（49人）、その他が受診した。検診場所は、海晏県人民病院に於いて行った。また、藏族の放牧民の居住地である甘子江村と、漢族の農耕民の居住地であるジンタンシャ村の検診受診者に対し、家庭訪問を行ない、ライフヒストリー、生活状態、老人知に関する、聞き取り調査を施行した。また、周辺の草地と牧畜、農耕技術に関する生態・文化調査を行った。医学指標（ヘモグロビン、糖尿病、高血圧、肺心病、膝関節痛、酸化ストレス度）と高齢者包括機能（特にQOL）と食品摂取状況の民族間比較を中心に、解析の概要を下記に示す。2万年～6千年前より、チベット高地に居住し始めた可能性のあるチベット人に対し、2000年前より居住してきた歴史を持つ、漢族の高地住民の低酸素適応と生活習慣病の現れ方の違いが、次のように、明らかになった。漢族がチベット人に比較して、低酸素に対するヘモグロビン高値者が高率で、高血圧も多く、肺心病（慢性気管支炎や肺気腫が原因で、右心高血圧や心不全を来す疾患）と潜在的な慢性高山病（ヘモグロビン20g/dl以上で、肺心病以外）が高かった。糖尿病の頻度については、漢族とチベット人の双方でまだ低く、今後の予防手段を講じる意義が大きいと考えられた。職業別には、公務員 50.0%、農業 8.6%、牧畜 3.8%であり、公務員での増加が非常に問題であることが判明した。一方、酸化ストレスは、チベット人が漢族より高かった。また、文化的に異なる漢族とチベット人において、主観的な経済満足度と幸福感は、藏族が漢族より、高値を示した。生活の上で、最も重視することは何かという、価値観を問うと、漢族は、健康、家族、経済の順に、藏族は、健康、宗教、家族の順に重視した。

アルナーチャル：

インドのアルナーチャル・プラデシュ州で行われた農具と農業体系の調査を、インドのアッサム州、中国のチベット自治区、ネパールの事例と比較され、農業技術の変容について鳥瞰的な整理が試みられた（安藤 2008）。またインド東北部での現地調査と文献調査をもとに、チベット文化地域における土壌浸食などの自然災害問題が概観された（宮本 2008）。現在、アルナーチャル州のラジブガンディ大学と長期滞在を含めた交渉を含めた研究を遂行中である。

来年度以降への課題：

ラダック：

今後は、Domkhar村でも本調査を行い、さらに村から都会に出て行った住民を追跡することにより、生活様式の変化と生活習慣病の関係を追求していく予定である。また、土地利用と灌漑水利体系と他地域との交易路と、その地帯化を進めている。現在、2003年7月4日に撮影されたDomkhar村のQuick Bird衛星画像を入手し、これを分析中である。医学的な調査を、河川域の上流村と中流村で行い、中流村における肥満や高血圧の増加、僧侶の肥満と糖尿病の増加などを認め、道路開通に伴う中村のライフスタイルの変化の影響の解明が今後の課題の一つである。

青海省：

職業と糖尿病の関連を探る他、チベット人において酸化ストレスが高かった原因を、低酸素適応、牧畜と農業という生業の違いや、食事調査などから探っていく。今後も、医学班と文化班や生態班との連携により、ヒマラヤ・チベット高地における住民生活と生老病死の関係を詳細に分析する予定である。

アルナーチャル：

看護学、植物民族学を専門とする者の長期滞在を派遣し、さらに高齢者の健診を行う予定である。

著書（執筆等）

【単著・共著】

- ・ ツルティム・ケサン, 櫻井智浩 2009年03月 ツオンカパ 中観哲学の研究VI タルマリンチェン著「入菩薩行論の釈論・仏子彼岸」第八章・第九章の和訳研究. 総合地球環境学研究所, 京都市北区, 401pp.

【分担執筆】

- ・ OKUYAMA Naoji Mar, 2009 The Tibet Fever among Japanese Buddhists of the Meiji Era. The Image of Tibet and the 19th & 20th centuries. A franco-english thematic volume of the EFEO, Vol.1. 極東出版, フランス・パリ, pp. 202-222.
- ・ 斎藤清明、篠原徹 2008年11月 伊井春樹国文学研究資料館館長は語る 人間文化研究機構の意義. 篠原徹編 論壇・人間文化 3. 大学共同利用機関法人人間文化研究機構, 東京都港区, pp. 186-198.
- ・ 竹田晋也 2008年06月 「森林」「林業」「ミャンマー 自然」. 桃木至朗・小川英文・クリスチャン ダニエルス・深見純生・福岡まどか・見市建・柳澤雅之・吉村真子・渡辺佳成編 新版 東南アジアを知る事典. 平凡社, 東京, pp. 215-217. 483-484. 597-598.
- ・ 奥宮清人、石根昌幸、翠川裕、岩佐光広、松林公蔵. 2008年05月 第3章 生活と疾病—疾病転換と健康観の変化. 秋道智彌編 論集 モンスーンアジアの生態史—地域と地球をつなぐ— 第3巻 暮らしと身体の生態史. 弘文堂, 東京都千代田区, pp. 47-64.
- ・ 河野泰之・加藤 真・百村帝彦 2008年05月 東南アジア大陸部の雨緑樹林と農の生態. 秋道智彌監修・河野泰之責任編集編 生業の生態史. 論集・モンスーンアジアの生態史, 第一巻. 弘文堂, 東京都, pp. 9-27.
- ・ 稲村哲也 2008年05月 地震と文明 現代に蘇る古代アンデスの叢智. 地球史研究会編 地図で読む人類・激動の10万年史. 宝島社, 東京都千代田区, pp. 27-29.
- ・ 水野一晴 2008年04月 中南部アフリカの自然特性. 池谷和信・武内進一・佐藤廉也編 朝倉世界地理講座—大地と人間の物語— 12. アフリカII. 朝倉書店, pp. 439-451.
- ・ 加藤真 2008年04月 花と昆虫にみる共進化. 石川良輔編 節足動物の多様性と系統. 裳華房, pp. 71-78.
- ・ 竹田晋也 2008年04月 メコン跨境流域の森林産物—ラーオの森のラックとチーク—. 秋道智彌・市川昌広編 東南アジアの森に何が起きているか—熱帯雨林とモンスーン林からの報告. 人文書院, 京都, pp. 67-89.
- ・ 竹田晋也 2008年04月 非木材林産物と焼畑. 横山智・落合雪野編 ラオス農山村地域研究. めこん, 東京, pp. 267-299.

【翻訳・共訳】

- ・ ツルティム・ケサン Mar, 2009 チベット語訳・妙法蓮華経. 日藏仏教文化叢書, XI. 西蔵仏教文化協会, 京都市左京区, 557pp. (その他) Translation of . . .

論文

【原著】

- Kimura Y, Wada T, Ishine M, Ishimoto Y, Kasahara Y, Hirosaki M, Konno A, Nakatsuka M, Sakamoto R, Okumiya K, Otsuka K, Matsubayashi K. Mar,2009 Community-dwelling elderly with chewing difficulties are more disabled, depressed and have lower quality of life scores. *Geriatr Gerontol Int* 9(1) :102-104. (査読付) .
- 本江昭夫 2009年03月 家畜とは何か. 山本紀夫編 ドメスティケーション-その民族生物学的研究-. 国立民族学博物館調査報告, 84. 国立民族学博物館, 吹田市, pp. 97-118.
- 藤倉雄司、本江昭夫、山本紀夫 2009年03月 キヌアは栽培植物か?-アンデス産雑穀の栽培化に関する一試論-. 山本紀夫編 ドメスティケーション-その民族生物学的研究-. 国立民族学博物館調査報告, 84. 国立民族学博物館, 吹田市,
- 山本紀夫 2009年03月 ドメスティケーションと土着宗教-アンデスの場合-. 山本紀夫編 ドメスティケーション-その民族生物学的研究-. 国立民族学博物館調査報告, 84. 国立民族学博物館, 吹田市,
- 宮本 真二・内田 晴夫・安藤 和雄・ムハマッド・セリム 2009年03月 洪水の環境史-バングラデシュ中央部, ジャムナ川中流域における地形環境変遷と屋敷地の形成過程-. 京都歴史災害研究 (10) :27-34.
- Sawamura, M. A. Kawakita and M. Kato. Mar,2009 Fern-spore-feeder interaction in temperate forests in Japan: Sporing phenology and spore-feeding insect community. *American Journal of Botany* 96 :594-604. (査読付) .
- 稲村哲也 2009年03月 アンデスからの家畜化・牧畜成立論-西アジア考古学の成果をふまえて-. 山本紀夫編 ドメスティケーション-その民族生物学的研究-. 国立民族学博物館調査報告, 84. 国立民族学博物館, 吹田市,
- 大山修一、本江昭夫、山本紀夫 2009年03月 ジャガイモの栽培化-ラクダ科動物との関係から考える-. 山本紀夫編 ドメスティケーション-その民族生物学的研究-. 国立民族学博物館調査報告, 84. 国立民族学博物館, 吹田市,
- 重田眞義 2009年03月 ヒト-植物関係としてのドメスティケーション. 山本紀夫編 ドメスティケーション-その民族生物学的研究-. 国立民族学博物館調査報告, 84. 国立民族学博物館, 吹田市, pp. 71-96.
- 川本芳 2009年03月 アンデス高地で利用されるラクダ科家畜の遺伝的特徴と家畜化をめぐる問題、ドメスティケーション-その民族生物学的研究-. 国立民族学博物館調査報告 (84) :307-331.
- Ishimoto Y, Wada T, Hirosaki M, Kasahara Y, Kimura Y, Konno A, Nakatsuka M, Ishine M, Okumiya K, Fujisawa M, Otsuka K, Matsubayashi K. Feb,2009 Health-related differences between participants and nonparticipants in community-based geriatric examinations. *J Am Geriatr Soc* 57(2) :360-362. (査読付) .
- Kawakita, A. and M. Kato. Feb,2009 Repeated independent evolution of obligate pollination mutualism in the Phyllanthaceae-Epichephala association. *Proceedings of the Royal Society B* 276 :417-426. (査読付) .
- 奥山直司 2009年02月 「モシャラフ・ホセイン著『ジャガッダラで発見された五祠堂型寺院の最古の遺構』」 翻訳・解説. 高野山大学密教文化研究所紀要 22 :19-28. (査読付) .
- 大塚邦明, Tsering Norboo, 大塚敬子、津越智子、上田裕子、林航、石川元直、堀田典寛、奥宮清人 2009年01月 生活環境の違いと血管機能：高知地域住民のCAVI. 折茂肇、斎藤康編 新しい動脈硬化指標CAVIのすべて-基礎から臨床応用まで-. 日経メディカル開発, 東京都港区, pp. 60-72.
- 石根昌幸、奥宮清人、斉藤清明、笠原順子、松林公蔵. 2008年12月 中国雲南省の高所低所および日本の地域在住高齢者における総合機能評価. *登山医学 Japanese Journal of Mountain Medicine* 28 :27-33. (査読付) .
- Okamoto T, Kawakita A, Kato M. Nov,2008 Floral adaptations to nocturnal moth pollination in *Diplomorpha* (Thymelaeaceae). *Plant Species Biology* 23 :192-201. (査読付) .
- Kato, M. Y. Kosaka, A. Kawakita, Y. Okuyama, C. Kobayashi, T. Phimminith and D. Thongphan. Oct,2008 Plant-pollinator interactions in tropical monsoon forests in Southeast Asia. *American Journal of Botany* 95 :1375-1394. (査読付) .
- Wada T, Ishine M, Ishimoto Y, Hirosaki M, Kimura Y, Kasahara Y, Okumiya K, Nishinaga M, Otsuka K, Matsubayashi K. Aug,2008 Community-dwelling elderly fallers in Japan are older, more disabled, and more depressed than nonfallers. *J Am Geriatr Soc* 56(8) :1570-1571. (査読付) .
- Okumiya K, Ishine M, Wada T, Fujisawa M, Pongvongsa T, Siengsounthone L, Xyavong X, Boupba B,

- Matsubayashi K. Aug, 2008 Improvement in obesity and glucose tolerance in elderly people after lifestyle changes 1 year after an oral glucose tolerance test in a rural area in Lao People's Democratic Republic. *J Am Geriatr Soc* 56(8) :1582-1583. (査読付) .
- Ishine M, Okumiya K, Kimura Y, Kasahara Y, Wada T, Yamanaka G, Hotta N, Otsuka K, Murakami S, Matsubayashi K. Aug, 2008 Subjective sleep disturbances were closely associated with comprehensive geriatric functions in dose-responsive manner in the community-dwelling elderly people in Japan. *J Am Geriatr Soc* 56(8) :1571-1573. (査読付) .
 - Aoki K, M. Kato and N. Murakami Jul, 2008 Glacial bottleneck and postglacial recolonization of a seed parasitic weevil, *Curculio hilgendorfi*, inferred from mitochondrial DNA variation. *Molecular Ecology* 17(14) :3276-3289. (査読付) .
 - Okumiya K, Ishine M, Wada T, Fujisawa M, Otsuka K, Matsubayashi K. Apr, 2008 Lifestyle changes after oral glucose tolerance test improve glucose intolerance in community-dwelling elderly people after 1 year. *J Am Geriatr Soc* 56(4) :767-769. (査読付) .
 - 稲村哲也 2008年04月 生物・文化多様性とその世代間継承—アンデスにおけるインカの知の復活に学ぶ— . 共生の文化研究 *Journal of Cultural Symbiosis Research* 1 :164-171. (査読付) .
 - Yatagai A, Xie P, Alpert P. 2008 Development of a daily gridded precipitation data set for the Middle East. *Advance in Geosci.* (12) :165-170. (査読付) .
 - 松林公蔵, 赤松功博, 和田泰三, 石根晶幸, 坂上悌二, 奥宮清人, 竹田晋也, 安藤和雄, U Soe Mynt, Saw Khin Gyi, Daw Ni Ni Khin, Sr Mary Andrew 2008年 福祉老人ホーム入居高齢者の日常生活機能、うつとQOL—ミャンマーの宗教系ホームと日本の養護老人ホームにおける比較検討. *東南アジア研究* 45(3) :480-494. (査読付) .
 - 水野一晴 2008年 伝統的交易・イスラーム都市ザンジバルと植民地体制下に建設された都市ナイロビ. *都市地理学* 3 :33-40. (査読付) .
 - Kameda Y, Kato M. 2008 Systematic revision of the subgenus *Luchuhadra* (Pulmonata: Camaenidae: Satsuma) occurring in the central Ryukyu Archipelago. *Venus* 65 :291-297. (査読付) .
 - Suetsugu K, Kawakita A, Kato M. 2008 Host range and selectivity of the hemiparasitic plant *Thesium chinense* (Santalaceae). *Annals of Botany* 102 :49-56. (査読付) .
 - 松林公蔵 2008年 高知県香北町研究—老年医学的総合機能評価. *日老医誌* 45 :166-168. (査読付) .

【総説】

- 奥山直司 2009年03月 河口慧海の歩いた道—ヒマラヤ・チベット・日本—. *フォーラム 塚学* 15 :69-111.
- 鈴木玲治, 竹田晋也 2009年03月 焼畑耕作がミャンマー・バゴー山地カレン村落周辺の森林植生の長期的変化に与える影響. *G-COEワーキングペーパー* (52).
- 松林公蔵 2008年11月 アジア高齢化の動向と諸問題 Update 2008. *日本老年医学会雑誌* 45(6) :573-578.
- 河合明宣 2008年11月 世界市場におけるインド東部産ジュート(黄麻)産業盛衰の長期的考察—小農・仲買商・製麻工業資本—. *放送大学研究年報* (26) :77-92.
- 加藤真 2008年06月 雨緑樹林文化への誘い. *エコソフィア* (20) :22-29.
- 井谷原一, 松沢哲郎, 松林公蔵, 山極寿一 2008年06月 霊長類学60周年にあたって(上)—フィールドワーク60年の伝統. *科学* 78(6) :635-642.
- 稲村哲也 2008年04月 なぜ文化人類学?なぜ共生?. 共生の文化研究 *Journal of Cultural Symbiosis Research* 1 :38-51.
- 稲村哲也 2008年04月 フジモリ大統領と日系社会. 共生の文化研究 *Journal of Cultural Symbiosis Research* 1 :70-80.

その他の出版物

【解説】

- 安藤和雄 2008年06月 日本の地域おこしと熱帯の農村開発の相互啓発の試み—JICA農村開発研修の事例報告— . 第18回日本熱帯生態学会年次大会講演要旨集 :80.

【その他の著作(商業誌)】

- ・小林尚礼 2009年03月 「茶馬古道を探る－世界遺産「三江併流」の山旅－ 連載第3回 雨の国の人々」. 山と溪谷 (887) :235-239.
- ・小林尚礼 2009年02月 「茶馬古道を探る－世界遺産「三江併流」の山旅－ 連載第2回 雨降る山へ」. 山と溪谷 (886) :228-231.
- ・小林尚礼 2009年01月 「茶馬古道を探る－世界遺産「三江併流」の山旅－ 連載第1回 旅の始まり」. 山と溪谷 (885) :270-273.

会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・小林尚礼 「茶馬古道 その真の道筋を追う」. 横断山脈研究会, 2009年03月29日, 東京都. (本人発表).
- ・宮本真二 ナミブ砂漠, クイセブ川中流域に分布する河成堆積物の層相と堆積環境. 2009年日本地理学会春季学術大会, 2009年03月28日-2009年03月29日, 東京都八王子市. (本人発表).
- ・水野一晴 ナミブ沙漠の季節河川, クイセブ川流域の環境変化と植生遷移. 日本地理学会春季学術大会, 2009年03月28日-2009年03月30日, 東京都八王子市. (本人発表).
- ・小林尚礼 「『梅里雪山 十七人の友を探して』その後、そして今」. 日本山岳会・図書委員会, 2009年03月25日, 東京都千代田区. (本人発表).
- ・Sato T, Wada T. How to assess the sustainability of our humanosphere? -Towards the development of humanosphere index -. GCOE The Second International conference "Biosphere as a Global Force of Change", Mar 09, 2009-Mar 11, 2009, 京都市. (本人発表).
- ・鈴木玲治 長期休閑型の焼畑移動耕作が森林植生の長期的変化に与える影響－ミャンマー・バゴ山地のカレン集落の事例－. 東南アジア学会関西支部, 2009年01月31日, 京都市左京区. (本人発表).
- ・小林尚礼 「チベットの山の魅力」. 国際交流基金・異文化理解講座, 2009年01月30日, 東京都港区. (本人発表).
- ・宮本 真二・安藤 和雄・モハメッド・セリム バングラデシュ中央部, ジャムナ川中流域における先史時代以降の地形環境変遷と屋敷地の形成過程. 気象災害軽減など人間活動の持続可能性に関する研究集会－南アジア地域を中心として－, 2009年01月29日-2009年01月30日, 京都府宇治市. (本人発表).
- ・小林尚礼 「三江並流地域の山と暮らし」. 民族自然誌研究会, 2009年01月24日, 京都市左京区. (本人発表).
- ・鈴木玲治 ミャンマー・カレンの営む焼畑土地利用の履歴と森林植生の長期的変化. GCOEシンポジウム「生存を支える『地域/社会』の再編成」, 2009年01月24日, 滋賀県大津市. (本人発表).
- ・Yatagai, A., K. Okumiya, R. Sakamoto and S. Jorgyes Meteorological Observation including UV launched in Ladakh, the westernmost part of the Tibetan Plateau. American Meteorological Society, 90th Annual Meeting, Jan 17, 2009-Jan 21, 2009, Atlanta, USA. (本人発表).
- ・Shinji MIYAMOTO and Kazuo ANDO Buried Humus Soil Layers and Land Development in Central and Eastern Himalayas. International Workshop in North East INDIA. Agricultural Ecosystem and Sustainable Development in Brahmaputra Basin, Dec 19, 2008-Dec 20, 2008, Guwahati University, Assam. (本人発表).
- ・Yatagai, A. A quantitative estimate of orographical precipitation over Himalayas by TRMM/PR and dense rain-gauge network. SPIE, Nov 17, 2008-Nov 21, 2008, New Caledonia. (本人発表).
- ・和田泰三 有料老人ホーム在住高齢者におけるEnd of life careの意向. 日本老年医学会近畿地方会, 2008年11月15日, 京都市. (本人発表).
- ・広崎真弓、奥宮清人、松林公蔵等 地域在住高齢者における笑いの頻度に関する要因. 日本老年医学会近畿地方会, 2008年11月15日, 京都市. (本人発表).
- ・木村友美、奥宮清人、大塚邦明、松林公蔵等 高齢者の孤食とQOL, ADL抑うつとの関連. 日本老年医学会近畿地方会, 2008年11月15日, 京都市. (本人発表).
- ・石本恭子、奥宮清人、大塚邦明、松林公蔵等 地域在住高齢者の運動習慣とADL, QOLの関連. 日本老年医学会近畿地方会, 2008年11月15日, 京都市. (本人発表).
- ・今野亜希子、奥宮清人、大塚邦明、松林公蔵等 地域在住の75歳以上の後期高齢者における超音波法骨密度値の意

義. 日本老年医学会近畿地方会, 2008年11月15日, 京都市. (本人発表).

- 松林公蔵 高所医学からフィールド医学へ. パイオニアワークとしての登山・探検・フィールドサイエンスーチョゴリザ登頂50周年記念シンポジウム, 2008年11月03日, 京都市. (本人発表).
- Fumikazu Ubukata The "Scaling-up" Attempts of Community Forest Management: Two Contrasting Cases in Yasothon Province, NorthEast Thailand. International Symposium Forest Stewardship and Community Empowerment, Oct 11, 2008-Oct 12, 2008, 京都市. (本人発表).
- 小野映介・宮本真二 平安時代前半に生じた越後平野中部の地形環境変化. 2008年度日本地理学会秋季学術大会, 2008年10月04日-2008年10月06日, 岩手県盛岡市.
- 里口保文・小松原 琢・宮本真二 湖岸ポーリングコアからみた琵琶湖における3万年前以降の水位変動. 日本第四紀学会, 2008年08月22日-2008年08月26日, 東京都文京区.
- Mizuno, K. Environmental change and vegetation succession along the Kuiseb River in the Namib. 31 International Geographical Congress, Aug 12, 2008-Aug 15, 2008, Tunis, Tunisia. (本人発表).
- Shinji Miyamoto The Late Pleistocene Sedimentary Environment of the "Homeb Silts" Deposit, along the middle Kuiseb River in the Namib Desert, Namibia. 31st Congress International Geography in Tunis, Aug 12, 2008-Aug 15, 2008, TUNISIE. (本人発表).
- Yatagai, A. The Isotopic Composition of Water Vapor and the Concurrent Meteorological Condition over the Northern Part of the Tibetan Plateau. AMS Mountain Meteorology, Aug 11, 2008-Aug 15, 2008, Vancouver, Canada. (本人発表).
- 小林尚礼 三江併流徒歩横断の旅. 雲南懇話会, 2008年06月28日, 東京都新宿区. (本人発表).
- 佐藤孝宏 和田泰三 地域サステナビリティ指数の作成にむけて. GC0E イニシアティブ1 研究会, 2008年06月23日, 京都. (本人発表).
- 鈴木玲治, 竹田晋也 フラマウンテン「ミャンマー・バゴ山」のチーク皆伐跡地におけるタウンヤ造林間作期の立地環境と参加農民の土地選択. 日本熱帯生態学会, 2008年06月20日-2008年06月22日, 東京都(東京大学). (本人発表).
- 和田泰三 地域在住高齢者の転倒歴・転倒スコアとうつ傾向との関連. 日本老年医学会総会, 2008年06月19日-2008年06月21日, 千葉市. (本人発表).
- 石根昌幸, 木村友美, 石本恭子, 和田泰三, 奥宮清人, 堀田典寛, 山中学, 大塚邦明, 西永正典, 松林公蔵 日本地域在住高齢者における味覚・嗅覚障害とADL, QOLに与える影響. 日本老年医学会総会, 2008年06月19日-2008年06月21日, 千葉市. (本人発表).
- 高杉絵美, 大塚邦明等 高齢者地域住民のCGAにおけるSpO2変動の有用性. 日本老年医学会総会, 2008年06月19日-2008年06月21日, 千葉市. (本人発表).
- 石本恭子, 笠原順子, 木村友美, 石根昌幸, 和田泰三, 奥宮清人, 大塚邦明, 松林公蔵 高齢者検診における検診受診回数とADL, QOLに関する検討. 日本老年医学会総会, 2008年06月19日-2008年06月21日, 千葉市. (本人発表).
- 石根昌幸, 青山薫, 木村友美, 笠原順子, 石本恭子, 和田泰三, 奥宮清人, 松林公蔵 都市部ケア付き高齢者住宅居住高齢者の糖尿病の頻度とその取り組み. 日本老年医学会総会, 2008年06月19日-2008年06月21日, 千葉市. (本人発表).
- 堀田典寛, 奥宮清人, 松林公蔵, 大塚邦明等 高齢者の肺機能と認知機能の相関. 日本老年医学会総会, 2008年06月19日-2008年06月21日, 千葉市. (本人発表).
- 木村友美, 奥宮清人, 大塚邦明, 松林公蔵等 固いものが食べにくくなった高齢者の頻度とQOL, ADL抑うつとの関連. 日本老年医学会総会, 2008年06月19日-2008年06月21日, 千葉市. (本人発表).
- 石根昌幸, 木村友美, 石本恭子, 和田泰三, 奥宮清人, 堀田典寛, 山中学, 大塚邦明, 西永正典, 松林公蔵 日本地域在住高齢者における睡眠障害とADL, QOLとの関連. 日本老年医学会総会, 2008年06月19日-2008年06月21日, 千葉市. (本人発表).
- 川崎孝広, 奥宮清人, 松林公蔵, 大塚邦明等 標高3500mの高所における化学受容器感受性と加齢. 日本老年医学会総会, 2008年06月19日-2008年06月21日, . (本人発表).

- ・堀田典寛、大塚邦明、奥宮清人、松林公蔵等 高齢者の中心血圧は血糖値に影響されるか. 日本老年医学会総会, 2008年06月19日-2008年06月21日, 千葉市. (本人発表).
- ・水野一晴 ナミブ砂漠における樹木の生育過程と自然環境. 第45回日本アフリカ学会学術大会, 2008年05月24日-2008年05月25日, 京都市伏見区. (本人発表).
- ・Ayako Sasaki Transformation of 'Miang-tea' Agroforestry System in Mountainous Area of Northern Thailand. International Conference ATBC Kuching "Towards sustainable land-use in tropical Asia", Apr 23, 2008-Apr 26, 2008, Kuching Malaysia. (本人発表).
- ・Miyamoto, S. and Ando, K. Buried Humus Soil Layers and Land Development in Central and Eastern Himalayas. International Workshop in North East INDIA "Agricultural Ecosystem and Sustainable Development in Brahmaputra Basin", 2008年12月19日-2008年12月20日, Guwahati University, Assam, India. (本人発表).
- ・宮本真二, 安藤和雄 アッサム・ヒマラヤにおける土地開発の歴史的検討. 2008年度人文地理学会大会, 2008年11月08日-2008年11月10日, 筑波大学(つくば市). (本人発表).
- ・奥宮清人 フィールド医学から地球環境学へ-老人知に着目して-. 地球研所内ゼミナール、多様性領域プログラム, 2008年06月24日, 京都. (本人発表).
- ・奥宮清人 ブドウ糖負荷試験後のライフスタイル変化による、地域在住高齢者の耐糖能異常の改善. 第50回日本老年医学会学術集会, 2008年06月19日-2008年06月21日, 千葉県千葉市. (本人発表).
- ・Kiyohito Okumiya. Disease and aging in high-altitude environments. International Symposium on Environment Change, Pathogens, and Human Linkages (Kawabata Project in RIHN), Jun 11, 2008-Jun 12, 2008, Kyoto. (本人発表).
- ・石根昌幸、奥宮清人、斉藤清明、笠原順子、松林公蔵. 中国雲南省の高所低所および日本の地域在住高齢者における総合機能評価. 第27回日本登山医学会学術集会, 2008年05月31日-2008年06月01日, 富山県黒部市. (本人発表).
- ・宮本真二 ナミブ砂漠, クイセブ川中流域における堆積環境の変遷. 日本アフリカ学会第45回学術大会, 2008年05月24日-2008年05月25日, 龍谷大学(京都市伏見区). (本人発表).
- ・奥宮清人、門司和彦. 地球環境の変化と健康一人々のライフスタイルを変えるには. 第26回地球研市民セミナー, 2008年05月16日, 京都市. (本人発表).

【ポスター発表】

- ・水野一晴 インド, アルナチャル・プラデシュ州(アッサム・ヒマラヤ), デイランゾーン地方における自然環境と人間活動について. 2009年日本地理学会春季学術大会, 2009年03月28日-2009年03月29日, 東京都(帝京大学). (本人発表).
- ・Kiyohito Okumiya The association of erythrocytosis with life-style related diseases and chronic respiratory diseases in high-altitude elderly people. 1st Congress of Asia-Pacific Society for Mountain Medicine, Nov 28, 2008-Nov 30, 2008, Delhi, India. (本人発表).
- ・安藤和雄 日本の地域おこしと熱帯の農村開発の相互啓発の試み-JICA農村開発研修の事例報告-. 第18回日本熱帯生態学会年次大会, 2008年06月21日, 東京大学弥生キャンパス.

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- ・水野一晴 アフリカの自然環境と人々の生活. 資生堂, 2008年11月14日, 神奈川県横浜市.
- ・佐々木綾子 発酵茶文化の地域固有性を考える-タイ北部ミアン生産からのヒント-. 第17回お茶料理研究会, 2008年07月05日, 東京都千代田区.
- ・佐々木綾子 タイ北部発酵食用茶「ミアン」-伝統的茶栽培村の変容 / 発酵茶文化の系譜-. 第9回雲南懇話会, 2008年06月28日, 東京都板橋区.
- ・安藤和雄 社会連携・実践型地域研究にたくす可能性. 生存基盤科学研究ユニット・サイト型機動研究「京滋フィールドステーション研究討論会」, 2008年06月24日, 生存基盤科学研究ユニット・滋賀サイト・守山フィールド・ステーション(滋賀県守山市).
- ・安藤和雄 在地の学び方」の紹介. コスモサイエンスコース特別授業「フィールド・ワークによる地域研究への招待」, 2008年06月10日, 愛知県立瑞陵高等学校.

- ・安藤和雄 バングラデシュの村人に学ぶー実践から研究へ、研究から実践へー。平成20年度 瑞陵進路セミナー，2008年06月10日，愛知県立瑞陵高等学校。
- ・水野一晴 地球温暖化とアフリカの自然ー消えゆく氷河と山をのぼる植物・枯れゆく樹木。芦屋市公民館講座「Stop the 環境崩壊ー洞爺湖サミットについて，2008年05月26日，兵庫県芦屋市。

調査研究活動

【国内調査】

- ・老人ホームにおける高齢者ケアの実態調査。タイ・バンコク，2008年10月29日-2008年10月31日。
- ・地域在住高齢者の終末期医療に関する意識調査。タイ・コンケン，2008年10月25日-2008年10月28日。
- ・高知県土佐町在住高齢者の健康と包括的機能調査に関する縦断的コホート調査。高知県土佐町，2008年08月04日-2008年08月08日。
- ・有料老人ホーム入居高齢者の総合的機能評価。京都市，2008年06月25日。

【海外調査】

- ・高所住民の牧畜と災害に関する調査。インド、ラダック，2009年03月18日-2009年03月30日。
- ・高所森林生態に関する調査。インド、アルナーチャル，2009年03月13日-2009年03月25日。
- ・高所の在地農業に関する調査。インド、アルナーチャル，2009年03月13日-2009年03月25日。
- ・高所古環境に関する調査。インド、アルナーチャル，2009年03月13日-2009年03月23日。
- ・高所住民のチベット仏教に関する調査。インド、アルナーチャル，2009年03月13日-2009年03月23日。
- ・高所の生業経験と統治機構変化に関する比較調査。東ブータン、インド、アルナーチャル，2009年03月10日-2009年03月21日。
- ・高所森林生態に関する調査。インド、ラダック，2009年03月09日-2009年03月25日。
- ・高所住民の食生活に関する調査。インド、ラダック，2009年03月08日-2009年03月25日。
- ・高所生物多様性に関する調査。インド、アルナーチャル，2009年03月04日-2009年03月15日。
- ・高所牧畜における、ヤクと牛（ミタン）の移牧調査と、ネパール高所住民の標高利用の調査。東ブータン、インド、アルナーチャル。ネパール，2009年02月28日-2009年03月19日。
- ・ラダックとチベット、カシミール、中央アジアとの交易史に関する調査。中国、新疆ウイグル自治区，2009年02月27日-2009年03月09日。
- ・酸化ストレス、NOに関する現地資料の分析。中国青海省 青海大学，2009年02月03日-2009年02月10日。
- ・高所住民の健康と包括的機能調査に関する予備調査。インド、ラダック，2008年12月25日-2009年01月05日。
- ・高所森林生態に関する調査。インド、ラダック，2008年12月25日-2009年01月05日。
- ・高所村落の人口悉皆調査、社会組織、土地所有、牧畜に関する聞き取り調査。インド、ラダック，2008年12月24日-2009年01月13日。
- ・高所の在地農業に関する調査。インド、アルナーチャル，2008年12月21日-2008年12月25日。
- ・高所古環境に関する調査。インド、アルナーチャル，2008年12月17日-2008年12月26日。
- ・高所高齢者の健康と生活に関する現地長期滞在調査。インド、アルナーチャル，2008年12月14日-2009年03月29日。
- ・高所の土壌、植生調査。インド、アルナーチャル，2008年09月08日-2008年09月23日。
- ・高所高齢者の健康と生活に関する予備調査。インド、アルナーチャル，2008年08月25日-2008年09月30日。
- ・高所農耕牧畜民の生業に関する調査。インド、アルナーチャル，2008年08月25日-2008年09月30日。
- ・高所の在地農業に関する調査。インド、アルナーチャル，2008年08月25日-2008年09月06日。
- ・高齢者の健康と包括的機能調査に関する調査。中国青海省海晏県，2008年08月14日-2008年08月31日。
- ・高所牧畜民の生活に関する調査。中国青海省，2008年08月02日-2008年08月24日。
- ・高所住民の健康と包括的機能調査に関する予備調査。インド、ラダック，2008年07月24日-2008年08月03日。
- ・高所住民の世帯調査、土地利用調査。インド、ラダック，2008年07月24日-2008年08月03日。

- ・高所住民の健康と包括的機能調査に関する調査. インド、ラダック, 2008年07月04日-2008年07月13日.

社会活動・所外活動

【依頼講演】

- ・身体に刻み込まれた環境問題としての老い. 地球環境学講座「”食と健康”から地球環境問題を考える」, 2008年11月25日, 京都市.

【メディア出演など】

- ・番組『日曜あさいちばん』、コーナー「日曜訪問」（インタビュー「聖なる山に眠る友を探して」）. NHK, 2009年03月08日.
- ・「水曜ノンフィクション 関口宏モトをたどれば」「教科書が変わる？発見！謎のピラミッド群」（コメンテーター）. TBS, 2009年02月25日.
- ・隠れ糖尿病に対する高知県土佐町での取り組み 生活ホットモーニング. NHK, 2008年04月02日.

本研究**プロジェクト番号: D-04****プロジェクト名: 人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生****プロジェクトリーダー: 山村則男****プログラム/研究軸: 多様性領域プログラム****ホームページ: <http://www.chikyu.ac.jp/yamamura-pro/>****○研究目的と内容(2008年4月～2009年3月)****■研究目的**

本プロジェクトでは、生態系の劣化や崩壊のメカニズムを明らかにした上で、生態系の利用に伴う長期的・広域的な不安定性や不確実性を最小化し高い生物多様性と生態系機能を持つ、より健全な生態系への再生とその維持への道筋をつけることを目的とする。さらに、環境問題に共通する、人間社会と環境との関わりとその変化を抽出することにより、地球環境学に新しいアプローチを提案する。

対象調査地域としては、東南アジア熱帯林（マレーシア・サラワク）と中央アジア草原（モンゴル）を設定する。二つの対象調査地域において、野外調査および文献調査から現状の生態系ネットワーク構造とネットワークの変化を把握する。生態学調査ではサブシステム間の物質や生物の移動を介した相互作用に重点をおく。人間社会のネットワークについては、生態系の改変を引き起こす主体とその意図について、および、土地所有制度や地域社会形態の影響について調査を行う。これらの結果を参照し、両地域の生態系ネットワークを介した土地被覆の変化を予測するシミュレーションモデルを構築、複数のシナリオのもとでの将来予測とその評価を行なう。

■背景

現在、地球上のあらゆる生態系が人間活動の影響により縮小・劣化し、危機に瀕していることは、生物多様性および生態系機能の喪失という地球環境問題として広く認識されている。しかし、これまでの研究では生態系に対する人間活動の影響は、生物生息地の破壊、生物資源の乱獲など、直接的な影響だけが扱われ、間接効果やカスケード効果など、生態系ネットワークを介して引き起こされる長期的な生態系の崩壊や劣化は十分に扱われてこなかった。また、人間社会の構造（経済、政治、文化、社会的ネットワークの変化・広域化など）を視野にいたった研究はほとんどなされていない。

本研究は、現在ほとんど独立に研究が行われている生態学と社会経済学におけるネットワーク研究を統合することにより、どのような社会構造のもとでの人間活動がどのような生態系の改変を引き起こし、また、生態系の変化がどのような社会構造への影響を与えるのかを明らかにする。そして、生態系ネットワークをシステムの安定性、生態系サービス、生物多様性といった評価基準からみて望ましい方向へ導くための理論的基盤を確立することを目指す。

■地球環境問題の解決にどう資する研究なのか？

本研究は、個別の地域環境問題の解明と解決を目指すだけでなく、環境問題に共通する人間社会と環境との関わりとその変化をネットワーク理論の立場から抽出することにより、地球環境学に新しいアプローチを提案する。

○進捗状況(2008年4月～2009年3月)

2008年度は本研究の1年目であり、サラワクとモンゴルでの重点調査地域における観測・調査体制を確立し、衛星データや統計データの収集およびそれらのGIS化を行った。また、生態調査と社会調査を開始し、それらの調査に基づいた予測モデルの構築も始めた。

モデル化と両フィールドでの観測・調査の連動性はモンゴルにおいてより進んでいる。これは土地被覆自体が単純でモデル化がサラワクに比べ簡単であることが大きな要因だ。しかし、今年度の各班の取り組みによって、上記のようにモデル化するべき対象や問題の構造が明確になりつつあるため、2009年度はサラワクの数値モデル化に向けた作業を進める予定である。

いずれの地域においても、空間的な検証データを得ることのできる、バイオマスと粗い土地利用分類を用いて土地被覆・植生の状態のダイナミクスをモデル化する。また、生物多様性を土地利用・土地被覆の指標とする。

○共同研究者(所属・役職・研究分担事項)

◎ 山村 則男

(総合地球環境学研究所・教授・全体統括・理論モデル班代表・数理モデル)

理論モデル班

○ 石井 励一郎

(海洋研究開発機構・地球環境変動領域・物質循環研究プログラム・研究員・理論モデル班代表・シミュレーションモデル)

○ 大串 隆之

(京大大学生態学研究センター・教授・相互作用理論)

北川 和彦

(高知大学大学院総合人間自然科学研究科・大学院生・森林計測)

小林 秀樹

(海洋研究開発機構・地球環境変動領域・物質循環研究プログラム・研究員・シミュレーションモデル)

小林 豊

(フロリダ大学・生態系モデル)

近藤 倫生

(龍谷大学理工学部・講師・食物網解析)

西前 出

(京都大学大学院地球環境学地域資源計画論分野・助教・GIS解析)

鈴木 力英

(海洋研究開発機構・地球環境変動領域・物質循環研究プログラム・グループリーダー・主任研究員・リモートセンシング)

高田 壮則

(北海道大学大学院地球環境科学研究科・教授・理論生態学)

陀安 一郎

(京大大学生態学研究センター・准教授・同位体生態学)

Dennis Dye

(US Geological Survey, Southwest Geographic Science Team・Research Geographer・リモートセンシング)

中丸麻由子

(東京工業大学大学院社会理工学研究科・専任講師・社会モデル)

長谷川成明

(総合地球環境学研究所・プロジェクト上級研究員・シミュレーションモデル)

松岡 真如

(高知大学教育研究部自然科学系農学部門・准教授・リモートセンシング)

谷内 茂雄

(京大大学生態学研究センター・准教授・流域管理解析)

サラワク班

○ 酒井 章子

(総合地球環境学研究所・准教授・サラワク班代表・サラワク社会系統括)

○ 市川 昌広

(総合地球環境学研究所・准教授・サラワク生態系統括)

○ 中静 透

(東北大学大学院生命科学研究所・教授・シナリオ分析)

五十嵐秀一

(愛媛大学大学院農学研究科森林資源学専門教育コース森林修復再生研究室・大学院生・サラワク植物生態調査)

市栄 智明

(高知大農学部森林科学科・准教授・サラワク植物生理調査)

市岡 孝朗

(京都大学大学院地球環境学・准教授・サラワク昆虫調査)

市川 哲

(国立民族学博物館・機関研究員・サラワク華人社会調査)

井上 裕太

(愛媛大学大学院連合農学研究科(高知大学)・大学院生・サラワク樹木生理生態調査)

大沼あゆみ

(慶應義塾大学経済学部・教授・サラワク環境経済調査)

加藤 裕美

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・大学院生・サラワク生物資源調査)

金沢謙太郎

(神戸女学院大学人間科学部・准教授・サラワク生物資源調査)

鴨井 環

(愛媛大学大学院連合農学研究科生物資源生産学専攻・大学院生・サラワク鳥類調査)

岸本 圭子

(総合地球環境学研究所・研究員・サラワク昆虫調査)

小泉 都

(総合地球環境学研究所・研究員・サラワク生物資源調査)

坂口麻理

(高知大学大学院総合人間自然科学研究科・大学院生・サラワク樹木生理生態調査)

鮫島 弘光

(京大大学生態学研究センター・産学官連携研究員・サラワク生物資源調査)

嶋村 鉄也

(愛媛大学農学部・准教授・サラワク森林構造調査)

Johan B. Hj. Rahman

(Forest Research Center Sarawak・技官・サラワク現地調査)

祖田 亮次

(北海道大学大学院文学研究科・准教授・サラワク社会構造調査)

田中 壮太

(高知大学大学院黒潮圏海洋科学研究科・助教・サラワク生物資源調査)

Tarmiji bin Masron (Ph.D.)

(Section of Geography, School of Humanities, Universiti Sains Malaysia・Senior Lecturer・サラワク地理学・GIS)

Choy, Yee Keong

(総合地球環境学研究所・外国人研究員・サラワク社会構造調査)

塚本 次郎

(高知大学教育研究部自然科学系農学部門・教授・サラワク森林土壌動物調査)

徳本 雄史

(名古屋大学農学部資源生物環境学科森林生態生理研究分野・大学院生・サラワク森林生態調査)

内藤 大輔

(京都大学地域研究統合情報センター・研究員・サラワク環境社会学)

直江 将司

(京大大学生態学研究センター・大学院生・サラワク森林生態調査)

中川弥智子

(名古屋大学農学部・准教授・サラワクほ乳類調査)

永益 英敏

(京都大学総合博物館・准教授・サラワク植物分類学)

畑田 彩

(京都外国語大学・専任講師・サラワク環境学調査)

- 原田 裕人 (高知大学大学院総合人間自然科学研究科・大学院生・サラワク土壌調査)
 半田 千尋 (京都大学大学院人間・環境学研究科・大学院生・サラワク昆虫調査)
 兵藤不二夫 (岡山大学 新技術研究センター 異分野融合先端研究コア・特任助教)
 藤田 渡 (甲南女子大学文学部多文化共生学科・専任講師・サラワク社会構造調査)
 松本 崇 (京都大学大学院人間・環境学研究科・研修員・サラワク昆虫調査)
 Mohd Effendi Bin Wasli (高知大学大学院黒潮圏海洋科学研究科・大学院生・サラワク土壌調査)
 Mohammed Mahabubur Rahman (高知大学大学院農学研究科・大学院生・サラワク森林生態調査)
 森下 明子 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科(大阪外大)・学振特別研究員(非常勤講師)・サラワク政治学調査)
 山下 聡 (京都大学地球環境学堂・研究員・サラワク菌類調査)
 米山 仰 (愛媛大学大学院連合農学研究科(高知大学)・大学院生・サラワク樹木生理生態調査)

モンゴル班

- 藤田 昇 (京大大学生態学研究センター・助教・モンゴル班代表・モンゴル生態系統括)
 ○前川 愛 (総合地球環境学研究所・研究員・モンゴル社会系統括)
 音田 高志 (岡山大学大学院環境学研究科・大学院生・モンゴル土地被覆解析)
 鬼木 俊次 (国際農林水産業研究センター・主任研究員・モンゴル農業経済調査)
 上村 明 (東京外国語大学・非常勤講師・モンゴル遊牧社会調査)
 幸田 良介 (京大大学生態学研究センター・大学院生・モンゴル生物資源調査)
 小長谷有紀 (国立民族学博物館研究戦略センター・教授・モンゴル遊牧社会調査)
 近藤 順治 (岡山大学環境学研究科・大学院生・モンゴル土地被覆解析)
 佐藤 隆 (筑波大学大学院生命環境科学研究科 地球環境科学専攻杉田研究室・大学院生・モンゴル水循環解析)
 杉田 倫明 (筑波大学生命環境科学研究科・教授・モンゴル水循環解析)
 田村 憲司 (筑波大学大学院生命環境科学研究科・准教授・モンゴル土壌調査)
 ナチンションホル (国立民族学博物館研究戦略センター・外来研究員・植生調査解析)
 廣部 宗 (岡山大学環境学研究科・准教授・モンゴル物質循環)
 森 真一 (アイエムジー・代表取締役・モンゴル地域経済調査)
 吉澤 新太郎 (筑波大学大学院生命環境科学研究科地球環境科学専攻杉田研究室・大学院生・モンゴル水循環解析)

○当初の計画

■当初の計画からの変更点

生態系ネットワークの変遷を明らかにする期間について、当初の予定では過去100年を考えていたが、研究費の上限、資料収集の困難さおよび今後の変化を検討する上での重要性の観点から、主に過去30年を対象とすることにした。

○これまでの研究成果と今後の課題

■本年度に挙げ得た成果

【理論モデル班】

- (a) 衛星データと気象データより、モンゴル草原におけるバイオマスの変動モデルの構築を進めました。
 (b) 衛星データ、ゲル移動と家畜移動のデータより、移動パターンと植生の変動の関係を調べるためのAgent Based Model の構築を始めた。
 (c) 群別の人口・家畜のGISデータベースを構築し、近年ヤギが急激に増加し、その分布中心がウランバートルに近づいていることが示された。

【モンゴル班】

- (a) 森林ステップ地帯のウランバートル、ステップ地帯のマングルゴビ、乾燥ステップ地帯のハンホンゴルの3地点に気象・土壌水分観測装置を設置し、連続測定を始めた。
 (b) 家畜にGPSを取り付け、遊牧の移動パターンを調査する(図2)と同時に、家畜防護柵を設け、草原生産と家畜による被食量の調査を始めた。
 (c) 牧民の遊牧移動パターン、および、都市周辺部への移住の要因を調べるためのアンケート調査を行った。

【サラワク班】

- (a) ランビル国立公園の原生林と周辺の二次林に調査プロットを設置し、生息している生物種、生態系サービスについて調査を行った。
- (b) 土地利用や生態系の変化が地域社会に及ぼす影響について、いくつかの村にターゲットを絞った重点的な調査と、広域的パターンを把握する多点での質問票調査を行った。
- (c) 森林認証、プランテーションの造成の実態と要因、生物資源利用システムなどの社会経済システムについて調査を行った。

■来年度以降への課題

今回のモデリングにおいてもっとも大きな挑戦は、生態系の状態の人間活動への影響のモデル化である。モンゴルではゲル・家畜の移動に関してGPSでの追跡と聞き取り調査を合わせて、ルール抽出を試みる。サラワクでは、住民の土地利用の意思決定の単位とルールの明確化をすすめる必要があると考えている。また、プロジェクトの重要産物は複数のシナリオのもとでの将来予測とその評価であるので、今後、具体的なシナリオの策定に取り組む必要がある。

論文

【原著】

- Fukuda, D., Tisen, O. B., Momose, K., Sakai, S Feb, 2009 Bat diversity in the vegetation mosaic around a lowland dipterocarp forest of Borneo. *Raffles Bulletin of Zoology* 57(1) :213-221. (査読付) .
- Nakazawa, T., Ohgushi, T. & Yamamura, N Jan, 2009 Resource-dependent reproductive adjustment and the stability of consumer-resource dynamics . *Population Ecology* 51(1) :105-113. (査読付) .
- ICHIKAWA Tetsu n.d. Dec, 2008 The Role of Religion in Chinese Subethnicity : Christian Communities of Papua New Guinean Chinese in Australia . *People and culture in Oceania* 24 :31-50. (査読付) .
- Kohzu A., Miyajima T, Tayasu I, Yoshimizu C, Hyodo F, Matsui K, Nakano T, Wada E, Fujita N, Nagata T Nov, 2008 Use of stable nitrogen isotope signatures of riparian macrophytes as an indicator of anthropogenic N inputs to river ecosystems. *Environmental Science and Technology* 42(21) :7837-7841. DOI:10.1021/es801113k. (査読付) .
- Kondoh M Oct, 2008 Building trophic modules into a persistent food web. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 105 :16631-16635. DOI:10.1073/pnas.0805870105. (査読付) .
- Ichikawa, M Sep, 2008 Changes and Diversity in Rules of Natural-resource Tenure by the Iban of Sarawak, East Malaysia. *Asian and African Area Studies* 8(1) :1-21. (査読付) .
- Hyodo, F., Kuwae, N., Azuma, J.I., Urabe, J., Nakanishi, M. and Wada, E. Sep, 2008 Changes in stable isotopes, lignin-derived phenols, and fossil pigments in sediments of Lake Biwa, Japan: Implications for anthropogenic effects over the last 100 years. *Changes in stable isotopes, lignin-derived phenols, and fossil pigments in sediments of Lake Biwa, Japan: Implications for anthropogenic effects over the last 100 years* 403(1-3) :139-147. DOI:10.1016/j.scitotenv.2008.05.010. (査読付) .
- K. Kishimoto-Yamada, T. Itioka Sep, 2008 Survival of flower-visiting chrysomelids during non general-flowering periods in Bornean dipterocarp forests. *Biotropica* 40(5) :600-606. DOI:10.1111/j.1744-7429.2008.00410.x. (査読付) .
- Hyodo, F.; Tayasu, I.; Konaté, S.; Tondoh, J. E.; Lavelle, P.; Wada, E. Jun, 2008 Gradual enrichment of ^{15}N with humification of diets in a below-ground food web: relationship between ^{15}N and diet age determined using ^{14}C . *Functional Ecology* 22(3) :516-522. DOI:10.1111/j.1365-2435.2008.01386.x. (査読付) .

その他の出版物

【報告書】

- ・ Koizumi M 2008 Factors affecting wild resource use: Actual use of wild resources by the Penan Benalui of East Kalimantan. Ichikawa M, Yamashita S, Nakashizuka T (ed.) Sustainability and biodiversity assessment on forest utilization options (Research Institute for Humanity and Nature). , pp. 389-395.

【その他の著作(商業誌)】

- ・ 石井 励一郎 , 和田 英太郎 2008年10月 モデルとシミュレーションと検証と—新しい生態系の変動予測から (特集 防災シミュレーション—予測と検証の科学論) . 科学 78(10) :1142-1147.

【その他の著作(会報・ニュースレター等)】

- ・ 上村明 2008年09月 21世紀モンゴル国における牧畜 -- 国際援助におけるProperty-rights Approach批判. 日本とモンゴル 43(1) :15-30.

【その他】

- ・ 2008年 畑田彩・市川昌広・中静透編著. 『生物多様性の未来に向けて』 (大学教養課程パワーポイント教材) . 総合地球環境学研究所(販売:昭和堂):京都

会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・ 酒井章子 年を越えた熱帯林のリズム:一斉開花の不思議. 植物学会講演会, 2008年10月18日, 東京都. (本人発表).
- ・ Choy Yee Keong Oil Scarcity, Global Oil Dependence, and Energy Efficiency: The Japanese Experience. Fifth International Conference on Ecosystems, Environment and Sustainable Development held by the World Academy of Science, Engineering and Technology (WASET), Sep 24, 2008-Sep 26, 2008, Heidelberg, Germany. (本人発表).
- ・ 山村則男、、、 2008年9月、京都 土地利用の数理モデル:私有か共有か. 第18回日本数理生物学会, 2008年09月16日-2008年09月18日, 京都. (本人発表).
- ・ Ichikawa, M A comparison of Satoyama (anthropogenic forests-based landscape) between Borneo and Japan. Borneo Research Council 9th Biennial International Conference, Jul 29, 2008-Jul 31, 2008, Kota Kinabaru. (本人発表).
- ・ Itioka T, Kishimoto-Yamada K, Yamauti M Effects of severe ENSO-related drought on insect diversity and abundance in the Southeast Asian tropics. The Annual Meeting of the Association for Tropical Biology and Conservation, "Past and Recent History of Tropical Ecosystems: Cross-Continental Comparisons and Lessons for the Future", Jun 09, 2008-Jun 13, 2008, Paramaribo, Suriname. (本人発表).
- ・ K. Kishimoto-Yamada Population fluctuation patterns of anthophilous insects in Lambir Hills National Park, Sarawak, Malaysia, determined by light-trapping over 6 years. The Association for Tropical Biology and Conservation and Asia-Pacific Chapter, Apr 23, 2008-Apr 26, 2008, Kuching, Sarawak. (本人発表).
- ・ Koizumi M How the Penan Benalui learn and understand diversity of plants. The Association for Tropical Biology and Conservation Asia-Pacific chapter, Apr 23, 2008-Apr 26, 2008, Kuching, Sarawak. (本人発表).
- ・ Reiichiro Ishii A vegetation transition model at the topographical scale and its application to the Mongolian Forest-Steppe ecotone. The 2nd GEOSSAP Symposium, Apr 14, 2008-Apr 16, 2008, Tokyo. (本人発表).

報道等による成果の紹介

【報道機関による取材】

- ・ 「生物多様性って、何なん?」. 京都新聞, 2008年11月16日 . 市川昌広 (取材記事) .

本研究**プロジェクト番号:** E-02**プロジェクト名:** 流域環境の質と環境意識の関係解明 ―土地・水資源利用に伴う環境変化を契機として―**プロジェクト名(略称):** IDEAプロジェクト**プロジェクトリーダー:** 関野 樹**プログラム/研究軸:** 地球地域学領域プログラム**ホームページ:** <http://www.chikyu.ac.jp/idea/>

○研究目的と内容(2008年4月～2009年3月)**研究目的**

ある種の開発計画に代表されるように、人が自然に何らかの働きかけを行なうにあたっては、地域住民を含めた多くの人々の意向を十分汲み取る必要がある。このとき、人が自然環境のどのような点にその価値を見出すのか、あるいは見出さないのかを見極めることができれば、環境の何を保全し、何を保全する必要がないかを特定することが可能となろう。人による自然への働きかけは環境の変化を引き起こし、この変化した環境に対して人びとは環境意識を新にすると考えられる。そこで、本研究プロジェクトでは、このような「環境への働きかけ」、「環境の変化」、「人びとの環境意識の変化」の連環に着目し、自然科学的手法と知見を活用した社会調査を実施することによって環境の特性と環境意識の関係を解明することを目的とした。

背景

I環境アセスメント(EIA: Environmental Impact Assessment)は、環境開発に関わる課題に対して環境と経済の両面を統合した意思決定を行い、環境配慮を盛り込んだ開発計画を設計することを目的として考え出された手法である。この環境アセスメントにおいて重要な要件は、(1)代替案の検討と(2)ステークホルダー間のコミュニケーション・コンサルテーションであり、これらを民主的・科学的に実施し、意思決定を支援するのが環境アセスメントである。近年の環境アセスメントにおいては、自然科学的な影響評価に加えて住民や社会への影響評価の重要性が認識されるようになってきたが、その方法論については十分に確立されていない状況にある。人間の環境への働きかけに対する自然科学的環境評価と個人あるいは社会への影響評価の間を仲立ちする方法論や概念が求められている。本プロジェクトは、この背景のもとに立案された。

地球環境問題の解決にどう資する研究なのか？

環境配慮と社会配慮の両方を盛り込んだ環境施策を立案し実施することが地球環境問題解決のために不可欠である。プロジェクトの成果としての実例は、環境施策立案の際に社会的影響評価手法の一つとして重要かつ不可欠な公衆参加の手続きに応用することが可能である。また、プロジェクトで取り上げた森林流域は、地球環境保全の面できわめて重要な生態系である。この森林流域生態系を保全・利用する際に、どのような環境特性に着目した施策が自然科学的にも社会科学的にも合理性が高いのかについて一定の視座を与える成果が得られるであろう。

○進捗状況(2008年4月～2009年3月)

最終年度にあたり、研究成果のとりまとめと公開に重点が置かれた。

研究成果のとりまとめ

応答予測モデル検討班は、昨年度までに「環境シナリオ」作成に必要な作業を終えているため、今年度は手法の実施手順書の作成に向けた手順の再検討や関連分野の情報のとりまとめを中心に行った。社会意識調査班は、これまでのアンケート調査の解析を進めるとともに、シナリオを用いた研究事例として7月13日にシナリオ・ワークショップ「朱鞠内湖と森の将来を考える住民会議」が現地(北海道雨竜郡幌加内町)で実施した。

研究成果の公開

「朱鞠内湖の森 ―人と自然のかかわり」を11月22日に幌加内町内で開催し、地元からは21名の参加があった。パネル・ディスカッションでは、研究成果の地元への実質的な貢献や経済的な視点の取り込みなどについて議論がなされた。さらに、本研究で検討されてきた環境意識に関する調査の実施方法について、一般書として公開するための準備が行われた。

○共同研究者(所属・役職・研究分担事項)

- ◎ 関野 樹 (総合地球環境学研究所・准教授・IDEA開発)
- 中尾正義 (総合地球環境学研究所・教授・総括)
- 吉岡崇仁 (京都大学フィールド科学教育研究センター・教授・応答予測モデルと環境意識調査の統合)
- 大手信人 (東京大学大学院農学研究科・准教授・水文・物質循環モデルの構築)
- 大西文秀 (竹中工務店(株)プロジェクト開発推進本部・GIS技術を用いた環境評価)
- 柴田英昭 (北海道大学北方生物圏フィールド科学センター・准教授・集水域物質動態の解明)
- 高原 光 (京都府立大学大学院農学研究科・教授・花粉分析による森林変遷の解明)
- 鄭 躍軍 (総合地球環境学研究所・准教授・環境意識調査)
- 木庭啓介 (東京工業大学大学院総合理工学研究科・講師・環境評価結果の解析法検討)
- 徳地直子 (京都大学フィールド科学教育研究センター・准教授・森林伐採の影響解析)
- 中田喜三郎 (東海大学海洋学部・教授・湖沼流動・生態系モデル開発)
- 永田素彦 (京都大学大学院人間・環境学研究科・准教授・環境社会・心理学調査)
- 日野修次 (山形大学理学部・准教授・湖沼物質循環の解析)
- 藤平和俊 (環境学研究所・代表・価値観形成一合意形成過程の解明)
- 安江 恒 (信州大学農学部・准教授・樹木年輪による環境解析)
- 勝山正則 (総合地球環境学研究所・上級研究員・応答予測モデル構築)
- 松川太一 (総合地球環境学研究所・研究員・環境意識調査)
- 林 直樹 (総合地球環境学研究所・研究員・環境意識調査)
- 吉田俊也 (北海道大学北方生物圏フィールド科学センター・助教・陸上植生動態の解明)
- 栗山浩一 (早稲田大学政治経済学術院・教授・仮想評価法の開発と評価)
- 館野隆之輔 (鹿児島大学農学部・准教授・応答予測モデル構築)

○当初の計画

昨年度のプロジェクトリーダの交代を機に、研究プロジェクト全体が環境アセスメントの観点から整理された。これに基づいて評価委員会(2008年2月28日開催)の終了前年度評価に臨み、本研究で検討された手法やその検証結果に対する有効性、応用性に関する以下のような指摘が評価委員会より寄せられた。

- ◆ 他の同様の研究や他の調査地での応用性。
- ◆ 調査手法及び今回得られた結論の頑健性。
- ◆ 調査手法計画立案における研究者の役割、ステークホルダーとしての参画
- ◆ 政策立案者や社会に対して情報をどのように伝達するのか。

このため、今年度の研究課題は当初計画を一部修正し、新たに整理された観点での研究成果のとりまとめと、手法に関して評価委員会から指摘された点に対応することに重点を置いた。

I. 社会調査(シナリオ・ワークショップ)

本研究プロジェクトで検討された手法の中心的な要素である「環境シナリオ」の利用可能性の拡大と実際の施策への反映について検討するため、アンケート調査に代わってシナリオに基づいた住民参加の会議(シナリオ・ワークショップ)を実施することとした。これにより、住民が将来の環境像を描くにあたって、自然科学者や社会科学者が持つ知見が有効活用できるのかどうかを検証する。会議の対象は、朱鞠内湖集水域が含まれる幌加内町とし、幌加内町役場の協力を得て、幌加内町の行政担当者、住民、プロジェクトメンバによる、環境政策立案の模擬実験として実施することとした。

II. 手法の実施手順書を作成

本研究で検討された手法について第三者が利用可能な実施手順をとりまとめる。この過程において、評価委員会より指摘のあった手法の頑健性や他の地域への利用可能性についても検討を進める。また、今年度実施するシナリオ・ワークショップについても「環境シナリオ」の利用事例として掲載する。

III. シナリオ・アンケートの解析

2007年11月に実施したシナリオ・アンケートの解析を進め、その結果を上記の手順書にも反映させる。

IV. 公開シンポジウム

調査地である幌加内町の住民を対象として公開シンポジウムを実施し、本研究で取り組んだ種々の調査研究の成果公表するとともに、地元の環境や研究者の関わり方について地元住民や自治体と議論を進める。

○これまでの研究成果と今後の課題

本年度に挙げ得た成果

I. 社会調査（シナリオ・ワークショップ）

7月13日に「朱鞠内湖と森の将来を考える住民会議」として現地で開催した。議論のきっかけとして4つのシナリオが提示され、それを基に、町の特色、地域住民の働く場、人口、観光などの町の将来像について議論が行われた。

II. 手法の実施手順書を作成

手順書は、研究プロジェクトで検討された手順に沿う形で作成することとなった。評価委員会から指摘のあった手法の頑健性や他の地域への利用可能性などのほか、従来の環境アセスメントとの違いなど、手順の位置付けや特徴についても新たに検討が加えられた。

III. シナリオ・アンケートの解析

コンジョイント分析によって各環境変化に対する部分効用値は求められた。また、回答者の属性や個人的経験、心情、さらには居住地の違いなどが、部分効用値や森林伐採計画の賛否にどのように影響するのかを解析した。

IV. 幌加内シンポジウム

「朱鞠内湖の森 一人と自然のかかわり」を11月22日に幌加内町内で開催し、地元からは21名の参加があった。パネル・ディスカッションでは、研究成果の地元への実質的な貢献や経済的な視点の取り込みなどについて議論がなされた。

V. その他

第3回地球研国際シンポジウムでは、本研究プロジェクトの成果に基づいて環境意識の「うち」と「そと」に関して講演し、島嶼環境の将来を考える上で、島内外の人びとの環境意識に関する考察の重要性を指摘した。また、本プロジェクトはIGBPとIHDPのコアプログラムであるGlobal Land Project (GLP) のEndorsed Projectとして承認された。これにより、本プロジェクトにおける環境意識評価の手順や成果等がGLPを通じて国際科学コミュニティに広報され、応用されることが期待される。

来年度以降への課題

CRへ以降後は、本研究プロジェクトで検討した手法を様々な事例へ実際に応用して試みるのが本研究の成果を最も有効に活用することになる。このためには、手法を所内外の者が試みるためのサポート体制をプロジェクト終了後も何らかの形で残しておく必要があり、ホームページなどの形で地球研に必要な情報を置いておくことが考えられる。また、プログラムの枠組みを活用し、地域という視点から地球環境を考える他のプロジェクトへの応用も検討する。一方で、本研究プロジェクトで得られたアンケート調査や野外調査などの結果についてそれぞれのプロジェクトメンバーが個別に解析を進めてゆくことは勿論のこと、FRの中では十分に行えなかった手法としての位置付け、精度などの検討を十分に行う必要がある。これについても、上述のホームページなどを活用し、補足情報を発信して行くことが可能であろう。

著書（執筆等）

【単著・共著】

- ・鄭躍軍 2008年 統計的社会調査—心を測る理論と方法—。 勉誠出版, 323pp. .

【分担執筆】

- ・鄭躍軍 2008年 みんなの意見はなぜ大切なのか。 総合地球環境学研究所編 地球の処方箋。 昭和堂, pp. 134-137.
- ・吉田俊也, 野口麻穂子 2008年 天然林劣化の現状と対応策。 沼公三郎・奥田仁・佐藤信・前田憲神編 北海道北部の地域社会—分析と提言。 筑波書房, pp. 139-148.

論文

【原著】

- ・Christopher, S.F., Shibata, H., Ozawa, M., Nakagawa, Y. and Mitchell, M.J. 2008 The effect of soil freezing on N cycling: Comparison of two headwater subcatchments with different vegetation and snowpack conditions in the northern Hokkaido Island of Japan. Biogeochemistry 88(1) :15-30.

- ・中尾正義 2008年 環境問題にどう取り組むか—水問題を例として—. 第5回東アジア学国際学術シンポジウム論文集 :287-297.
- ・Takano, K., Ishikawa, Y., Mikami, H., Igarashi, S., Hino, S. and Yoshioka, T. 2008 Fungal infection for cyanobacterium *Anabaena smithii* by two chytrids in eutrophic region of large reservoir Lake Shumarinai, Hokkaido, Japan. *Limnology* 9 :213-218.
- ・大石太郎 2008年 合理的選択における倫理的行動の描写方法について—選好としての倫理と制約としての倫理—. *経済学雑誌* 109(3) :61-71.
- ・Katsuyama, M., Fukushima, K. and Tokuchi, N. 2008 Comparison of rainfall runoff characteristics in forested catchments underlain by granitic and Sedimentary rock with various forest age. *Hydrological Research Letters* 2 :14-17.
- ・藤平和俊, 大須賀公一, 吉岡崇仁, 林 直樹 2008年 制御理論を応用した持続可能な開発のための教育の方法論とその有効性の確認. *環境教育* 18(1) :17-28.
- ・福島慶太郎, 徳地直子 2008年 皆伐・再造林施業が渓流水質に与える影響 —集水域単位で林齢の異なるスギ人工林を用いて—. *日本森林学会誌* 90 :6-16.

その他の出版物

【報告書】

- ・環境意識プロジェクト編 2009年03月 流域環境の質と環境意識の関係解明—土地・水資源利用に伴う環境変化を契機として— 報告書. , 133pp.
- ・総合地球環境学研究所 環境意識プロジェクト編 2008年 次世代に向けた森林の利用に関する意識調査. , 84pp.
- ・吉岡崇仁 2008年 森林流域環境を対象とした自然科学・人文社会科学研究. 地球環境学研究所編 「アジアにおける分野横断型の地域・環境情報ネットワーク構築による研究推進事業」 (仮称) 第3回研究会報告書. , pp.62-67.
- ・総合地球環境学研究所 環境意識プロジェクト編 2008年 森, 川, 湖の環境に関する意識調査. , 220pp.
- ・総合地球環境学研究所 環境意識プロジェクト編 2008年 環境についての関心事調査. , 120pp.

会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・永田素彦, 大川智船 専門家を活用したシナリオワークショップ型住民会議の設計と実施 (1). 科学技術社会論学会第7回年次研究大会, 2008年11月, 大阪大学.
- ・大川智船, 永田素彦 専門家を活用したシナリオワークショップ型住民会議の設計と実施 (2). 科学技術社会論学会第7回年次研究大会, 2008年11月, 大阪大学.
- ・Katsuyama, M., Fukushima, K. and Tokuchi, N. Effects of various rainfall-runoff characteristics on streamwater stable isotope variations in forested headwaters. *HydroChange 2008*, October 2008, Kyoto, Japan.
- ・Yoshioka, T. Environmental Consciousness, Inner and Outer. The Futurability of Islands: Beyond Endemism and Vulnerability. The 3rd RIHN International Symposium, October 2008, Kyoto, Japan.
- ・林直樹, 吉岡崇仁 身近な環境とは—空間的認識圏域解明—. 環境科学会2008年会, 2008年09月, サピアタワー, 東京.
- ・吉岡崇仁, 栗山浩一, 松川太一, 勝山正則 森林伐採によって引き起こされる流域の環境変化に関する選択型実験. 環境科学会2008年会, 2008年09月, サピアタワー, 東京.
- ・鄭躍軍 規範観と環境配慮行動の関連性分析. 日本行動計量学大会, 2008年09月, 成蹊大学.
- ・藤平和俊, 大須賀公一, 吉岡崇仁, 林 直樹 制御理論を応用したESDの方法論と実践例. 日本環境教育学会第19回大会, 2008年08月, 学習院女子大学, 東京.
- ・Yoshioka, T. Linkages in forested watershed environments. Adaptive Management of Biodiversity in the International Conference on Sustainability on Food, Energy and Industry 2008 (ICSA2008), International

Council of Sustainable Agriculture (ICSA), July 2008, Sapporo, Japan.

- Zheng, Y. Comparability and Equivalence in Cross-cultural Survey. . International Conference on Survey Methods in Multinational, Multiregional, and Multicultural Contexts, June 2008, Berlin, Germany.
- Shibata, H. Land Use Dynamics and Terrestrial Ecosystem Processes. プレG8サミットシンポジウム: Dynamics and Pathways of Land Systems Change, 2008年06月, 北海道大学.
- 永田素彦, 吉岡崇仁, 大川智船 流域環境の多様な質に対する住民の選好評価のためのシナリオアンケート手法の開発. 日本グループ・ダイナミクス学会第55回大会, 2008年04月, 広島大学, 広島 .

【ポスター発表】

- 大西文秀 流域圏を視点にしたクーリング容量の試算とGISの活用に関する研究ー わが国の3大都市圏における環境容量の試算を通してー. CSIS DAYS 2008, 2008年12月, 東京大学空間情報科学研究センター.
- Katsuyama, M., Fukushima, K., Tokuchi, N., Ohte, N and Tani, M. Geological influences on hydrological and isotopic characteristics in forested headwaters. AGU Fall Meeting, December 2008, San Francisco, USA.
- 安齋賢, 佐藤大介, 鈴木智子, 日野修次 朱鞠内湖における光合成(一次生産)と沈降・分解のバランス. 日本陸水学会第73回大会, 2008年11月, 札幌.
- 松田あゆみ, 鈴木祐未, 沓掛洋志, 日野修次 朱鞠内湖における二酸化炭素生成と炭素循環. 日本陸水学会第73回大会, 2008年11月, 札幌.
- 松川太一, 吉岡崇仁, 松村綾子 誰が, 何を環境問題として認識しているのか-身近な環境問題に関する自由回答データの分析-. 第81回 日本社会学会大会, 2008年11月, 仙台.
- 相馬明輝, 日野修次, 菊池さち子, 矢内末宇 朱鞠内湖における微生物群集によるリン取り込み活性(分画によるリン取り込み活性の比較と評価). 日本陸水学会第73回大会, 2008年11月, 札幌. .
- Fukushima, K., Tokuchi, N., Tateno, R. and Katsuyama, M. Water yield and nitrogen loss during regrowth of Japanese cedar forests after clearcutting. HydroChange 2008, October 2008, Kyoto, Japan.
- Tokuchi, N., Fukushima, K. and Katsuyama, M. Factors controlling stream water chemistry in ten small forested watersheds with plantation forests of various proportions and ages in central Japan. HydroChange 2008, October 2008, Kyoto, Japan.
- 藤本雄大, 手計太一, 佐藤研一, 柴田英昭, 勝山正則 損失量を考慮したタンクモデルによる貯留能力の定量的検討. 水文・水資源学会2008年研究発表会, 2008年08月, 東京大学.
- 大西文秀 流域圏を視点にしたクーリング容量の試算とGISの活用ーわが国の大都市圏における環境容量の試算を通してー. 第16回地球環境シンポジウム, (社)土木学会地球環境委員会, 2008年08月, 岡山大学.
- 勝山正則, 大手信人, 福島慶太郎, 柴田英昭, 吉岡崇仁 アジアモンスーン地域における溪流水質予測モデルの適用と水文学的改良. 水文・水資源学会2008年研究発表会, 2008年08月, 東京大学.
- Katsuyama, M., Nishimoto, S., Ohte, N. and Tani, M. Relationship between rainfall-runoff processes and mean residence times of stream and groundwater in weathered granite catchments. WPGM2008, July 2008, Cairns, Australia.

社会活動・所外活動

【依頼講演】

- 次世代に向けた森の利用に関する人々の意識. ANA私の青空「めい想の森」, 2008年10月, 岐阜県加茂郡八百津町. 吉岡崇仁.
- 森林利用に伴う流域環境変化と住民の意識. 平成20年度京都大学森林科学公開講座「森が拓く未来」, 2008年10月, 京都市. 吉岡崇仁.
- 森の価値と意識. ANA私の青空 広島空港「アサヒの森」, 2008年08月, 広島県庄原市. 吉岡崇仁.

本研究**プロジェクト番号:** E-03**プロジェクト名:** 亜熱帯島嶼における自然環境と人間社会システムの相互作用**プロジェクトリーダー:** 高相徳志郎**プログラム/研究軸:** 地球地域学領域プログラム**ホームページ:** <http://iriomote.chikyu.ac.jp/>**キーワード:** 亜熱帯、西表島、島嶼、水収支、森林、経済**○研究目的と内容(2008年4月～2009年3月)**

島嶼は、水不足、土壌流出、生物多様性の消失、ゴミ問題等、様々な問題を抱えており、大気汚染、海洋汚染といった島外に起因する環境問題にも直面している。当プロジェクトの目的は、島嶼における環境問題を多角的に理解し、これを基に環境問題の解決に資する指針を提供することであったが、これを亜熱帯の代表的な島である沖縄県、西表島をモデルとして展開した。また、得られた研究成果を他の島嶼の環境問題に活用することも目的としていた。島嶼で将来に希望を持てる社会を構築するために是非とも必要なことは、地域住民が自立することであるが、プロジェクトでは、これに寄与する研究と活動を展開した。プロジェクトでは、緊急課題となっている西表島の自然環境の保全、文化の継承に寄与することも目的としていた。

○進捗状況(2008年4月～2009年3月)

水収支・水質の研究では、継続的研究を基に雨水、河川水の量と質の貴重な資料が得られ、生活用水、農業・観光用水等の用途別利用の研究に活用できる様にした。森林研究についても継続的研究から、常緑広葉樹林、リュウキュウマツ林の遷移過程の理解が深まった。台風の森林更新での役割が明らかにされたが、巨大台風は森林崩壊をもたらす危険性もあり、長期調査の重要性を認識した。住民の生活基盤として極めて重要な観点である島嶼経済については、研究所に要望していた教員の配属が得られず、予定していた程の進展は見られていない(循環型経済のあり方、環境税導入についての研究を進める必要がある)。地域意志決定の研究では、可能な限り地域住民と接する機会を持ってきたが、地域社会が極めて多様で複雑であること、公民館の役割が大きいことを再認識した。また地域研究の成果を地域に紹介することの重要性を認識した。他の研究課題でも、概ね期待された成果が上がった。プロジェクトでは、イリオモテヤマネコの行動研究、地域行事等の研究・記録のために膨大な映像を得ており、これらの映像をプロジェクト終了後も有効に活用する予定である。

○共同研究者(所属・役職・研究分担事項)

- 高相徳志郎 (総合地球環境学研究所・教授・プロジェクト全般統括および植物の受粉機構の解明と環境教育)
- 井倉洋二 (鹿児島大学農学部附属演習林・准教授・水収支・水質班:水収支の解明および水質・水収支班統括)
- 大城肇 (琉球大学法文学部・教授・島嶼経済:島嶼経済全般の統括)
- 川窪伸光 (岐阜大学応用生物科学部・准教授・森林・生物相互関係班:植物の受粉機構の解明および環境教育と映像データベース制作・管理)
- 久保田康裕 (琉球大学理学部・准教授・森林・生物相互関係班:常緑広葉樹林の森林動態解析および西表島の森林動態モデルの作成)
- 鈴木淳 (独立行政法人産業技術総合研究所・主任研究員・水収支・水質班:珊瑚礁海域の水質分析および陸域由来物質の影響解析)
- 前門晃 (琉球大学法文学部・教授・水収支・水質班:水収支の解明と農地開発による土壌流出の影響分析・評価)
- 吉村和久 (九州大学大学院理学研究院・教授・水収支・水質班:水質(陸域)の化学分析と海域への陸域由来物質の影響解析)
- 榎木勉 (九州大学大学院農学研究院・准教授・森林・生物相互関係班:マングローブ林の森林動態分析)
- 大塚善樹 (武蔵工業大学環境情報学部・准教授・島嶼経済班:島の物質収支の解析)
- 木本行俊 (総合地球環境学研究所・プロジェクト上級研究員・森林・生物相互関係班:植物の受粉機構の解明、環境教育)
- 河野裕美 (東海大学沖縄地域研究センター・准教授・森林・生物相互関係班:鳥類の生態)

関野樹	(総合地球環境学研究所・准教授・森林・生物相互関係班：情報技術を活用した陸水学・生態学および文献データベース制作・管理)
瀬戸口浩彰	(京都大学大学院人間・環境学研究所・准教授・森林・生物相互関係班：移入植物による影響解析)
平 剛	(沖縄国際大学法学部・講師・島嶼経済班：財政基盤の分析および検討)
高嶋温子	(九州大学大学院理学府・大学院生・水収支・水質班：水質（陸域）の化学分析)
多田内修	(九州大学大学院農学研究院・教授・森林・生物相互関係班：琉球列島昆虫タイプ標本データベース制作（九州大学）)
中川昌人	(総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員・森林・生物相互関係班：集団生物学（植物）および遺伝的多様性解析)
中野孝教	(総合地球環境学研究所・教授・水収支・水質班：水質（陸域）の安定同位体分析)
野村尚史	(総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員・森林・生物相互関係班：外来植物の生理・生態および移入植物の影響分析)
萩原秋男	(琉球大学理学部・教授・森林・生物相互関係班：リュウキュウマツ二次林の森林動態分析)
日高敏隆	(京都精華大学・客員教授・森林・生物相互関係班：イリオモテヤマネコの行動解析)
廣瀬 孝	(琉球大学法文学部・准教授・水収支・水質班：農地開発による土壌流出の影響分析)
藤田（坂本）陽子	(琉球大学法文学部・准教授・島嶼経済班：エコツーリズム)
前田泰生	(島根大学・名誉教授・森林・生物相互関係班：訪花昆虫（ハナバチ類）の生態解明)
丸田勉	(沖縄県立芸術大学美術工芸学部・准教授・産業育成関連研究班：陶磁器・陶土の化学分析および産業可能性検討)
宮永龍一	(島根大学生物資源科学部・准教授・森林・生物相互関係班：在来訪花昆虫（ハナバチ類）の生態解明)
武笠明子	(総合地球環境学研究所・プロジェクト研究推進支援員・産業育成関連研究班：染色と織布法の聞き取り調査および染色技法記録誌の編集)
安田恵子	(総合地球環境学研究所・プロジェクト研究推進支援員・森林・生物相互関係班：植物相調査および野外調査補助)
柳悦州	(沖縄県立芸術大学附属研究所・教授・産業育成関連研究班、染色と織布技法の分析)
米倉浩司	(東北大学大学院生命科学研究所・助教・森林・生物相互関係班：植物相)
蔣鎮宇	(台湾国立成功大学生物系・教授・森林・生物相互関係班：植物相調査および植物誌編纂)
彭鏡毅	(台湾中央研究院植物研究所・主任研究員・森林・生物相互関係班：植物相調査および植物誌編纂)

○当初の計画

環境問題の把握、解決に資するため、下記の課題、内容で研究を進める計画にした。プロジェクトでは、モニター調査等の現状把握のための研究を行い、この成果を統合するという方法をとった。プロジェクト前半の研究で、公民館が地域の意志決定で極めて重要な役割を果たしていることが分かり、これに関連する研究に多くの時間を割くようにした。生活基盤の確立が、問題解決に極めて重要であることを改めて認識したため、プロジェクトの途中で地域の産業育成に関連する研究課題を追加した。プロジェクトでは、研究の遂行に際し、また記録のために映像を多用したが、映像の活用は社会・学校教育にも極めて有効であり、積極的に活用するようにした。なお、サンゴ生態系の研究グループが別途予算を獲得し、プロジェクトとしての研究を途中で終了している。

水収支・水質（陸域、海域）の研究

- 1) 雨水量、河川水量、蒸散量の推定を基に西表島の水収支モデルを作成し、将来の水利用の指針とするようにした。増水時の土砂流失量の経時的な変化を流失のメカニズムとともに明らかにするようにした。
- 2) 酸性雨の量的、質的な把握、影響評価を行うとした。
- 3) 海域の水質を河川水の影響の面から明らかにするとした。

森林生態系の機能・維持機構、生物相互関係の研究

- 1) 常緑広葉樹林、マングローブ林、リュウキュウマツ植林地の動態を物質生産の観点を含めて明らかにし、森林利用・管理の指針とする、台風が森林に及ぼす影響についても検討するようにした。
- 2) ウミクサ群落の動態を明らかにし、群落構成種の生活史の理解を深めるようにした。
- 3) 西表島を代表するイリオモテヤマネコの行動調査を行うようにした。

- 4) 移入植物の現状、マングローブ植物の受粉、花と昆虫のパートナーシップの研究を行うようにした。

サンゴ生態系の機能・維持機構の研究（平成17年度まで）

- 1) サンゴの多様性についてのモニター調査を行った。
- 2) サンゴ礁域の魚類の生殖研究を進めた。

島嶼経済・地域意思決定の研究

- 1) 生活基盤である産業、人口構成の変遷等の調査をし、行政施策と関連づける、島内での循環型経済について展望する、環境税の導入が可能か検討する計画とした。
- 2) 行事等に参加しながら地域の意志決定、規範についての聞き取り調査を行うようにした。環境問題の解決を視野に入れ、地域組織の連携方法について研究するようにした。

産業育成関連の研究

- 1) 西表産陶土の成分分析を行い、活用を検討するようにした。
- 2) 西表産植物を用いた染料の染色実験を行い、染色方法の聞き取り調査を行うようにした。

○これまでの研究成果と今後の課題

西表島での自然環境の劣悪化は、1) 道路、港湾施設などの大規模工事に起因するもの。2) 耕作地を増やすために森林を開墾した大規模な区画整理に起因するもの。3) 観光業による自然環境の過剰利用、大型宿泊施設の建設によるものであることを確認した。これらは、生活の利便性の向上、生活基盤の確立のために行われたものである。現在も生活基盤は確固としたものではなく、島出身の若者は職を求めて島外に流出し続けている。一方、観光業に関わる島外出身者の移住が続いている。このために、伝統的な文化の継承、発展が難しくなっており、主要な伝統行事が島外出身者によって支えられていたり、あるいは行事の遂行が困難になっている場合もある。今後、自然環境の劣悪化をもたらす主要な要因は、観光業と推定される。

プロジェクトでは、地産地消を主とした循環型の経済、織物・窯業等伝統文化を生かした産業、健全なエコツーリズム、豊かな自然と文化を生かした教育基盤型の産業が西表島に相応しい経済、産業と考えている。

水収支・水質の研究では、継続的研究を基に雨水、河川水の貴重な資料が得られ、今後の水利用研究に活用できるようにした。森林研究についても継続的研究から、常緑広葉樹林、リュウキュウマツ林の遷移過程、台風の影響について理解が深まり、今後の森林利用・管理に生かすことができる。住民の生活基盤として極めて重要な観点である島嶼経済の面については、要望していた教員の配属が得られず、主に、各種統計資料の整理に留まったが、今後、循環型経済のあり方、環境税の導入が可能か、といった観点の研究が必要である。地域意志決定の研究については、地域住民と接する機会を可能な限り持ってきたが、その結果、地域社会が極めて多様で複雑であることを再認識した。一方、自然環境の保全行政（環境省、林野庁）が不備、不統一であることが環境問題を複雑化している一因であること、また、研究者の配慮を欠いた振る舞いのため、住民の研究者に対する反感が根強いことも分かった。

プロジェクトでは西表島に関連した研究論文、書籍、新聞記事等のタイトルをインターネット上で公開しているが、これによって類似研究が避けられていると自負している（集録タイトルの英語表記を近い将来に公開）。

地域で表面化してきた環境問題は複雑で極めて多様な要素が関係しており、簡単に解決策を見出しそうにないが、プロジェクト終了後、コアメンバーを主として、関係する団体と密接に連絡を取りながら問題解決に貢献したい。また、研究成果を地域住民に積極的に紹介することが重要であり、これを効率的な教材作成も含めて、積極的に進める。

プロジェクトでは、自然環境のモニター調査として、酸性雨の影響、森林の動態、ウミクサ群落の動態研究を継続して進めてきたが、プロジェクト終了後、これらの研究をどのように続けるか検討し、調査の継続を模索する。特に森林動態の研究は、台風の巨大化が現実味を帯びており、従来の森林更新とは全く異なる可能性も考えなければならない状況のため、調査を続けなければならない。

論文

【原著】

- ・Takaso, T and J.N. Owens. 2008 Significance of exine shedding in Cupressaceae-type pollen. J. Plant Res 121 :83-85.

会合等での研究発表

【ポスター発表】

- ・中川昌人・木本行俊・高相徳志郎 ウミシヨウブの種子構造：水散布への適応メカニズムの解明. 日本植物分類学会第8回大会, 2009年03月13日-2009年03月15日, 宮城県仙台市. (本人発表).

調査研究活動

【国内調査】

- ・ウミクサ類分布調査. 西表島・石垣島, 2008年05月19日-2008年05月26日.
- ・滞在調査. 西表島, 2008年.

社会活動・所外活動

【その他】

- ・2009年03月09日 沖縄西表の自然と文化 国際文化交流協会支援
- ・2008年10月25日 世界の島々の自然と文化 外国人を含めた講演会
- ・2008年07月29日 ウミシヨウブ観察会 野外観察会

本研究**プロジェクト番号:** E-04**プロジェクト名:** 社会・生態システムの脆弱性とレジリエンス**プロジェクト名(略称):** レジリエンス・プロジェクト**プロジェクトリーダー:** 梅津千恵子**プログラム/研究軸:** 地球地域学領域プログラム**ホームページ:** <http://www.chikyu.ac.jp/resilience/>**キーワード:** レジリエンス, 貧困, 社会・生態システム, 資源管理, 環境変動, 脆弱性, 人間の安全保障, 半乾燥熱帯**○研究目的と内容(2008年4月～2009年3月)**

「研究目的」

本プロジェクトでは、途上国地域の農村において、環境変動に対する社会・生態システムのレジリエンスを高める方策を考えることを主目的とする。そのため、まず、環境変動に対する人間活動を社会・生態システムの脆弱性とレジリエンスという観点からとらえ、社会・生態システムのレジリエンスの解明、それを捉えるための要素は何か、を探ることを実施する。次に、環境変動が社会・生態システムに及ぼす影響とそのショックから回復するメカニズムを明らかにする。これらと平行して、具体的な事例から社会・生態レジリエンスの要因を特定するために、家計やコミュニティ、そして社会制度が果たしている役割を分析する。これらレジリエンスを規定する要因の特定とショックからの回復メカニズムの解明を通じて、社会・生態レジリエンスの本質を明らかにする。そして、レジリエンスを高めるための方策を議論し、途上国地域において人間の安全保障を醸成するための示唆を与える。

「背景」

貧困と環境破壊は密接に関係しており、貧困が環境破壊を生み、環境破壊が貧困を生むという悪循環を生み出している。この悪循環は森林破壊や砂漠化などの「地球環境問題」の主原因の一つと考えられている。世界の貧困人口の大部分は集中するサブサハラ・アフリカや南アジアの半乾燥熱帯に集中し、伝統的なコミュニティ（社会）や環境資源（生態）に強く依存して生業を営んでいる。これらの地域では、天水農業に依存する人々の生活は環境変動に対して脆弱であり、植生や土壌などの環境資源は人間活動に対して脆弱である。ゆえに、さまざまな環境変動に対する社会・生態システムのレジリエンスの弱体化は深刻な問題となり、その保全と強化は重要な課題となっている。よって、この「地球環境問題」の解決のためには、人間社会および生態系が環境変動の影響（ショック）から速やかに回復すること（レジリエンス）が鍵となる。

「地球環境問題の解決にどう資する研究なのか？」

環境変動の被害は社会経済的に脆弱なグループがまず被害を受ける。本プロジェクトでは、社会・経済システムの脆弱性を「地球環境問題」として捉え、脆弱性を規定する要因を解明し、途上国農村で地域社会のレジリエンスを高める方策を提案することが「地球環境問題」の解決につながると考える。現地での実験、測定、インタビュー、観察、分析を通してレジリエンスの鍵となる要素を検討し、その要素を用いて地域の生態系と資源管理へのオプションを提示する。

○進捗状況(2008年4月～2009年3月)

平成19年度は、気象観測装置の準備・設置、試験圃場の整備、広域世帯調査を実施しながら、南部州・東部州の主要調査地にて11月の雨期の始まりと共にレジリエンスの規定要因に関する本格的な調査・観測を開始した。平成20年度は調査・観測の継続、1年目2007/2008年農作期の観測データの収集・整理・分析を行う。

ーザンビア東部・南部州でそれぞれ実施している圃場試験において、メイズ収量の規定要因を明らかにする。ザンビア南部州の対象村において、土地利用図を作成し、環境条件と作目の対応関係を明らかにする。

ープロジェクトの共通調査地域であるザンビア南部州の3地点で昨年度の雨期（2007年11月）より開始した農家家計調査を継続し、雨期に続く乾期の終わりまで（2008年10月）の1年間をカバーするデータセット（2007年データセット）を完成させる。このデータセットには、調査対象となった48戸の農家の農業生産、非農業活動、消費だけでなく、各農家の構成員の身体計測、各農家の圃場における降水量を含む。調査は途切れることなく、引き続き2008年度雨期にも継続し、2008年データセットの作成を目指す。

ーグローバルな政治・社会変動の中で早魃や多雨といった自然環境の影響を受けやすい南部ザンビアのトンガ社会に

における脆弱性増大の問題を、個人、世帯レベルでマイクロに追究する。特に今年度は、個人、世帯が①地域資源利用に
関係した生業レベルでどの様な脆弱性緩和の手段をとっているのか、②それがうまく働かない場合の広域の資源利用
方法としてどの様な経済活動を行っているのか、③その両者の関係性、について焦点を合わせて研究を進める。
一衛星データ・気象データに加え、航空写真などの詳細な研究基盤情報の蓄積を進め、異なる空間スケールにおける
土地利用の現況や変化を把握する。さらに、共通調査地域である南部州において、カリバ湖の水をめぐる自然的要因
と対象村の人々の暮らしや結びつきなどの社会的要因を資源アクセスとの関係から地域の脆弱性に対する社会・生態
的な対処として明らかにするデータ統合に関する研究を進める。

○共同研究者(所属・役職・研究分担事項)

◎ 梅津千恵子 (総合地球環境学研究所・准教授・地域経済分析・農村調査)

□ 谷内 茂雄 (総合地球環境学研究所・准教授・アドバイザー)

Theme I

○ 真常 仁志 (京都大学大学院農学研究科・助教・土壌有機物の分解・肥沃度測定)

安藤 薫 (京都大学大学院農学研究科・博士前期課程・土壌有機物の分解・肥沃度測定)

柴田 昌三 (京都大学フィールド科学教育研究センター・教授・樹木構成種調査)

○ 田中 樹 (京都大学大学院地球環境学堂・准教授・土壌劣化の経時的計測)

野呂 葉子 (京都大学大学院農学研究科・博士前期課程・土壌有機物の分解・肥沃度測定)

三浦 励一 (京都大学大学院農学研究科・講師・草本群落構成種調査)

○ 宮崎 英寿 (総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員・土地利用・履歴調査)

宮下 昌子 (京都大学大学院地球環境学堂・博士前期課程・土壌劣化の経時的計測)

○ Mwale, Moses (Mt. Makulu Central Research Station, Zambia Agricultural Research Station・Vice Director・土壌分析)

Theme II

○ 櫻井 武司 (農林水産省農林水産政策研究所・主任研究官・農村世帯調査)

菅野 洋光 ((独)農業・食品産業技術総合研究機構東北農業研究センター・チーム長・気象観測)

山内 太郎 (北海道大学医学部・准教授・個人・世帯・集団レベルの栄養と健康の評価)

Theme III

○ 島田 周平 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授・農村社会・制度調査)

荒木美奈子 (お茶の水女子大学文教育学部・准教授・農村社会・制度調査)

石本 雄大 (総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員・救荒作物と農村世帯)

伊藤 千尋 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・博士前期課程・農村の出稼ぎ労働)

岡本 雅博 (総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員・農村社会・生業調査)

姜 明江 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・博士前期課程・やまいの共生とケア)

児玉谷史朗 (一橋大学大学院社会学研究科・教授・農業生産と社会変容)

中村 哲也 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・博士前期課程・環境変動への農村の
対応)

成澤 徳子 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・博士前期課程・農村女性の現金稼得)

半澤 和夫 (日本大学生物資源科学部・教授・農村世帯調査)

Kajoba, Gear M. (University of Zambia・Senior Lecturer・土地制度と食料安全保障)

Mulenga, Chileshe (University of Zambia・Senior Lecturer・社会行動分析)

Theme IV

○ 吉村 充則 ((財)リモート・センシング技術センター・副主任研究員・生態変移モニタリング)

松村圭一郎 (京都大学大学院・助教・農村社会と土地所有)

○ 佐伯 田鶴 (国立環境研究所地球環境研究センター・NIESアシスタントフェロー・気候モニタリング)

山下 恵 (学校法人近畿測量専門学校・講師・植生モニタリング)

○ LEKPRICAKUL, Thamana (総合地球環境学研究所・プロジェクト上級研究員・農村世帯調査・分析)

○ PALANISAMI, K. (Tamilnadu Agricultural University・Director・農村世帯調査・分析)

久米 崇 (総合地球環境学研究所・プロジェクト上級研究員・津波被害調査)

谷田貝亜紀代 (総合地球環境学研究所・助教・モンスーン降雨分析)

RANGANATHAN, C.R. (Tamilnadu Agricultural University・Professor・社会経済モデル分析)

- CHABDRASEKARAN, B. (Tamilnadu Agricultural University・Director・米作影響評価)
 GEETHALAKSHIMI, V. (Tamilnadu Agricultural University・Professor・モンスーン降雨分析)
 SAVADOGO, Kimseyinga (University of Ouagadougou・Professor・家計調査データ分析)
 EVANS, Tom (Indiana University・准教授・Agent-Basedモデル)

○当初の計画

○これまでの研究成果と今後の課題

「本年度に挙げ得た成果」

平成20年度は順調に1年目の2007/2008年農作期の調査・観測を終え、2年目の2008/2009年農作期を迎えたところである。プロジェクトメンバーの長期滞在による、食料援助の分配システムや世帯の社会的ネットワーク等の社会的レジリエンスに重要と思われる項目の新たなフィールド調査を開始した。

一ザンビア東部州の試験では、開墾・火入れに伴う土壌養分の放出によるメイズの増収が確認されたが、その増収した面積の割合は開墾面積全体の1割程度であった。南部州では、平年を大幅に上回る降水量のため、斜面下部の圃場では、洪水による減収が認められた。当初、周辺から水分が涵養される斜面下部のほうが高収量を与えると予想していたのとは、正反対の結果となった。作成した土地利用図からは、洪水被害を受けた圃場の位置を特定でき、洪水時の農家の作付体系の変更等の対処行動を観察することができた。

一2007年データセットの分析を行った。テーマ2では、2007年から2009年の3年間にわたるデータ(2007年11月から2010年10月まで)の分析に基づき最終成果を産出することを目標としており、本年度の分析は予備的な分析の位置づけである。3つのサイトの2007/2008雨季降水量の平均値は、湖岸低地の1600mmから斜面上部の1426mmまで幅があり、斜面上部で最も少なかった。各農家の圃場に設置した降水量計の計測結果から、同じ村落内といった狭い範囲でも年間降水量の空間変動幅には140mm(湖岸低地)、190mm(斜面上)、176mm(斜面上部)と大きな違いがあることが判明した。テーマ2の最終目標は、このような降水量の空間変動が農家家計のレジリエンスに及ぼす影響を明らかにすることである。

一現地調査の結果をまとめプロジェクトからワーキング・ペーパーとして公表した。(中村哲也「丘陵地におけるトンガの生業活動—ザンビア南部—農村の事例から—」、Ito, Chihiro, “Re-thinking Labour Migration in Relation with Livelihood Diversity in African Rural Area: A Case Study in Southern Province, Zambia.”) 島田周平「アフリカ農村社会の脆弱性分析序説」を『日本地理学会E-Journal』に投稿し受理された。

一共通調査地域である南部州において、衛星データ・気象データに加え、航空写真などを集中的に収集し、対象村の土地利用現況や変化と土地所有の関係が把握できた。カリバ湖の水位の変動は、周辺村の生業に大きな影響を与えていることが推定された。さらに、食糧援助の村レベルにおける分配の実態も明らかになった。こういった状況を自然/社会的変化としてとらえ、資源へのアクセスとの実態を解明する体制を整えることができた。広域世帯調査1000件のデータから、特に南部州で食事回数の減少等早魃への対処行動の概要が明らかになった。

一レジリエンスセミナーを5回、ワークショップを2回開催。レジリエンス・ワーキングペーパー、004, 005, 006を刊行予定。またレジリエンス・アライアンスのワークブックを日本語に翻訳した。成果は近日中にプロジェクトHPへ掲載予定である。http://www.chikyuu.ac.jp/resilience/publication-W_e.html

「来年度以降への課題」

一プロジェクトのデータおよび研究成果の統合を推進する。

一レジリエンス理論の具体的な応用可能性をフィールドの現場から考えることが重要である。

一世帯調査・身体計測のデータの質を向上させながら、データ整備を行うことが重要となっている。データの整備と同時にレジリエンスの要因の定性的・定量的解明を重点的に実施する予定である。

一来年度は気象観測、圃場実験、世帯調査を継続し、データを蓄積・整理・分析する予定である。

一特に1年目の2007/2008は異常年であったため、他の年の観測との比較が重要である。来年度は2008/2009年農作期のデータを分析し、2007/2008洪水年の農作期との比較を行いたい。

著書(執筆等)

【分担執筆】

- ・半澤和夫 2009年03月 ケニアの自然条件および農林業. 狩野良昭・半澤和夫編 開発途上国での養蜂振興と実務—アフリカを事例として—. 国際農林業協働協会, pp. 29-36.
- ・半澤和夫 2008年12月 タイにおける稲作技術の変化と農村変容. 山田三郎監修、上原秀樹・下渡敏治・板垣敬四郎編者編 食料需給と経済発展の諸相. 筑波書房, 東京都新宿区, pp. 152-170.

【翻訳・共訳】

- ・ 矢内純太、舟川晋也、真常仁志、森塚直樹 2009年02月 土壌学入門. 古今書院, 東京都千代田区, 123pp. 原著: ウィリアム・ダビン著 Soils. Iowa State Press, アメリカ, 110pp.
- ・ 梅津千恵子 2008年07月 . 長田俊樹・佐藤洋一郎編 農耕起源の人類史. 京都大学学術出版会, 京都市左京区, pp.153-172. 原著: ピーター・ベルウッド著 First Farmer: The Origin of Agricultural Societies. Blackwell, . .

論文

【原著】

- ・ 松村圭一郎 2009年03月 <関係>を可視化する-エチオピア農村社会における共同性のリアリティ-. *文化人類学* 73(4) :510-534.
- ・ 松村圭一郎 2009年03月 ザンビアにおける食糧安全保障体制と生存基盤. *Kyoto Working Papers on Area Studies* No. 47 (G-COE Series 45) :1-12.
- ・ 島田 周平 2009年01月 アフリカ農村社会の脆弱性分析序説. *E-Journal GEO* 3(2) :1-16.
- ・ 中村 哲也 2009年01月 The Livelihood of 'Escarpment Tonga': A Case Study of One Village, Southern Zambia. Working Paper on Social-Ecological Resilience Series (No. 2008-005) :1-33.
- ・ V. Geethalakshmi, Akiyo Yatagai, K. Palanisamy and Chieko Umetsu Jan, 2009 Impact of ENSO and the Indian Ocean Dipole on the north-east monsoon rainfall of Tamil Nadu State in India. *HYDROLOGICAL PROCESSES* 23 :633-647. DOI:10.1002/hyp.7191.
- ・ 伊藤 千尋 Jan, 2009 Re-thinking Labour Migration in Relation to Livelihood Diversity in African Rural Area: A Case Study in Southern Province, Zambia. Working Paper on Social-Ecological Resilience Series (No. 2008-006) :1-21.
- ・ 櫻井 武司 2008年09月 サブサハラ・アフリカの農民の気候変動への適応可能性--ザンビアの農家家計調査に基づく予備的考察. *和光経済* 41(1) :43-65.
- ・ K. Palanisami, C. Umetsu, C.R. Ranganathan Sep, 2008 Why Farmers Still Invest in Wells in Hard-rock Regions When the Water-table is fast Declining . M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M. Haigh & Y. Umezawa (ed.) *From Headwaters to the Ocean: Hydrological Changes and Watershed Management*. Taylor and Francis, London, pp. 503-508.
- ・ Takashi Kume, Chieko Umetsu, K. Palanisami Sep, 2008 Monsoon Rainfall Played Large Roles in Desalinization of Soil-groundwater System and Vegetation Recovery Caused by Tsunami in Nagapattinam District, India. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y. Fukushima, M. Haigh & Y. Umezawa (ed.) *From Headwaters to the Ocean: Hydrological Changes and Watershed Management*, London: . Taylor and Francis, London, pp. 409-414.
- ・ Lawrence S. Flint Jun, 2008 Socio-Ecological Vulnerability and Resilience in an Arena of Rapid Environmental Change: Community Adaptation to Climate Variability in the Upper Zambezi Floodplain. Working Paper on Social-Ecological Resilience Series (No. 2008-004) :1-48.

その他の出版物

【その他の著作(会報・ニュースレター等)】

- ・ 伊藤千尋 2008年09月 移動する人々との関わりから生まれた「故郷」. *アジア・アフリカ地域研究* 8(1) :113-117.

会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・ 梅津千恵子 旱魃に対して脆弱な社会-生態システムのレジリアンス向上の条件」. 日本生態学会第56回大会 (ESJ56)、, 2009年03月17日-2009年03月21日, 岩手県立大学. (本人発表).
- ・ 姜 明江 「ザンビア農村で生活するハンセン病回復者のヘルスケアシステム」. レジリアンスプロジェクト 和歌山 ワークショップ, 2009年02月20日-2009年02月21日, 和歌山. (本人発表).

- ・姜 明江 「アフリカ農村で生活するハンセン病回復者の生活自立度評価」：第19回国際開発学会全国大会，2008年11月22日-2008年11月23日，広島。（本人発表）。
- ・梅津千恵子 Why Farmers Still Invest in Wells in Hard-rock Regions When the Water-table is fast Declining?. HydroChange 2008: Hydrological changes and management from headwater to the ocean, Oct 01, 2008-Oct 03, 2008, 京都市上京区。（本人発表）。
- ・伊藤千尋 「ザンビア農村部における出稼ぎ労働の役割と重要性—農民の選択肢としての出稼ぎ労働—」：日本アフリカ学会第45回学術大会，2008年05月24日-2008年05月25日，京都市。（本人発表）。
- ・梅津 千恵子 アフリカ半乾燥地農村の脆弱性と回復力」。農村開発部セミナー，2008年05月01日，国際協力機構。（本人発表）。

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- ・梅津千恵子 旱魃に対して脆弱な社会—生態システムのレジリエンス向上の条件。第56回日本生態学会盛岡大会 企画シンポジウム「生態学と持続可能性科学の新しい関係」，2009年03月17日-2009年03月21日，岩手県。
- ・梅津 千恵子 Vulnerability and Resilience of Social-Ecological Systems in Zambia. 農村開発部セミナー「アフリカ半乾燥地農村の脆弱性と回復力」，2008年05月01日，東京都。

調査研究活動

【海外調査】

- ・南部州での長期フィールド調査、作物生育調査。ザンビア南部州，2007年08月-2008年04月。（宮寄）。

社会活動・所外活動

【依頼講演】

- ・環境変動の時代に生きる途上国の農民たち。京都精華大学・地球環境学講座「アジア・アフリカの現場から」第3回，2008年06月24日，京都市左京区。

本研究

プロジェクト番号: H-02

プロジェクト名: 農業が環境を破壊するとき—ユーラシア農耕史と環境—

プロジェクト名(略称): 里プロジェクト

プロジェクトリーダー: 佐藤洋一郎

プログラム/研究軸: 文明環境史領域プログラム

ホームページ: <http://www.chikyu.ac.jp/sato-project/>

○研究目的と内容(2008年4月～2009年3月)

<研究目的>

ここ1万年間、ユーラシアとその周辺における4つの風土で、農業の発生と展開が周囲の環境とくに生態系にどのような影響を与えたのか、また反対に周囲の環境が農業にどのような影響を与えたのかを、とくに農業生産の破綻を伴った「崩壊」とそこからの「回復」の時期を中心に検討する(ここでいう4つの風土とは「モンスーン」、「牧場=欧州」、「砂漠」、および「根栽」である)。さらにこうした歴史的考察を踏まえつつ、「火耕班」において焼畑農業の歴史とその地球環境問題に与える影響を検討することで持続可能な農業の解明を試みる。

<背景>

農業生産は地球環境問題の根源の一つであるにもかかわらず、その歴史、ことに周囲の生態系との相互作用の歴史に対する知識の集積の遅れは深刻である。人類がもしこのままの状態では農業生産の持続可能性や未来可能性を論じるとすれば、将来大きな禍根を残す危険性が高い。本プロジェクトは、ユーラシアにおける農耕と環境の関係史を紐解き、食料生産の破綻による人間社会の崩壊に注目する。また、破綻的状况を耐え抜き次代へと社会を継承してきた「しのぎの技」を明らかにする。これらの成果に基づいて、社会の回復に至るメカニズムを時系列に沿って明らかにする。この結果に基づいて、異なる風土におけるケース・スタディを通して「崩壊と回復の一般則」を探り出してゆきたい。

<プロジェクトが地球環境問題に貢献できる点>

頻繁な農業生産の破綻の存在を認めることはいわば人類にこれまでの「発達史観」とも言うべきパラダイムの転換を求めるもので、環境史学のみならず人類史を考える多くの研究分野にきわめて大きなインパクトを与えるであろうことは想像に難くない。特に、グローバル化が急激に進む現代にあつて、モンスーン地域、ムギ農耕地域など異なる風土を持つ地域における「農業と環境の関係史」の構築は、地域の中の農業問題の解決に欠かせないものと確信する。従来、農業の問題は「農業問題」や「食糧問題」として関心を集めてきたことはあつたが、地球環境問題と関連づけて研究した報告はあまり多くなかつた。また、現代農業だけでなく、人類史全体を視野に入れその開始時期より農耕活動を環境問題の要として批判的に検討した研究はほとんどないに等しい。その意味で本プロジェクトは、農業をめぐる問題は地球環境問題であることを広く知らせるために有効たり得る。

○進捗状況(2008年4月～2009年3月)

全体としてはプロジェクト立ち上げ当時の計画をおおむね達成している。以下の4点は、各班の主な進捗状況である。

- ① モンスーン農耕班とムギ農耕班では、例えば大阪府・池島福万寺遺跡(モンスーン農耕班)や中国新疆ウイグル自治区・小河墓遺跡(ムギ農耕班)の調査をはじめ研究は着実に進んでいる。種々の科学分析と文書の解読により、モンスーンの風土と砂漠の風土、それぞれの風土と地域で農業と環境と関係史を示した連関図が作成できつつある。この連関図に基づいて、それぞれの地域で成立、再生あるいは崩壊までに至った社会の変遷を推察することも可能かと考えられる。
- ② 根栽類農耕班は先方機関とバプアニューギニアにおいてボーリング調査を行い、同地域における初期農耕の成立にあらたな知見を与えられる成果が得られた。
- ③ 新たに加えた火耕班は20年度には、石川県・白山での現地調査を通じて、同地域で興った農業と焼畑の有効性を明らかにしつつある。また、この研究を通じて文書データベースの作成にも着手し始めた。一方、研究者による研究だけでなく、第2回「焼畑サミット」を通じて、市民が求める農とライフスタイルについて議論し合い、市民参加型の研究を進めてきた。

④ 20年度5月に同志社大学との共催で開催した連続公開講座「ユーラシア農耕史－風土と農耕の醸成」では、農業と環境の関係史についてそれぞれの風土とその代表作物を軸に議論し、プロジェクトの成果を市民へ公表した。なお、本セミナーの内容をまとめて、全5巻のシリーズ本を刊行中である。

○共同研究者(所属・役職・研究分担事項)

◎ 佐藤洋一郎 (総合地球環境学研究所・副所長・教授)

■コアメンバー

- 石川 隆二 (弘前大学 農学生命科学部・教授・モンスーン農耕班リーダー)
- WILLCOX George (フランス東洋先史学研究所・研究員)
- 大野旭 (楊 海英) (静岡大学 人文学部 社会学科・教授)
- 加藤 謙司 (岡山大学大学院自然科学研究科作物育種学研究室・教授・ムギ農耕班リーダー)
- 木村 栄美 (総合地球環境学研究所・研究員・地球研ヘッドクォーター)
- 鞍田 崇 (総合地球環境学研究所・研究員・地球研ヘッドクォーター)
- 篠田 謙一 (国立科学博物館 人類研究部 人類史研究グループ・研究主幹)
- JONES Martin K (ケンブリッジ大学・教授)
- 田中 克典 (総合地球環境学研究所・研究員・地球研ヘッドクォーター)
- 丹野 研一 (山口大学農学部・助教)
- 中村 郁郎 (千葉大学大学院園芸学研究所・准教授)
- 細谷 葵 (総合地球環境学研究所・研究員・地球研ヘッドクォーター)
- MATTEWS Peter J (国立民族学博物館・准教授・根栽農耕班リーダー)
- 原田 信男 (国土館大学21世紀アジア学部・教授・火耕班リーダー)

■モンスーン農耕班

- 芦川 育夫 ((独) 農業・生物系特定産業技術研究・研究チーム長)
- 井上 勝博 (公立大学法人島根県立大学・副理事長)
- 宇田津徹朗 (宮崎大学附属農業博物館・准教授)
- 内山 純蔵 (総合地球環境学研究所・准教授)
- 北川 淳子 (国際日本文化研究センター・研究支援推進員・ムギ農耕班を兼務)
- SONGKRAN Chitrakon (タイ農業局・副所長)
- 田淵 宏朗 (中央農業総合研究センター 北陸研究センター 低コスト稲育種研究北陸サブチーム・主任研究員)
- 湯 陵華 (中国 江蘇省農業科学院 糧食作物研究所 品種資源研究室・教授)
- 中村 郁郎 (千葉大学大学院園芸学研究所・准教授・ムギ農耕班を兼務)
- 中村 慎一 (金沢大学人間社会研究域歴史言語文化学系・教授)
- 羽生 淳子 (カリフォルニア大学バークリー校人類学部・准教授)
- 藤井 伸二 (人間環境大学人間環境学部・准教授)
- FULLER Dorian Q (ロンドン大学考古研究所・研究員・ムギ農耕班を兼務)
- 松田 隆二 ((株)古環境研究所・取締役)
- 武藤 千秋 (総合地球環境学研究所・RA)
- 安田 喜憲 (国際日本文化研究センター・教授)
- 龍 春林 (中国科学院昆明植物研究所・教授)
- 渡部 武 (東海大学 文学部 歴史学科 東洋史専攻・教授)
- 王 巍 (中国社会科学院考古研究所・所長)

■ムギ農耕班

- 有村 誠 (東京文化財研究所 文化遺産国際協力センター・特別研究員)
- 井上 隆史 ((株)アジア・コンテンツ・センター・取締役)
- 池部 誠 (フリーライター)
- 石黒 直隆 (岐阜大学応用生物科学部・教授)
- 伊藤 敏雄 (大阪教育大学教育学部・教授)
- 植田信太郎 (東京大学大学院理学系研究科・教授)
- WEBER Steven A (ワシントン州立大学バンクーバー校・准教授)
- 呉 勇 (新疆文物考古研究所・副研究館員)
- 大田 正次 (福井県立大学生物資源学部・教授)
- 長田 俊樹 (総合地球環境学研究所・教授)

河原 太八	(京都大学大学院農学研究科・准教授)
小葉田 亨	(島根大学生物資源科学部・教授)
最相 大輔	(岡山大学大学資源生物科学研究所・助教)
斉藤 成也	(国立遺伝学研究所集団遺伝研究部門・教授)
笹沼 恒男	(山形大学 農学部 生物資源学科・准教授)
相馬 秀廣	(奈良女子 大学文学部 国際社会文化学科・教授)
竹内 望	(千葉大学大学院自然科学研究科・准教授)
辻本 壽	(鳥取大学 農学部 植物遺伝育種学研究室・教授)
富永 達	(京都大学大学院農学研究科・教授)
外山 秀一	(皇學館大學文学部・教授)
中井 泉	(東京理科大学 理学部 応用化学科・教授)
中野 孝教	(総合地球環境学研究所・教授)
那須 浩郎	(総合研究大学院大学葉山高等研究センター・上級研究員)
西秋 良宏	(東京大学総合研究博物館・教授)
西田 英隆	(岡山大学大学院 自然科学研究科 作物育種学研究室・助教)
万年 英之	(神戸大学大学院農学研究科・准教授)
森 直樹	(神戸大学大学院農学研究科・准教授)
山本 紀夫	(国立民族学博物館・名誉教授)
李 軍	(新疆ウイグル自治区文物局総合所・教授)
渡辺千香子	(大阪学院大学国際学部・准教授)

■火耕班

赤坂 憲雄	(東北芸術工科大学東北文化研究センター・所長)
江頭 宏昌	(山形大学 農学部 生物資源学科・准教授)
岡 恵介	(東北文化学園大学・教授)
笠松 浩樹	(島根県中山間地域研究センター・主任研究員)
川野 和昭	(鹿児島県歴史資料センター黎明館・学芸課長)
米家 泰作	(京都大学大学院文学研究科・准教授)
小山 修三	(吹田市立博物館・館長)
佐々木長生	(福島県立博物館・専門学芸員)
佐藤 雅志	(東北大学大学院生命科学研究科・准教授)
橋尾 直和	(県立高知女子大学文化学部・教授)
馬場 徹	((有) 一級建築士事務所建築商会・代表取締役)
藤山 浩	(島根県中山間地域研究センター地域研究グループ・科長)
六車 由実	(民俗学者)
山口 聰	(愛媛大学 農学部 花卉育種研究室・准教授)
山田 悟郎	(北海道開拓記念館学芸部・元学芸部長)

■根栽農耕班

印東 道子	(国立民族学博物館民族社会研究部・教授)
西田 泰民	(新潟県立歴史博物館学芸課・専門研究員)
HIDE Robin Lamond	(オーストラリア国立大学・客員研究員)
堀田 満	(西南日本植物情報研究所・所長)
山本 直人	(名古屋大学大学院文学研究科・教授)

■情報発信班

秋道 智彌	(総合地球環境学研究所・教授)
阿部 健一	(総合地球環境学研究所・教授)
斉藤 清明	(総合地球環境学研究所・教授)
湯本 貴和	(総合地球環境学研究所・教授)
小倉 一夫	(小倉一夫編集計画研究所・代表取締役)
吉沢 泰樹	((株)紀伊國屋書店映像情報部・部長)

○当初の計画

<当初の計画>

2007年度の評価委員会での「中間評価」の結果「プロジェクトの進行はおおむね順調である」との評価を受けた。一方で、地球研の評価方式の変更により、最終評価を4年目終了時に受けなければならないという制約が新たに

生じた。そこで、5年間の本研究（FR）の折り返し時期に相当する2008年度を迎えるにあたり、プロジェクトの最終成果の取りまとめ方を意識して、4つの班、モンスーン農耕班（「イネ班」）、ムギ農耕班（「ムギ班」＝牧場の風土＋砂漠の風土）、根栽類農耕班（「イモ班」）および「火耕班」のそれぞれについて、現時点での自己評価を行った。その際、2008年度の研究計画は「プロジェクト立ち上げ当初にたてた仮説の検証に向けた1年」とし、班ごとに仮説の再確認を行った。

具体的には、イネ班では、「安定した食糧生産が行われてきたと考えられるモンスーン地帯でも、スケールダウンしてみると、農業活動は必ずしも持続的ではなく、休耕などの措置によって擬似的に生産を継続せざるを得なかった」という仮説の検証を重点的にすすめた。ムギ班では、「現在の砂漠の風土が過去には現在の欧州における『牧場』の風土と類似の風土であったこと」、また「ここ1万年に起きた砂漠化は主に人間行為の結果である」という仮説を検証した。イモ班では、「根栽農業の始まりは従来考えられてきたよりずっと古い」という仮説を立てた。これらの成果を踏まえ地域のライフスタイルに密着した農耕スタイルを現代まで残してきた「焼畑」を扱う「火耕班」では、「焼畑は持続可能性のある農業のスタイルである」という仮説を検証することにした。

〇これまでの研究成果と今後の課題

<本年度に挙げ得た成果>

I. プロジェクトの組織単位（グループ）ごとの成果

各班の具体的な成果を以下に述べる。

1. モンスーン農耕班

イネ班では、前年度に報告した池島・福万寺遺跡（大阪府）と同様に前川遺跡（青森県）においても休耕と思われる生産の中断があったことが明らかとなった。とくに、両地域に共通するのは中世における生産の中断が著しいことであるが、その理由はまだ明らかではなく、今後はこの点に力点を置いて研究を続行させたい。いずれにしてもこの知見は「水田稲作が環境調和的である」という根拠のない言説に対する有効な反論である。また、中世における稲作の衰退が、「農業生産が寒冷化によって停滞した」との従来の知見とも合わないことがわかった。

2. ムギ農耕班

ムギ班ではタクラマカン砂漠東部において、生産とその中断が紀元前2000年紀から繰り返されてきたことが明らかになりつつある。とくに楼蘭王国の時期（2400－1600BP.）においては、砂鉄を利用したと思われる製鉄のあとを、旧河川道付近で複数箇所発見した。これは同地域における森林破壊の原因行為の一つとして重要であると考えられる。紀元前1000年紀の小河墓遺跡出土の動物遺存体についてミトコンドリアDNAを分析したところ、同地域におけるウシは現在欧州で飼育されるウシときわめて類似している。この地域の地下水位は浅いところではわずか1.4m程度であることもわかった。つまり、紀元前1000年紀の同地域においては現在の「牧場」の風土と類似の農耕が営まれていた可能性がある。その農耕地が砂漠化した原因や過程はまだよくわからないが、「塩害→生産活動の放棄」の繰り返しが一因であった可能性がある。

3. 根栽類農耕班

イモ班にあつてはパプア・ニューギニアのココダ谷周辺で花粉分析を行ったところ、初期根栽培農耕が従来考えられていたより相当に早く、地質的に多様なエリアで行われていた証拠を得た。採取した年代測定用資料から年代が同定できれば農耕の歴史における画期的発見となる可能性がある。

4. 火耕班

火耕班では、東北日本における焼畑農耕について病虫害の駆除と微量元素に着目し、火の使用が病虫害の防除と窒素化合物の可利用化につながることを、化学肥料＋農薬による近代農業にはない利点を持つことを明らかにした。

<予想外の成果>

イネの起源について従来の説とは異なる知見が発表された。これを受け、考古学と遺伝学的手法に基づいて別の見解を述べ、国際的論争に発展させた（Fuller & Sato, Nature Genet. 2008）。

<最終成果との関係>

プロジェクト全体としては、主として同志社大学を会場にして、本年度5月より毎月1回、全12回にわたって連続

公開講座「ユーラシア農耕史—風土と農耕の醸成」を開催した。平均の参加者数は約40名とほぼ一定している。この内容については全5巻のシリーズ本を刊行することも決定しており、第1巻は2008年12月に、また第2巻も2009年3月に刊行した（シリーズ全体は2009年中に完結予定）。班ベースでは、イネ班の成果を中心として、「第5回地球研地域セミナー」（和泉市）の企画を担当し、一般市民を含む約100名の参加を得た（11月8日）。さらに、火耕班主催の「焼畑サミット」（第2回、鶴岡市）も200名近い参加者を得て成功裏に終了した（11月16日）。他方で、特に日常生活やライフスタイルとの関連から環境問題の意味を考えるべく、前年度に引き続き「人と自然：環境思想セミナー」を10回開催した。また、12名の外国人研究員を招聘して研究活動を展開するとともに、海外にもプロジェクトの成果を発信した。

＜来年度以降への課題＞

I. 直面している課題

「ムギ班」の調査地点のひとつ新疆ウイグルがテロ事件多発により「渡航の是非検討」地域に指定され、渡航の可否判断に困った。現地は時差などのため電話連絡も取りにくい。プロジェクト期間が限られている上、砂漠内のため調査可能期間が限定される（4月末と9月末）事情から、無理に調査を断行することになりがちである。

II. 研究戦略上の課題

これまでは、プログラム内のプロジェクトがそれぞれ独立に立ち上げられていることもあり、調査方法、地点の情報などについてプロジェクト間の連携が取りにくかった。今後の課題として、各プロジェクトが有する分析ツール、研究結果、調査地域の情報についてプログラム内での研究交流の必要性を感じている。

著書（編集等）

【監修】

- ・鞍田崇編（佐藤洋一郎監修）2008年12月 モンスーン農耕圏の人びとと植物. ユーラシア農耕史, 第1巻. 臨川書店, 京都市左京区, 274pp.

会合等での研究発表

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- ・佐藤洋一郎・宇田津徹朗・藤井伸二・田中克典・木村栄美 災害と「しのぎの技」. 第4回地球研セミナー, 2008年11月08日, 大阪府和泉市.

学会活動（運営など）

【その他】

- ・2008年11月16日 第2回焼畑サミットin鶴岡「焼畑と野焼きの文化—今、東北が熱い!—」 湯海ふれあいセンター、山形県鶴岡市
- ・2008年 人と自然：環境思想セミナー（連続セミナー） 総合地球環境学研究所、京都市北区
- ・2008年 連続公開講座「ユーラシア農耕史—風土と農耕の醸成」（全12回） 同志社大学、京都市上京区

社会活動・所外活動

【依頼講演】

- ・地球温暖化と植物育種. 京都産業大学バイオフィオーラム2008秋 第7回, 2008年12月17日, 京都産業大学図書館ホール 京都市.
- ・風土と酒. 「吹田とビール」吹田市立博物館平成20年度秋季特別展「ビールが村にやってきた!」関連シブシブ・講演会, 2008年11月29日, アサヒビール吹田工場ゲストハウス 大阪府吹田市.
- ・「環境講座」食べて地球環境を守る—食料と環境—. 2008年11月19日, 宇治市生涯学習センター 京都府宇治市.

本研究**プロジェクト番号:** H-03**プロジェクト名:** 環境変化とインダス文明**プロジェクト名(略称):** インダスプロジェクト**プロジェクトリーダー:** 長田俊樹**プログラム/研究軸:** 文明環境史領域プログラム**ホームページ:** http://www.chikyu.ac.jp/indus/Indus_project/index.html**キーワード:** インダス文明、人と自然の相互作用環、ガッガル・ハークラ(旧サラスヴァティー)川、気候変動、インダス文明ネットワークの崩壊**○研究目的と内容(2008年4月～2009年3月)****<研究目的と背景>**

人類は誕生以来、自然環境と対峙しあるいは折り合いをつけながら、持続的な食糧供給を可能とする、集約的な生存空間をうみだしてきた。古代四大文明の一つであるインダス文明(紀元前2600年～1900年)は、インダス印章/文字、城塞、下水道施設などで知られており、その遺跡は、インダス川流域だけではなく、ガッガル川沿いやインド西部のグジャラート州など68万キロ平方にわたってひろく分布する。この文明は、同時期の他の古代文明とことなり、都市文明期が約700年間しか続かなかった。本プロジェクトでは、環境変化を中心に、インダス文明が短期間で衰退した原因の解明をめざす。

インダス文明の衰退原因-とくに都市の発展を支えたと考えられる各地域の生業システムや、メソポタミアなどとの交易ネットワークが、環境変化によってどのような影響をうけたか-を解明するために、調査研究を行っている。研究活動は、古環境研究グループ(PERG)、物質文化研究グループ(MCRG)、伝承文化研究グループ(ICRG)、生業研究グループ(SSRG)にわかれてすすめている。

それぞれの研究グループは、インダス文明の衰退原因と想定されてきた、いくつかのトピックに、別々の角度からとりこんでおり、重要なトピックとしては、ガッガル川の流路変化、グジャラート州沿岸部の海水準変動、気候変動、古地震などがある。

ガッガル川については、PERGが、現地踏査や衛星写真によって河道を復元し、その流路変化の要因や時期について解明する一方、ICRGのインド学グループが『リグ・ヴェーダ』のサラスヴァティー川にかんする記述を分析している。また、MCRGが、ガッガル川沿いにあるファルマーナー遺跡の発掘し、この地域の社会の復元に取り組んでいる。

グジャラート州沿岸部の海水準変動については、PERGの現地踏査や衛星写真によるデータと、MCRGのカーンメール遺跡発掘データを統合し、分析を進めている。また、SSRGによる考古植物学・民族植物学研究とICRGの文献分析もあわせ、この地域のインダス文明期の環境、生業システム、そして交易ネットワークの解明を目指している。

気候変動については、とくにインド洋ダイポール現象(IOD)に注目し、モデルシミュレーションのサンゴをつかって当時の海水温を調査することにより、IODと関連の深いモンスーンの復元をめざしている。こうしたPERGによる気候変動の解明と、SSRGの花粉やプラントオパール分析による研究成果にもとづき、インダス文明期の生業システムを復元する。

<地球環境問題の解決にどう資する研究なのか?>

インダス文明の衰退にかんする重要なトピックとしては、気候変動のようなグローバルなもの、ガッガル・ハークラ川の枯水、海水準変動などのローカルな環境要因、さらに古地震などを想定されている。このような古環境の分析は、現在・未来における人と自然の相互作用環の理解につながるものである。とくに、本プロジェクトでは、数百年間というながいタイムスパンを研究対象にしており、未来の気候変動の予測にも有用なデータを提供することが可能である。

○進捗状況(2008年4月～2009年3月)

MCRGによるインドの2つの遺跡発掘はめざましい成果をあげている。石積みの城塞などの遺構や多様な遺物にくわえ、文字が刻まれたペンダントが3点みつかったほか、インダス印章もつぎつぎに発見され、これらの文字資料は今後の解読作業につながると期待される。日干煉瓦の遺構が発見されたファルマーナー遺跡では、あらたに大規模な墓場がみつき、また、インダス文明では非常に珍しいコメも発見された。これらの発掘をとおしてそれぞれの地域の社会・文化・生業の実態があきらかになってきた。

PERGの調査も着実に進み、ガッガル川については、『リグ・ヴェーダ』に記載されたような大河ではなく、モン

スーン期に水が流れる程度の川だったことがわかってきた。これは大河に依拠しない文明という新たな視点を提供するもので、非常に重要な発見である。また、グジャラート州沿岸部の海水準は、現在よりも2 mほど高かったと推定でき、この推定に従うと、現在内陸に位置する都市遺跡も海岸線にそって分布していたことになる。この地域は、メソポタミアとの交易拠点であったとかがえられ、これについては、ICRGが楔形文献から検証をおこなっている。

○共同研究者(所属・役職・研究分担事項)

- ◎ 長田 俊樹 (総合地球環境学研究所・教授)
- 宇野 隆夫 (国際日本文化研究センター・教授)
- 大田 正次 (福井県立大学生物資源学部・教授)
- 大西 正幸 (総合地球環境学研究所・プロジェクト上級研究員)
- KHARAKWAL, Jeewan Singh(ラジャスタン・ヴィディヤपीート大学・助教授)
- 後藤 敏文 (東北大学大学院文学研究科・教授)
- VASANT, Shinde (デカン大学・教授)
- 前杢 英明 (広島大学大学院教育学研究科・教授)
- MASIH, Farzand (パンジャブ大学・教授)
- MALLAH, Qasid (カイルブル大学・教授)
- WEBER, Steve (ワシントン大学・准教授)
- 上杉 彰紀 (総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員)
- 宇田津徹朗 (宮崎大学大学院農学研究科・准教授)
- 永ノ尾信悟 (東京大学大学院情報学環・学際情報学府・教授)
- 岡村 眞 (高知大学理学部・教授)
- 奥野 淳一 (国立極地研究所・特任研究員)
- 河瀬 眞琴 (農業生物資源研究所・研究主幹兼基盤研究領域ジーンバンク長)
- 鼎 信次郎 (東京工業大学大学院情報理工学研究科・准教授)
- 木村李花子 (馬事文化研究所・所長)
- 熊原 康博 (群馬大学教育学部・講師)
- 久米 崇 (総合地球環境学研究所・プロジェクト上級研究員)
- KENOYER, Mark Jonathan(ウィスコンシン大学人類学部・教授)
- 小磯 学 (神戸夙川学院大学観光文化学部・准教授)
- 児玉 望 (熊本大学文学部・准教授)
- 佐藤洋一郎 (総合地球環境学研究所・教授)
- JOGLEKAR, P. P. (デカン大学・上級講師)
- 高橋 孝信 (東京大学大学院人文社会系研究科・教授)
- 高橋 慶治 (愛知県立大学外国語学部・教授)
- 竹内 望 (千葉大学大学院自然科学研究科・准教授)
- 丹野 研一 (山口大学農学部・助教)
- 千葉 一 (東北学院大学・講師)
- 堤 浩之 (京都大学大学院理学研究科・准教授)
- 寺村 裕史 (総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員)
- 堂山英次郎 (大阪大学大学院文学研究科・講師)
- 外川 昌彦 (広島大学大学院国際協力研究科・准教授)
- 長友 恒人 (奈良教育大学教育学部・教授)
- 中野 孝教 (総合地球環境学研究所・教授)
- PARPOLA, Asko (ヘルシンキ大学アジア・アフリカ研究所・教授)
- 藤井 正人 (京都大学人文科学研究所・教授)
- 藤本 武 (人間環境大学人間環境専攻環境保全コース・准教授)
- POKHARIA, A. K. (ビルバル・サハニ古植物学研究所・助教授)
- 前川 和也 (国土舘大学21世紀アジア学部・教授)
- 松井 健 (東京大学東洋文化研究所・教授)
- 松岡 裕美 (高知大学理学部・准教授)
- 三浦 励一 (京都大学大学院農学研究科・講師)
- 宮内 崇裕 (千葉大学大学院理学研究科・教授)
- 森 若葉 (総合地球環境学研究所・プロジェクト上級研究員)
- 八木 浩司 (山形大学地域教育文化学部・教授)

- 山口 欧志 (国際日本文化研究センター・機関研究員)
 山下 博司 (東北大学大学院国際文化研究科・教授)
 湯本 貴和 (総合地球環境学研究所・教授)
 横山 祐典 (東京大学大学院理学研究科・講師)

○当初の計画

当初の計画と、その計画からの変更点

- (1) 本年度はインドでの発掘が順調に進んだが、古環境研究グループの調査がやや遅れており、来年度に湖沼コア採集を確実にすすめるための予備調査をネパールでおこなった。
- (2) 当初はガッガル・ハークラー(旧サラスヴァティ)川に焦点をあてた古環境復元が主であったが、サンゴを使った海水温変動からの気候変動復元にも取り組むこととなった。そのため、グジャラート州の海岸沿いでサンゴ礁の調査を行ったが、インダス文明期の気候変動の手がかりとなるようなサンゴ礁はみつからず、来年度以降にモルディブにおいて該当時期のサンゴ分析をすることとなった。

○これまでの研究成果と今後の課題

1. 本年度に挙げた成果

- (1) これまでのプロジェクトの研究によって、ドラスティックな気候変動などの環境変化で文明が衰退したとする環境決定論では、広大な地域にまたがるインダス文明の衰退をうまく説明できないことがあきらかとなった。
- (2) 広範囲に分布する各遺跡の様相から、インダス文明遺跡には共通性と地域性がみられること、そして共通性からインダス文明ネットワークが存在したこと、また地域性からはインダス文明がけっして一枚岩ではなく、地域的に独自の文化をもっていたことなどが明瞭となった。
- (3) この共通性と地域性については、石積みの外壁をもつカーンメール遺跡に対する、日干し煉瓦の構造物をもつファルマーナー遺跡との地域性がみられるいっぽう、カーンメール遺跡からも、ファルマーナー遺跡からも同様のビーズやインダス印章が発見され、文明としての共通性が存在することが、プロジェクトによる発掘の出土品からも示された。
- (4) ガッガル・ハークラー(旧サラスヴァティ)川のうち、インド側にあるガッガル川については大河ではなかったという見通しをえた。これは従来大河文明とよばれてきたインダス文明を考え直すことになる重要な発見である。
- (5) プロジェクトの成果をOccasional Paper 4, 5, 6および地球研言語記述論集1として出版した。また、6月7-8日に内外の研究者を招いて、「古代文明社会の交流—前3千年紀におけるインダスとイランの交流」と題する国際会議を地球研で行った。

2. 来年度以降への課題

インドにおける発掘は順調にすすみ、主たる発掘作業は2008年度で終了した。今後MCRGの活動は発掘資料の分析・整理を中心に行われる。これにかわり、2009年度からはPERGのデータ収集を中心として行う。ポーリングやサンゴの採取をつうじて、ガッガル川周辺遺跡やグジャラート州遺跡にかんする仮説を検証する予定である。また、SSRGは、これまでの発掘によってえられた植物遺存体および動物遺存体の分析をおこなう。とくに、ファルマーナー遺跡で発掘された大量の人骨については、2009年度からあらたな研究グループを組織し、DNAの分析をおこなう。当時の気候と生業について、各グループのこれまでの成果を統合し、本格的な復元をすすめる。

著書(執筆等)

【分担執筆】

- ・Goyal, P., Joglekar, P.P. 2008 Report on the faunal remains recovered from Kanmer, Gujarat, during the second field seasons (2006-07). Osada, T, A. Uesugi (ed.) Linguistics, Archaeology and the Human Past. Occasional Paper, 5. RIHN, Kyoto, pp.25-43.
- ・Teramura, H., Y.Kondo, T. Uno, A. Kanto, T. Kishida, H. Sakai 2008 Archaeology with GIS in Indus Project. Osada, T, A. Uesugi (ed.) Linguistics, Archaeology and the Human Past. Occasional Paper, 5. RIHN, Kyoto, pp.45-101.

【翻訳・共訳】

- ・長田俊樹, 佐藤洋一郎(監訳) 2008年06月 農耕起源の人類史. 地球研ライブラリー, 6. 京都大学学術出版会, 京都市左京区, 560pp. 原著: ピーター・バルウッド著 First Farmers. Blackwell, オックスフォード(イギリス), 360pp.

著書（編集等）

【編集・共編】

- ・ Osada, T, A. Uesugi (ed.) Mar, 2009 Linguistics, Archaeology and the Human Past. Occasional Paper, 6. RIHN, Kyoto, 116pp.
- ・ 大西正幸、稲垣和也編 2009年03月 地球研言語記述論集. 総合地球環境学研究所インダスプロジェクト, 京都市, 200pp.
- ・ インダスプロジェクト編 2008年07月 インダス・プロジェクト ニュースレター No. 4. インダスプロジェクト, 京都市, 16pp.
- ・ インダスプロジェクト編 2008年05月 インダス・プロジェクト ニュースレター No. 3. インダスプロジェクト, 京都市, 28pp.
- ・ Osada, T. , A. Uesugi (ed.) 2008 Linguistics, Archaeology and the Human Past. Occasional Paper, 4. RIHN, Kyoto, 137pp.
- ・ インダスプロジェクト編 2008年 環境変化とインダス文明 2007年度成果報告書. インダスプロジェクト, Kyoto, 230pp.
- ・ Osada, T. , A. Uesugi (ed.) 2008 Linguistics, Archaeology and the Human Past. Occasional Paper, 5. RIHN, Kyoto, 109pp.

論文

【原著】

- ・ 大田正次 2009年03月 「野生コムギの農業生態系への適応と栽培化」. 山本紀夫編 ドメスティケーション—その民族生物学的研究—. 国立民族学博物館調査報告, 84. 国立民族学博物館, 大阪府吹田市, pp. 153-176.
- ・ 千葉 一 2009年02月 南インドという先端の伝承性を考えるⅡ. 地理 (2009年2月号) :102-109.
- ・ 千葉 一 2008年09月 南インドという先端の伝承性を考えるⅠ. 地理 (2008年9月号) :102-108.
- ・ 後藤 敏文、山田 智輝、永ノ尾 信悟 2008年 ヴェーダ時代のサラスヴァティー河をめぐる. 環境変化とインダス文明 2007年度成果報告書 :115-142.
- ・ 熊原康博 2008年 CORONA偵察衛星写真の利用法とインド西部の予察的地形判読. 環境変化とインダス文明 2007年度成果報告書 :41-49.
- ・ 大西正幸、児玉 望、長田俊樹、高橋慶治 2008年 南アジアにおける4言語グループの分布と特徴. 環境変化とインダス文明 2007年度成果報告書 :169-177.
- ・ 上杉彰紀 2008年 パローチスターン高原における人物土偶に関する覚書—岡山市立オリエント美術館の資料紹介を兼ねて—. 岡山市立オリエント美術館研究紀要 22 :1-28.
- ・ 前川和也、森 若葉 2008年 初期メソポタミア史のなかのディルムン、マガン、メルッハ. 環境変化とインダス文明 2007年度成果報告書 :155-167.
- ・ 前杵 英明 2008年 インダス文明の衰退と環境変化に関する研究について—古環境研究グループ2007年度予備調査の概要—. 環境変化とインダス文明 2007年度成果報告書 :31-39.

その他の出版物

【その他の著作(新聞)】

- ・ 寺村裕史 「インダス文明 発掘記⑧-⑨」 . 聖教新聞, 2008年11月20日 . 第⑨回は11月27日に掲載.
- ・ 上杉彰紀 「インダス文明 発掘記④-⑦」 . 聖教新聞, 2008年10月23日 . 第⑤回から第⑦回は10月30日、11月6日、11月13日に掲載.
- ・ 長田俊樹 「インダス文明 発掘記①-③、⑩」 . 聖教新聞, 2008年10月02日 . 第②回、第③回、第⑩回はそれぞれ10月9日、10月16日、12月4日に掲載.
- ・ 上杉彰紀 イランの遺跡を訪ねて<下>. 北海道新聞, 2008年06月26日 朝刊, 9面.
- ・ 長田俊樹 イランの遺跡を訪ねて<上>. 北海道新聞, 2008年06月25日 朝刊, 9面.

会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・ Mori, W., K. Maekawa Dilmun, Magan, Meluhha in early Mesopotamian history: 2500-1600 BC . International Symposium: Cultural Relations between the Indus and the Iranian Plateau during the third millennium BCE, Jun 07, 2008-Jun 08, 2008, RIHN, Kyoto. (本人発表).
- ・ Uesugi, A. A Note on the Significance of the Kulli Culture for Bridging the Indus Valley and the Iranian Plateau. . Second International Conference of Society of South Asian Archaeology, May 25, 2008, Shiraz, Iran. (本人発表).
- ・ Osada, T. RIHN' s Indus Project. , 2008, Harvard University, Cambridge, MA, USA. (本人発表).

学会活動（運営など）

【企画・運営・オーガナイズ】

- ・ 「文明と文字ー記録 VS. 記憶」 (企画・運営 (共催)). 2009年03月14日, 熊本大学 (熊本市).
- ・ 「歴史言語学の現在」 (企画・運営). 2008年06月20日, 京大会館 (京都市).
- ・ マジド・ザーデー講演会「イラン最古の文字資料 (紀元前三千年紀前半、ジーロフト遺跡出土)」 “The Oldest Writing in Iran” (企画・運営). 2008年05月30日, 京都大学 (京都市).
- ・ インダス・プロジェクト言語研究会 (企画・運営 (総括)). 2008年04月05日-2009年01月10日, RIHN. 第4回~第7回まで、計4回開催.
- ・ 言語記述研究会. (企画・運営 (総括)). 2008年04月03日-2009年02月20日, RIHN. 第8回~第16回まで、月に一度の開催.

調査研究活動

【海外調査】

- ・ 発掘調査. インド、ハリヤナ州, 2009年03月17日-2009年03月31日. 上杉彰紀.
- ・ 古環境・古地震調査. インド、ウッタラカンド州, 2009年02月26日-2009年03月08日. 熊原康博.
- ・ 地質・古環境調査. インド、グジャラート州, 2009年02月17日-2009年03月08日. 前奈英明、松岡裕美、宮内崇裕、長田俊樹.
- ・ DNA資料調査 (予備調査). インド、ハリヤナ州, 2009年02月15日-2009年02月17日. 斎藤成也.
- ・ 発掘調査および調査打ち合わせ. インド、ハリヤナ州、グジャラート州, 2009年02月04日-2009年03月02日. 宇野隆夫、寺村裕史、山口欧志他.
- ・ 栽培植物データ収集. インド、グジャラート州、カルナータカ州, 2009年01月22日-2009年02月08日. 三浦励一.
- ・ 発掘調査および調査打ち合わせ. インド、グジャラート州, 2009年01月18日-2009年02月01日. 長田俊樹.
- ・ 遺跡踏査. パキスタン、シンド州, 2008年12月19日-2008年12月27日. 宇野隆夫.
- ・ 発掘調査. インド、ハリヤナ州、グジャラート州, 2008年12月15日-2009年03月10日. 上杉彰紀.
- ・ 地質調査 (予備調査). インド、グジャラート州, 2008年12月01日-2008年12月13日. 宮内崇裕.
- ・ 地質調査 (試料採取). インド、ラジャスターン州、ハリヤナ州, 2008年11月30日-2008年12月15日. 前奈英明、長友恒人他.
- ・ 調査打ち合わせ. パキスタン、シンド州, 2008年10月05日-2008年10月26日. 長田俊樹.
- ・ 栽培植物・生業調査. インド、カルナータカ州、タミルナードゥ州, 2008年09月22日-2008年10月12日. 大田正次、森直樹、藤本武、千葉一.
- ・ 考古資料整理. インド、ハリヤナ州、マハラシュトラ州、グジャラート州、ラジャスターン州, 2008年09月01日-2008年10月09日. 上杉彰紀.
- ・ 言語調査. インド、カルナータカ州, 2008年08月22日-2008年09月05日. 児玉望.
- ・ 考古資料整理. インド、ハリヤナ州、パキスタン、シンド州, 2008年04月02日-2008年04月26日. 上杉彰紀.

報道等による成果の紹介

【報道機関による取材】

- ・ 65 graves point to largest Harappan burial site in Haryana town. The Indian Express , 2009年03月03日 .
- ・ 「インダス文明の謎に迫る」 . 中日新聞, 2009年01月27日 .
- ・ 「インダス文明の謎に迫る」 . 中日新聞, 2009年01月27日 .
- ・ 「古さ3番目?○△×文字」 . 朝日新聞 , 2008年05月31日 .
- ・ 「これがイラン最古の文字」 . 京都新聞 , 2008年05月29日 .

【著書等に対する書評】

- ・ 大倉康伸 『農耕起源の人類史』 (長田俊樹、佐藤洋一郎 (監訳) 2008年06月 日本農業新聞 に関する書評). , 2008年08月25日 .
- ・ 森枝卓士 2008年08月 『農耕起源の人類史』 壮大なドラマの全体像-深い人類史の理解に最適な本 (長田俊樹、佐藤洋一郎 (監訳) 2008年06月 『農耕起源の人類史』 に関する書評). 週刊読書人 ∴.

本研究**プロジェクト番号:** H-04**プロジェクト名:** 東アジア内海の新石器化と現代化: 景観の形成史**プロジェクト名(略称):** NEOMAP**プロジェクトリーダー:** 内山純蔵**プログラム/研究軸:** 文明環境史領域プログラム**ホームページ:** <http://www.chikyu.ac.jp/neo-map/>**キーワード:** 景観変化、内海、新石器化、現代化、文化的景観、景観保全**○研究目的と内容(2008年4月～2009年3月)****1. 研究目的**

本プロジェクトでは、東アジアの内海沿岸（日本海と東シナ海沿岸）を対象として、人間と自然環境の相互作用の歴史のなかで最も大きな変革が起こった新石器化と現代化の時期に注目し、研究を進めている。ここでは特に8つの地域に焦点を絞り、それぞれの地域での人間活動、すなわち生業活動、交易活動、精神文化構造（社会システム・芸術・文学・祭祀など）、ならびに自然条件（生物・気候・地形）に関し、総合的に調査研究を行っている。調査を通して、

- 1) 景観の自然および文化的側面において生じた変化を復元し、
- 2) 歴史を通じて常に相互交流が保たれながら同時に文化多様性が維持されてきた内海沿岸の文化的機能を明らかにし、
- 3) 新石器化と現代化のプロセスを比較することで、人間文化の側から現代の環境問題と将来の環境開発に対する理解を深める。

以上の結果を踏まえ「文化的景観」の概念を再検討し、新たな観点から将来の文化的景観の保護に資する提言を行う。

2. 背景

地球環境問題に関する研究では、従来、自然環境の要素が、問題を引き起こす重要な複雑なメカニズムとして理解される傾向があるにもかかわらず、人間文化は、単純化された「human factor」として捉えられがちであった。しかし、他の生き物と異なり、人間は、不合理な象徴的、哲学的、宗教的や美学的な動機によって周囲の環境を変えることがあり、そのような単純化では把握不可能である。ゆえに、本プロジェクトは、景観という統合的な概念を通して、人間文化の視点から環境問題を解明すべく研究を試みる。自然と文化的な要素が絡み合う人間の日常生活の舞台である「景観」は、環境問題が出現する場でもあるから、研究の基本コンセプトとして最適である。また、景観は過去の人間の活動と価値観の蓄積によって構成されるため、環境問題とそれが生じた理由を根源にさかのぼって窺い知ることができる。

文明環境史プログラムに属する本プロジェクトは、長期にわたる時代を視野に入れながら、景観概念に基づく学際的かつ国際的な調査研究を通じて、地球環境問題の歴史的な形成過程に対するより深い理解の確立を目的とする。したがって、東アジアの内海沿岸は、文化的に形成される人間と自然環境の相互作用を観察する上で最も適した地域と言えよう。本プロジェクトは、東アジアの内海沿岸（日本海と東シナ海沿岸）のなかから8つの地域をプロジェクトの調査地として選んでいる。その理由は、内海地域は人口の集中地域であり、世界規模の交易活動の拠点であり、さらに多様な文化や文明が境を接する地域であったからである。

他方で、近年、「文化的景観」という概念は、国内だけではなく、国際的な景観保護運動（文化庁による活動やユネスコの世界遺産など）を進める上で重要になりつつある。景観保護は生物多様性だけではなく、文化の多様性も基準にされているので、現在まで守られ、維持されてきた景観の文化的な過程とメカニズムを理解することが必要である。

3. 研究内容**1) 対象地域**

このプロジェクトは、東アジアの内海沿岸に焦点をあてる。歴史的に、内海沿岸は人口密集地帯であり、世界規模の交易活動の拠点であり、さらに多様な文化や文明が境を接する地域であったことから、景観の形成と変化を考える上で適した地域といえよう。また、本プロジェクトでは、東アジア内海沿岸で得られる調査結果をつねに北ヨーロッパ

パ内海（北海とバルト海）沿岸と比較する。

東アジア内海沿岸の多様な文化圏と自然環境を代表する 8つの地域をプロジェクトの調査地として選択した。日本本土が1) 北陸、2) 琵琶湖、3) 北部九州、日本周縁が4) 北海道、5) 琉球、朝鮮半島が6) 韓国南沿岸、中国が7) 浙江省北部、極東ロシアが8) 沿海州、である。

2) 研究方法

景観は文化的側面と自然的側面の双方を伴う統合的な現象であり、景観は人間活動の影響と自然環境の相互作用を通じて形成される。したがって、景観調査においては量的データの計測以上に、質的な調査に基盤を置く必要がある。また、プロジェクトが焦点をあてる地域の調査項目、時代（新石器化と現代化）によって、参画する専門領域のなかから必要な専門的方法が規定される。くわえて、新石器化と現代化双方の研究の基盤として、どの調査地域においても地理学的データベースが必要となる。そのために、入手可能な地図データ、遺跡の分布と空間構造に関する情報、他の関連する考古学情報を収集する。そのうえで、地図データ上に土地利用、集落パターン、集団の動態の情報を加え、さらに歴史文献や、花粉分析結果をはじめとする生態学的データを統合する。

3) 学際性を生かす組織体制

プロジェクトに参画する専門領域間の情報交換と総合性を高めるため、専門領域単位ではなく、地域単位での調査グループ（以下WG）を設ける。つまり、本プロジェクトでは 1) 北陸、2) 琵琶湖、3) 北部九州、日本周縁が4) 北海道、5) 琉球、朝鮮半島が6) 韓国南沿岸、中国が7) 浙江省北部、極東ロシアが8) 沿海州、の8つの地域WGが存在する。これらの間の比較を可能にするため、各メンバーは少なくとも2つのWGに所属することを原則とする。各WGは年に2回WG会議を開き、WG進捗状況を9月と3月に開かれる全体会議で報告する。プロジェクト本部のメンバーは、組織運営、シンポジウムなどの開催、ホームページの制作、情報の処理や報告などのタスクを持つ。

データベースの作成作業に関しては、3つのWGがある。すなわち、地理情報システムの技術的な側面を担当するGIS WGと、それぞれの時代区分のデータ収集を担当する新石器化データベースWGと現代化データベースWGである。さらに、韓国・ロシア・英国の研究機関と研究協力協定を締結し、国際的な研究体制の構築を進めている。

4. 総合地球環境学研究所プロジェクトとしての意義

文明環境史プログラムに属する本プロジェクトは、長期にわたる時代を視野に入れながら、景観概念に基づく学際的かつ国際的な調査研究を通じて、地球環境問題の歴史的な形成過程に対するより深い理解の確立を目的とする。総合地球環境学研究所のもつ学際的な柔軟性を存分に活かしながら、さらに将来の文化的景観の保全にとって社会・文化システムに関する調査研究が不可欠であることを踏まえて、本プロジェクトでは人間・自然関係のなかでの社会・文化システムの機能と役割の解明を重点的な目標としている。

人間は、与えられた環境のもとで、経済合理性ばかりでなく、美的・象徴的・宗教的な原則からくる動機をも含めた上で行動を決定することを考えれば、人間の行動を性急に単純化することなく、現代の環境問題における文化の役割を分析・理解しなければならぬ。本プロジェクトは、今日の環境問題の直接の根源となったとみられる歴史上の2つの時期（新石器化期と現代化期）に焦点をあてることで、自然環境と文化の関係の相互作用に関して新しい見地を提供するものである。本プロジェクトを通じて明らかになる視点によってはじめて、将来の環境開発を予測し、保全についての原則となるべき景観の歴史的な背景を理解することができる。

景観は文化の側面と自然の側面の双方を伴う統合的な現象であるため、分析には幅広い学術分野の参画が必要である。したがって、学際的研究プロジェクトによってのみ、広い地域における、複数の時代を超えた人間-自然の関係性の変遷を、研究対象とすることが可能になる。NEOMAPプロジェクトは考古学、現代史学、地質学、地理学、景観工学、人類学、言語学、生物学などの分野の研究者が協同し、分析を進めるための学際性とスケールを有している。文明環境史プログラムはアジアにおけるグリーンベルトとイエローベルトの2つの地域を対象としている。NEOMAPの調査地域は前者に属するとともに、この地域における環境問題の歴史的な背景のより明快な理解の確立に貢献することが期待できる。

○進捗状況(2008年4月～2009年3月)

昨年度各WGで行った調査をもとに、2008年度も各メンバーによる本格的な調査活動を継続した。各地での調査は、現在までの議論を通して浮かび上がってきた、東アジア内海全体の景観形成において注目すべき4つの共通テーマ（農耕の拡大・導入、水辺をめぐる景観の変遷、移民と植民地化による景観変化、景観の精神的なイメージの移植と創造）の地域性に即して実施している。

2008年度の調査研究活動は、データ収集とその分析を中心に進めた。暫定的な成果は論文や報告書等で刊行され、

国内外の学会・ワークショップ・セミナーなどで報告された。その中で特に重要な成果物は、NEOMAP国際ワークショップ『新石器化と景観』における研究発表と議論をまとめた『Neolithisation and Landscape - NEOMAP International Workshop-』と、2008年度の各WGの研究状況やメンバーの研究成果をまとめた『NEOMAP Interim Report』である。

また、東アジアにおける新石器化概念について議論するために、10月31日と11月1日に、総合地球環境学研究所においてNEOMAP国際ワークショップ『新石器化と景観』を開催し、9名のメンバーが研究成果の発表を行い、その後幅広い議論がなされた。さらに、東アジア考古学会（中国・北京）、世界考古学会会議（アイルランド・ダブリン）においてセッションを主催し、欧州景観学会（ポルトガル・リスボンおよびオビドズ）でも発表を行った。景観概念のよりよい理解と研究者相互の情報交換・共有を促進するために、景観セミナーや文明環境史プログラム講演会を開催した。

研究基盤になるデータベースの作成は大きく進み、琵琶湖の現代化および北陸地域に関するデータ入力がほぼ終了し、GISによる分析が開始されている。琵琶湖地域の現代化期では絵図や地図のスキャンデータも採用して分析を進め、人口・農作物・漁業・土地利用などのデータにみられる特徴やデータ相互の関連性に対する理解を深めている。琵琶湖の新石器化データベースの入力作業も終了に近づいており、北海道や北部九州など日本列島の他地域のデータベース構築作業も最終段階に入っている。

○共同研究者(所属・役職・研究分担事項)

- 網谷 克彦 (敦賀短期大学地域総合科学科・教授・琵琶湖WG・古民族植物学)
 ○池谷 和信 (国立民族学博物館・教授・北海道WGリーダー・生態人類学)
 ○飯田 卓 (国立民族学博物館・准教授・琉球WGリーダー・生態人類学)
 伊藤 慎二 (國學院大學文学部・兼任講師・琉球WG・沿海州WG・新石器化データベースWG・考古学)
 板倉 有大 (福岡市教育委員会・文化財専門員・北部九州WG・新石器化データベースWG・GIS考古学)
 李 舜炯 (慶北大学校・非常勤講師・韓国南沿岸WG・社会言語学)
 ◎内山 純蔵 (総合地球環境学研究所・准教授・プロジェクトリーダー・琵琶湖WGリーダー・動物考古学・先史人類学)
 大谷めぐみ (総合地球環境学研究所・研究推進支援員・北陸WG・中世史学)
 大西 秀之 (同志社女子大学現代社会学部・准教授・北海道WG・琉球WG・沿海州WG・民族学)
 小田木治太郎 (天理大学附属天理参考館考古美術部・学芸員・浙江省WG・中国考古学)
 嘉村 望 (総合地球環境学研究所・研究推進支援員・英文学)
 ○金 壮錫 (慶熙大学校・准教授・韓国南沿岸WG・社会考古学)
 金 鐘一 (ソウル大学校・准教授・韓国南沿岸WG・景観考古学)
 □小林 達雄 (國學院大學・名誉教授・民族考古学)
 小山 修三 (吹田市立博物館・館長・新石器化データベースWG・現代化データベースWG・GIS WG・民族学・先史人類学)
 五島 淑子 (山口大学・教授・現代化データベースWG・GIS WG・食生活学)
 佐野 静代 (滋賀大学教育学部・環境総合研究センター・准教授・琵琶湖WG・琉球WG・人文地理学)
 佐々木史郎 (国立民族学博物館・教授・沿海州WG・浙江省 WG・民族学)
 島村 恭則 (秋田大学教育文学部・准教授・韓国南沿岸WG・民俗学)
 瀬口 眞司 (財団法人滋賀県文化財保護協会・主任・琵琶湖WG・北陸WG・北部九州WG・新石器化データベースWG・社会考古学)
 高岡 弘幸 (県立高知女子大学文化学部・准教授・北海道WG・北陸WG・北部九州WG・日本民俗学)
 竹谷 俊夫 (大阪大谷大学文学部文化財学科・准教授・韓国南沿岸WG・北部九州WG・朝鮮考古学)
 高西 成介 (県立高知女子大学文化学部・准教授・浙江省WG・琵琶湖WG・北海道WG・中国民俗学)
 高宮 広土 (札幌大学文化学部・教授・琉球WG・先史人類学)
 手塚 薫 (北海道開拓記念館・主任学芸員・北海道WG・歴史人類学)
 鳥谷 善史 (大阪樟蔭女子大学日本語研究センター・非常勤講師・北陸WG・琵琶湖WG・社会言語学)
 ○中井 精一 (富山大学人文学部・准教授・北陸WGリーダー・北部九州WG・社会言語学)
 ○中島 経夫 (滋賀県立琵琶湖博物館研究部・上席総括学芸員・事業部長・琵琶湖WG・北部九州WG・北海道WG・韓国南沿岸WG・浙江省WG・現代化データベースWG・GIS WG・魚類学・生物地理学)
 中村 慎一 (金沢大学人間社会研究域歴史言語文化学系・教授・浙江省WGリーダー・北陸WG・中国考古学)
 中村 大 (総合地球環境学研究所・研究員・北陸WG・新石器化データベースWG・北海道WG・沿海州WG・景観考古学)

- 西谷 大 (国立歴史民俗博物館・准教授・浙江省WG・生態人類学)
- 春田 直紀 (熊本大学教育学部・准教授・北部九州WGリーダー・琵琶湖WG・生態史学)
- 橋本 道範 (滋賀県立琵琶湖博物館研究部・主任学芸員・琵琶湖WG・北部九州WG・歴史地理学)
- 日高 敏隆 (京都精華大学・客員教授・動物行動学・環境認識論)
- 深澤百合子 (東北大学大学院国際文化研究科・教授・北海道WG・民族考古学)
- 細谷 葵 (総合地球環境学研究所・研究員・琉球WG・浙江省WG・古民族植物学)
- 榎林啓介 (総合地球環境学研究所・研究員・浙江省WG・中国考古学)
- 宮本 真二 (滋賀県立琵琶湖博物館研究部・学芸員・琵琶湖WG・韓国南沿岸WG・微古生物学)
- 水野 敏明 (WWFジャパン自然保護室・特別研究員・琵琶湖WG・現代化データベースWG・GIS WG・社会工学)
- 溝口 孝司 (九州大学大学院比較社会文化研究科・准教授・北部九州WG・社会考古学)
- 村上由美子 (総合地球環境学研究所・研究員・北部九州WG・北陸WG・浙江省WG・植物考古学)
- 安室 知 (国立歴史民俗博物館・教授・琵琶湖WG・琉球WG・浙江省WG・民俗学)
- 林 尚澤 (プサン国立大学校・准教授・韓国南沿岸WG・考古学)
- BAUSCH, Ilona (ライデン大学考古学部・非常勤講師・北海道WG・北陸WG・北九州WG・浙江省WG・経済考古学)
- BELUSHKIN, Mikhail Yur 'evich (ゲ・イ・ネベル提督記念国立海洋大学・無線電子工学・無線接続学科科長・沿海州WG・情報電子工学)
- BORRÉ, Caroline (長春大学・准教授・琵琶湖WG・北部九州WG・沿海州WG・現代化データベースWG・日本民俗学・神話学)
- GILLAM, Christopher (サウスカロライナ大学考古学・人類学研究所・上級研究員・新石器化データベースWG・GIS WG・GIS考古学)
- HUDSON, Mark (西九州大学・准教授・景観学)
- JORDAN, Peter (アバディーン大学考古学部・准教授・欧州WG・景観考古学)
- KANER, Simon (セインズベリー日本藝術研究所・副所長・北陸WG・欧州WG・景観考古学)
- LINDSTRÖM, Kati (タルト大学・研究員・琵琶湖WG・北部九州WG・沿海州WG・欧州WG・景観史学)
- LONG, Daniel (首都大学東京大学院人文科学研究科・准教授・琉球WG・北陸WG・社会言語学・民族学)
- POPOV, Alexander Nikolaevich (極東国立総合大学考古学・民族学博物館・館長・沿海州WGリーダー・先史人類学)
- SEYOCK, Barbara (テュービンゲン大学日本文化研究所・上級研究員・欧州WG・経済考古学)
- TABAREV, Andrei (ロシア科学アカデミーシベリア支局考古学・民族学研究所・海外考古学部・学部長・沿海州WG・経済考古学)
- TKACHEV, Sergei Viktorovich (ゲ・イ・ネベル提督記念国立海洋大学 社会政治学研究所社会政権学部・学部長・沿海州WG・政治学・経済史学)
- ZEBALLOS VELARDE, Carlos Renzo (総合地球環境学研究所・研究員・現代化データベースWG・GIS WG・建築・都市計画・GIS工学)

○当初の計画

1. プロジェクトでは新たにWGを設立した。データベースWGにはデータ収集とGIS分析を担当する3つのワークグループ、新石器化WG、現代化WG、GISWGを設けた。言語学WGは言語における景観認識という課題に取り組む。また、国際的な情報交換を進め、研究成果を北ヨーロッパ内海（北海・バルト海）景観史と比較を行うために、英国を拠点に欧州WGを設置した。
2. 必要に応じてメンバーの追加およびの変更を行った。

○これまでの研究成果と今後の課題

1) これまでの研究成果

昨年度の各WGにおける調査に基づき、より詳細な研究計画を設定した。各メンバーによる各地での調査は、現在までの議論を通して浮かび上がってきた、東アジア内海全体の景観形成において注目すべき4つの共通テーマ（農耕の拡大・導入、水辺をめぐる景観の変遷、移民と植民地化による景観変化、景観の精神的なイメージの移植と創造）の地域性に即して実施する。すなわち、

(1) 東アジアの農耕の広がり発展。たとえば、水田・高床式倉庫・水鳥/淡水魚捕獲活動のセットの動向、また後の時代の都市プランや風水思想の動向など。

(2) 水辺をめぐる景観の変遷。外海と内海、河川と湖沼でつながる水系は、生業と信仰の源泉であり、かつ地域の産物を交易する道でもある。

(3) 移民と植民地化による景観変化。たとえば、集落パターンは地域文化自体のなかでも変化していくが、移民や植民地化によって、既存の景観は変化を強いられる。

(4) 精神的なイメージの移植と創造。たとえば、近江八景のような自然の捉え方や寺院の配置による景観規制、植民地化に伴って幽霊や妖怪などが新天地に移植されることによる景観への影響、などに関連する地域的な問題が調査対象となる。

各メンバーおよび各グループによる成果は論文・学会発表等で公開されるとともに、『Neolithisation and Landscape - NEOMAP International Workshop-』と『NEOMAP Interim Report』のプロジェクトが刊行した2冊の書籍を通じて、研究情報の共有と公開が促進される。

また、プロジェクトでは、国内外でいくつかのワークショップやセミナーを主催あるいは共催した。国内では吹田市博物館、沖縄県埋蔵文化財センター、国外では東アジア考古学会（中国・北京）、世界考古学会会議（アイルランド・ダブリン）、欧州景観学会（ポルトガル・リスボンおよびオビドズ）である。10月31日と11月1日には、総合地球環境学研究所においてNEOMAP国際ワークショップ『新石器化と景観』を開催し、9名のメンバーが研究成果の発表を行い、その後に幅広い議論がなされた。また、景観セミナーや文明環境史プログラム講演会の開催を通じ、調査・研究成果の公開に努めた。

2) 今後の課題

次年度は、データの収集および分析から、国内外のより広い社会対象に対する研究成果の出版と公表へ活動の力点を移していかなければならない。2009年度はNEOMAP景観シリーズの第1・2巻の刊行を予定している。新石器化期のデータ入力ほぼ終了しており、GIS分析を進めていくことになる。現代化期および海外グループのデータ入力と分析も引き続き進める。プロジェクトの成果は、一般社会に向けて、出版や公開講座、博物館の特別展示などさまざまな機会を通して公開されていく予定である。

著書（執筆等）

【単著・共著】

- ・大西秀之 2009年02月 トビニタイ文化からのアイヌ文化史。同成社、東京都千代田区、248pp.
- ・安室知、古家晴美、石垣悟 2009年01月 食と農。日本の民俗、4。吉川弘文館、東京都文京区、292pp.
- ・佐野静代 2008年12月 中近世の村落と水辺の環境史—景観・生業・資源管理。吉川弘文館、東京都文京区、348pp.
- ・安室知、小島孝夫、野地恒有 2008年11月 海と里。日本の民俗、1。吉川弘文館、東京都文京区、262pp.
- ・小田木治太郎 2008年09月 隋唐の栄華。天理ギャラリー、東京都港区、32pp.
- ・KIM, Jangsuk 2008 Sociopolitical Implications of Production Technology and Trade Network of the Hanseong Baekje. Hakyon Press,, Seoul, Korea (ハングル語)

【分担執筆】

- ・HUDSON, Mark 2009年03月 長墓遺跡。石垣市史編集委員会編 有土器から無土器へ。石垣市史考古ビジュアル版、3。石垣市、沖縄県石垣市、pp. 30-31.
- ・大西秀之 2009年03月 モノ愛でるコトバを超えて：語りえぬ日常世界の社会的実践。フェティシズム論の系譜と展望。フェティシズム研究、1。京都大学学術出版会、京都市左京区、pp. 149-174.
- ・中井精一 2009年02月 シュガーアイランド：南大東の開発と景観。南大東の人と自然。南方新社、鹿児島市、pp. 36-52.
- ・LONG, Daniel 2009年02月 南大東島ことばが作り上げる言語景観。南大東の人と自然。南方新社、鹿児島市、pp. 74-87.
- ・SEYOCK, Barbara Dec, 2008 Archaeological Complexes from Muromachi Period Japan as a Key to the Perception of International Maritime Trade in East Asia. SCHOTTENHAMMER, Angela (ed.) The East Asian Mediterranean: Maritime Crossroads of Culture, Commerce and Human Migration. East Asian Economic and Socio-cultural Studies: East Asian Maritime History, 6. Harrassowitz, Wiesbaden, Germany, pp. 179-202.
- ・大西秀之 2008年12月 北海道東部における「中世アイヌ」社会形成前夜の動向：列島史におけるトビニタイ文化の位置。榎森進・小口雅史・澤登寛聡編 エミシ・エゾ・アイヌ：アイヌ文化の成立と変容—交易と交流を中心として（上）。岩田書院、東京都世田谷区、pp. 193-216.
- ・UCHIYAMA, Junzo Dec, 2008 Vertical or Horizontal Landscape? The prehistoric Long-Term Perspectives on

the History of the East Asian Inland Seas. SCHOTTENHAMMER, Angela (ed.) The East Asian Mediterranean: Maritime Crossroads of Culture, Commerce and Human Migration. East Asian Economic and Socio-cultural Studies: East Asian Maritime History, 6. Harrassowitz, Wiesbaden, Germany, pp.25-52.

- ・安室知 2008年11月 復活、田んぼの魚捕り。山泰幸、川田牧人、古川彰編 環境民俗学。昭和堂、京都市左京区、pp.181-200.
- ・亀山大輔 2008年10月 談話研究 その従来の視点と将来への展望。山口幸洋博士の古希をお祝いする会編 山口幸洋博士古希記念論文集 方言研究の前衛。桂書房、富山市、pp.269-288.
- ・中井精一 2008年10月 女性器の方言にみる列島の地域史。山口幸洋博士の古希をお祝いする会編 山口幸洋博士古希記念論文集 方言研究の前衛。桂書房、富山市、pp.460-478.
- ・LONG, Daniel 2008年10月 言語接触論者から見た山口幸洋の言語研究。山口幸洋博士の古希をお祝いする会編 山口幸洋博士古希記念論文集 方言研究の前衛。桂書房、富山市。
- ・中島経夫 2008年09月 縄文・弥生遺跡にみる「魚米之郷」。佐藤洋一郎編 米と魚。ドメス出版、東京都豊島区、pp.58-70.
- ・高岡弘幸 2008年07月 怖い幽霊の誕生 - 一八世紀における怨念表象の転換。小松和彦還暦記念論集刊行会編 日本文化の人類学／異文化の民俗学。法蔵館、京都市、pp.659-677.
- ・春田直紀 2008年07月 荘園土地台帳の内と外。鶴島博和・春田直紀編 日英中世史料論。日本経済評論社、東京都千代田区、pp.189-217.
- ・中村大 2008年06月 文様単位数とその意味。小林達雄編 総覧縄文土器。アム・プロモーション、東京都港区、pp.1162-1167.
- ・伊藤慎二 2008年06月 琉球縄文土器（前期）。小林達雄編 総覧縄文土器。アム・プロモーション、東京都港区、pp.814-821.
- ・中村大 2008年04月 社会階層。小杉康、谷口康浩、西田泰民、水ノ江和同、矢野健一編 人と社会 人骨情報と社会組織。縄文時代の考古学、10。同成社、東京都千代田区、pp.145-155.
- ・TAKAMIYA, Hiroto 2008 Okinawa's Earliest Inhabitants and Life on the Coral Island. Richard Pearson (ed.) Okinawa: The Rise of an Island Kingdom. BAR International Studies, 1898. BAR, London, UK, pp.5-12.
- ・中島経夫、中島美智代、孫国平 2008 田螺山遺址K3魚骨坑内の鯉科魚類咽歯。北京大学中国考古学研究中心・浙江省文物考古研究所・田螺山遺址研究課題組 (ed.) 田螺山遺址自然遺存的綜合研究。北京大学中国考古学研究中心、北京、pp.1-25。(中国語)
- ・LIM, Sangtaek 2008 Neolithic Culture of Inland Area in Northern Korean Peninsula. Regional Cultures of Korean Neolithic Period. Dongsam-dong Shell-midden Museum, Korea. (ハングル語)

【翻訳・共訳】

- ・村上由美子 2008年07月 第6章 東アジアにおける農耕の起源。長田俊樹・佐藤洋一郎編 農耕起源の人類史。地球研ライブラリー、6。京都大学学術出版会、京都市左京区、pp.173-197。原著：BELLWOOD, Peter著 FIRST FARMERS: The Origins of Agricultural Societies. Blackwell Publishing, Oxford, UK, .
- ・内山純蔵 2008年07月 第2章 問題提起-農耕の起源と拡散。長田俊樹・佐藤洋一郎編 農耕起源の人類史。地球研ライブラリー、6。京都大学学術出版会、京都市左京区、pp.17-65。原著：BELLWOOD, Peter著 FIRST FARMERS: The Origins of Agricultural Societies. Blackwell Publishing, Oxford, UK, .

著書（編集等）

【編集・共編】

- ・中井精一・笹原佑宜編 2009年02月 神通川流域における言語の変容 グロットグラムデータをもとに。富山大学人文学部日本語学研究室、富山市、110pp.
- ・池谷和信・林良博編 2008年11月 野生と環境。ヒトと動物の関係学、4。岩波書店、東京都千代田区、319pp.

論文

【原著】

- ・大西秀之 2009年03月 奄美群島・加計呂麻島における環境意識調査第一次報告. 現代社フォーラム (5) :90-101. (査読付) .
- ・宇都宮道子, 五島淑子 2009年03月 箸の「伝統型」の持ち方習得のための指導方法と中学校生徒の反応. 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 (27) :71-83.
- ・高宮広土 2009年03月 栽培植物からみた沖縄. 北海道立埋蔵文化財センター年報 (10) :33-37. (査読付) .
- ・佐野静代 2009年03月 水辺の環境史と「二次的自然」をめぐって. 歴史科学 (196) :32-41. (査読付) .
- ・HUDSON, Mark; AOYAMA, Mami Feb, 2009 Hunter-gatherers and the Behavioural Ecology of Human Occupation. *Canadian Journal of Occupational Therapy* 76(1) :48-55. (査読付) .
- ・神田知子, 安藤真美, 高橋徹, 丸山智美, 五島淑子 2009年02月 大学生におけるだしを食する経験とだしの嗜好との関係. 同志社女子大学生活科学 (42) :1-12. (査読付) .
- ・UCHIYAMA, Junzo Jan, 2009 Resource Management and Landscape Diversity in Jomon Japan. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; MAKIBAYASHI, Keisuke (ed.) *Neolithisation and Landscape: NEOMAP International Workshop*. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.3-24.
- ・GILLAM, Christopher Jan, 2009 Empirical Modeling of Cultural Landscapes and Their Environmental Impact. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; MAKIBAYASHI, Keisuke (ed.) *Neolithisation and Landscape: NEOMAP International Workshop*. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.25-44.
- ・SEYOCK, Barbara Jan, 2009 Seascapes, Sherds and Kilns: Ceramics as a Key to Japan's Premodern Maritime Exchange. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; MAKIBAYASHI, Keisuke (ed.) *Neolithisation and Landscape: NEOMAP International Workshop*. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.55-72.
- ・KIM, Jangsuk Jan, 2009 Homogeneity Ideology Versus Status Distinction: Changes in Burial System and Socioeconomic Landscape in the Southwestern Korean Mumun Period. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; MAKIBAYASHI, Keisuke (ed.) *Neolithisation and Landscape: NEOMAP International Workshop*. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.85-100.
- ・NAKAMURA, Oki Jan, 2009 Ritual Landscape in Northern Jomon Japan: An Outline. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) *NEOMAP Interim Report 2008*. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.115-122.
- ・NAKAJIMA, Tsuneo Jan, 2009 Landscape change in the Neolithisation period from the viewpoint of pharyngeal teeth analysis of freshwater fish remains. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) *NEOMAP Interim Report 2008*. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.103-114.
- ・MURAKAMI, Yumiko Jan, 2009 Wooden implements from the sites of Hemudu culture and landscape. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) *NEOMAP Interim Report 2008*. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.95-102.
- ・MAKIBAYASHI, Keisuke Jan, 2009 Cultivation System and Harvest-Processing System of Chinese Neolithic Agriculture and Their Transformation. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) *NEOMAP Interim Report 2008*. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.85-94.
- ・JORDAN, Peter Jan, 2009 Report on Research Activities (2008) and Future Plans (2009+). UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) *NEOMAP Interim Report 2008*. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.81-84.
- ・ITO, Shinji Jan, 2009 Cultural Landscape on the Northern Frontier of Prehistoric Ryukyu: Preliminary Report on the General Survey on the Tokara Islands (Toshima Village, Kagoshima Pref.) in Feb. 2008. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) *NEOMAP Interim Report 2008*. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.73-80.
- ・TKACHEV, Sergey; BAZAROV, Kirill Jan, 2009 Developing of Natural Landscapes at Settlements in Southern Primorye (mid. XIX - beg. XX centuries). UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; MAKIBAYASHI, Keisuke (ed.) . *Neolithisation and Landscape: NEOMAP International Workshop*. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.143-152.

- MIZOGUCHI, Koji Jan, 2009 What and How Can We Talk about the Landscape: A Social Archaeological Perspective. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; MAKIBAYASHI, Keisuke (ed.) Neolithisation and Landscape: NEOMAP International Workshop. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.127-142.
- ONISHI, Hideyuki Jan, 2009 Formation of the Ainu Cultural Landscape: The Landscape Shift in a Hunter-Gatherer Society. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; MAKIBAYASHI, Keisuke (ed.) Neolithisation and Landscape: NEOMAP International Workshop. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.101-126.
- 五島淑子・中村佳美 2009年01月 大学生の朝食欠食に関する調査. 山口大学教育学部論叢 58(1) :65-74.
- 五島淑子・比嘉ももこ・平川美紀 2009年01月 大学生の食生活調査－味噌汁について－. 山口大学教育学部論叢 58(1) :51-63.
- ZEBALLOS, Carlos Jan, 2009 Changes in Landscape During the Modernization Period in Central Japan: A GIS Approach in the Case of Lake Biwa. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) NEOMAP Interim Report 2008. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.257-260.
- TAKAOKA, Hiroyuki Jan, 2009 “Yokai” Folklore and Japanese Landscape Recognition: Cases of Hokkaido, Toyama, and Kumamoto. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) NEOMAP Interim Report 2008. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.237-256.
- TAKANISHI, Seisuke Jan, 2009 About Landscape Perception in Chinese Middle Ages: With a Focus on the “Tales and Novels of the Six Dynasties”. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) NEOMAP Interim Report 2008. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.231-236.
- SANO, Shizuyo Jan, 2009 The Study of “Secondary Nature” on Waterfront: Landscape perspectives of Historical Geography. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) NEOMAP Interim Report 2008. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.225-230.
- ONISHI, Hideyuki; SUNAMI, Soichiro; ISHIMURA, Tomo Jan, 2009 Primary Research Report on Environmental Cognition in Kakeroma Island, the Amami Archipelago of Southern Japan. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) NEOMAP Interim Report 2008. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.207-224.
- NAKAI, Sei’ichi Jan, 2009 Linguistic Practice and the Centrality of the Cities: On Sustaining the “Traditional” Landscapes and Linguistic Norms. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) NEOMAP Interim Report 2008. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.193-206.
- IKEYA, Kazunobu Jan, 2009 Understanding the Relationships between Hunter-Gatherers and Farmers: Could It Spread from North-Eastern Japan?. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) NEOMAP Interim Report 2008. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.185-192.
- HOSOYA, Aoi Jan, 2009 Landscape of the ‘Old Days’: Spatial distribution of traditional Takakura (=Raised-floor granary) in the Amami Oshima island. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) NEOMAP Interim Report 2008. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.171-184.
- HASHIMOTO, Michinori Jan, 2009 On the Ban on Killing in the Vicinities of Lake Biwa’s Temples : Towards a Theory of Modernisation. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) NEOMAP Interim Report 2008. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.163-170.
- GOTO, Yoshiko Jan, 2009 Hidagofudoki and Bocho Fudo Chusin-an Mapping System and GIS. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) NEOMAP Interim Report 2008. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.157-162.
- UCHIYAMA, Junzo Jan, 2009 Jomon Style and Yayoi Style: The Worldview Transition in the Central Japanese Archipelago with Neolithisation, as Seen from the Representations in Pottery and Settlement. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) NEOMAP Interim Report 2008. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.139-154.
- TABAREV, Andrei Jan, 2009 On the Dark Side of Neolithisation: Evidences of Violence in the Neolithic Burials at Boisman-2 Site, Russian Far East. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) Interim Report 2008. NEOMAP. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.131-138.

- SEGUCHI, Shinji Jan, 2009 How Did They Survive? : Adaptation Process to the Post-Glacial Environment in the Biwako Area, Japan. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) NEOMAP Interim Report 2008. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.123-130.
- SEGUCHI, Shinji Jan, 2009 How Did They Survive? : Adaptation Process to the Post-Glacial Environment in the Biwako Area, Japan. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; MAKIBAYASHI, Keisuke (ed.) Neolithisation and Landscape: NEOMAP International Workshop. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.73-84.
- KANER, Simon Jan, 2009 'Neolithisation' : A Landscape Perspective from Central Japan. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; MAKIBAYASHI, Keisuke (ed.) Neolithisation and Landscape: NEOMAP International Workshop. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.45-54.
- LINDSTRÖM, Kati 2008年12月 <うみ>は与え、そして奪う：生き物の居住空間としてのうみ。バイオストーリー (10) :82-94. (査読付) .
- HUDSON, Mark; AOYAMA, Mami Dec, 2008 Occupational Therapy and the Current Ecological Crisis. British Journal of Occupational Therapy 71(12) :545-548. (査読付) .
- 神田知子、安藤真美、高橋徹、丸山智美、五島淑子 2008年12月 煮干しだしと煮干し風味調味料だしに含まれる遊離アミノ酸とその類縁体および核酸関連物質の組成の違い。日本家政学会誌 59(12) :1005-1009. (査読付) .
- NAKAJIMA, Tsuneo; NAKAJIMA, Michiyo; YAMAZAKI, Takeshi Nov, 2008 Evidence for fish cultivation during the Yayoi Period in Western Japan. International Journal of Osteoarchaeology 18(6). DOI:10.1002/oa.1005. (査読付) .
- 佐野静代 2008年07月 「里湖」研究の意義—水辺の「二次的自然」をめぐって。滋賀大学環境総合研究センター研究年報 5(1) :31-38.
- 大西秀之 2008年05月 環境変動と人類の適応戦略：「中世温暖期」とオホーツク文化の生物資源の利用を巡って。バイオストーリー (9) :98-115. (査読付) .
- KIM, Jangsuk 2008 Socioeconomic Implications of Storage Facilities of the Songgukri Period. Journal of Korean Archaeological Society (67). (ハングル語) (査読付) .
- BATARSHEV, S.V; POPOV, Alexander 2008 Sergeevka-1 site on the Prihankaiskaya lowland and the issue of Middle Neolithic in Primorye. I. Archaeology, Ethnography and Anthropology 2(34) :2-13. (ロシア語) (査読付) .
- POPOV, Alexander; TABAREV, Andrei 2008 Neolithic cultures of the Russian Far East: technological evolution cultures sequence. Turkish Academy of Sciences Journal of Archaeology (11) :41-63. (査読付) .
- KIM, Jongil 2008 Archaeological Understanding of Material Culture and Art History. Art History and Visual Art (7). (ハングル語) (査読付) .
- LIM, Sangtaek 2008 New Perspectives on Socioeconomic Interchanges between Southern Korean Peninsula and Japanese Kyushu Island during the Neolithic Period. Yongnamgogohak (47). (ハングル語)
- LIM, Sangtaek 2008 Investigations of the Establishment of Neolithic Pottery Chronology at Central-Western Korea : Historical Perspective. Gogohak 7(1). (ハングル語) (査読付) .
- KIM, Jongil 2008 Philosophical Investigation on Archaeological Categorisation. Gogohak 7(1). (ハングル語) (査読付) .
- KIM, Jangsuk 2008 Reconsidering the Incipient Mumun Model. Journal of Korean Archaeological Society (69). (ハングル語) (査読付) .
- POPOV, Alexander 2008 Burial complexes at the multilayered site Boisman-2 in southern Primorye. Archaeology, Ethnography and Anthropology 2(34) :68-75. (ロシア語) (査読付) .
- TAKAMIYA, Hiroto 2008 Puzzle of the Minatogawa Fossils (c. 30,000-20,000 years ago). Current World Archaeology 29(3) :114-120. (査読付) .

【総説】

- ・安室知 2009年02月 伝承カモ猟の文化資源化とワイズ・ユース. 人文地理学第 61(1) :86-87.

その他の出版物

【解説】

- ・中島経夫 2008年12月 弥生人がコイを養殖. 歴史読本 2008年(12月号) :237.
- ・榎林啓介 2008年05月 考古・文物. 中国研究所編 中国年鑑2008. 社団法人中国研究所, 東京都文京区, pp. 250-252.
- ・大西秀之 2008年04月 イノシシと暮らすシマ. 月刊みんぱく 32(4) :20-21.
- ・中島経夫 2008年 長い年月をかけて築いた人間と魚の関係をみつめて. 滋賀の保険医 (272) :2-3.

【報告書】

- ・高宮広土 2009年03月 カラカミ遺跡出土の植物遺体. 宮本一夫編 沓崎カラカミ遺跡 II. , pp. 114-120.
- ・中井精一編 2009年03月 日本海沿岸社会とことば. 日本海沿岸社会の地域特性と言語に関する類型論的研究, 平成 18~20年度科学研究費 (基盤研究 (B) (1) 18320065), 249pp.
- ・高宮広土 2009年03月 山田中西遺跡出土の植物遺体 : 速報. 喜界町教育委員会編 城久遺跡群山田中西遺跡 II. , pp. 99-100.
- ・LIM, Sangtaek 2008 Chodang-dong sites and Neolithic Culture of Central-Eastern Korean Peninsula. Korean Cultural Properties Investigation & Research Institute Association (ed.) Synthetic Report of Chodang-dong Site, Gangneung. , . (ハングル語)

【辞書等の分担執筆】

- ・TAKAMIYA, Hiroto; CRAWFORD, Gary 2008年10月 Hunters-Gatherers-Fishers, and Low-Level Food Producers of the Japanese Archipelago: The Jomon. PEARSALL, Deborah編. The Encyclopedia of Archaeology. Elsevier, New York.

【書評】

- ・佐野静代 2009年01月 田和正孝編『石干見 最古の漁法』 (田和正孝 2007年02月 石干見 最古の漁法 に関する書評). 史林 91(1) :240-244.

【その他の著作(会報・ニュースレター等)】

- ・佐野静代 2009年03月 「里湖」の環境史. しがだい (29) :12.
- ・小田木治太郎 2009年02月 青銅鍍金牛文帯飾板. 天理 (136) :8.
- ・小田木治太郎 2008年12月 黄白釉加彩騎馬女子. 陽気 60(12) :1-2.
- ・小田木治太郎 2008年11月 緑釉池中楼閣. 天理 (133) :8.
- ・小田木治太郎 2008年10月 東大寺山古墳研究会の活動. 天理参考館報 (21) :63-66.

会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・HUDSON, Mark; AOYAMA, Mami Occupation, Conservation and Protected Areas. Society for Applied Anthropology, Mar 17, 2009-Mar 21, 2009, Santa Fe, USA. (本人発表).
- ・TABAREV, Andrei On the Dark Side of Neolitisation: Evidences of Violence in the Neolithic Burials at Boisman-2 Site, Russian Far East. NEOMAP Landscape Workshop at General Meeting, Mar 12, 2009-Mar 13, 2009, Kita-ku, Kyoto. (本人発表).
- ・POPOV, Alexander Landscape Changes and Ancient Cultures of Holocene in the Continental Fare East of Russia. NEOMAP Landscape Workshop at General Meeting, Mar 12, 2009-Mar 13, 2009, Kita-ku, Kyoto. (本人発表).
- ・INAHATA, Ko' hei Changes of Mountainous Landscape: A case study of quantitative assessment of site location with GIS. NEOMAP Landscape Workshop at General Meeting, Mar 12, 2009-Mar 13, 2009, Kita-ku, Kyoto. (本人発表).
- ・GILLAM, Christopher Pilot Study on Modeling Neolithic Cultural Landscapes. NEOMAP Landscape Workshop

- at General Meeting, Mar 12, 2009–Mar 13, 2009, Kita-ku, Kyoto. (本人発表).
- ITO, Shinji Cultural Landscape on the Northern Frontier of Prehistoric Ryukyu: Preliminary Report of General Survey on the Tokara Islands (Toshima Village, Kagoshima Pref.). NEOMAP Landscape Workshop at General Meeting, Mar 12, 2009–Mar 13, 2009, Kita-ku, Kyoto. (本人発表).
 - HARUTA, Naoki Remains of the Early-modern Landscape: Viewpoint of Place-name Analysis. NEOMAP Landscape Workshop at General Meeting, Mar 12, 2009–Mar 13, 2009, Kita-ku, Kyoto. (本人発表).
 - BAUSCH, Ilona Prehistoric Exchange and the Hokuriku Region. NEOMAP Landscape Workshop at General Meeting, Mar 12, 2009–Mar 13, 2009, Kita-ku, Kyoto. (本人発表).
 - NAKAI, Sei'ichi Linguistic Practice and the Centrality of the Cities: On Sustaining the "Traditional" Landscapes and Linguistic Norms. NEOMAP Landscape Workshop at General Meeting, Mar 12, 2009–Mar 13, 2009, Kita-ku, Kyoto. (本人発表).
 - SEGUCHI, Shinji What Did "Actively Landscape Creating System" Mean for the Local Society? : A Neolithisation Process on Biwa Lake Area in Kansai district, Japan. NEOMAP Landscape Workshop at General Meeting, Mar 12, 2009–Mar 13, 2009, Kita-ku, Kyoto. (本人発表).
 - HASHIMOTO, Michinori Remarks on the Prohibition of Hunting and Fishing Around Temples: The Cases of Chomeiji and Ishiyama-dera Temples in the Lake Biwa Area. NEOMAP Landscape Workshop at General Meeting, Mar 12, 2009–Mar 13, 2009, Kita-ku, Kyoto. (本人発表).
 - POPOV, Alexander ロシア沿海州における新石器化と景観. 文明環境史領域プログラム講演会, Mar 05, 2009, 京都市北区. (本人発表).
 - 村上由美子 河姆渡文化期の木製品と景観. 第6回景観セミナー, 2009年01月30日, 京都市下京区. (本人発表).
 - 細谷葵 過程の聖化－奄美大島の稲作作業と祭り. 第6回景観セミナー, 2009年01月30日, 京都市下京区. (本人発表).
 - 中井精一 都市の中心性と都市景観-だから富山は金沢に勝てない-. 第6回景観セミナー, 2009年01月30日, 京都市下京区. (本人発表).
 - 春田直紀 近世地名から探る現代景観の古層. 第6回景観セミナー, 2009年01月30日, 京都市下京区. (本人発表).
 - 板倉有大 縄文時代後・晩期遺跡の立地と石器組成. 平成20年度九州史学会考古学部会, 2008年12月14日, 福岡市東区. (本人発表).
 - 伊藤慎二 ヒトはいつ頃沖縄諸島に適応したかII「縄文時代早／前期適応説」. 琉球縄文時代の謎：ヒトはいつ頃沖縄諸島に適応したのか (NEOMAP・沖縄県埋蔵文化財センター共催シンポジウム), 2008年12月13日, 沖縄県那覇市. (本人発表).
 - 高宮広土 ヒトはいつ頃沖縄諸島に適応したかI「縄文時代後期適応説」. 琉球縄文時代の謎：ヒトはいつ頃沖縄諸島に適応したのか (NEOMAP・沖縄県埋蔵文化財センター共催シンポジウム), 2008年12月13日, 沖縄県那覇市. (本人発表).
 - 高西成介 唐代小説に描かれた海. 文部科学省特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」戯曲小説班公開研究会, 2008年12月07日, 高知市. (本人発表).
 - 池谷和信 狩猟採集民と農耕景観. 第5回景観セミナー, 2008年11月28日, 京都市下京区. (本人発表).
 - 飯田卓 景観額は未来をめざす. 第5回景観セミナー, 2008年11月28日, 京都市下京区. (本人発表).
 - 中島経夫 魚骨坑出土のコイ科魚類咽頭歯. 日中共同研究成果報告会「河姆渡文化期の環境と生業 田螺山遺跡出土自然遺物の総合的研究」, 2008年11月24日, 石川県金沢市. (本人発表).
 - 榎林啓介 中国新石器時代における栽培体系の形成と変容. 日本中国考古学会2008年度大会, 2008年11月22日, 金沢市. (本人発表).
 - GILLAM, Christopher Geographic Information Science in Ecohistory. GISセミナー, Nov 18, 2008, 京都市北区. (本人発表).
 - 五島淑子、大下市子、田代文子、時枝久子、林裕子、橋爪伸子、古屋敷明美、横山幸代、和仁 皓明 比較食文化史年表に関する諸問題. 日本家政学会 食文化研究部会 第21回研究大会, 2008年11月16日, 東京都豊島区. (本人発表).

人発表).

- ばん澤歩 ヨーロッパ. とりあえずビール! ビールをめぐる世界の景観, 2008年11月15日, 大阪府吹田市. (本人発表).
- 榎林啓介 中国. とりあえずビール! ビールをめぐる世界の景観, 2008年11月15日, 大阪府吹田市. (本人発表).
- LONG, Daniel アメリカ. とりあえずビール! ビールをめぐる世界の景観, 2008年11月15日, 大阪府吹田市. (本人発表).
- JORDAN, Peter “新石器時代” から “新石器化” へー北ユーラシアにおける人と環境の関係史の再構築ー. 文明環境史領域プログラム講演会, Nov 10, 2008, 京都市北区. (本人発表).
- KIM, Jangsuk Archaeology of Style. 32nd Annual Meeting of the Korean Archaeological Society, Nov 07, 2008, Chuncheon, Korea. (ハングル語) (本人発表).
- 李舜炯 文法性判定の地域差へのアプローチ. 日本語学会2008年度秋季大会, 2008年11月03日, 岩手県盛岡市. (本人発表).
- 中井精一 伊賀上野の地域特性と敬語行動. 第131回変異理論研究会, 2008年11月02日, 岩手県盛岡市. (本人発表).
- 鳥谷善史 GISでことばの変化を描くためにー早川谷グロットグラム追跡調査報告. 日本方言研究会, 2008年11月01日, 岩手県盛岡市. (本人発表).
- GILLAM, Christopher Empirical Modeling of Cultural Landscapes. “Neolithisation and Landscape” NEOMAP Landscape Workshop 2008, Oct 31, 2008–Nov 01, 2008, Kita-ku, Kyoto. (本人発表).
- KANER, Simon Rethinking Neolithisation: a perspective from central Japan. “Neolithisation and Landscape” NEOMAP Landscape Workshop 2008, Oct 31, 2008–Nov 01, 2008, Kita-ku, Kyoto. (本人発表).
- TKACHEV, Sergei; BAZAROV, Kiril; POPOV, Alexandr; TABAREV, Andrei; BELUSHKIN, Mikhail Developing of natural landscapes at settlements in southern Primorye (mid. XIX – beg. XX centuries). “Neolithisation and Landscape” NEOMAP Landscape Workshop 2008, Oct 31, 2008–Nov 01, 2008, Kita-ku, Kyoto. (本人発表).
- SEYOCK, Barbara Seascapes, Sherds and Kilns – Ceramics as a Key to Japan’s Premodern Maritime Exchange. “Neolithisation and Landscape” NEOMAP Landscape Workshop 2008, Oct 31, 2008–Nov 01, 2008, Kita-ku, Kyoto. (本人発表).
- SEGUCHI, Shinji From selected Landscape to Created Landscape: An Adaptation Process into the Post-glacial Environment in the Biwako Area. “Neolithisation and Landscape” NEOMAP Landscape Workshop 2008, Oct 31, 2008–Nov 01, 2008, Kita-ku, Kyoto. (本人発表).
- ONISHI, Hideyuki Formation of The Ainu Cultural Landscape: the Landscape Shift in a Hunter-gatherer Society. “Neolithisation and Landscape” NEOMAP Landscape Workshop 2008, Oct 31, 2008–Nov 01, 2008, Kita-ku, Kyoto. (本人発表).
- MIZOGUCHI, Koji What and How Can We Talk About the Landscape: A Social Archaeological Perspective. “Neolithisation and Landscape” NEOMAP Landscape Workshop 2008, Oct 31, 2008–Nov 01, 2008, Kita-ku, Kyoto. (本人発表).
- KIM, Jangsuk Homogeneity Ideology Versus Status Distinction: Changes in Burial System and Socioeconomic Landscape in the Southwestern Korean Mumun Period. “Neolithisation and Landscape” NEOMAP Landscape Workshop 2008, Oct 31, 2008–Nov 01, 2008, Kita-ku, Kyoto. (本人発表).
- NAKAMURA, Shin’ ichi Origin of Rice Cultivation as Adaptation to Wetland Environment. Workshop on the Origins of Rice Agriculture, Oct 28, 2008, Wannian, China. (本人発表).
- UCHIYAMA, Junzo Reluctant Neolithisation? Resource management and landscape diversity in Jomon Japan. “Sedentism: Worldwide research perspectives for the shift of human societies from mobile to settled ways of life” hosted by the German Archaeological Institute, 2008年10月24日, Berlin, Germany. (本人発表).
- KIM, Jangsuk Tradition and Change: the Mumun Culture of the Seoul/Gyeonggi Area. Fall Conference of

- Seoul-Gyeonggi Archaeological Society, Oct 19, 2008, Suwon, Korea. (ハングル語) (本人発表).
- 五島淑子、比嘉ももこ、平川美紀 大学生の食生活調査－味噌汁について－. 第55回日本家政学会中国・四国支部研究発表会, 2008年10月12日, 広島市. (本人発表).
 - KIM, Jong-Il Tradition and Change—a new perspective in the Korean Bronze Age. archaeological conference in the autumn 2008 for The archaeological society for Seoul-Gyeonggi province, October 2008, Korea. (ハングル語) (本人発表).
 - BAUSCH, Ilona Jomon Material Culture, Exchange and Identity in Jomon Japan. “Materiality, Languages and Identity” Workshop, organised by Prof. C. Damm & CAS (Centre for Advanced Study at the Norwegian Academy of Science & Letters), Sep 30, 2008–Oct 03, 2008, Oslo, Norway. (本人発表).
 - 伊藤慎二 琉球文化圏北限の先史景観：トカラ諸島（鹿児島県十島村）の調査成果から. 第4回景観セミナー, 2008年09月26日, 京都市下京区. (本人発表).
 - 細谷葵 南島の生業と景観—なぜトロブリアンドのチーフには22人の妻がいるのか. 第4回景観セミナー, 2008年09月26日, 京都市下京区. (本人発表).
 - 小田木治太郎 北方青銅器文化墓の動物殉性及其地域性. 鄂爾多斯青銅器国際学術検討会, Sep 09, 2008, 鄂爾多斯、中国. (中国語) (本人発表).
 - UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati Landscape History in Fight with Global Environmental Problems: a Report on a Multidisciplinary Research Project on East Asian Inland Seas. “Landscape History and Landscape Heritage” Parallel Session C 4.2 at the Permanent European Conference for the Study of the Rural Landscape (PECSRL) 23rd Session – Landscapes, Identities and Developments, Sep 05, 2008, Óbidos, Portugal. (本人発表).
 - ZEBALLOS VELARDE, Carlos; BORRÉ, Caroline Changes in Landscape During Modernization Period in Central Japan. A GIS Approach of the Case of Lake Biwa. “Landscape History and Landscape Heritage” Parallel Session C 4.2 at the Permanent European Conference for the Study of the Rural Landscape (PECSRL) 23rd Session – Landscapes, Identities and Developments, Sep 04, 2008, Óbidos, Portugal. (本人発表).
 - 橋本道範 寺辺殺生禁断試論—宗教的タブーのつくる景観—. 第3回景観セミナー, 2008年08月22日, 京都市下京区. (本人発表).
 - 高岡弘幸 風土病と御霊伝承—現在の景観から過去の災厄を読む—. 第3回景観セミナー, 2008年08月22日, 京都市下京区. (本人発表).
 - KIM, Jong-il Nationalism in Korea Archaeology. The summer workshop 2008 for The society of Korean Ancient History, August 2008, Korea. (ハングル語) (本人発表).
 - 中島経夫 景観学のひとつの方法. 第2回景観セミナー, 2008年07月25日, 京都市下京区. (本人発表).
 - 中村大 考古学から景観学へ—考古学の未来可能性—. 第2回景観セミナー, 2008年07月25日, 京都市下京区. (本人発表).
 - LIM, Sang-taek A socioeconomic shift in landscape during the Chulmun period in Southern Korea. “Neolithic landscape in East Asia” session at Sixth World Archaeological Congress (WAC6), Jul 04, 2008, Dublin, Ireland. (本人発表).
 - MIZOGUCHI, Koji Hierarchisation in settlement systems: how did it come about?. Neolithic landscape in East Asia” session at Sixth World Archaeological Congress (WAC6), Jul 04, 2008, Dublin, Ireland. (本人発表).
 - YUN G. Jin Neolithic rice-paddy from the Zhaojiazhuang site, eastern China” “Neolithic landscape in East Asia. Neolithic landscape in East Asia” session at Sixth World Archaeological Congress (WAC6), Jul 04, 2008, Dublin, Ireland. (本人発表).
 - YANO, Ken’ ichi Prehistoric wasps’ nests in Japan. Neolithic landscape in East Asia” session at Sixth World Archaeological Congress (WAC6), Jul 04, 2008, Dublin, Ireland. (本人発表).
 - TAKAMIYA, Hiroto The Evolution of Social Complexity in the Prehistory of Okinawa, Japan: not simply simple but not complex enough. Sixth World Archaeological Congress (WAC6), Jul 04, 2008, Dublin,

- Ireland. (本人発表).
- KIM, Jong-il Life and death in ‘Life world’ : the construction of symbolic landscape in the Korean Bronze Age. Neolithic landscape in East Asia” session at Sixth World Archaeological Congress (WAC6), Jul 04, 2008, Dublin, Ireland. (本人発表).
 - KIM, Jang-suk Strategic Alteration of Landscape: Socioeconomic Landscape Dynamics in the Southern Korean Mumun Period. Neolithic landscape in East Asia” session at Sixth World Archaeological Congress (WAC6), Jul 04, 2008, Dublin, Ireland. (本人発表).
 - KANER, Simon Were there ‘Neolithic landscapes’ in East Asia?. Neolithic landscape in East Asia” session at Sixth World Archaeological Congress (WAC6), Jul 04, 2008, Dublin, Ireland. (本人発表).
 - Zheng, G.Sun; NAKAMURA, Shin’ ichi Expansion to the wetland around 5000 BC in the lower Yangtze region. Sixth World Archaeological Congress (WAC6), Jun 29, 2008, Dublin, Ireland. (本人発表).
 - 佐野静代 歴史からみた人と内湖のかかわりー里湖としての内湖. 第6回湖岸生態系保全・修復研究会「里湖としての内湖再生を考える」, 2008年06月24日, 滋賀県大津市. (本人発表).
 - 中村大 過去と現在を結ぶ: 考古学の未来可能性. 談話会セミナー, 2008年06月17日, 京都市北区. (本人発表).
 - 佐野静代 「水辺の「二次的自然」と景観変化の環境史ー中近世の琵琶湖岸を中心としてー」. 第10回洛北史学会大会「水がつなぐ人と自然ー共生の〈環境史〉にむけてー」, 2008年06月07日, 京都市左京区. (本人発表).
 - HOSOYA, Aoi Plant food subsistence strategy and the ‘routine-scape’ in Japanese and Chinese prehistory. “Prehistoric Landscape Shifts in the East Asian Inland Seas” Session at the 4th worldwide conference of Society for East Asian Archaeology (SEAA), Jun 03, 2008, Beijing, China. (本人発表).
 - ITO, Shinji Cultural landscape shift of Prehistoric Okinawa Islands: Case study of Izena Island Group. Prehistoric Landscape Shifts in the East Asian Inland Seas” Session at the 4th worldwide conference of Society for East Asian Archaeology (SEAA), Jun 03, 2008, Beijing, China. (本人発表).
 - KIM, Jong-il Topophilia with life and death: the formation of agricultural landscape in the Korean Bronze Age. Prehistoric Landscape Shifts in the East Asian Inland Seas” Session at the 4th worldwide conference of Society for East Asian Archaeology (SEAA), Jun 03, 2008, Beijing, China. (本人発表).
 - LIM, Sang-taek Landscape Change and Settlement Reorganization during the Middle Chulmun period in Southern Korea. Prehistoric Landscape Shifts in the East Asian Inland Seas” Session at the 4th worldwide conference of Society for East Asian Archaeology (SEAA), Jun 03, 2008, Beijing, China. (本人発表).
 - NAKAMURA, Shin’ ichi The formation of urban landscape in the lower Yangtze area: considerations on the Liangzhu archaeological sites. Prehistoric Landscape Shifts in the East Asian Inland Seas” Session at the 4th worldwide conference of Society for East Asian Archaeology (SEAA), Jun 03, 2008, Beijing, China. (本人発表).
 - POPOV, Alexander; TABAREV, Andrei Landscape shift and Neolithic remains of south-western Primorye in the middle Holocene. Prehistoric Landscape Shifts in the East Asian Inland Seas” Session at the 4th worldwide conference of Society for East Asian Archaeology (SEAA), Jun 03, 2008, Beijing, China. (本人発表).
 - NAKAMURA, Daisuke Appearance of Jasper tubular beads and the trade development in the Far East. Prehistoric Landscape Shifts in the East Asian Inland Seas” Session at the 4th worldwide conference of Society for East Asian Archaeology (SEAA), Jun 03, 2008, Beijing, China. (本人発表).
 - GILLAM, Christopher Modeling Cultural Landscapes: Examples from East Asia and the Americas. Prehistoric Landscape Shifts in the East Asian Inland Seas” Session at the 4th worldwide conference of Society for East Asian Archaeology (SEAA), Jun 03, 2008, Beijing, China. (本人発表).
 - BAUSCH, Ilona Changing Jomon Landscape Perception and Use, from the Perspective of Jadeite Exchange. Prehistoric Landscape Shifts in the East Asian Inland Seas” Session at the 4th worldwide conference

of Society for East Asian Archaeology (SEAA), Jun 03, 2008, Beijing, China. (本人発表).

- NAKAJIMA, Tsuneo Prehistoric Waterside Landscape in East Asia. Prehistoric Landscape Shifts in the East Asian Inland Seas” Session at the 4th worldwide conference of Society for East Asian Archaeology (SEAA), Jun 03, 2008, Beijing, China. (本人発表).
- TAKAMIYA, Hiroto Long Distance Exchange and Food Stress in the Prehistory of Okinawa, Japan. “Prehistoric Landscape Shifts in the East Asian Inland Seas” Session at the 4th worldwide conference of Society for East Asian Archaeology (SEAA), Jun 03, 2008, Beijing, China. (本人発表).
- UCHIYAMA, Junzo Prehistoric landscape shifts as seen from human-wild boar relations in Jomon Japan. Prehistoric Landscape Shifts in the East Asian Inland Seas” Session at the 4th worldwide conference of Society for East Asian Archaeology (SEAA), Jun 03, 2008, Beijing, China. (本人発表).
- 榎林啓介 中国新石器時代における景観の変容-景観考古学から見た中国考古学転換の模索-. 第1回景観セミナー, 2008年05月26日, 京都市下京区. (本人発表).
- 中井精一 外部性の言語学としての方言研究. 日本語学会2008年度春季大会, 2008年05月17日, 東京都世田谷区. (本人発表).
- TKACHEV, Sergey.; TKACHEVA, N.N. Prospects of energy policy of Russia in the Far East. XVI International conferences Cultural exchange between the countries of Northeast Asia and the Russian Far East, Apr 24, 2008-Apr 28, 2008, Vladivostok, Russia. (ロシア語) (本人発表).
- LIM, Sangtaek New Perspectives on Socio-economic Interchanges between Southern Korean Peninsula and Japanese Kyushu Island during the Neolithic Period. Yongnam and Kyushu archaeological society, 2008, . (ハンデル語) (本人発表).

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- 佐野静代 琵琶湖岸におけるヨシ帯の景観変化の長期的検証. Annual Review Meeting of the ILBM-Governance Project, 2009年03月02日-2009年03月07日, 滋賀県大津市.
- SEYOCK, Barbara Archaeology of Korea: From Bronze Age to the Three Kingdoms. , Feb 04, 2009, Bochum, Germany. (その他)
- SEYOCK, Barbara Archaeology of Korea: From Palaeolithic to Mumun culture. , Jan 28, 2009, Bochum, Germany. (その他)
- SEYOCK, Barbara On mirrors, swords and jewels - Early Japan's relations to mainland East Asia. Ancient Japan - Origins and Formation, Jan 23, 2009-Jan 24, 2009, Bochum, Germany.
- SEYOCK, Barbara Archaeology of Korea: Introduction to the archaeology of Korea. , Jan 21, 2009, Bochum, Germany. (その他)
- 高宮広土 マガキガイ：沖縄諸島先史時代におけるフードストレスについて. 第62回日本人類学会大会, 2008年11月02日, 名古屋市千種区.
- 板倉有大 縄文時代石器からみた日韓交流—磨製石斧を中心として. 2008年釜山博物館国際学術シンポジウム『韓日文化交流—その新しい歴史の幕を開く』, 2008年10月30日, 大韓民国釜山市.
- 安室知 日本における餅の民俗文化. 東アジア食生活学会, 2008年10月25日-2008年10月26日, 大韓民国ソウル市.
- 高宮広土 栽培植物からみた沖縄と北海道：沖縄. 北海道埋蔵文化財センター文化財講座, 2008年10月18日, 北海道江別市.
- 安室知 伝承カモ猟の文化資源化とワイズ・ユース. 人文地理学会112回歴史地理研究部会, 2008年09月27日, 滋賀県大津市.
- 中村大 縄文人は不平等?. 東京都埋蔵文化財センター第3回文化財講演会, 2008年09月20日, 東京都多摩市.
- 飯田卓 海暮らしの風景—石西礁湖と南大東島. , 2008年06月14日, 沖縄県島尻郡南大東村.
- KIM, Jangsuk Elite Strategy and the Spread of Technological Innovation: The Spread of Iron in the Bronze Age Societies of Denmark and Southern Korea. Special Lecture at Korea Institute at Harvard University, Apr 15, 2008, Cambridge, USA.

調査研究活動

【国内調査】

- ・沿海州の新石器化期に関する資料収集. 東京都渋谷区、神奈川県横浜市港北区, 2009年03月24日-2009年03月26日. (POPOV, Alexander、中村大) .
- ・菊池川流域の新石器化期に関する資料収集. 熊本県山鹿市、菊池市, 2009年03月22日-2009年03月23日. (板倉有太) .
- ・琉球地方における新石器化期に関連する資料調査. 沖縄県中頭郡読谷村、中頭郡西原町、那覇市, 2009年03月15日-2009年03月18日. (POPOV, Alexander、TABAREV, Andrei、高宮広土、伊藤慎二) .
- ・言語WGに関する資料収集. 鹿児島県大島郡瀬戸内町、喜界町, 2009年03月15日-2009年03月18日. (中井精一、LONG, Daniel) .
- ・景観研究に関する資料収集. 京都市北区, 2009年03月10日-2009年03月28日. (LINDSTRÖM, Kati) .
- ・景観研究に関する資料収集. 京都市北区, 2009年03月09日-2009年03月18日. (BORRE, Caroline) .
- ・GIS分析に関する調査. 京都市北区, 2009年03月09日-2009年03月20日. (GILLAM, Christopher) .
- ・北陸地方の新石器化期に関する資料収集. 富山県中新川郡立山町、富山市、氷見市、石川県鳳珠郡能登町, 2009年02月24日-2009年02月26日. (中村大、稲畑航平) .
- ・沿海州WGに関する資料収集. 東京都文京区, 2009年02月21日-2009年02月22日. (POPOV, Alexander) .
- ・言語景観に関する資料収集. 大阪府豊中市, 2009年02月20日-2009年02月21日. (LONG, Daniel) .
- ・北海道の新石器化期に関する資料収集. 東京都渋谷区, 2009年02月20日-2009年02月22日. (中村大) .
- ・北海道の現代化期に関する資料収集. 北海道札幌市、小樽市、大阪府豊中市, 2009年02月14日-2009年02月19日. (高岡弘幸) .
- ・沿海州WGに関する資料収集. 東京都多摩市、文京区、八王子市, 2009年02月05日-2009年02月07日. (POPOV, Alexander) .
- ・言語WGに関する資料収集. 富山県富山市、熊本県熊本市, 2009年02月03日-2009年02月11日. (亀山大輔) .
- ・鹿児島県トカラ諸島の先史景観に関する資料収集調査. 鹿児島県鹿児島郡十島村、奄美市、大島郡瀬戸内町、鹿児島市, 2009年01月31日-2009年02月10日. (伊藤慎二) .
- ・現代化期に関する資料収集. 京都市北区, 2009年01月30日-2009年01月31日. (春田直紀) .
- ・北海道の新石器化期に関する資料調査. 北海道札幌市, 2009年01月09日-2009年01月12日. (中村大) .
- ・琵琶湖地域における新石器化期に関する資料収集. 奈良県奈良市, 2008年12月23日-2008年12月24日. (瀬口眞司) .
- ・菊池川流域および有明海沿岸地域の現代化期に関する調査. 熊本県菊池市、福岡県柳川市, 2008年12月20日-2008年12月21日. 中井精一、春田直紀、亀山大輔.
- ・北海道の新石器化期に関する資料収集. 東京都渋谷区, 2008年12月20日-2008年12月21日. (中村大) .
- ・現代化期に関する資料収集. 大阪府豊中市、熊本県菊池市, 2008年12月18日-2008年12月21日. (高岡弘幸) .
- ・伝統的稲作に関する資料収集. 鹿児島県奄美市, 2008年12月14日-2008年12月19日. (細谷葵) .
- ・琉球地方の新石器化期に関する資料調査. 沖縄県那覇市、大島郡与論町、大島郡地名町, 2008年12月12日-2008年12月17日. (伊藤慎二) .
- ・中国の新石器化期に関する資料収集. 石川県金沢市, 2008年11月22日-2008年11月24日. (楨林啓介) .
- ・札幌市域の近世絵図関連資料および鉄製農具の調査. 北海道札幌市、岩手県盛岡市, 2008年11月21日-2008年11月30日. (深澤百合子) .
- ・現代化期に関する資料収集. 大阪府吹田市, 2008年11月15日-2008年11月16日. (中井精一、LONG, Daniel) .
- ・北陸地方の新石器化期に関する資料調査. 新潟県長岡市、十日町市、長野県茅野市, 2008年11月12日-2008年11月13日. (内山純蔵、GILLAM, Christopher、JORDAN, Peter、ZEBALLOS, Carlos、中村大) .
- ・北陸地方の現代化期に関する資料収集. 富山県富山市, 2008年11月06日-2008年11月10日. (高岡弘幸) .

- ・新石器化期に関する資料調査. 福井県若狭市、滋賀県長浜市, 2008年11月02日. (内山純蔵、GILLAM, Christopher、JORDAN, Peter、SEYOCK, Barbara、ZEBALLOS, Carlos、細谷葵、榎林啓介、中村大).
- ・北部九州の新石器化期に関する資料収集. 佐賀県佐賀市, 2008年10月26日-2008年10月27日. (瀬口眞司).
- ・景観変化と植物遺存体に関する調査. 鹿児島県種子島町, 2008年10月23日-2008年10月26日. (高宮広土).
- ・言語WGに関する資料収集. 静岡県新居町、富山県南砺市, 2008年10月03日-2008年10月05日. (中井精一).
- ・人間と動物の関係に関する調査. 鹿児島県奄美市, 2008年09月17日-2008年09月22日. (大西秀之).
- ・植物遺存体のサンプリングおよび喜界島の予備調査. 鹿児島県奄美市、喜界町, 2008年09月07日-2008年09月13日. (高宮広土).
- ・宋代の墓制に関する資料収集. 広島県東広島市、福岡県福岡市東区, 2008年08月27日-2008年08月30日. (榎林啓介).
- ・北海道の新石器化期に関わる調査(浜大樹2遺跡). 北海道広尾郡大樹町、札幌市, 2008年08月15日-2008年08月26日. (BAUSCH, Ilona).
- ・新石器化期に関する現地調査. 東京都三宅島, 2008年08月15日-2008年08月19日. (中村大).
- ・北海道の新石器化期に関する資料収集. 東京都渋谷区, 2008年08月06日-2008年08月08日. (中村大).
- ・新石器化期に関する資料収集. 広島県庄原市, 2008年08月05日-2008年08月07日. (内山純蔵、榎林啓介).
- ・北海道の現代化期に関する資料調査. 北海道札幌市, 2008年07月29日. (大西秀之).
- ・北海道の現代化期に関する資料調査. 北海道帯広市, 2008年07月29日-2008年07月29日. (池谷和信).
- ・北海道および東北地方北部の新石器化期に関わる資料収集. 北海道千歳市、江別市、礼文町、青森県八戸市、青森市, 2008年07月10日-2008年07月19日. (BAUSCH, Ilona、内山純蔵).
- ・新石器化期に関する資料調査. 京都府舞鶴市, 2008年07月01日-2008年07月02日. (瀬口眞司).
- ・菊池川流域における考古遺跡と景観に関する調査. 熊本県玉名郡和水町、山鹿市, 2008年06月29日. (春田直紀、橋本道範、板倉有大).
- ・河川地帯における日常生活と景観に関する調査. 佐賀県神埼市, 2008年06月28日. (春田直紀、橋本道範、板倉有大、亀山大輔、中井精一、高岡弘幸、榎林啓介).
- ・奄美大島における高床倉庫に関するフィールド調査. 鹿児島県奄美市, 2008年06月14日-2008年06月22日. (細谷葵).
- ・人間と動物の関係に関する調査. 沖縄県那覇市、鹿児島県奄美市、大瀬戸郡都内町, 2008年06月14日-2008年06月22日. (大西秀之).
- ・南大東島における調査. 沖縄県島尻郡南大東村, 2008年06月14日-2008年06月16日. (中井精一、LONG, Daniel、飯田卓、伊藤慎二).
- ・琉球地方における資料収集調査. 沖縄県那覇市, 2008年06月13日-2008年06月14日. (安室知).
- ・琉球地方の新石器化期に関する資料収集. 沖縄県国頭郡今帰仁村, 2008年06月12日. (高宮広土).
- ・中国の新石器化期に関する資料収集. 広島県東広島市, 2008年05月17日-2008年05月20日. (榎林啓介).
- ・奄美大島のハマオレ(浜下り)と海岸景観に関する調査. 鹿児島県奄美市, 2008年04月05日-2008年04月09日. (飯田卓).

【海外調査】

- ・浙江省の新石器化期に関する資料収集. 中国長沙市、武漢市、上海市, 2009年03月15日-2009年03月24日. (中島経夫、中島美智代、細谷葵、榎林啓介).
- ・20世紀初頭の景観イメージ等の資料収集. エストニア、タリン, 2009年02月04日-2009年02月13日. (LINDSTRÖM, Kati).
- ・中国浙江省の新石器化期に関する資料調査. 中国上海市、嘉興市、寧波市, 2009年01月13日-2009年01月22日. (榎林啓介、細谷葵).
- ・景観研究に関する資料収集. エストニア、タリン, 2008年12月20日-2009年01月03日. (LINDSTRÖM, Kati).

- ・先史時代から漢代における考古遺跡のフィールド調査. 中国陝西省西安市, 2008年11月30日-2008年12月04日. (楨林啓介).
- ・千島列島の自然景観に関するデータ収集. アメリカ合衆国シアトル市, 2008年11月13日-2008年11月17日. (手塚薫).
- ・中国江西省および湖南省における新石器化期遺跡のフィールド調査. 中国江西省、湖南省, 2008年10月26日-2008年11月02日. (中村慎一).
- ・データベース構築およびスキャン技術に関する調査. 英国ノリッチ市、ヨーク市, 2008年09月28日-2008年10月29日. (ZEBALLOS, Carlos).
- ・中国浙江省における新石器化期遺跡のフィールド調査. 中国浙江省, 2008年09月25日-2008年10月03日. (中村慎一).
- ・Unseo-dong 出土資料の調査. Incheon, Gyeonggi province, Korea, 2008年08月13日. (LIM, Sang-taek).
- ・GIS分析技術に関する調査. アメリカ合衆国カリフォルニア州レッドランズ, 2008年07月13日-2008年07月30日. (ZEBALLOS, Carlos).
- ・Survey on Neolithic Artifacts from Yongjang-ri Site. Gyeongju, Gyeongbuk province., 2008年06月24日. (LIM, Sang-taek).
- ・中国における中世陶磁器交易に関する調査. 中国北京市、大連市、上海市、景德鎮市, 2008年06月07日-2009年06月22日. (SEYOCK, Barbara).
- ・中国浙江省におけるフィールド調査. 中国浙江省余姚市, 2008年06月06日-2008年06月08日. (中村慎一).
- ・村落景観に関するフィールド調査. エストニア、タリン, 2008年06月06日-2008年07月02日. (LINDSTRÖM, Kati).
- ・沿海州における新石器化期の資料調査. 中国ハルビン市, 2008年05月30日-2008年06月02日. (POPOV, Alexander、伊藤慎二).
- ・浙江省余姚市田螺山遺跡の動物遺存体に関する調査. 中国湖北省武漢市, 2008年05月12日-2008年05月18日. (中島経夫、中島美智代).
- ・Observation of Neolithic Artifacts from Bibong-ri Site. Kimhae, Gyeongnam province, Korea, 2008年04月25日. (LIM, Sang-taek).

社会活動・所外活動

【依頼講演】

- ・ヨーロッパのストーンサークル. 世界遺産登録推進フォーラム「レッツゴー！ストーンサークル」, 2009年03月14日, 秋田県大仙市. (中村大).
- ・中国文学研究と高知の文人たち. 高知県立文学館平成20年度文学カレッジ, 2009年01月24日, 高知市. (高西成介).
- ・出土文物から見る中国古代. 千早赤阪村くすのきホール歴史講座, 2009年01月21日, 東京都港区. (小田木治太郎).
- ・田中貢太郎と中国の怪談. 文部科学省特定領域研究にんぷろ市民セミナー, 2008年12月06日, 高知市. (高西成介).
- ・妖怪絵巻 - 人はあやしきものに出逢う. odd eyeセミナー, 2008年08月31日, 高知市. (高岡弘幸).
- ・呪い・たたり・異界 - 民俗学者と闇の世界について語りあいましょう. 高知女子大学文化学部まちかど文化談義, 2008年06月05日, 高知市. (高岡弘幸).

【メディア出演など】

- ・みんなのラジオ (コメンテーター). RKC高知放送, 2009年01月07日. (高西成介).
- ・みんなのラジオ (コメンテーター). RKC高知放送, 2008年11月04日. (高西成介).
- ・ガラスの地球を救えスペシャル 見つめよう！今ここにある危機. そして再生へ (コメンテーター). 朝日放送 (ABC), 2008年04月29日. (内山純蔵).

- ・みんなのラジオ 妖怪研究の最前線（コメンテーター）. RKC高知放送, 2008年04月. (高岡弘幸).

【その他】

- ・2009年03月04日 特別授業「生き物のくらしと自然かんきょう-昔の人の生活について」京都市立室町小学校（内山純蔵）
- ・2009年01月15日 富山県氷見市上久津呂遺跡調査分析指導（財団法人富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所、富山市）（内山純蔵）
- ・2008年10月09日 特別授業「生き物のくらしと自然かんきょう-縄文時代人に学ぶ環境の心」京都市立室町小学校（内山純蔵）
- ・2008年09月29日 富山県氷見市上久津呂遺跡調査分析指導（財団法人富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所、富山市）（内山純蔵）

報道等による成果の紹介

【報道機関による取材】

- ・縄文人の声に耳を澄まし対話—モノの考古学からの脱却. 東京新聞, 2009年02月14日 夕刊, 7面. (小林達雄).
- ・味な日本の餅文化. 日本経済新聞, 2008年12月30日 朝刊, 文化面. (安室知).
- ・弥生人、田んぼでコイ養殖 琵琶湖博物館学芸員ら、英考古学誌に大量の歯、出土冬場の食料か. 朝日新聞, 2008年11月10日. (中島経夫).
- ・遺跡の動物の骨に人の営みを見る. 京都新聞, 2008年10月08日 朝刊, 10面. (内山純蔵).
- ・日本人解剖 沖縄の謎 形質変えた本土人移住. 産経新聞, 2008年09月22日. (高宮広土).
- ・活動分野での体験発表：現地で学ぶ奄美の環境＝同社女子大ら聞き取り調査. 奄美新聞, 2008年09月19日 朝刊. (大西秀之).
- ・Carp farming may have begun in Yayoi Period. The Daily Yomiuri, 2008年09月19日. (中島経夫).
- ・弥生人もコイ養殖 幼魚の歯出土 冬の保存食か. 佐賀新聞, 2008年09月19日. (中島経夫).
- ・Carp farming may date to Yayoi. The Japan Times, 2008年09月19日. (中島経夫).
- ・弥生人もコイ養殖 歯の化石分析で判明. 茨城新聞, 2008年09月18日. (中島経夫).
- ・弥生人もコイ養殖 歯の化石出土で判明. 琉球新報, 2008年09月18日. (中島経夫).
- ・愛知の弥生人 コイが大好き 養殖 歯の化石分析で判明. 北陸中日新聞, 2008年09月18日. (中島経夫).
- ・弥生人もコイを養殖 歯の化石分析で判明. 北海道新聞, 2008年09月18日. (中島経夫).
- ・弥生人もコイ養殖 幼魚の歯の化石出土. 日本経済新聞, 2008年09月18日. (中島経夫).
- ・厳しい冬の保存食 弥生人もコイ養殖. 日本経済新聞, 2008年09月18日. (中島経夫).
- ・弥生人もコイ養殖 歯の化石分析で判明. 南日本新聞, 2008年09月18日. (中島経夫).
- ・弥生人もコイ養殖 歯の化石出土 冬の保存食に利用か. 東奥日報, 2008年09月18日. (中島経夫).
- ・コイ養殖弥生時代から 清須で幼魚の歯が出土 滋賀の県立博物館国内最古の事例と発表. 中日新聞, 2008年09月18日. (中島経夫).
- ・弥生人もコイ養殖 国内最古の事例 幼魚の歯化石を分析. 中国新聞, 2008年09月18日. (中島経夫).
- ・弥生人がコイ養殖 愛知の朝日遺跡 幼魚の歯出土. 大分合同新聞, 2008年09月18日. (中島経夫).
- ・弥生人もコイ養殖 愛知朝日遺跡に歯の化石 国内最古, 保存食か. 静岡新聞, 2008年09月18日. (中島経夫).
- ・弥生人もコイ養殖 歯の化石を分析し判明 冬の保存食か. 神戸新聞, 2008年09月18日. (中島経夫).
- ・弥生人がコイ養殖 愛知・朝日遺跡幼魚の歯化石多数出土. 信濃毎日新聞, 2008年09月18日. (中島経夫).
- ・弥生人もコイ養殖 愛知朝日遺跡, 最古の事例 琵琶湖博物館調査. 産経新聞, 2008年09月18日. (中島経夫).
- ・弥生人もコイを養殖 歯の化石分析で判明. 山梨日日新聞, 2008年09月18日. (中島経夫).
- ・弥生人もコイ養殖 幼魚の歯化石多数出土 国内最古例冬の保存食か. 山陽新聞, 2008年09月18日. (中島経夫).

- ・弥生人もコイ養殖 歯の化石を分析. 山口新聞, 2008年09月18日 . (中島経夫) .
- ・弥生時代コイ養殖か 幼魚の歯多数出土 国内最古の事例. 高知新聞, 2008年09月18日 . (中島経夫) .
- ・弥生人もコイ養殖 幼魚の歯の化石多数出土. 熊本日日新聞, 2008年09月18日 . (中島経夫) .
- ・弥生人がコイ養殖 幼い歯の化石出土. 京都新聞, 2008年09月18日 . (中島経夫) .
- ・弥生人もコイ養殖 幼魚の歯出土 国内最古, 冬の保存食に. 岐阜新聞, 2008年09月18日 . (中島経夫) .
- ・弥生人もコイ養殖 歯の化石分析で判明. 岩手日報, 2008年09月18日 . (中島経夫) .
- ・弥生人もコイ養殖 朝日遺跡で幼魚の化石. 沖縄タイムス, 2008年09月18日 . (中島経夫) .
- ・ユーモラスな中国の「鬼」. 高知新聞, 2008年09月14日 朝刊. (高西成介) .
- ・縄文人、イノシシ飼育!?京の研究者新説. 京都新聞, 2008年09月10日 朝刊, 26面. (内山純蔵) .
- ・土佐の猿候. 2008年07月, 月刊高知朝日 . (高岡弘幸) .
- ・里湖と暮らし 未来探る. 朝日新聞, 2008年06月28日 朝刊. (佐野静代) .
- ・内湖再生へ問題提起大津で研究会. 京都新聞, 2008年06月26日 . (中島経夫) .

本研究**プロジェクト番号:** R-03**プロジェクト名:** 民族／国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明 —中央ユーラシア半乾燥域の変遷**プロジェクト名(略称):** イリプロジェクト**プロジェクトリーダー:** 窪田順平**プログラム/研究軸:** 資源領域プログラム**ホームページ:** <http://www.ilipro.com/index.html>**○研究目的と内容(2008年4月～2009年3月)****研究の目的**

近年世界的に見ても環境問題の背景に、国境、民族/国家、宗教、生業（農業と遊牧）、都市とその周辺といった人間によって作られた「境界」の問題が存在する。本プロジェクトでは、環境問題に関わる「境界」の問題を軸として、中央ユーラシア半乾燥地域における環境と人間の相互作用の歴史の変遷を解明することを目的とする。特に、半乾燥地域にあって、遊牧や限定的なオアシス農業といった土地利用形態から、定住化や大規模な農業開発へと資源利用（生業）の大きな変化が地域の生態系へ与えた影響を明らかにし、この地域における資源利用の持続性を検証する。これによって、対象地域だけでなく、半乾燥・乾燥地において、今後さらに想定される農地開発の進行といった人間活動、温暖化など自然環境変動などが地域の環境に与える影響の評価に資するとともに、民族、言語、宗教などが異なる多様な集団が存在する地域における望ましい国家のあり方を考えるための基礎となることが期待される。

背景

地球環境問題は、人間の生み出した様々な技術、生活様式の拡大等によって生じた人間活動と、その生存を支える環境との間で生じた矛盾・問題と考える。また問題の要因や影響範囲が地域を越えて広域化・複雑化し、特に近年の人間活動の著しい拡大により顕在化した。一方で人間はその歴史の中で環境の変化に対して適応を図ってきた。本プロジェクトは、中央ユーラシア半乾燥地域について従来の民族や国家の盛衰という単純な図式での歴史的理解ではなく、地球環境問題の根底に存在する「境界」の問題に焦点をあて、人間による適応の変遷を総合的に考察し、地球環境問題解決に資することを旨とする。

対象地域は半乾燥域という水資源が限られた人間活動のフロンティアにあって、社会主義的近代化の開発が行われた、あるいは中国側では現在も開発が進行中であることによる現代的な環境問題を抱える地域でもある。これら顕在化した問題解決のための検討も無論行うが、むしろ環境問題の背景となった人間の営みについて実証的・総合的に歴史の変遷を考察することより地球環境問題の解決に資する。

研究方法

ユーラシア中央部の半乾燥地域にあって、中国・カザフスタンにまたがりバルハシ湖へ注ぐイリ河流域とキルギス、ウズベキスタンなど周辺地域を対象とする。同地域は、ユーラシアに広大に広がる半乾燥・乾燥域の中でも東西に連なる天山山脈の北側にあって比較的降水量に恵まれた地域で、遊牧、農業共が可能な地域である。歴史的には東西交流の要衝であり、様々な遊牧集団が興亡を繰り返した。

プロジェクトでは、まずイリ河およびその周辺地域における民族/国家の移動、盛衰や農業、牧業、およびそれらの森林利用の形態を含めた生業の変化、水利用形態、地域の気候等の歴史の変遷を、歴史文献等各種資料の解読および雪氷コアや湖底堆積物、樹木年輪試料などの代替記録媒体（プロクシ）の解析、さらに考古学的調査研究などによって解明する。次に対象地域の生業、例えば農業や工業、林業、遊牧業それぞれが環境に与える影響等を調査し、近年の人間活動と環境変化を、背景となる社会的、宗教的、文化的要因と関連させつつ解明する。さらにこれらを総合して、もとより同じ環境にあったにも関わらず、近代以降異なる国家に分断された上下流を多角的に比較検討することにより、環境問題における「境界」の問題を考察する。

○進捗状況(2008年4月～2009年3月)

本研究1年目の昨年度は、各研究グループが現地共同研究機関と共同で現地調査を行って、現在の実態の把握と問題の絞り込みを行うとともに、協力体制の確率を行ってきた。本年度はこれらの協力体制に基づき、さらに現地調査、資料収集・分析、解析を進めた。

(1) 歴史・考古に関する研究

◎ カザフスタン考古学研究所と共同で、イリ河中流域タルガル川扇状地のクルガン（古墳）に関する現地調査を実施した。

◎ 中国の北京第一档案馆、台湾の中央研究院歴史言語学研究所、カザフスタン・アルマトゥ州国家公文書保管所、モスクワ公文書館での当該地域の高範囲な資料の収集を実施した。

(2) アイスコア・湖底堆積物に関する研究

◎ 昨年度はキルギスの天山山脈・グレゴリア氷河でアイスコア採取を行い、氷河最上部（4600m）で2本の氷コアを氷河底面まで（85m, 63m）採取した。本年度は、採取したアイスコアの分析を進めた。

◎ 昨年度末に、カザフスタン地質学研究所、中国寒区旱く工程研究所との共同で、バルハシ湖において6.2m湖底堆積物コアを採取し、本年度はその分析を進めた。またカザフスタン地質学研究所と共同で本年夏に1m程度のコア10本の採取と、音波探査による固定地形、堆積物調査を実施した。

(3) 現状分析班

イリ河のカザフスタン側の下流、中流で集中的な調査を行った。この際、自然科学的な植生、土壌、水文といった研究グループと、農業経済や人類学などの研究グループとがフィールドを共有しながら作業をすすめている。また衛星情報を用いた広域的な土地利用変遷の解析、政治や経済などマクロな面からの分析を合わせて実施した。なお、イリ河中・下流域の人間活動が河川生態系に与えた影響に関する研究は、UNESCO・IHP（International Hydrological Program）のひとつであるEchohydrologyプロジェクトの一部として実施している。

○共同研究者(所属・役職・研究分担事項)

◎ 窪田 順平 (総合地球環境学研究所・准教授・水文学)

歴史班(人文社会, 人間活動の歴史の変遷)

- 宇山 智彦 (北海道大学スラブ研究センター・教授・カザフ政治史、民族史解析)
- 加藤 雄三 (総合地球環境学研究所・助教・漢文文献解読・解析)
- 杉山 正明 (京都大学大学院文学研究科・教授・ペルシャ語、中国語文献解析)
- 承志 (総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員・満州語文献解析)
- 井上 充幸 (総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員・中国語文献解析)
- 井上 隆史 ((株)アジア・コンテンツ・センター・取締役・考古調査)
- 小沼 孝博 (学習院大学東洋文化研究所・助教・新疆史)
- 泉 拓良 (京都大学大学院文学研究科・教授・考古学)
- 小野 浩 (京都橋大学文学部・教授・ペルシャ語文献解析)
- 伍 躍 (大阪経済法科大学教養部・教授・東洋史)
- 華 立 (大阪経済法科大学教養部・教授・新疆農業史)
- 白石 典之 (新潟大学超域研究機構・教授・考古調査)
- 内記 理 (京都大学大学院文学研究科・大学院生・考古学)
- 野田 仁 ((財)東洋文庫・日本学術振興会特別研究員・カザフ近現代史)
- 林 俊雄 (創価大学文学部・教授・中央ユーラシア史・考古学)
- 古松 崇志 (京都大学人文科学研究所・助教・中国史)
- 堀 直 (元甲南大学文学部・教授・中央ユーラシア史)
- 宮 紀子 (京都大学人文科学研究所・助教・中国史)
- 村上 信明 (創価大学文学部・講師・中国史)
- 森谷 一樹 (大阪樟蔭女子大学・非常勤講師・漢文資料解析)
- 杜山那里 (京都大学大学院文学研究科・大学院生・東南アジア史)
- Irina Yerofeyeva (カザフスタン遊牧文化遺産研究所(カザフスタン共和国)・所長・宗教美術史)
- Karl Baipakov (カザフスタン考古学研究所(カザフスタン共和国)・所長・考古学)
- Dimitry Voyakin (カザフスタン考古学研究所(カザフスタン共和国)・研究員(文物保存部門長)・考古学)

歴史班(プロキシ分析, 自然環境の歴史の変遷復元)

- 相馬 秀廣 (奈良女子大学文学部・教授・湖底堆積物解析、リモートセンシング)
- 竹内 望 (千葉大学大学院理学研究科・准教授・雪氷コア生物解析)
- 藤田 耕史 (名古屋大学大学院環境学研究科・准教授・氷河変動解析)
- 石田 依子 (千葉大学大学院理学研究科・大学院生・アイスコア解析)

- 遠藤 邦彦 (日本大学文理学部・教授・湖底堆積物解析)
 植竹 淳 (大学共同利用機関法人情報・システム研究機構新領域融合研究センター (国立極地研究所勤務) ・特任研究員・雪氷生物)
- 岡本 祥子 (名古屋大学大学院環境学研究科・大学院生・アイスコア解析)
 幸島 司郎 (京都大学野生動物研究センター・教授・雪氷生物学)
 小林 修 (愛媛大学農学部附属演習林・助教・樹木年輪解析)
 小森 次郎 (日本大学文理学部自然科学研究所・非常勤講師・湖底堆積物解析)
 坂井亜規子 (名古屋大学大学院環境学研究科・助教・氷河変動解析)
 須貝 俊彦 (東京大学大学院新領域創成科学研究科・教授・変動地形)
 杉山 清彦 (駒澤大学文学部・講師・東洋史)
 千葉 崇 (東京大学大学院新領域創成科学研究科・大学院生・変動地形)
 直木 和弘 (千葉大学環境リモートセンシング研究センター・非常勤研究員・リモートセンシング)
 中澤 文男 (大学共同利用機関法人情報・システム研究機構新領域融合研究センター・特任研究員・アイスコア解析)
- 永塚 尚子 (千葉大学大学院理学研究科・大学院生・アイスコア解析)
 中山 裕則 (日本大学文理学部・教授・衛星解析)
 奈良間千之 (総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員・氷河変動解析)
 原口 強 (大阪市立大学大学院理学研究科・准教授・湖底堆積物解析)
 藤本 悠 (同志社大学大学院文化情報学研究科・日本学術振興会特別研究員・考古学)
 船田 良 (東京農工大学大学院共生科学技術研究院・教授・樹木年輪解析)
 布野 修司 (滋賀県立大学環境科学部・教授・環境建築デザイン)
 三宅 隆之 (大学共同利用機関法人情報・システム研究機構国立極地研究所・特任研究員・アイスコア解析)
- 宮田幸四郎 (大阪市立大学大学院理学研究科・大学院生・湖底堆積物解析)
 村田 泰輔 (東京大学大学院新領域創成科学研究科・客員共同研究員 (非常勤) ・湖底堆積物解析)
 吉永 佑一 (大阪市立大学大学院理学研究科・大学院生・湖底堆積物解析)
 Jean-Marc Deom (カザフスタン遊牧文化遺産研究所 (カザフスタン共和国) ・主任研究員・地質考古学)
 Renato Sala (カザフスタン遊牧文化遺産研究所 (カザフスタン共和国) ・主席研究員 (地質考古研究室) ・地質考古学)
- Bolat Aubekerov (カザフスタン遊牧文化遺産研究所 (カザフスタン共和国) ・主任研究員・地質学)
 Elena M. Aizen (アイダホ大学理学部 (アメリカ合衆国) ・准教授・気候学)
 Vladimir B. Aizen (アイダホ大学理学部 (アメリカ合衆国) ・教授・雪氷水文学)

現状分析班(人文社会)

- 小長谷有紀 (大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館・教授 (研究戦略センター長併任) ・遊牧システム解析)
 ○ 吉田世津子 (四国学院大学社会学部・准教授・カザフ遊牧業調査)
 阿部 健一 (総合地球環境学研究所・教授・地域研究)
 遠藤 崇浩 (総合地球環境学研究所・助教・国際河川問題解析)
 應地 利明 ((立命館大学) ・京都大学名誉教授 (立命館大非常勤講師) ・地理調査)
 岩下 明裕 (北海道大学スラブ研究センター・教授・中国語文献解析)
 尾崎 孝宏 (鹿児島大学法文学部・准教授・社会人類学調査)
 風戸 真理 (京都大学地域研究統合情報センター・非常勤研究員 (科学研究) ・民族学)
 梶浦 岳 (立正大学大学院地球環境科学研究科・大学院生・遊牧形態)
 児玉香菜子 (総合地球環境学研究所・研究員・社会人類学)
 嶋田 義仁 (名古屋大学大学院文学研究科・教授・民族学)
 シンジルト (熊本大学文学部・准教授・政治学)
 地田 徹朗 (東京大学大学院総合文化研究科・大学院生・中央アジア開発史)
 中村 知子 (東北大学東北アジア研究センター・専門研究員・民族学)

現状分析班(現在の自然環境)

- 舟川 晋也 (京都大学大学院地球環境学堂 (農学研究科両任) ・教授・土壌動態)
 ○ 松山 洋 (首都大学東京都市環境学部・准教授・気候変動解析)
 ○ 吉川 賢 (岡山大学大学院環境学研究科・教授・植生・森林生態解析)
 秋山 知宏 (愛知大学国際中国学研究センター・ICCS研究員・地下水動態)
 角野 貴信 (首都大学都市環境学部・助教・土壌有機物モデリング)

北村 義信	(鳥取大学農学部・教授・農地計画)
甲山 治	(京都大学次世代開拓研究ユニット・准教授・水文モデリング)
坂本 圭児	(岡山大学大学院環境学研究科・教授・森林・草原生態系)
清水 克之	(鳥取大学農学部・講師・灌漑計画)
塚本 裕介	(鳥取大学大学院農学研究科・大学院生・灌漑計画)
辻村 真貴	(筑波大学大学院生命環境科学研究科・准教授・水同位体分析、水循環解析)
夏原 由博	(京都大学大学院地球環境学・教授・生態系リスク評価)
錦見 浩司	(独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所新領域研究センター・経済統合研究グループ長・農業経済)
野部 公一	(専修大学経済学部・教授・カザフスタン農学史)
堀野 治彦	(大阪府立大学大学院生命環境科学研究科・教授・灌漑農業システム)
松尾奈緒子	(三重大学大学院生物資源学研究科・講師・乾燥地水文・植物生理)
森岡こころ	(京都大学大学院農学研究科・大学院生・土壌動態)
森本 幸裕	(京都大学大学院地球環境学・教授・景観生態学)
渡邊 紹裕	(総合地球環境学研究所・教授・代替媒体と歴史文献の統合研究)
渡邊三津子	(総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員・リモートセンシング解析)
Rudakova Kamilya	(東北大学大学院環境科学研究科・大学院生・国際河川管理)
Rasulov Zaur	(法政大学大学院政治学研究科・大学院生・環境政治学)
王 建新	(中国中山大学人類学系・訪問教授 (中山大学人類学系教授、民族学教研室主任)・文化人類学)
Roman Jashenko	(カザフスタン動物学研究所 (カザフスタン共和国)・研究員・植物・昆虫学)
Abylkhozhin Zhulduzbek	(カザフスタン教育科学省歴史・民族学研究所 (カザフスタン共和国)・教授・歴史学)

○当初の計画

本年度は、イリ河流域のカザフスタン側だけでなく、中国側流域まで含めた現地調査を中心とし、昨年度までに取得したアイスコア、湖底堆積物等の分析を並行して実施する計画であった。

(1) 計画通りに実行できた点

- ◎ バルハシ湖の湖底堆積物コア、グレゴリエフ氷河のアイスコアに関しては、今だ分析が進行中であり、今後さらに十分な検討が必要ではあるが、中央ユーラシアの気候変動に関して新たな知見が得られるものと期待している。
- ◎ イリ河中・下流域での人類学的・地理学的調査により、旧ソ連邦時代の農業開発や、ソ連邦崩壊の影響の実態が明らかになりつつある。

以上は、昨年度から進めていた現地機関との共同研究に関する協力体制の確立によって、本年度に十分な現地調査が行えたことに負うところが大きい。

(2) 当初の計画からの変更点

- ◎ イリ河下流デルタにおける水位変動が生態系に与える影響に関する調査、特に鳥類の移動追跡調査に関しては、使用機材の納入が遅れ、本年度の調査が十分に行えなかった。
- ◎ 中国側の新疆地区で予定していた現地調査が、治安状況等の悪化により延期せざるを得なかった。

○これまでの研究成果と今後の課題

(1) 歴史・考古に関する研究

- ◎ 台湾の中央研究院歴史言語学研究所と協定書を締結し、同研究所の清朝時代の各種文書、画像資料データベースを用いた共同研究を開始した。
- ◎ 中国・復旦大学歴史地理研究所、人民大学国学院西域歴史語研究所と共同研究に関する協定書を準備中である。

(2) アイスコア・湖底堆積物による気候復元に関する研究

- ◎ キルギス・グレゴリア氷河で採取されたアイスコアに関しては、採取の際に氷の下にあった土壌層が採取されたことより、氷の年代測定とは別に、土壌中の炭素により氷河の形成年代がほぼ特定できた。
- ◎ バルハシ湖の6.2m湖底堆積物コアに関して、帯磁率測定、土色測定、珪藻分析などの諸分析を行い、またAMS放射炭素年代法、Pb-210法等により年代決定を行った。現在は年代測定を進めており、暫定的な値ではあるが、本コ

アによって約2000年がカバーされていると考えられる。珪藻の分析結果からは、13～14世紀に水位がきわめて浅くなった時期があることが明らかになった。年代決定などに関して十分な検証が必要であるが、近年研究が急速に進みつつあるアラル海などの結果との対比や、氷河地形による氷河の前進・後退、年輪、アイスコアの結果を加えることで、中央ユーラシアの気候変動に関して従来と異なる新たな知見が得られることが期待される。

(3) 現状分析班

- ◎ カザフスタン、中国にまたがる対象地域全体の土壌分布の概要が把握できた。これにより、潜在的な植生の分布、あるいは農業生産性のポテンシャルに関し、面的な推定が可能となった。
- ◎ イリ河中流域の過去50年間の農業統計、水文資料を入手した。これらにより、1950年代以降の農業開発がイリ河およびバルハシ湖の水収支に与えた影響を定量的に明らかにすることが可能となった。
- ◎ イリ河中流域での聞き取り調査、様々な公文書等の収集により、旧ソ連邦時代の農業開発の変遷について、実態が明らかになりつつある。
- ◎ 衛星情報を用いて、広域的な土地利用変遷の解析、氷河の面積の縮小を解析した。

(4) 国際共同研究との連携

カザフ側のイリ河下流域での研究計画に関して、UNESCOのIHP(International Hydrological Programme)が推進するプロジェクトのひとつで、学際的な研究により流域生態系と水資源の持続的管理を目的とする「Ecohydrology」プロジェクトのDemonstration Site(現在世界で11ヶ所)のひとつに登録された。今後「Ecohydrology」プロジェクトとの連携を通じて、国際的な研究交流や成果の発信を行う予定である。

著書(編集等)

【編集・共編】

- ・窪田順平・承志・井上充幸編 2009年03月 イリ河流域歴史地理論集—ユーラシア深奥部からの眺め—。松香堂、京都市上京区、315pp.

論文

【原著】

- ・窪田順平 2008年04月 遊牧社会が生んだ「移動」の知恵。総合地球環境学研究所編 地球の処方箋—環境問題の根源に迫る。地球研叢書。昭和堂、pp.6-9.
- ・加藤雄三 2008年04月 アジア内陸半乾燥地の歴史が示唆すること。総合地球環境学研究所編 地球の処方箋—環境問題の根源に迫る—。地球研叢書。昭和堂、pp.14-17.
- ・林俊雄 2008年 ユーラシア草原の遊牧文明とその歴史的役割。世界平和研究 177 :15-26.
- ・Sugimori Y, Funakawa S, Pachikin KM, Ishida N and Kosaki T 2008 Soil salinity dynamics in irrigated fields and its effects on paddy-based rotation systems in southern Kazakhstan. Land Degradation and Development 19(3) :305-320.
- ・Takata, Y., Funakawa, S., Akshalov, K., Ishida, N., and Kosaki, T. 2008 Regional evaluation of the spatio-temporal variation in soil organic carbon dynamics for rainfed cereal farming in northern Kazakhstan. Soil Science and Plant Nutrition 54(5) :794-806.
- ・Kadono A, Funakawa S and Kosaki T 2008 Factors controlling mineralization of soil organic matter in Eurasian steppe area.. Soil Biology and Biochemistry 40(4) :947-955.

【総説】

- ・舟川晋也・小崎隆・矢内純太 2008年 カザフスタンにおける最新土壌研究—乾燥地・半乾燥地における持続的土地利用とは何か?— [講座] アジアにおける多様な土壌と我が国ペドロジストによる研究の最前線。土肥誌 79(4) :399-407.

会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・渡邊三津子・小長谷有紀・秋山知宏・窪田順平 カザフスタン共和国アルマトゥ州における社会主義的近代化の環

境史ーカザフスタン・ソフホーズを事例としてー. 日本地理学会 2009年春季学術大会, 2009年03月28日-2009年03月29日, 帝京大学, 八王子市. (本人発表).

- ・ 松山 洋・カダル=ケズル 中央アジアのバルハシ湖周辺における19世紀末以降の降水量変動について. 日本地理学会2009年春季学術大会, 2009年03月28日-2009年03月29日, 帝京大学, 八王子市.
- ・ 奈良間千之 衛星データを用いた中央アジア, 天山山脈における最近の氷河変動. 日本地理学会2009年春季学術大会, 2009年03月28日-2009年03月29日, 帝京大学, 八王子市.
- ・ Shimizu, K., Kitamura, Y. and Tsukamoto, Y Land and water use for irrigated agriculture in the lower Ili river basin, Kazakhstan. 9th International Conference on Dryland Development, Nov 07, 2008, Alexandria, Egypt. (本人発表).
- ・ 塚本裕介・北村義信・清水克之 カザフスタン国・イリ川下流域の灌漑農業における土地利用と水利用. 第63回農業農村工学会中国四国支部講演会, 2008年10月21日, 鯉城会館、広島市. (本人発表).
- ・ Jin NODA The History of Eastern Kazakhstan Written by a Tatar Imam: Beyond the Border of the Empires. Central Eurasian Studies Society, Ninth Annual Conference, Sep 20, 2008, Georgetown Univ., Washington, D.C.. (本人発表).
- ・ 舟川晋也・小崎 隆 中央アジア大規模灌漑農地における土壌塩性化リスクの評価ー異なるスケールから見た危険性と対策ー. 日本土壌肥料学会2008年度愛知大会, 2008年09月09日, 名古屋市立大学, 名古屋市.
- ・ 舟川晋也・角野貴信・牧野 彩・大塚恭平・Konstantin Pachikin・王 根緒・小崎 隆 中央アジア山間地における広域土壌分布ーテンション山脈北麓およびアルタイ山脈南麓における調査報告. 日本ペドロロジー学会2008年度大会, 2008年04月04日, 筑波大学, つくば市.

【ポスター発表】

- ・ 萩野志乃・中山裕則 衛星データによるバルハシ湖水域変化とイリ河沿い土地被覆の関係. (社)日本リモートセンシング学会第44回(平成20年度春季)学術講演会, 2008年12月05日, 東京工業大学, 横浜市. (本人発表).

学会活動(運営など)

【企画・運営・オーガナイズ】

- ・ International workshop “Reconceptualizing Cultural and Environmental Change in Central Asia: An Historical Perspective on the Future”, 主宰. 2009年02月01日-2009年02月02日, 総合地球環境学研究所, 京都市.

調査研究活動

【海外調査】

- ・ 中国, 北京第一档案馆における資料調査. 中国, 北京第一档案馆, 2008年09月.
- ・ カザフスタン・イリ河中流域におけるクルガン分布に関する考古学的調査. カザフスタン共和国, イリ河中流域, 2008年09月.
- ・ カザフスタン・イリ河中・下流域における民族学調査. カザフスタン共和国, イリ河中・下流域, 2008年08月.
- ・ カザフスタン・イリ河下流域バルハシ湖湖底堆積物調査. カザフスタン共和国, イリ河下流域バルハシ湖, 2008年08月.
- ・ カザフスタン, イリ河下流域における農業水利調査. カザフスタン共和国, イリ河下流域, 2008年08月.
- ・ カザフスタン・土壌調査. カザフスタン共和国, イリ河流域, 2008年05月.

報道等による成果の紹介

【報道機関による取材】

- ・ 氷河湖決壊の危機. 京都新聞, 2008年11月12日 朝刊.
- ・ トン地区の氷河湖はどう決壊した?. アズム新聞, 2008年09月08日 . (その他) キルギス語、キルギス共和国.

本研究**プロジェクト番号: R-04****プロジェクト名: 熱帯アジアにおける環境変化と感染症****プロジェクト名(略称): エコヘルス・プロジェクト****プロジェクトリーダー: 門司和彦****プログラム/研究軸: 資源領域プログラム****ホームページ: <http://www.chikyu.ac.jp/ecohealth/>****キーワード: 環境変化、感染症疫学、昆虫媒介性疾患、マラリア、デング熱、フィラリア、リーシュマニア、タイ肝吸虫症、水系感染症、熱帯アジア、媒介昆虫****○研究目的と内容(2008年4月～2009年3月)****研究目的**

- 1) 熱帯アジアの地球環境・地域環境の変化、特に森林減少と都市化、人口変動、ライフスタイルの変化が感染症の発生・流行等の健康プロフィールに与える影響について詳細かつ分野横断的な調査を実施し、比較検討することによって、環境変化と健康の関連についての理解を深化させる。
- 2) ヒトと感染症の長期的な関係について検討し、総合地球環境学的な(あるいは人類生態学的な)感染症対策とは何かを検討し、狭義の医学では重要視されてこなかった感染症研究・健康研究における「生態学的視点」ならびに「総合地球環境学的視点」の確立をめざす。

背景

近代の人類が抱える問題としては、以下の3つが特に深刻である。これらは地球環境問題そのもの、あるいはそれに密接に関連した問題である。(1)「開発」から取り残された人々の生存・生活・人間の安全保障の問題。すなわち、サハラ以南のアフリカでみられるように「開発」の失敗により、現地住民が深刻な生存の危機に直面している問題である。(2)「開発」に伴う未来可能性・環境問題。「開発」の成功は地域の未来や環境に対して必ずしもプラスに働くとはいえない。中国・東南アジア・インドでは、開発のもたらす矛盾がさまざまな環境問題となって噴出している。(3)これらの根底にある進歩・開発主義の根本的問題。先進国は進歩と開発を思想的な駆動力として近代を切り開いてきた。その行き詰まりが先進国の現在と未来に重くのしかかっている。この近代主義の問い直しが急務である。

環境変化と密接な関係にある感染症を例に、これらの問題を地球規模、人類全体の問題として考えたいという思いがプロジェクトの出発点にある。既存の、または他機関で行われている現在の感染症対策や研究は、その多くが近視眼的である。対策の成否は、病原体の性質、環境条件、人間活動(医療活動を含む)によって異なるが、エイズなどではとても成功したとは言えない状況にある。マラリアをとっても、裕福で、医療機関に出向いて抗マラリア薬が購入できる地域・世帯ではマラリアの流行は減少している。しかし、いまだに年間少なくとも80万人がマラリアで死亡し、関連した死亡を入れるとその数はかなりのものとなっている。さらに都市部ではデング熱対策も問題となる。このような感染症、なかでも「無視された感染症Neglected Infectious Diseases」を環境問題としてとらえる視点が不可欠だと考える。

一方、近代的な熱帯医学の発展以前は、マラリアによる乳児死亡率は出生1000対500以上であり、現在のような、出生1000対100で高いと感じる状況とは大きく異なっていた。そのような時代には、熱帯の森林開発は困難であり、かつ危険であった(特に外からの移入者にとって)。すなわち、マラリアの存在がある意味、森や「自然」を守っていたともいえる。近代において、その均衡が崩れたということは何を意味するのか。感染症を切り口に、人間生活と環境のかかわりについて再考する。

地球環境問題の解決にどう資する研究なのか?

功利的な意味において、プロジェクトの成果は「地球環境問題」の解決に直接的に資するものではない。感染症対策が効率的で効果的になれば、これまで病に苦しんでいた人々を減らすことが可能かもしれないが、それは一方で、死亡率を減少させ、開発を促進する。しかし、その開発が秩序のとれたものとなる保証はない。

本研究を通して、理解できるだろうことは、環境と人間生活と感染症の流行に対する複雑なメカニズムについてで

ある。感染は宿主である人間と病原体の共進化の結果であり、生態系の重要な一部である。そこから導き出される結論は、例えば、「地球が温暖化すると日本でマラリアが発生する可能性は高まるかもしれないが、日本経済がある程度、保たれていれば、エアコンを使い、網戸と蚊帳を使い、殺虫剤をつかって、治療を的確に行えば大流行はほぼ起こらないであろう」ということであり、「それができない地域ではマラリアが実際に増加するかもしれない」ということである。このような病気や死生に関する多元的な認識が地球環境問題を考えていく場合に不可欠である。

研究内容

1) 研究対象：熱帯アジアの環境変化と感染症

環境との関連が強い疾患の事例として、蚊によって媒介されるマラリア（原虫による疾患）、デング熱（ウイルスによる疾患）、フィラリア（寄生ぜん虫による疾患）（以上は蚊によって媒介される）、リーシュマニア（原虫による疾患）サイチョウバエによって媒介される）などの節足動物媒介性疾患を中心に、タイ東北部とラオスで重要なタイ肝吸虫（川魚の生食によって感染し、長期的に胆管癌の発症リスクとなる）と、バングラデシュのコレラ等の水系感染症を主要な対象疾患として調査を進めている。タイ肝吸虫は、環境変化→生業変化→食生活変化によって流行地域が変化している。バングラデシュの水系感染症は人口増加や気温・雨量の変化、洪水の発生などと関連している。いずれも有意義なデータが蓄積されてきている。今後、新たに重要な感染症のアウトブレイクが発生した場合、それを研究対象に加える可能性がある。

重点的な対象地域はベトナム、ラオス、バングラデシュである。いずれも人口増加等により、近年、環境変化が著しく、感染症の興亡が激しい地域である。

2) 視点と方法：生態学的・総合地球環境学的視点

「環境変化」と「ベクター生物の生態・行動への影響」「人間行動の変化」「病原体の変化」の関係を調べ、その3者の関係の上に現われる地域ごとの疾病の流行・発生の疫学像との関係をできるかぎり具体的、実証的に明らかにする。その上で、特定疾患の疫学像から環境変化を評価することを試みたい。これが可能であるか、また、環境学として有効であるかという問いも含めて検討する。

3) 実施体制：5つの研究班

a) 定点観察班：次の地域を重点調査地域としてデータを収集する。いずれも人口増加等による環境変化が著しく、感染症の興亡が激しい地域である。①ラオス・サワンナケート（マラリア、デング熱、タイ肝吸虫）、②ベトナム南部ビンフック県（マラリア）、③バングラデシュ（北西部：フィラリア、ダッカ市：デング熱、中部：リーシュマニア（カラ・アザール））。

b) 広域把握・情報ネットワーク班：次の2つの研究課題を柱とする。①既存の感染症流行マップを利用し、それを環境変化情報と重ねあわせる疾病地理学的アプローチ、②アジアに数箇所ある人口静態動態把握事業（Demographic Surveillance System, DSS）からの感染症と環境に関する情報入手、データ分析、他の研究データベースとのネットワーク構築・連携。

c) 地理・歴史文献研究班：環境変化と感染症発生についての文献調査および、歴史的記載を収集し、分析を進めている。

d) 感染症理論疫学・数理モデル班：地域のマラリア流行モデル等に環境変化が加わった場合を検討する。ベトナムビンフック県のデータの分析を事例とする。

e) 総括班は、環境評価・感染症の長期対策・ビジョン・政策開発を担当する。人類生態学の専門書の翻訳も行う。

各研究班に現地カウンターパート、ならびに欧米の有力研究者を入れて総合化を図り、日本発の国際プロジェクトを目指した。重点調査に加えて、疾病専門家、ベクター生態学専門家、人間行動研究者、環境・GIS等専門家、文化的アプローチの専門家、疫学専門家を配置して統合的なデータ収集を進めている。また、現地の研究者を養成して、現地との協力体制を一層緊密なものにしつつある。

○進捗状況(2008年4月～2009年3月)

(1) ラオス保健省国立公衆衛生研究所（NIOPH）及びバングラデシュ国際下痢症研究所（ICDDR, B）とMOUを結び、永

統的な研究体制を構築。またEarth System Science Partnership (ESSP) のGlobal Environment Changes and Human Health, 2007を訳出(総括班)。

(2) ラオス・サバナケット県・セボン郡内の遠隔地に住む少数民族の保健システム・学校保健・マラリア研究が進展。セボン郡での研究は、携帯電話を用いた感染者の把握とケアに関する研究段階。同県・ソンコン郡を対象に、地域・学校単位の環境・生活・健康の現状と変化を研究するための、新たな地域グループインタビュー方法や、モデル地区での環境、生活、食事、疾病の季節変動についての半定量的研究方法の開発を行う。ラオスでの調査研究を体系的かつ統合的に推進するため、日本の研究機関及び研究者間相互を結ぶネットワーク(Lao-Japan Consortium on Health Research)を立ち上げる。2008年9月には第二回ラオス国家保健研究フォーラムをビエンチャンで開催。2008年11月には、ラオス保健大臣を招いた特別合会を地球研で開催。中国改革開放後の社会変化・流動人口急増とエイズ流行の関係を、北部ラオス国境に接した雲南省西双版纳州で調査(定点観察班)。

(3) 衛星画像と地理情報システムを用いた、ラオスとバングラデシュの全土の土地被覆変化の解析に着手し、両国における他の研究班による、環境変化に連動した感染症解析に必要なデータ提供開始。熱帯感染症解析におけるGISの応用に関する研究を開始。ラオス・サバナケット県・ソンコン郡内(ラハナム地区)での母子保健に焦点を当てた人口保健調査(DSS)の継続と、同調査システムのペーパーレス化(ネットワーク化)の検討を開始(広域把握・情報ネットワーク班)。

(4) 国際下痢症研究所、京大防災研、筑波大学、ロンドン大学熱帯医学校と協力して、下痢症に焦点を当てた環境変化(気象変化)と感染症の研究を、バングラデシュ・チャンドプル県・マトラブ地区その他で開始。気象データの収集のために、マトラブ地区に自動気象観測装置を設置、気候と健康に関連した研究(感染症理論疫学的研究や、気候に関する数理モデル研究)が進展。またバングラデシュ政府疫学疾病対策研究所(IEDCR)と協力し、バングラデシュ全体の疾病発生状況についてのデータ研究を行った(感染症理論疫学・数理モデル班)。

(5) 東アジア・東南アジアの感染症関連歴史データを網羅的に収集・整理し、現代社会的文脈からの検討を進める。2008年9月には歴史学・医学・環境学・情報学分野の研究を国際的にネットワーキングすることを目的とした、台湾ワークショップを開催。イギリス議会文書(BPP)に含まれる膨大な疾病データから見る、世界規模での疾病推移把握といった、歴史学と情報学の融合を試みる(地理・歴史文献研究班)。

◎共同研究者(所属・役職・研究分担事項)

- ◎ 門司 和彦 (総合地球環境学研究所・教授・総括・ecohealth概念の深化)
- ◎ CGN Mascie-Taylor (ケンブリッジ大学生物人類学部(イギリス)・教授・バングラデシュの土壌伝播寄生虫・フィラリアの疫学)
- ◎ 小林 繁男 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授・森林農業班・班長:森とともに暮らす人々の安全保障)
- ◎ 飯島 渉 (青山学院大学文学部・教授・歴史文献班・班長:東・東南アジアの疾病史・医療史)
- ◎ Ahmed Kammuridin (大分大学総合科学研究支援センター・准教授・バングラデシュ・スリランカの下痢症・呼吸器感染症の分子疫学)
- ◎ 橋爪 真弘 (長崎大学熱帯医学研究所・COE研究員・バングラデシュ班・班長:気候と疾病発生の関連分析)
- ◎ 砂原 俊彦 (長崎大学熱帯医学研究所・助教・媒介蚊の生態学)
- ◎ 山本 太郎 (長崎大学熱帯医学研究所・教授・国際保健)
- ◎ 大場 保 (ブルーエコロジーリサーチ・主任研究員・人口学分析)
- ◎ Bounngong Boupha (ラオス国立公衆衛生研究所・所長・教授・ラオス・責任者)
- ◎ Sengchanh Kounnavong (ラオス国立公衆衛生研究所・研究部次長・ラオス・現地調査責任者(母子保健))
- ◎ Tiengkham Pongvongsa (ラオスサワンナケート県マラリアセンター・センター長・マラリア・タイ肝吸虫調査研究)
- ◎ Sirajul Islam (バングラデシュ国際下痢症研究所(ICDDR,B)・部門長・環境微生物部門・下痢症の疫学)
- ◎ Paul Hunter (イーストアングリア大学(イギリス)・教授・環境疫学)
- ◎ Zakir Hossain (バングラデシュ国立予防医学・社会医学研究所(NIPSOM)・准教授・環境疫学・保健情報)
- ◎ Mamudur Rahman (バングラデシュ国立疫学疾病対策研究所(IEDCR)・所長・疫学)

- Le Khanh Thuan (ベトナム国立マラリア学・寄生虫学・昆虫学研究所 (NIMPE)・所長・教授・ベトナム・責任者)
- 小林 潤 (国立国際医療センター国際医療協力局・支援官・国際保健)
- 蔡 国喜 (総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員・社会医療調査)
- 高木麻由美 (総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員・文芸表象)
- 辻 貴志 (総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員・生態人類学)
- 東城 文柄 (総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員・地域研究・林学)
- 市川 智生 (総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員・医療史)
- 西本 太 (京都大学東南アジア研究所・研究員・社会人類学)
- 岩佐 光広 (千葉大学文学研究科・大学院生 (博士)・文化人類学・医療人類学)
- 富田 晋介 (東京大学大学院農学生命科学研究科・助教・国際農学・社会調査)
- 渡辺 知保 (東京大学大学院医学系研究科・教授・環境中毒学・人類生態学)
- 村山 伸子 (新潟医療福祉大学健康科学部・教授・公衆栄養学)
- 高木 正洋 (長崎大学熱帯医学研究所・教授・医昆虫学・昆虫生態学)
- 中澤 秀介 (長崎大学熱帯医学研究所・助教・マラリア学・熱帯医学)
- 前野 芳正 (藤田保健衛生大学医学部・准教授・マラリア学)
- 渡部 久実 (琉球大学医学部・教授・免疫学)
- 都築 中 (長崎大学熱帯医学研究所・大学院生 (博士)・マラリア学)
- 阿部朋子 (長崎大学熱帯医学研究所・大学院生 (博士)・マラリアの流行関連要因の検討・マラリア看護学)
- 狩野 繁之 (国立国際医療センター研究所・部長・マラリア学)
- 石上 盛敏 (国立国際医療センター研究所・流動研究員・マラリア学)
- Phonepadith Xangsayarath (長崎大学大学院・大学院・公衆衛生学)
- Souraxay Phrommala (ラオス国立公衆衛生研究所・副所長・保健サービスの研究)
- Panom Phongmany (ラオス・サワナケート県保健部・次長・エイズ他感染症対策)
- Samlane Phompida (ラオス・マラリア研究所・所長・マラリア国家対策の策定)
- Alejandro Cravioto (バングラデシュ国際下痢症研究所 (ICDDR, B)・所長・教授・微生物学)
- Sandy Cairncross (ロンドン大学衛生熱帯医学大学院 (イギリス)・教授・環境疫学)
- 我妻ゆき子 (筑波大学大学院人間総合科学研究科・教授・疫学・国際保健)
- 林 泰一 (京都大学防災研究所・准教授・気象学)
- 寺尾 徹 (香川大学教育学部・准教授・気象学)
- 村田 文絵 (高知大学教育研究部自然科学系・助教・気象学)
- 谷村 晋 (立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部・准教授・空間疫学)
- 後藤 健介 (長崎大学熱帯医学研究所・助教・災害情報学)
- 伊藤 誠 (愛知医科大学医学部・准教授・感染症免疫学)
- 友川 幸 (広島大学大学院国際協力研究科・学振特別研究員・国際学校保健)
- A. S. G Faruque (バングラデシュ国際下痢症研究所・研究員・臨床化学)
- 田村 蔦枝 (日本赤十字九州国際看護大学大学院看護学研究科・大学院生・看護学)
- 野中 大輔 (東京大学大学院医学系研究科・大学院生・国際地域保健学)
- サトウ 恵 (マヒドン大学熱帯学部・大学院生・臨床検査学・寄生虫学)
- 倉上 京 (東京大学大学院医学系研究科・大学院生・国際保健学・ヘルスプロモーション)
- 崎坂香屋子 (東京大学大学院医学系研究科・助教・国際保健・プライマリヘルスケア・疫学統計)
- 青柳 潔 (長崎大学大学院医歯薬学総合研究科・教授・公衆衛生学)
- 森田英太郎 (特定非営利活動法人アジア保健教育基金・理事・事務局長・国際地域保健学)
- 北村 均 (特定非営利活動法人アジア保健教育基金・代表理事・国際協力)
- 矢島 綾 (東京大学大学院農学生命科学研究科・大学院生・環境衛生・農学)
- 森中 紘一 (特定非営利活動法人アジア保健教育基金・会員・国際医療協力・プロジェクトマネジメント)
- 今井 秀樹 (宮崎大学医学部・准教授・環境保健学)

○当初の計画 PRにおける計画

PRに進むにあたって提出した書類 (2008年1月) における計画は次の通りである。研究方法は、長期フィールドワーク、既存データの収集・分析、研究ネットワーク構築による。研究地域は、熱帯アジアのうち、ラオスとバングラデシュを重点的に実施し、ベトナム、インドネシア、ミャンマー、スリランカも研究対象とする。また、中国南

部、台湾、その他の地域も比較と研究の広がりのために一部研究対象とする。プロジェクトでは当初から、全体をフィールド個別研究班と総合・総括班の2つに大別しながら展開する。

これに対して、総合・総括班が総括班に、個別研究班が定点観察班にあたる点は一致しているが、実際には広域把握・情報ネットワーク班と感染症理論疫学・数理モデル班という総括班に近い位置付けの班の活動や、より特殊な位置付けの地理・歴史文献研究班の研究が拡大。うちモデル班は、その具体的な活動計画や班分けは、バングラデシュの気象と感染症班(1-2-1)や個別研究班内に、それぞれの調査対象地域に応じて幾つかの小班に細分されている。各グループの当初計画とそこからの変更点は以下の通りである。

● 1-1) ラオス班：当初の計画では、ラオス保健省・国立公衆衛生研究所とMOUを結び、ラオス統計局、ラオス保健省疾病対策局、同マラリア対策センター(CIMPE)、母子保健センター、スイス熱帯研究所、サバナケット保健局、サバナケットマラリアセンター、ソンコン郡病院、セボン郡と協力して、1) サバナケットDSS を用いた研究、2) サバナケットマラリア班、3) 全国班の研究を展開することを目標としている。これは現在招聘外国人研究員として来日している、Sengchanh Kounnavong医師他を中心として実施。他には秋道プロジェクトで構築した、ラハナム地区での人口静態動態調査システムthe Lahanam demographic surveillance system (ラハナムDSS)を用いて、継続的に、母子保健データ(乳児死亡の原因把握、それへの介入効果判定)、学校保健データ(タイ肝吸虫感染の発育への影響)、成人保健(秋道プロジェクトでの奥宮氏の糖尿病研究成果)における感染症の影響などを研究。更に本プロジェクトF S段階で予備的に開始した、セボン郡での少数民族のマラリア研究を展開し、森林利用との関係、アジア東西回廊の完成による人口移動、経済活動の変化の影響等を検討する(場合によっては隣接するベトナム側での調査も実施)。本プロジェクトは2007年からのラオス国家保健調査5ヵ年計画マスタープランに組み込まれており、ラオス全国班は成果をラオスの保健政策に活かす方策を研究実施。また、今後4年間わたりラオス国家保健調査フォーラムの開催に協力し、成果を公表していく予定。

今年度までの本プロジェクトの研究は、これらの当初計画におおむね沿って進展中。変更点としてはラハナムのDSSのペーパーレス化の検討開始が挙げられる。

● 1-2) バングラデシュ班：橋爪真弘をリーダーとして以下の研究を実施。

1-2-1) 気象と感染症班：当初の計画では、バングラデシュを拠点とする国際組織である国際下痢症研究所ICDDR, Bと協定を結び、そこを拠点として、京大防災研、筑波大学、ロンドン大学熱帯医学校と協力して、気象と下痢症を中心とした感染症の研究を実施することを目標としている。今年度までの本プロジェクトの研究は、これらの当初計画に沿って進行中。国際下痢症研究所の研究サイトであるマトラブDSSのデータの解析がすでに実施されており、これについては以下の実績が上がっている。

Hashizume M, Armstrong B, Wagatsuma Y, Faruque AS, Hayashi T, Sack DA., Rotavirus infections and climate variability in Dhaka, Bangladesh: a time-series analysis. *Epidemiol Infect.* 2007 Nov 8;:1-9 [Epub ahead of print] PMID: 17988426

Hashizume M, Armstrong B, Hajat S, Wagatsuma Y, Faruque AS, Hayashi T, Sack DA., Association between climate variability and hospital visits for non-cholera diarrhoea in Bangladesh: effects and vulnerable groups. *Int J Epidemiol.* 2007 Oct;36(5):1030-7. Epub 2007 Jul 30. PMID: 17664224

1-2-2) フィラリア・土壌寄生虫班：ケンブリッジ大学生物人類学部のマッシーテイラー教授を中心として、フィラリア及び土壌寄生虫の研究を、バングラデシュ疫学疾病対策研究所・予防社会医学研究所と共同で実施することを目標としている。また、それと砒素中毒との関連、発育・栄養との関連の研究が加わる。今年度までの本プロジェクトの研究は、これらの当初計画に沿って進行中。これについては、以下の論文がある。

Minamoto K, Mascie-Taylor CG, Moji K, Karim E, Rahman M., Arsenic-contaminated water and extent of acute childhood malnutrition (wasting) in rural Bangladesh. *Environ Sci.* 2005;12(5):283-92. PMID: 16308561

1-2-3) 全国データ班：2008年度招聘外国人研究員として来日する予定のZakir博士を中心に全国データを収集し、環境変化と感染症とその他の健康影響を横断的、縦断的に調査する。これに関しては、Zakir博士の招聘が実現しなかったため計画通りの進展が図れなかった。

● 1-3) ベトナム・マラリア班(2009年4月より) ミャンマー班・スリランカ班・中国班・インドネシア班：萌芽

的研究をサポートし、熱帯アジアの感染症と環境変化についての興味深いエピソードを集積することを目的とする。それをもとに研究計画を発展させる。

これに関しては中国班の活動が当初の計画以上に進展を見せた。雲南省・西双版納州で、昆明医科大学健康発展研究所（IHDS, KMC）及びモンラ県入国管理局と、公的サービスの行き届かない独立コマーシャルセクスイワーカーの行動とエイズ流行に焦点を当てた調査を実施。今後は、東アジア・東南アジアのエイズ流行についてのネットワークを構築し、アジアにおけるエイズ流行に関する社会変化要因を検討することを目的に定める。

●2-1) 総括班：当初の計画では、本領域に置ける総合的な枠組みを検討することを試みることを目標としている。そのために以下の活動を実施することを計画している。変更点としては、今年度から、特に環境変化の空間的広がりを定量化することを目的としている農学・林学班（2-2）の活動と総括班の活動のリンクを強化して、上記の総合的な枠組みの具体化の検討を進めようとしたことが挙げられる。

2-1-1) 既存データの発掘・分析：actmalaria などの世界的グループがもっている疾病データと、環境変化についての京大東南研データなどを分析する方法を検討する。2008年度中にインベントリーをつくり、分析の可能性を検討する。

2-1-2) 総合概念の構築：本分野の中心的人物であるT. McMichael の著作などをもとに、研究の方向性の検討を継続し、「地球的環境変化の中で人類の生存と健康をどのように把握し、何をしていけばよいか」を検討する。

2-1-3) 研究会：これまでも数回の研究会を実施してきたが、Society of Study of Global Health and Environmental Security (SSGHES)をたちあげ、単に本プロジェクトだけでなく、他の研究チームも交えつつ、本プロジェクトの成果を中心的に発表していく。

2-1-4) 広報：ホームページとプロジェクトのブログを活性化し、プロジェクト内、アカデミックコミュニティ、および一般に成果を示す方策を検討する。展示もその一つと考え実施していく。

●2-2) 歴史学班：京都大学地域研究統合情報センターの共同研究者である飯島渉（コアメンバー）班とタイアップして、東南アジアおよび南アジアの衛生資料を系統的に整理、分析していく。そのための試みのひとつとして、今年度はイギリス議会文書（BPP）に含まれる膨大な疾病データから見る、世界規模での疾病推移把握といった、歴史学と情報学の融合を試みた。

●2-3) 農学・林学班（土地利用変化）：当初の計画では、京都大学アジアアフリカ研究科の小林繁男と実施してきた科研費での研究「熱帯林とともに暮らす人々の安全保障」を発展させ、「人間の安全保障」のために必要な慣用利用、環境保護とは何かを後半に探査し、その中で健康との関係を明確にすることを目標としている。

本年度の変更点としては、上記の目標達成のために具体的にリモートセンシングやGIS分析の手法を積極的に取り入れた点。これにより、調査対象地域の環境分布及び環境変化の定量的把握という班独自の活動目標に加えて、環境変化—感染症連関の空間的分析（総括班）の達成のための基礎作業が進展した。

●2-4) 人口学班：熱帯アジアの環境問題と感染症問題を考える時、人口問題に解明は不可欠である。当初の目的では、大場保を中心として人口転換の死亡力転換、出生力転換、都市への人口移動の現状と経緯、およびそのメカニズムの追求に努めることを目標としている。

○これまでの研究成果と今後の課題

本年度に挙げ得た成果

1) 総括班が、ラオス国立公衆衛生研究所（NIOPH）とのMOUを結び、地域での理解、現地での研究倫理審査を通過し、研究計画の承認を得た。バングラデシュ国際下痢症研究所（ICDDR, B）とのMOUを結び、研究計画の承認を得た。

2) 総括班が、Earth System Science Partnership (ESSP) のGlobal Environment Changes and Human Health, 2007を訳出。

- 3) ラオスでの調査研究を体系的かつ統合的に推進するため、日本の研究機関及び研究者間相互を結ぶネットワーク (Lao-Japan Consortium on Health Research) を立ち上げた。
- 4) 2008年9月に、第二回ラオス国家保健研究フォーラムをビエンチャンで開催。
- 5) 2008年11月に、ラオス保健大臣を招いた特別会合を地球研で開催。日本とラオス間のエコヘルスプロモーションに関する一定の成果をあげた上、プロジェクト内での異分野間の交流を推進する機会となった。
- 6) 個別研究班及びその他の班毎に以下のような目標を達成した。

ラオス班(1): ラハナムDSSの再構築

- ・ センサスの更新
- ・ スタッフの再訓練
- ・ ペーパーレスDSSシステムの導入のための技術的障害の解消 (入力デバイスの現地語化)

ラオス班(2): セボン郡におけるマラリヤ研究

- ・ 携帯電話を用いたマラリア感染者の把握とケアに関する研究体制がほぼ確立

ラオス班(3): ソンコン郡における健康・疾病プロフィール研究

- ・ サバナケット県・ソンコン郡を対象に、地域・学校単位的环境・生活・健康の現状と変化を研究するための、新たな地域グループインタビュー方法や、モデル地区での環境、生活、食事、疾病の季節変動についての半定量的研究方法の開発が進展。

バングラデシュ班: 国際下痢症研究所との共同研究

- ・ MOU締結により共同研究体制が確立
- ・ ダッカでのデータ収集 (下痢感染症、気象) と分析 (モトロブ及びダッカのデータ) が進展

中国班:

- ・ HIV/AIDSと人口移入に関する情報収集が進展
- ・ 中国南部における住血吸虫症の情報収集が進展

歴史学班:

- ・ 東アジア・東南アジアの感染症関連歴史データの収集・整理が進展
- ・ 2008年9月に、歴史学・医学・環境学・情報学分野の研究を国際的にネットワーキングすることを目的とした、台湾ワークショップを開催。一定の成果を得る
- ・ イギリス議会文書 (BPP) に含まれる膨大な疾病データから見る、世界規模での疾病推移把握といった、歴史学と情報学の融合の試みが進展

農学・林学班:

- ・ リモートセンシングやGIS分析の手法を積極的に取り入れた研究手法の構築が進展
- ・ ラオス、バングラデシュ両国に関する基礎地理情報の整備が進展
- ・ 上記両国をカバーするALOS衛星画像の購入と、分析作業に着手
- ・ 衛星画像分類における分類手法研究の進展

来年度以降への課題

- 1) 前年度も掲げたように、分野の異なる研究班をリーダーが統括するが、よりプロジェクト内での異分野間の交流を推進する必要性を引き続き来年度以降への課題とする。

著書 (執筆等)

【単著・共著】

- ・ Zhang Zhuo, Cai Guoxi, Moji Kazuhiko, Wu Xiaonan, Yamamoto Taro, et al. Apr, 2008 A practical handbook for preventing exposure to blood among health workers. Tianjin Science and Technology Press ISBN 978-7-5308-4521-9.

論文

【原著】

- ・ 東城文柄 2009年02月 「発展途上国における『地域住民による森林破壊』問題の再考——バングラデシュ・モドゥプール丘陵の事例研究——」. アジア経済 50(2) :2-25. (査読付).
- ・ 小林繁男 2008年09月 森林に依存する人々の人間安全保障. 山林 (1491) :2-10.
- ・ 飯島渉 2008年08月 「感染症の流行に関する歴史データの整理とその国際保健・疫学への応用」. 『アジア遊学』 113 :78-83.
- ・ 市川智生 2008年06月 近代日本の開港場における伝染病流行と外国人居留地 1879年「神奈川県地方衛生会」によるコレラ対策. 史学雑誌 第117編(第6) :1059-1096. (査読付).
- ・ Zhang Z, Moji K, Cai GX, Ikemoto J, Kuroiwa C. 2008 Risk of sharps exposure among health science students in northeast China.. BioScience Trends 2(3) :105-111.
- ・ Zhang, K. L., R. Detels, et al. 2008 China's HIV/AIDS epidemic: continuing challenges. Lancet 372(9652) :1791-1793.
- ・ Xing, J. M., K. L. Zhang, et al. 2008 A cross-sectional study among men who have sex with men: a comparison of online and offline samples in Hunan Province, China. Chin Med J 121(22) :2342-2345.
- ・ Xia, D. Y., G. Y. Li, et al. 2008 Reproductive health risks and HIV infection vulnerability of hostesses in metropolitan areas, China: a qualitative study. AIDS Care 20(10) :1276-1278.
- ・ 小林繁男 2008年 生態資源としての森林土壌. 森林立地 50 :74-75.
- ・ 林 泰一、松本 淳 2008年 ベンガル湾のサイクロンNargis. 科学 78(7) :698-700.
- ・ Sato M, Sanguankiat S, Pubampen S, Kusolsuk T. 2008 Enterobiasis: a neglected infection in adults.. Southeast Asian J Trop Med Public Health 39 :213-216. (査読付).
- ・ Wang, Y., K. N. Zhang, et al. 2008 HIV/AIDS related discrimination in health care service: a cross-sectional study in Gejiu City, Yunnan Province. Biomed Environ Sci 21(2) :124-128.

会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・ 小林繁男 森林とともに暮らす人々の人間安全保障—ラオスとギニアにおける生活エネルギーと生活水— 第120回日本森林学会大会, 2009年03月25日-2009年03月28日, 京都府京都市左京区北白川追分町. DOI:http://www.forestry.jp/contents/meeting/meeting120/120-notice.htm. (本人発表).
- ・ 東城文柄 発展途上国における住民参加による二次林保全の重要性—バングラデシュ・モドゥプール森林における焼畑林業の事例— 第120回日本森林学会大会, 2009年03月25日-2009年03月28日, 京都市左京区北白川追分町 京都大学. DOI:http://www.forestry.jp/contents/meeting/meeting120/120-notice.htm. (本人発表).
- ・ 村田文絵, 寺尾徹, 山根悠介, 木口雅司, 林泰一 メガラヤ高原南嶺の夜雨とシレットの風の関係. 京都大学防災研究所・生存圏研究所・東南アジア研究所・生存基盤ユニット共同研究集会「気象災害軽減など人間活動の持続可能性に関する研究集会—南アジア地域を中心として—」, 2009年01月, 京都.
- ・ 寺尾 徹, Md. N. Islam, 村田 文絵, 山根 悠介, 林泰一 インド亜大陸北東部におけるプレモンスーン・モンスーン期の降水強度と降水量の日変化. 日本気象学会2008年度秋季大会, 2008年11月19日-2008年11月21日, 仙台国際センター、宮城県仙台市.
- ・ 友川幸・金田英子・小林敏生 第55回日本学校保健学会. ラオス中南部の農村地域における学校保健を活用したタイ肝吸虫感染対策—タイ肝吸虫に関する予防教育と児童が獲得している予防知識や意識の現状と課題—, 2008年11月14日-2008年11月16日, 愛知学院大学楠元キャンパス 名古屋市 . (本人発表).
- ・ Shigeo Kobayashi, Vilayphone, A., Ito, M., Kourouma, S. Human security of local communities related

- to the utilization of fuel woods and water: a comparative case study between Laos, Southeast Asia and Guinea, West Africa. . FORTROP II International Conference "Tropical Forestry Changing World", November 2008, Kasetsart University, Thailand, Bangkok, . (本人発表).
- ・ 友川幸, 小林敏生, 金田英子, Bangoon NISAYGNANG, Tiengkham PONGVONGSA, Anida KINGSADA, Sengchanh KOUNNVONG, Bounngong BOUPHA, 門司和彦 タイ肝吸虫感染地域における子どもと家族の生魚摂取習慣の関連. 第73回日本民族衛生学会, 2008年10月26日-2008年10月27日, 横浜市西区. (本人発表).
 - ・ サトウ恵, Tiengkham Pongvongsa, Keomoungkhoun Malaythong, Phimmayoi Inthava, Sanguankiat Surapol, Yoonuan Tippayarat, Homsuan Nirundorn, 門司和彦, Bounngong Boupa, Jitra Waikagul ラオス・ラハナム村における適切な寄生虫感染症対策実施のための基礎調査. 第49回日本熱帯医学学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会, Oct 25, 2008-Oct 26, 2008, 東京都新宿区国立国際医療センター. (本人発表).
 - ・ 阿部朋子, 砂原俊彦, 本田純久, トゥオン チン ディン, トゥアン レ カン, 中澤秀介, 門司和彦, 高木正洋, 山本太郎 ベトナム南部の少数民族居住地域におけるマラリア感染のリスクファクター. 第49回日本熱帯医学学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会, 2008年10月25日-2008年10月26日, 東京都新宿区.
 - ・ 伊藤 誠, 金田英子, 門司和彦, Tiengkham Pongvongsa, 坪井敬文, 長岡史晃, 木村英作 尿を使ったマラリアの疫学調査は可能か?. 第49回日本熱帯医学学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会, 2008年10月25日-2008年10月26日, 東京都新宿区.
 - ・ Xangsayarath Phonepadith, 金田英子, Tiengkham Pongvongsa, Bounngong Boupha, 門司和彦 ラオスセボン郡における蚊帳使用と熱帯熱マラリアの感染. 第49回日本熱帯医学学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会, 2008年10月25日-2008年10月26日, 東京都新宿区.
 - ・ 友川幸, 小林敏生, 金田英子, Tiengkham PONGVONGSA, Bounngong BOUPHA, 門司和彦 小学校教師のタイ肝吸感染に関するKAPと保健衛生教育に関する研修経験. 第49回日本熱帯医学学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術集会合同大会, 2008年10月25日-2008年10月26日, 国立国際医療センター 東京都新宿区戸山. (本人発表).
 - ・ Kazuhiko Moji To fill the health gap between rich and poor: The need for the second ORT revolution. Free workshop on poverty, malnutrition, and infectious diseases. 第49回日本熱帯医学学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会, 2008年10月25日-2008年10月26日, 東京都新宿区.
 - ・ Shigeo Kobayashi Establishment of uneven Teak (*Tectona grandis*) plantation by thinning in Thom Pha Phun, Thailand. . 6th Workshop of "uneven-aged silviculture" IUFRO group in Shizuoka, Oct 24, 2008-Oct 27, 2008, 静岡県静岡市葵区御幸町. DOI:http://www.ffpri.affrc.go.jp/symposium/uneven-aged2008/HTML_jp/index.html. (本人発表).
 - ・ 蔡 国喜, 門司 和彦, 張 卓, 吳 小南, 林 旭, 張 孔來, 李 式划 P07-05 国境地域における流動人口の健康保健及びエイズ/性感染症に関する疫学調査 (AIDS/STD epidemic among Cross-border Floating People in South China). 第49回日本熱帯医学学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会, 2008年10月, 東京. (本人発表).
 - ・ Guoxi CAI, Kazuhiko MOJI, Zunyou WU, Keming ROU, Xiaonan WU, Xu LIN, Konglai Zhang, Taro YAMAMOTO, Zhuo ZHANG A pilot study on AIDS/TB among cross-border floating population in tri-angle area of Asia. Second National Health Research Forum (NHRF 2008), Sep 22, 2008-Sep 23, 2008, Vientiane Lao PDR. (本人発表).
 - ・ CAI G, MOJI K, WU Z, ROU K, ZHANG K AIDS/HIV epidemic among Female Sex Workers in China. The Eleventh International Conference on Fields Crossing, Fusion and Development (ICFCFD' 2008), Sep 14, 2008-Sep 15, 2008, Wuxi, Jiangsu, China. (本人発表).
 - ・ Tomo ICHIKAWA Military Medicine and Indigenous Society in Colonial Taiwan. Workshop "Environmental Changes and Infectious Diseases: Historical Perspective and Contemporary Issues, Sep 05, 2008, Academia Sinica, TAIWAN. (本人発表).
 - ・ 市川智生 「中国における都市化の進展と環境問題」. 総合地球環境学研究所中国環境問題研究拠点・第4回中国環境問題シンポジウム, September 2008, 復旦大学歴史地理研究中心, 中国. (中国語)
 - ・ Shigeo Kobayashi, Miho Ito, Sekor Kourouma, Gen Yamakoshi Human security of villagers related with fuel woods in Guinea, West Africa.. 第18回日本熱帯生態学会年次大会, 2008年06月20日-2008年06月22日, 東京都文京区弥生. (本人発表).

- ・友川幸・小林敏生 ラオスの学校保健におけるタイ肝吸虫感染対策の現状とその課題. 第40回中国四国学校保健学会, 2008年06月, 徳島県 鳴門市. (本人発表).
- ・ Shigeo Kobayashi Strategic approach for the sustainable land-use as forest based on the secondary succession processes. ATBC Asian Chapter on "towards sustainable land-use in tropical Asia", Apr 23, 2008-Apr 26, 2008, Sarawak Malaysia. (本人発表).

【ポスター発表】

- ・友川幸・小林敏生 ラオス中南部のタイ肝吸虫感染に関わる要因の検討ー予防知識と魚の生摂取の関連ー. 第67回日本公衆衛生学会, 2008年11月05日-2008年11月07日, 福岡国際会議場 福岡県福岡市.
- ・村田文絵, 寺尾徹, 木口雅司, 山根悠介, 林泰一 チェラプンジにおける降水過程に関する研究(第5報). 日本気象学会秋季大会, 2008年11月, .
- ・蔡 国喜、門司和彦、張 卓、呉 小南、林 旭、張 孔來、李 式發 国境地域における流動 人口の健康保健及びエイズ/性感染症に関する疫学調査. 第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会, 2008年10月25日-2008年10月26日, 東京都新宿区.
- ・ 友川 幸 ・ 小林 敏 生 ・ 金 田 英 子 ・ Bangoon NISAYGNANG ・ Tiengkham PONGVONGSA ・ Anida KINGSADA ・ SengchanhKOUNNVONG ・ Boungnong BOUPHA ・ 門司和彦 ラオス中南部の農村地域における小学校児童のタイ肝吸感染に関するKAP調査. 第5回広島保健学会学術集会, 2008年10月05日-2008年10月06日, 広島大学霞キャンパス 広島市南区. .
- ・ M Sato, T Pongvongsa, M Keomoungkhoun, I Phimmayoi, S Pansansy, V Boutsyhalath, S Sanguankiat, T Yoonuan, N Homsuwan, K Moji, B Boupa, J Waikagul Parasitic baseline data for implementing the control program in Lahanam village, Savannakhet province, Lao P.D.R.. 2nd National Health Research Forum to support the health research systems strengthening in Lao PDR, Sep 22, 2008-Sep 23, 2008, Vientiane, Laos. (本人発表).
- ・ 寺尾 徹, S. M. Shah-Newaz, 中山 由美, 加藤 丈朗. 橋爪 真弘 Bangladesh, Sirajganj付近で発生した大規模な河岸侵食. 水文・水資源学会2008年度研究発表会, 2008年08月, 東京、東京大学.
- ・ 林 泰一, 石川裕彦, 向川均, 津田敏隆, 塩谷雅人, 中村卓司, 橋口浩之, 堀之内武, 山本真之, 余田茂男, 里村雄彦, 西淵光昭, 安藤和雄, 太田誠一, 我妻ゆき子 伝染性疾患など人間生活に関わる気象・気候の影響評価と予測. 京都大学生存基盤科学研究ユニット研究成果報告会, 2008年07月16日, .
- ・村田文絵, 寺尾徹, 林泰一 チェラプンジにおける降水過程に関する研究(第4報). 日本気象学会春季大会, 2008年05月, .

調査研究活動

【海外調査】

- ・雨量計データ収集. インド(アッサム州、メガラヤ州)、バングラデシュ, 2009年03月.
- ・AWS設置・メンテナンス及び研究打合せ. バングラデシュ, 2008年08月.

プレリサーチ**プロジェクト番号: C-07****プロジェクト名: 温暖化するシベリアの自然と人 ―水環境をはじめとする陸域生態系変化への社会の適応―****プロジェクト名(略称): シベリアプロジェクト****プロジェクトリーダー: 井上 元****プログラム/研究軸: 循環領域プログラム****ホームページ: <http://www.chikyu.ac.jp/siberia/>****キーワード: 温暖化 炭素循環 メタン 永久凍土 トナカイ いぶき****○研究目的と内容(2008年4月～2009年3月)**

地球温暖化は高緯度の内陸や雪氷圏で顕著に現れる。シベリアは最も内陸的であり、特に冬季の気温の上昇、融雪時期の早まり、降雪量変化などが予想され、これらの変化はすでに一部に現れている。このような気候の変化は、凍土など雪氷圏や水循環・炭素循環の長期変化、陸域生態系の不可逆的な長期変化を通じて、温室効果ガスの放出・吸収や水循環の変化を引き起こし、気候への大きなフィードバックをもたらすと予想される。また、地域的には短期的にドラスティックな影響をもたらす。その人や社会への影響としては、農林業・畜産への影響、融雪洪水や地盤軟弱化による建物や道路など社会インフラへの打撃、自然災害の増加が予想される。実際、ヤクーツクでは近年湿潤化により森林が衰退し、害虫が越冬可能となり虫害が大発生し、融雪期には大洪水が起こるなど、すでに被害が生じ始めている。

本研究では、永久凍土地帯である東シベリアと湿原・森林・農業地帯を特徴とする西シベリアを対象にして、水・エネルギー・炭素循環の変化を観測データに基づいて予測することを目的とする。また、経済体制移行途上のロシアの経済・社会システムが、上記の気候変動の様々な影響に対してどのように対応できるか、そこに暮らす先住民を含め、その適応性と脆弱性を研究する。

○進捗状況(2008年4月～2009年3月)

わが国の水・エネルギー・炭素循環分野の研究者は、世界に先駆けソ連の解放政策(1988年)の機会を捉えシベリアでの観測研究を開始し、様々な予算や形態で現在なお継続している。その中から、水エネルギー循環の観測研究を行ってきたGAME-Siberiaのグループ、炭素循環の観測研究を行ってきた環境省グループ、さらに科研費などで独自の調査研究を行ってきた文化人類学などの研究者が結集して、近い将来に予想される気候変化がそれぞれの研究分野でどのような結果をもたらすかを明らかにすると共に、研究分野間で協力し総合的に研究を推進することとした(07年8月24日WS)。特に、温暖化に対し高緯度寒冷地の人や社会がどのように適応し得るかという視点、また、経済体制移行と関連した視点で、自然の変化予測と人々の生活や社会文化の変化とを結び付けて行う、新たな展開が必要であるとの結論に至った。

ロシアが経済体制を移行させた直後の混乱から立ち直り、旧来の官僚機構が再構築され、様々な規制が強化されている。その結果、新たな調査研究をシベリアで実施することは極めて困難になっている。その中で日本の観測グループは、ロシア側の研究能力を高める事に配慮し、良好な関係を構築しており、現地での研究を持続的総合的に行うことが可能な立場にある。(EUの研究サイトが強制的に閉鎖されるなどの事件が起こっている。)

こうした過去の経緯を背景に、08年には以下の研究を実施した。

- (1)シベリア広域グループの内、衛星データ解析のサブグループは、既存の衛星データ解析による東アジアでの炭素収支研究を元に、それをシベリアに適応しモデルの高度化の準備をしている。温室効果ガスを対象とするサブグループは、GOSAT衛星のデータ解析や、森林火災のデータから炭素収支を推定する準備を行っている。
- (2)水・炭素循環グループは、GAME-SiberiaやCRESTの観測とモデル解析の研究実績を継承しつつ、新たな鍵となる観測を加え、現状の正確な把握と近未来の予測を行おうとしている。その一環としてより湿潤な南部地域でフラックス観測の拠点を建設する準備として、資材の輸送を行った。
- (3)人間生態グループは、北方ユーラシアやシベリアの少数民族の歴史・文化・社会に関する研究を行ってきた文化人類学グループを中心に、その食料生産と生態環境の関係を分析するため保全生態学の研究者、更にシベリア人口の都市集中や特徴的な社会インフラに着目した土木工学の研究者を加えたグループを形成し、課題抽出のための予備研究を行った。

研究の対象やバックグラウンドとなる学問領域の異なる参加メンバーは、IS, FS, PRにおいて共通の認識を育てるための議論を積み重ね、相互に補完しつつ研究を推進する体制を整えつつある。

○共同研究者(所属・役職・研究分担事項)

- ◎ 井上 元 (総合地球環境学研究所・教授・プロジェクト全体のマネージメント)
- 山口 靖 (名古屋大学・教授・土地利用変化解析)
- 佐々井崇博 (名古屋大学・助教・衛星データによる広域炭素収支解析)
マクシュートフ・シャミル(国立環境研究所・主任研究官・大気観測衛星データから炭素収支解析)
- 安成 哲三 (名古屋大学・教授・シベリアの気候変化)
- アレキサンドロフ・ジョウジ(国立環境研究所・研究員・温暖化の影響)
- 神澤 博 (名古屋大学・教授・温暖化の影響シナリオ)
- 酒井 徹 (総合地球環境学研究所・上級研究員・衛星データによる気候変動解析)
- 小林菜花子 (総合地球環境学研究所・研究員・森林の環境影響・森林火災)
- 金 憲淑 (総合地球環境学研究所・研究員・気候変動モデル解析)
- 太田 岳史 (名古屋大学・教授・森林の環境応答特性解析・流域水収支解析)
- 檜山 哲哉 (名古屋大学・准教授・地中水貯留量解析・流域水収支解析)
- 小谷亜由美 (名古屋大学・助教・大気境界層解析・森林の環境応答解析)
- 杉本 敦子 (北海道大学・教授・過去の環境と生物活性の復元)
- 児玉 裕二 (北海道大学・助教・積雪過程の解析・大気境界層解析)
- 山崎 剛 (東北大学・准教授・陸面過程のモデルによる解析)
- 米延 仁志 (鳴門教育大学・助教・森林の過去の生長量と古気候の復元)
- 八田 茂実 (苫小牧工業高等専門学校・准教授・大陸河川の流出解析)
- マキシモフトロフユーム(北方圏生物問題研究所・研究室長・北方林の光合成特性解析)
- コノフアレキサンダー(北方圏生物問題研究所・研究員・北方林の呼吸特性の解析)
- マキシモフアヤ (北方圏生物問題研究所・研究員・北方林の光合成特性)
- 高倉浩樹 (東北大学東北アジア研究センター・准教授・東シベリアにおける生業生産と環境変動の関係分析)
- 奥村誠 (東北大学東北アジア研究センター・教授・サハ共和国の交通社会システムの実態調査と環境情報分析)
- 吉田睦 (千葉大学文学部・教授・西シベリアにおける生業生産と環境変動の関係分析)
- 中田篤 (北海道立北方民族博物館・学芸員・南シベリアにおける生業生産と環境変動の関係分析)
- 池田透 (北海道大学大学院文学研究科・教授・動物資源利用と環境応答分析)
- 立澤史郎 (北海道大学大学院文学研究科・助教・野生・家畜トナカイ生態分析)
- 荏原小百合 (北海道大学大学院文学研究科・博士課程・サハ共和国におけるサハ人の環境認識)
- イグナティエヴァ、ヴァンダ(ロシア連邦サハ共和国科学アカデミー人文科学研究所・上級研究員・サハ共和国における開発と環境に関する社会調査)
- ボヤコワ、サルダーナ(ロシア連邦サハ共和国科学アカデミー人文科学研究所・上級研究員・サハ共和国交通社会システムの歴史分析)
- 藤原潤子 (総合地球環境学研究所・上級研究員・サハ共和国の環境運動およびロシア人の環境認識)
- 永山ゆかり (東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所・非常勤研究員・北東シベリア海岸部の環境認識)
- オクロブコフ イノケンティ(北方圏生物問題研究所・研究部長・野生・家畜トナカイ生態分析)
- イエサフ アルカディ(北方圏生物問題研究所・研究室長・動物資源利用と環境応答分析)
- キリリン イゴール (北方圏生物問題研究所・研究員・野生・家畜トナカイ生態分析)
- クリボシャプキン アレクサンダー(ヤクーツク大学生物学科・准教授・動物資源利用と環境応答分析)
- モルドコフ イノケンティ(ヤクーツク大学生物学科・教授・野生・家畜トナカイ生態分析)

○当初の計画

シベリア全域を対象とし、そこでの水・エネルギー・炭素循環の変化が、気候システムや人々の生産と生活に与える影響を明らかにするため、以下の三つの課題に取り組む。

(1)シベリアにおけるエネルギー・水・炭素(メタンを含む)循環の観測とその変化の定量的予測(森林の蒸発散において気候帯・植生の違いを統一的に扱う潜在的応答特性の概念を更に検証すると共に、流域規模の水循環に応用し、更に炭素循環への適用可能性を検討する。地域の水資源や北極海の凍結と密接に関連する、大陸河川の流水システムや深層地下水を含む陸水貯留量の時空間変動を把握し、将来の変化を予想する。また変化に富む湿原や林床湿原のメタン発生量を広域で測定する新たな手法、同位体・年輪解析による植生-水循環の長期変動の解明などの研究を

シベリア広域で展開する。)

(2) シベリア全域にわたる衛星データによる生態系の炭素吸収と人為排出の把握 (GOSAT衛星データによりシベリアでの二酸化炭素濃度の広域分布を解析し、ASTERやMODIS衛星データにより経年的な土地利用変化や植生変化などを広域的に捉える。これらの解析結果に基づき、シベリアの開発や自然環境の変化と炭素循環の変化との関係を解明する。また、人為排出や土地利用変化とその変化を駆動する力を社会科学的観点をも含めて明らかにする。)

(3) 温暖化のシベリアの生活や生産への影響と適応性 (過去の異常気象や現在進行している温暖化の特徴を捉え、環境変動と歴史変動の相互作用を要因とする社会の変化や、変動の影響を吸収する社会文化のメカニズムを、経済活動・社会インフラ・少数民族の生活などを対象として明らかにする。)

ここで、例えばシベリアにおける水循環・凍土の変化が湿潤化や乾燥化をもたらし、洪水による住民の直接被害や社会インフラの弱体化を引き起こすなど、一部にはその影響が現れつつあり、こうした対象分野間にまたがった相互作用を重視する。また、例えば観測を元に構築する一般化された循環モデルをシベリア全域に適用した場合の妥当性を衛星観測から検証するなど、ボトムアップとトップダウンのアプローチを地域において相互比較する。こうした課題間の連携を強め目的とする課題にアプローチするため、研究計画段階で十分な問題意識の共有、成果を他の課題に受け渡す時期、その総合的な議論の場の設定などを明確化する必要があり、そのための研究運営の中核機能を地球研内に持つ。

○これまでの研究成果と今後の課題

シベリアにおけるエネルギー・水・炭素 (メタンを含む) 循環の研究については、従来の研究を振り返り、最終的なアウトプットに向けて不足している鍵となる観測と、5年後の取りまとめについての議論を重ね、プロジェクトで実施する具体的な課題を設定した。また、それらを広域に適用すること、将来予測に有用な発展の方向も明らかになった。

人と社会に関しては、わが国の研究者を調査し、東北大学東北アジア研究センターを中核として、ロシア側との共同研究体制を整えた。文化人類学の研究への衛星データの利用、水循環が人々の生活に及ぼす影響など、新たな自然科学と社会科学の連携が開始された。

また、この間、多くの研究者がロシアを訪問し、カウンターパートとの議論や調査観測の共同推進、研究の枠組みの合意形成などを実現した。

シベリア全体の自然や社会の変化を把握しつつ、東シベリアでの現地調査・研究による地域特性の把握を基礎に自然と人との相互作用を明らかにするための組織として、3つのグループ構成をとることとし、同時にグループ間の問題意識の共有・具体的な情報共有・積極的な議論の展開に努めてきた。

(1) シベリア広域のグループは、シベリア全体の変化を俯瞰的に捉えるために、

- ① 森林の炭素収支、雪氷圏の変化の広域的な把握、
- ③ 温室効果ガス、特にメタンに注目した収支を炭素、森林火災のインパクトなどの把握を行う。

(2) 水・炭素循環グループは、

- ① 年輪解析や同位体測定などを通じて気象と森林の活性・水循環の機能を過去にさかのぼって明らかにする。
- ② 従来の水循環の観測に加え降水の比較的多いレナ河の上流に新たな観測点を設け、また、凍土地帯の流水の30%を占めると予想される地下貯留水の挙動などを様々な方法で調査し、降水と河川流量の関係について理解に欠けていた部分を明らかにする。こうしたデータに基づき、
- ③ 従来の水循環モデルを改良し、近未来の水環境を予測する。

(3) 人間生態グループは、開発や森林機能・水循環について上記グループが行う近過去 (100年) から現在に至る観測データと近未来予測に基づき、東シベリアの都市や農村の住民の生活を中心にどのような影響を受けるかを明らかにする。そのために、

- ① 現在の少数民族の生活文化や社会システムを環境適応の関連で調査し、また、
- ② 都市と外部とを結ぶ交通インフラなどの実態を調査する。特に、春の急速な融雪による洪水、凍土地帯での飲料水の確保、凍結する河川を利用した輸送など、水環境の変化と生活や産業 (特にエネルギー開発と交通システムの構築) の関係に注目する。

プレリサーチ**プロジェクト番号: R-05****プロジェクト名: アラブ社会におけるなりわい生態系の研究—ポスト石油時代に向けて****プロジェクト名(略称): アラブなりわいプロジェクト****プロジェクトリーダー: 縄田浩志****プログラム/研究軸: 資源領域プログラム****ホームページ: <http://www.chikyu.ac.jp/arab-subsistence/>****キーワード: アラブ社会, 外来移入種管理, 環境影響評価, 生命維持機構, ポスト石油時代, 科学的データへの万能なアクセス方法**

○研究目的と内容(2008年4月～2009年3月)**1. 目的**

中東の乾燥地域において、千年以上にわたり生き残り続けることができたアラブ社会の生命維持機構と自給自足的な生産活動の特質を明らかにし、ポスト石油時代に向けた、地域住民の生活基盤再構築のための学術的枠組みを構築することを目指します。

2. 背景

日本国と中東諸国は、エネルギー・水・食糧の観点からみて地球環境に多大な負荷を与え続けてきました。自国の経済的繁栄を維持・拡大することを最優先に、中東地域における化石燃料と化石水といった再生不可能な資源の不可逆的な利用を過度に推進し、外来種の植林による地域の生態系の改変や資源開発の恩恵の社会上層への集中、をもたらしました。現代石油文明が分岐点を迎えつつあるいま、これからの日本・中東関係は、化石燃料を介した相互依存関係から、地球環境問題の克服につながる「未来可能性」を実現する相互依存関係へと一大転換する必要があります。その社会設計のために、これまで中東地域で育まれてきた生命維持機構、さらには将来に向けて維持していかなければならない生産活動の特質を「地球環境学」の観点から実証的に明らかにしてゆく基礎研究の推進が重要と考えます。

低エネルギー資源消費による自給自足的な生産活動(狩猟, 採集, 漁撈, 牧畜, 農耕, 林業)を中心とした生命維持機構, すなわち「なりわい」に重点を置いた生態系の実証的な解明を通じて, 先端技術・経済開発至上主義への根源的な問い直しをし, 砂漠化対処の認識的枠組みを社会的弱者の立場から再考します。それらの研究成果に基づき, 庶民生活の基盤を再構築するための学術的枠組みを提示し, ポスト石油時代における自立的将来像の提起へとつなげていきます。

3. 調査対象地域, 研究テーマ, 研究方法

主要な調査対象地域は, 紅海とナイル川の間位置するスーダン半乾燥3地域(紅海沿岸, ブターナ地域, ナイル河岸)です。さらに, サウディ・アラビア・紅海沿岸, エジプト・シナイ半島, アルジェリア・サハラ沙漠の3カ国・3地域をサブ調査対象地域とし, 各地域のなりわい生態系の特質を比較研究していきます。

最重要課題である研究テーマは, 1) 外来移入種マメ科プロソピス統合的管理法の提示, 2) 乾燥熱帯沿岸域開発に対する環境影響評価手法の確立, 3) 研究資源の共有化促進による地域住民の意思決定サポート方法の構築, の三つです。

研究方法は, 1) キーストーン種(ラクダ, ナツメヤシ, ジュゴン, マングローブ, サンゴ礁)に焦点をあてたなりわい生態系の解析, 2) エコトーン(潤れ谷のほitori, 川のほitori, 山のほitori, 海のほitori)に焦点をあてたアラブ社会の持続性と脆弱性の検証, の二つです。

4. 研究組織

国内外の人文社会学者, 自然科学者, NGOメンバー, プロジェクト・マネージャーなど多彩な背景をもつプロジェクトチームは, 1) 外来移入種の統合的管理グループ, 2) 乾燥熱帯沿岸域の環境影響評価グループ, 3) 研究資源共有化グループ, 4) 地域生態系比較グループ, の四つの研究グループに分かれます。

○進捗状況(2008年4月～2009年3月)**【本研究に向けた各調査地の準備状況】**

1. スーダンにおける調査準備

スーダンは主調査国です。2008年11月27日に総合地球環境学研究所 (RIHN) とスーダン科学技術大学 (SUST) との間で、「研究協力の覚書 (MOU)」と「研究の実施合意書 (IA)」を締結しました。SUSTのAhmed Eltayeb Ahmed学長とAbdel Gabar Babiker教授が来日し地球研での調停式に参加しました。スーダンでの主要な研究テーマは、外来移入種マメ科プロソピス (*Prosopis* spp.) の統合的管理法の提示です。主要調査項目は以下の15です。

- 1) 生物学的制御 (昆虫の導入に関する検討も含む)
- 2) 化学的制御 (適切な除草剤の開発など)
- 3) 人間の手によるもしくは機械による制御 (火の利用や引き抜きの方法など)
- 4) 生育阻害活性成分の同定とアレロパシー活性の評価
- 5) 反芻動物の毒性試験と解毒技術
- 6) 反芻動物の栄養戦略と腸内細菌の代謝産物
- 7) 樹木生理, 世代更新, 林分構造
- 8) 根系構造と水分摂取のシステム
- 9) 人間の食料と家畜の飼料としてのさやと葉の利用
- 10) 燃料, 薪炭材の生産方法
- 11) 空撮写真, リモートセンシング, GISを用いた分布地図
- 12) 家畜の移動と地表流 (個体群の動態との関連)
- 13) 地域住民の日常生活への社会生態学的インパクト (土地所有者や行政従事者への聞き取りなど)
- 14) 地域住民の意思決定サポートのための研究資源の共有 (会合の組織と現地語によるハンドブックの出版)
- 15) 進行中の除去プログラムへの社会生態学的なアセスメント

2. サウディ・アラビアにおける調査準備

サウディ・アラビアでは野生生物保護委員会 (NCWCD) と「研究協力の覚書 (MOU)」と「研究の実施合意書 (IA)」を結ぶ予定です。『A Study of Human Impacts on Mangrove and Dugong Habitats in the Northern and Southern Parts of the Red Sea in the Kingdom of Saudi Arabia (サウディ・アラビア王国、紅海北部・南部地域におけるマングローブ群落とジュゴン個体群に対する人間活動の影響に関する研究)』という調査計画書をすでに提出しており、現在回答待ちです。

縄田浩志 (プロジェクトリーダー) と宮本千晴, 吉川賢 (コアメンバー) の三人が2008年12月にNCWCDを訪問し調査計画の調整を行いました。その結果、紅海沿岸、特に南部のファラサーン島での2009年7月の調査開始について合意しました。

マングローブの森林構造の検討と気孔コンダクタンス, 蒸散速度の測定を行う予定です。加えて, CTAB技術を用いたマングローブのDNA分析とRAPD技術を用いて, ヒルギダマシ林分の遺伝的多様性および集団間の地理的距離と遺伝的距離の関係を定量的に把握します。さらに, マングローブを飼料として過剰利用することから守ることを目指して, 人間とラクダの関係と, 魚付林としてのマングローブ利用について文化人類学的研究を行います。

3. エジプトにおける調査準備

アル=トゥール (al-Tur) のアル=キーラーニー (al-Kilani) 港町での近代サンゴ建築調査について, 文化省考古最高会議 イスラーム・コプト局 (Islamic-Coptic Antiquities, the Supreme Council of Antiquities, Ministry of Culture) からの了承を得ることができました。この調査は, コアメンバーの川床睦夫が代表を務めるイスラーム考古学研究所 (東京) のイスラーム考古学調査隊による, ラーヤ/アル=トゥール地域の考古学調査の許可のもと行われます。

2008年7月と8月にプロジェクトリーダーの縄田浩志とプロジェクトメンバーの西本真一, 真道洋子が, アル=トゥールのサンゴ建築について全体的な調査を開始しました。集中的な調査は2009年9月から開始の予定です。

写真による記録と図面をもちいて建築学的調査を行い, これらの建築物を維持することへの適切な方法を特定する保存修復のための予備的な調査を行う予定です。

4. アルジェリアにおける準備状況

コアメンバーの小堀巖とプロジェクトリーダーの縄田浩志が, アルジェリアにおける調査地をアルジェリア中央部のインベルベル・オアシスに決めました。この調査はコアメンバーのA. Benkhalifaと共に行われます。現在, 国土整

備・環境・観光省生物資源開発センター (Centre National du Développement des Ressources Biologiques, Ministère de l'Aménagement du Territoire de l'Environnement et du Tourisme) と共同研究について調整中です。

インベルベル・オアシスの事例研究において、将来の持続可能な水利用のために、全体的な社会経済と文化複合について研究します。

○共同研究者(所属・役職・研究分担事項)

- ◎ 縄田 浩志 (総合地球環境学研究所・准教授・文化人類学, 社会生態学)
- 小堀 巖 (国連大学・上級顧問・地理学)
- 川床 睦夫 (イスラーム考古学研究所・所長・考古学)
- 杉本 幸裕 (神戸大学大学院農学研究科・教授・生化学)
- 宮本 千晴 (マングローブ植林行動計画・運営委員・造林学)
- 坂田 隆 (石巻専修大学理工学部・教授・栄養生理学)
- 吉川 賢 (岡山大学大学院環境学研究科・教授・森林生態学)
- 星野 仏方 (酪農学園大学環境システム学部・准教授・リモートセンシング)
- 大沼 洋康 (国際耕種株式会社・代表取締役・農村開発学)
- Abdel Gabar E. T. BABIKER (スーダン科学技術大学(スーダン)・教授・生化学)
- Abdallah M. A. ABU SIN (ゲジラ大学(スーダン)・理事・農業経済学)
- ABDEL BAGI M. A. (スーダン農業研究機構(スーダン)・教授・植物生理学)
- ABDEL HADI A. W. M. (スーダン農業研究機構(スーダン)・准教授・水資源管理学)
- Pietro LAUREANO (伝統的知識世界銀行(イタリア)・代表・建築学)
- Abdrhmane BENKHALIFA (生物資源開発センター(アルジェリア)・研究員・菌類学)
- 石山 俊 (総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員・文化人類学)
- 中村 亮 (総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員・文化人類学)
- 岩谷 洋史 (総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員・文化人類学)
- 井上 知恵 (鳥取大学乾燥地研究センター・助教・植物生理生態学)
- 尾崎貴久子 (防衛大学校・講師・イスラーム文化, 歴史学)
- 窪田 順平 (総合地球環境学研究所・准教授・森林水文学)
- 熊谷 瑞恵 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・日本学術振興会特別研究員・文化人類学)
- 久米 崇 (総合地球環境学研究所・プロジェクト上級研究員・土壌水文学)
- 児玉香菜子 (総合地球環境学研究所・拠点研究員・文化人類学)
- 財津 吉寿 (国際耕種株式会社・技術士・情報工学)
- 嶋田 義仁 (名古屋大学大学院文学研究科・教授・宗教人類学)
- 真道 洋子 (イスラーム考古学研究所・主任研究員・考古学)
- 鈴木 英明 (東洋文庫・日本学術振興会特別研究員・歴史学)
- 須田 清治 (マングローブ植林行動計画・主任研究員・造林学)
- 鷹木 恵子 (桜美林大学人文学系・教授・文化人類学)
- 店田 廣文 (早稲田大学人間科学部・教授・社会学)
- 玉井 重信 (元鳥取大学乾燥地研究センター(現在所属なし)・元教授・緑化学)
- 徳永 里砂 (慶應義塾大学文学部・非常勤講師・歴史学)
- 長澤 良太 (鳥取大学農学部・教授・景観生態学)
- 西本 真一 (サイバー大学世界遺産学部・教授・建築史学)
- 箱山富美子 (藤女子大学人間生活学部・教授・開発学)
- 藤井 義晴 (独立行政法人農業環境技術研究所・研究リーダー・農芸化学)
- 堀 信行 (奈良大学文学部・教授・自然地理学)
- 堀江 恭子 (元国士舘大学(現在所属なし)・歴史学)
- 丸山 大介 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・大学院生・文化人類学)
- 宮城 豊彦 (東北学院大学教養学部・教授・環境地形学)
- 安田 裕 (鳥取大学乾燥地研究センター・准教授・水文学)
- 山本 福壽 (鳥取大学農学部・教授・樹木生理学)
- 依田 清胤 (石巻専修大学理工学部・准教授・樹木環境生理学)
- 渡邊 紹裕 (総合地球環境学研究所・教授・灌漑排水学)
- ムハンマド・アブドゥルハシム (鳥取大学乾燥地研究センター・大学院生・水文学)

- Rim Meziani (シヤルジャ大学 (アラブ首長国連邦) ・助教・都市計画学)
 Muhammad El-Fatih (スーダン農業研究機構 (スーダン) ・研究員・生化学)
 Muhammad Hutiyah (アドラル大学 (アルジェリア) ・教授・歴史学)
 Leif Manger (ベルゲン大学社会人類学科 (ノルウェー) ・教授・社会人類学)
 Hamadi Ahmed El-Hadj(元アフレフ中学校 (アルジェリア) ・教員・教育学)
 岸 昭 (新日本環境調査(株)西日本支社・代表・海洋生物学)
 牛田 一成 (京都府立大学・教授・動物生理学)
 坂本 翼 (早稲田大学・大学院生・考古学)
 Musa, Farah Yousif Suliman(スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・アグロフォレストリー)
 Nasroun, Tageldin Hussein(スーダン科学技術大学(スーダン) ・教授・林学)
 Mohamed, Abdel Hafeez Ali(スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・植物生態学)
 ElKhalifa, Abdel Wadoud A.(スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・林学)
 Mohamed, Tagelsir Elnaiem(スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・林学)
 Ali, Khalid Ali (スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・植物分類学)
 Eldoma, Ahmed Mohamed Adam(スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・樹木生理学)
 Alamin, Nawal Khidir Naser(スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・環境科学)
 Khalafalla, Awad (スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・昆虫学)
 Khair, Seif Eldein Mohamed(スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・昆虫学)
 Hashim, Luai Osman (スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・病理学)
 Khalifa, Khalifa Ahmed(スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・農業工学)
 Mirghani, Elshifa Ali(スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・女性開発学)
 Mohamed, Fatima Omer Nabag(スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・公衆衛生学)
 ElAmin, Hag Hamad Abd El Aziz Mohammed(スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・農業経済学)
 Elrasheed, Mutasim Mekki Mahmoud(スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・農業経済学)
 Rahim, Hashim Mahgoub Abdel(スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・農業経済学)
 Hussin, Mohamed Badawi(スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・農業教育学)
 Ali, Abdel Bagi Elsayed(スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・養蜂技術学)
 Makki, Hattim Makki Mohamed(スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・食品科学)
 Ahmed, Ahmed Elawad Elfaki Mohamed(スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・食品科学)
 Saad, Mahdi Abbas (スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・食品科学)
 Al Gassim, Al Gassim Ali(スーダン科学技術大学(スーダン) ・教授・食品科学)
 Ahmed, Yousif Mohamed(スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・食品科学)
 Albalola, Mha Fadul Mohammed(スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・食品科学)
 Alfaig, Ibrahim Alfaig Alnoor(スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・食品科学)
 Ati, Shadia Abdel (スーダン科学技術大学(スーダン) ・准教授・栄養生理学)
 Barakat, Seifeldein (スーダン科学技術大学(スーダン) ・教授・臨床病理学)
 El Tayeb, Nagat Mubarak(スーダン農業省 (スーダン) ・研究課長・雑草学)
 Al-Wetaid, Abdullah H.(サウディ・アラビア野生生物保護委員会(サウディ・アラビア) ・研究課長・植物生態学)
 Sambus, Anas Zubeir (サウディ・アラビア野生生物保護委員会(サウディ・アラビア) ・研究課長・海洋生物学)
 Al-Abbasi, Tarik (サウディ・アラビア野生生物保護委員会(サウディ・アラビア) ・研究部長・植物生態学)
 Khushaim, Omar (サウディ・アラビア野生生物保護委員会(サウディ・アラビア) ・研究部長・海洋生物学)
 高山 晴夫 (鹿島建設株式会社・技術研究所・主任研究員・植物生態学)
 中島 敦史 (和歌山大学・システム工学部・教授・植物生態学)
 松尾奈緒子 (三重大学大学院・生物資源学研究科・講師・森林水文学)
 古賀 直樹 (国際耕種株式会社・主任研究員・畜産学)
 佐藤 寛 (日本貿易振興機構アジア経済研究所・研究支援部長・開発社会学)

○当初の計画

(1) 外来移入種マメ科プロソピス統合的管理法の提示

日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業「スーダンにおける食糧生産の増大と安定化を目指した水資源

管理と寄生雑草の防除」(2005～2007)のコーディネーターを務めてきた杉本幸裕(神戸大学大学院農学研究科、難防除植物制御、生化学)とAbdel Gabar Babiker(スーダン科学技術大学、難防除植物制御、生化学)を軸として、坂田隆(石巻専修大学理工学部、反芻動物の消化管機能、栄養生理学)とAbdullah Abu Sin(ゲジラ大学、農業経済学、シユクリヤ族族長)がコアメンバーとして参加する。

(2) 乾燥熱帯沿岸域開発に対する環境影響評価手法の確立

国際協力機構・サウディ・アラビア国野生生物保護委員会「サウディ・アラビア国北部紅海沿岸生物環境・生物インベントリー調査」(1997～2000)また「オマーン国マングローブ林再生・保全・管理計画調査」(2003～2005)に参加し中心的な役割を担ってきた宮本千晴(マングローブ植林行動計画、植林技法、開発実践)のサポート体制のもと、同プロジェクトの国内支援委員としても関わりが深い吉川賢(岡山大学大学院環境学研究科、樹木生理生態学、乾燥地造林学)を中心として、星野仏方(酪農学園大学環境システム学部、リモートセンシング・GIS)がコアメンバーとして参加する。

(3) 研究資源の情報共有化促進による現地住民意思決定サポート方法の構築

アラビア語、英語、日本語にも堪能で(鳥取大学、神戸大学で学位を取得)、かつプロジェクトリーダー・コアメンバーらと継続的に共同研究を行ってきた2名Abdelbagi M. A.(スーダン農業研究機構、植物生理学、生物多様性保全)とAbdelhadi A. W.(スーダン農業研究機構、水資源管理、住民参加型開発)がコアメンバーとなり、大沼洋康((株)国際耕種、環境分野アラブ人材データベース化、農村開発)、またPietro Laureano(伝統的知識世界銀行、伝統的知識データベース構築と国際管理、建築学)とも連携をしていく。

(4) 地域生態系ごとのなりわいの比較

半世紀以上にわたりアルジェリアでの現地調査を実施してきた小堀巖(国連大学、伝統的水利用、地理学)とA. Benkhalifa(アルジェリア科学技術大学、在来ナツメヤシ多品種保存、菌類学)、また多分野との連携のもとエジプトにおいて30年以上発掘調査を継続してきた川床睦夫(イスラーム考古学研究所、アラブの物質文化、港市研究)がコアメンバーとして参加し、地域生態系ごとのなりわいについての比較研究を推進する。

○これまでの研究成果と今後の課題

1. これまでの研究成果

【英語とアラビア語による出版】

1. 乾燥地のマングローブ植林・研究の将来展望に関するアラビア語・英語による出版

プロジェクトの第一段階として、リーフレット(見開き両面一枚)とブックレット(104ページ)を出版しました。リーフレットはプロジェクトの概要をアラビア語と英語で説明したものです。ブックレット『A Study of Human Subsistence Ecosystems with Mangrove in Drylands: To Prevent a New Outbreak of Environmental Problems(乾燥地のマングローブ林におけるなりわい生態系の研究:新たな環境問題の発生を防ぐために)』は、これまでアラブ社会において、日本人の手によって行われてきたフロンティア・ワークである、乾燥地のマングローブ植林・研究に関する研究成果と活動内容の概略と将来展望を一冊にまとめたものです。科学的研究と実践活動の統合知の成果を、現地研究者や地域住民と共有するために、アラビア語と英語の対訳で出版しました(それぞれ52ページ)。

ブックレットでは以下の11の事例研究と縄田浩志の論文を収録しています。

- ・ Kogo, M., C. Miyamoto, S. Suda, “Study and Activities on Mangrove Afforestation in Arabia”
- ・ Miyamoto, C. “An Inspection of the Status of Coastal Mangroves of the Southern Red Sea”
- ・ Suda, S. “Method for Mangrove Afforestation in Qatar”
- ・ Onuma, H. “The Master Plan for the Restoration, Conservation, and Management of Mangrove in the Sultanate of Oman”
- ・ Shoji, T. “A Handbook for an Avicenia marina Nursery and Transplantation Technical Guidelines for Afforestation”
- ・ Tamaei, S. “Study of Gray Mangrove (Avicenia marina) Afforestation for Greening a Desert Coast: Gray Mangrove Afforestation on the Banks of an Artificial Channel across a Sabkha and Established Biotic

Community”

- ・ Kishi, A. “A Conservation Plan for Dugong along the Northeastern Coast of the Red Sea in the Kingdom of Saudi Arabia”
- ・ Miyagi, T. “Long-term Maintenance of Arid Mangroves: Mangrove Distribution and Use in Iran and Pakistan”
- ・ Yoshikawa, K. “Ecological and Genetical Studies of Mangrove (*Avicenia marina*) Forests in the Sultanate of Oman”
- ・ Nakamura, R. “Local Mangrove Resource Use on Kilwa Island, Southern Swahili Coast”
- ・ Nawata, H. “Relationship between Humans and One-humped Camels in the Coastal Zones of the Arid Tropics: An Anthropological Case Analysis of the Beja on the Red Sea Coast of Eastern Sudan”
- ・ Nawata, H. “Coastal Resource Use by Camel Pastoralist: A Case Study of Gathering and Fishing Activities among the Beja in Eastern Sudan” (論文)

2. 国際学会での出版物の配布と出版物への評価

リーフレットとブックレットを2008年11月7日から10日にエジプトで開催された第9回国際乾燥地開発会議 (the International Dryland Development Commission) にて学会参加者に手渡しで配布しました。中東諸国 (エジプト, イラン, チュニジア, オマーン, ヨルダン, シリア, スーダン, モロッコ, イエメン) を中心に26カ国188人に配布し, アンケートに回答してもらいました。その結果88% (163人) の方から「本プロジェクトのこれからの出版物の送付を希望する」という回答を得ました。

出版物を手渡しで配布したことにより, 学会参加者から多くの質問や生の反応を受け取ることができました。アラビア語で書かれていることもあり, 中東諸国の人びと, とくに現地の大学生がプロジェクトについて積極的に興味を示してくれました。以上のような, 出版物に対する質的・量的な反応を, 本プロジェクトのプレリサーチ段階での「インパクト・ファクター」と位置づけました。現地の人びとの意見をプロジェクト活動に取り込んで, さらなる現地との研究資源や情報の共有のために, ブックレットの改訂版を出版することを予定しています。

【外来移入種の統合的管理グループの活動】

(1) オープンセミナー: “Towards an integrated plan to control an exotic species mesquite (*Prosopis* spp.)”

2008年5月12日, 13日にオープンセミナー “Towards an integrated plan to control an exotic species mesquite (*Prosopis* spp.)” と第三回プロジェクト会合を地球研にて開催しました。スーダンの研究者とともにスーダンの状況に焦点を当てて, 外来移入種の管理のための研究計画について話し合いました。

セミナーのプログラムは以下の通りです。

- ・ Nawata, H. (RIHN), “Introduction: Towards an integrated plan to control an exotic species mesquite”
- ・ Sugimoto, Y. (Kobe University), “Physiology and ecology of root parasitic plants” .
- ・ Babiker, A.G.T. (Sudan University of Science and Technology), “Mesquite (*Prosopis* spp.): Experience and lessons and the way forward in Sudan”
- ・ Fujii, Y. (National Institute for Agro-Environmental Sciences), “Allelopathy of mesquite (*Prosopis juliflora*)”
- ・ Sakata, T. (Ishinomaki Senshu University), “Approaches from comparative nutritional physiology”
- ・ Abdalla M. A. Abu Sin “My research and development plan for nomadic people in Butana, central Sudan”

(2) スーダン科学技術大学の研究者との外来移入種管理法についての話し合い

2008年10月26日から11月1日の期間, プロジェクトリーダーの縄田浩志がスーダンのハルトゥームを訪問し, スーダン科学技術大学のスタッフと外来移入種管理法について話し合いをしました。Ahmed Eltayeb Ahmed学長, Yusuf Idris農学部長, プロジェクトに参加する可能性のある研究者と議論を行いました。

(3) 外来移入種管理についての15の主要研究課題の設定

スーダン科学技術大学の研究者との話し合いの結果, 外来移入種管理について15の主要研究課題を, 研究の実施合意書の中に設定しました。それらの研究項目のもとに, スーダン科学技術大学から新たに28人のメンバーがプロジェ

クトに参加することになりました（アグロフォレストリー、林学、植物生態学、環境科学、昆虫学、病理学、農業工学、女性開発学、公衆衛生学、農業経済学、食品科学、栄養生理学、臨床病理学）。

【乾燥熱帯沿岸域の環境評価グループの活動】

(1) オープンセミナー：“Mangroves in Drylands: Seeking ways to clarify social ecosystems and to strengthen subsistence productivities, Part 2”と第二回資源プログラム会合

2008年7月23, 24日にオープンセミナー“Mangroves in Drylands: Seeking ways to clarify social ecosystems and to strengthen subsistence productivities, Part2”を地球研で開催しました（同タイトルのPart 1は2007年11月3日, 4日に開催）。

セミナーのプログラムは以下の通りです。

- ・Onuma, H. (Appropriate Agriculture International), “The Master Plan for the Restoration, Conservation, and Management of Mangrove in the Sultanate of Oman”
- ・ Kishi, A. (Shin-nippon Environmental Research Co.), “A Conservation Plan for Dugong along the Northeastern Coast of the Red Sea in the Kingdom of Saudi Arabia”
- ・ Baba, S. (University of the Ryukyus), “A Gap between Practitioners and Researchers on Mangrove from My Ten Years of Experience on the Ground”
- ・ Miyamoto, C. (Action for Mangrove Reforestation), “Study and Activities on Mangrove Afforestation in Vietnam”
- ・ Kogo, M. (Action for Mangrove Reforestation), “Study and Activities on Mangrove Afforestation in Myanmar”
- ・ Akimichi, T. (RIHN), “Mangrove in Southern Thailand”

(2) 国際サンゴ礁学会での情報収集

プロジェクトリーダー縄田浩志が第11回国際サンゴ礁学会“Reefs for the Future”（7-11 July 2008, Ft.Lauderdale, FL, USA）に参加し，“Food Habitat in the Coastal Zones of the Arid Tropics”を発表しました。

乾燥熱帯沿岸域に関わる情報を収集すると、International Network on Water, Environment and Health, United Nations University (UNU-INWEH)の調査チームが、中東湾岸地域のパーム・ジュメイラ島周辺で環境影響評価とモニタリングを開始したことが分かりました。さらに、National Coral Reef Institute とKhaled bin Sultan Living Oceans Foundationの調査チームがサウディ・アラビアのファラサーン島周辺のサンゴ礁研究を始めました。情報収集の結果、プロジェクトリーダーは紅海地域のマングローブ群落とジュゴン個体群の研究に焦点を当てる必要性を認識しました。

(3) “A Study of Human Subsistence Ecosystems with Mangrove in Drylands”の出版

乾燥地のマングローブについての二回のセミナー成果をもとに，“A Study of Human Subsistence Ecosystems with Mangrove in Drylands: To Prevent a New Outbreak of Environmental Problems.”を出版しました。日本人による乾燥地におけるマングローブ植林、マングローブの先駆的研究を含めて、なりわいに焦点を当て、さまざまな専門分野や背景をもつ研究者、実践者、プロジェクトマネージャーの知識を一冊の本に編集しました。この出版は、さまざまな知識を統合するプラットフォームを作るために、科学的結果と実践的な活動を接合させる試みの第一歩です。

【研究資源共有化グループの活動】

(1) 族長による牧畜民のための開発・研究計画をプロジェクト・メンバーと大学生と共有する

コアメンバーであるアブダッラー・アブー＝シン（ゲジラ大学理事、農業経済学）は科学的知識と在来知識の架け橋に重要な役割を担っています。彼は社会ネットワーク構築に豊富な経験を持つとともに過去と現在の問題、開発・研究に関して深い理解を持ち合わせています。

アブダッラー・アブー＝シンは、シュクリーヤ族（人口は約6万5千人）の族長であり、1994年から「全スーダン部

族長連盟 (All Sudan Tribes Leaders Association) の副議長も務めてきた人物です。1965年にハルトゥーム大学農学部を卒業し、1968年にはスタンフォード大学で農業経済の修士号を取得しています。その後は本国に戻り、1968年～1983年の間には、ニュー・ハルファ砂糖工場管理責任者、白ナイル綿花スキーム管理長などを歴任しました。

アブダッラー・アブー＝シンは、2008年5月2日に地球研においてプロジェクト・メンバーに対して“My research and development plan for nomadic people in Butana, central Sudan”を口頭発表しました。発表では、水問題、放牧地復興、森林回復、貧困削減、穀物市場開発など、地域に根づいたフィールド研究を発展させるために自身がリーダーシップを発揮して設立したブターナ大学遊牧研究所について解説しました。参加者は彼が持つ開発・研究に関する具体的な計画と深い洞察に大きな刺激を受けました。

また、プロジェクト・リーダー縄田浩志が神戸大学国際文化学部で担当している授業「開発と文化」においても特別講演をしました。牧畜民のコミュニティーに根づいた開発について大学生は多くを学ぶことができました。

(2) 乾燥地マングローブ研究の将来の展望を研究者と行政従事者と共有する

“A Study of Human Subsistence Ecosystems with Mangrove in Drylands: To Prevent a New Outbreak of Environmental Problems.”をアラビア語と英語の対訳で出版し、2008年11月7日～10日にエジプト・アレキサンドリアで開催された第九回国際乾燥地開発会議 (IDDC) の特設ブースにて、26カ国188人の参加者に手渡しで配布しました。

また、2008年11月2日に京都で開催された国際コスモス賞の授賞式会場でもブックレットを配布しました。今回の受賞者はベトナム・ハノイ教育大学のPhan Nguyen Hong名誉教授でした。Phan教授は、プロジェクトメンバーでブックレットにも寄稿した宮本千晴、向後元彦とベトナムでのマングローブ植林活動を通じて旧知の仲です。ゲストスピーカーの湯本貴和 (地球研教授) のブックレット紹介もあって、Phan教授にはもちろんのこと、会場に詰めかけた、マングローブに興味関心をもつ多くの参加者にブックレットを配布することができました。参加者からは、ブックレットの日本語版の出版を期待するという貴重なご意見をいただきました。

【地域生態系比較グループの活動】

アラブ社会での調査経験をもつ七人のプロジェクトメンバーがそれぞれの研究成果を、中東、アジア、アフリカで開催された三つの国際会議 (乾燥地開発、島嶼研究、移民研究について) で発表しました。国際的な研究者との交流や議論に基づいて、マングローブ、家畜、資源利用、および伝統的な知識の研究に関する研究目標と分析法を吟味しました。

(1) 国際乾燥地開発会議 (IDDC) での発表

小堀巖 (国連大学, コアメンバー), 吉川賢 (岡山大学, コアメンバー), 嶋田義仁 (名古屋大学, プロジェクトメンバー), 堀江恭子 (国士舘大学, プロジェクトメンバー), 縄田浩志 (RIHN, プロジェクトリーダー), 中村亮 (RIHN, プロジェクト研究員) が、2008年11月7～10日にエジプト・アレキサンドリアで開催された第九回国際乾燥地開発会議 (the ninth conference of International Dryland Development Commission (IDDC)) に参加しました。

各人の発表タイトルは以下の通りです。

- ・ Kobori, I. and K. Horie, “New trends on qanat studies”
- ・ Yoshikawa, K., Y. Yamaguchi, and S. Hayashi, “Ecological and genetical studies of mangrove (*Avicennia marina*) forests in the Sultanate of Oman”
- ・ Shimada, Y. “Reconsidering animal power as the basis of Afro-Eurasian dryland civilization”
- ・ Nawata, H. “Mangroves as fish nursery and forage safekeeping in coastal zones of the arid tropics”
- ・ Nakamura, R. “Local mangrove-resource use of Kilwa Island in southern Swahili Coast”

(2) 地球研国際シンポジウム “The Futurability of Islands” での発表

プロジェクト研究員の中村亮が、2008年10月22日、23日に地球研で開催された第三回地球研国際シンポジウム “The Futurability of Islands: Beyond Endemism and Vulnerability” で発表しました。口頭発表 “Multi-Ethnic Coexistence in Swahili Society: Multiple Ecological Sea Zones and Two Fishing Cultures in Kilwa Island, Tanzania,” において、現在のキルワ島でどのようにバントゥ系民族とアラブ系民族が共存しているのかを、漁撈文化と海環境との関係に焦点を当てて明らかにしました。

(3) カメルーン国際会議での発表

プロジェクト研究員の石山俊が、2008年11月29日にカメルーン・ヤウンデのムーナ会館で開催された国際会議“40 ans de recherche japonaise au Nord Cameroun à la mémoire d' Eldridge Mohammadou et P.K.Eguchi”で発表しました。口頭発表“La migration ‘Kanemubu’ vers le sud a la region du Lac Tchad,”において、チャド湖東岸から南岸へのカネンブの移動が干ばつの時期と連動していることを明らかにしました。乾燥地に暮らす人々は移動することによって干ばつに対応してきました。

(4) クウェート開催「日本とイスラーム世界との文明間対話」における招待講演

2001年国連により「文明間対話に関する国際アジェンダ」が定められ、ユネスコによる様々な活動が開始されました。国連がスポンサーとなった「文明間同盟」という新しいプロジェクトもあります。日本は対話の機会を増加させることに力を入れて、日本・アラブ間対話フォーラムが立ち上がりました。このセミナーでは日本とイスラーム教徒の学者間での対話を通じてフェイス・トゥ・フェイスの相互理解を深めるものです。第一回のセミナーは2002年にバーレーンで開催されました。外務省はセミナーを続けて、2009年3月11～12日にクウェートで開催されたセミナーで七回目を数えました。この年のテーマは「環境と文明」でした。

本プロジェクトは、ポスター発表の機会を与えられるとともに、プロジェクト・リーダー縄田浩志が基調講演「Japanese symbiotic relationship between human and nature, *Satoyama* (日本人にみる自然との共生関係：SATOYAMAを事例として)」を口頭発表しました。

2. 今後の課題

- (1) 本研究（フルリサーチ）初年度にあたる本年度は、調査対象国における本格的な現地調査を開始し、プロジェクト研究期間中に可能な限りの実証的な観測・計測データを収集できるための体制作りを注ぎます。主要調査対象国スーダンにおいては、外来移入種生理生態測定機材の設置、サブ調査対象国サウディ・アラビアにおいては、マングローブ樹木生理測定システムの設置をし、観測・計測体制を構築します。
- (2) 外来移入種の統合的管理グループを中心として、スーダン科学技術大学にて国際シンポジウムを開催します。
- (3) 地域生態系比較グループを中心として、中国で開催される第16回国際人類学民族学会議に参加します。
- (4) サブ調査対象国のサウディ・アラビア、エジプト、アルジェリアの研究機関と「研究協力の覚書」と「研究実施合意書」の締結を目指します。

著書（執筆等）

【分担執筆】

- ・縄田浩志 2008年11月 「外国人労働者との共同作業による環境保全—サウディ・アラビアの自然保護区における放牧をめぐる」．草野孝久編 『村落開発と環境保全—住民の目線で考える』．古今書院，東京，pp.119-134.

著書（編集等）

【編集・共編】

- ・Nawata, H. (ed.) Oct,2008 *A Study of Human Subsistence Ecosystems with Mangrove in Drylands: To Prevent a New Outbreak of Environmental Problems*. Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, Japan, 104pp. 英語,アラビア語.

論文

【原著】

- ・縄田浩志 2009年03月 「外国人労働者としての外国人研究者の役割—サウディ・アラビア西南部レイダ自然保護区の環境保全に関わるアクターの事例分析から」．李仁子・金谷美和編 『自己言及的民族誌の可能性』．東北アジア研究センター叢書，第34号．東北大学東北アジア研究センター，仙台，pp.73-93.
- ・縄田浩志 2008年07月 「サウディ・アラビアのラクダ・レース—現代に浮かびあがる、アラブ社会のネットワーク」．『季刊民族学』 125 :44-59.

会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・ 縄田浩志 「アラブの庶民とつきあう—文化人類学からみたイスラーム社会—」. 岩手イスラーム考古学研究会, 2009年02月07日, 北上. (本人発表).
- ・ 縄田浩志 「アフリカ乾燥熱帯沿岸域における人間・ヒトコブラクダ関係と家畜観」. 「人間と家畜」研究会, 2008年12月07日, 桜美林大学. (本人発表).
- ・ Babiker, A.G.T. *Mesquite (Prosopis spp.): Experience and lessons and the way forward in Sudan*. 150th Meeting of African Area Studies, Center for African Area Studies, Kyoto University, Dec 01, 2008, Kyoto. (本人発表).
- ・ Ibrahim, Ahmed Eltayeb Ahmed *Sudan University of Science and Technology: Past, Present and Future*. 150th Meeting of African Area Studies, Center for African Area Studies, Kyoto University, Dec 01, 2008, Kyoto. (本人発表).
- ・ Ishiyama, S. *La migration 'Kanemubu' vers le sud a la region du Lac Tchad. 40 ans de recherche japonaise au Nord Cameroun à la mémoire d' Eldridge Mohammadou et P.K. Eguchi*, Nov 29, 2008, Muna Hall, Yaoundé, Cameroon. (フランス語) (本人発表).
- ・ Nawata, H. *Mangroves as Fish Nursery and Forage Safekeeping in Coastal Zones of the Arid Tropics*. the ninth conference of International Dryland Development Commission (IDDC), Nov 07, 2008–Nov 10, 2008, Alexandria, Egypt. (本人発表).
- ・ Nakamura, R. *Local Mangrove-resource Use of Kilwa Island in Southern Swahili Coast*. the ninth conference of International Dryland Development Commission (IDDC), Nov 07, 2008–Nov 10, 2008, Alexandria, Egypt. (本人発表).
- ・ Kobori, I. and K. Horie *New Trends on Qanat Studies*. the ninth conference of International Dryland Development Commission (IDDC), Nov 07, 2008–Nov 10, 2008, Alexandria, Egypt. (本人発表).
- ・ Shimada, Y. *Reconsidering Animal Power as the Basis of Afro-Eurasian Dryland Civilizations*. the ninth conference of International Dryland Development Commission (IDDC), Nov 07, 2008–Nov 10, 2008, Alexandria, Egypt. (本人発表).
- ・ Nakamura, R. *Multi-Ethnic Coexistence in Swahili Society: Multiple Ecological Sea Zones and Two Fishing Cultures in Kilwa Island, Tanzania*. The 3rd RIHN International Symposium, The Futurability of Islands: Beyond Endemism and Vulnerability, Oct 22, 2008–Oct 24, 2008, RIHN, Kyoto, Japan. (本人発表).
- ・ Kishi, A. *A Conservation Plan for Dugong along the Northeastern Coast of the Red Sea in the Kingdom of Saudi Arabia*. Mangroves in Drylands: Seeking ways to clarify social ecosystems and to strengthen subsistence productivities, Jul 23, 2008–Jul 24, 2008, RIHN, Kyoto, Japan. (本人発表).
- ・ Kogo, M. *Study and Activities on Mangrove Afforestation in Myanmar*. Mangroves in Drylands: Seeking ways to clarify social ecosystems and to strengthen subsistence productivities, Jul 23, 2008–Jul 24, 2008, RIHN, Kyoto, Japan. (本人発表).
- ・ Miyamoto, C. *Study and Activities on Mangrove Afforestation in Vietnam*. Mangroves in Drylands: Seeking ways to clarify social ecosystems and to strengthen subsistence productivities, Jul 23, 2008–Jul 24, 2008, RIHN, Kyoto, Japan. (本人発表).
- ・ Onuma, H. *The Master Plan for the Restoration, Conservation, and Management of Mangrove in the Sultanate of Oman*. Mangroves in Drylands: Seeking ways to clarify social ecosystems and to strengthen subsistence productivities, Jul 23, 2008–Jul 24, 2008, RIHN, Kyoto, Japan. (本人発表).
- ・ Akimichi, T. *Mangrove in Southern Thailand*. Mangroves in Drylands: Seeking ways to clarify social ecosystems and to strengthen subsistence productivities, Jul 23, 2008–Jul 24, 2008, RIHN, Kyoto, Japan. (本人発表).
- ・ Baba, S. *A Gap between Practitioners and Researchers on Mangrove from My Ten Years of Experience on the Ground*. Mangroves in Drylands: Seeking ways to clarify social ecosystems and to strengthen subsistence productivities, Jul 23, 2008–Jul 24, 2008, RIHN, Kyoto, Japan. (本人発表).
- ・ 縄田浩志 「シルック王クウォンゴとの対話」. 日本文化人類学会第42回研究大会, 2008年06月01日, 京都大学.

(本人発表).

- 縄田浩志 「われわれの手で平和をもたらしましょう」. 日本アフリカ学会第45回学術大会, 2008年05月24日, 龍谷大学. (本人発表).
- 中村亮 「スワヒリ海岸キルワ島の海環境と住民生活: マングローブ資源利用を中心に」. 日本アフリカ学会第45回学術大会, 2008年05月24日, 龍谷大学. (本人発表).
- 縄田浩志 「外来移入種マメ科プロソピス統合的管理法の提示に向けて: 総合地球環境学研究所プレリサーチ「アラブ社会におけるなりわい生態系の研究—ポスト石油時代に向けて—」の紹介」. 農業環境技術研究所生物多様性領域セミナー, 2008年05月12日, 農業環境技術研究所. (本人発表).
- Babiker, A.G.T. *Mesquite (Prosopis spp.): Experience and lessons and the way forward in Sudan. Towards an integrated plan to control an exotic species mesquite (Prosopis spp.)*, May 12, 2008–May 13, 2008, RIHN, Kyoto, Japan. (本人発表).
- Nawata, H. *Introduction: Towards an integrated plan to control an exotic species mesquite. Towards an integrated plan to control an exotic species mesquite (Prosopis spp.)*, May 12, 2008–May 13, 2008, RIHN, Kyoto, Japan. (本人発表).
- Sugimoto, Y. *Physiology and ecology of root parasitic plants. Towards an integrated plan to control an exotic species mesquite (Prosopis spp.)*, May 12, 2008–May 13, 2008, RIHN, Kyoto, Japan. (本人発表).
- Abdalla M. A. Abu Sin *My research and development plan for nomadic people in Butana, central Sudan. Towards an integrated plan to control an exotic species mesquite (Prosopis spp.)*, May 12, 2008–May 13, 2008, RIHN, Kyoto, Japan. (本人発表).
- Sakata, T. *Approaches from comparative nutritional physiology. Towards an integrated plan to control an exotic species mesquite (Prosopis spp.)*, May 12, 2008–May 13, 2008, RIHN, Kyoto, Japan. (本人発表).
- Fujii, Y. *Allelopathy of mesquite (Prosopis juliflora). Towards an integrated plan to control an exotic species mesquite (Prosopis spp.)*, May 12, 2008–May 13, 2008, RIHN, Kyoto, Japan. (本人発表).
- 縄田浩志 「外来移入種マメ科プロソピス統合的管理法の提示に向けて: 総合地球環境学研究所プレリサーチ「アラブ社会におけるなりわい生態系の研究—ポスト石油時代に向けて—」の紹介」. 農業環境技術研究所生物多様性領域セミナー, 2008年05月12日, 農業環境技術研究所. (本人発表).
- Abdalla M. A. Abu Sin *Development and Culture.*, May 08, 2008, Kyoto University, Kyoto, Japan. (本人発表).
- 縄田浩志 「「人類学者の興味」と「現地住民の思惑」の「すれ違い」と「すり合わせ」」. 日本ナイル・エチオピア学会第17回学術大会, 2008年04月18日, 弘前大学. (本人発表).

【ポスター発表】

- Nawata, H. *A Study of Human Subsistence Ecosystems in Arab Societies: To Combat Livelihood Degradation for the Post-oil Era*. Seventh Seminar of Inter-Civilization Dialogue between Japan and the Islamic World, Eighth Seminar of Development of Islamic Ideology, “Harmonization of Civilization with Environments”, Mar 11, 2009–Mar 12, 2009, Kuwait. (本人発表).
- Yoshikawa, K., Y. Yamaguchi and S. Hayashi *Ecological and Genetical Studies of Mangrove (Avicennia marina) Forests in the Sultanate of Oman*. the ninth conference of International Dryland Development Commission (IDDC), Nov 07, 2008–Nov 10, 2008, Alexandria, Egypt. (本人発表).
- Nawata, H. *Food Habitat in the Coastal Zones of the Arid Tropics*. The 11th International Coral Reef Symposium, Jul 11, 2008, Fort Lauderdale, Florida, USA. (本人発表).

社会活動・所外活動

【依頼講演】

- Nawata, H. *Japanese symbiotic relationship between human and nature, Satoyama*. Seventh Seminar of Inter-Civilization Dialogue between Japan and the Islamic World, Eighth Seminar of Development of Islamic Ideology, “Harmonization of Civilization with Environments”, 2009年03月11日, Kuwait.

- ・ 縄田浩志 「アフリカ牧畜民の適応機構と生存戦略：スーダン東部ベジャ族の事例から考える」．帯広畜産大学・グローバルCOEプログラム「アニマル・グローバル・ヘルス」開拓拠点公開講演会「世界の草地生態系と牧畜民の草地利用」，，2009年01月29日，帯広畜産大学．

予備研究**プロジェクト番号: C-FS****プロジェクト名: メガシティが地球環境に及ぼすインパクト: そのメカニズム解明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案****プロジェクトリーダー: 村松 伸****プログラム/研究軸: 循環領域プログラム****○研究目的と内容(2008年4月～2009年3月)**

◆**背景**: 近年、都市人口の急増はすさまじく、都市の巨大化傾向は強まっている。2020年には1000万人規模のメガシティが27に達すると予測されており、これらの大半が発展途上国に位置している。こうした途上国のメガシティでは、インフラの未整備や環境管理の基盤がないまま、人口集中や開発が進展することで、気候温暖化、自然資源の枯渇といった、全球的な環境問題のみならず、都市圏域でのスプロールによる自然資源の侵食、ヒートアイランド、都市洪水、交通渋滞等の都市問題を引き起こし、21世紀の人類全体に大きなリスクをもたらすことが懸念されている。この状況に対して、都市行政、学术界、国際的援助、NGO等が、都市と環境との問題解決に動きだしてきている。しかし、従来の解決策の多くは、19、20世紀の欧米、日本等の都市の巨大化にともなう際に開発された、気候、人口規模、歴史的発展経路が異なった状況での解決策でなため、現在の発展途上国のメガシティにおける環境問題解決にすべてが適応可能であるとは言えず、かえって問題を深刻化させている場合もある。

◆**目的**: 本プロジェクトは、発展途上国のメガシティが引き起こす地球環境問題を軽減すると同時に、都市が人類に提供する恩恵を引き出すためには、どうしたらよいかという課題に解答を導き出し、新たな都市圏モデルを提案することを目的とする。そのために、発展途上国のメガシティの典型とみなされるインドネシアの首都圏、ジャボダタベック (Jabodetabek) を対象に、段階的に以下の三つのフェーズに分解して、研究を実施する。**フェーズ1** [メカニズムの解明]: 都市が環境へ及ぼすインパクトとして、再生可能環境資源 (漁業資源) の過剰収奪、都市アメニティの悪化、廃棄物 (建設廃棄物) の自然環境への悪影響、を取り上げ、その現状を把握し、問題発生メカニズムを、価値観、人の移動、長期的歴史変動等の拘束要因を含めて解明し、問題の軽減の方策を提案する。**フェーズ2** [データベースの構築と利活用]: その成果が、都市行政、NGO、市民、国外の諸機関等、多様なステークホルダーに利用可能なように、システムとコンテンツ (地理空間情報や政策等のデータベース) と協働の仕組み (合意形成) を創る。**フェーズ3** [都市圏モデルと政策の提案]: フェーズ1で得られた成果をもとに、発展途上国におけるメガシティ、および、100万～1000万の都市人口を有するメガシティ予備軍の都市圏に適応可能な、空間配置計画とシナリオ予測を提示する。

◆**「地球環境問題」の認識**: 都市の急激な人口増加と都市域の拡大は、(1) 都市の周辺や遠方に存在する自然を大量に消費し、地球環境におおきなインパクトを与える。(2) さらに、スプロール、過密によって都市域、近隣の農村、漁村等を包含する都市圏域内の環境悪化を引き起こし、それが集積して、地球全体にインパクトを与える。(3) また、都市が排泄する排泄物が、都市の周辺や遠方の自然を圧迫し、地球環境に大きなインパクトを及ぼす。本プロジェクトでは、(1) として漁業資源、木材資源、(2) として、都市アメニティ、(3) として、建設廃棄物に焦点を絞りつつ、都市と地球環境問題の全体像を観測し、その関係のメカニズムを解明する。

◆**研究対象 (地域) と「地球環境問題」との関係**: 本研究の対象は、今後、人口が急増し、かつ、必ずしも地球環境問題に敏感であるわけでない発展途上国のメガシティとメガシティ予備軍とする。それらは、今後ますます地球環境への負荷を増大させる危険性を持った都市である。しかし一方で、現在より多くの環境負荷を生み出している先進国のメガシティに比べ、低環境負荷で生きる知恵を保持している可能性もある。そのため、正負両面を研究することで、全球的に都市が及ぼす地球環境問題の解決に資することができる。

○進捗状況(2008年4月～2009年3月)

◆**ジャカルタ予備調査 (8月～10月) での成果**: ①空間変動研究チームの温熱環境のデータとその分析、②資源消費研究チームにおける水産資源、森林資源に関するインタビュー成果と水産資源と都市変動に関するワーキングペーパー、③価値観研究チームによる、4人の専門家インタビューと8人のライフスタイル調査の成果 (地球研村松

F Sプロジェクト編「ジャカルタプレインレビュー調査2008報告書」)があり、本研究プロジェクトのフレームワークの調整に貢献し、今後の調査の実施に見通しが得られた。

◆**全球都市全史研究での成果**：東京、北京、ソウル、ジャカルタ、デリー、サマルカンド、モスクワ、イェルサレム、カイロ、ローマ、パリ、コペンハーゲンの12都市について、人口と市街地区域の変動を比較検討した。その結果、超長期で全球の都市の変動を比較する可能性と限界を理解し、今後のこの班の研究の進展についてフィードバックを得た。(地球研村松F Sプロジェクト編「全球都市全史パイロットプロジェクト：都市の拡大・縮小の原因を歴史的に解明する」)

◆**協同体制における成果**：①インドネシア大学工学部からLOI (Letter of Intent)を取得、この組織を中心に同大学の他の学部、タルマナガラ大学、ボゴール農科大学、ジャカルタ市政府の専門家とジャボデタベックにおける協同研究体制を組織できた。②コペンハーゲン大学のコア・メンバーのハンス・アンデルセンは、JSPSの短期訪問学者として、2009年5月16日～6月7日まで、本プロジェクトリーダー、村松の研究室(東京大学生産技術研究所)に滞在する。③コア・メンバーの林憲吾が、8月から2ヶ月、ジャカルタに滞在し、予備調査をサポートすると同時に、調査体制の強化につとめた。また、同じくメンバーの松田浩子が、2008年度8月より、ジャボデタベックの都市水利史の研究を目的で、オランダ・デルフト工科大学に留学した。

◆**メンバーの補充**：本プロジェクトの堅実なる進展に益することを目的として、インドネシア地域資源管理学(原科幸爾)、環境経済学(森宏一郎)、都市計画(岡部明子)、都市設計(太田浩史)、華人史(上田信)、サウンドスケープ(鳥越けい子)を新たに本プロジェクトのコア・メンバー、メンバーとして迎えた。

◆**2回の全体集会と各班の研究会の開催**：7月12日@東京大学生産技術研究所、11月17日@地球研における2回の全体集会を開催し、前年度のF Sの状況、問題点の検討、ジャカルタ予備調査の検討、P Sに向けてのプロジェクトの目標、フレームワーク等の調整をおこなった。

○共同研究者(所属・役職・研究分担事項)

- ◎ 村松 伸 (総合地球環境学研究所・准教授・建築史、都市史)
- 木下鉄矢 (総合地球環境学研究所・教授・中国思想史)
- 籠谷直人 (京都大学人文科学研究所・准教授・アジア経済史)
- 深見奈緒子 (東京大学東洋文化研究所・非常勤講師・東洋都市史、建築史)
- 加藤浩徳 (東京大学大学院工学系研究科・准教授・交通工学)
- 山下裕子 (一橋大学商学部・准教授・経営学)
- 木村武史 (筑波大学大学院人文社会科学研究科・准教授・宗教学)
- 山崎聖子 (電通総研・主任研究員・価値論)
- Widod, Jphaness (国立シンガポール大学建築学部・講師・架橋都市論)
- 谷口真人 (総合地球環境学研究所・准教授・水文学)
- 村上暁信 (筑波大学大学院システム情報工学研究科・講師・緑地計画学)
- 栗原伸治 (日本大学 生物資源科学部 生物環境工学科・准教授・建築人類学)
- 原科幸爾 (岩手大学農学部農林環境科学科・講師・緑地環境学)
- 林玲子 (保健予防省・大臣官房技術顧問・都市人口学)
- 森宏一郎 (東京大学生産技術研究所・協力研究員・環境経済学)
- 鳥越けい子 (青山学院大学総合文化政策学部・教授・環境文化学(サウンドスケープ論))
- 奈尾信英 (東京大学大学院総合文化研究科・講師・ヨーロッパ建築史・都市史)
- 北垣亮馬 (東京大学大学院工学系研究科・特任助教・材料工学)
- 竹内渉 (東京大学生産技術研究所・講師・リモートセンシング)
- 志摩憲寿 (東京大学大学院工学系研究科社会基盤学科・助教・都市計画)
- 遠藤崇浩 (総合地球環境学研究所・助教・政治史)
- 岡部明子 (千葉大学大学院工学研究科・准教授・都市政策・地域計画)
- 太田浩史 (東京大学生産技術研究所・講師・都市再生学)
- 伊藤香織 (東京理科大学理工学部建築学科・准教授・都市計画・空間情報科学)
- 谷川竜一 (東京大学生産技術研究所・助教・建築史・都市史)
- ANDERSEN, Hans Thor (コペンハーゲン大学地理学科・准教授・都市地理学)
- 林憲吾 (東京大学生産技術研究所・プロジェクト研究員・建築史・都市史)

○当初の計画

◆PR (2009年度) 〔キックオフ〕〔フェーズ1：メカニズムの解明(1)〕：(1) ジャボデタベックにおいて、インドネシア大学とともにキックオフ研究会を開催。今後の研究調査の具体的な方向、内容、スケジュールについて検討。MOUを締結。(2) 各班、チームはジャボデタベックでの調査①。コペンハーゲン調査の予備調査。東京調査①。(3) オランダ、デルフト工科大学、ライデン大学とのジャカルタ共同研究体制の確立。(4) 「都市と地球環境研究会」の定期的開催(年5回程度)。(5) 各班の人員の補充、定期的研究会の開催。全体研究集会(キックオフ研究会@ジャボデタベック、全体研究集会@京都)の開催と研究成果の交換と検討。

◆FR 1 (2010年度) 〔フェーズ1：メカニズムの解明(2)〕：(1) 各班、各チームのジャボデタベック共同調査②。コペンハーゲン調査①。東京調査②。(2) 「都市と地球環境研究会」の定期的開催。(3) 各班、チームの定期的研究会の開催。全体研究集会(2回)の開催と研究成果の交換と検討。

◆FR 2 (2011年度) 〔中間〕〔フェーズ1：メカニズムの解明(3)〕〔フェーズ2：データベースの構築と利活用(1)〕：(1) ジャカルタ共同調査③。コペンハーゲン調査②。東京調査③。(2) 政策のデータベース化①。(3) ジャボデタベック地理空間情報システムの構築とその利用法の検討①。(4) 「都市と地球環境研究会」の定期的開催。(5) 各班の研究会の開催。全体研究集会(2回)の開催と研究成果の交換と検討。(6) 研究の中間成果の検討と調整。

◆FR 3 (2012年度) 〔フェーズ1の補足〕〔フェーズ2：データベースの構築と利活用(2)〕：(1) 班ごとに、ジャボデタベック、コペンハーゲン以外の都市の調査①。コペンハーゲン調査②。(2) 政策のデータベース化②。(3) ジャカルタ地理空間情報システムの構築とその利用法の検討②。(4) 「都市と地球環境研究会」の定期的開催。(5) 各班、チームの定期的研究会、全体研究集会(国際シンポジウム@ジャボデタベックを含む)の開催と研究成果の交換と検討。

◆FR 4 (2013年度) 〔フェーズ2：データベースの構築と利活用(3)〕〔フェーズ3：都市圏モデルと政策の提案(1)〕：(1) 班ごとに、ジャボデタベック、コペンハーゲン以外の都市の調査②。(2) 政策のデータベース化③。(3) ジャカルタ地理空間情報システムの構築とその利用法の検討③。(4) 都市圏モデルと政策の提案①。(5) 「都市と地球環境研究会」の定期的開催。(6) 各班、チームの定期的研究会の開催。全体研究集会(2回)の開催と研究成果の交換と検討。(7) プロジェクト成果出版物のとりまとめ①。

◆FR 5 (2014年度) 〔まとめ〕〔フェーズ3：都市圏モデルと政策の提案(2)〕：(1) 補足研究調査の実施。(2) 都市圏モデルと政策の提案②。(3) プロジェクト成果出版物のとりまとめ②。(4) 「都市と地球環境研究会」の定期的開催(年6回程度)。(5) 各班の定期的研究会の開催。全体研究集会(国際シンポジウム@京都を含む)の開催と研究成果の交換と検討。

○これまでの研究成果と今後の課題

◆研究のフレームワーク：都市のシステムとその動態の解明をめざした昨年度FSの目標から、メガシティが引き起こす地球環境問題に対象をしばりこみ、かつその典型都市としてジャボデタベックに焦点を当てることにした。また都市域のみならず、その周辺の耕地、里地、里山、里海を包括する都市圏域全体を一括して見る視点、それに影響を与えるインドネシア、東南アジア、中国・インドなどの都市影響圏を設定する視野を獲得できた。

◆研究の内容：都市と自然資源について、水産資源、森林資源を特にジャボデタベックで予備調査した。その結果、都市における局地的な現象が、消費(近海魚、遠海魚の消費、木材の消費等)によって都市を越えた都市影響圏、さらには、地球環境全体に連鎖的につながっていることを確認した。また、空間変動研究チームによるジャボデタベックの郊外の温度・風向・インタビュー調査によって、無秩序な都市拡大(スプロール)が引き起こす居住環境へのインパクト(室内温度の上昇、都市洪水の発生、風向きの変化など)を確認し、今後の本調査における成果獲得の確信を得た。

◆ジャボデタベックという都市圏の実態の獲得：ジャボデタベックにおける専門家4人へのインタビュー(ジャカルタ市役所、NPO、学术界)、異なった階層、年齢、居住位置の8人のジャカルタ居住者への価値観予備調査では、ジャカルタの持つ都市問題の核心(都市の歴史の拘束性、ガバナンスの問題)、価値観、ライフスタイルの実態

が明らかになり、研究のフレームワークの設定、今後の調査で具体的な成果を得る可能性を確認できた。

◆**全球都市全史研究チームのパイロットプロジェクトでの成果**：115都市の歴史的人口変動から、メガシティとその予備群の動向をとらえた。12都市の歴史を巨視的に見ることによって、都市を全球的に超長期的に観測することの可能性（都市の物理的大きさ・人口の変動が、何によって引き起こされているか、何を引き起こしているのか等の仮説）と限界を確認し、30程度の都市に絞って、より詳細に分析することとした。

◆**研究体制についての成果**：プロジェクトリーダーが昨年以上にリーダーシップを発揮し、各班と緊密な連携をとり、よりよい全体の整合性を採用するように努めた。また、新たなコア・メンバー、メンバーの採用により、プロジェクトの可動域が幅広くなった。

今後の課題

◆インドネシアの社会経済分野、開発、廃棄物による自然環境条件の変化や生態系への影響に関わる分野、そして、データの統合とデータベースの構築を扱う分野において、専門家のさらなる補充と連携の必要性を感じている。したがって、インドネシア経済史、政治学、空間情報システム、さらに生態学の専門家のプロジェクトメンバーへの補充、オランダにおけるジャボデタベック都市研究の専門家との連携が、来年度の課題のひとつである。外部に応援も求めると同時に、地球研内部の他のプロジェクトとの連携を深めたい。

◆近年、国際的に行われている、メガシティをはじめとした都市と地球環境との連関を扱う数々のプロジェクトでの研究ならびにその成果が、十分に共有化されていない。したがって、国際組織、UGEC (Urbanization and Global Environmental Change) などとの連携を強固にし、本プロジェクトのエンドースメントを考えている。

著書（編集等）

【編集・共編】

- ・木村武史編 2008年04月 サステイナブルな社会を目指して。春風社、横浜市、319pp.

一般共同研究（インキュベーション研究）

中央アジアにおける遊牧民と農民の環境史学

宇野隆夫（国際日本文化研究センター 教授）

地球研の共同研究者：佐藤洋一郎

中央アジアは、ユーラシアの十字路口である。本プロジェクトは、未解明の遊牧民の起源、および中央アジアにおける過去1万年の環境の変化をまず明らかにしようとするものである。そして遊牧民と農民の営みと交流、それらと中央アジアの環境変化との関わりを明らかにすることによって新しい環境史学を確立し、ひいては未来の人類と自然の相互作用に関する知見を得ることを目的としている。

そのため我々はまず中央アジアの詳細三次元地形図を作り、地形分析をおこなった。またGPSを用いて現地調査した遊牧民と農民の遺跡の分布をDEM上に表示した。さらにゼラフシャン川中流域のシルクロード都市であるダブシア遺跡の発掘を開始して、考古学の遺構・遺物だけではなく、多くの動物骨資料や花粉資料を得ている。

全球結合モデルによる飢餓指標の開発

松村寛一郎（関西学院大学総合政策学部メディア情報学科 准教授）

地球研の共同研究者：谷口真人

全世界レベルでの飢餓指標を開発するために、様々なデータセットおよび地理情報の収集を行った。全世界の食糧を対象とするための事前準備の一環として夜間光衛星画像データ、国際稲研究所が整備しているデータセットなどを総合的に組み合わせることにより、総合的な米の需要動向についての計算を行った。政策的な面の重要性も把握するために、世界各国の食料に関する政策についての情報の収集も合わせて行い、これらの情報データをWEB上に公開し、情報を広く収集するための仕掛けづくりの概念設計を行った。

温暖化の緩和と地球環境～循環型家族・コミュニティ・価値観の視点から～

山岸治男（大分大学教育福祉科学部 教授）

地球研の共同研究者：秋道智彌

人類は自然との関係を調節しながら、住居可能地域を広げてきた。日本の場合、中山間地や島嶼にも人々が住み着いた。だが、1965年以後、経済成長に伴い、中山間地や島嶼は過疎化し、現在、集落の社会的機能が維持できない「限界集落」が生まれている。これらの集落が崩壊したとき予想されるのは次の問題である。①生態系の異変、②災害の多発、③国内産食糧の減少。問題を未然に防ぐには過疎化の緩和が必要である。本研究では、豊後大野市の一地区を対象に、過疎化する集落の生活実態を、生産、流通、消費、集い、生きがい、福祉、教育、文化などの複合的視点から調査した。改善策として必要なのは次の通りである。1) 循環型家族、2) コミュニティ、3) 自然との共存を実現する価値観。

急激に変化する中国・長江流域の人間活動と自然の相互作用

田中広樹（名古屋大学 地球水循環研究センター研究機関研究員）

中国では、1978年の改革開放以降、特に1992年以降の急激な経済発展に伴って、大規模な変化が起こっている。地表面被覆の変化は、温暖化や豪雨頻度増加などの気候変化とあいまって、地域の水循環を変化させ、洪水や旱魃などの地域環境問題を生む。長江流域における地域環境問題は、経済活動を通じた影響だけでなく、大気と海洋を通じて日本の自然環境にも大きな影響を及ぼす。本研究では、特に、長江流域における農業活動と水循環の相互関係に着目し、様々な時空間スケールの環境問題への理解に必要な研究課題の整理を行った。代表的な支流域であるポーヤン湖流域における降水量、河川流量、稲作面積、被災面積の関係解析によって、1992年を境とした水循環変化に対する地域の感受性の変化が明らかとなった。この変化メカニズムを詳細に理解するために、現地フィールド調査を伴った地域社会の実態把握と水循環に関する高精度データによる解析のための準備を開始した。

東南アジア沿岸域における生物資源の持続的利用に向けた提言—科学的研究成果と地域住民意識の調和への取り組み—

石川智士（東海大学海洋学部 准教授）

地球研の共同研究者：秋道智彌

陸域と海域の双方から影響を受ける沿岸域には、複雑で生物多様性が高い生態系が形成されている。同時に、多くの人もそこに暮らし、多種多様な生物を様々な形で利用している。生物多様性が高いということは、それぞれの生物資源の量は小さく脆弱であることを意味する。また、資源の利用者が様々であることは、資源の状況把握と資源管理を困難にさせている。本研究では、これまでに行われてきた調査研究活動の成果をとりまとめる。加えて、学際的な野外調査を実施することで、資源の状況と利用実態を把握するための、統合データベースを構築する。このデータベースを利用することで、資源状態を科学的に再評価し、住民にも受け入れられる資源管理方策の立案を目的としている。これまでに、タイ国水産局、フィリピン国水産局ならびに東南アジア漁業開発センターと共同研究体制を確立し、パイロットプロジェクト地区における住民との対話を開始した。

開発と自然・社会環境変化に対する移民・流動人口・難民の生活適応と環境影響

須田 一弘（北海学園大学人文学部 教授）

現在、世界各地で進行している開発は、住民がそれまで利用してきた生活域の自然環境・資源の剥奪や攪乱を招き、社会環境も大きく変化させている。これに対し住民は、従来の場所に留まり開発に積極的に関わるか、他の地域や国へ移動することによって生活を継続しようと試みる。また、開発に引き寄せられ、他の地域や国から流入して来る人々もいる。このように開発を契機として生じた人口流動は、先住者と間に軋轢を生じさせ、熱帯林の減少やヘイズなどの環境問題を引き起こすことも予想される。本研究は、東南アジアで進む開発と人口流動化に伴う自然・社会環境の変容を評価し、その影響を定量的に明らかにするための研究方法を確立することを目的として実施し、国内外の研究者の協力を得て、人間・環境・活動について分析するための研究計画を具体化した。

急激な新興作物の導入がもたらす生態系の不安定化と汚染—ウォーレス地域と周辺島嶼部におけるバイオエタノール用作物の場合を中心に—

佐藤 雅志（東北大学大学院生命科学研究所 准教授）

地球研の共同研究者：湯本貴和

「緑の革命」穀物品種やエネルギー作物などの近代農業の導入は、スラウェシ地域をはじめ東南アジアの農村で新たな地球環境問題を引き起こし、持続可能な作物生産が危惧されている。この研究では、東南アジア地域における持続可能な作物生産のあり様へ向けての提言を目標とすることとした。その目標にむけて、1) 在来農業と近代農業が混在し移行しつつある地域の選定、2) 選定地の耕地生態系における生物多様性および遺伝的多様性、文化社会基盤について予備的に調査した。5月にはスラウェシ地域、11月にはラオス国北部から南部地域までを調査した。その結果、スラウェシ地域にはオイルパームやトウモロコシなどのエネルギー作物の大規模栽培地が拡大していること、ラオス国では改良イネ品種導入の拡大に向け社会基盤が近代化しつつあることを確認し、これらの地域を研究対象地域として選定した。

持続千年首都・平安京の生態智の総合的研究と世界平安都市モデル構想

鎌田 東二（京都大学こころの未来研究センター 教授）

地球研の共同研究者：湯本貴和

本研究においては、平安京が千年以上首都として持続してきた持続可能性の理由を、①水の都、②祈りの都、③ものづくりの都、④里山文化の都などの「生態智」の活用にあるとらえ、その物質的基盤（水、食料、燃料、材木、ゴミ問題、ヒトの流れ）と精神的基盤（宗教、象徴性、呪術性、霊性）と技術的基盤（芸術、技芸、学問）を総合的に考察した。その際、「生態智」を、平安京という地域と歴史の中で発達を遂げ変容を重ねた「自然と人工との持続可能な創造的バランス維持システム」と定義し、平安京という都市の活力と底力をその「生態智」に見、それを未来の「世界平安都市モデル構想」の有効事例として位置づけつつ、資源論、産業形態、政治システム、宗教機能、文化創造、観光産業、環境都市としての平安京の総合的解明を試みた。とりわけ、平安京・京都の資源学的研究を平城京

や周辺諸地域と比較し、後背地問題や物流網の発達と、天皇や寺社への奉納文化とのかかわりを考察した。

人口動態解析に基づく自然共生型流域・沿岸域ネットワーク社会の形成

大森浩二（愛媛大学沿岸環境科学研究センター 准教授）

地球研の共同研究者：川端善一郎

温暖化・寒冷化を含めた地球環境変動及び世界経済変動に強い、適度人口規模をもつ多様な生活様式（水・農水畜林産物・エネルギー・生活の質（商工産物））を許容できる未来可能性のある自然共生型流域・沿岸域ネットワーク社会の形成を目指す。それは、また、地球環境問題解決の道筋でもあろう。

2008年度においては、以下の項目についての結果を得た。

- ・人口動態モデル、流動モデル、土地利用—河川流出負荷モデルの作成。
- ・統合モデルのフローチャート作成。
- ・統合モデル用プラットフォームソフトウェアの選定（動的一般均衡経済モデル）。
- ・予測シナリオ用モデル等の選定。
- ・コア調査地の選定。

以上の結果より、統合モデルのフローチャートが作成でき、具体的にプログラムをコーディングする段階に入った。

危機に瀕している沿岸地帯の環境システムに関する研究— GIS とリモートセンシングを用いた海洋大陸における環境気候とリスクの解析—

SANGA-NGOIE Kazadi（立命館アジア太平洋大学 教授）

地球研の共同研究者：渡邊紹裕

沿岸の環境は非常に多様で地球全体の沿岸地帯に亘って極めて活発な環境システムである。沿岸地帯というこの曖昧な概念は沿岸海洋を取巻く地球の一部と潮間帯（前汀）を含む沿岸（後浜）に隣接する土地の一部を定義しようとするものである。河口、潮間帯の平地、マングローブ林、潟湖と塩池、海草、岩や砂浜、サンゴ礁、大陸棚、風光明媚な海岸沿いの都市、港、リゾートビーチ等は全てこの豊かな環境システムの一部である。しかし、これら沿岸地帯の環境システムは自然と人間活動が関係する原因により、今日ではその変化は深刻で、時には取り戻すことが出来ず、突然であったり進行していたりする。そして特に人々が多く住んでいて自然災害に見舞われ易い東南アジアとオセアニア（海洋大陸）でまさに起っている。フィリピンのネグロス島を事例研究として、我々は GIS とリモートセンシングをツールとして使用し、衛星探査データ及び現場調査で収集した気候・環境データに基づき、沿岸地帯の環境システムの状態やリスクを評価した。以下の初期の知見を得た。：（1）ネグロス島の陸地における森林破壊が深刻で（1940年に70万ha、現在3万ha以下）、残存する森林は極めて疎らである。（2）殆どのマングローブ林は、養魚池や人間の居住用に開発され、海岸沿いに僅かしか残っていない。（3）ネグロス島には、大変豊富な陸地と海洋の生物多様性があり、固有種もまだ沢山残っている。（4）降雨は雨量、分布ともに非常に変わりやすく、しばしば高潮や洪水、土砂崩れに見舞われる。（5）海岸沿いに海面上昇による顕著な土壌の浸食や海水の浸入が見られた。

こういった知見を新たなインプットとして更に正確なハザードマップと適切な理解、緩和、予防の為のシナリオを作成し、研究を進める予定である。

研究推進センター（研究推進戦略センター）の概要と活動

地球研創設以来の研究推進センターは、2007年10月1日から新たに研究推進戦略センター（CCPC：Center for Coordination, Promotion and Communication、以下、戦略センター）として再編した。戦略センターは、地球研の基本理念に基づき、既存の学問分野の枠組みを超えた新たな視点を見出すための基盤作りを行うことを目的に設けられたものである。

戦略センターは、地球研の研究プロジェクトを多面的に支援し、得られた研究情報や成果を集積・発信し、さらに新たな研究を創出するための戦略を策定する重要な機能を担っている。その機能を実現するために、戦略センターに機動的な3つの部門を配置した。それらは、(1) 戦略策定部門、(2) 研究推進部門、(3) 成果公開・広報部門である。

(1) 戦略策定部門：

地球環境学の構築、研究戦略の策定、研究プロジェクトの評価システムの検討、国内外における諸研究機関との研究連携の推進、地球環境学や環境問題に関する世界的な研究動向に関する調査と情報収集、大学院教育への協力や若手研究者の育成に向けての基盤整備をおこなうことを主要な業務としている。また、地球研の全体研究発表会の運営を担当し、研究の活性化に努める。さらに2007年度には、終了プロジェクトの評価方法に関する検討を開始した。また、全国の大学における附置研究所や研究センターとのネットワークを構築することを目的とした「地域環境情報ネットワーク」を立ち上げた。

(2) 研究推進部門：

地球環境学に関する研究情報の収集と分析ならびにデータベースの構築、研究アーカイブスの整備と維持管理、文献図書、地図などの諸資料の収集と整備、水、生物資料を用いた地球環境学の分析に資する実験施設の管理と運営、国内外で展開される多様な形態の野外調査・研究への支援と管理などをおもな業務としている。とくに終了したプロジェクトの成果を集積し、公開する準備を進める。

(3) 成果公開・広報部門：

地球環境学や環境問題、研究プロジェクトの成果などの発信に関する方針を策定し、各種のシンポジウム、研究会、セミナーを実施するとともに、成果の出版をおこなう。これらの活動を国内外の研究者や一般市民に発信するための広範囲な活動を実施することをおもな業務としている。2007年度は、地球研国際シンポジウム、地球研フォーラム、地域セミナー、市民セミナーなどをおこなった。研究の成果として『地球研叢書』、『地球研ライブラリー』を出版するとともに、研究情報の発信のための『地球研ニューズレター』（Humanity & Nature Newsletter）を発刊した。また、新聞における地球環境問題に関する連載や地元小中高校との学習会を実施した。『地球研十年史』（仮称）出版のため、関連する資料収集と関係者へのインタビューなどを開始した。

以上の3部門には選任の部門長が配置され、部門ごとに実働のグループとなるいくつかのタスクフォースが配置されている。タスクフォースの作業は、戦略センターの専任スタッフ以外に、研究部と管理部の密接な連携と協力の元におこなうことになっている。また3部門は相互の連携を元に戦略センター全体としての機能を果たすために、部門長会議、戦略センター会議をおこなう。

研究成果の発信

1. 国際シンポジウム

地球研の本研究プロジェクト（2本）が2009年3月で終了するにあたり、地球研としての研究成果を広く世界に発信するために、第3回地球研国際シンポジウム「島の未来可能性：固有性と脆弱性を越えて」を2008年10月22日・23日の両日に地球研講演室にて開催した。詳細は下記のとおり。

第3回地球研国際シンポジウム「島の未来可能性：固有性と脆弱性を越えて」

<プログラム>

10月22日（水）

Opening Session

Chair: ENDO Takahiro, *RIHN*

Opening Remarks

TACHIMOTO Narifumi, *Director-General, RIHN*

Objectives of the Symposium

YUMOTO Takakazu, *RIHN*

Keynote Address

Implementing the Madrid Action Plan: UNESCO Island Biosphere Reserves

Miguel CLÜSENER-GODT, *Division of Ecological and Earth Sciences, UNESCO, France*

Session 1 Conceptualizing and Acting in Island Environments, Past and Present

Chair: SEKINO Tatsuki, *RIHN*

Environmental Consciousness, Inner and Outer

YOSHIOKA Takahito, *Field Science Education and Research Center, Kyoto University*

Environmental Attitudes and Behaviors among Jeju Islanders, South Korea

Dai-Yeun JEONG, *CheJu National University, South Korea*

The Palaeoecology of Initial Polynesian and European Impacts on Remote Pacific Islands

Matthew PREBBLE and Simon HABERLE, *Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University*

Discussant

Simon HABERLE, *Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University*

Session 2 Conservation, Livelihood, and Culture in Island Parks and Reserves

Chair: SATO Yo-ichiro, *RIHN*

Linking Livelihoods and Conservation: Challenges Facing Galapagos Islands

Mark GARDENER, *Terrestrial Research, Charles Darwin Foundation, Ecuador*

Biosphere Reserves as Laboratories for Sustainable Development: The Case of Vietnam

NGUYEN Hoang Tri, *Center for Environmental Research Education, Hanoi University of Education, Vietnam*

Ngaremeduu Biosphere Reserve, Palau

Alma RIDEP-MORRIS, *Ministry of Resources and Development, Palau*

Linking Conservation Biodiversity and Culture Diversity at Komodo National Park, Indonesia

Tamen SITORUS, *Komodo National Park, Indonesia*

The Future of Traditional Culture: Preservation and Transmission of the Performing Arts and Cultural Landscape on Taketomi Island, Okinawa, Japan

UESEDO Yoshinori, *Kihojin Folklore Museum, Taketomi Island*

YUMOTO Takakazu, *RIHN*

Sustainability Concerns on Iriomote Island, Japan

TAKASO Tokushiro, *RIHN*

Discussant

NAGASHIMA Shunsuke, *Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands*

10月23日(木)

Session 3 Island Development in Local and Global Contexts

Chair: NAWATA Hiroshi, RIHN

Multi-Ethnic Co-existence in Swahili Society: Multiple Ecological Sea Zones and Two Fishing Cultures in Kilwa Island, Tanzania

NAKAMURA Ryo, *RIHN*

Managing Environmental Diversity for Sustainable Human Communities: Lessons from East Maui, Hawai'i

John CUSICK, Environmental Center, *University of Hawaii at Manoa, USA*

A *Tikopia* in the Global Era: Using Mediation to Empower Coffee Growing Communities in East Timor

ABE Ken-ichi, *RIHN*

SIDS Version 2.0: A Fresh Consideration of Development Strategies for Smaller Island States and Territories

Godfrey BALDACCHINO, *Island Studies Programme, University of Prince Edward Island, Canada*

Discussant

Daniel NILES, *RIHN*

Session 4 Discussion and Conclusion

Chair: SHIRAIWA Takayuki, RIHN

Closing Keynote

IWATSUKI Kunio, *The Museum of Nature and Human Activities, Hyogo*

Concluding Comment

WATANABE Tsugihiko, *RIHN*

Symposium Closing

AKIMICHI Tomoya, *RIHN*

BUSINESS MEETING

Moderator Daniel NILES, RIHN

2. 地球研フォーラム

「地球環境問題とは何か?」「総合地球環境学とはどういうものか?」「それでなにがわかるのか?」「地球環境問題は将来どうなっていくのか?」「地球環境問題は解決できるのか?」このような疑問に答えるべく地球研フォーラムでは、地球研の理念、研究成果に基づき将来を見越した具体的な問題提起を行い、議論を促す。とくに「いわゆる地球環境問題の根源は人間の文化の問題」という観点を重視する。

本年度は第7回目を下記のとおり開催した。

第7回地球研フォーラム「もうひとつの地球環境問題 会うことのない人たちとともに」

日時：2008年7月5日(土)

会場：国立京都国際会館

<プログラム>

所長挨拶 立本成文(総合地球環境学研究所長)

講演

「エビから見えてきたもの」 村井吉敬(早稲田大学アジア研究機構教授)

「アムールトラの棲む森は今一木材越境が招く危機」 山根正伸(神奈川県自然環境保全センター・専門研究員)

「越境する健康問題ーリスクのパラドックス」 門司和彦(総合地球環境学研究所教授)

「つなぐ」こと：東ティモールの環境保全型コーヒー栽培 阿部健一（総合地球環境学研究所教授）
パネルディスカッション

村井吉敬、山根正伸、門司和彦、阿部健一

司会：窪田順平（総合地球環境学研究所准教授）

3. 地球研市民セミナー

地球研の研究成果を広く一般市民に情報提供することを目的として、2004年11月から始まったものであり、2008年度においては本研究所の講演室またはハートピア京都にて次のとおり計7回開催した。

地球研研究スタッフが講師となり、地球環境問題を具体例に則して分かりやすく解説し、会場から熱心な質問が毎回寄せられている。

第25回 2008年4月18日 「マレーシア熱帯林とモンゴル草原の大自然と環境破壊」

酒井 章子（地球研准教授）、藤田 昇（京都大学生態学研究センター助教）、山村 則男（地球研教授）

第26回 2008年5月16日 「地球環境の変化と健康—人々のライフスタイルを変えるには—」

門司和彦（地球研教授）、奥宮清人（地球研准教授）

第27回 2008年9月19日 「捕鯨論争—21世紀における人間と野生生物の関わりを考える—」

星川淳（グリーンピース・ジャパン事務局長）、秋道智彌（地球研副所長・教授）

第28回 2008年10月17日 「年輪年代学—過去から未来へ—」

光谷拓実（地球研客員教授）、佐藤洋一郎（地球研教授）

第29回 2008年11月21日 「厳寒のシベリアに暮らす人々と温暖化」

井上元（地球研教授）、高倉浩樹（東北大学東北アジア研究センター准教授）

第30回 2009年1月23日 「里山・里海から SATOYAMA SATOUMI へ」

あん・まくどなど（国連大学高等研究所、いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット所長）、阿部健一（地球研教授）

第31回 2009年3月13日 「南極から地球環境がよく見える」

中尾正義（人間文化研究機構理事）、斎藤清明（地球研教授）、白岩孝行（地球研准教授）

4. 地球研地域セミナー

日本の地域ごとの環境と文化に関するさまざまな問題を、地球研の研究スタッフと地域の有識者が会し、地域の人々とともに考え活発な議論を行う。2005年度より新たに始めたもので、2008年度は下記のとおり開催した。

第4回地球研地域セミナー「災害と「しのぎの技」—池島・福万寺遺跡が語る農業と環境の関係史—」

日時：2008年11月8日

会場：大阪府立弥生文化博物館 1階ホール

主催：総合地球環境学研究所、(財)大阪府文化財センター

後援：大阪府教育委員会、大阪府立弥生文化博物館、朝日新聞社、産経新聞社、毎日新聞社、読売新聞社

<プログラム>

開会の辞 立本 成文（総合地球環境学研究所所長）

第一部「考古学からみる災害の爪痕」

基調講演 大庭 重信（大阪市文化財協会文化財研究部学芸員）

対 談 井上 智博（大阪府文化財センター・副主査）

大庭 重信（大阪市文化財協会文化財研究部・学芸員）

第二部「自然科学分析からみる災害としのぎの技」

パネルディスカッション

・パネリスト 宇田津 徹朗（宮崎大学附属農業博物館准教授）、藤井 伸二（人間環境大学准教授）、木村 栄美（総合地球環境学研究所研究員）、田中 克典（総合地球環境学研究所研究員）

まとめ 佐藤 洋一郎（総合地球環境学研究所教授・副所長）

閉会の辞 金光 正裕（大阪府文化財センター池島支所長）

総合同会 阿部 健一（総合地球環境学研究所教授）

第5回地球研地域セミナー（琉球大学観光産業科学部共同企画）

「やんばるに生きるー自然・文化・景観のゆたかさを育む地域と観光ー」

日時：2009年2月13日・14日

会場：名護市民会館 中ホール、国頭村比地公民館

主催：総合地球環境学研究所、琉球大学観光産業科学部

後援：内閣府沖縄総合事務局、環境省那覇自然環境事務所、沖縄県、沖縄県教育委員会、名護市、国頭村、大宜味村、東村、今帰仁村

協力：国頭村比地公民館

<プログラム>

2月13日

第1部「やんばるの人と自然、そして観光」

開会挨拶 琉球大学観光産業科学部長 平敷徹男 ※代理 琉球大学教授 花井正光

導入講演 総合地球環境学研究所長 立本成文

講演1 総合地球環境学研究所教授 湯本貴和

講演2 今帰仁村歴史文化センター館長 仲原弘哲

講演3 観光庁観光資源課長 水嶋智

2月14日

第2部「文化的景観と観光の可能性」

セッション1 比地のムラ歩き体験（地元ガイドによる着地型観光の試み）

昼休み 地域の食材でやんばるの魅力を再発見

ポスターセッション（ポスター、写真パネル展）

セッション2

講演1 文化庁文化財調査官 井上典子

講演2 琉球大学非常勤講師 早石周平

パネルディスカッション

・コーディネーター 山口県立大学教授 安溪遊地

・パネリスト 久高将和（NPO法人国頭ツーリズム協会顧問）、島袋正敏（やんばるものづくり塾塾長）、湯本貴和（総合地球環境学研究所教授）、花井正光（琉球大学教授）

5. 研究プロジェクト発表会

すべての研究プロジェクトの進捗内容について、プロジェクトリーダーが発表を行い、地球研の研究教育職員のみならず事務職員や外部の共同研究者の前で質疑応答を行う。3日にわたる研究発表会にはのべ500人以上が参加する。こうした全所的な取り組みと活発な意見交換は地球研における自己点検評価につながる重要な研究活動となっている。

日時：2008年12月10日、11日、12日

場所：コープイン京都

6. 地球研セミナー

地球環境学に関わる最新の話題と研究動向を共有し、新たな研究の指針を得るために国内および海外の研究者を講師として招へいし、地球研における研究活動と有機的な連携を実現するためにおこなうのが地球研セミナーである。本セミナーは年間数回程度の頻度で開催し、多面的な研究課題を扱うものであり、比較的完成度の高いテーマの紹介と議論に焦点を当てたものである。

第32回 2008年9月29日

The Evolution of Scientific Research and Science Magazine「科学研究の進展とサイエンス誌」

Dr. Barbara R. Jasny, Deputy Editor for Commentary, Science/AAAS

第33回 2008年10月28日

Satoyama woodlands in Japan and outlands in Europe - a historical perspective of traditional farming landscapes

「日本とヨーロッパの里山林—伝統的農村景観の歴史的視座」

Prof. Björn E. Berglund, Department of Geology/Quaternary Geology, GeoBiosphere Science Centre, Lund University, Sweden

第34回 2009年3月16日

The Global Precipitation Climatology Centre (GPCC)- Raingauge based precipitation analyses for the land areas of the Earth in support of climate research and water resources management

「全球降水量気候学センター (GPCC) —気候研究および水資源管理のための雨量計に基づく陸域降水量解析」

Mr. Tobias Fuchs, Director, Global Precipitation Climatology Centre, Germany

第35回 2009年3月26日

「サステナビリティ学の創出」

武内和彦 国際連合大学副学長 (東京大学大学院農学生命科学研究科教授)

7. 談話会セミナー

総合地球環境学研究所所員および客員教授、非常勤講師、外来研究員などが地球環境学に関連した個別のテーマについて自由に発表を行い、研究者相互の理解と総合交流を図ることを目的としている。地球研における多様な研究分野と方法について地球研セミナーとともに日常的な研究交流の場として重要な機能をもつものであり、ほぼ隔週の頻度で談話会セミナーを実施している。

第125回 2008年5月20日 「撤退の農村計画」

林直樹 (プロジェクト研究員)

第126回 2008年6月3日 「病院から生活の場へ—フィールド医学の試み」

坂本龍太、小坂康之 (プロジェクト研究員)

- 第 127 回 2008 年 6 月 17 日 「過去と現在を結ぶ：考古学の未来可能性」
中村大（プロジェクト研究員）
- 第 128 回 2008 年 7 月 1 日 「地域研究／環境問題研究における土地利用と土地被覆変化研究の位置：現場の環境／社会本位で森林保全を考えるために」
東城文柄（プロジェクト研究員）
- 第 129 回 2008 年 7 月 15 日 「衛星重力ミッション GRACE のデータを用いた陸水変動の研究」
山本圭香（プロジェクト研究員）
- 第 130 回 2008 年 7 月 29 日 「日本における喫茶文化の萌芽とその展開」
木村栄美（プロジェクト研究員）
- 第 131 回 2008 年 9 月 2 日 「動物資源利用の展開－安定同位体分析による産地同定の視角から－」
石丸恵利子（プロジェクト研究員）
- 第 132 回 2008 年 9 月 16 日 「生物学的侵入と感染症」
内井喜美子（プロジェクト研究員）
- 第 133 回 2008 年 9 月 30 日 「インドシナ半島における気温逆転層の季節変化」
野津雅人（プロジェクト上級研究員）
- 第 134 回 2008 年 10 月 7 日 「日本の開港場の感染症対策史－ヨコハマはモダンでハイカラなのか？」
市川智生（プロジェクト研究員）
- 第 135 回 2008 年 10 月 29 日 「モンゴル国の遊牧における「現金作物」としてのカシミアとその流通」
前川愛（プロジェクト研究員）
- 第 136 回 2008 年 11 月 4 日 「Vulnerability と Resilience の複雑な関係」
久米崇（プロジェクト上級研究員）
- 第 137 回 2008 年 11 月 18 日 「陸と海をつなぐ地下水」
安元純（プロジェクト研究員）
- 第 138 回 2008 年 12 月 2 日 「Cubic Module Model を用いた樹木形態進化のシミュレーション」
長谷川成明（プロジェクト上級研究員）
- 第 139 回 2009 年 1 月 20 日 「中央アジア山岳地域における最近の水河と氷河湖災害の現状」
奈良間千之（プロジェクト研究員）
- 第 140 回 2009 年 2 月 3 日 「都市に浮かぶ島（Heat Island）」
白木洋平（プロジェクト研究員）
- 第 141 回 2009 年 2 月 17 日 「アイスコアってなんやねん？～黄砂と成層圏の物質を探る～」
安成哲平（プロジェクト研究員）
- 第 142 回 2009 年 3 月 3 日 「洪水堆積物の見分け方」
齋藤有（技術補佐員）
- 第 143 回 2009 年 3 月 17 日 「楔形文字文献の世界」
森若葉（プロジェクト上級研究員）

8. 出版活動

8-1 地球研叢書

地球研の出版や成果の意味を学問的に分かりやすく紹介する出版物。2008 年度においては、総合地球環境学研究所編『水と人の未来可能性－しのびよる水危機』を刊行した。概要は次の通り。

『水と人の未来可能性－しのびよる水危機』（総合地球環境学研究所 編）

第 1 章 人と水の関係史

はじめに／暴れ川を制する／多すぎる水との闘いの歴史／シルクロードの水はどこへ消えたか／水をめぐる人間同

土の闘い／乾燥・半乾燥地帯における塩／災害は世につれ時につれ／おわりに

第2章 水を利する—水をあやつる知恵

地球環境問題としての水問題／地球水問題の諸相／水利の知恵／地域の知恵を仕立て直す

第3章 生態系を巡回する水

水と生態系／水と植生帯／さまざまな生物の生息場所としての水／生態系サービスと水

第4章 見えない水をはかる

見えない水って何だろう？／越境する水—海と空の彼方へ／つながる水—地下水／温暖化と都市化の影響／海底地下水／遠すぎる水、遅すぎる水／近くて早い水、遠くて遅い水／水の循環と未来可能性／地球環境問題としての水

第5章 水はだれのものか—水の協治と生態史の構築にむけて

水と人の関わり／水の取り合い／水域の管理—地域共同体的取り組み／水の配分—政府の取り組み／水の統合的管理—地域と政府／水の利用から探る生態史と地球環境学

8-2 地球研ニュース：『Humanity & Nature Newsletter』

地球研とは何か、どのような活動を行っているかなどの最新情報を、研究者コミュニティに向けて発信するもので、A4版の読みやすい内容となっている。2008年度はNo.13～No.18を発行した。なお、No.16から内容体裁をリニューアルし、それにあわせて編集室を充実させた。特に地球研に関わっている研究者を対象に、コミュニケーションの場の1つとして機能することを目指している。

9. プレス懇談会

総合地球環境学研究所の研究を社会に広く還元するための広報活動として、定期的にプレス懇談会を実施している。地球研の主宰するシンポジウム、研究活動、出版、特筆すべき話題などに関する情報を積極的に提供し、社会との連携に努めている。

なお、2008年度においては、以下のとおり計4回開催した。

2008年6月10日

話題1 イベント等の紹介について

話題2 出版物について

話題3 その他

2008年9月9日

話題1 講演会・セミナー等のお知らせ

話題2 研究プロジェクト等の最新成果の紹介

話題3 本年度新たに始まった研究プロジェクトの紹介

話題4 その他

2008年11月11日

話題1 講演会・セミナー等のお知らせ

話題2 研究プロジェクト等の最新成果の紹介

話題3 出版物その他

2009年1月14日

話題1 講演会・セミナー等のお知らせ

話題2 研究プロジェクト等の最新成果の紹介

話題3 出版物その他

連携研究

「湿潤アジアにおける『人と水』の統合的研究」

研究代表者：秋道智彌

本研究は、人間文化研究機構（以下、機構と称する）の連携研究「ユーラシアにおける人の交流」のなかで「人と水」をテーマとし、水の恩恵と災禍を歴史的に経験してきたモンスーン気候下の湿潤アジア地域をとりあげる。このなかで、人類諸集団と水との関わりから生み出されてきた多様な歴史・民族・民俗・生態・思想についての統合的な研究を実施し、日本を含むユーラシア世界における「人と水」の関わりについての人類史的意義を明らかにすることを大きな目的とする。

本研究の主な構成員は、機構内の総合地球環境学研究所、国立民族学博物館、国立歴史民俗博物館、国際日本文化研究センター、国文学研究資料館の教員のほか、全国の国公立大学の教員が共同研究者として参加している。

共同研究会

第1回 2008年6月27日(金) 総合地球環境学研究所

- ・「地球市民のダム問題：ナルマダ調査報告」 阿部健一（総合地球環境学研究所）
- ・研究経過報告 原 正一郎（京都大学地域研究統合情報センター）
- ・19年度報告 相田 満（国文学研究資料館）
- ・「東南アジア大陸部山地社会における『聖なる水』について—ラフ族における水を使った浄化儀礼について—」 清水郁郎（大同工業大学建築学科）
- ・『人と水』3巻原稿執筆に向けて 秋道智彌（総合地球環境学研究所）
- ・世界水フォーラム（2009年3月トルコ）について 阿部健一（総合地球環境学研究所）
- ・総合討論

2. シンポジウム

①文部科学省・人間文化研究機構 連携研究「人と水」シンポジウム

「水のつながりを考える～ふるさと西条のおいしい水を、未来へ～」

2008年9月15日(祝) 愛媛県西条市総合文化会館小ホール

- ・「人と水をつなぐを考える」 秋道智彌（総合地球環境学研究所）
- ・「世界の地下水問題」 谷口真人（総合地球環境学研究所）
- ・「西条のおいしい水を科学する」 中野孝教（総合地球環境学研究所）
- ・「アジアの水と人の暮らし」 阿部健一（総合地球環境学研究所）
- ・「西条の人と水の歴史」 佐々木和乙（西条市役所生活環境部長）
- ・パネルディスカッション「西条のおいしい地下水を守るには」

司会：秋道智彌（総合地球環境学研究所）

パネリスト：谷口真人（総合地球環境学研究所）、中野孝教（総合地球環境学研究所）

阿部健一（総合地球環境学研究所）、佐々木和乙（西条市役所生活環境部長）

②大学改革シンポジウム

「鳥海山から考える地域と暮らし」

2008年11月15日(土) 鳥海自然文化館「遊楽里」

- ・概要説明「縄文から平成まで」 秋道智彌（総合地球環境学研究所）
- ・「鳥海山の地質と湧水」 細野高啓（秋田大学工学資源部）
- ・「鳥海の地質と生き物をつなぐ水」 中野孝教（総合地球環境学研究所）
- ・「鳥海の湧水」 谷口真人（総合地球環境学研究所）
- ・「多様な鳥海の植物」 齋藤 孝（遊佐町史編集委員）
- ・「湧水とその生き物たち」 森 誠一（岐阜経済大学経済学部）

- ・「稲作と湧水保全」 佐藤秀彰（JA庄内みどり）
- ・「ハタハタやイワガキも湧水を必要としている」杉山秀樹（秋田県農林水産技術センター水産振興センター）
- ・パネルディスカッション「鳥海の湧水を未来につなぐ」
司会：秋道智彌（総合地球環境学研究所）、森 誠一（岐阜経済大学経済学部）
- パネリスト：小野寺喜一郎（遊佐町長）、加藤雄悦（まんさくの会）、呉 尚浩（東北公益文科大学）、杉山秀樹（秋田県農林水産技術センター水産振興センター）、畠中裕之（自然公園管理員）、本間正明（月光川の魚出版会）

③連携研究「人と水」シンポジウム

「水と文明」

2009年2月11日（祝）一橋記念講堂

- ・「趣旨説明—水と文明」 秋道智彌（総合地球環境学研究所）
- ・「タイの文明と水—運河と地下水と人とのかかわり」 谷口真人（総合地球環境学研究所）
- ・「インダス文明ははたして大河文明か」 長田俊樹（総合地球環境学研究所）
- ・「水と古代エジプト文明」 高宮いづみ（近畿大学文芸学部国際人文科学研究所）
- ・「西アフリカ・サバンナの水物語」 竹沢尚一郎（国立民族学博物館民族文化研究部）
- ・「水とマヤ・アステカ文明」 八杉佳穂（国立民族学博物館民族文化研究部）
- ・パネルディスカッション「21世紀の水と文明を語る」
司会：秋道智彌（総合地球環境学研究所）
- パネリスト：谷口真人（総合地球環境学研究所）、長田俊樹（総合地球環境学研究所）、高宮いづみ（近畿大学文芸学部国際人文科学研究所）、竹沢尚一郎（国立民族学博物館民族文化研究部）、八杉佳穂（国立民族学博物館民族文化研究部）

3. 出版物

【研究連絡誌】

- ・2008年10月『人と水』第五号 特集：水と風景（人に愛される水風景）
出版社：昭和堂
白幡洋三郎・田畑みなお・尾崎博正・早川聞多・鈴木 淳・上垣外憲一・阿部健一・渡邊紹裕・森 誠一・窪田順平
- ・2009年3月『人と水』第六号 特集：水と動物（ちょっと意外な人とのかかわり）
出版社：昭和堂
池谷和信・千田 稔・宇根 豊・小島淳一・江戸英雄・大橋厚子・中井仙丈・野地垣有・石川智士・池口明子・佐々木 健・谷口真人

4. その他

2009年3月16-22日 第5回世界水フォーラム（トルコイスタンブール）

- ・日本パビリオンにおいてのパネル展示
- ・トピック 6.5「水と文化」
セッション 6.5.3「文化多様性を超えて—価値と課題の共有」の企画・運営
- 3月20日（金）会場：EYÜP, Sutluce 主催：総合地球環境学研究所, ISKI, TURKKAD
司会：阿部健一（総合地球環境学研究所）、窪田順平（総合地球環境学研究所）
発表：「Regulating unknown common resources : community – science collaboration around groundwater」
発表者：谷口真人（総合地球環境学研究所）、佐々木和乙（西条市役所生活環境部長）

個人業績紹介

あ	秋道 智彌 AJITHPRASAD, Pottentavida 阿部 健一	あきみち ともや あじとぶらさーど ぼってんたうゝいだ あべ けんいち	副所長 - 教授 招へい外国人研究員 教授
い	石丸 恵利子 石本 雄大 石山 俊 市川 智生 市川 昌広 一條 知昭 岩谷 洋史	いしまる えりこ いしもと ゆうだい いしやま しゅん いちかわ ともお いちかわ まさひろ いちじょう ともあき いわたに ひろふみ	プロジェクト研究員 プロジェクト研究員 プロジェクト研究員 プロジェクト研究員 准教授 プロジェクト研究員 プロジェクト研究員
う	上杉 彰紀 内井 喜美子 内山 純蔵 梅津 千恵子	うえすぎ あきのり うちい きみこ うちやま じゅんぞう うめつ ちえこ	プロジェクト研究員 プロジェクト研究員 准教授 准教授
え	遠藤 崇浩 EVANS, Tom	えんどう たかひろ えうゝあんず とむ	助教 招へい外国人研究員
お	大西 暁生 大西 健夫 大西 正幸 奥宮 清人 長田 俊樹	おおにし あきお おおにし たけお おおにし まさゆき おくみや きよひと おさだ としき	外来研究員 プロジェクト上級研究員 プロジェクト上級研究員 准教授 教授
か	勝山 正則 加藤 雄三 川瀬 大樹 川端 善一郎 川本 温子	かつやま まさのり かとう ゆうぞう かわせ だいじゅ かわばた ぜんいちろう かわもと はるこ	プロジェクト上級研究員 助教 プロジェクト研究員 教授 プロジェクト研究員
き	岸本 圭子 木下 鉄矢 金 憲淑 木村 栄美 木本 行俊	きしもと けいこ きのした てつや きむ ほんしゅく きむら えみ きもと ゆきとし	プロジェクト研究員 教授 プロジェクト研究員 プロジェクト研究員 プロジェクト上級研究員
く	窪田 順平 久米 崇 鞍田 崇	くぼた じゅんぺい くめ たかし くらた たかし	准教授 プロジェクト上級研究員 プロジェクト研究員
こ	小泉 都 神松 幸弘 小林 菜花子	こいずみ みやこ こうまつ ゆきひろ こばやし なかこ	プロジェクト研究員 助教 プロジェクト研究員
さ	蔡 国喜 斎藤 清明 佐伯 田鶴 酒井 章子 坂本 龍太 佐々木 尚子 佐藤 洋一郎	さい こくき さいとう きよあき さえき たづ さかい しょうこ さかもと りょうた ささき なおこ さとう よういちろう	プロジェクト研究員 教授 助教 准教授 プロジェクト研究員 プロジェクト研究員 副所長 - 教授

し	承 志	しょう し	プロジェクト上級研究員
	白岩 孝行	しらいわ たかゆき	准教授
	白木 洋平	しらき ようへい	プロジェクト研究員
	鄭 躍軍	じえん ゆえじえん	准教授
せ	瀬尾 明弘	せお あきひろ	プロジェクト研究員
	関野 樹	せきの たつき	准教授
	ZEBALLOS VELARDE, Carlos Renzo	せばよす べらるで かるろす れんぞ	プロジェクト研究員
た	高相 徳志郎	たかそう とくしろろう	教授
	立本 成文	たちもと なりふみ	所長
	田中 克典	たなか かつのり	プロジェクト研究員
	谷口 真人	たにぐち まこと	教授
つ	辻 貴志	つじ たかし	プロジェクト研究員
	辻野 亮	つじの りょう	プロジェクト研究員
て	寺村 裕史	てらむら ひろふみ	プロジェクト研究員
と	東城 文柄	とうじょう ぶんべい	プロジェクト研究員
な	内藤 大輔	ないとう だいすけ	外来研究員
	中川 昌人	なかがわ まさと	プロジェクト研究員
	中田 聡史	なかだ さとし	プロジェクト研究員
	中野 孝教	なかの たかのり	教授
	中村 大	なかむら おおき	プロジェクト研究員
	中村 亮	なかむら りょう	プロジェクト研究員
	奈良間 千之	ならま ちゆき	プロジェクト研究員
	縄田 浩志	なわた ひろし	准教授
の	野津 雅人	のづ まさと	プロジェクト上級研究員
	野村 尚史	のむら なおふみ	プロジェクト研究員
は	郝 愛民	はお あいみん	外来研究員
	長谷川 成明	はせがわ しげあき	プロジェクト上級研究員
	花松 泰倫	はなまつ やすのり	プロジェクト研究員
	早坂 忠裕	はやさか ただひろ	教授
	林 直樹	はやし なおき	プロジェクト研究員
	BAUCH, Ilona Renate	ぼうし いろーな れなーて	招へい外国人研究員
ほ	細谷 葵	ほそや あおい	プロジェクト研究員
	本庄 三恵	ほんじょう みえ	プロジェクト研究員
	POPOV, Alexander Nikolaevich	ぽぽふ あれくさんだー にこらえう ^ろ いっち	招へい外国人研究員
ま	前川 愛	まえかわ あい	プロジェクト研究員
	槇林 啓介	まきばやし けいすけ	プロジェクト研究員
み	源 利文	みなもと としふみ	プロジェクト上級研究員
	宮崎 英寿	みやざき ひでとし	プロジェクト研究員
む	村上 由美子	むらかみ ゆみこ	プロジェクト研究員
	村松 伸	むらまつ しん	教授
も	門司 和彦	もじ かずひこ	教授
	森 若葉	もり わかは	プロジェクト上級研究員
や	安成 哲平	やすなり てっぺい	プロジェクト研究員
	安元 純	やすもと じゅん	プロジェクト研究員

谷田貝 亜紀代	やたがい あきよ	助教
山中 裕樹	やまなか ひろき	プロジェクト研究員
山村 則男	やまむら のりお	教授
山本 圭香	やまもと けいこ	プロジェクト研究員
ゆ 湯本 貴和	ゆもと たかかず	教授
れ LEKPRICHAKUL Thamana	れくぶりちゃくる たまな	プロジェクト上級研究員
わ 渡辺 千香子	わたなべ ちかこ	客員准教授
渡邊 紹裕	わたなべ つぎひろ	教授
渡邊 三津子	わたなべ みつこ	プロジェクト研究員

※職名は2009年3月31日現在

(但し、2008年度途中で退職等した者については、退職等時の職名)

秋道 智彌 (あきみち ともや)

副所長・教授

●1946年生まれ

【学歴】

京都大学理学部動物学科卒（1968）、東京大学大学院理学系研究科人類学修士課程修了（1974）、東京大学大学院理学系研究科人類学博士課程単位修得（1977）

【職歴】

国立民族学博物館第2研究部助手（1977）、国立民族学博物館第1研究部助教授（1987）、総合研究大学院大学文化科学研究科助、教授併任（1988）、国立民族学博物館第1研究部教授（1992）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（1995）、総合研究大学院大学先導科学研究科教授併任（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部長（1999）、総合地球環境学研究所研究部教授（2002）、総合地球環境学研究所研究部教授（2004）、総合研究大学院大学先導科学研究科客員教授（2004）、総合地球環境学研究所副所長（2007）

【学位】

理学博士（東京大学 1986）、理学修士（東京大学 1974）

【専攻・バックグラウンド】

生態人類学

【所属学会】

生き物文化誌学会、ヒトと動物の関係学会、環境社会学会、生態人類学会、熱帯生態学会

【受賞歴】

大同生命地域研究奨励賞（1998）

●主要業績

○著書（執筆等）

【単著・共著】

・秋道智彌 2009年01月 『クジラは誰のものか』．ちくま新書．筑摩書房，東京都台東区，231pp.

【翻訳・共訳】

・秋道智彌 2008年07月 「東南アジア、オセアニアへの農耕拡散」．長田俊樹、佐藤洋一郎編 『農耕起源の人類史』．京都大学学術出版会，京都市左京区，pp.199-255. 原著：ピーター・ベルウッド著 First Farmers: The Origins of Agricultural Societies. , .

○著書（編集等）

【編集・共編】

・シーダー編集委員会（編集長：秋道智彌）編 2009年03月 『シーダー 地域環境情報から考える地球の未来』．昭和堂，京都市左京区，64pp.

○論文

【原著】

・秋道智彌 2009年03月 「水はだれのものかー水の協治と生態史の構築にむけて」．総合地球環境学研究所編 『水と人の未来可能性ーしのびよる水危機』．地球研叢書．昭和堂，京都市左京区，pp.143-176.

・Tomoya AKIMICHI Mar, 2009 「The Malacca-Singapore Regional Community: Claiming New Property Regime in the Malacca Singapore Straits」．Institution for Transport Policy Studies (ed.) 『マラッカ・シンガポール海峡の協力メカニズムの検証ー海峡利用業界と企業の社会的責任（CSR）の観点からー』．財団法人運輸政策研究機構，東京都港区，pp.113-122.

- ・秋道智彌 2009年03月 「マ・シ海峡地域共同体：マ・シ海峡における新しい利用体制の提唱」．財団法人運輸政策研究機構編 『論文集 マラッカ・シンガポール海峡の協力メカニズムの検証－海峡利用業界と企業の社会的責任（CSR）の観点から－』．財団法人運輸政策研究機構，港区虎ノ門，pp. 109-112.
- ・秋道智彌 2009年02月 「富栄養化と複合的環境問題－中国雲南省洱海の事例」．中尾正義、銭新、鄭躍軍編 『中国の水環境問題－開発をもたらす水不足』．勉誠出版，東京都千代田区，pp. 129-142.
- ・Akimichi Tomoya Oct, 2008 "Changing property regimes in the aquatic environments of the Lower Mekong Basin in Southern Laos and Northern Thailand". *TROPICS* 17(4) :285-294.
- ・秋道智彌 2008年09月 「水田とため池」．佐藤洋一郎編 『米と魚』．食の文化フォーラム26. ドメス出版，東京都豊島区，pp. 20-40.
- ・秋道智彌 2008年06月 「民俗知を探る」．『エコソフィア』 20 :9-15. 特集 自然と共に生きる智慧をもとめて.
- ・秋道智彌 2008年05月 「珊瑚交易とチベット文化」．岩崎望編 『珊瑚の文化誌－宝石サンゴをめぐる科学・文化・歴史』．東海大学出版会，神奈川県秦野市，pp. 181-196.
- ・秋道智彌 2008年05月 「ただの生き物のたいせつさ」．環境自治体会議事務局編 第16回環境自治体会議「ゆざ会議」資料集．環境自治体会議事務局，東京都千代田区，pp. 8-10.
- ・秋道智彌 2008年 「ただの生き物の大切さ」．
- ・秋道智彌 2008年 「海と人びと」．『新世界地理 第15巻 オセアニア』．

【総説】

- ・秋道智彌 2009年03月 特集1 「地域と環境の情報についての議論を立ち上げることの意味－新しい学知の創生にむけて」．『シーダー 地域環境情報から考える地球の未来』 0号 :20-23.
- ・秋道智彌 2009年03月 「生態系と経済ネットワーク」．大西文秀編 『GISで学ぶ日本のヒト・自然系』．弘文堂，東京都千代田区，pp. 42.
- ・秋道智彌 2009年03月 「海と島のドラマを検証する－海情報の統合に向けて」．秋道智彌、山形俊男編 『人と海洋の共生をめざして－150人のオピニオンIV』．海洋政策研究財団，東京都港区，pp. 148-149.
- ・秋道智彌 2008年11月 「海洋生物のグローバル・コモンズ」．池谷和信、林良博編 『野生と環境』．ヒトと動物の関係学第4巻. 岩波書店，東京都千代田区，pp. 218-242.
- ・秋道智彌 Jun, 2008 「魚介類」．桃木至郎（代表）（ed.）『東南アジアを知る事典』．平凡社，東京都文京区，pp. 118-119. （アラビア語）
- ・秋道智彌 2008年06月 「漁業」．桃木至郎（代表）編 『東南アジアを知る事典』．平凡社，東京都文京区，pp. 119-121.
- ・秋道智彌 2008年06月 「生態智の不滅宣言」．『エコソフィア』 20 :1.

○その他の出版物

【解説】

- ・秋道智彌 2009年03月 「春霞の地球環境学」．三洋化成工業株式会社編 三洋化成ニュース . . . 京都市東山区，pp. 13.
- ・秋道智彌 2008年06月 「自然との付き合いとエコ・マネジメント」．『国立公園』 664 :2-3. 特集：多様な主体による共同管理運営・地域連携 巻頭言 財団法人国立公園協会発行 .

【その他の著作(会報・ニュースレター等)】

- ・秋道智彌 2009年03月 編集後記. Ships & Ocean Newsletter 207 :8. 海洋政策研究財団発行.
- ・秋道智彌 2009年02月 編集後記. Ships & Ocean Newsletter 205 :8. 海洋政策研究財団発行.
- ・秋道智彌、横山智、東城文柄 2009年02月 終了プロジェクトの報告「多角的なアプローチを繋ぐ試みが新たな統合的研究のかたちにつながった」．地球研ニュース 18 :4-5.
- ・秋道智彌 2009年01月 編集後記. Ships & Ocean Newsletter 203 :8. 海洋政策研究財団発行.
- ・秋道智彌 2008年12月 編集後記. Ships & Ocean Newsletter 201 :8. 海洋政策研究財団発行.
- ・秋道智彌 2008年11月 編集後記. Ships & Ocean Newsletter 199 :8. 海洋政策研究財団発行.

- ・秋道智彌 2008年10月 特集1 領域プログラムを語る「『資源』の視点が拓げる可能性と展開」. 地球研ニュース 16 :2-3.
- ・秋道智彌 2008年10月 編集後記. Ships & Ocean Newsletter 197 :8. 海洋政策研究財団発行.
- ・秋道智彌 2008年09月 編集後記. Ships & Ocean Newsletter 195 :8. 海洋政策研究財団発行.
- ・秋道智彌 2008年08月 編集後記. Ships & Ocean Newsletter 193 :8. 海洋政策研究財団発行.
- ・秋道智彌 2008年07月 「雲南と生態史プロジェクトー新しい試みの成功」. 中国環境問題研究拠点『天地人』 3 :4-5.
- ・秋道智彌 2008年07月 編集後記. Ships & Ocean Newsletter 191 :8. 海洋政策研究財団発行.
- ・秋道智彌 2008年06月 Ships & Ocean Newsletter. 編集後記 189 :8. 海洋政策研究財団発行.
- ・秋道智彌、渡辺紹裕、早坂忠裕、阿部健一、湯本貴和 2008年06月 「地球研の要としての研究推進戦略センター本格的始動!」. 地球研ニュース 14 :2-3.
- ・秋道智彌 2008年05月 編集後記. Ships & Ocean Newsletter 187 :8. 海洋政策研究財団発行.
- ・立本成文、秋道智彌、湯本貴和 2008年04月 巻頭鼎談「改革の一年をふりかえって」. 地球研ニュース 13 :2-4.
- ・秋道智彌 2008年04月 編集後記. Ships & Ocean Newsletter 185 :8. 海洋政策研究財団発行.
- ・秋道智彌 2008年04月 「研究推進戦略センター本格始動にあたっての所信表明」. 地球研ニュース 13 :5.

【その他】

- ・2009年03月 座談会「『地域環境情報』研究をデザインするー3つの学知を統合知にするために」 『シーダー 地域環境情報から考える地球の未来』 昭和堂 pp4-19

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・Tomoya AKIMICHI 「生態史研究の課題と展望: Themes and Overview of the Eco-Historical Study」. 首届中国西南文化與環境 高級學術論壇, Mar 30, 2009, 三峡大学、湖北省宜昌、中国.
- ・Tomoya AKIMICHI 「Water as a Super-Medium to Link Nature with Culture」. The 5th World Water Forum 『Culture, History and Sustainability』 organized by UNESCO, Mar 18, 2009, Citizens House of Water, Istanbul, Turkey.
- ・秋道智彌 「タイ南部のマングローブをめぐって1970-2006」. 資源領域プログラム第2回会合『マングローブ』, 2008年07月23日, 総合地球環境学研究所講演室.
- ・秋道智彌 趣旨説明. 第1回研究会『東南アジアの生態史研究会』, 2008年07月04日, 総合地球環境学研究所講演室. (本人発表).
- ・秋道智彌 招待講義「サンゴ礁と水産」. 平成20年度 J I C A 研修『サンゴ礁生態系の保全管理』, 2008年06月11日, JICA 沖縄国際センター.

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- ・秋道智彌 招待発表「エココモングの可能性: 持続と崩壊の狭間」. 京都大学GCOE『生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点』研究会, 2009年02月16日, 京都大学東南アジア研究所.
- ・秋道智彌 趣旨説明「水と文明」 およびパネルディスカッション司会「21世紀の水と文明を語る」. 人間文化研究機構連携研究「人と水」シンポジウム 『水と文明』, 2009年02月11日, 東京都千代田区 一橋記念講堂.
- ・秋道智彌 パネル討論「旅する黄砂からのメッセージ」. 朝日・大学パートナーズシンポジウム『黄砂、変化の旅ー能登は大気観測の最前線』, 2008年11月24日, 石川県女性センター 1F ホール.
- ・秋道智彌 招待講演「中国、チベットにおける宝石珊瑚の利用」. 生き物文化誌学会高知例会『宝石珊瑚の文化誌』, 2008年11月22日, 高知大学人文学部第1会議室.
- ・秋道智彌 概要説明「縄文から平成まで」 および パネルディスカッション司会「鳥海の湧水を未来につなぐ」. 大学改革シンポジウム『鳥海山から考える地域とくらし』, 2008年11月15日, 山形県鳥海自然文化館「遊樂里」.
- ・秋道智彌 招待講演 「沿岸域の水産資源管理と公共財」. 第5回『我が国における総合的な水産資源・漁業の管理方策のあり方』に関わる講演会, 2008年10月20日, 横浜みなとみらい21クイーンズフォーラム会議室. (独) 水産

総合研究センター水産総合研究所、中央水産研究所水産経済部主催。

- ・秋道智彌 「捕鯨論争：シャチもクジラ」。第27回地球研市民セミナー『捕鯨論争』，2008年09月19日，ハートピア京都（京都府立総合社会福祉会館）。
- ・秋道智彌 講演「人と水のつながりを考える」 およびパネルディスカッション「西条のおいしい地下水を守るには」。人間文化研究機構連携研究「人と水」シンポジウム『水をつながりを考えるーふるさと西条のおいしい水を、未来へ』，2008年09月15日，愛媛県西条市総合文化会館小ホール。
- ・秋道智彌 パネルディスカッション「地球環境問題と日本」司会。『山川草木の思想ー地球環境問題を日本文化から考える』，2008年06月21日，シルクホール（京都産業会館）。
- ・秋道智彌 招待講演「過疎現象と野生の生き物」。第12回『大分大学学際研究創造セミナー 過疎への多角的アプローチ：どうすれば何がわかる？』，2008年06月02日，大分大学ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー セミナー室。
- ・秋道智彌 基調講演「ただの生きものゝたいせつさ」。第16回環境自治体会議ゆぎ会議全体会，2008年05月28日，山形県遊佐町中央公民館。
- ・秋道智彌 基調講演 「Eco-history and changing Life in Tropical Asia」。ATBCアジア・太平洋部会（The Association for Tropical Biology and Conservation），Apr 23, 2008-Apr 26, 2008, Hilton Kuching, Malaysia.

○学会活動（運営など）

【企画・運営・オーガナイズ】

- ・国際ワークショップ『スラブ・ユーラシアの地域と環境』，企画・運営、趣旨説明。2009年02月28日-2009年03月01日，総合地球環境学研究所講演室。
- ・連携研究「人と水」シンポジウム『水と文明』，企画・運営・趣旨説明「水と文明」（パネルディスカッション司会「21世紀の水と文明を語る」）。2009年02月11日，一橋記念講堂（学術総合センター内）。
- ・人間文化研究機構連携研究「人と水」シンポジウム『水と文明』，企画・運営。2009年02月11日，東京都千代田区 一橋記念講堂。
- ・大学改革シンポジウム『鳥海山から考える地域とくらし』，企画・運営（人間文化研究機構連携研究「人と水」共催）。2008年11月15日，山形県 鳥海山自然文化館「遊楽里」。
- ・第3回地球研国際シンポジウム『The Futurability of Islands: Beyond Endemism and Vulnerability』，実行委員（総括・閉会挨拶）。2008年10月22日-2008年10月23日，総合地球環境学研究所講演室。

○その他の成果物等

【標本・資料などの蒐集、データセットの構築】

- ・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』採録 国立国語研究所 2008年10月。．（「序論 日本の野生生物と地域社会」『野生生物と地域社会』2002 昭和堂収録、「新しい自然観に向けて」『なわばりの文化史』p255-262 1999 小学館収録）。

○調査研究活動

【国内調査】

- ・鳥海山湧水調査。山形県遊佐市，2008年11月16日-2008年11月17日。

【海外調査】

- ・中国巡検 “Chinese Southwestern Culture & Environmental Research Forum”。中国 湖北省宜昌，2009年03月25日-2009年03月31日。中国環境問題研究拠点事業。
- ・宝石サンゴ類の持続的利用と適切な国際取引管理に関する調査。西寧、拉薩，2008年10月30日-2008年11月05日。

○外部資金の獲得

【科研費】

- ・「宝石サンゴ類の持続的利用と適切な国際取引管理に関する研究ーワシントン条約への貢献」（研究分担者）2008年04月-2012年03月。科学研究費補助金基盤研究（B）（20310144）。

○社会活動・所外活動

【他の研究機関から委嘱された委員など】

- ・日本海学推進機構，運営委員．2009年03月-2011年02月．
- ・京都市，教育委員．2008年12月-2012年12月．
- ・関西大学ソシオネットワーク戦略研究機構，運営委員．2008年08月-2010年03月．
- ・人間文化研究機構，企画連携広報室委員．2007年04月-2009年03月．
- ・財）自然環境研究センター，理事．2007年04月-2010年03月．
- ・財）長尾自然環境財団，評議員．2007年04月-2010年03月．
- ・国立民族学博物館，共同研究員．2007年04月-2010年03月．
- ・海洋政策研究財団ニューズレター編集委員会，編集委員長．2007年04月-2010年03月．

【依頼講演】

- ・「東南アジアの自然と文化ー時代の変化を読む」．富山中央高等学校・地歴コース講演，2009年03月13日，富山中央高等学校．

【メディア出演など】

- ・「クジラと人間のつきあい方 食べる食べないより生き方の見直しを」．聖教新聞，2009年02月12日，7．

○報道等による成果の紹介

【報道機関による取材】

- ・読書「クジラは誰のものか」．朝日新聞，2009年02月08日 朝刊．
- ・サイエンスガイド「クジラと人の関係考える本 クジラは誰のものか」．京都新聞，2009年01月18日 朝刊，11．
- ・「教育委員に秋道氏 京都市 地球環境研副所長」．京都新聞，2008年12月10日 夕刊．
- ・朝日・大学パートナーズシンポ「黄砂、変化の旅ー能登は大気観測の最前線」 運ぶよ汚染も養分も．朝日新聞，2008年11月30日 朝刊，10．
- ・「遊佐の『鳥海山シンポ』豊かな恵み再確認 次世代へ残す大切さ訴え」．朝日新聞，2008年11月19日（山形版），12．
- ・「鳥海の湧水 未来へ 保全・活用を探る」．庄内日報，2008年11月18日．
- ・「海底わき水 量は屈指 鳥海山シンポで専門家」．朝日新聞，2008年11月16日 朝刊(山形版)，35．
- ・「地域の宝 どう守る 鳥海山の活用探るシンポ」．山形新聞，2008年11月16日 朝刊．
- ・「歴史、文化、環境から捕鯨を問う 京都で肯定・反対派が論戦」．毎日新聞，2008年10月07日 夕刊，6．
- ・「冷静に『捕鯨論争』を 地球研市民セミナー」．毎日新聞，2008年08月29日 夕刊(3)，5．
- ・「ソフィアがやってきた！暮らしと世界をつなぐ発想を」 京都市立南太秦小学校．京都新聞，2008年07月06日（日曜版），1面，16面（続き）．
- ・「水産資源 持続&利用」 私の視点 21世紀の”食”は多様・重層化へ．水産経済新聞，2008年05月19日 朝刊，1．

○教育

【非常勤講師】

- ・京都大学，総合人間学部，特殊講義VA リレー講義．2008年07月．「資源管理における文化多様性」．

AJITHPRASAD, Pottentavida (あじとぷらさーど ぽってんたう`いだ)

●1957年生まれ

【学歴】

カリカット大学理学部卒業（1978）、マハラジャ・サヤジラオ大学考古学・古代史学科修士課程（1981）、マハラジャ・サヤジラオ大学考古学・古代史学科博士課程（1990）

【職歴】

マハラジャ・サヤジラオ大学考古学・古代史学科講師（1990）

【学位】

修士（マハラジャ・サヤジラオ大学 1981）、博士（マハラジャ・サヤジラオ大学 1990）

【専攻・バックグラウンド】

考古学

●主要業績

○論文

【原著】

- ・ 2008 Jaidak (Pithad): A Sorath Harappan site in Jamnagar District, Gujarat and its Architectural Features. Toshiki Osada and Akinori Uesugi (ed.) Occasional Paper 4, Linguistics, Archaeology and Human Past.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・ P. Ajithprasad The Palaeolithic Remains and the Spread of Hominine Ancestors in the Orsang and the Sabarmati Valleys in Gujarat. Plio-Pleistocene Environment and Hominine Adaptations in India, Dec 01, 2008-Dec 05, 2008, Bhopal. (本人発表).
- ・ P. Ajithprasad Cultural Patterns and the Early Harappan Interactions in Gujarat. Cultural Relations Between the Indus and the Iranian Plateau During the Third Millennium BCE, Jun 07, 2008-Jun 08, 2008, 京都市. (本人発表).

○学会活動（運営など）

【企画・運営・オーガナイズ】

- ・ Workshop on Application of GIS and Photogrammetry in Archaeology, オーガナイザー. 2008年10月03日-2008年10月12日, マハラジャ・サヤジラオ大学.

○調査研究活動

【海外調査】

- ・ シカルプール遺跡発掘. グジャラート州カッチ県, 2009年01月-2009年03月.

阿部 健一（あべ けんいち）

教授

●1958年生まれ

【学歴】

京都大学農学部農林生物学科卒（1984）、京都大学大学院農学研究科熱帯農学専攻修士課程修了（1987）、京都大学大学院農学研究科熱帯農学専攻博士課程中退（1989）

【職歴】

京都大学東南アジア研究センター助手（1989）、国立民族学博物館地域研究企画交流センター助手（1996）、国立民族学博物館地域研究企画交流センター助教授（1999）、総合研究大学院大学先導科学研究科助教授（併任）（2000）、京都大学地域研究統合情報センター助教授（2006）、総合地球環境学研究所研究推進戦略センター教授（2008）

【学位】

農学修士（京都大学 1987）

【専攻・バックグラウンド】

環境人類学、相関地域研究

【所属学会】

日本熱帯生態学会、国際ボランティア学会、東南アジア学会、生き物文化誌学会

●主要業績

○著書（執筆等）

【分担執筆】

- ・阿部健一 2008年05月 地域住民と国家のあいだ：メコン流域の森林資源管理. 秋道智彌編 モンスーン・アジアの生態史—地域と地球をつなぐ 第3巻. 弘文堂, 東京都千代田区, pp. 230-242.
- ・阿部健一 2008年04月 森の錬金術と国境—雲南と東南アジア大陸部山地. 秋道智彌・市川昌広編 東南アジアの熱帯林で何が起きているか. 人文書院, 京都市伏見区, pp. 153-176.

○著書（編集等）

【編集・共編】

- ・阿部健一・James Nickum (ed.) Mar, 2009 GOOD EARTHS: Regional and Historical Insight into China's Environment. Frontiers of Area Studies. 京都大学出版会, 京都市左京区, 318pp.

○その他の出版物

【その他の著作(会報・ニュースレター等)】

- ・阿部健一 2008年10月 ナルマダ・ストラ 「水の器」第6回. 連携研究「人と水」研究連絡誌 Water and People (第5号) :24-25.
- ・阿部健一 2008年 エッセイ 中国の同僚. 『天地人』総合地球環境学研究所中国環境問題研究拠点ニューズレター (1).

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・阿部健一 Chinese Southwestern Culture & Environmental Research Forum. Ideology over Ecology: anticipating ecological degradation in independent Kazakhstan, Mar 26, 2009, 中国湖北省宣城市 三峡大学.
- ・阿部健一 Calm before the storm: the legacy of ideology-driven agricultural development in kazakhstan. 国際ワークショップ 中央アジアの環境と文化—歴史的変遷と未来へのまなざし, Feb 01, 2009-Feb 02, 2009, 地球研 講演室.
- ・阿部健一 日本の食生活—コンビニエンスストア. 第3回中国環境問題シンポジウム 日本と中国における食と環境に関する国際シンポジウム, Nov 01, 2008, 江蘇省農業科学院 (中国南京市).
- ・阿部健一 A Tikopia in the Global Era: Using Mediation to Empower Coffee Growing Communities in East Timor. 第3回地球研国際シンポジウム "The Futurability of Islands: Beyond Endemism and Vulnerability", Oct 22, 2008-Oct 23, 2008, 地球研 講演室.

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- ・阿部健一 NIHU現代中国地域研究・拠点連携プログラム 第2回 国際シンポジウム. 検証—改革開放から30年, 2009

年02月07日-2009年02月08日, 早稲田大学 国際会議場 井深大ホール.

- ・阿部健一・あんまくどなると 里山・里海からSATOYAMA/SATOUMIへ. 第30回地球研市民セミナー, 2009年01月23日, ハートピア京都.
- ・阿部健一 熱帯林をめぐるポリティカル・エコロジー—資源として森をみるとき. 東洋大学地域連携シンポジウム 紙をめぐる地域とネットワーク, 2008年12月06日, 東洋大学白山キャンパス6号館.
- ・阿部健一 Lessons from Three ‘Green Revolutions’: Can Development Mitigate Conflict?. 龍谷大学アフラシア平和開発研究センター第4回国際シンポジウム 貧困と開発の地平から—紛争と紛争解決を問う, Nov 15, 2008-Nov 16, 2008, 龍谷大学.
- ・阿部健一 スマトラ泥炭湿地林の移住者社会: アイデンティティと資源管理. 「リージョナリズムとアイデンティティ」第5回研究会「熱帯林のポリティカル・エコロジー, インドネシアの事例より」, 2008年10月11日, 法政大学.
- ・阿部健一 アジアの水と人のくらし. 人間文化研究機構連携研究「人と水」シンポジウム 水のつながりを考える—ふるさと西条のおいしい水を、未来へ—, 2008年09月15日, 愛媛県西条市総合文化会館.
- ・阿部健一 「つなぐ」こと: 東ティモールの環境保全型コーヒー栽培. 第7回地球研フォーラム もうひとつの地球環境問題 会うことのない人たちとともに, 2008年07月05日, 国立京都国際会館.

○学会活動（運営など）

【企画・運営・オーガナイズ】

- ・第5回世界水フォーラム セッション 6.5.3 “Fostering Socio-cultural Perspectives in Water Sciences and Management: Identifying Bridges and Barriers” (企画運営). 2009年03月20日, トルコ・イスタンブール.
- ・人間文化研究総合推進事業 連携展示 「子どもたちがつくる世界環境ポスター展」 (企画運営). 2009年02月07日-2009年02月11日, 京都市 立命館小学校.
- ・第3回地球研国際シンポジウム”The Futurability of Islands: Beyond Endemism and Vulnerability” (実行委員長). 2008年10月22日-2008年10月23日, 地球研 講演室.
- ・“Towards Sustainable Land-use in Tropical Asia” Scientific Committee (企画運営). 2008年04月23日-2008年04月26日, マレーシア・サラワク. 主催: The Association for Tropical Biology and Conservation / The Japan Society of Tropical Ecology.

○調査研究活動

【海外調査】

- ・「スマトラ河川流域社会の20世紀: 比較と定点継続調査を基軸とする学際的研究」に関する現地調査、資料収集. インドネシア, 2009年02月16日-2009年03月01日.
- ・総合地球環境学研究所プロジェクト「地球民族/ 国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明—中央ユーラシア半乾燥域の変遷」に関する現地調査. カザフスタン, 2008年07月25日-2008年08月09日.
- ・総合地球環境学研究所プロジェクト「地球民族/ 国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明—中央ユーラシア半乾燥域の変遷」に関する現地調査. カザフスタン, 2008年05月15日-2008年05月26日.
- ・“Towards Sustainable Land-use in Tropical Asia” Scientific Committee (The Association for Tropical Biology and Conservation / The Japan Society of Tropical Ecology主催). マレーシア, 2008年04月23日-2008年04月28日.

○外部資金の獲得

【科研費】

- ・紛争後の国・地域における教育の受容と社会変容—「難民化効果」の検討—(研究分担者) 2009年-2011年. 基盤研究 (B) 海外 (). 代表者: 内海成治.
- ・アジアにおける稀少生態資源の攪乱動態と伝統技術保全へのエコポリティクス(研究分担者) 2007年-2009年. 基盤研究 (A) (). 代表者: 山田勇.
- ・スマトラ河川流域社会の20世紀: 比較と定点継続調査を基軸とする学際的研究(研究分担者) 2007年-2009年. 基盤研究 (B) 海外 (). 代表者: 加藤剛.

○社会活動・所外活動

【共同研究員、所外客員など】

- ・総合地球環境学研究所 中国環境問題研究拠点，研究グループメンバー，2009年，拠点リーダー：窪田順平。
- ・国際学術共同研究（財）平和中島財団「消滅危機にある伝統的植物遺伝資源と文化の保全と持続的利用」，研究メンバー，2007年-2009年，研究代表者：渡邊和男（筑波大学）。
- ・文部科学省『世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業』「人道支援に対する地域研究からの国際協力と評価—被災社会との共生を実現する復興・開発をめざして—」，研究メンバー，2006年-2009年，研究代表者：中村安秀（大阪大学大学院人間科学研究科）。
- ・人間文化研究機構 総合推進事業 連携研究『日本とユーラシアの交流に関する総合的研究』「湿潤アジアの『人と水』に関する統合的研究」，連携研究員，2005年-2009年。

○報道等による成果の紹介

【報道機関による取材】

- ・「山のコーヒー飲み国づくりに協力を」東ティモール支援のNPO，フロンティアエイジ，2009年01月07日 朝刊，1面。

石丸 恵利子（いしまる えりこ）

プロジェクト研究員

●1967年生まれ

【学歴】

愛媛大学農学部卒業(1990)、広島大学文学部卒業(1999)、広島大学大学院文学研究科修了(2001)、京都大学大学院人間・環境学研究科研究指導認定退学(2007)

【職歴】

ニッカウキスキー株式会社(1991)、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員(2008)

【学位】

文学修士（広島大学 2001）

【専攻・バックグラウンド】

動物考古学、同位体動物考古学、環境考古学

【所属学会】

日本文化財科学会、考古学研究会、動物考古学研究会、International Council for Archaeo-Zoology

【受賞歴】

第二回日本文化財科学会奨励論文賞（2009）、Honourable Mention ICAZ 2006 Poster Competition student category(2006)、財団法人三島海雲記念財団学術奨励賞（2005）

●主要業績

○論文

【原著】

- ・石丸恵利子・海野徹也・米田穰・柴田康行・湯本貴和・陀安一郎 2009年01月 海産魚類の産地同定からみた水産資源の流通の展開—中四国地方を中心とした魚類遺存体の炭素・窒素同位体分析の視角から—。まなぶ第2号 吉田学記念文化財科学研究助成基金研究論文誌（『考古学と自然科学』第57号より転載）。吉田仁夫・吉田紀恵子，

○その他の出版物

【報告書】

- ・石丸恵利子・陀安一郎・日下宗一郎・湯本貴和 2009年03月 広島城下町に運ばれた海産物についての一考察－広島城出土魚類の炭素・窒素同位体分析. 広島城跡広島法務総合庁舎地点. , .
- ・菊地大樹・石丸恵利子・松井章 2009年03月 大宰府条坊跡第224次調査出土の動物遺存体. 太宰府市教育委員会編 大宰府条坊跡40－第217・224次調査－、太宰府市の文化財第107集. , pp. 179-185.
- ・石丸恵利子・幸泉満夫 2009年03月 山口県山口市の中郷貝塚出土の貝類について. 山口県立山口博物館編 山口県立山口博物館研究報告 第35号. , .
- ・石丸恵利子 2009年03月 広島城下町の動物資源利用－広島城跡広島法務総合庁舎地点出土の動物遺存体. 財団法人広島市文化財団編 広島城跡広島法務総合庁舎地点. , .

○会合等での研究発表**【口頭発表】**

- ・石丸恵利子 生業・交流・流通における同位体動物考古学の可能性. 第183回近江貝塚研究会, 2009年01月31日, 滋賀県埋蔵文化財センター. (本人発表).
- ・石丸恵利子・日下宗一郎・中野孝教・湯本貴和 イノシシとニホンジカの歯のストロンチウム同位体分析による狩猟域復元の試み－吉胡貝塚・南方(済生会)遺跡出土資料の分析－. 第12回動物考古学研究集会, 2008年11月29日-2008年11月, 島根県埋蔵文化財調査センター. (本人発表).

【ポスター発表】

- ・石丸恵利子 狩猟動物の解体・加工と骨角器製作からみた縄文時代の動物資源利用. 日本文化財科学会第25回大会研究発表, 2008年06月14日-2008年06月15日, 鹿児島国際大学. (本人発表).

○調査研究活動**【国内調査】**

- ・ストロンチウム同位体分析による狩猟域復元のための植物サンプリング調査. 広島県庄原市、岡山県新見市, 2009年03月.
- ・ストロンチウム同位体分析による狩猟域復元のための植物サンプリング調査. 熊本県熊本市周辺、佐賀県佐賀市周辺, 2009年03月.
- ・ストロンチウム同位体分析による狩猟域復元のための植物サンプリング調査. 岡山県岡山市周辺, 2009年02月.
- ・沖縄県出土動物遺存体資料調査. 沖縄県那覇市・名護市ほか, 2009年02月.
- ・北海道出土動物遺存体資料調査. 北海道札幌市, 2008年10月.
- ・博多遺跡出土動物遺存体資料調査. 福岡県福岡市, 2008年10月.
- ・阿高貝塚・黒橋貝塚出土動物遺存体資料調査. 熊本県熊本市, 2008年09月.
- ・大内氏館跡出土動物遺存体資料調査. 山口県山口市, 2008年09月.
- ・東名遺跡出土動物遺存体資料調査. 佐賀県佐賀市, 2008年09月.
- ・帝釈峡遺跡群出土動物遺存体資料調査. 広島県庄原市, 2008年08月.
- ・鳥浜貝塚出土動物遺存体資料調査. 福井県小浜市, 2008年08月.
- ・真脇遺跡出土動物遺存体資料調査. 石川県鳳至郡能都町, 2008年08月.
- ・ストロンチウム同位体分析による狩猟域復元のための植物サンプリング調査. 愛知県田原市周辺, 2008年07月.
- ・阿高貝塚・黒橋貝塚出土動物遺存体資料調査. 熊本県熊本市, 2008年06月.
- ・南方遺跡出土動物遺存体資料調査. 岡山県岡山市, 2008年06月.
- ・徳島県出土動物遺存体資料調査. 徳島県徳島市周辺, 2008年06月.
- ・大坂城跡出土動物遺存体資料調査. 奈良県奈良市, 2008年06月.
- ・松山城跡・宮前川遺跡出土動物遺存体資料調査. 愛媛県松山市, 2008年05月.
- ・広島城跡出土動物遺存体資料調査. 広島県広島市, 2008年05月.

- ・矢野遺跡出土動物遺存体資料調査. 島根県出雲市, 2008年05月.
- ・松江城跡出土動物遺存体資料調査. 島根県松江市, 2008年05月.
- ・平安京関連遺跡出土動物遺存体資料調査. 京都府京都市, 2008年05月.

○外部資金の獲得

【科研費】

- ・縄文時代における生業・交流圏の復元研究－動物遺存体の産地同定を中心として－(研究代表者) 2008年08月11日-2011年03月31日. 基盤研究(C) (20509010).

石本 雄大 (いしもと ゆうだい)

プロジェクト研究員

●1979年生まれ

【学歴】

鳥取大学農学部卒業(2001)、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程単位取得退学(2008)

【職歴】

京都大学大学院ティーチングアシスタント(2003)

【学位】

地域研究修士(京都大学 2008)

【専攻・バックグラウンド】

生態人類学

【所属学会】

アフリカ学会、生態人類学会、日本国際地域開発学会、日本砂丘学会、日本沙漠学会

●主要業績

○その他の出版物

【報告書】

- ・石本雄大 Feb, 2009 ザンビア南部州におけるヒューマンネットワークの概要. 梅津千恵子(ed.) 社会・生態システムの脆弱性とレジリエンスー平成20年度FR2研究プロジェクト報告ー., pp. 86-95.
- ・石本雄大 2009年02月 ザンビア南部州におけるヒューマンネットワークの概要. 梅津千恵子編 社会・生態システムの脆弱性とレジリエンスー平成20年度FR2研究プロジェクト報告ー., pp. 194-198.
- ・石本雄大 2008年08月 サヘル地域における援助団体による自然災害後の支援事業の地域住民への影響ーブルキナファソ北東部マルコイ郡の事例からー. 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科編 実線的地域研究ー魅力ある大学院教育イニシアティブ・臨地教育研究による実践的地域研究者の養成、平成18年度～19年度・フィールドワーク・インターンシップ実施報告書集ー., .

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・石本雄大 サヘル地域における出稼ぎ労働の導入と浸透ーブルキナファソ北部における事例研究ー. 日本国際地域開発学会春季大会, 2008年06月14日, 沖縄県中頭郡西原町. (本人発表).

【ポスター発表】

- ・石本雄大 サヘル地域の農牧民による出稼ぎ導入とそのインパクトへの対応ーブルキナファソ北東部I村の事例からー. 日本アフリカ学会学術大会, 2008年05月24日-2008年05月25日, 京都市. (本人発表).

○社会活動・所外活動

【依頼講演】

- ・社会・生態システムのレジリアンスー西アフリカ、ブルキナファソの事例を元にー。鳥取大学農学部生物生産科学セミナー，2008年11月28日，鳥取大学。

石山 俊 (いしやま しゅん)

プロジェクト研究員

●1965年生まれ

【学歴】

東京農業大学農学部卒業（1989）、静岡大学大学院人文社会科学研究所修士課程修了（2000）、名古屋大学大学院文学研究科単位取得退学（2006）

【職歴】

NGO緑のサヘル専従職員（1993）、NPO法人森のエネルギーフォーラム調査研究員（2004）、NPO法人森のエネルギーフォーラム事務局長（2005）、福井県立大学非常勤講師（2006）、NPOえちぜん事務局次長（2007）、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2008）

【学位】

文学修士（静岡大学 2000）

【専攻・バックグラウンド】

文化人類学

【所属学会】

日本アフリカ学会、日本文化人類学学会、日本沙漠学会、日本ナイル・エチオピア学会

●主要業績

○著書（執筆等）

【分担執筆】

- ・石山俊・内山秀樹・杉村和彦 2009年03月 「第六章 都市ー農村交流の中の「田舎学」の胎動：いまだて遊作塾と安心院町グリーンツーリズム研究会の事例から」。杉村和彦編 『21世紀の田舎学：遊ぶことと作ること』。世界思想社，京都，pp.147-186.

○その他の出版物

【報告書】

- ・石山俊 2008年 「砂漠化防止活動からの教訓：誰にとつての砂漠化か？」。嶋田義仁編 『伝統知識と技術の再活性化によるアフリカの草の根開発（Grass Root Development）と環境保護』。伝統的知識と技術の再活性化によるアフリカの草の根的開発（Grass Root Development）と環境保護（代表：嶋田義仁，名古屋大学），国際協カイニシアティブ，pp.119-122.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・Ishiyama, Shun *La migration 'Kanemubu' vers le sud a la region du Lac Tchad. 40 ans de recherche japonaise au Nord Cameroun pour le memoire d'Eldridge Mohammadou et P. K. Eguchi, Nov 29, 2008, Muna Hall, Yaounde, Cameroon.* (フランス語) (本人発表).

市川 智生 (いちかわ ともお)

プロジェクト研究員

●1976年生まれ**【専攻・バックグラウンド】**

日本近代史、医学史

●主要業績**○論文****【原著】**

- ・市川智生 2008年06月 近代日本の開港場における伝染病流行と外国人居留地 一八七九年「神奈川県地方衛生会」によるコレラ対策. 史学雑誌 第117編(第6号) :1059-1096. (査読付).

○会合等での研究発表**【口頭発表】**

- ・Tomo ICHIKAWA Military Medicine and Indigenous Society in Colonial Taiwan. Workshop "Environmental Changes and Infectious Diseases: Historical Perspective and Contemporary Issues", Sep 05, 2008, Academia Sinica, TAIWAN. (本人発表).

市川 昌広 (いちかわ まさひろ)

准教授

●1962年生まれ**【学歴】**

千葉大学園芸学部環境緑地科卒 (1984)、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻修士課程修了 (1997)、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻博士課程修了 (2002)

【職歴】

パシフィックコンサルタンツ株式会社開発計画部 (1984)、同社休職：青年海外協力隊参加 (ドミニカ共和国 生態調査) (1987)、青年海外協力隊任期終了：パシフィックコンサルタンツ株式会社環境部復職 (1989)、総合地球環境学研究所研究部助教授 (2003)

【学位】

博士 (人間・環境学) (京都大学2002)、修士 (人間・環境学) (京都大学1997)

【専攻・バックグラウンド】

東南アジア地域研究、農山村資源利用論

【所属学会】

日本熱帯生態学会、日本熱帯農業学会、日本マレーシア研究会、日本森林学会

【受賞歴】

日本熱帯生態学会 第8回吉良賞「奨励賞」 (2004)、日本尾瀬保護財団 第8回尾瀬賞 (2005)

●主要業績**○著書 (執筆等)**

【単著・共著】

- ・藤田渡・市川昌広・金沢謙太郎・畑田彩 2008年 「どうすれば生物多様性を保全できるか?—社会制度編—」. 畑田彩・市川昌広・中静透編. 『生物多様性の未来に向けて』 (大学教養課程プレゼンテーション教材). , 京都総合地球環境学研究所(販売: 昭和堂).
- ・赤尾健一・大沼あゆみ・長谷川弘・藤田渡・市川昌広・酒井章子・畑田彩 2008年 「どうすれば生物多様性を保全できるか?—経済学編—」 畑田彩・市川昌広・中静透編『生物多様性の未来に向けて』 (大学教養課程パワーポイント教材). 総合地球環境学研究所(販売: 昭和堂 (印刷中)).
- ・畑田彩・市岡孝朗・市川昌広 2008年 「地球上の生物はなぜ多種多様なのか?」 畑田彩・市川昌広・中静透編. 『生物多様性の未来に向けて』 (大学教養課程パワーポイント教材). 総合地球環境学研究所(販売: 昭和堂).
- ・市川昌広・小泉都・新山薫・北山兼弘・中川弥智子・辻野亮・畑田彩・山下聡 2008年 「人間活動は生物多様性にどのような影響を与えるか?」 畑田彩・市川昌広・中静透編『生物多様性の未来に向けて』 (大学教養課程パワーポイント教材). , 京都 総合地球環境学研究所(販売: 昭和堂).
- ・秋道智彌・市川昌広 2008年 「序論」 秋道智彌・市川昌広編『東南アジアの森を検証する — 熱帯雨林とモンスーン林からの報告』. 人文書院
- ・市川昌広・河野康之 2008年 「第2章 序文」 秋道智彌・市川昌広編『東南アジアの森を検証する — 熱帯雨林とモンスーン林からの報告』. 人文書院
- ・市川昌広 2008年 「ボルネオの多様な生物の森がはぐくむ社」 湯本貴和編『地球の処方箋』. 昭和堂, 京都
- ・市川昌広 2008年 「先住民が形づくるモザイク景観の森」 湯本貴和編『地球の処方箋』. 昭和堂, 京都
- ・市川昌広 2008年 「うつろいゆくサラワクの森の100年: 多様な資源利用の単純化」 秋道智彌・市川昌広編『東南アジアの森を検証する — 熱帯雨林とモンスーン林からの報告』. 人文書院
- ・中静透・畑田彩・市川昌広・山下聡 2008年 「生物多様性とどのようにつきあっていくか?」. 畑田彩・市川昌広・中静透編. 『生物多様性の未来に向けて』 (大学教養課程プレゼンテーション教材). , 京都 総合地球環境学研究所(販売: 昭和堂).
- ・赤尾健一・大沼あゆみ・長谷川弘・藤田渡・市川昌広・酒井章子・畑田彩 2008年 どうすれば生物多様性を保全できるか?—経済学編—. 畑田彩・市川昌広・中静透編. 『生物多様性の未来に向けて』 (大学教養課程プレゼンテーション教材). , 京都 総合地球環境学研究所(販売: 昭和堂).

○著書 (編集等)

【編集・共編】

- ・畑田彩・市川昌広・中静透編 2008年 生物多様性の未来に向けて (大学教養課程パワーポイント教材). , 総合地球環境学研究所 (販売: 昭和堂).
- ・秋道智彌・市川昌広編 2008年 東南アジアの森を検証する — 熱帯雨林とモンスーン林からの報告. 人文書院,

○論文

【原著】

- ・市川昌広 2008年 マレーシア・サラワク州の焼畑栽培にみられる除草剤利用とその背景. 農耕の技術と文化 .印刷中.
- ・Ichikawa, M. 2008 Rules of inheritance and transfer of land by the Iban of Sarawak: Land as an intergenerational resource. Borneo Research Bulletin 38 :148-158.
- ・中静透、市川昌広 2008年 森林の生物多様性アセスメントはどのようにおこなうべきか. 海外の森林と林業 72 :9-14.
- ・Ichikawa, M. 2008 Changes and diversity in rules of natural-resource tenure by the Iban of Sarawak, East Malaysia: An evaluation from the viewpoint of biodiversity conservation. . Asian and African Area Studies 8 (1) :1-21.
- ・Ichikawa, M 2008 Rules of inheritance and transfer of land by the Iban of Sarawak: Land as an intergenerational resource. Borneo Research Bulletin 38 (in press). (査読付).

○その他の出版物

【報告書】

- ・市川昌広 2008 History of the Borneo environment. 2005, Wadley R.L. edted. KITLV: Leiden 『東南アジア研究』. , . 京都大学東南アジア研究所.
- ・ ICHIKAWA M. and NAKASHIZUKA, T. 2008 . ICHIKAWA, M. and NAKASHIZUKA,T. (ed.) Sustainability and biodiversity assessment on forest utilization options (RIHN) (in press). , . Conclusion.
- ・ ICHIKAWA Masahiro 2008 Institutions and rules on forest use and management by the Iban of Sarawak. ICHIKAWA, M. and NAKASHIZUKA,T (ed.) Sustainability and biodiversity assessment on forest utilization options (RIHN) (in press). , .
- ・ ICHIKAWA Masahiro 2008 Land use changes during the 1960s-1990s around the Lambir Hills National Park, Sarawak, and backgrounds to the changes. ICHIKAWA, M. and NAKASHIZUKA,T. (ed.) Sustainability and biodiversity assessment on forest utilization options (RIHN) (in press). , .
- ・ ICHIKAWA Masahiro, NAKASHIZUKA Toru(ed.) 2008 Sustainability and biodiversity assessment on forest utilization options. , (RIHN) (in press).

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・ Ichikawa, M. A comparison of anthropogenic forest-based landscapes between Satoyama in Japan and Pemakai Menua in Malaysia. International workshop on local forest knowledge and culture, Mar 12, 2009, MokpoUniversity , Mokpo.
- ・ Ichikawa, M. Significance and roles of anthropogenic forest-based land-use in tropical rain forests of Southeast Asia. Nature conservation and cultural background. The Kadota fund international forum 2008, Dec 14, 2008, Kyoto International Conference Centre, Kyoto.
- ・ 市川昌広 東南アジア熱帯雨林における開発とそこに暮らす人々. 第11回いのちの科学フォーラム『熱帯雨林から森を見つめなおすー文化としての自然ー』, 2008年12月13日, ホテルルビノ京都堀川, 京都市.
- ・ Ichikawa, M. A comparison of anthropogenic forest-based landscapes between Satoyama in Japan and Pemakai Menua in Malaysia. The 1st International Conference on Forest Related Traditional Knowledge and Culture, Oct 06, 2008, Korea Forest Research Institute, Seoul.
- ・ 市川昌広 山に暮らす人々と熱帯林問題. 日本マレーシア研究会関西例会・平和環境もやいネット『マレーシア研究の回顧と展望ー『マレー農村の研究』を中心に』, 2008年09月28日, 総合地球環境学研究所, 京都市.
- ・ Ichikawa, M. Satoyama (anthropogenic forests-based landscape) in Borneo and its significance for biodiversity conservation. Seminar on landuse change and societal adaptation under global climate change in Asian tropical rain forests, Aug 04, 2008, Kota Kinabaru, UMS.

○学会活動（運営など）

【組織運営】

- ・ 日本熱帯生態学会, 評議員. 2008年04月.
- ・ 日本熱帯生態学会, 庶務幹事. 2004年04月.

○外部資金の獲得

【科研費】

- ・ 熱帯里山ガバナンスをめぐるステークホルダー間にみる利害関係とその背景(研究代表者) 2008年-2011年. 基盤研究B (20401012).

【各省庁等からの研究費(科研費以外)】

- ・ 炭素貯留と生物多様性保護の経済効果を取り込んだ熱帯生産林の持続的管理に関する研究(H19-H21) 2008年. 環境省地球環境推進費 (F-071). 研究代表: 北山兼弘(京都大学).

一條 知昭 (いちじょう ともあき)

プロジェクト研究員

●1980年生まれ

【学歴】

大阪大学薬学部卒業 (2003)、大阪大学大学院薬学研究科生命情報環境科学専攻博士前期課程修了 (2005)、大阪大学大学院薬学研究科生命情報環境科学専攻博士後期課程修了 (2008)

【職歴】

大阪大学 リサーチアシスタント (2005, 2007)、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員 (2008)

【学位】

修士 (薬学) (大阪大学 2005)、博士 (薬学) (大阪大学 2008)

【専攻・バックグラウンド】

環境微生物学

【所属学会】

日本薬学会、日本微生物生態学会、日本細菌学会、米国微生物学会、国際微生物生態学会

【受賞歴】

第30回ヨーロッパ抗酸菌学会年会最優秀ポスター賞 (2009)

●主要業績

○会合等での研究発表

【ポスター発表】

- ・ 一條知昭、井上尚子、見坂武彦、山口進康、那須正夫 水環境中の *Legionella pneumophila* の多様性. 日本薬学会第129年会, 2009年03月26日-2009年03月28日, 京都府京都市.
- ・ 一條知昭、和泉陽子、山口進康、那須正夫 Auramine O-CTC二重染色法による呼吸活性をもつ抗酸菌の特異的検出. 日本薬学会第129年会, 2009年03月26日-2009年03月28日, 京都府京都市. (本人発表).
- ・ 一條知昭、馬場貴志、見坂武彦、山口進康、那須正夫 水環境に存在する *Legionella pneumophila* の膜タンパク質の遺伝子型. 第82回日本細菌学会総会, 2009年03月12日-2009年03月14日, 愛知県名古屋市. (本人発表).
- ・ 一條知昭、山口進康、那須正夫 ビーズアッセイ法による水環境中の細菌の同時検出. 日本微生物生態学会第24回大会, 2008年11月25日-2008年11月28日, 北海道札幌市. (本人発表).
- ・ 一條知昭、山口進康、那須正夫 ビーズアッセイ法による水系感染症起因菌の迅速・特異的検出. フォーラム2008: 衛生薬学・環境トキシコロジー, 2008年10月17日-2008年10月18日, 熊本県熊本市. (本人発表).
- ・ T. Baba, N. Inoue, M. Yasui, T. Ichijo, T. Kenzaka, M. Nasu Genetic Diversity of Membrane Protein Gene Sequences in *Legionella pneumophila* Isolated from Natural and Artificial Environments. 12th International Symposium on Microbial Ecology, Aug 17, 2008-Aug 22, 2008, Cairns, Australia.
- ・ T. Ichijo, N. Yamaguchi, K. Tani, M. Nasu Bead Assay Based Simultaneous Detection of Pathogenic Bacteria in Aquatic Environment. 12th International Symposium on Microbial Ecology, Aug 17, 2008-Aug 22, 2008, Cairns, Australia. (本人発表).
- ・ T. Ichijo, N. Yamaguchi, M. Nasu Diversity of eukaryotic-like gene sequences in *Legionella pneumophila* isolated from aquatic environment in Asian countries by using molecular microbial ecological methods. International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages, Jun 11, 2008-Jun 12, 2008, Kyoto, Japan. (本人発表).
- ・ T. Kenzaka, M. Yasui, T. Ichijo, T. Baba, M. Nasu Diversity of Eukaryotic-Like Gene Sequences in *Legionella pneumophila* Isolated from Natural Environment. 108th American Society for Microbiology

General Meeting, Jun 01, 2008-Jun 05, 2008, Boston, MA, USA. (本人発表).

岩谷 洋史 (いわたに ひろふみ)

プロジェクト研究員

●1970年生まれ

【学歴】

鳥取大学教育学部卒業（1995）、京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程修了（1999）、京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程単位取得退学（2005）

【職歴】

神戸学院大学地域研究センターポストドクトラルフェロー（2005）、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2008）

【学位】

人間・環境学修士（京都大学 1999）

【専攻・バックグラウンド】

メディア研究、文化人類学

【所属学会】

日本認知科学会、日本記号学会、日本文化人類学会

●主要業績

○論文

【原著】

- ・石田佐恵子・岩谷洋史 2009年03月 映像資料の収集と保存をめぐる問題—デジタル化時代の映像社会学に向けての試論. 都市文化研究 (11) :81-94. (査読付).
- ・岩谷洋史 2008年05月 仕事場における資源としてのインスクリプションの役割—酒蔵を事例として. ソシオロジ 53(1) :55-72. (査読付).

上杉 彰紀 (うえすぎ あきのり)

プロジェクト研究員

●1971年生まれ

【学歴】

関西大学文学部卒業（1993）、関西大大学院文学研究科史学専攻考古学専修博士課程前期課程修了（1997）、関西大学大学院文学研究科史学専攻考古学専修博士課程後期課程単位取得（2001）

【職歴】

関西大学文学部非常勤講師（2002）、関西大学大学院非常勤講師（2005）、京都橘大学文学部非常勤講師（2006）、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2007）

【学位】

博士（文学）（関西大学2003）、修士（文学）（関西大学1997）

【専攻・バックグラウンド】

考古学

【所属学会】

日本考古学協会、日本西アジア考古学会

●主要業績**○論文****【原著】**

- ・上杉彰紀 2008年 「パローチスターン高原における人物土偶に関する覚書-岡山市立オリエント美術館の資料紹介を兼ねて-」. 『岡山市立オリエント美術館研究紀要』第22巻 第22巻 :1-28.
- ・上杉彰紀・小茄子川歩 2008年 「インダス文明社会の成立と展開に関する一考察」. 『西アジア考古学』 9 :101-118.
- ・上杉彰紀 2008年 「インダス・プロジェクトによるインダス遺跡の発掘調査」. 『環境変化とインダス文明 2007年度成果報告書』 :83-114.

○会合等での研究発表**【口頭発表】**

- ・上杉彰紀 「インダス・プロジェクト2008 -インド・パキスタンにおけるインダス文明遺跡の調査-」. 第16回西アジア発掘調査報告会、日本西アジア考古学会, 2009年03月15日, 東京都豊島区. (本人発表).
- ・上杉彰紀 'Early Harapan and Harappan Traditions in Haryana, India: New Discoveries from Girawad and Farmana'. The 37th Annual Conference on South Asia, University of Wisconsin-Madison, Oct 17, 2008, アメリカ ウィスコンシン州 マディソン. (本人発表).

内井 喜美子 (うちい きみこ)

プロジェクト研究員

●1978年生まれ**【学歴】**

京都大学理学部卒業 (2002)、京都大学大学院理学研究科生物科学専攻修士課程修了 (2004)、京都大学大学院理学研究科生物科学専攻博士後期課程修了 (2007)

【職歴】

京都大学生態学研究センター リサーチ・アシスタント (2004-2006)、総合地球環境学研究所研究員 (2007)

【学位】

博士 (理学) (京都大学 2007)、修士 (理学) (京都大学 2004)

【専攻・バックグラウンド】

生態学、微生物生態学

【所属学会】

日本生態学会、日本微生物生態学会

【受賞歴】

第8回Ecological Research論文賞 (2008)

●主要業績

○論文

【原著】

- ・ Kazuaki Matsui, Mie Honjo, Yukihiro Kohmatsu, Kimiko Uchii, Ryuji Yonekura, Zen'ichiro Kawabata 2008 Detection and significance of koi herpesvirus (KHV) in freshwater environments. *Freshwater Biology* 53(6) :1262-1272. DOI:10.1111/j.1365-2427.2007.01874.x. (査読付).

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・ 内井喜美子, 川端善一郎 外来病原微生物コイヘルペスウイルスの在来宿主個体群への定着機構. 日本生態学会第56回大会, 2009年03月17日-2009年03月21日, 盛岡市. (本人発表).
- ・ 内井喜美子, 石原猛, 浅野耕太, 川端善一郎 コイヘルペスウイルスの侵入とコイ産業. 日本陸水学会第73回大会, 2008年10月10日-2008年10月13日, 札幌市. (本人発表).

【ポスター発表】

- ・ Kimiko Uchii, Kazuaki Matsui, Zen'ichiro Kawabata Distribution of cyprinid herpesvirus 3 in a wild population of common carp (*Cyprinus carpio*). International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkage, Jun 11, 2008-Jun 12, 2008, Kyoto, Japan. (本人発表).

内山 純蔵 (うちやま じゅんぞう)

准教授

●1967年生まれ

【学歴】

東京大学文学部2類考古学専修課程卒業 (1991)、京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程 (前期) 修了 (1993)、University of Durham, Department of Archaeology, MA in Environmental Archaeology (1996)、京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程 (後期) 単位修得 (1997)

【職歴】

富山大学人文学部国際文化学科講師 (1998)、富山大学人文学部国際文化学科助教授 (2001)、総合地球環境学研究所研究部准教授 (2003)

【学位】

博士 (文学) (総合研究大学院大学 2002)、MA in Environmental Archaeology (ダーラム大学 1996)、修士 (人間・環境学) (京都大学 1993)

【専攻・バックグラウンド】

先史人類学、動物考古学

【所属学会】

生き物文化誌学会

●主要業績

○著書 (執筆等)

【分担執筆】

- ・ UCHIYAMA, Junzo Dec, 2008 Vertical or Horizontal Landscape? The prehistoric Long-Term Perspectives on

the History of the East Asian Inland Seas. SCHOTTENHAMMER, Angela (ed.) The East Asian Mediterranean: Maritime Crossroads of Culture, Commerce and Human Migration. East Asian Economic and Socio-cultural Studies: East Asian Maritime History, 6. Harrassowitz, Wiesbaden, Germany, pp.25-52.

【翻訳・共訳】

- ・内山純蔵 2008年07月 第2章 問題提起-農耕の起源と拡散. 長田俊樹・佐藤洋一郎編 農耕起源の人類史. 地球研ライブラリー, 6. 京都大学学術出版会, 京都市左京区, pp.17-65. 原著: BELLWOOD, Peter著 FIRST FARMERS: The Origins of Agricultural Societies. Blackwell Publishing, Oxford, UK, .

○著書（編集等）

【編集・共編】

- ・UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; MAKIBAYASHI, Keisuke (ed.) Jan,2009 Neolithisation and Landscape: NEOMAP International Workshop. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, 174pp.
- ・UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) Jan,2009 NEOMAP Interim Report 2008. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, 260pp.

○論文

【原著】

- ・UCHIYAMA, Junzo Jan,2009 Resource Management and Landscape Diversity in Jomon Japan. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; MAKIBAYASHI, Keisuke (ed.) Neolithisation and Landscape: NEOMAP International Workshop. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.3-24.
- ・UCHIYAMA, Junzo Jan,2009 Jomon Style and Yayoi Style: The Worldview Transition in the Central Japanese Archipelago with Neolithisation, as Seen from the Representations in Pottery and Settlement. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; MAKIBAYASHI, Keisuke (ed.) NEOMAP Interim Report 2008. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.139-154.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・UCHIYAMA, Junzo Reluctant Neolithisation? Resource management and landscape diversity in Jomon Japan. The international workshop “Sedentism: Worldwide research perspectives for the shift of human societies from mobile to settled ways of life” hosted by the German Archaeological Institute, Oct 24,2008, Berlin, Germany. (本人発表).
- ・UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati Landscape History in Fight with Global Environmental Problems: a Report on a Multidisciplinary Research Project on East Asian Inland Seas. “Landscape History and Landscape Heritage” Parallel Session C 4.2 at the Permanent European Conference for the Study of the Rural Landscape (PECSRL) 23rd Session - Landscapes, Identities and Developments, Sep 05,2008, Óbidos, Portugal. (本人発表).
- ・UCHIYAMA, Junzo Prehistoric landscape shifts as seen from human-wild boar relations in Jomon Japan. Prehistoric Landscape Shifts in the East Asian Inland Seas” Session at the 4th worldwide conference of Society for East Asian Archaeology (SEAA), Jun 03,2008, Beijing, China. (本人発表).

○学会活動（運営など）

【企画・運営・オーガナイズ】

- ・吹田市立博物館平成20年度秋季特別展関連シンポジウム「とりあえずビール！ビールをめぐる世界の景観」, オーガナイザー (シンポジウム総括). 2008年11月15日, 大阪府吹田市.
- ・The 4th worldwide conference of Society for East Asian Archaeology (SEAA)においてセッション” Prehistoric Landscape Shifts in the East Asian Inland Seas” , セッション・オーガナイザー. 2008年06月03日, 北京.

【組織運営】

- ・生き物文化誌学会, 評議員. 2007年07月. 現在に至る.

○調査研究活動

【国内調査】

- ・北陸地方の新石器化期に関する資料調査. 新潟県長岡市、十日町市、長野県茅野市, 2008年11月12日-2008年11月13日. (内山純蔵、GILLAM, Christopher、JORDAN, Peter、ZEBALLOS, Carlos、中村大).
- ・新石器化期に関する資料調査. 福井県若狭市、滋賀県長浜市, 2008年11月02日. (内山純蔵、GILLAM, Christopher、JORDAN, Peter、SEYOCK, Barbara、ZEBALLOS, Carlos、細谷葵、槇林啓介、中村大).
- ・新石器化期に関する資料収集. 広島県庄原市, 2008年08月05日-2008年08月07日. (内山純蔵、槇林啓介).
- ・北海道および東北地方北部の新石器化期に関わる資料収集. 北海道千歳市、江別市、礼文町、青森県八戸市、青森市, 2008年07月10日-2008年07月14日. (BAUSCH, Ilona、内山純蔵).

○社会活動・所外活動

【メディア出演など】

- ・ガラスの地球を救えスペシャル 見つめよう！今そこにある危機。そして再生へ (コメンテーター). 朝日放送 (ABC), 2008年04月29日.

【その他】

- ・2009年03月04日 特別授業「生き物のくらしと自然かんきょう-昔の人の生活について」京都市立室町小学校
- ・2009年01月15日 富山県氷見市上久津呂遺跡調査分析指導、財団法人富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所において
- ・2008年10月09日 特別授業「生き物のくらしと自然かんきょう-縄文時代人に学ぶ環境の心」京都市立室町小学校
- ・2008年09月29日 富山県氷見市上久津呂遺跡調査分析指導、財団法人富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所において

○報道等による成果の紹介

【報道機関による取材】

- ・遺跡の動物の骨に人の営みを見る. 京都新聞, 2008年10月08日 朝刊, 10面.
- ・縄文人、イノシシ飼育!?京の研究者新説. 京都新聞, 2008年09月10日 朝刊, 26面.

梅津 千恵子 (うめつ ちえこ)

准教授

【学歴】

国際大学大学院国際関係学修士課程修了 (1989)、ハワイ大学農業資源経済学博士課程修了 (1995)

【職歴】

青年海外協力隊ケニア共和国派遣理科教師 (1979)、国際協力事業団東北支部研修監理員 (1982)、東西センター環境プログラム客員研究員 (1995)、神戸大学大学院自然科学研究科助手 (1997)、東西センター研究プログラム環境部門客員研究員 (2001)、総合地球環境学研究所研究部助教授 (2002)、総合地球環境学研究所准教授 (2007)

【学位】

Ph. D (ハワイ大学 1995)、国際学修士 (国際大学 1989)

【専攻・バックグラウンド】

環境資源経済学、開発経済学、生物学、国際関係学

【所属学会】

国際農業経済学会、アメリカ農業経済学会、国際エコロジー経済学会、環境経済政策学会、国際開発学会、日本農業経済学会、日本農業農村工学会

【受賞歴】

国際農業経済学会 J B 研究賞 (2001)、日本農業経済学会学会誌賞 (2003)

●主要業績**○著書 (執筆等)****【翻訳・共訳】**

- ・長田俊樹・佐藤洋一郎監訳 2008年07月 ピーター・ベルウッド著、「農耕起源の人類史」．編 梅津千恵子、第5章担当、「アフリカの農耕—もう一つの起源」pp.153-172. 京都大学学術出版会、京都市左京区、原著: Bellwood, Peter. 著 First Farmer: The Origin of Agricultural Societies., 2004. (Chapter 5: Africa: An Independent Focus of Agricultural Development?). Blackwell, .ISBN: 978-4-87698-722-1.

○論文**【原著】**

- ・Ujjayant Chakravorty, Eithan Hochman, Chieko Umetsu and David Zilberman. Feb,2009 Water Allocation Under Distribution Losses: Comparing Alternative Institutions. Journal of Economic Dynamics and Control 33(2) :463-476. DOI:10.1016/j.jedc.2008.04.014. (査読付).
- ・V. Geethalakshmi, Akiyo Yatagai, K. Palanisamy, Chieko Umetsu. Feb,2009 Impact of ENSO and the Indian Ocean Dipole on north-east monsoon rainfall of Tamil Nadu State in India. Hydrological Processes 23(4) :633-647. DOI:10.1002/hyp.7191. (査読付).
- ・Taro Yamauchi, Thamana Lekprichakul, Takeshi Sakurai, Hiromitsu Kanno, Chieko Umetsu, Sesele Sokotela. Dec,2008 Training Local Health Assistants for a Community Health Survey in a Developing Country: Longitudinal Monitoring of the Growth and Nutrition of Children in Zambia. Journal of Higher Education and Lifelong Learning (高等教育ジャーナル) (16) :67-75. (査読付).

○会合等での研究発表**【口頭発表】**

- ・Chieko Umetsu Climate change and alternative cropping patterns in lower Seyhan irrigation project: a regional simulation analysis with MRI-CGCM and CCSR-CGCM. The IARU International Scientific Congress "Climate Change: Global Risks, Challenges and Decisions, Mar 10,2009-Mar 12,2009, Copenhagen, Denmark. (本人発表).
- ・Chieko Umetsu Why Farmers Still Invest in Wells in Hard-rock Regions When the Water-table is fast Declining?. HydroChange 2008: Hydrological changes and management from headwater to the ocean, Oct 01,2008-Oct 03,2008, 京都市. (本人発表).

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- ・梅津千恵子 旱魃に対して脆弱な社会—生態システムのレジリエンス向上の条件. 企画シンポジウム「生態学と持続可能性科学の新しい関係」、企画者: 谷内茂雄、第56回日本生態学会盛岡大会、2009年03月17日-2009年03月21日、盛岡市.
- ・梅津千恵子 Vulnerability and Resilience of Social-Ecological Systems in Zambia. 農村開発部セミナー「アフリカ半乾燥地農村の脆弱性と回復力」、国際協力機構 (JICA)、, May 01,2008, 東京都.

○社会活動・所外活動**【依頼講演】**

- ・「環境変動の時代に生きる途上国の農民たち」．京都精華大学・地球環境学講座「アジア・アフリカの現場から」第3回、京都精華大学交流センター、2008年06月24日、京都市.

遠藤 崇浩 (えんどう たかひろ)

●1974年生まれ

【学歴】

慶應義塾大学法学部卒業（1997）、慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻修士課程修了（1999）、慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻博士課程修了（2002）

【職歴】

慶應義塾大学法学部非常勤講師（2004）、総合地球環境学研究所助手（2004）

【学位】

博士（法学）（慶應義塾大学 2002）、修士（法学）（慶應義塾大学 1999）

【専攻・バックグラウンド】

政治学

【所属学会】

日本政治学会、日本公共政策学会、日本公共選択学会、日本法政学会、水資源・環境学会

●主要業績

○著書（執筆等）

【分担執筆】

- ・中山幹康・遠藤崇浩 2008年 「水不足が中心となる流域の水問題 ユーフラテス川・チグリス川流域」．砂田憲吾編 『アジアの流域水問題』．技報堂出版，pp. 126-142.
- ・遠藤崇浩 2008年 「国際河川のガバナンス（1）中東－ユーフラテス川を巡る紛争、その対立点と協調の可能性－」．蔵治光一郎編 『水をめぐるガバナンス』．東信堂，pp. 125-146.
- ・遠藤崇浩 2008年 「水銀行－渇水への「ソフト」な対策」．総合地球環境学研究所編 『地球の処方箋 環境問題の根源に迫る』．昭和堂，pp. 172-175.
- ・遠藤崇浩 2008年 「サケの保護と地方分権」．総合地球環境学研究所編 『地球の処方箋 環境問題の根源に迫る』．昭和堂，pp. 88-91.

○論文

【原著】

- ・遠藤崇浩 2008年 「オガララ帯水層の水問題－地下水利権制度の観点から－」．『水利科学』 52 :26-45.（査読付）．
- ・遠藤崇浩 2008年 水銀行における政府の役割－制度変化との関連－．日本政治学会2008年度研究大会提出論文．
- ・遠藤崇浩 2008年 地表水と地下水の統合管理について－愛媛県西条市を事例に－．日本公共政策学会2008年度研究大会提出論文．

○その他の出版物

【解説】

- ・浅野孝、遠藤崇浩、名波義昭、浜口達男、安田成夫、吉谷純一 2008年 「カレント・トピックス－海外の水管理政策動向－（第6回）」．『河川』（平成20年10月号）：57-62.

【その他の著作（会報・ニュースレター等）】

- ・遠藤崇浩 2008年 「西条の地下水問題」．『人と水』（第4号）：28-29.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・遠藤崇浩 「水銀行における政府の役割－制度変化との関連－」．日本政治学会2008年度研究大会，2008年10月，関西学院大学、兵庫県。．（本人発表）．

- ・遠藤崇浩 「地表水と地下水の統合管理について - 愛媛県西条市を事例に -」. 日本公共政策学会2008年度研究大会, 2008年06月, 北九州市立大学、福岡県. (本人発表).
- ・Takahiro Endo “” Hard” Solutions and “Soft” Solutions: Institutional Response to Urban Water Problems,”. KRIHS and RIHN Joint International Symposium on Urban Sustainability in Asia: Urban Planning, Environment and Transportation, June 2008, Korea Research Institute for Human Settlements, Seoul, Korea. (本人発表).

【ポスター発表】

- ・Takahiro Endo “A Comparative Study on Countermeasures against Land Subsidence Problem, - Japan and Thailand -”. XXXVI International Association of Hydrogeologists Congress, November 2008, Toyama, Japan. (本人発表).

○外部資金の獲得

【その他の競争的資金】

- ・「カリフォルニア州における水管理制度の実態調査」 2008年06月-2008年09月. 総合研究大学院大学海外先進教育研究実践支援制度研究助成.

EVANS, Tom (えう`あんず とむ)

招へい外国人研究員

【学歴】

ヴァージニア工科大学卒業 (1989)、ノースキャロライナ大学大学院修了 (1998)

【職歴】

インディアナ大学・制度、人口、環境変動研究センター (CIPEC) ・ポスドク研究員 (1998)、インディアナ大学地理学部助教授 (1999)、インディアナ大学地理学部准教授 (2005)

【学位】

地理学博士 (ノースキャロライナ大学 1998)

【専攻・バックグラウンド】

地理学

●主要業績

○論文

【原著】

- ・Donnelly S, and Evans TP. 2008 Spatial patterns of ownership parcelization in south-central Indiana, 1928-1997. *Landscape and Urban Planning* 84(3) :230-240.
- ・Evans TP, and Kelley H. 2008 Exploring historical dynamics of reforestation with an agent-based model for south-central Indiana. *Geoforum* 39(2) :819-832.
- ・Messina J, Evans T, Manson S, Shortridge AM, Deadman P, and Verburg P. 2008 Complex systems models and the management of error and uncertainty. . *Journal of Land Use Science* 3(1) :11-25.
- ・Parker DC, Entwisle B, Rindfuss RR, VanWey LK, Manson SM, Moran E, An L, Deadman P, Evans TP, Linderman M, Mussavi SM, and Malanson G. 2008 Case studies, cross-site comparisons, and the challenge of generalization: Comparing agent-based models of land-use change in frontier regions. *Journal of Land Use Science* 3(1) :41-72.
- ・Rindfuss R, Entwisle B, Walsh SJ, An L, Badenoch N, Brown DG, Deadman P, Evans TP, Fox J, Geoghegan J,

Gutmann M, Kelly M, Linderman M, Liu J, Malanson GP, Mena CF, Messina J, Moran E, Parker DC, Parton W, Prasartkul P, Robinson DT, Sawangdee Y, VanWey LK, and Verburg P. 2008 Land use change: Complexity and comparisons. *Journal of Land Use Science* 3(1) :1-10.

- Tucker CM, Randolph JC, Evans TP, Andersson KP, Persha L, and Green GM. 2008 An approach to assess relative degradation in dissimilar forests: Toward a comparative assessment of institutional outcomes. *Ecology and Society* 13(1).

大西 暁生 (おおにし あきお)

外来研究員

●1974年生まれ

【学歴】

近畿大学農学部卒業 (1997)、ウェールズ、バンゴー大学環境林業学科修了 (2000)、名古屋大学大学院環境学研究科博士前期課程修了 (2003)、名古屋大学大学院環境学研究科博士後期課程修了 (2006)

【職歴】

総合地球環境学研究所プロジェクト上級研究員 (2006)

【学位】

博士 (工学) (名古屋大学 2006)、修士 (環境学) (名古屋大学 2003)、Master of Science (MSc) (バンゴー大学 2000)

【専攻・バックグラウンド】

環境システム工学

【所属学会】

土木学会、環境情報科学センター、水文水資源学会、沙漠学会、日本環境管理学会

【受賞歴】

土木学会地球環境委員会：地球環境貢献賞 (2006)、日本環境管理学会：発表奨励賞 (2007)

●主要業績

○著書 (執筆等)

【単著・共著】

- ・福嶋義宏, 谷口真人 2008年 黄河の水環境問題—黄河断流を読み解く. 学報社 執筆箇所第2章3節～5節.

○論文

【原著】

- ・大西暁生, 森杉雅史, 石峰, 井村秀文, 渡邊紹裕, 福嶋義宏 2008年 黄河流域の農業用水効率性に関する研究. 日本沙漠学会誌：沙漠研究 .
- ・A. Onishi, M. Morisugi, H. Imura, F. Shi, T. Watanabe and Y. Fukushima 2008 Study on the efficiency of agricultural water use in the Yellow River basin. *Journal of Global Environment Engineering* .
- ・A. Onishi, Y. Sato, X. Cao, M. Matsuoka, H. Imura, F. Shi and Y. Fukushima 2008 Sustainable agriculture production and agricultural water use in the Yellow River basin, China -Evaluation by index of agricultural WUE (Water Use Efficiency) - . *Proceedings of YRIS Meeting* :44-51.
- ・Y. Sato, A. Onishi, Y. Fukushima, X. Ma, J. Xu, M. Matsuoka, H. Zheng and J. Chen 2008 Analysis of long-term water balance of the Yellow River basin-Mechanisms of the drying-up-. *Proceedings of YRIS Meeting* :103-109.

- ・ F. Shi, H. Imura, O. Higashi, X. Cao and A. Onishi 2008 Water rights transfers and regional development in china. Proceedings of YRIS Meeting :32-43.
- ・ Y. Sato, A. Onishi, Y. Fukushima, X. Ma, J. Xu, M. Matsuoka, H. Zheng and J. Chen 2008 Mechanisms of the water shortage of the Yellow River basin. Yellow River Studies, News Letter Vol. 8 :3-9.

○その他の出版物

【報告書】

- ・ 大西暁生, 佐藤嘉展, 曹鑫, 松岡真如, 井村秀文, 石峰, 福嶋義宏 2008年 黄河流域の持続可能な農業生産と水利用 -Water Use Efficiency (WUE) 指標による評価 - . 黄河合同研究会報告書. , pp. 46-52.
- ・ 佐藤嘉展, 大西暁生, 福嶋義宏, 馬燮鈞, 徐建青, 松岡真如, 鄭紅星, 陳建耀 2008年 水文・水資源モデルを用いた黄河流域の長期水収支解析—黄河断流のメカニズム— . 黄河合同研究会報告書. , pp. 110-125.
- ・ 石峰, 井村秀文, 東修, 曹鑫, 大西暁生 2008年 中国における水権取引と地域開発. 黄河合同研究会報告書. , pp. 36-45.

大西 健夫 (おおにし たけお)

プロジェクト上級研究員

●1972年生まれ

【学歴】

京都大学農学部農業工学科卒業（1996）、京都大学大学院農学研究科地域環境科学専攻修士課程修了（1998）、京都大学大学院農学研究科地域環境科学専攻博士課程修了（2004）

【職歴】

独立行政法人科学技術振興機構CREST研究員（2004）、総合地球環境学研究所プロジェクト上級研究員（2006）

【学位】

博士（農学）（京都大学 2004）、修士（農学）（京都大学 1998）

【専攻・バックグラウンド】

水文学

【所属学会】

農業農村工学会、土木学会、地下水学会、エントロピー学会、IAHS、AGU

●主要業績

○著書（執筆等）

【分担執筆】

- ・ 大西健夫 2008年 長江流域. 砂田憲吾編著・CRESTアジア流域水政策シナリオ研究チーム著編 アジアの流域水問題. 技報堂出版, pp. 13-30.

【翻訳・共訳】

- ・ 大西健夫・龍澤彩 2009年03月 くうきはどこに？. 福音館書店, 東京都文京区, 31pp. 原著: フランクリン・M・ブランリー作、ジョン・オブライエン絵著 Air is around you. ,

○論文

【原著】

- ・ Takeo Onishi, Hideaki Shibata, Muneoki Yoh, Seiya Nagao Jan, 2009 Mechanism for the Production of Dissolved Iron in the Amur River Basin - a modeling study of the Naoli River of the Sanjiang Plain.

From Headwaters to the Ocean: Hydrological Change and Watershed Management :355-360. (査読付) .

- ・ Nagano Takanori, Takeo Onishi, Tsugihiko Watanabe, Keisuke Hoshikawa, Sevgi Donma, Takashi Kume Jan, 2009 Long-term changes of water and salinity management in Lower Seyhan Plain, Turkey. From Headwaters to the Ocean: Hydrological Change and Watershed Management :313-319. (査読付) .

○その他の出版物

【報告書】

- ・ Onishi Takeo, Shibata Hideaki, Nagao Seiya, Park Hong, Yoh Muneoki, and V.V. Shamov Sep, 2008 Long-term trend of dissolved iron concentration and hydrological model incorporating dissolved iron production mechanism of the Amur River basin. Takayuki Shiraiwa (ed.) Annual report of Amur-Okhotsk project, No.5. , pp.199-207.
- ・ Shamov V.V., Takeo Onishi, V.V.Kulakov Sep, 2008 iron flux behavior anomaly in the amur basin in 1990s: feasible reasons. Takayuki Shiraiwa (ed.) Annual report on Amur-Okhotsk Project No.5. , pp.209-218.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・ Takeo Onishi Numerical simulation of dissolved iron flux in the Amur River basin under different land-cover change scenarios. 日本地理学会春季学術大会, Mar 29, 2009-Mar 31, 2009, 東京都. (本人発表).
- ・ 大西健夫 アムール川における溶存鉄の変動特性とその数値シミュレーション. 日本森林学会大会森林水文ワークショップ, 2009年03月28日, 京都市. (本人発表).
- ・ Takeo Onishi Mechanism for the Production of Dissolved Iron in the Amur River Basin - a modeling study of the Naoli River of the Sanjiang Plain. International conference on "Hydrological changes and management from headwaters to the ocean, Oct 01, 2008-Oct 03, 2008, Kyoto. (本人発表).
- ・ 大西健夫 アムール川における溶存鉄生成機構を組み込んだ水文モデルの構築. 地球惑星合同連合大会, 2008年05月20日-2008年05月26日, 千葉県幕張. (本人発表).

【ポスター発表】

- ・ Takeo Onishi How dissolved iron is produced and transported in the Amur River basin?. AGU Fall meeting, Dec 13, 2008-Dec 20, 2008, アメリカ・サンフランシスコ. (本人発表).
- ・ 土屋健一 土壌の嫌気状態形成に地下水位が果たす役割に関するモデリング. 地球惑星合同連合大会, 2008年05月20日-2008年05月26日, 千葉県幕張.

○社会活動・所外活動

【他の研究機関から委嘱された委員など】

- ・ 近畿大学, 近畿大学理工学部社会環境工学科卒業論文発表会 (JABEE認定授業) 外部審査委員. 2009年02月-2009年02月.
- ・ 近畿大学, 近畿大学理工学部社会環境工学科卒業論文発表会 (JABEE認定授業) 外部審査委員. 2009年01月-2009年01月.

【依頼講演】

- ・ 鉄がつなぐアムール川とオホーツク海～「巨大」魚付き林という考え方～. 厚岸湖と厚岸湾はなぜ生産性が高いのか, 2009年03月07日-2009年03月07日, 北海道厚岸町.

○報道等による成果の紹介

【報道機関による取材】

- ・ 森、川、藻が支える湖と湾. 北海道新聞, 2009年03月12日 朝刊.

○教育

【非常勤講師】

- ・ 神戸大学, 農学部, 特別講義アジア農業戦略. 2009年02月-2009年02月.
- ・ 同志社大学, 理工学部環境システム学科, 環境システム学概論Ⅱ. 2008年10月-2008年10月.

大西 正幸 (おおにし まさゆき)

プロジェクト上級研究員

【学歴】

東京大学文学部卒業（1975）、ジャダプル大学文学部ベンガル語ベンガル文学ディプロマ課程修了（1978）、キャンベラ大学教育学部グラジュエートディプロマ課程（TESOL）修了（1989）、オーストラリア国立大学文学部博士課程修了（1994）

【職歴】

オーストラリア国立大学言語類型論研究センター助手（1995）、名桜大学国際学部助教授（1997）、名桜大学国際学部教授（1998）、オーストラリア国立大学太平洋アジア研究所客員研究員（2003）、マックスプランク研究所（進化人類学）客員研究員（2005）、総合地球環境学研究所上級研究員（2007）

【学位】

PhD (Linguistics) (オーストラリア国立大学 1995)、Graduate Diploma (TESOL) (キャンベラ大学 1989)

【専攻・バックグラウンド】

言語類型論、記述言語学

【所属学会】

オーストラリア言語学会、パプアニューギニア言語学会、沖縄言語研究センター

●主要業績

○その他の出版物

【報告書】

・大西正幸、児玉望、長田俊樹、高橋慶治 2008年11月 南アジアにおける4言語グループの分布と特徴. 長田俊樹編 環境変化とインダス文明 2007年度成果報告書. , pp.169-177.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・大西正幸 英語教育のコモンセンス. 沖縄言語研究センター第31回年次総会, 2008年07月05日-2008年07月06日, 琉球大学、沖縄県那覇市. (本人発表).
- ・大西正幸 言語地図のさまざまな可能性. 沖縄言語研究センター第31回年次総会, 2008年07月05日-2008年07月06日, 琉球大学、沖縄県那覇市. (本人発表).

○学会活動（運営など）

【企画・運営・オーガナイズ】

- ・インダスプロジェクト言語研究会, コンビナー (オーガナイズ). 2007年04月01日-2009年03月31日, 総合地球環境学研究所、京都市. 2か月に一度開催.
- ・言語記述研究会, コンビナー (オーガナイズ). 2007年04月01日-2009年03月31日, 総合地球環境学研究所、京都市. 毎月一度開催.

【組織運営】

- ・沖縄言語研究センター, 運営委員 (月例研究会および年次大会の企画、協力). 1999年07月-2009年03月.

奥宮 清人 (おくみや きよひと)

准教授

●1961年生まれ

【学歴】

高知医科大学医学部医学科卒（1986）

【職歴】

高知医科大学附属病院老年病科研修医（1986）、東京都老人医療センター、循環器科・医員（1988）、住友病院、神経内科・医員（1990）、滋賀医科大学第一解剖学教室研究従事者（1992）、高知医科大学附属病院老年病科助手（1992）、高知医科大学附属病院老年病科講師（2000）、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア大学医学部内科老年病学部門留学（2002-2003）、総合地球環境学研究所研究部助教授（2004）

【学位】

博士（医学）（高知医大1996）、医師免許証（医籍登録番号第299199号）（1986）

【専攻・バックグラウンド】

フィールド医学、老年医学、神経内科学

【所属学会】

日本老年医学会、日本神経学会、日本内科学会、日本高血圧学会

【受賞歴】

日本老年医学会・ノバルティス医学学術賞（2002）

●主要業績

○著書（執筆等）

【分担執筆】

- ・奥宮清人、石根昌幸、翠川裕、岩佐光広、松林公蔵. 2008年05月 第3章 生活と疾病—疾病転換と健康観の変化. 秋道智彌編 論集 モンスーンアジアの生態史—地域と地球をつなぐ— 第3巻 暮らしと身体の生態史. 弘文堂, pp. 47-64.

○論文

【原著】

- ・Kimura Y, Wada T, Ishine M, Ishimoto Y, Kasahara Y, Hirosaki M, Konno A, Nakatsuka M, Sakamoto R, Okumiya K, Otsuka K, Matsubayashi K. Mar, 2009 Community-dwelling elderly with chewing difficulties are more disabled, depressed and have lower quality of life scores. *Geriatr Gerontol Int* 9(1) :102-104. (査読付).
- ・Ishimoto Y, Wada T, Hirosaki M, Kasahara Y, Kimura Y, Konno A, Nakatsuka M, Ishine M, Okumiya K, Fujisawa M, Otsuka K, Matsubayashi K. Feb, 2009 Health-related differences between participants and nonparticipants in community-based geriatric examinations. *J Am Geriatr Soc* 57(2) :360-362. (査読付).
- ・大塚邦明, Tsering Norboo, 大塚敬子、津越智子、上田裕子、林航、石川元直、堀田典寛、奥宮清人. 2009年01月 生活環境の違いと血管機能：高知地域住民のCAVI. 折茂肇、斎藤康編 新しい動脈硬化指標CAVIのすべて—基礎から臨床応用まで—. 日経メディカル開発, 東京都港区, pp. 60-72.
- ・石根昌幸、奥宮清人、斎藤清明、笠原順子、松林公蔵. 2008年12月 中国雲南省の高所低所および日本の地域在住高齢者における総合機能評価. *登山医学 Japanese Journal of Mountain Medicine* 28 :27-33. (査読付).
- ・Wada T, Ishine M, Ishimoto Y, Hirosaki M, Kimura Y, Kasahara Y, Okumiya K, Nishinaga M, Otsuka K, Matsubayashi K. Aug, 2008 Community-dwelling elderly fallers in Japan are older, more disabled, and more depressed than nonfallers. *J Am Geriatr Soc* 56(8) :1570-1571. (査読付).
- ・Okumiya K, Ishine M, Wada T, Fujisawa M, Pongvongsa T, Siengsounthone L, Xyavong X, Boupba B, Matsubayashi K. Aug, 2008 Improvement in obesity and glucose tolerance in elderly people after lifestyle changes 1 year after an oral glucose tolerance test in a rural area in Lao People's

Democratic Republic. J Am Geriatr Soc 56(8) :1582-1583. (査読付) .

- Ishine M, Okumiya K, Kimura Y, Kasahara Y, Wada T, Yamanaka G, Hotta N, Otsuka K, Murakami S, Matsubayashi K. Aug,2008 Subjective sleep disturbances were closely associated with comprehensive geriatric functions in dose-responsive manner in the community-dwelling elderly people in Japan. J Am Geriatr Soc 56(8) :1571-1573. (査読付) .
- Okumiya K, Ishine M, Wada T, Fujisawa M, Otsuka K, Matsubayashi K. Apr,2008 Lifestyle changes after oral glucose tolerance test improve glucose intolerance in community-dwelling elderly people after 1 year. J Am Geriatr Soc 56(4) :767-769. (査読付) .

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- 奥宮清人 フィールド医学から地球環境学へ -老人知に着目して-. 地球研所内ゼミナール、多様性領域プログラム、2008年06月24日、. (本人発表).
- 奥宮清人 ブドウ糖負荷試験後のライフスタイル変化による、地域在住高齢者の耐糖能異常の改善. 第50回日本老年医学会学術集会、2008年06月19日-2008年06月21日、千葉県千葉市. (本人発表).
- Kiyohito Okumiya. Disease and aging in high-altitude environments. International Symposium on Environment Change, Pathogens, and Human Linkages (Kawabata Project in RIHN), Jun 11,2008-Jun 12,2008, Kyoto city. (本人発表).
- 石根昌幸、奥宮清人、斉藤清明、笠原順子、松林公蔵. 中国雲南省の高所低所および日本の地域在住高齢者における総合機能評価. 第27回日本登山医学会学術集会、2008年05月31日-2008年06月01日、富山県黒部市.
- 奥宮清人、門司和彦 地球環境の変化と健康一人々のライフスタイルを変えるには. 第26回地球研市民セミナー、2008年05月16日、京都市. (本人発表).

【ポスター発表】

- Kiyohito Okumiya. The association of erythrocytosis with life-style related diseases and chronic respiratory diseases in high-altitude elderly people. 1st Congress of Asia-Pacific Society for Mountain Medicine, Nov 28,2008-Nov 30,2008, Delhi, India. (本人発表).

○学会活動（運営など）

【組織運営】

- 日本登山医学学会、評議員. 2007年.

○調査研究活動

【国内調査】

- 高知県土佐町在住高齢者の健康と包括的機能調査に関する縦断的コホート調査. 高知県土佐町、2008年08月06日.

【海外調査】

- 高所住民の健康と包括的機能調査に関する予備調査. インド、ラダック、2008年12月25日-2009年01月05日.
- 高齢者の健康と包括的機能調査に関する調査. 中国青海省海晏県、2008年08月14日-2008年08月31日.
- 高所住民の健康と包括的機能調査に関する予備調査と打ち合わせ. インド、ラダック、2008年07月24日-2008年08月03日.

○社会活動・所外活動

【他の研究機関から委嘱された委員など】

- 日本老年医学会、認定医（第96057号）. 1996年.
- 日本内科学会、認定内科医（第1233号）. 1992年.
- 日本神経学会、認定医（第1679号）. 1991年.

【依頼講演】

- 身体に刻み込まれた環境問題としての老い. 地球環境学講座「食と健康」から地球環境問題を考える」、2008年11月25日、京都市.

【メディア出演など】

- ・隠れ糖尿病に対する高知県土佐町での取り組み 生活ホットモーニング. NHK, 2008年04月02日.

長田 俊樹 (おさだ としき)

教授

●1954年生まれ

【学歴】

北海道大学文学部文学科卒（1981）、北海道大学大学院文学研究科言語学専攻修士課程修了（1984）、ランチャー大学部族地域言語学科博士課程修了（1990）

【職歴】

淑徳巣鴨高校非常勤講師（1991）、国際日本文化センター助手（1992）、京都造形芸術大学芸術学部教授（2001）、総合地球環境学研究所教授（2003）

【学位】

Ph. D.（ランチャー大学 1991）、文学修士（北海道大学 1984）

【専攻・バックグラウンド】

言語学、南アジア研究

【所属学会】

日本言語学会、日本南アジア学会

●主要業績

○著書（執筆等）

【分担執筆】

- ・ OSADA Toshiki May, 2008 Mundari. Gregory D. S. Anderson (ed.) The Munda Languages. Routledge Language Family Series, 3. Routledge, Abingdon (UK), pp.99-164.
- ・ OSADA Toshiki, Gregory D. S. Anderson, David Harrison May, 2008 Ho and the other Kherwarian languages. Gregory D. S. Anderson (ed.) The Munda Languages. Routledge Language Family Series, 3. Routledge, Abingdon (UK) , pp.195-255.

【翻訳・共訳】

- ・長田俊樹, 佐藤洋一郎 2008年06月 農耕起源の人類史. 地球研ライブラリー6. 京都大学学術出版会, 京都市左京区, 560pp. 原著: ピーター・ベルウッド著 First Farmers. Blackwell , オックスフォード(イギリス), 360pp.

○著書（編集等）

【編集・共編】

- ・長田俊樹, 上杉彰紀 (ed.) 2008 Occasional Paper 3: Linguistics, Archaeology and the Human Past. 総合地球環境学研究所, 京都市北区, 178pp.
- ・長田俊樹, 上杉彰紀 (ed.) 2008 Occasional Paper 4: Linguistics, Archaeology and the Human Past. 総合地球環境学研究所, 京都市北区, 137pp.
- ・長田俊樹, 上杉彰紀 (ed.) 2008 Occasional Paper 5: Linguistics, Archaeology and the Human Past.. 総合地球環境学研究所, 京都市北区, 109pp.
- ・長田俊樹, 上杉彰紀 (ed.) 2008 Occasional Paper 6: Linguistics, Archaeology and the Human Past. 総合地球環境学研究所, 京都市北区, 116pp.

○論文

【原著】

- ・ Vasant Shinde, Toshiki Osada, M.M. Sharma, Akinori Uesugi, Takao Uno, Hideaki Maemoku, Prabodh Shirvalkar, Shweta Sinha Deshpande, Amol Kulkarni, Amrita Sarkar, Anjana Reddy, Vinay Rao and Vivek Dangi 2008 Exploration in the Ghaggar Basin and excavations at Girawad, Farmana (Rohtak District) and Mitathal (Bhiwani District), Haryana, India. 長田俊樹・上杉彰紀 (ed.) Occasional Paper 3: Linguistics, Archaeology and the Human Past. 総合地球環境学研究所, 京都市北区, pp. 77-157.
- ・ Jeewan Singh Kharakwal, Y.S. Rawat, Toshiki Osada 2008 Preliminary observations on the excavation at Kanmer, Kachchh, India 2006-2007. 長田俊樹・上杉彰紀 (ed.) Occasional Paper 5: Linguistics, Archaeology and the Human Past. 総合地球環境学研究所, 京都市北区, pp. 5-24.
- ・ Vasant Shinde, Toshiki Osada, Akinori Uesugi, Manmohan Kumar 2008 A report on excavations at Farmana 2007-08. 長田俊樹・上杉彰紀 (ed.) Occasional Paper 6: Linguistics, Archaeology and the Human Past. 総合地球環境学研究所, 京都市北区, pp. 1-116.

○その他の出版物

【解説】

- ・ 長田俊樹 2008年06月 解説：言語学の立場から. 編 農耕起源の人類史. 地球研ライブラリー, 6. 京都大学学術出版会, 京都市左京区, pp. 451-463.

【その他の著作(新聞)】

- ・ 長田俊樹 インダス文明発掘記 (10). 聖教新聞, 2008年12月04日 朝刊.
- ・ 長田俊樹 インダス文明発掘記 (3). 聖教新聞, 2008年10月16日 朝刊.
- ・ 長田俊樹 インダス文明発掘記 (2). 聖教新聞, 2008年10月09日 朝刊.
- ・ 長田俊樹 インダス文明発掘記 (1). 聖教新聞, 2008年10月02日 朝刊.
- ・ 長田俊樹 イラン・ジーロフト遺跡—新たな文明の可能性. 北海道新聞, 2008年06月25日 夕刊.

【その他の著作(会報・ニュースレター等)】

- ・ 長田俊樹 2008年06月 文明・環境史の課題をインダス文明にみる. 地球研ニュースレター (14) :4-5.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・ OSADA Toshiki RIHN's Indus Project. Harvard Roundtable, May 07, 2008-May 08, 9228, Harvard University, Cambridge, USA. (本人発表).
- ・ 長田俊樹 Expressives in Mundari. 3rd International Austroasiatic Linguistic Conference, Nov 25, 2007-Nov 27, 9227, インド・プネー. (本人発表).

○社会活動・所外活動

【依頼講演】

- ・ 地球研インダスプロジェクトを語る. シルクロード友の会, 2008年09月06日, 奈良女子大学、奈良市.

勝山 正則 (かつやままさのり)

プロジェクト上級研究員

●1975年生まれ

【学歴】

京都大学農学部林学科卒業 (1997)、京都大学大学院農学研究科地域環境科学専攻修士課程修了 (1999)、京都大学大学院農学研究科博士後期課程地域環境科学専攻研究指導認定 (2002)

【職歴】

日本学術振興会特別研究員 (DC2) (2000)、日本学術振興会特別研究員 (PD) (2002)、総合地球環境学研究所技術補佐員 (2005)、総合地球環境学研究所プロジェクト上級研究員 (2006)、神戸大学発達科学部非常勤講師 (2008.4-9)

【学位】

修士 (農学) (京都大学1999)、博士 (農学) (京都大学2002)

【専攻・バックグラウンド】

森林水文学、林学

【所属学会】

日本森林学会、水文・水資源学会、日本水文学会、国際水文学会、アメリカ地球物理学連合

【受賞歴】

日本森林学会奨励賞 (2006)

●主要業績**○論文****【原著】**

- ・ Tokuchi, N., Fukushima, K. and Katsuyama, M. Oct,2008 Factors controlling stream water chemistry in ten small forested watersheds with plantation forests of various proportions and ages in central Japan. M. Taniguchi・Y. Fukushima・W.C. Burnett・M. Haigh・Y. Umezawa (ed.) From Headwaters to the Ocean: Hydrological Change and Watershed Management. Taylor & Francis, pp.75-81. (査読付) .
- ・ Fukushima, K., Tokuchi, N., Tateno, R. and Katsuyama, M. Oct,2008 Water yield and nitrogen loss during regrowth of Japanese cedar forests after clearcutting. M. Taniguchi・Y. Fukushima・W.C. Burnett・M. Haigh・Y. Umezawa (ed.) From Headwaters to the Ocean: Hydrological Change and Watershed Management. Taylor & Francis, pp.97-103. (査読付) .
- ・ Katsuyama, M., Fukushima, K. and Tokuchi, N. Oct,2008 Effects of various rainfall-runoff characteristics on streamwater stable isotope variations in forested headwaters. M. Taniguchi・Y. Fukushima・W.C. Burnett・M. Haigh・Y. Umezawa (ed.) From Headwaters to the Ocean: Hydrological Change and Watershed Management. Taylor & Francis, pp.51-55. (査読付) .

○会合等での研究発表**【口頭発表】**

- ・ Katsuyama, M., Fukushima, K. and Tokuchi, N. Effects of various rainfall-runoff characteristics on streamwater stable isotope variations in forested headwaters. HydroChange 2008, October 2008, Kyoto. (本人発表).
- ・ 吉岡崇仁, 松川太一, 栗山浩一, 勝山正則 森林伐採によって引き起こされる流域の環境変化に関する選択型実験. 環境科学会2008年年会, 2008年09月, サピアタワー, 東京.

【ポスター発表】

- ・ Katsuyama, M., Fukushima, K., Tokuchi, N, Ohte, N and Tani, M. Geological influences on hydrological and isotopic characteristics in forested headwaters. AGU Fall Meeting, December 2008, San Francisco. (本人発表).
- ・ Fukushima, K., Tokuchi, N., Tateno, R. and Katsuyama, M. Water yield and nitrogen loss during regrowth of Japanese cedar forests after clearcutting. HydroChange 2008, October 2008, Kyoto.
- ・ Tokuchi, N., Fukushima, K. and Katsuyama, M. Factors controlling stream water chemistry in ten small forested watersheds with plantation forests of various proportions and ages in central Japan. HydroChange 2008, October 2008, Kyoto.

- ・勝山正則, 大手信人, 福島慶太郎, 柴田英昭, 吉岡崇仁 アジアモンスーン地域における渓流水質予測モデルの適用と水文学的改良. 水文・水資源学会2008年研究発表会, 2008年08月, 東京大学. (本人発表).
- ・藤本雄大, 手計太一, 佐藤研一, 柴田英昭, 勝山正則 損失量を考慮したタンクモデルによる貯留能力の定量的検討. 水文・水資源学会2008年研究発表会, 2008年08月, 東京大学.
- ・Katsuyama, M., Nishimoto, S., Ohte, N. and Tani, M. Relationship between rainfall-runoff processes and mean residence times of stream and groundwater in weathered granite catchments. WPGM2008, July 2008, Cairns, Australia. (本人発表).

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- ・勝山正則 降雨流出プロセス研究は何を解決すべきか？そしてその為の手法は？. 日本森林学会テーマ別シンポジウム, 2009年03月, 京都大学.

○学会活動（運営など）

【企画・運営・オーガナイズ】

- ・日本森林学会イブニングセミナー「森林流域環境と人間社会のつながりの理解に向けて」, コーディネータ（研究集会統括）. 2009年03月, 京都大学.
- ・日本森林学会研究集会「森林水文ワークショップ」, 幹事（ワークショップの開催運営）. 2009年03月, 京都大学.
- ・HydroChange2008 in Kyoto, コンビーナ（Session2 統括）. 2008年10月, 京都市.

【組織運営】

- ・水文・水資源学会, 国際誌編集委員（Hydrological Research Letters誌 編集委員）. 2008年02月.

○調査研究活動

【国内調査】

- ・森林流域の水質・水文観測. 滋賀県大津市・桐生水文試験地, 2009年03月.
- ・森林流域の水質・水文観測. 滋賀県大津市・桐生水文試験地, 2009年02月.
- ・森林流域の水質・水文観測. 滋賀県大津市・桐生水文試験地, 2009年01月.
- ・森林流域の水質・水文観測. 滋賀県大津市・桐生水文試験地, 2008年12月.
- ・森林流域の水質・水文観測. 滋賀県大津市・桐生水文試験地, 2008年11月.
- ・森林流域の水質・水文観測. 和歌山県有田郡有田川町, 2008年11月.
- ・森林流域の水質・水文観測. 滋賀県大津市・桐生水文試験地, 2008年10月.
- ・森林流域の水質・水文観測. 滋賀県大津市・桐生水文試験地, 2008年09月.
- ・森林流域の水質・水文観測. 滋賀県大津市・桐生水文試験地, 2008年08月.
- ・森林流域の水質・水文観測. 滋賀県大津市・桐生水文試験地, 2008年07月.
- ・森林流域の水質・水文観測. 滋賀県大津市・桐生水文試験地, 2008年06月.
- ・森林流域の水質・水文観測. 滋賀県大津市・桐生水文試験地, 2008年05月.
- ・森林流域の水質・水文観測. 滋賀県大津市・桐生水文試験地, 2008年04月.

○外部資金の獲得

【科研費】

- ・森林流域の水質浄化に関わる生態系機能の解明と評価手法の確立に関する研究(研究分担者) 2008年04月01日-2010年03月31日. 基盤研究(B) (18380093).
- ・物理的根拠に基づく表層崩壊発生限界雨量の検討(研究分担者) 2007年04月01日-2010年03月31日. 基盤研究(B) (19380087).
- ・花崗岩および堆積岩山地の降雨流出過程の比較に基づく森林の水環境保全機能の評価(研究代表者) 2006年04月01日-2009年03月31日. 若手(B) (18780122).

○教育

【非常勤講師】

- ・同志社大学，理工学部，環境システム学概論2. 2008年11月-2008年11月.
- ・神戸大学，発達科学部，自然環境科学特論D. 2008年04月-2008年09月.

加藤 雄三 (かとう ゆうぞう)

助教

●1971年生まれ**【学歴】**

京都大学法学部卒業（1994）、京都大学大学院法学研究科修士課程（基礎法学専攻）修了（1996）、京都大学大学院法学研究科博士後期課程（基礎法学専攻）研究指導認定退学（2000）

【職歴】

日本学術振興会特別研究員（DC2）（1997）、京都大学大学院法学研究科助手（2000）、京都大学人文科学研究所講師（研究機関研究員）（2001）、総合地球環境学研究所研究部助手（2001）、総合地球環境学研究所研究部助教（2007）

【学位】

修士（法学）（京都大学1996）

【専攻・バックグラウンド】

法史学

【所属学会】

法制史学会、東洋法制史研究会

●主要業績**○著書（執筆等）****【分担執筆】**

- ・ヌルラン・ケンジェアフメト著，加藤雄三訳 2009年03月 スヤブ考古—唐代東西文化交流—。窪田順平・承志・井上充幸編 イリ河流域歴史地理論集—ユーラシア深奥部からの眺め。松香堂，京都市上京区，pp. 217-301.
- ・加藤雄三 2008年08月 南と北の「日本」をめぐる。木村武史編 千年持続学の構築。未来を拓く人文・社会科学，13。東信堂，東京都文京区，pp. 82-94.

○論文**【原著】**

- ・白石典之，相馬秀廣，加藤雄三，A. エンフトル 2009年03月 モンゴル国フンプレー遺跡群の調査とその意義—元代「孔古烈倉」の基礎的研究—。国立民族学博物館研究報告 33(4) :599-638. (査読付) .

○会合等での研究発表**【口頭発表】**

- ・加藤雄三 法院办事手続程式与民众诉讼常识—1930年代的官民诉讼观念—。檀国大学校法学研究所第17回国際学術大会「韓・中・日 法の近代化と民族精神」，Jun 20, 2008，中国青島市。（中国語）（本人発表）.

○教育**【非常勤講師】**

- ・三重大学，人文学部，法制史。2001年04月-2011年03月.

川瀬 大樹 (かわせ だいじゅ)

プロジェクト研究員

●1981年生まれ

【学歴】

京都大学農学部卒業（2003）、京都大学理学研究科植物学専攻修士課程修了（2005）、京都大学理学研究科植物学専攻博士課程修了（2008）

【学位】

理学博士（京都大学 2008）

【専攻・バックグラウンド】

植物系統学、集団遺伝学、特殊土壌植生学

【所属学会】

日本生態学会、日本植物分類学会、種生物学会、日本植物学会

●主要業績

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・ Kawase D, Yumoto T, Hayashi K, Sato K Phylogenetic analysis of the infraspecific taxa, *Erigeron thunbergii*, distributed in ultramafic rock sites Oral presentation. The Sixth International Conference on Serpentine Ecology, June 2008, Maine in USA. (本人発表).

川端 善一郎 (かわばた ぜんいちろう)

教授

●1946年生まれ

【学歴】

東北大学理学部生物学科卒業（1971）、東北大学大学院理学研究科修士課程修了（1973）、東北大学大学院理学研究科博士課程退学（1975）

【職歴】

東北大学理学部文部技官（1975）、東北大学理学部助手（1977）、愛媛大学農学部講師（1981）、愛媛大学農学部助教授（1983）、愛媛大学農学部教授（1996）、京大大学生態学研究センター教授（1998）、愛媛大学沿岸環境科学研究センター教授（併任）（1999）、総合地球環境学研究所教授（2005）

【学位】

理学博士（東北大学 1977）、理学修士（東北大学 1973）

【専攻・バックグラウンド】

微生物生態学、水域生態系生態学

【所属学会】

日本生態学会、日本微生物生態学会、日本陸水学会、日本水処理生物学会、環境バイオテクノロジー学会、日本水産学会、水環境学会、環境科学会、国際理論応用陸水学会、日本自然保護協会

【受賞歴】

平成12年度愛媛出版文化賞（共著）（2000）

●主要業績

○著書（執筆等）

【分担執筆】

- ・川端善一郎 2008年11月 エコトロン. 日本科学者会議編集編 環境事典. 旬報社, 東京, pp. 76.
- ・川端善一郎 2008年11月 食う食われる関係. 日本科学者会議編集編 環境事典. 旬報社, 東京, pp. 270.
- ・川端善一郎 2008年11月 カスケード効果. 日本科学者会議編集編 環境事典. 旬報社, 東京, pp. 162.
- ・川端善一郎 2008年11月 食物網. 日本科学者会議編集編 環境事典. 旬報社, 東京, pp. 513-514.
- ・川端善一郎 2008年11月 生食連鎖. 日本科学者会議編集編 環境事典. 旬報社, 東京, pp. 570.
- ・川端善一郎 2008年11月 メソコスム. 日本科学者会議編集編 環境事典. 旬報社, 東京, pp. 965.
- ・川端善一郎 2008年11月 ミクロコスム. 日本科学者会議編集編 環境事典. 旬報社, 東京, pp. 950.
- ・川端善一郎 2008年11月 生食者. 日本科学者会議編集編 環境事典. 旬報社, 東京, pp. 570.

○論文

【原著】

- ・Minamoto T., Honjo M. N., Uchii K., Yamanaka H., Suzuki A. A., Kohmatsu Y., Iida T. and Kawabata Z. Mar, 2009 Detection of cyprinid herpesvirus 3 DNA in river water during and after an outbreak.. *Vet. Microbiol.* 135(3-4) :261-266. DOI:DOI:10.1016/j.vetmic.2008.09.081.. (査読付) .
- ・Matsui, K., Honjo, M., Kohmatsu, Y., Uchii, K., Ryuji Yonekura, R. and Kawabata, Z. 2008 Detection and significance of koi herpesvirus (KHV) in freshwater environments.. *Freshwater Biology* 53 :1262-1272. (査読付) .

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・内井喜美子・米倉竜次・松井一彰・奥田昇・川端善一郎 新たな餌資源への適応を腸内細菌群集の変化から考える：移入種ブルーギルをモデルに．．日本生態学会，2009年03月19日，松山。
- ・山中裕樹・神松幸弘・源利文・本庄三恵・内井喜美子・鈴木新・川端善一郎 湖岸形態と水温分布：魚類への影響の考察．日本生態学会，2009年03月18日，盛岡。
- ・源利文・本庄三恵・川端善一郎 琵琶湖におけるコイヘルペスウイルスの分布と季節変化．日本生態学会，2009年03月18日，盛岡。
- ・内井喜美子・川端善一郎 外来病原微生物コイヘルペスウイルスの在来宿主個体群への定着機構．シンポジウム：侵入生態学-外来生物の定着段階を科学する 日本生態学会，2009年03月18日，盛岡。
- ・源利文・本庄三恵・川端善一郎 琵琶湖におけるコイヘルペスウイルスの分布と季節変化．第56回日本生態学会大会，2009年03月17日-2009年03月21日，岩手県岩手郡滝沢村、盛岡市。
- ・内井喜美子，川端善一郎 外来病原微生物コイヘルペスウイルスの在来宿主個体群への定着機構．日本生態学会第56回大会，2009年03月17日-2009年03月21日，盛岡市。
- ・内井喜美子，石原猛，浅野耕太，川端善一郎 コイヘルペスウイルスの侵入とコイ産業．日本陸水学会第73回大会，2008年10月10日-2008年10月13日，札幌市。
- ・本庄三恵・源利文・松井一彰・内井喜美子・山中裕樹・鈴木新・神松幸弘・飯田貴次・川端善一郎 環境水中に存在するコイヘルペスウイルスの定量．日本陸水学会第73回大会，2008年10月10日-2008年10月13日，札幌市。
- ・Tanaka, N., Itayama, T., Honjo, M., Minamoto, T., Kawabata, Z. Development of a Rapid Concentration System for Virus in Environmental water. 12th International Conference on Integrated Diffuse Pollution Management (IWA DIPCON 2008) , Aug 27, 2008, コンケン・タイ。
- ・Nobuyuki Tanaka, Tomoaki Itayama, Toshifumi Minamoto, Mie Honjo and Zen' ichiro Kawabata(Development

of a rapid concentration system for virus in environmental water. . 12th International Conference on Integrated Diffuse Pollution Management (IWA DIPCON 2008), Research Center for Environmental and Hazardous Substance Management (EHMS), Aug 25, 2008-Aug 29, 2008, タイ.

- Kawabata Z., Minamoto T., Honjo M. N., Uchii K., Yamanaka H., Suzuki A. A., Kohmatsu Y. KHV-carp-human linkages: a case study in Lake Biwa, Japan.. International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages, Jun 11, 2008-Jun 12, 2008, 京都. (本人発表).

【ポスター発表】

- 山中裕樹・神松幸弘・源利文・本庄三恵・内井喜美子・鈴木新・川端善一郎 湖岸形態と水温分布：魚類への影響の考察. 日本生態学会第56回全国大会, 2009年03月17日-2009年03月21日, 盛岡市.
- 松井一彰、本庄三恵、川端善一郎、内井喜美子 大腸菌における遺伝子水平伝播経路を指標にした淡水環境特性の評価. 第24回日本微生物生態学会, 2008年11月25日-2008年11月28日, 札幌.
- Minamoto, T., Honjo, N. M., Uchii, K., Yamanaka, H., Suzuki, A. A., Kohmatsu, Y., Kawabata, Z. Detection of koi herpesvirus DNA from natural river water. International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages , Jun 11, 2008, 京都.
- Itayama, T., Yanaka, N., Honjo, N. M., Minamoto, T., Kawabata, Z. Development of an on site rapid concentration system for virus in environmental water. International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages , Jun 11, 2008, 京都.
- Yamanaka, H., Sogabe, A., Kohmatsu, Y., Minamoto, T., Honjo, N. M., Uchii, K., Suzuki, A. A., Omori, K., Kawabata, Z. Relationship of lake morphometry and shore configuration to the temperature distribution in lagoons, and implications for its effect on fish health. International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages , Jun 11, 2008, 京都.
- Itayama, T., Tanaka, N., Honjo, N. M., Minamoto, T., Kawabata, Z. Development of an on site rapid concentration system for virus in environmental water. International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages, Jun 11, 2008, 京都.
- Honjo, N. M., Minamoto, T., Matsui, K., Uchii, K., Yamanaka, H., Suzuki, A. A., Kohmatsu, Y., Iida, T., Kawabata, Z. Quantification method of Koi herpesvirus (KHV) in environmental water using cation-coated filter method and external standard virus. International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages, Jun 11, 2008, 京都.

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- 川端善一郎 コイヘルペルウイルス感染症を事例とした病原生物と人間の相互作用環の解明. シンポジウム：生態学と持続可能性科学の新しい関係、日本生態学会, 2009年03月18日, 盛岡.

○学会活動（運営など）

【企画・運営・オーガナイズ】

- International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages , 主催（総合環境学研究所 プロジェクト 「病原生物と人間の相互作用環」 ）. 2008年06月11日-2008年06月13日, 京都.

○調査研究活動

【国内調査】

- 全国の一級河川における病原生物の生態調査 . 全国, 2008年07月-2008年08月.

【海外調査】

- 水質調査. 中国雲南省大理市アーハイ, 2009年02月23日-2009年03月03日.
- 岸辺環境改変調査（現地視察 川端・呉）. 浙江省 太湖, 中国, 2008年07月10日-2008年07月14日.

○社会活動・所外活動

【依頼講演】

- 環境疾患セミナー KHV-Carp-Human Linkages: case study in Lake Biwa, Japan.. 大阪大学大学院 薬学研究科 講義, 2008年10月29日, 吹田市 .

川本 温子 (かわもと はるこ)

プロジェクト研究員

●1974年生まれ**【学歴】**

北海道大学工学部(1997)、北海道大学大学院工学研究科(1999)

【職歴】

日本無線株式会社(1999)、総合地球環境学研究所(2007)

【学位】

工学修士(北海道大学 1999)

【専攻・バックグラウンド】

レーダ気象学、極低温物理学

【所属学会】

日本気象学会、日本大気電気学会

【受賞歴】

なし

●主要業績**○論文****【原著】**

- ・ Kawamoto, H. Yatagai, A. 2008 Quality check of a gauge-based daily precipitation dataset: Using maximum rain rate given in the standard product 2A25 of TRMM/PR. Guy Delrieu (ed.) WRAH2008. pp.2-18. Weather Radar and Hydrology2008のExtended Abstracts のCDとして配布。.

【総説】

- ・ Yatagai, A., and H. Kawamoto 2008 Quantitative estimation of orographic precipitation over the Himalayas by using TRMM/PR and a dense network of rain gauges. Proc. SPIE 7148(11). DOI:10.1117/12.811943. (査読付) .

○その他の出版物**【報告書】**

- ・ 谷田貝亜紀代 他 2008年 B062 アジアの水資源への温暖化影響評価のための日降水量グリッドデータの作成. 環境省地球環境局総務課研究調査室編 地球環境研究総合推進費 平成19年度研究成果. B062 アジアの水資源への温暖化影響評価のための日降水量グリッドデータの作成, 地球環境研究総合推進費 (B062), pp.107-138.

○会合等での研究発表**【口頭発表】**

- ・ 上口賢治、荒川理、谷田貝亜紀代、川本温子、野津雅人、鬼頭昭雄 日本における高解像度日降水量グリッドデータ (APHRO_JP) の作成について. 日本気象学会2008年度秋季大会, Nov 19, 2008-Nov 21, 2008, 仙台.
- ・ Kawamoto, H. , A.Yatagai, K.Kamiguchi, O.Arakawa and Masato I. Nodzu Comparison of daily precipitation using gauge-based data and estimated rain rate from 2A25 of TRMM/PR within 31.5 - 36.0°N, Asia. International Symposium of IAHS-PUB and the 2nd International Symposium of China-PUB, IAHS-PUB-CHINA 2008, Nov 07, 2008-Nov 09, 2008, 成都. (本人発表).
- ・ Kamiguchi, K., A.Yatagai, O.Arakawa, H. Kawamoto, Masato I. Nodzu and A. Kitoh Introduction of APHRO_EA, High-Resolution Daily Precipitation Data in East Asia. International Symposium of IAHS-PUB and the 2nd International Symposium of China-PUB, IAHS-PUB-CHINA 2008, Nov 07, 2008-Nov 09, 2008, 成都.

【ポスター発表】

- Kamiguchi, K., A. Yatagai, O. Arakawa, H. Kawamoto, M. I. Nodzu, and A. Kitoh, Precipitation Characteristics of APHRO_PR, High-Resolution Daily Precipitation Data.. AGU 2008 Fall Meeting, Dec 15, 2008-Dec 19, 2008, San Francisco.
- 川本温子、谷田貝亜紀代 北緯35° 付近における雨量計0.05° グリッドとTRMM(2A25)の日降水量. 日本気象学会2008年度秋季大会, 2008年11月19日-2008年11月21日, 仙台. (本人発表).
- Yatagai, A., H. Kawamoto, M. I. Nodzu, T. Watanabe, J. Kubota, A. Kitoh, K. Kamiguchi, O. Arakawa, and S. Kanae Asian Precipitation-Highly-Resolved Observational Data Integration Towards Evaluation of the Water Resources (APHRODITE's Water Resources). Conference of APHW in Beijing, 2008, Nov 03, 2008-Nov 06, 2008, 北京.
- Takashima, H., A. Yatagai, H. Kawamoto, O. Arakawa and K. Kamiguchi Hydrological balance over northern Eurasia from gauge-based high-resolution daily precipitation data. Hydrochange 2008 in Kyoto, Oct 01, 2008-Oct 03, 2008, 京都.
- 川本温子. 谷田貝亜紀代. 高島久洋. 上口賢治. 荒川理 雨量計に基づいた高分解能グリッド日降水データの作成—APHROデータセット(0.25および0.5度水平分解能)—. 日本気象学会2008年度春季大会, 2008年05月18日-2008年05月21日, 横浜. (本人発表).
- 高島久洋. 谷田貝亜紀代. 川本温子. 荒川理. 上口賢治 北ユーラシア域における雨量計ベース日降水量格子点データ作成. 日本気象学会2008年度春季大会, 2008年05月18日-2008年05月21日, 横浜.

岸本 圭子 (きしもと けいこ)

プロジェクト研究員

●主要業績

○論文

【原著】

- K. Kishimoto-Yamada, T. Itioka (2008) Biotropica 40:600-606 2008 Survival of Flower-visiting Chrysomelids during Non General-flowering Periods in Bornean Dipterocarp Forests.. Biotropica 40 :600-606. DOI:10.1111/j.1744-7429.2008.00410.x. (査読付).
- K. Kishimoto-Yamada, T. Itioka 2008 Consequences of a severe drought associated with an El Niño-Southern Oscillation on a light-attracted leaf-beetle (Coleoptera, Chrysomelidae) assemblage in Borneo.. Journal of Tropical Ecology 24 :229-233. DOI:10.1017/S0266467408004811. (査読付).

木下 鉄矢 (きのした てつや)

教授

●1950年生まれ

【学歴】

京都大学文学部卒業 (1974)、京都大学大学院文学研究科修士課程修了 (1976)、京都大学大学院文学研究科博士課程単位修得 (1979)

【職歴】

京都大学文学部助手 (1979)、岡山大学文学部講師 (1981)、岡山大学文学部助教授 (1984)、岡山大学文学部教授

(2001)、総合地球環境学研究所教授(2003)、総合地球環境学研究所特別客員教授(2009.10)

【学位】

修士(文学)(京都大学 1976)

【専攻・バックグラウンド】

中国思想史

【所属学会】

日本中国学会、東方学会、東洋史研究会、中国社会文化学会

●主要業績

○著書(執筆等)

【単著・共著】

- ・木下鉄矢 2009年01月 朱子——〈はたらき〉と〈つとめ〉の哲学. 書物誕生——あたらしい古典入門. 岩波書店, 東京都千代田区, 191pp.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・木下鉄矢 自然と人為——中国の歴史から. (社)土木学会 第16回 地球環境シンポジウム, 2008年08月30日, 岡山県岡山市. (本人発表).

金 憲淑 (きむ ほんしゆく)

プロジェクト研究員

●1980年生まれ

【学歴】

釜山大学自然科学部大気科学科卒業(2002)、釜山大学大気科学研究科大気科学専攻修士課程修了(2004)、名古屋大学環境学研究科地球環境科学学専攻博士課程修了(2007)

【職歴】

名古屋大学研究員(2007)、国立環境研究所NIES—ポスドク(2008)

【学位】

理学修士(釜山大学 2004)、理学博士(名古屋大学 2007)

【専攻・バックグラウンド】

大気環境科学

●主要業績

○論文

【原著】

- ・Kim, H.-S., Y. Nagata, and K. Kai Jan, 2009 Variation of the dust layer height in the north of the Taklimakan Desert observed on April 2002. Atmospheric Environment 43(3):557-567. (査読付).

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・Maksyutov, S., T. Michida, H.-S. Kim, P. Patra, M. Takigawa, O. Tarasova, and S. Houweling Trends and

seasonal cycle of the tropospheric methane observed and modeled over Siberia. 2008 AGU Fall Meeting, December 2008–December 2008, San Francisco, USA.

- Kai, K., Y. Nagata, H.-S. Kim, N. Tsunemastus, T. Matsumura, H. Shunjun, Z. Hongfei, M. Abo, and T. Nagai The structure of the dust layer over the Taklimakan Desert and the local circulation in the Tianshan Mountains and Tarim Basin. The Fifth International Workshop on Sand and Dust Storm (SDS) and its Impacts, May 2008–May 2008, Urumqi, China.

【ポスター発表】

- Kim, H.-S., G. Inoue, D. Belikov and S. Maksyutov Estimates of carbon sources and sinks using new NIES transport model. 2008 AGU Fall Meeting, December 2008–December 2008, San Francisco, USA. (本人発表).
- Kim, H.-S., G. Inoue, D. Belikov and S. Maksyutov Validation of seasonal CO₂ flux inversion using NIES transport model. 2008 Autumn Meeting of the MSJ, November 2008–November 2008, Sendai, Japan. (本人発表).
- Kim, H.-S., G. Inoue, D. Belikov and S. Maksyutov Validation of seasonal CH₄ flux inversion using NIES transport model. 2008 Meeting of Atmospheric Chemistry Discussion, October 2008–October 2008, Yokohama, Japan. (本人発表).
- Kim, H.-S., Y. Nagata, and K. Kai Variation of dust layer height in the Northern Taklimakan Desert in April 2002. 24th ILRC, July 2008–July 2008, Boulder, USA. (本人発表).

木村 栄美 (きむら えみ)

プロジェクト研究員

【学歴】

共立女子大学文芸学部卒業（1988）、京都造形芸術大学大学院修士課程芸術文化研究専攻修了（2002）、京都造形芸術大学大学院博士課程芸術専攻修了（2006）

【職歴】

京都造形芸術大学通信教育部非常勤講師（2003）、京都造形芸術大学歴史遺産学科非常勤講師（2006）、京都造形芸術大学歴史遺産研究センター研究員（2006）、京都造形芸術大学比較芸術学研究センター研究員（2007）、総合地球環境学研究所プロジェクト研究推進支援員（2007）、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2008）

【学位】

学術博士（京都造形芸術大学 2006）、学術修士（京都造形芸術大学 2002）

【専攻・バックグラウンド】

日本文化史、喫茶文化史

【所属学会】

茶の湯文化学会

●主要業績

○その他の出版物

【その他の著作(会報・ニュースレター等)】

- ・木村 栄美 2009年02月 唐代喫茶文化の担い手と日本への影響. 天地人 (5) :15 -15.

○会合等での研究発表

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- ・木村栄美 災害と「しのぎの技」. 地域セミナー, 2008年11月08日, 大阪府立弥生文化博物館 (大阪府和泉市).

木本 行俊 (きもと ゆきとし)

プロジェクト上級研究員

●1973年生まれ

【学歴】

京都大学総合人間学部卒（1999）、京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程修了（2001）、京都大学大学院理学研究科生物科学専攻博士課程修了（2004）

【職歴】

総合地球環境学研究所非常勤研究員（2004）、総合地球環境学研究所プロジェクト上級研究員（2006）

【学位】

博士（理学）（京都大学2004）、修士（人間・環境学）（京都大学2001）

【専攻・バックグラウンド】

植物分類学、植物形態学、植物解剖学

【所属学会】

日本植物学会、日本植物分類学会、米国植物学会

●主要業績

○論文

【原著】

- ・ [Yukitoshi Kimoto](#) and Hiroshi Tobe Oct, 2008 Embryology of Hortonioidae and Monimioideae (Monimiaceae, Laurales): characteristics of 'lower' monimioids. *Botanical Journal of the Linnean Society* 158 :228-241. DOI:10.1111/j.1095-8339.2008.00847.x. (査読付) .
- ・ [Kimoto Y.](#) and H. Tobe 2008 Embryology of Illigera and Sparattanthelium (Hernandiaceae, Laurales): a summary statement of characteristics and relationships.. *International Journal of Plant Sciences.* 169(3) :391-408. (査読付) .

○その他の出版物

【その他の著作(会報・ニュースレター等)】

- ・ 木本行俊 2009年02月 所員紹介-私の考える地球環境問題と未来: 西表島分室で住民とともに過ごす日々. 地球研ニュースレター 18号 :13-13.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・ 木本行俊・高相徳志郎 西表島におけるウミシヨウブ *Enhalus acoroides* (トチカガミ科)の開花フェノロジー. 日本植物分類学会第8回大会, 2009年03月12日-2009年03月15日, 仙台市東京エレクトロンホール宮城. (本人発表).

【ポスター発表】

- ・ 中川昌人・木本行俊・高相徳志郎 ウミシヨウブの種子構造: 水散布への適応メカニズムの解明. 日本植物分類学会第8回大会, 2009年03月12日-2009年03月15日, 仙台市東京エレクトロンホール宮城.

○調査研究活動

【国内調査】

- ・ ウミシヨウブのフェノロジー調査. 西表島, 2008年04月-2009年03月.
- ・ 砂浜埋立によるウミクサ藻場への影響調査. 西表島, 2008年04月-2008年05月.

○社会活動・所外活動

【その他】

・2008年08月01日 ウミシヨウブ観察会、竹富町祖納公民館・祖納北泊浜、西表島東部地区小中学生及び父兄対象

窪田 順平 (くぼた じゅんぺい)

准教授

●1957年生まれ

【学歴】

京都大学農学部林学科卒（1981）、京都大学大学院農学研究科林学専攻修士課程修了（1983）、京都大学大学院農学研究科林学専攻博士課程修了（1987）

【職歴】

京都大学農学部附属演習林助手（1987）、東京農工大学農学部助手（1989）、東京農工大学農学部助教授（1996）、総合地球環境学研究所研究部助教授（2002）、総合地球環境学研究所研究部准教授（2008）

【学位】

農学博士（京都大学 1987）、農学修士（京都大学 1983）

【専攻・バックグラウンド】

水文学、森林水文学、砂防学

【所属学会】

日本森林科学会、水文・水資源学会、砂防学会

●主要業績

○論文

【原著】

・窪田順平 2009年02月 地球環境問題としての乾燥・半乾燥地域の水問題－黒河流域における農業開発を例として、中尾正義・銭新・鄭躍軍編 中国の水環境問題－開発のもたらす水不足。勉誠出版，pp. 15-30.

○その他の出版物

【その他の著作(会報・ニュースレター等)】

・窪田順平 2008年 乾燥・半乾燥地域における人間活動が水資源・水循環に与えた影響－中国北西部・黒河流域を例として－. 沙漠誌ノート 5 :39-43.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

・窪田順平 偏在する水・土地・食料とグローバル化. 日本と中国における食と環境に関する国際シンポジウム，2008年11月，江蘇省農業科学院、中国・南京市。（日本語，中国語）（本人発表）.

【招待講演・特別講演、パネリスト】

・窪田順平 植生が水循環に果たす役割－森林と草原のちがいを. (財)阿蘇グリーンストック「阿蘇の地下水函養を考える」ミニシンポジウム，2008年11月，阿蘇市.

○学会活動（運営など）

【企画・運営・オーガナイズ】

・International workshop “Reconceptualizing Cultural and Environmental Change in Central Asia: An Historical Perspective on the Future”，主宰. 2009年02月01日-2009年02月02日，総合地球環境学研究所，京都市.

○調査研究活動

【海外調査】

- ・宜昌、三峡ダム等巡検. 中華人民共和国, 2009年03月.
- ・アルマトゥ周辺水文調査. カザフスタン共和国, 2008年09月29日-2008年10月06日.
- ・アルマトゥ周辺遺跡調査. カザフスタン共和国, 2008年07月.
- ・アルマトゥ周辺水文調査. カザフスタン共和国, 2008年05月.

○社会活動・所外活動**【その他】**

- ・2009年02月 「中央ユーラシアの人と環境の関わりの歴史の変遷—環境問題としての乾燥・半乾燥地の水問題」 兵庫県阪神シニアカレッジ, 尼崎市中小企業センター, 尼崎市
- ・2008年06月 「シルクロード: 消えゆく水」 京都精華大学公開講座, 京都精華大学交流センター, 京都市

久米 崇 (くめ たかし)

プロジェクト上級研究員

●1973年生まれ**【学歴】**

岐阜大学農学部生物生産システム学科卒 (1998)、岐阜大学大学院農学研究科修士課程修了 (2000)、京都大学大学院農学研究科博士後期課程修了 (2003)

【学位】

農学博士 (京都大学 2004)、農学修士 (岐阜大学 2000)

【専攻・バックグラウンド】

土壌水文学

【所属学会】

農業土木学会、沙漠学会、日本ICID協会

●主要業績**○著書 (執筆等)****【単著・共著】**

- ・久米崇 2008年 白い大地が語るもの. 地球研叢書, 地球の処方箋, 環境問題の根源に迫る. 昭和堂, 京都市
- ・久米崇 2008年 モニタリングによる土壌の塩分評価. 乾燥地の土地劣化とその対策 (乾燥地科学シリーズ 3). 古今書院, 東京

○論文**【原著】**

- ・Takashi Kume, Takanori Nagano, Keisuke Hoshikawa, Tsugihiko Watanabe, Sevgi Donma, Erhan Akca, Musa Serdem, and Selim. Kapur 2008 Impact of Irrigation Water Use on the Groundwater Environment in Turkey. Ground Water Quality and Environment :29-38. (査読付).
- ・中尾千晶, 長野宇規, 久米崇, 赤江剛夫 2008年 乾燥地灌漑農地における水および塩分循環構造の解明と最適水量配分. 「水土の知」農業農村工学会誌 76(7) :49-51. (査読付).

○会合等での研究発表**【口頭発表】**

- ・久米崇, 長野宇規, 星川圭介, 藤原洋一, 中野孝教, 渡邊紹裕 安定同位体を用いた灌漑農地の環境評価. 平

成20年度農業農村工学会大会講演会，2008年08月，秋田市。（本人発表）。

- ・中尾千晶，赤江剛夫，長野宇規，久米崇 水素，酸素安定同位体比測定による乾燥地灌漑農地の水・塩分の動態分析。平成20年度農業農村工学会大会講演会，2008年08月，秋田市。

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- ・Takashi Kume Impact of climate changes on wheat yield of semi-arid region and rice cropping in Japan. PAWEES 2008 7th Conference and Annual Meeting, October 2008, Taipei, Taiwan.

○教育

【非常勤講師】

- ・同志社大学，工学部環境システム学科，環境システム学概論Ⅰ。2008年06月。

鞍田 崇（くらた たかし）

プロジェクト上級研究員

●1970年生まれ

【学歴】

京都大学文学部哲学科卒業（1994）、京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程修了（1997）、京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程単位取得退学（2000）

【職歴】

日本学術振興会特別研究員DC2（1999）、日本学術振興会特別研究員PD（2001）、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2006）、総合地球環境学研究所プロジェクト上級研究員（2009）

【学位】

博士（人間・環境学）（京都大学 2001）、修士（人間・環境学）（京都大学 1997）、学士（文学）（京都大学 1994）

【専攻・バックグラウンド】

哲学、環境思想

●主要業績

○著書（執筆等）

【分担執筆】

- ・鞍田崇 2009年03月 「高山寺と明恵上人」。小川千恵、阿川佐和子編 『高山寺』。新版 古寺巡礼京都，32。淡交社，京都市北区，pp. 91-101.
- ・鞍田崇 2008年12月 「和辻哲郎と風土 — 風土論の可能性を求めて」。佐藤洋一郎（監修）・鞍田崇（編）編 『ユーラシア農耕史1 モンスーン農耕圏の人びとと植物』。地球研ライブラリー，7-1。臨川書店，京都市左京区，pp. 208-221.

○著書（編集等）

【編集・共編】

- ・佐藤洋一郎（監修）・鞍田崇（編）編 2008年12月 『ユーラシア農耕史1 モンスーン農耕圏の人びとと植物』。地球研ライブラリー，7-1。臨川書店，京都市左京区，274pp.

○会合等での研究発表

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- ・鞍田崇 「里山・里海からSATOYAMA SATOUMIへ」。『第30回地球研・市民セミナー』，2009年01月23日，ハートビ

ア京都（京都市中京区）．＊パネルディスカッションの司会進行．

- ・鞍田崇 「生活の“かたち”-アートとエコロジーの対話のゆくえ」．『21世紀文化論』，2008年09月27日，多摩美術大学レクチャーホール（東京都八王子市）．

○学会活動（運営など）

【企画・運営・オーガナイズ】

- ・『第2回焼畑サミット in 鶴岡 焼畑と野焼きの文化—今、東北が熱い！—』（企画実務）．2008年11月15日，温海ふれあいセンター（山形県鶴岡市）．

○その他の成果物等

【企画・運営（展示など）】

- ・人と自然：環境思想セミナーvol. 18，（企画実務・司会進行）．2009年02月09日，総合地球環境学研究所（京都市北区）．テーマ：「神遊（かんあそひ）の庭（ゆにわ）：糺の森の原風景をもとめて」、講師：新木直人氏（賀茂御祖神社宮司）．
- ・人と自然：環境思想セミナーvol. 17，（企画実務・司会進行）．2008年12月22日，総合地球環境学研究所（京都市北区）．テーマ：「掌に握りしめた雪のように：折口信夫と近代のゆくえ」、講師：安藤礼二氏（多摩美術大学准教授）．
- ・人と自然：環境思想セミナーvol. 16，（企画実務・司会進行）．2008年11月20日，総合地球環境学研究所（京都市北区）．テーマ：「気配の痕跡：展示デザインと空間の記憶」、講師：木下史青氏（東京国立博物館デザイン企画室長）．
- ・人と自然：環境思想セミナーvol. 15，（企画実務・司会進行）．2008年10月01日，総合地球環境学研究所（京都市北区）．テーマ：「われわれは何を失ったのか：焼畑と日本の基層文化」、講師：姫田忠義氏（民族文化映像研究所所長）．
- ・人と自然：環境思想セミナーvol. 14，（企画実務・司会進行）．2008年09月08日，総合地球環境学研究所（京都市北区）．テーマ：「人間—この有限的なるもの：キリスト教における自然と原罪思想」、講師：中川明氏（カトリック垂水教会神父）．
- ・人と自然：環境思想セミナーvol. 13，（企画実務・司会進行）．2008年08月21日，総合地球環境学研究所（京都市北区）．テーマ：「千年の食卓：平安王朝における食材と料理」、講師：堀場弘之氏（料理人・京料理「六盛」主人）．
- ・吹田市立博物館平成20年度夏季展示 「千里の竹」公開シンポジウム「千里をかける竹」．，（企画実務）．2008年07月18日-2008年07月19日，吹田市立博物館（大阪府吹田市）．
- ・人と自然：環境思想セミナーvol. 12，（企画実務・司会進行）．2008年07月15日，総合地球環境学研究所（京都市北区）．テーマ「近き花、遠き花：「たてはな」と「なげいれ」に見る自然との関わり」、講師：川瀬敏郎氏（花人）．
- ・人と自然：環境思想セミナー vol. 11，（企画実務・司会進行）．2008年06月13日，総合地球環境学研究所（京都市北区）．テーマ「深き淵より—de profundis：やきものの現在と自然」、講師：十五代 樂吉左衛門氏（陶芸家・樂美術館館長）．
- ・人と自然：環境思想セミナー vol. 10，（企画実務・司会進行）．2008年05月23日，総合地球環境学研究所（京都市北区）．テーマ「沈黙する美学：アートとエコロジーの対話の試み」、講師：グレゴリー・レヴィン氏（カリフォルニア大学バークレー校准教授）．
- ・人と自然：環境思想セミナー vol. 9，（企画実務・司会進行）．2008年04月24日，総合地球環境学研究所（京都市北区）．テーマ「茶の湯とは何か—別なるライフスタイルへの問いかけ」、講師：熊倉功夫氏（国立民族学博物館名誉教授・林原美術館館長）．

○調査研究活動

【海外調査】

- ・スウェン・ヘディン写真資料の現状調査．ストックホルム（スウェーデン），2008年05月30日-2008年06月11日．

○教育

【非常勤講師】

- ・神戸大学, 大学院人間環境学科, 自然環境科学特論D. 2008年05月. *リレー講義のうちの1回.
- ・滋賀県立大学, 哲学概論A. 2008年04月-2010年03月.
- ・佛教大学, 文学部, 哲学、基礎ドイツ語. 2001年04月-2010年03月.

小泉 都 (こいずみ みやこ)

プロジェクト研究員

●1974年生まれ

【学歴】

京都大学理学部卒業 (1998)、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科一貫制博士課程指導認定退学 (2007)

【職歴】

龍谷大学非常勤講師 (2007)、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員 (2008)

【学位】

京都大学博士 (地域研究) (2007)

【専攻・バックグラウンド】

文化人類学 (民族生物学)

【所属学会】

日本文化人類学会、日本熱帯生態学会、日本生態人類学会、日本植物学会、日本植物分類学会

【受賞歴】

Student Paper Prize, 10th International Congress of Ethnobiology (International Society of Ethnobiology, 2006)

●主要業績

○著書 (執筆等)

【分担執筆】

- ・鮫島弘光・小泉都. 2008年 「ボルネオ熱帯雨林を利用するための知識と技：サゴ澱粉とオオミツバチの蜂蜜・蜂の子・蜜蝋採集」. 秋道智彌・市川昌広編 『東南アジアの森に何が起きているか：熱帯雨林とモンスーン林からの報告』. 人文書院, 京都, pp.127-149.
- ・百瀬邦泰・小泉都・嶋村鉄也・田中浩・畑田彩・森野真理・湯本貴和. 2008年 「生物多様性の下でどのような文化が育まれてきたのか?」. 畑田彩・市川昌広・中静透編 『生物多様性の未来に向けて』. 総合地球環境学研究所・昭和堂, 京都. 大学講義のためのパワーポイント教材

○その他の出版物

【報告書】

- ・Koizumi, Miyako 2008 Factors affecting wild resource use: Actual use of wild resources by the Penan Benalui of East Kalimantan. Ichikawa M, Yamashita S, Nakashizuka T (ed.) *Sustainability and biodiversity assessment on forest utilization options.* , pp.389-395. Kyoto: Research Institute for Humanity and Nature.
- ・Aihara, Yumi, Kuniyasu Momose, and Miyako Koizumi. 2008 Iban knowledge of birds in a habitat mosaic.. Ichikawa M, Yamashita S, Nakashizuka T (ed.) *Sustainability and biodiversity assessment on forest utilization options.* , pp.405-413. Kyoto: Research Institute for Humanity and Nature.

- ・ Kaga, Michi, Kuniyasu Momose, Masahiro Ichikawa, and Miyako Koizumi. 2008 Importance of a mosaic of vegetations to the Iban of Sarawak, Malaysia. Ichikawa M, Yamashita S, Nakashizuka T (ed.) *Sustainability and biodiversity assessment on forest utilization options.* , pp.394-404. Kyoto: Research Institute for Humanity and Nature.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・ 小泉都 「ボルネオの定住化した狩猟採集民と森林開発」. 日本熱帯生態学会第18回年次大会, 2008年06月21日-2008年06月22日, 東京大学. (本人発表).
- ・ 小泉都 「マレーシア、サラワク州の東プナンの民俗植物知識」. 日本文化人類学会第42回大会, 2008年05月31日-2008年06月01日, 京都大学. (本人発表).
- ・ Koizumi, Miyako. “How the Penan Benalui learn and understand diversity of plants”. The annual conference of the Association for Tropical Biology and Conservation Asia-Pacific chapter, Apr 23, 2008-Apr 26, 2008, Kuching. (本人発表).

○外部資金の獲得

【科研費】

- ・ ボルネオ島中央部における生態資源に関する民俗知識のネットワーク(研究代表者) 2008年09月-2012年03月. 基盤C (20519003).

○教育

【非常勤講師】

- ・ 龍谷大学, 生物と環境. 2008年04月-2008年09月.
- ・ 龍谷大学, 民族の自然誌. 2008年04月-2008年09月.

神松 幸弘 (こうまつ ゆきひろ)

助教

●1973年生まれ

【学歴】

立命館大学文学部地理学科卒 (1996)、京都大学大学院理学研究科生物科学専攻修士課程修了 (1998)、京都大学大学院理学研究科生物科学専攻博士後期課程終了 (2001)

【職歴】

京都大学生態学研究センター研修員 (2001)、総合地球環境学研究所技術補佐員 (2002)、総合地球環境学研究所研究推進センター助手 (2003)

【学位】

博士 (理学) (京都大学 2001)、修士 (理学) (京都大学 1998)

【専攻・バックグラウンド】

生態学、地理学

●主要業績

○論文

【原著】

- ・ Takahara T. et al. 2008年 Length-weight Relationships in Six Amphibian Species of Japan.. Current

Herpetology 27(1) :43-45. (査読付) .

- Sato M. et al. 2008 Population genetic differentiation in three sympatric damselfly species in a highly fragmented urban landscape (Zygoptera: Coenagrionidae). *Odonatologica* 37(2) :131-144. (査読付) .
- Takahara T. et al. 2008 Predator-avoidance behavior in anuran tadpoles: a new bioassay for characterization of water-soluble cues. *Hydrobiologia*. 607(1) :123-130. (査読付) .
- Takahara T. et al. 2008 Benefit of suites of defensive behavior induced by predator chemical cues on anuran tadpoles, *Hyla japonica*. *Behavioral Ecology and Sociobiology* 63(2) :235-240. (査読付) .

小林 菜花子 (こばやし なかこ)

プロジェクト研究員

●1976年生まれ

【学歴】

北海道大学理学部卒業(1999)、名古屋大学大学院理学研究科博士課程(前期課程)地球惑星理学専攻修了(2001)、名古屋大学大学院環境学研究科博士課程(後期課程)地球環境科学専攻入学修了(2007)

【学位】

理学博士(名古屋大学 2007)、理学修士(名古屋大学 2001)

【専攻・バックグラウンド】

気象学、植物生態学、環境学

●主要業績

○論文

【原著】

- Tanaka, H., T. Hiyama, N. Kobayashi, H. Yabuki, Y. Ishii, R. V. Desyatkin, T. C. Maximov, and T. Ohta Jun, 2008 Energy balance and its closure over a young larch forest in eastern Siberia. *Agricultural and Forest Meteorology* 148(12) :1954-1967. DOI:10.1016/j.agrformet.2008.05.006. (査読付) .

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- Kobayashi, N. Wildfire detection and the estimation of methane emission ratio and gas emission rates. GOSAT RA PI meeting, Nov 06, 2008-Nov 07, 2008, 虎ノ門パストラル (東京都港区虎ノ門4-1-1) . (本人発表).

蔡 国喜 (さい こくき)

プロジェクト研究員

●1970年生まれ

【学歴】

福建医科大学卒業(2003)、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科新興感染症病態制御学系専攻博士課程卒業(2007)

【職歴】

福建省寧徳市疾病管理センター医師(1993-2002)、長崎大学熱帯医学研究所研究員(2007)、総合地球環境学研究

所プロジェクト研究員（2008－）

【学位】

医学博士（長崎大学 2007）

【専攻・バックグラウンド】

国際保健学、公衆衛生学

【所属学会】

日本熱帯医学会

【受賞歴】

長崎県国際交流賞（2007）

●主要業績

○論文

【原著】

- ・ Zhang Z, Moji K, Cai GX, Ikemoto J, Kuroiwa C. 2008 Risk of sharps exposure among health science students in northeast China.. BioScience Trends. 2008 ;2((3)) :105-111. (査読付).

齋藤 清明 (さいとう きよあき)

教授

●1945年生まれ

【学歴】

京都大学農学部農林生物学科卒業（1969） 、京都大学教育学部卒業（1971）

【職歴】

毎日新聞社（1971～2003）＝社会部（大阪）記者、高松支局、京都支局、社会部、社会部兼科学部、社会部大阪版デスク、科学部副部長、科学環境部副部長、社会部編集委員、地方部編集委員、京都支局編集委員、地方部専門編集委員兼京都支局＝、総合地球環境学研究所教授（2004）

【専攻・バックグラウンド】

自然学 、ジャーナリズム

【所属学会】

国際ボランティア学会

●主要業績

○論文

【原著】

- ・ 齋藤清明 2008年 チベットを高地文明論としてとらえるために～「自然学」から「チベット文明」へ. ヒマラヤ学誌 9 :135-140.

○その他の出版物

【その他の著作(会報・ニュースレター等)】

- ・ 2008年 インタビュー「松園民博館長は語る 大学共同利用機関としての役割」. 論壇 人間文化 2 :204-213.

佐伯 田鶴 (さえき たづ)

助教

【学歴】

国際基督教大学教養学部理学科卒（1993）、東北大学大学院理学研究科地球物理学専攻博士課程前期2年の課程修了（1995）、東北大学大学院理学研究科地球物理学専攻博士課程後期3年の課程単位修得（1998）

【職歴】

東北大学大型計算機センター研究開発部助手（1998）、東北大学情報シナジーセンター研究開発部助手（2001）、総合地球環境学研究所研究部助手（2002）

【学位】

修士（理学）（東北大学1995）

【専攻・バックグラウンド】

大気物理学

【所属学会】

日本気象学会、AGU（アメリカ地球物理連合）

●主要業績

○その他の出版物

【報告書】

- ・ Tazu Saeki 2008 Global Monitoring on the Environmental Change - Meteorological observations in Southern Province of Zambia - . Chieko Umetsu (ed.) Vulnerability and Resilience of Social-Ecological Systems - FY2007 FRI Project Report. , pp.99-104.

○会合等での研究発表

【ポスター発表】

- ・ 佐伯田鶴、菅野洋光、宮寄英寿、真常仁志 ザンビア南部州における気象観測. 日本気象学会2008年度秋季大会, 2008年11月19日-2008年11月21日, 仙台市. (本人発表).

酒井 章子 (さかい しょうこ)

准教授

●1971年生まれ

【学歴】

京都大学理学部卒業（1994）、京都大学大学院理学研究科修士課程 終了（1996）、京都大学大学院理学研究科博士課程 終了（1999）、京都大学 理学博士（1999）

【職歴】

学術振興会特別研究員(DC2)（1997）、スミソニアン熱帯研究所(パナマ) PD研究員/学術振興会海外特別研究員（1999）、京都大学大学院人間・環境学研究科PD研究員/学術振興会特別研究員(PD)（2001）、筑波大学生物科学系講師（2003）、京大大学生態学研究センター助教授（2004）、京大大学生態学研究センター准教授（2007）、総合地球環境学研究所 准教授（2008）

【学位】

理学博士 (1999)

【専攻・バックグラウンド】

植物生態学、熱帯植物学

【所属学会】

日本生態学会、日本熱帯生態学会、Botanical Society of America、Association for Tropical Biology and Conservation (ATBC)

【受賞歴】

第5回 日本生態学会 宮地賞受賞 (2001)

●主要業績

○論文

【原著】

- Sakai, S., Nagamasu, H. Mar, 2009 Systematic studies of Bornean Zingiberaceae VI. Three new species of *Boesenbergia* (Zingiberaceae). *Acta Phytotaxonomica et Geobotanica* 60 :49-57. (査読付) .
- Ishida, C., Kono, M., Sakai, S. Feb, 2009 A new pollination system: brood-site pollination by flower bugs in *Macaranga* (Euphorbiaceae) . *Annals of Botany* 103 :39-44. (査読付) .
- Fukuda, D., Tisen, O. B., Momose, K., Sakai, S. Jan, 2009 Bat diversity in the vegetation mosaic around a lowland dipterocarp forest.. *Raffles Bulletin of Zoology* 57 :213-221. (査読付) .
- Ushimaru, A., Ishida, C., Sakai, S., Shibata, M, Tanaka, H., Niiyama, K. and Nakashizuka, T. Apr, 2008 The effects of human management on spatial distribution of two bumble bee species in a traditional agro-forestry Satoyama landscape. *Journal of Apicultural Research and Bee World* 47 :296-303. (査読付) .
- Ushimaru, A., Ishida, C., Sakai, S., Shibata, M, Tanaka, H., Niiyama, K. and Nakashizuka, T. 2008 The effects of human management on spatial distribution of two bumble bee species in a traditional agro-forestry Satoyama landscape.. *Journal of Apicultural Research and Bee World* 47 :296-303. (査読付) .
- Sakai, S., Wright, S. J. 2008 Reproductive ecology of 21 coexisting *Psychotria* species (Rubiaceae): When is heterostyly lost?. *Biological Journal of Linnean Society* 93 :124-134. (査読付) .

坂本 龍太 (さかもと りょうた)

プロジェクト研究員

●主要業績

○論文

【原著】

- Ohno A, Kato N, Sakamoto R, Kimura S, Yamaguchi K. Jul, 2008 Temperature-dependent parasitic relationship between *Legionella pneumophila* and a free-living amoeba (*Acanthamoeba castellanii*). *Appl Environ Microbiol* 74 :4585-4588. (査読付) .
- Satomura K, Iwanaga S, Noami M, Sakamoto R, Kusaka K, Nakahara T. Jul, 2008 The Framework Convention on Tobacco Control (FCTC) and Japanese anti-tobacco measures. *Tob Induc Dis* 4 :3. (査読付) .

○その他の出版物

【解説】

- ・坂本龍太ら 2008年12月 レジオネラ症の隠れた感染経路、自動車の運転や雨天は危険因子か？. 病原微生物検出情報 29 :331-332.

佐々木 尚子 (ささき なおこ)

プロジェクト研究員

【学歴】

愛媛大学農学部卒業 (1997)、愛媛大学大学院農学研究科生物資源科学専攻修士課程修了 (2001)、京都大学大学院農学研究科森林科学専攻博士後期課程研究指導認定退学 (2005)

【職歴】

総合地球環境学研究所技術補佐員 (2005)、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員 (2006)、オーストラリア国立大学客員研究員 (2009)

【学位】

博士 (農学) (京都大学2006)、修士 (農学) (愛媛大学2001)

【専攻・バックグラウンド】

植生史学、森林史、古生態学

【所属学会】

日本生態学会、日本植生史学会、日本花粉学会、American Quaternary Association

●主要業績**○会合等での研究発表****【口頭発表】**

- ・Sasaki, N., Nakano, N., Tamura, N. and Takahara, H. Late Holocene history of semi-natural grassland in south-western Japan based on pollen and charcoal records. 12th International Palynological Congress (IPC-XII 2008) and 8th International Organisation of Palaeobotany Conference (IOPC-VIII 2008), Aug 30, 2008-Sep 05, 2008, Bonn, Germany. (本人発表).

○学会活動 (運営など)**【企画・運営・オーガナイズ】**

- ・日本植生史学会第23回大会, 大会実行委員 (大会の準備・運営). 2008年11月15日-2008年11月16日, 福島県福島市.

【組織運営】

- ・日本植生史学会, 行事副委員長 (年次大会ならびに談話会の企画・運営). 2007年10月-2009年11月.

○調査研究活動**【国内調査】**

- ・阿蘇・くじゅう地域の草原形成と人間活動に関する調査. 大分県竹田市・熊本県阿蘇市, 2009年03月15日-2009年03月20日.
- ・阿蘇・くじゅう地域の草原形成と人間活動に関する調査. 熊本県阿蘇市, 2008年09月16日-2008年09月18日.
- ・完新世の植生変化と人為の影響に関する調査. 長野県下水内郡栄村, 2008年08月04日-2008年08月07日.
- ・完新世の植生変化と人為の影響に関する調査. 長野県下水内郡栄村, 2008年06月14日-2008年06月16日.

○外部資金の獲得

【科研費】

- ・西日本における植生と景観形成に及ぼした野火の影響(研究分担者) 2007年-2011年. 基盤研究 (B).

佐藤 洋一郎 (さとう よういちろう)

副所長・教授

●1952年生まれ**【学歴】**

京都大学農学部卒業 (1977)、京都大学大学院農学研究科修士課程修了 (1979)

【職歴】

高知大学農学部助手 (1981)、国立遺伝学研究所研究員 (1983)、静岡大学農学部助教授 (1994)、総合地球環境学研究所教授 (2004)、総合地球環境学研究所副所長兼任 (2008)

【学位】

博士 (農学) (京都大学1986)

【専攻・バックグラウンド】

植物遺伝学

【所属学会】

日本育種学会、日本遺伝学会、日本進化学会、日本文化財科学会、日本熱帯生態学会、生き物文化誌学会、日本DNA多型学会、植物地理・分類学会、日本森林学会

【受賞歴】

第9回松下幸之助 花と緑の博覧会記念奨励賞 (2001)、第7回NHK静岡放送局「あけぼの賞」 (2001)、第17回濱田青陵賞 (2004)

●主要業績**○著書 (執筆等)****【単著・共著】**

- ・ 2008年10月 日本列島に最初に「稲作」を持ち込んだのは縄文人だった！日本人のルーツがわかる本 (宝島文庫) 76-92. 宝島社
- ・ 2008年10月 イネの歴史. 京都大学学術出版会

【分担執筆】

- ・ 2009年03月 第1章 人と水の関係史. 地球研叢書 水と人の未来可能性ーしのびよる水危機. 昭和堂, pp. 1-35.

【翻訳・共訳】

- ・ 佐藤洋一郎 2009年01月 たね そだててみよう. 福音館書店, 原著: ヘレン J. ジョルダン ロレッタ クルピンス著 . .

○著書 (編集等)**【編集・共編】**

- ・ 編 2008年09月 米と魚. ドメス出版,

【監修】

- ・ 木村栄美編 (佐藤洋一郎監修) 2009年03月 ユーラシア農耕史2 日本人と米. 臨川書店,
- ・ 鞍田崇編 (佐藤洋一郎監修) 2009年01月 ユーラシア農耕史1 ユーラシア農耕史試論. 臨川書店,
- ・ ピーター・ベルウッド著 (長田俊樹・佐藤洋一郎 監訳監修) 2008年07月 農耕起源の人類史. .

○論文

【原著】

- ・佐藤洋一郎, 石川隆二 2009年03月 地球環境問題と育種の貢献—大114回秋季シンポジウム「東南アジアにおけるイネ育種の現場と地球環境変動下における今後のイネ育種課題」によせて. 育種学研究第11巻 11 :59-60.
- ・2009年01月 作物学からみた坪井洋文の世界. 季刊 東北学 第18号 2009年冬 :78-83.
- ・今井克則・千葉悠貴・田村優佳・竹谷敦子・村井正之・佐藤洋一郎・石川隆二 2008年12月 原著論文 イネ在来系統‘赤毛’から生じた新規変異体の遺伝解析. 育種学研究 10(4) :135-143.
- ・佐藤洋一郎 Dorian Q Ruller 2008年11月 Japonica rice carried to, not from, Southeast Asia. NATURE GENETICS Vol. 40 :1264.

○その他の出版物

【その他の著作(新聞)】

- ・時評「メタボ」の横行. 静岡新聞, 2009年03月04日 朝刊.
- ・時評「バーチャルな人間関係」. 静岡新聞, 2009年01月20日 朝刊.
- ・おコメの系譜・東西「多様な品種を未来に」. 産経新聞, 2008年12月24日 .
- ・おコメの系譜・東西「心なくしたブランド志向」. 産経新聞, 2008年12月10日 .
- ・時評「酒酔い運転防止」. 静岡新聞, 2008年11月27日 朝刊.
- ・おコメの系譜・東西「心変わり」恨む大唐米の逆襲」. 産経新聞, 2008年11月26日 .
- ・おコメの系譜・東西「飢饉の原因にも違いが」. 産経新聞, 2008年11月12日 .
- ・おコメの系譜・東西「「わせ」「おくて」の決め手」. 産経新聞, 2008年10月29日 .
- ・時評「砂漠化の脅威」. 静岡新聞, 2008年10月28日 朝刊.
- ・おコメの系譜・東西「「混ざり気」にもこだわりが」. 産経新聞, 2008年10月15日 .
- ・おコメの系譜・東西「多様なイネが1つの田に」. 産経新聞, 2008年10月01日 .
- ・おコメの系譜・東西「なぜ米を食用以外に使う?」. 産経新聞, 2008年09月17日 .
- ・おコメの系譜・東西「見飽きぬ在来種たち」. 産経新聞, 2008年09月03日 .
- ・時評「雨季のビエンチャン」. 静岡新聞, 2008年09月02日 朝刊.
- ・おコメの系譜・東西「多様な米、味わう文化を」. 産経新聞, 2008年08月13日 .
- ・おコメの系譜・東西「コシヒカリの親は東西の王者」. 産経新聞, 2008年07月30日 .
- ・おコメの系譜・東西「旅は品種改良の始まり」. 産経新聞, 2008年07月30日 .
- ・おコメの系譜・東西「東は「小・軟」、西は「大・硬」」. 産経新聞, 2008年07月16日 .
- ・時評「食べ残しが環境破壊」. 静岡新聞, 2008年07月16日 朝刊.
- ・粉好きの系譜「東のそば 西のうどん」. 産経新聞, 2008年06月18日 夕刊.
- ・粉好きの系譜「コムギは東へ、麺は西へ」. 産経新聞, 2008年06月04日 夕刊.
- ・時評「持続可能性」. 静岡新聞, 2008年05月29日 朝刊.
- ・粉好きの系譜「自然交配でパンコムギ誕生」. 産経新聞, 2008年05月21日 夕刊.
- ・粉好きの系譜「全粒粉が当たり前?」. 産経新聞, 2008年04月30日 夕刊.
- ・粉好きの系譜「粒の大きさに変わる舌触り」. 産経新聞, 2008年04月16日 夕刊.
- ・時評「山川草木悉皆成仏」. 静岡新聞, 2008年04月16日 朝刊.
- ・粉好きの系譜「今こそ国産コムギを」. 産経新聞, 2008年04月02日 夕刊.

【その他の著作(商業誌)】

- ・2009年01月 作物学からみた坪井洋文の世界. 季刊 東北学 (第18号 2009年冬).
- ・2008年04月 タイへ、イネを訪ねて四半世紀. 生き物文化誌 ビオストーリー 9 :90-91.

○会合等での研究発表

【ポスター発表】

- ・ 日本文化財科学会第25回大会 「イネと稲作の起源に関する最近の知見」. , 2008年06月14日-2008年06月15日, 鹿児島市.

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- ・ 第4回地球研地域セミナー 災害と「しのぎの技」. , 2008年11月08日, 和泉市.
- ・ 「地球温暖化」京都タウンミーティング — 「京都」から国連事務総長へのメッセージ. , 2008年06月29日, 京都市.
- ・ 「農耕起源の人類史」シンポジウム 「First Farmers: The origins of Agricultural Societies」翻訳出版を記念してピーター・ベルウッド教授. , 2008年06月23日, 京都市.
- ・ 山川草木の思想「地球環境問題の根源は農にある」. , 2008年06月21日, 京都市.
- ・ 麦の道. シンポジウム「シルクロードは麵ロード」, 2008年05月03日, 高松市.

○学会活動（運営など）

【企画・運営・オーガナイズ】

- ・ 臨川書店連続公開講座 ユーラシア農耕史 テーマ4さまざまな栽培植物と農耕の文化 シンポジウム「農業と環境」. 2009年03月14日, 京都市.
- ・ 第14回中国環境問題研究会. 2009年03月07日-2009年03月08日, 大分市.
- ・ 臨川書店連続公開講座 ユーラシア農耕史 テーマ4さまざまな栽培植物と農耕の文化 第10回シンポジウム「日本の南北と栽培植物」. 2009年02月21日, 京都市.
- ・ 臨川書店連続公開講座 ユーラシア農耕史 テーマ3砂漠・牧場の風土と農業 鼎談「さまざまなウリたち」. 2009年01月17日, 京都市.
- ・ 臨川書店連続公開講座 ユーラシア農耕史 テーマ3砂漠・牧場の風土と農業（鼎談 ムギという植物）. 2008年12月20日, 京都市.
- ・ 臨川書店連続公開講座 ユーラシア農耕史 テーマ3砂漠・牧場の風土と農業（シンポジウム コムギが生まれたころ）. 2008年11月22日, 京都市.
- ・ 第2回焼畑サミットin鶴岡. 2008年11月16日, 鶴岡市.
- ・ 臨川書店連続公開講座 ユーラシア農耕史 テーマ3砂漠・牧場の風土と農業（鼎談 シルクロードの農業）. 2008年10月25日.
- ・ 臨川書店連続公開講座 ユーラシア農耕史 テーマ2米と水 第5回鼎談「稲作と風土」. 2008年09月13日, 京都市.
- ・ 臨川書店連続公開講座 ユーラシア農耕史 テーマ2米と水. 2008年08月30日, 京都市.
- ・ 臨川書店連続公開講座 ユーラシア農耕史 テーマ1 モンスーン地帯における人と植物. 2008年07月12日, 京都市.
- ・ 臨川書店連続公開講座 ユーラシア農耕史 テーマ1 モンスーン地帯における人と植物. 2008年06月14日.
- ・ 臨川書店連続公開講座 ユーラシア農耕史 テーマ1 モンスーン地帯における人と植物. 2008年05月17日, 京都市.

○社会活動・所外活動

【他の研究機関から委嘱された委員など】

- ・ 農林水産省, 食料・農業・農村政策審議会統計部会臨時委員. 2007年.

【依頼講演】

- ・ 徳島県「普及活動効率化研修」. , 2009年03月16日, 徳島市.
- ・ 京都産業大学バイオフィオーラム2008秋 第7回「地球温暖化と植物育種」. , 2008年12月27日, 京都市.
- ・ アスニーセミナー「コムギ食と日本人」. , 2008年12月19日, 京都市.

- ・「吹田とビール」吹田市立博物館平成20年度秋季特別展「ビールが村にやってきた！」関連シンポジウム・講演会『風土と酒』. , 2008年11月29日, 吹田市.
- ・「植物燃料が地球を救うとき」. 大阪大学大学院工学研究科生命環境工学（住友電気工業）寄附講座, 2008年08月08日, .
- ・「賞味期限」の偽装. 静岡県認定手話通訳者現任研修会 , 2008年07月26日, .
- ・バイオ燃料と環境問題について. , 2008年07月25日, 静岡市.

【その他】

- ・2009年02月11日 ~2009/2/15 ATBCミーティング タイ・チェンマイ
- ・2009年02月04日 第13回 中国環境問題研究拠点研究会 司会 京都市
- ・2008年11月19日 「環境講座」食べて地球環境を守る～食料と環境～ 宇治市
- ・2008年11月01日 第3回中国環境問題シンポジウム 日本と中国における食と環境に関する国際シンポジウム 「日本における食料生産—ここ50年間の変遷」 中国南京市
- ・2008年09月10日 第11回中国環境問題研究拠点研究会 テーマ「食」-バイオエタノール 司会
- ・2008年08月28日 第2回文明環境史セミナー 石弘之 司会

承志 (Kicengge) (しょうし)

プロジェクト上級研究員

●1968年生まれ

【学歴】

中国新疆伊犁師範学院（中国語文学・満洲語専攻）卒（1990）、日本京都大学大学院文学研究科修士課程（歴史文化化学専攻東洋史学専修）修了（2000）、京都大学大学院文学研究科博士課程（歴史文化化学専攻東洋史学専修）単位修得（2003）

【職歴】

京都大学文学部・外国人共同研究者（2004）、総合地球環境学研究所 日本学術振興会外国人特別研究員（2005）、総合地球環境学研究所プロジェクト上級研究員（2007）

【学位】

博士（文学）（京都大学 2004）、修士（文学）（京都大学 2000）

【専攻・バックグラウンド】

東洋史学、大清帝国史、満洲語文献学

【所属学会】

東洋史学研究会、史学研究会、満族史研究会

●主要業績

○著書（執筆等）

【単著・共著】

- ・承志 2009年02月 ダイチン・グルンとその時代—帝国の形成と八旗社会—。名古屋大学出版会，〒464-0814 名古屋市千種区不老町1名古屋大学構，632p，カラー図版 [16] p：挿図。

○著書（編集等）

【編集・共編】

- ・窪田順平・承志・井上充幸編 2009年03月 イリ河流域歴史地理論集—ユーラシア深奥部からの眺め。松香堂，

602-8048 京都市上京区下立売小川西大路町146, 315pp. カラー図版9p.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・承志 満文《烏喇等處地方圖》考. 空間新思維－歴史輿圖學國際學術研討會, Nov 06, 2008-Nov 07, 2008, 臺北國立故宮博物院 . (中国語) (本人発表).

白岩 孝行 (しらいわ たかゆき)

准教授

●1964年生まれ

【学歴】

早稲田大学教育学部卒業 (1987)、北海道大学大学院環境科学研究科環境構造学専攻修士課程終了 (1989)、北海道大学大学院環境科学研究科環境構造学博士課程中退 (1990)

【職歴】

北海道大学低温科学研究所助手 (1990)、北海道大学低温科学研究所助教授 (2004)、総合地球環境学研究所助教授 (2005)

【学位】

博士 (環境科学) (北海道大学1993)、学術修士 (北海道大学1989)

【専攻・バックグラウンド】

自然地理学、雪氷学、総合地球環境学

【所属学会】

(社) 日本雪氷学会、(社) 日本地理学会、第四紀学会、日本地形学連合、国際雪氷学会

【受賞歴】

雪氷学会平田賞 (2000)

●主要業績

○論文

【原著】

- ・ Santibanez, P., Kohshima, S., Scheihing, R., Jaramillo, J., Shiraiwa, T., Matoba, S., Kanda, D., Labarca, P. and Casassa, G. 2008 Glacier mass balance interpreted from biological analysis of firn cores in the Chilean lake district. *Journal of Glaciology* 54(186) :452-462. (査読付) .
- ・ Kanamori, S., Benson, C.S., Truffer, M., Matoba, S., Solie, D.J., Shiraiwa, T. 2008 Seasonality of snow accumulation at Mount Wrangell, Alaska. *Journal of Glaciology* 54(185) :273-278. (査読付) .
- ・ Yamaguchi, S., Naruse, R., Shiraiwa, T. 2008 Climate reconstruction since the Little Ice Age by modelling Koryto glacier, Kamchatka Peninsula, Russia. *Journal of Glaciology* 54(184) :125-130. (査読付) .

【総説】

- ・ 中塚武、西岡純、白岩孝行 2008年 内陸と外洋の生態系の河川・陸棚・中層を介した物質輸送による結びつき. 月刊海洋 号外 50 :68-76. (査読付) .

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・佐々木央岳、的場澄人、白岩孝行 アラスカ・ランゲル山雪氷コア中の鉄濃度から推定した北部北太平洋への鉄の沈着量. 雪氷研究大会 2008 東京, 2008年09月24日-2008年09月27日, 東京都文京区 東京大学.

【ポスター発表】

- ・的場澄人、佐々木央岳、白岩孝行、Muravyev, Y.D. ロシア・カムチャツカ州・イチンスキー氷河コアの化学解析. 雪氷研究大会 2008 東京, 2008年09月24日-2008年09月27日, 東京都文京区 東京大学.
- ・白岩孝行、的場澄人、杉山慎、佐々木央岳、岡本祥子、福田武博、Solie, D.J., 吉川謙二、Benson, C.S. アラスカ山脈オーロラピークにおける雪氷コア掘削概報. 雪氷研究大会 2008 東京, 2008年09月24日-2008年09月27日, 東京都文京区 東京大学. (本人発表).
- ・福田武博、杉山慎、白岩孝行、的場澄人 2008年アラスカ・オーロラピークにおける氷河流動測定・氷厚探査. 雪氷研究大会 2008 東京, 2008年09月24日-2008年09月27日, 東京都文京区 東京大学.
- ・佐々木央岳、岡本祥子、白岩孝行、的場澄人、杉山慎、福田武博、Solie, D.J., 吉川謙二、Benson, C.S. アラスカ山脈オーロラピーク雪氷コアの現場解析. 雪氷研究大会 2008 東京, 2008年09月24日-2008年09月27日, 東京都文京区 東京大学.

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- ・白岩孝行 Amur River basin supporting primary production in the Oyashio region of the western subarctic Pacific Ocean - the "Giant" Fish-Breeding Forest Hypothesis. IGU-Commission on Hazard and Risk Japan Geographical Union Joint Int'l Symposium: Hazard and Benefit of a Northern River: The Amur River and the Impacts of Land Use Changes, Mar 28, 2009, 東京都八王子市 帝京大学.
- ・白岩孝行 “巨大” 魚付林の保全 ～アムール川とオホーツク海・親潮域のつながり～. 第4回 環オホーツク海国際シンポジウム, 2009年03月24日, 北海道札幌市 北海道大学.
- ・白岩孝行 鉄が結ぶ「巨大魚付林」、アムール・オホーツクシステム. オホーツク生態系保全 日露協力シンポジウム, 2009年03月08日, 北海道札幌市 札幌プリンスホテル.

○調査研究活動

【海外調査】

- ・アメリカ合衆国アラスカ山脈における山岳コア掘削. アメリカ合衆国アラスカ州, 2008年05月15日-2008年06月24日.

○外部資金の獲得

【科研費】

- ・氷コア解析に基づく北部北太平洋への陸起源物質降下量復元(研究代表者) 2007年-2009年. 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B)(1)).

○教育

【大学院教育・研究員などの受け入れ】

- ・(2008) 北海道大学大学院 環境科学院 地球圏科学専攻 兼任(修士課程)(1).

白木 洋平(しらき ようへい)

プロジェクト研究員

●1979年生まれ

【学歴】

立正大学大学院地球環境科学研究科環境システム学専攻修士課程修了(2005)、千葉大学大学院自然科学研究科地球生命圏科学専攻博士課程修了(2008)

【職歴】

東京大学大学院 工学系研究科 クールシティ推進事業研究プロジェクト研究員(2007)

【学位】

博士（理学）（千葉大学 2007）、修士（理学）（立正大学 2005）

【専攻・バックグラウンド】

環境動態学、地理情報学、リモートセンシング、都市熱環境

【所属学会】

日本写真測量学会、環境科学会

●主要業績**○論文****【原著】**

- ・平野勇二郎，一ノ瀬俊明，井村秀文，白木洋平 2009年03月 打ち水によるヒートアイランド緩和効果のシミュレーション評価. 水工学論文集 53 :307-312. (査読付).

○会合等での研究発表**【口頭発表】**

- ・白木 洋平 Climatological study of mitigation on thermal environment by a large restoration of inner-city river - A case of Cheong-Gye Stream in Seoul City -, 5th Japanese-German Meeting on Urban Climatology, November 2008, ドイツ. (本人発表).
- ・白木 洋平 Attempt to evaluate thermal environment in the area with a lack of urban spatial information database. 5th Japanese-German Meeting on Urban Climatology, November 2008, ドイツ. (本人発表).
- ・白木 洋平 ヒートアイランドが地下温度に与える影響評価. 日本地下水学会秋季講演会, 2008年11月, 福岡市. (本人発表).
- ・白木 洋平 都市内大規模河川（ソウル市清溪川）の復元による暑熱環境改善に関する気候学的研究. 環境科学会年会, 2008年09月, 東京. (本人発表).
- ・白木 洋平 降水現象に対する都市環境の効果. 日本地球惑星科学連合大会, 2008年05月, 千葉市. (本人発表).

【ポスター発表】

- ・白木 洋平 Effect of the heat island on subsurface temperature. 2008AGU fall meeting, December 2008, サンフランシスコ, アメリカ. (本人発表).
- ・白木 洋平 The effect of an urban environment on the precipitation. 5th Japanese-German Meeting on Urban Climatology, October 2008, ドイツ. (本人発表).
- ・白木 洋平 東京都心部に地下水散水を行った場合の気温低減効果. 環境科学会年会, 2008年09月, 東京. (本人発表).
- ・白木 洋平 都心における大規模緑地の暑熱緩和効果(風通しを中心として). 環境科学会年会, 2008年09月, 東京. (本人発表).
- ・白木 洋平 東京都心部に地下水散水を行った場合の気温低減効果. 環境科学会年会, 2008年09月, 東京. (本人発表).

鄭 躍軍 (じえん ゆえじえん)

准教授

●1962年生まれ**【学歴】**

内蒙古農業大学森林学部卒業（1984）、北京林業大学大学院森林資源与環境学研究科修士課程修了（1987）、東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了（1995）

【職歴】

北京林業大学森林資源与環境学院助手（1987）、北京林業大学森林資源与環境学院講師（1988）、統計数理研究所調査実験解析系助手（1995）、米国ニュー・ハンプシャー大学自然資源学部在外研究員（1998）、統計数理研究所領域統計研究系助手（1999）、総合研究大学院大学先導科学研究科助手併任（2001）、総合地球環境学研究所研究部助教授（2003）

【学位】

博士（農学）（東京大学 1995）、農学修士（北京林業大学 1987）

【専攻・バックグラウンド】

環境統計学、環境経済学、社会調査論

【所属学会】

日本行動計量学会、日本統計学会、環境経済・政策学会、日本森林計画学会、International Sociological Association、International Institute of Sociology

【受賞歴】

中国情報システム学会最優秀論文賞（1989）、国科学技術委員会科学技術進歩賞（1991）、「21世紀の科学技術展望」優秀論文賞（1999）、日本行動計量学会林知己夫賞（優秀賞）（2006）

●主要業績

○著書（執筆等）

【単著・共著】

- ・鄭躍軍 2008年 統計的社会調査一心を測る理論と方法一. 勉誠出版, 東京都, 323pp.
- ・鄭躍軍 2008年 地球環境問題への国際協調可能性の総合研究—環境意識研究方法論の構築—. 総合地球環境学研究所, 京都市, 627pp. 科研費（基盤研究B）研究成果報告書.

【分担執筆】

- ・鄭躍軍 2008年 伝統的価値観の社会的変遷. 篠塚英子・永瀬伸子編 アジアの少子化とエコノミーパネル調査からみた家族・仕事・家計の中国・韓国・日本比較一. 作品社, 東京, pp. 209-225.

○論文

【原著】

- ・鄭躍軍 2008 Cross-national comparison of environmental consciousness on construction of harmonious society in East Asia. Proc. of 3rd East Asian Symposium on Environmental and Natural Resource Economics :80-81.
- ・鄭躍軍 2008年 国家観の国際比較—東アジアの政治意識を中心に—. 第36回日本行動計量学会大会発表論文抄録集 :61-62.
- ・鄭躍軍 2008 規範意識と環境配慮行動—東アジア四都市環境意識調査を中心に—. 第36回日本行動計量学会大会発表論文抄録集 :269-270.

○教育

【非常勤講師】

- ・同志社大学, 文化情報学部, データサイエンス. 2007年.
- ・佛教大学, 社会学部, グローバル化論. 2007年.
- ・南山大学, 数理情報学部, 統計調査法. 2007年.
- ・同志社大学, 文化情報学部, データサイエンス. 2008年.

- ・ 佛教大学, 社会学部, グローバル化論. 2008年.
- ・ 南山大学, 数理情報学部. 2008年.
- ・ 明治大学, 経済学部. 2008年.

瀬尾 明弘 (せお あきひろ)

プロジェクト研究員

●1972年生まれ

【学歴】

鹿児島大学理学部卒業 (1996)、鹿児島大学大学院理学研究科生物学専攻修士課程修了 (1998)、京都大学大学院理学研究科生物科学専攻植物学系博士後期課程修了 (2002)

【職歴】

京都大学研修員 (2002)、京都大学大学院理学研究科COE研究員 (2002)、京都大学研修員 (2003)、京都大学大学院理学研究科、教務補佐員 (2003)、京都大学大学院理学研究科研究員 (COE) (2005)、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員 (2006)

【学位】

博士 (理学) (京都大学 2002)、修士 (理学) (鹿児島大学 1998)

【専攻・バックグラウンド】

植物分類学、植物地理学

【所属学会】

日本植物学会、日本植物分類学会、種生物学会

●主要業績

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・ 瀬尾明弘・青木京子・上野真義・津村義彦・村上哲明・湯本貴和 EST-SSR多型解析にもとづくタブノキとシイ類の共通する遺伝構造. 日本植物学会第72回大会, 2008年09月25日-2008年09月27日, 高知大学、高知市. (本人発表).
- ・ 岩崎貴也・青木京子・瀬尾明弘・村上哲明 クマシデやカマツカなど9種の日本産温帯林構成樹種にみられた遺伝構造の共通性について. 日本植物学会第72回大会, 2008年09月25日-2008年09月27日, 高知大学、高知市.

○調査研究活動

【国内調査】

- ・ 植物調査. 奄美大島, 2008年08月-2008年08月.
- ・ 植物調査. 島根県・山口県, 2008年07月-2008年07月.
- ・ 植物調査. トカラ列島口之島, 2008年07月-2008年07月.
- ・ 植物調査. 高知県, 2008年05月-2008年05月.

○社会活動・所外活動

【その他】

- ・ 2008年 同志社大学「環境システム学概論」ゲストスピーカー

関野 樹 (せきの たつき)

准教授

●1969年生まれ

【学歴】

信州大学理学部生物学科卒業（1991）、信州大学大学院理学研究科生物学専攻修了（1993）、京都大学大学院理学研究科動物学専攻修了（1998）

【職歴】

京都大学生態学研究センター講師（中核的研究機関研究員）（1999）、（財）国際湖沼環境委員会調査研究課研究員（2001）、総合地球環境学研究所研究推進センター助教授（2002）

【学位】

博士（理学）（京都大学 1998）、修士（理学）（信州大学 1993）

【専攻・バックグラウンド】

情報学、陸水学、生態学

【所属学会】

情報処理学会、日本陸水学会、日本生態学会

●主要業績

○著書（執筆等）

【分担執筆】

・関野 樹 2008年 動物プランクトンの日周鉛直移動：ミジンコが上ったり下がったり？. 清水 勇・大石 正編 リズム生態学. 東海大学出版会, 秦野市, pp. 25-46.

○論文

【原著】

- ・ Sekino T., M. Nakamura, T. Ballatore, V. Muhandiki 2008 Knowledge-Base System for Lake Basin Management. Proceedings of 12Th World Lake Conference :2263-2268.
- ・関野 樹 2008年 時間に基づいた情報解析ツール. アジア遊学 113 :140-148. (査読付).

○その他の出版物

【解説】

・関野 樹 2009年03月 「知の源泉」を構築するためのデータ共有化の仕掛け—情報学からのアプローチ. SEEDer 0 :34-38.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

・Sekino, T. Information analysis of various type of information based on temporal data. PNC 2008 Annual Conference in Conjunction with ECAI and JVGC, Dec 04, 2008-Dec 06, 2008, Ha Noi, Vietnam. (本人発表).

○学会活動（運営など）

【組織運営】

- ・日本陸水学会, 和文誌編集委員会 委員. 2007年04月-2010年03月.
- ・日本陸水学会, 将来計画検討委員会 委員. 2006年04月-2010年03月.
- ・日本生態学会, 野外安全管理委員会 委員. 2006年04月-2010年03月.

○外部資金の獲得

【科研費】

- ・医療地域情報学の確立：疾病構造に着目した計量的地域間比較研究(研究分担者) 2007年-2009年. 基盤研究 (A) (19201051).

【共同研究】

- ・HGISに関する研究(京都大学 地域研究統合情報センター) 2007年-2009年. 京都大学 地域研究統合情報センター 地域情報資源共有化プロジェクト「地域情報学の創出」.

○社会活動・所外活動**【共同研究員、所外客員など】**

- ・京都大学 地域研究統合情報センター, 客員准教授. 2007年04月-2009年03月.

【依頼講演】

- ・時空間解析ツール T2Map. 情報システム創成ワークショップ, 2008年04月, 大阪市大学, 大阪市.
- ・湖沼モニタリング計画法. 際協力事業団大阪国際センター (OSIC JICA) ・ (財) 国際湖沼環境委員会 (ILEC) 第12~19回湖沼水質保全コース, 2002年-2009年, 草津市.

ZEBALLOS VELARDE, Carlos Renzo (せばよす・べらるで・かるろす・れんぞ)

プロジェクト研究員

●1968年生まれ**【学歴】**

サンアグスティン大学建築・都市計画学部卒業 (1992)、サンアグスティン大学建築・都市計画学部プロフェッショナル・ディグリー取得 (1996)、サンアグスティン大学大学院 (ペルー) (San Agustin University, Arequipa, Peru) 修士課程都市計画専攻修了 (2001)、ラヌス大学大学院 (アルゼンチン) (Lanus University, Buenos Aires, Argentina) 修士課程維持可能な開発専攻修了 (2003)、京都大学大学院工学研究科博士後期課程 都市環境工学専攻修了 (2007)

【職歴】

ARQUICAD EIRL建築技師 (1996)、SENCICO指導員 (1997)、サンアグスティン大学准教授 (1999)、アレキパ・カソリック大学准教授 (2002)、総合地球環境学研究所研究支援推進員 (2006-2007)、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員 (2008)

【学位】

博士 (京都大学2007)

【専攻・バックグラウンド】

景観建築学、都市環境計画

【所属学会】

日本建築学会、日本工学会

【受賞歴】

ウィーゼ銀行建築研究賞 (1996)

●主要業績**○著書 (編集等)****【編集・共編】**

- ・UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; MAKIBAYASHI, Keisuke (ed.) Jan, 2009 Neolithisation

and Landscape: NEOMAP International Workshop. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, 174pp.

- ・ UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) Jan, 2009 NEOMAP Interim Report 2008. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, 260pp.

○論文

【原著】

- ・ ZEBALLOS, Carlos Jan, 2009 Changes in Landscape During the Modernization Period in Central Japan: A GIS Approach in the Case of Lake Biwa. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) NEOMAP Interim Report 2008. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp. 257-260.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・ ZEBALLOS VELARDE, Carlos; BORRÉ, Caroline Changes in Landscape During Modernization Period in Central Japan. A GIS Approach of the Case of Lake Biwa. “Landscape History and Landscape Heritage” Parallel Session C 4.2 at the Permanent European Conference for the Study of the Rural Landscape (PECSRL) 23rd Session - Landscapes, Identities and Developments, Sep 04, 2008, Óbidos, Portugal. (本人発表).

○調査研究活動

【国内調査】

- ・ 北陸地方の新石器化期に関する資料調査. 新潟県長岡市、十日町市、長野県茅野市, 2008年11月12日-2008年11月13日. (内山純蔵、GILLAM, Christopher、JORDAN, Peter、ZEBALLOS, Carlos、中村大).
- ・ 新石器化期に関する資料調査. 福井県若狭市、滋賀県長浜市, 2008年11月02日. (内山純蔵、GILLAM, Christopher、JORDAN, Peter、SEYOCK, Barbara、ZEBALLOS, Carlos、細谷葵、楨林啓介、中村大).
- ・ データベース構築およびスキャン技術に関する調査. 英国ノリッチ、ヨーク, 2008年09月28日-2008年10月29日.
- ・ GIS分析技術に関する調査. アメリカ合衆国カリフォルニア州レッドランズ, 2008年07月13日-2008年07月30日.

高相 徳志郎 (たかそう とくしろう)

教授

●1954年生まれ

【学歴】

静岡大学農学部卒業 (1976)、千葉大学理学研究科生物学専攻修士課程終了 (1978)、東京都立大学理学研究科生物学専攻博士課程単位取得退学 (1981)、アムステルダム大学留学生 (1984)

【職歴】

日本学術振興会奨励研究員 (1981)、日本学術振興会奨励研究員 (1985)、米国・ハーバード大学ポストドクトラルフェロー (1986)、米国・ハーバード大学ポストドクトラルフェロー (1988)、カナダ・ビクトリア大学ポストドクトラルフェロー (1990)、京都大学総合人間学部非常勤講師 (1996)、琉球大学熱帯生物圏研究センター教授 (1997)、総合地球環境学研究所教授 (2003)

【学位】

理学博士 (東京都立大学 1982)、理学修士 (千葉大学 1978)

【専攻・バックグラウンド】

植物形態学

【所属学会】

日本植物学会

●主要業績

○論文

【原著】

- ・Takaso, T and J.N. Owens. 2008 Significance of exine shedding in Cupressaceae-type pollen.. J. Plant Res. 121 :83-85.

○調査研究活動

【国内調査】

- ・西表島内滞在調査. 西表島, 2008年.

○社会活動・所外活動

【その他】

- ・2009年03月09日 沖縄西表の自然と文化 シンポジウム 国際文化交換協会支援
- ・2008年10月25日 世界の島々の自然と文化 外国人を含めた講演会
- ・2008年07月29日 ウミシヨウブ観察会 野外観察会

立本 成文 (旧姓 前田) (たちもと なりふみ)

所長

●1940年生まれ

【学歴】

京都大学文学部哲学科社会学専攻卒業 (1959)、京都大学大学院文学研究科社会学専攻修士課程修了 (1967)、シカゴ大学博士号 (人類学) 修得 (1974)

【職歴】

マラヤ大学日本学講座客員講師 (1967)、京都大学東南アジア研究センター研究員 (1969)、京都大学東南アジア研究センター助手 (1969)、京都大学東南アジア研究センター助教授 (1975、1979)、在インドネシア日本大使館一等書記官 (1977)、京都大学東南アジア研究センター教授 (1980)、京都大学東南アジア研究センター所長 (1998)、京都大学名誉教授 (2002)、中部大学国際関係学部学部長・教授および同大学大学院国際関係学研究科研究科長・教授 (2002)、中部大学大学院国際人間学研究科研究科長・教授 (2004)、総合地球環境学研究所所長 (2007-)

【学位】

人類学Ph.D (シカゴ大学 1974)、文学修士 (京都大学 1967)

【専攻・バックグラウンド】

地域研究 (東南アジア)、社会文化生態力学、社会学、文化人類学

【所属学会】

日本文化人類学会、American Anthropological Association (アメリカ人類学会)、東南アジア史学会、関西社会学会、オセアニア学会、熱帯生態学会、比較文明学会

【受賞歴】

紫綬褒章 (2003)、毎日新聞社第2回アジア・太平洋賞特別賞 (1990)、大同生命地域研究賞奨励賞 (1990)、アジア経済研究所研究奨励賞 (1970)

●主要業績

○その他の出版物

【その他の著作(新聞)】

- ・立本成文・山田啓二（京都府知事）・千和加子（武者小路千家家元夫人）鼎談「自然との共生を目指して一生か
せ京都の知恵と文化」．京都新聞，2009年02月10日 朝刊．
- ・立本成文 『現代のことば』 「春節」．京都新聞，2009年02月03日 夕刊．
- ・立本成文 『現代のことば』 「ケチともったいない」．京都新聞，2008年12月01日 夕刊．
- ・立本成文 『現代のことば』 「微笑みの国」．京都新聞，2008年09月25日 夕刊．
- ・立本成文 『現代のことば』 「山川草木の思想」．京都新聞，2008年07月24日 夕刊．
- ・立本成文 『現代のことば』 「国際化と世界化」．京都新聞，2008年05月14日 夕刊．

【その他の著作(商業誌)】

- ・立本成文 2008年07月 「所長インタビュー：地球環境問題の本質を文理融合のもとに学術的に解明する」．文部科
学教育通信 199 :4-9.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・TACHIMOTO, Narifumi Global Humanics of the Environment to tackle with global and local environmental
problems in Asia. EML Program International Center for Human Resource Development in Environmental
Management 1st Symposium, Mar 05, 2009, Inamori Hall in Shiran Kaikan, Kyoto University, Kyoto.
- ・立本成文 趣旨説明：マレーシア研究の回顧と展望 — 『マレー農村の研究』を中心に. シンポジウム「マレーシ
ア研究の回顧と展望—『マレー農村の研究』を中心に」（日本マレーシア研究会主催），2008年09月28日-2008年
09月29日，京都市.（本人発表）.

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- ・立本成文 Global Humanics of the Environment to tackle with global and local environmental problems in
Asia. 京都大学環境マネジメント人材育成国際拠点第1回シンポジウム，2009年03月05日，京都大学芝蘭会館稲盛
ホール、京都.
- ・立本成文・門川大作（京都市長）・小林隆彰（比叡山延暦寺長藹）・猪木武徳（日文研所長）・小松和彦（日文研
教授）地球環境問題と日本. 地球研市民セミナー（日文研合同フォーラム）「山川草木の思想—地球環境問題を
日本文化から考える—」，2008年06月21日，京都市.

○社会活動・所外活動

【他の研究機関から委嘱された委員など】

- ・日本学術振興会，グローバルCOEプログラム委員会委員．2007年12月-2010年11月．
- ・日本ユネスコ国内委員会，委員．2007年12月-2011年11月．
- ・日本放送協会，近畿地方放送番組審議会委員．2007年11月-2010年10月．
- ・日本学術振興会，科学研究費委員会委員．2007年11月-2010年11月．
- ・(財)地球環境産業技術研究機構，評議員．2007年06月-2011年06月．
- ・(財)アジア研究協会，理事長．2007年06月-2011年06月．
- ・(財)日経アジア賞，審査委員会委員．2007年04月-2010年05月．
- ・長崎大学熱帯医学研究所，運営委員会委員．2007年04月-2010年03月．
- ・北海道大学低温科学研究所，運営協議会委員．2007年04月-2011年03月．
- ・(財)大同生命国際文化基金，地域研究賞選考委員．2007年04月-2010年03月．
- ・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，運営諮問委員会委員．2007年04月-2010年03月．

【共同研究員、所外客員など】

- ・京都大学東南アジア研究所，研究協力者．2002年04月-2010年03月．

田中 克典 (たなか かつのり)

プロジェクト研究員

●1976年生まれ**【学歴】**

岡山大学農学部卒業（1999）、岡山大学大学院自然科学研究科博士前期課程修了（2002）、岡山大学大学院自然科学研究科博士後期課程単位修得済満期退学（2006）

【職歴】

総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2006）

【学位】

博士（農学）（岡山大学2006）、修士（農学）（岡山大学2002）

【専攻・バックグラウンド】

植物遺伝学、作物育種学

【所属学会】

日本育種学会、日本文化財科学会

●主要業績**○教育****【非常勤講師】**

・同志社大学，環境理工学部，環境システム概論．2007年11月．リレー授業．

谷口 真人 (たにぐち まこと)

教授

●1959年生まれ**【学歴】**

筑波大学第1学群自然科学類卒業（1982）、筑波大学大学院地球科学研究科修士課程修了（1984）、筑波大学大学院地球科学研究科博士課程終了（1987）

【職歴】

オーストラリア科学産業研究機構（CSIRO）水資源課研究員（1987）、筑波大学水理実験センター準研究員（1988）、奈良教育大学教育学部天文・地球物理学科助手（1990）、奈良教育大学教育学部助教授（1993）、奈良教育大学教育学部教授（2000）、総合地球環境学研究所研究部助教授（2003）

【学位】

理学博士（筑波大学1987）、理学修士（筑波大学1984）

【専攻・バックグラウンド】

水文学、地球物理学、地下水学、自然地理学

【所属学会】

American Geophysical Union、International Association of Hydrological Sciences、International Association of Hydrogeology、水文・水資源学会、日本水文科学会、日本地下水学会、日本陸水学会、応用地質学会、日本地理学会

【受賞歴】

日本地理学会研究奨励賞（1987）、日本陸水学会賞（吉村賞）（2006）

●主要業績

○論文

【原著】

- Taniguchi, M., Stieglits, T, and Ishitobi, T 2008 Temporal variability of SGD quality in Ubatuba coastal area. *Estuarine, Coastal and Shelf Science* 76 :484-492.
- Bokuniewicz, H., M. Taniguchi, T. Ishitobi, M. Charrette, M. Allen, E. Kontor 2008 Temporal seepage rate variability in Ubatuba coastal area associated with fractured crystalline rock aquifer. *Estuarine, Coastal and Shelf Science* 76 :466-472.
- Taniguchi, M., T. Ishitobi, J. Chen, S. Onodera, K. Miyaoka, W.C. Burnett, R. Peterson, G. Liu, and Y. Fukushima 2008 Submarine groundwater discharge from the Yellow River Delta to the Bohai Sea, China. *J. Geophys. Res* 113.
- Peterson, R., W.C. Burnett, M. Taniguchi, J. Chen, Santos, I.R., and Misra, S 2008 Determination of transport rate in the Yellow River-Bohai Sea mixing zone via natural geochemical tracers. *Continental Shelf Research* 28 :2700-2707 .
- W.C. Burnett, R. Peterson, M. Taniguchi, G. Wattayakorn, S. Chanyotha, F. Siringan 2008 Importance of groundwater discharge in developing urban centers of Southeast Asia. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y Fukushima, M. Haigh, Yu Umezawa (ed.) *From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management*. Taylor & Francis Group, pp.289-294. (査読付) .
- 谷口 真人、山本圭香 2008年 グローバル気候変動と新しい地下水資源量評価 その1-衛星GRACEを用いた陸水貯留量評価の可能性. *地下水学会誌* 50(4) :291-293.
- M.Taniguchi 2008年 Evaluations of submarine groundwater discharge and saltwater-freshwater interface by uses of automated seepage meters and resistivity measurements. *Nuclear and Isotopic Techniques for the Characterization of Submarine Groundwater Discharge in Coastal Zones IAEA* :169-184 .
- W.C. Burnett, P.K. Aggarwal, A. Aureli, H. Bokuniewicz, J.E. Cable, M.A. Charette, E. Kontar, S. Krupa, K.M. Kulkarni, A. Loveless, W.S. Moore, J.A. Oberdorfer, J. Oliveira, N. Ozyurt, P. Povinec, A.M.G. Privitera, R. Rajar, R.T. Ramessur, J. Scholten, T. Stieglitz, M. Taniguchi, J.V. Turner Chen 2008 Quantifying submarine groundwater discharge in the coastal zone via multiple methods. *Nuclear and Isotopic Techniques for the Characterization of Submarine Groundwater Discharge in Coastal Zones IAEA* :9-66 .
- N. Peterson, W.C. Burnett, I.R. Santos, M. Taniguchi, T. Ishitobi, J. Chen 2008 Bohai Sea coastal transport rates and their influence on coastline nutrient inputs. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y Fukushima, M. Haigh, Yu Umezawa (ed.) *From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management* . Taylor & Francis Group, pp.659-664. (査読付) .
- M. Saito, S. Onodera, K. Okada, M. Sawano, K. Miyaoka, M. Taniguchi 2008 Evaluation of denitrification potential in coastal groundwater using simple in situ injection experiment.. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y Fukushima, M. Haigh, Yu Umezawa (ed.) *From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management*. Taylor & Francis Group, pp.653-658. (査読付) .
- M. Taniguchi, T. Ishitobi, W. C. Burnett 2008 Global assessment of submarine groundwater discharge. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y Fukushima, M. Haigh, Yu Umezawa (ed.) *From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management* . Taylor & Francis Group, pp.613-51 613-617.
- M. Taniguchi, J. Shimada, Y. Fukuda, S. Onodera, M. Yamano, A. Yoshikoshi, S. Kaneko, Y. Umezawa, T. Ishitobi, K. Jago-on 2008 Degradation of subsurface environment in Asian coastal cities. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y Fukushima, M. Haigh, Yu Umezawa (ed.) *From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes*

- and Management. Taylor & Francis Group, pp.605-610. (査読付) .
- R. F. Lubis, A. Miyakoshi, M. Yamano, M. Taniguchi, Y. Sakura, R. Delinom 2008 Reconstructions of climate change and surface warming at Jakarta using borehole temperature data. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y Fukushima, M. Haigh, Yu Umezawa (ed.) From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management. Taylor & Francis Group, pp.541-545. (査読付) .
 - H. Hamamoto, M. Yamano, S. Kamioka , J. Nishijima, V. Monyrath, S. Goto, M. Taniguchi 2008 Estimation of the past ground surface temperature change from borehole temperature data in the Bangkok area. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y Fukushima, M. Haigh, Yu Umezawa (ed.) From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management . Taylor & Francis Group, pp.535-539. (査読付) .
 - T. Ishitobi, M. Taniguchi, Jianyao Chen, S. Onodera, K. Miyaoka, T. Tokunaga, Y. Fukushima 2008 Investigation of fresh and salt water distribution by resistivity method in Yellow River Delta. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y Fukushima, M. Haigh, Yu Umezawa (ed.) From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management. Taylor & Francis Group, pp.387-392. (査読付) .
 - K. Yamamoto, T. Hasegawa, Y. Fukuda, T. Nakaegawa, M. Taniguchi 2008 Improvement of JLG terrestrial water storage model using GRACE satellite gravity data. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y Fukushima, M. Haigh, Yu Umezawa (ed.) From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management . Taylor & Francis Group, pp.369-374.
 - K. Miyaoka, M. Taniguchi, T. Ishitobi, Y. Fukushima, S. Onodera, J. Chen, G. Liu 2008 Saline Groundwater flow in the Yellow River delta, China. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y Fukushima, M. Haigh, Yu Umezawa (ed.) From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management. Taylor & Francis Group, pp.307-312.
 - J. Chen, Y. Fukushima, M. Taniguchi 2008 Surface and groundwater interactions in the lower reach of the Yellow River. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y Fukushima, M. Haigh, Yu Umezawa (ed.) From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management. Taylor & Francis Group, pp.301-305. (査読付) .
 - T.Hosono, Y. Umezawa, S. Onodera, C-H. Wang, F. Siringan, S. Buapeng, R. Delinom, T. Nakano, M. Taniguchi 2008 Comparative study on water quality among Asian megacities based on major ion concentrations. M. Taniguchi, W.C. Burnett, Y Fukushima, M. Haigh, Yu Umezawa (ed.) From Headwater to the Ocean-Hydrological Changes and Management. Taylor & Francis Group, pp.295-300.
 - 谷口真人 2008年 地下水と地球環境. 海洋化学 21(2) :48-56.
 - Peterson, R., W.C. Burnett, M. Taniguchi, J. Chen, Santos, I.R., T. Ishitobi 2008 Radon and radium isotope assessment of submarine groundwater discharge in the Yellow River delta, China. J. Geophys. Res 113.
 - Taniguchi, M., W.C. Burnett, H. Dulaiova, F. Siringan, J. Foronda, G. Wattayakorn, S. Rungsupa, E. Kontor, and T. Ishitobi 2008 Groundwater discharge as an important land-sea pathway into Manila bay, Philippines. J. Coastal Res 2(1a) :15-24.
 - Stieglits, T, M. Taniguchi, and S. Neylon 2008 Spatial variability of submarine groundwater discharge in Ubatuba coastal area. Estuarine, Coastal and Shelf Science 76 :493-500.

○その他の出版物

【報告書】

- 谷口 真人 2008年 Human Impacts on Urban Subsurface Environment. Proc. RIHN PR2-4 International Symposium, Dec. 3-7, 2007. , .

【その他の著作(会報・ニュースレター等)】

- 谷口 真人 2008年 人工衛星で見る地下水. 連携研究「人と水」研究連絡誌 :2-5.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- 谷口 真人 Groundwater resources assessment under the pressures of humanity and climate changes. An

international Conference on Groundwater & Climate, 2008年06月24日, ウガンダ アフリカ.

【ポスター発表】

- ・谷口 真人 RIHNプロジェクト「都市の地下環境に残る人間活動の影響」. 外相会議, 2008年06月25日-2008年06月27日, 京都国際会館.

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- ・谷口 真人 Effects of submarine groundwater discharge on ecosystem in the coastal area of Yuza, Japan. AOGS2008, 2008年06月19日, 釜山 韓国.
- ・谷口 真人 Effects of human impacts on urban subsurface environment in Asia. AOGS2008, 2008年06月19日, 釜山 韓国.
- ・谷口 真人 Urban subsurface environment in Asian coastal megacities. KRIHS and RIHN joint international symposium on Urban Sustainability in Asia; Urban planning, environment and transportation, KRIHS, Seoul, Korea, 2008年06月12日, ソウル 韓国.
- ・谷口 真人 広島江田島における海底地下水湧出に伴う物質負荷と生態への影響評価. 日本地球惑星科学連合2008年合同大会, 2008年05月29日, 幕張メッセ、千葉市.
- ・谷口 真人 鳥海山麓遊佐町沿岸における物理探査法を用いた海底地下水湧出評価. 日本地球惑星科学連合2008年合同大会, 2008年05月27日, 幕張メッセ、千葉市.
- ・谷口 真人 循環と地球環境. 熊本大学生命環境科学プロジェクトゼミナール特別講演, 2008年05月21日, 熊本.

○外部資金の獲得

【科研費】

- ・最新測地観測手法の統合によるインドネシア3都市での地盤沈下の比較研究(研究分担者) 2008年-2010年. 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B)).
- ・閉鎖性海域における地層中の窒素動態に及ぼす地下水-海水混合作用の影響(研究分担者) 2008年-2010年. 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B)).

○社会活動・所外活動

【メディア出演など】

- ・スーパーイブニングニュース. フジテレビ, 2008年06月27日.

○報道等による成果の紹介

【報道機関による取材】

- ・『地下水から地球を見る』. 京都新聞, 2008年10月03日 朝刊.
- ・『考えて地域の水保全』. 愛媛新聞, 2008年09月17日 朝刊.
- ・水の週間『京都の地下水を考える』. 京都新聞, 2008年08月03日 「週刊Yes!」.
- ・イブニングニュース 「鳥海山沿岸海底地下水湧水」. NHK山形, 2008年04月30日.

辻 貴志 (つじ たかし)

プロジェクト研究員

●1973年生まれ

【学歴】

姫路獨協大学外国語学部日本語学科卒業(1996)、神戸学院大学大学院人間文化科学研究科人間行動論専攻修士課程修了(1999)、神戸学院大学大学院人間文化科学研究科人間行動論専攻博士課程修了(2007)

【職歴】

神戸学院大学大学院人間文化学研究科研究員（1998）、フィリピン国立博物館人類学部門客員研究員（2001）、フィリピン大学国際学研究所客員研究員（2005）、国立民族学博物館外来研究員（2007）

【学位】

人間文化学（神戸学院大学 1999）、人間文化学（神戸学院大学 2007）

【専攻・バックグラウンド】

生態人類学、民族生物学

【所属学会】

生態人類学会、日本熱帯生態学会、日本文化人類学会、人と生物との関係学会、日本オセアニア学会

●主要業績

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・辻貴志 「資源をめぐる政治学—フィリピン・パラワン島南部の開発と先住民、入植者、NGO」。日本NPO学会第11回年次大会【公募パネル】『コミュニティ再生に果たすNPO・NGO・ボランティアの役割』（モデレーター：澤山利広）、2009年03月21日、名古屋大学東山キャンパス（名古屋市）。（本人発表）。
- ・辻貴志 地域資源としてのウツボーフィリピン・マクタン島のウツボ釜漁を事例に。日本オセアニア学会第26回研究大会、2009年03月19日、ホテルニューツルタ（別府市）。（本人発表）。
- ・辻貴志 生業活動の通年データ収集のための非常駐型調査票システムの構築—ラオス南部での導入と課題。地球研第20回エコヘルス研究会、2009年02月27日、総合地球環境学研究所（京都市）。（本人発表）。
- ・Takashi TSUJI Fishing Activity and Life Style in Lahanam. First Seminar on Ecohealth Project 2009 under Health Development Project in Lahanam, Songkhone District, Savannakhet Province, Jan 15, 2009, National Institute of Public Health, Vientiane, Lao PDR.（本人発表）。
- ・矢島綾・友川幸・辻貴志 ラオスにおけるタイ肝吸虫感染に関する実用的な予防対策プログラムの開発—タイ肝吸虫メタセルカリア同定技術の習得を目的としたタイ・マヒドン大学での研修報告。地球研第16回エコヘルス研究会、2008年12月04日、総合地球環境学研究所（京都市）。
- ・Takashi TSUJI An Ecological and Anthropological Study of Subsistence Complex in Lao PDR: Possibility for Application for Research on Public Health. RIHN Kyoto Special Meeting on "Lao-Japan leadership on study on global environmental change and health in tropical Asia", Nov 28, 2008, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto.（本人発表）。
- ・辻貴志 生業が織り成す共存関係—フィリピン・パラワン島先住民の漁労活動を事例に。日本考古学協会2008年度大会『シンポジウムII 農耕社会の民族考古学』、2008年11月08日、南山大学（名古屋市）。（本人発表）。
- ・辻貴志 ラオス中南部のメコン川流域の農村地域における漁労活動とタイ肝吸虫症。第2回生態史研究会『東南アジアの淡水魚—水と人間をつなぐ』、2008年10月10日、総合地球環境学研究所（京都市）。（本人発表）。

【ポスター発表】

- ・Sixiong BISAYHER, Sachi TOMOKAWA, Aya YAJIMA, Takashi TSUJI, Jitra WAIKAGUL, Kazuhiro MOJI Development of evidence-based foodborne trematode control strategy in Lao PDR: Training on identification of metacercaria of *Opisthorchis viverrini* in Mahidol University. RIHN Kyoto Special Meeting on "Lao-Japan leadership on study on global environmental change and health in tropical Asia", Nov 28, 2008, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto.
- ・Takashi TSUJI An Ecological and Anthropological Study of Subsistence Complex in Lao PDR: Possibility of Application for Research on Public Health. RIHN Kyoto Special Meeting on "Lao-Japan leadership on study on global environmental change and health in tropical Asia", Nov 28, 2008, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto.（本人発表）。

○外部資金の獲得

【その他の競争的資金】

- ・フィリピン・潮間帯域におけるホシムシ類 (Sipunculoidea) の採捕と利用に関する人類学的研究 2005年. 平成17年度笹川科学研究助成.

○社会活動・所外活動

【他の研究機関から委嘱された委員など】

- ・天理大学地域文化研究センター, (国際参加プロジェクト (フィリピン) でのタガログ語指導). 2008年.
- ・天理大学地域文化研究センター, (国際参加プロジェクト (フィリピン) でのタガログ語指導). 2007年.

辻野 亮 (つじのりょう)

プロジェクト研究員

●1976年生まれ

【学歴】

大阪府立大手前高等学校卒業 (1995)、京都大学理学部入学 (1997)、同上卒業 (2001)、京都大学大学院理学研究科生物科学専攻植物学系修士課程入学 (2001)、同上修了 (2003)、京都大学大学院理学研究科生物科学専攻植物学系博士後期課程進学 (2003)、同上卒業 (2006)

【職歴】

日本学術振興会特別研究員 (DC2) (2005)、日本学術振興会特別研究員 (PD) (2006)、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員 (2007)

【学位】

博士 (理学) (京都大学2006)、修士 (理学) (京都大学2003)

【専攻・バックグラウンド】

植物生態学、哺乳類生態学

【所属学会】

日本生態学会、日本菌類学会、日本哺乳類学会

【受賞歴】

日本菌学会50周年記念大会ポスター奨励賞受賞 (2006年6月4日千葉市)

●主要業績

○著書 (執筆等)

【分担執筆】

- ・辻野亮・片山雅男・藤田昇 2008年 ハリミズゴケの復活. 深泥池七人会編集部会編 深泥池の自然と暮らし—生態系管理をめざして—. サンライズ出版, 滋賀県彦根市, p.165-165.
- ・辻野亮 2008年 深泥池に侵入するシカ. 深泥池七人会編集部会編 深泥池の自然と暮らし—生態系管理をめざして—. サンライズ出版, 滋賀県彦根市, p.177-177.
- ・Tsuji R, Agetsuma N, Agetsuma-Yanagihara Y 2008 Effects of sika deer and conifer plantations on the density and diversity of current-year tree seedlings in lowland forests on Yakushima Island, Jap. Masahiro Ichikawa, Satoshi Yamashita, Tohru Nakashizuka (ed.) Sustainability and Biodiversity Assessment on Forest Utilization Options, Research Institute for Humanity and Nature Project 2. Project 2-2, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, pp.147-151.
- ・Yamauchi T, Aiba S, Tsujino R, Yumoto T 2008 Changes in insect assemblages with conversion from old-growth evergreen broadleaf forests to Cryptomeria japonica plantations on Yakushima Island, Japan. Masahiro Ichikawa, Satoshi Yamashita, Tohru Nakashizuka (ed.) Sustainability and Biodiversity

Assessment on Forest Utilization Options, Research Institute for Humanity and Nature Project 2. Project 2-2, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, pp.152-158.

○論文

【原著】

- ・ Tsujino R, Yumoto T 2008 Seedling establishment of five evergreen tree species in relation to topography, sika deer (*Cervus nippon yakushimae*) and soil surface environments. *Journal of Plant Research* 121 :537-546. (査読付) .
- ・ Koda R, Noma N, Tsujino R, Umeki K, Fujita N 2008 Effects of sika deer (*Cervus nippon yakushimae*) population growth on saplings in an evergreen broad-leaved forest. *Forest Ecology and Management* 256 :431-437. (査読付) .

寺村 裕史 (てらむら ひろふみ)

プロジェクト研究員

●1977年生まれ

【学歴】

岡山大学文学部卒業 (2000)、岡山大学大学院文学研究科歴史文化学専攻修士課程修了 (2002)、岡山大学大学院文化科学研究科人間社会文化学専攻博士後期課程修了 (2005)

【職歴】

同志社大学文化情報学部実習助手 (2005)、京都ノートルダム女子大学人間文化学部非常勤講師 (2006)、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員 (2007)

【学位】

博士 (文学) (岡山大学 2005)、修士 (文学) (岡山大学 2002)

【専攻・バックグラウンド】

考古学、文化財科学、情報科学

【所属学会】

考古学研究会、日本情報考古学会、地理情報システム学会

【受賞歴】

日本情報考古学会 優秀賞 (2007)

●主要業績

○論文

【原著】

- ・ Teramura, H., Y. Kondo, T. Uno, A. Kanto, T. Kishida, and H. Sakai Oct, 2008 Archaeology with GIS in the Indus Project.. Osada, T. and A. Uesugi (ed.) *Linguistics, Archaeology and the Human Past.. Occasional Paper*, 5. RIHN, 京都市北区, pp.45-102.

○その他の出版物

【その他の著作(新聞)】

- ・ 寺村裕史 インダス文明発掘記9. 聖教新聞, 2008年11月27日 朝刊.
- ・ 寺村裕史 インダス文明発掘記8. 聖教新聞, 2008年11月20日 朝刊.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・寺村裕史 GISを用いた遺跡のデジタル測量と遺跡空間データベースの構築. 人文系データベース協議会 人文科学データベース「第14回 公開シンポジウム」, 2008年12月13日, 京都府京田辺市 同志社大学. (本人発表).
- ・鎌倉快之, 津村宏臣, 寺村裕史 LRFによる簡易測量とGISアーカイブの現状. 第13回 遺跡GIS研究会, 2008年11月21日, 奈良市佐紀町 平城宮跡資料館講堂 奈良文化財研究所.

【ポスター発表】

- ・津村宏臣, 鎌倉快之, 澤田砂織, 寺村裕史 文化財総合情報システムSTISの開発と応用ローカルナレッジとしての文化知の可視化と定量評価に向けて-. 日本文化財科学会第25回大会研究発表, 2008年06月14日-2008年06月15日, 鹿児島県鹿児島市.

東城 文柄 (とうじょう ぶんぺい)

プロジェクト研究員

●主要業績**○論文****【原著】**

- ・東城文柄 2009年02月 発展途上国における「地域住民による森林破壊」問題の再考ーバングラデシュ・モドゥプール丘陵の事例研究ー. アジア経済 50(2) :2-25. (査読付).

○会合等での研究発表**【口頭発表】**

- ・東城文柄 発展途上国における住民参加による二次林保全の重要性ーバングラデシュ・モドゥプール森林における焼畑林業の事例ー. 第120回日本森林学会大会プログラム, 2009年03月25日-2009年03月28日, 京都市、京都大学. (本人発表).
- ・東城文柄 バングラデッシュの住民運動が示したコミュニティ参加型森林保護の問題点. ワークショップ「アジアの森林保護政策・制度による人々の暮らしへの影響と対応」, 2008年12月26日-2008年12月27日, 京都市、総合地球環境学研究所. (本人発表).

○外部資金の獲得**【科研費】**

- ・ラオスにおける森林破壊の規模と要因(研究代表者) 2008年-2010年03月. 若手研究 (スタートアップ) (20810043-0001).

内藤 大輔 (ないとう だいすけ)

外来研究員

●1978年生まれ**【学歴】**

京都大学農学部卒業 (2003)、京都大学大学院アジアアフリカ地域研究研究科修士課程修了(2005)

【職歴】

日本学術振興会特別研究員 (2008～)、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員 (2007)

【学位】

修士（地域研究）（京都大学2005）

【専攻・バックグラウンド】

東南アジア地域研究

【所属学会】

日本森林学会、熱帯生態学会

【受賞歴】

松下国際財団アジアスカラシップ奨学生（2006）

●主要業績

○論文

【原著】

- ・内藤大輔 2008年 マレーシア・サバ州における森林認証制度の実施プロセス-社会面に注目して-. 第119回日本森林学会大会 . 日本森林学会.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・内藤大輔 The Change of forest use of local communities in Sabah, Malaysia. International Network on Eco-Cultural Diversities, Mar 12, 2009, 韓国, 木浦大学.
- ・内藤大輔 Balancing Forest Sustainability: Forest Certification and Local Community in Malaysia. Forest Policies for a Sustainable Humanosphere, Feb 18, 2009-Feb 19, 2009, 京都大学・稲森財団記念館.
- ・内藤大輔 マレーシアにおける森林認証制度による地域住民への影響. ワークショップ「アジアの森林保護制度による人々の暮らしへの影響と対応」, 2008年12月26日-2008年12月27日, 総合地球環境学研究所.
- ・内藤大輔 Forest Certification and Local Community, Sabah, Malaysia. Certified Sustainability in Forestry, Timber Industry and Agriculture, Sep 30, 2008, ドイツ, ミュンヘン工科大学.

○外部資金の獲得

【その他の競争的資金】

- ・映像実践と映像作品の新たな可能性を求めて—中東、東南アジア、日本の映像実践ネットワークの構築を通じて— 2007年. トヨタ財団助成. 企画協力者.

中川 昌人 (なかがわ まさと)

プロジェクト研究員

●1975年生まれ

【学歴】

京都大学理学部卒業（1997）、京都大学大学院理学研究科生物科学専攻修士課程修了（1999）、京都大学大学院理学研究科生物科学専攻博士後期課程修了（2005）

【職歴】

総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2006）

【学位】

博士（理学）（京都大学2005）、修士（理学）（京都大学1999）

【専攻・バックグラウンド】

植物生態学、植物分類学

【所属学会】

日本生態学会、日本植物学会、日本植物分類学会

●主要業績**○論文****【原著】**

- ・ Masato Nakagawa May, 2008 Allozyme diversity and geographical differentiation of *Parasenecio adenostyloides* (Asteraceae), an endemic forest herb in Japan. *International Journal of Plant Science* 169(4) :557-565. (査読付) .

○会合等での研究発表**【ポスター発表】**

- ・ 中川昌人・木本行俊・高相徳志郎 ウミシヨウブの種子構造：水散布への適応メカニズムの解明. 日本植物分類学会 第8回大会, 2009年03月13日-2009年03月15日, 宮城県仙台市. (本人発表).

中田 聡史 (なかだ さとし)

プロジェクト研究員

●1976年生まれ**【学歴】**

北海道大学水産学部卒業 (1999)、北海道大学大学院水産学研究科漁業学専攻修士課程修了(2001)、九州大学大学院総合理工学府大気海洋環境システム学専攻博士課程修了(2008)

【職歴】

株式会社ケー・シー・エス 研究助手 (2001)、日本エヌ・ユー・エス株式会社 研究員 (2003)、日本学術振興会 特別研究員 (2006)

【学位】

理学博士 (九州大学 2008)

【専攻・バックグラウンド】

海洋物理学

【所属学会】

日本海洋学会、米国地球物理学連合

●主要業績**○調査研究活動****【海外調査】**

- ・ 地下水資源調査. ツバル・フナフチ環礁・フォンガファーレ島, 2009年03月07日-2009年03月19日.

中野 孝教 (なかの たかのり)

教授

●1950年生まれ

【学歴】

東京教育大学理学部地学科卒業（1974）、東京教育大学大学院理学研究科修士課程修了（1977）、筑波大学大学院博士課程地球科学研究科修了（1982）

【職歴】

筑波大学地球科学系助手（1982）、筑波大学地球科学系助教授（1992）、総合地球環境学研究所研究部教授（2004）

【学位】

理学博士（筑波大学 1982）、理学修士（東京教育大学 1977）

【専攻・バックグラウンド】

環境資源地質学、同位体地球化学

【所属学会】

資源地質学会、日本地質学会、日本地球化学会、日本水文科学会、Society of Economic Geologist

●主要業績

○著書（執筆等）

【分担執筆】

- ・中野孝教 2008年 地球規模の物質循環を追跡する. 総合地球環境学研究所編編 地球の処方箋. 地球研叢書. 昭和堂, pp.148-151.
- ・中野孝教 2008年 廃鉱山の枯れ葉に学ぶ. 堂総合地球環境学研究所編編 地球の処方箋、. 地球研叢書. 昭和堂, pp.152-155.

○論文

【原著】

- ・Morishita Y., Nakano T. Oct,2008 Role of basement in epithermal deposits: the Kushikino and Hishikari gold deposits, southwestern Japan. . Ore Geology Reviews 34 :597-609. (査読付) .
- ・Kohzu, A., Miyajima, T., Tayasu, I., Yoshimizu, C., Hyodo, F., Matsui, K., Nakano, T., Wada, E., Fujita, N. and Nagata, T. Oct,2008 Use of Stable Nitrogen Isotope Signatures of Riparian Macrophytes As an Indicator of Anthropogenic N Inputs to River Ecosystems. Environmental Science & Technology 42 (21) :7837-7841. (査読付) .
- ・Hosono, T., Nakano, T., Shin K. and Murakami, H. Sep,2008 Assimilation of lower to middle crust by high alumina basalt magma as an explanation for the origin of medium-K volcanic rocks in southern Kyushu, Japan.. Lithos 105 :51-62. (査読付) .
- ・Kitano, J., Bolnick, D., Beauchamp, D.A., Mazur, M. M., Mori, S. and Nakano, T May,2008 Reverse Evolution of Armor Plates in the Threespine Stickleback.. Current Biology 18 :769-774. (査読付) .
- ・Hosono, T., Ikawa, R., Shimada, J., Nakano, T., Saito, M., Onodera, S., Lee, K-K. and Taniguchi, M. May,2008 Human impacts on groundwater flow and contamination deduced by multiple isotopes in Seoul City, South Korea. . Science of the Total Environment, doi:10.1016/j.scitotenv.2008.04.014.. (査読付) .

中村 大 (なかむら おおき)

プロジェクト研究員

●1967年生まれ

【学歴】

國學院大學文学部史学科卒業（1990）、國學院大學大学院文学研究科日本史学専攻博士課程前期修了（1992）、國學院大學大学院文学研究科日本史学専攻博士課程後期単位取得満期退学（1997）

【職歴】

國學院大學文学部助手（1997）、國學院大學文学部兼任講師（2002）、英国セインズベリー日本藝術研究所半田考古学フェロー（2003）、國學院大學文学部兼任講師（2005）、國學院大學研究開発推進センター客員研究員（2006）

【学位】

修士（歴史学）（國學院大學 1992）

【専攻・バックグラウンド】

考古学

【所属学会】

日本考古学協会、Society for American Archaeology (SAA)、岩手県考古学会、祭祀考古学会、古代学協会

●主要業績**○著書（執筆等）****【分担執筆】**

- ・ NAKAMURA, Oki Jan, 2009 Ritual Landscape in Northern Jomon Japan: An Outline. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) NEOMAP Interim Report 2008. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp.115-122.
- ・ 中村大 2008年11月 第一章旧石器時代、第二章縄文時代、第三章弥生・続縄文・古墳時代. 能代市史編さん室編 能代市史 通史編 原始・古代・中世. 能代市史編さん室, 秋田県能代市, pp. 3-88.
- ・ 中村大 2008年06月 文様単位数とその意味. 小林達雄編 総覧縄文土器. アム・プロモーション, 東京都港区, pp. 1162-1167.
- ・ 中村大 2008年04月 社会階層. 人と社会 人骨情報と社会組織. 縄文時代の考古学, 10. 同成社, 東京都千代田区, pp. 145-155.

○著書（編集等）**【編集・共編】**

- ・ UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki (ed.) Jan, 2009 NEOMAP Interim Report 2008. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, 260pp.

○会合等での研究発表**【口頭発表】**

- ・ 中村大 考古学から景観学へ-考古学の未来可能性-. 第2回景観セミナー, 2008年07月25日, 京都市下京区. (本人発表).
- ・ 中村大 過去と現在を結ぶ: 考古学の未来可能性. 話会セミナー, 2008年06月17日, 京都市北区. (本人発表).

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- ・ 中村大 縄文人は不平等?. 東京都埋蔵文化財センター第3回文化財講演会, 2008年09月20日, 東京都多摩市.

○調査研究活動**【国内調査】**

- ・ 沿海州の新石器化期に関する資料収集. 東京都渋谷区、神奈川県横浜市港北区, 2009年03月24日-2009年03月26日. (POPOV, Alexander、中村大).
- ・ 北陸地方の新石器化期に関する資料収集. 富山県中新川郡立山町、富山市、氷見市、石川県鳳珠郡能登町, 2009年02月24日-2009年02月26日. (中村大、稲畑航平).

- ・北海道の新石器化期に関する資料収集。東京都渋谷区，2009年02月20日-2009年02月22日。
- ・北海道の新石器化期に関する資料調査。北海道札幌市，2009年01月09日-2009年01月12日。
- ・北海道の新石器化期に関する資料収集。東京都渋谷区，2008年12月20日-2008年12月21日。
- ・北陸地方の新石器化期に関する資料調査。新潟県長岡市、十日町市、長野県茅野市，2008年11月12日-2008年11月13日。（内山純蔵、GILLAM, Christopher、JORDAN, Peter、ZEBALLOS, Carlos、中村大）。
- ・新石器化期に関する資料調査。福井県若狭市、滋賀県長浜市，2008年11月02日。（内山純蔵、GILLAM, Christopher、JORDAN, Peter、SEYOCK, Barbara、ZEBALLOS, Carlos、細谷葵、楨林啓介、中村大）。
- ・新石器化期に関する現地調査。東京都三宅島，2008年08月15日-2008年08月19日。
- ・北海道の新石器化期に関する資料収集。東京都渋谷区，2008年08月06日-2008年08月08日。

○社会活動・所外活動

【依頼講演】

- ・ヨーロッパのストーンサークル。世界遺産登録推進フォーラム「レッツゴー！ストーンサークル」，2009年03月14日，秋田県大仙市。

中村 亮 (なかむら りょう)

プロジェクト研究員

●1976年生まれ

【学歴】

静岡大学人文学部言語文化学科卒業（2000）、名古屋大学大学院文学研究科博士前期課程入学（2001）、名古屋大学大学院文学研究科博士前期課程卒業（2003）、名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程入学（2003）、名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程修了（2008）

【職歴】

名古屋大学大学院文学研究科ティーチング・アシスタント（2003～2007）、名古屋大学大学院文学研究科チューター（2006）、名古屋大学大学院文学研究科非常勤職員（2006）、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2008）

【学位】

文学博士（名古屋大学 2008）、文学修士（名古屋大学 2003）、文学学士（静岡大学 2000）

【専攻・バックグラウンド】

文化人類学、環境人類学、スワヒリ海村社会の比較研究

【所属学会】

日本アフリカ学会（2003～）、国際環境研究協会（2007～）、日本宗教学会（2008～）、日本文化人類学会（2008～）、日本中東学会（2009～）

●主要業績

○その他の出版物

【報告書】

- ・中村亮 2008年 「ユネスコ世界遺産をめぐる二つの挿話」。嶋田義仁編 『伝統的知識と技術の再活性化によるアフリカの草の根的開発(Grass Root Development)と環境保護』。伝統的知識と技術の再活性化によるアフリカの草の根的開発(Grass Root Development)と環境保護（代表：嶋田義仁，名古屋大学），国際協力イニシアティブ，pp. 109-112.

- ・中村亮 2008年 「スワヒリ海村キルワ島のバントゥ系住民とアラブ系住民の居住空間の棲み分けCoexistence of Residence Place of the Arab and the Bantu in Kilwa Island, Southern Swahili Coast」. 嶋田義仁編 『イスラーム圏アフリカ論集IV』. アフリカ・イスラーム圏における白色系民族と黒色系民族の紛争と共存の宗教人類学研究, 科学研究費補助金基盤A (18251006), pp. 153-162.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・NAKAMURA, Ryo "Local Mangrove Resource Use of Kilwa Island in Southern Swahili Coast". *INTERNATIONAL DRYLAND DEVELOPMENT COMMISSION (IDDC), Ninth International Conference on the Development of Drylands*, Nov 07, 2008-Nov 10, 2008, Bibliotheca Alexandrina, Alexandria Egypt. (本人発表).
- ・NAKAMURA, Ryo "Multi-Ethnic Coexistence in Swahili Society: Multiple Ecological Sea Zones and Two Fishing Cultures in Kilwa Island, Tanzania". *The 3rd RIHN International Symposium, The Futurability of Islands: Beyond Endemism and Vulnerability*, Oct 22, 2008-Oct 23, 2008, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto Japan. (本人発表).
- ・中村亮 「スワヒリ海岸キルワ島の海環境と住民生活：マングローブ資源利用を中心に」. 日本アフリカ学会第45回学術大会, 2008年05月24日-2008年05月25日, 龍谷大学. (本人発表).

○調査研究活動

【海外調査】

- ・ケニア・ラム島にてスワヒリ海村の比較研究：海環境, 物質文化, 漁撈文化, 民族構成, 信仰 (1か月). ケニア, 2009年03月.
- ・エジプト, アレキサンドリア及びカイロ旧市街地における現地調査：資料収集 (2週間). エジプト, 2008年11月.
- ・タンザニア南部のキルワ島とマフィア島の比較調査 (1か月). タンザニア, 2008年07月.

○外部資金の獲得

【科研費】

- ・「牧畜文化解析によるアフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明とその現代的動態の研究 (代表：嶋田義仁, 名古屋大学)」(研究分担者) 2009年-2014年. 科学研究費補助金基盤研究S (21221011).
- ・「資源利用と民族共存に関する歴史・自然環境分析を用いたスワヒリ海村社会の比較研究」(研究代表者) 2008年-2009年. 科学研究費補助金若手研究スタートアップ (20820067).

【各省庁等からの研究費(科研費以外)】

- ・「根寄生雑草克服によるスーダン乾燥地農業開発 (代表：杉本幸裕, 神戸大学)」 2009年-2014年. 科学技術振興機構地球規模課題対応国際科学技術協力事業. 研究代表者：杉本幸裕、参加研究者：中村亮.

【その他の競争的資金】

- ・「スワヒリ海村社会の資源利用と民族共存に関する文化人類学的比較研究：キルワ島イスラーム海村社会とイブ島キリスト教海村社会を事例に (代表：中村亮)」 2008年-2009年. 平成20年度笹川研究助成.

奈良間 千之 (ならま ちゆき)

プロジェクト研究員

●1972年生まれ

【学歴】

東京都立大学理学研究科地理科学専攻博士後期課程修了 (2002)

【職歴】

中央大学・日本体育大学非常勤講師 (2003)、日本学術振興会特別研究員PD(2004)、(名古屋大学大学院環境学研究科, オスロ大学客員研究員 (2006))、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員 (2007)

【学位】

理学博士（東京都立大学 2002）

【専攻・バックグラウンド】

自然地理学（氷河変動）

【所属学会】

日本地理学会、日本雪氷学会、国際雪氷学会、東京地学協会、日本自然災害学会

【受賞歴】

オペル冒険大賞（ノミネート；1996）、中谷宇吉郎科学奨励賞（2007）

●主要業績**○その他の出版物****【その他の著作(会報・ニュースレター等)】**

- ・奈良間千之，藤田耕史 2009年03月 クルグズスタン，テスケイ・アラトー山脈における氷河流出の観測報告（2004-2008）. オアシス地域研究会報 7(1).

○会合等での研究発表**【口頭発表】**

- ・奈良間千之 衛星データを用いた中央アジア，天山山脈における最近の氷河変動. 日本地理学会春季大会，2009年03月28日-2009年03月29日，東京都八王子市，帝京大学.（本人発表）.
- ・Narama, C. How do we reconstruct environmental change in Central Asia ?. An International Workshop : Reconceptualizing Cultural and Environmental Change in Central Asia, an Historical Perspective on the Future, 2009年02月01日-2009年02月02日，京都市，地球研.（本人発表）.
- ・Narama, C. Timing of glacier expansion during the Last Glacial in the Tien Shan mountains. Pamir-Germany 80th symposium, Aug 16, 2008-Aug 18, 2008, ウズベキスタン，タシケント.（本人発表）.

【ポスター発表】

- ・Narama, C., Kääh, A., Moholdt, G., Abdrakhmatov, K. Recent change of glacier volume in the Chon-Kyzylsuu river basin, Teskey Ala-Too range, Tien Shan mountains, using airphotos, topographic maps, and ALOS PRISM satellite stereo data. EGU, Apr 13, 2008-Apr 18, 2008, オーストリア，ウィーン.（本人発表）.
- ・Narama, C., Kääh, A., Severskiy, I., Abdrakhmatov, K. Remote-sensing based analysis of glacier lake hazards in the Tien Shan mountains associated with recent glacier shrinkage. EGU, Apr 13, 2008-Apr 18, 2008, オーストリア，ウィーン.（本人発表）.
- ・Narama, C., Kondo, R., Tsukamoto, S., Kajiura, T., Duishonakunov, M., Abdrakhmatov, K. The glacial history during the Last Glacial in Fergana and Kungoy Ala-Too ranges in the Tien Shan mountains, Kyrgyz Republic by OSL dating. EGU, Apr 13, 2008-Apr 18, 2008, オーストリア，ウィーン.（本人発表）.

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- ・奈良間千之 中央アジアにおける氷河変動と氷河災害の現状（気候変動分野）. 第三回東京対話（中央アジア＋日本），2009年02月20日，東京都，外務省.

○外部資金の獲得**【科研費】**

- ・中央アジア山岳地域における最近の氷河変動と氷河湖決壊に関する現状評価（研究代表者）2008年06月01日-2010年03月31日. 科学研究費 若手B（20700674）.

【その他の競争的資金】

- ・地球温暖化による中央アジア山岳地域の最近の氷河変動と氷河湖決壊に関する現状評価 2008年04月01日-2009年03月31日. 日本科学協会笹川財団研究助成.

○報道等による成果の紹介

【報道機関による取材】

- ・氷河湖決壊の危機-温暖化影響で中央アジア山岳部. 京都新聞, 2008年11月12日 朝刊.
- ・How was glacier lake outburst flood in the Tong district ?. アグム新聞 (キルギスタン), 2008年09月05日 . (その他) キルギス語.

○教育

【非常勤講師】

- ・同志社大学, 理工学部環境システム学科, 環境システム学概論 I. 2008年07月. 地球研若手研究者による出張講義.

縄田 浩志 (なわた ひろし)

准教授

●1968年生まれ

【学歴】

早稲田大学第一文学部史学科東洋史学専攻卒業(1992)、スーダン、ハルトゥーム大学アフリカ・アジア研究所民俗学
科ディプロマ課程修了(1994)、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻文化人類学講座修士課程
修了(1997)、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻文化人類学講座博士課程修了(2003)

【職歴】

京都大学大学院人間・環境学研究科ティーチングアシスタント(1996)、日本学術振興会特別研究員(1997)、京都
大学大学院人間・環境学研究科ティーチングアシスタント(1998)、関西学院大学・立命館大学・大阪外国語大学・
大阪府立大学非常勤講師(2003)、鳥取大学乾燥地研究センター講師(2004)、鳥取大学乾燥地研究センター准教授
(2007)、総合地球環境学研究所准教授(2008)

【学位】

人間・環境学博士(京都大学 2003)、人間・環境学修士(京都大学 1997)、民俗学ディプロマ(ハルトゥーム大
学 1994)、文学学士(早稲田大学 1992)

【専攻・バックグラウンド】

文化人類学、社会生態学、中東・アフリカ地域研究、乾燥地研究、人間・家畜関係論

【所属学会】

日本アフリカ学会、日本ナイル・エチオピア学会、日本沙漠学会、日本文化人類学会、日本サング礁学会、日本中東
学会

【受賞歴】

日本沙漠学会奨励賞(2003)

●主要業績

○著書(執筆等)

【分担執筆】

- ・縄田浩志 2008年11月 「外国人労働者との共同作業による環境保全—サウディ・アラビアの自然保護区における放牧をめぐる—」. 草野孝久編 『村落開発と環境保全—住民の目線で考える』. 古今書院, 東京, pp.119-134.

○著書(編集等)

【編集・共編】

- ・ Hiroshi NAWATA (ed.) Oct, 2008 *A Study of Human Subsistence Ecosystems with Mangrove in Drylands: To Prevent a New Outbreak of Environmental Problems*. Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, 104pp. (英語, アラビア語)

○論文

【原著】

- ・ 縄田浩志 2009年03月 「外国人労働者としての外国人研究者の役割—サウディ・アラビア西南部レイダ自然保護区の環境保全に関わるアクターの事例分析から」. 李仁子・金谷美和編 『自己言及的民族誌の可能性』. 東北アジア研究センター叢書, 第34号. 東北大学東北アジア研究センター, 仙台, pp. 73-93.
- ・ Buho HOSHINO, Hiroshi NAWATA, Ryota NAGASAWA, Ren'ya SATO, Norikazu YAMANAKA, S. GANZORIG Feb, 2009 Evaluate the Eco-Effectiveness of Grain for Green Project of China Using a Satelliet-Derived Land Surface Parameter. 『酪農学園大学環境システム学部論文集』 2009年2月号 :143-158.
- ・ 縄田浩志 2008年07月 「サウディ・アラビアのラクダ・レース—現代に浮かびあがる、アラブ社会のネットワーク」. 『季刊民族学』 125 :44-59.

○その他の出版物

【報告書】

- ・ 縄田浩志 2008年09月 「「退耕還林」政策前後の土地利用変化の研究」. 『第12回(2006年度)環境助成研究成果報告書』財団法人昭和シェル石油環境研究助成財団. , pp. 78-80.

【その他の著作(会報・ニュースレター等)】

- ・ 李仁子・三田牧・金谷美和・縄田浩志・王柳蘭 2009年03月 「座談会 フィールドに向き合い、フィールドに関わる—「他者」の眼、「自己」の眼、人類学者の眼—」. 李仁子・金谷美和編『自己言及的民族誌の可能性』東北アジア研究センター叢書第34号 :107-141.
- ・ 縄田浩志 2009年03月 「アフリカ牧畜民の適応機構と生存戦略: スーダン東部ベジャ族から考える」. 『十勝農学談話会誌』 50 :59-63.
- ・ 縄田浩志 2009年01月 「ウシの目覚ましはツツツツツツ」. 『月刊みんぱく』 376 :6.

【その他】

- ・ 2008年11月09日 Mangroves as Fish Nursery and Forage Safekeeping in Coastal Zones of the Arid Tropics. In *Abstracts of Oral Presentations, The Ninth Conference of International Dryland Development Commission (IDDC) held at Alexandria, Egypt*, p. 137

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・ 縄田浩志 「アラブの庶民とつきあう—文化人類学からみたイスラーム社会—」. 岩手イスラーム考古学研究会, 2009年02月07日, 北上. (本人発表).
- ・ 縄田浩志 「アフリカ乾燥熱帯沿岸域における人間・ヒトコブラクダ関係と家畜観」. 桜美林大学「人間と家畜」研究会, 2008年12月07日, . (本人発表).
- ・ 縄田浩志 「黄土高原における人びとの暮らしから考える退耕還林」. NPO法人草炭緑化協会第19回沙漠緑化に関する講演会「緑化活動による地域の環境改善」, 2008年10月24日, . (本人発表).
- ・ 縄田浩志 「シルック王クウォンゴとの対話」. 日本文化人類学会第42回研究大会, 2008年06月01日, . (本人発表).
- ・ 縄田浩志 「われわれの手で平和をもたらしましょう」. 日本アフリカ学会第45回学術大会研究発表, 2008年05月24日, . (本人発表).
- ・ 縄田浩志 「外来移入種マメ科プロソピス統合的管理法の提示に向けて」. 総合地球環境学研究所プレリサーチ, 2008年05月12日, 京都市. (本人発表).
- ・ 縄田浩志 「外来移入種マメ科プロソピス統合的管理法の提示に向けて: 総合地球環境学研究所プレリサーチ「アラブ社会におけるなりわい生態系の研究—ポスト石油時代に向けて—」の紹介」. 農業環境技術研究所生物多様性領域セミナー(農業環境技術研究所), 2008年05月12日, . (本人発表).

- ・ 縄田浩志 「「人類学者の興味」と「現地住民の思惑」の「すれ違い」と「すり合わせ」」。日本ナイル・エチオピア学会第17回学術大会（弘前大学），2008年04月19日，。（本人発表）。

【ポスター発表】

- ・ Hiroshi NAWATA *A Study of Human Subsistence Ecosystems in Arab Societies: To Combat Livelihood Degradation for the Post-oil Era*. Seventh Seminar of Inter-Civilization Dialogue between Japan and the Islamic World, Eighth Seminar of Development of Islamic Ideology, “Harmonization of Civilization with Environments”, Mar 11, 2009-Mar 12, 2009, Kuwait. (本人発表).
- ・ Hiroshi NAWATA *Food Habitat in the Coastal Zones of the Arid Tropics*. In Abstracts of Oral Presentations, The 11th International Coral Reef Symposium, Jul 07, 2008-Jul 11, 2008, Fort Lauderdale, Florida, USA. (本人発表).

○学会活動（運営など）

【組織運営】

- ・ 日本沙漠学会編『沙漠の事典』，編集委員。2009年。
- ・ 日本中東学会，編集委員。2008年11月。－現在。
- ・ 日本ナイル・エチオピア学会，総務幹事。2007年。－現在。
- ・ 日本ナイル・エチオピア学会，評議員。2004年。－現在。

○調査研究活動

【海外調査】

- ・ 中国南西部の文化と環境に関する研究フォーラム（三峡大学）における研究発表。中国・宜昌，2009年03月25日-2009年03月31日。
- ・ クウェート開催「日本とイスラーム世界との文明間対話」における招待講演とポスター発表、エジプト環境省における情報収集、スーダン白ナイル周辺におけるプロソピス被害状況の現地調査。クウェート、エジプト、スーダン，2009年03月05日-2009年03月19日。
- ・ 紅海沿岸域での調査計画内容と研究協力の覚書と研究の実施合意書の締結に向けたサウディ・アラビア野生生物保護委員会との研究打ち合わせ。サウディ・アラビア・リヤド，2008年12月16日-2008年12月26日。
- ・ 外来移入種マメ科プロソピスの統合的管理法の調査項目に関するスーダン科学技術大学との研究打ち合わせ、第9回国際乾燥地国際会議における研究発表とエジプト農業・水産資源庁における情報収集。スーダン・ハルトゥーム、エジプト・アレクサンドリア、カイロ，2008年10月26日-2008年11月18日。
- ・ サンゴ家屋の建築法と保全に関する現地調査。エジプト・シナイ半島，2008年08月17日-2008年09月07日。
- ・ 第11回国際サンゴ礁学会での研究発表と海洋哺乳類の保全に関する資料収集。アメリカ合衆国・フロリダ，2008年07月04日-2008年07月13日。

○外部資金の獲得

【科研費】

- ・ 「アラビア語を用いた地域住民との研究資源共有化による社会的意志決定サポート法の構築」（研究代表者）2009年-2011年。文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）（21510278）。
- ・ 「牧畜文化解析によるアフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明とその現代的動態の研究」（研究分担者）2009年-2013年。文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（S））（21221011）。研究代表者：嶋田義仁。
- ・ 「文化の習得と継承に関する人類学的研究-北東アフリカにおける伝統的知識と近代化」（研究分担者）1995年。国際学術研究（07041055）。研究代表者：福井勝義。
- ・ 「北東アフリカにおける民族の相克と生成に関する実証的研究」（研究分担者）1992年。国際学術研究（04041115）。研究代表者：福井勝義。

【各省庁等からの研究費（科研費以外）】

- ・ 「根寄生雑草克服によるスーダン乾燥地農業開発」2009年-2014年。科学技術振興機構地球規模課題対応国際科学技術協力事業。研究代表者：杉本幸裕、参加研究者：縄田浩志。

- ・「寄生雑草ストライガの生理生態学的特性の解析と防除戦略の構築」 2008年-2010年. 日本技術振興会アジア・アフリカ学術基金形成事業. 研究代表者：杉本幸裕、参加研究者：縄田浩志.
- ・「乾燥地研究分野（中国内陸部の砂漠化防止及び開発利用に関する研究）」 2001年-2010年. 日本学術振興会拠点大学交流事業. 研究代表者：稲永忍・恒川篤史、参加研究者：縄田浩志.

【その他の競争的資金】

- ・「黄土高原の社会開発に関する研究」 2009年. 鳥取大学乾燥地研究センター共同利用研究・自由研究. 研究代表者：縄田浩志.
- ・「アラブ社会におけるなりわい生態系の研究—ポスト石油時代に向けて」 2009年-2013年. 総合地球環境学研究所フルリサーチ（本研究）. プロジェクトリーダー：縄田浩志.
- ・「アラブ社会におけるなりわい生態系の研究—ポスト石油時代に向けて」 2008年. 総合地球環境学研究所プレリサーチ. プロジェクトリーダー：縄田浩志.
- ・「黄土高原地域における退耕還林政策と社会開発に関する研究」 2008年. 鳥取大学乾燥地研究センター共同研究・特別研究. 研究代表者：縄田浩志.
- ・「アラブ社会におけるサブシステム生態系の研究—生活基盤回復のために」 2007年. 総合地球環境学研究所予備研究. プロジェクトリーダー：縄田浩志.
- ・「アラブ社会におけるサブシステム生態系の研究—生活基盤回復のために」 2006年. 総合地球環境学研究所一般共同研究. プロジェクトリーダー：縄田浩志.
- ・「日本の教育現場でアフリカの飢餓・内戦を考える実践的研究——一枚の写真〈ハゲワシと少女〉を用いて」 2006年. トヨタ財団研究助成. 研究代表者：縄田浩志.
- ・「「退耕還林」政策前後の土地利用変化の研究」 2006年. 昭和シェル石油環境研究助成金. 研究代表者：縄田浩志.

○社会活動・所外活動

【他の研究機関から委嘱された委員など】

- ・国際協力機構（JICA），短期派遣専門家（文化人類学にかかわる技術指導）. 2003年. 国際協力機構（JICA），「サウディ・アラビア考古学調査プロジェクト」の短期派遣専門家として，サウディ・アラビア紅海沿岸地域において，文化人類学にかかわる技術指導（2003年度の計4ヶ月間）.

【共同研究員、所外客員など】

- ・鳥取大学乾燥地研究センター，共同利用研究員（共同利用研究「黄土高原地域における退耕還林政策と社会開発に関する研究」、「黄土高原の社会開発に関する研究」）. 2008年04月-2010年03月.
- ・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，共同研究員（共同研究プロジェクト「ムスリムの生活世界とその変容—フィールドの視点から」（研究代表者：大塚和夫））. 2005年11月-2010年03月.

【依頼講演】

- ・ *Japanese symbiotic relationship between human and nature, Satoyama*. Seventh Seminar of Inter-Civilization Dialogue between Japan and the Islamic World, Eighth Seminar of Development of Islamic Ideology, “Harmonization of Civilization with Environments”, 2009年03月11日, Kuwait.
- ・「アフリカ牧畜民の適応機構と生存戦略：スーダン東部ベジャ族の事例から考える」. 帯広畜産大学・グローバルCOEプログラム「アニマル・グローバル・ヘルス」開拓拠点公開講演会「世界の草地生態系と牧畜民の草地利用」, 2009年01月29日, .

○教育

【非常勤講師】

- ・鳥取大学，大学院農学研究科，乾地社会生態学特論. 2008年04月-2008年09月.
- ・神戸大学，国際文化学部，開発文化論. 2008年04月-2008年09月.

野津 雅人 (のづ まさと)

プロジェクト上級研究員

●1979年生まれ**【学歴】**

大阪大学 理学部 物理学科卒業(2001)、神戸大学 大学院自然科学研究科 地球惑星科学専攻 博士前期課程修了(2003)、神戸大学 大学院自然科学研究科地球環境科学専攻 博士後期課程修了(2008)

【職歴】

国土交通省国土地理院近畿地方測量部 非常勤職員(2006)、総合地球環境学研究所 プロジェクト上級研究員 着任(2008)

【学位】

理学博士(神戸大学 2008)

【専攻・バックグラウンド】

気象学

【所属学会】

日本気象学会、アメリカ気象学会

●主要業績**○会合等での研究発表****【口頭発表】**

・野津雅人、谷田貝重紀代 地形勾配に対する相対風向と降水量の関係. 日本気象学会2008年度秋季大会, 2008年11月19日-2008年11月21日, 仙台. (本人発表).

【ポスター発表】

- ・ Kamiguchi, K., A. Yatagai, O. Arakawa, H. Kawamoto, M. I. Nodzu, and A. Kitoh Precipitation Characteristics of APHRO_PR, High-Resolution Daily Precipitation Data.. AGU 2008 Fall Meeting, Dec 15, 2008-Dec 19, 2008, サンフランシスコ.
- ・ Yatagai, A., H. Kawamoto, M. I. Nodzu, T. Watanabe, J. Kubota, A. Kitoh, K. Kamiguchi, O. Arakawa, S. Kanae Asian Precipitation-Highly-Resolved Observational Data Integration Towards Evaluation of the Water Resources (APHRODITE's Water Resources). Conference of APHW in Beijing, Nov 07, 2008-Nov 09, 2008, 北京.

野村 尚史 (のむら なおふみ)

プロジェクト研究員

●19736年生まれ**【学歴】**

京都大学農学部卒業(1995)、京都大学大学院理学研究科生物科学専攻修士課程修了(1997)、京都大学大学院理学研究科生物科学専攻博士後期課程単位修得退学(2003)

【職歴】

京都大学大学院農学研究科COE研究員(2005)、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員(2006)、京都大学非常勤講師(2006)

【学位】

博士（理学）（京都大学 2004）、修士（理学）（京都大学 1997）

【専攻・バックグラウンド】

植物生態学、植物進化学

【所属学会】

日本生態学会、日本植物学会、植物分類学会、日本進化学会

●主要業績**○外部資金の獲得****【科研費】**

・多様な葉の形態の進化・維持メカニズム(研究代表者) 2007年-2009年. 若手研究 (B) ().

郝 愛民 (はお あいみん)

外来研究員

●1965年生まれ**【学歴】**

中国内モンゴル農業大学農工学部卒業（1987）、中国農業大学食品科学与工程科学部卒業（2001）、日本岐阜大学大学院応用生物科学研究科農地工学専攻修士課程修了（2004）、日本九州大学大学院生物資源環境科学府生産環境科学専攻博士課程修了（2007）

【職歴】

中国内モンゴル集寧市毛紡織廠技術管理員（1987）、中国内モンゴル農業大学講師（2001）

【学位】

農学博士（九州大学 2007）、農学修士（岐阜大学 2004）

【専攻・バックグラウンド】

地域環境工学（灌漑利水学）

【所属学会】

農業農村工学会、日本砂丘学会、日本沙漠学会

●主要業績**○会合等での研究発表****【口頭発表】**

・弓削こずえ，中野芳輔，原口智和，郝愛民 中間地圃場周辺の遮蔽物が農業生産環境に及ぼす影響評価. 農業農村工学会（全国大会），2005年08月23日-2008年08月25日，岐阜市.

長谷川 成明 (はせがわ しげあき)

プロジェクト上級研究員

●主要業績

○会合等での研究発表

【ポスター発表】

- ・長谷川成明（地球研）、石井励一郎（地球フロンティア）、上村明（東京外大）、山村則男（地球研） モンゴル国 Hovd県の生態系に遊牧パターンが与える影響のモデルシミュレーション。日本生態学会第56回全国大会，2009年03月17日-2009年03月21日，岩手県盛岡市。（本人発表）。

○学会活動（運営など）

【企画・運営・オーガナイズ】

- ・第56回日本生態学会大会 企画集会「生活史戦略としての樹形変化 一姿を変える樹木たち」，オーガナイザ（司会）。2009年03月18日，岩手県盛岡市。

【組織運営】

- ・日本生態学会，大会企画委員。2009年03月-2012年03月。

花松 泰倫（はなまつ やすのり）

プロジェクト研究員

●1977年生まれ

【学歴】

北海道大学法学部卒業（2000）、北海道大学大学院法学研究科法学政治学専攻修士課程修了（2004）、北海道大学大学院法学研究科法学政治学専攻博士後期課程単位取得退学（2008）

【学位】

法学修士（北海道大学 2004）

【専攻・バックグラウンド】

国際法学、国際環境法、国際人権法

【所属学会】

国際法学会、国際人権法学会

【受賞歴】

財団法人安達峰一郎記念財団奨学賞（2008）

●主要業績

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・Hanamatsu, Y. The “Giant” Fish-Breeding Forest as Global Environmental Public Goods. International Workshop: Regional Public Sphere and Environment in Slavic Eurasia and Japan, Feb 28, 2009-Mar 01, 2009, 総合地球環境学研究所、京都市。（本人発表）。

濱田 篤（はまだ あつし）

プロジェクト研究員

●1976年生まれ**【学歴】**

京都大学理学部理学科 卒業(1999)、京都大学大学院理学研究科 地球惑星科学専攻修士課程 修了(2001)、京都大学大学院理学研究科 地球惑星科学専攻博士後期課程 研究指導認定退学(2008)

【学位】

理学修士(京都大学 2001)

【専攻・バックグラウンド】

熱帯気象学、衛星気象学

【所属学会】

日本気象学会、日本リモートセンシング学会、米国気象学会、米国地球物理学連合

●主要業績**○論文****【原著】**

- ・Hamada, A., N. Nishi, S. Iwasaki, Y. Ohno, H. Kumagai, and H. Okamoto 2008 Cloud type and top height estimation for tropical upper-tropospheric clouds using GMS-5 split-window measurements combined with cloud radar measurements. SOLA 4 :57-60. DOI:10.2151/sola.2008-015. (査読付) .

早坂 忠裕 (はやさか ただひろ)

教授

●1959年生まれ**【学歴】**

東北大学理学部地球物理学科卒 (1982)、東北大学大学院理学研究科前期課程修了 (1984)、東北大学大学院理学研究科後期課程修了 (1988)

【職歴】

日本学術振興会特別研究員PD (東北大学理学部) (1988)、東北大学理学部助手 (1990)、東北大学理学部助教授 (1994)、東北大学大学院理学研究科助教授 (1998)、東北大学大学院理学研究科教授 (1999)、国立極地研究所教授 (1999)、総合地球環境学研究所研究部教授 (2001)

【学位】

理学博士 (東北大学1988)、理学修士 (東北大学1984)

【専攻・バックグラウンド】

大気物理学

【所属学会】

日本気象学会、日本エアロゾル学会

●主要業績**○学会活動 (運営など)****【組織運営】**

- ・日本気象学会, 「地球観測衛星研究連絡会」 幹事. 2003年.

- ・IAMAS, 国際大気放射委員会委員. 2001年.
- ・日本気象学会, 「気象研究ノート」編集委員会委員. 1996年.

○外部資金の獲得

【その他の競争的資金】

- ・東アジアにおけるエアロゾルの時空間変動と光学的特性に関する研究 2007年12月-2009年05月. 住友財団環境研究助成金.

○社会活動・所外活動

【他の研究機関から委嘱された委員など】

- ・宇宙航空研究開発機構、国立環境研究所、環境省, GOSATサイエンスチームアドバイザーボード委員, 2007年07月.

林 憲吾 (はやし けんご)

プロジェクト研究員

●1980年生まれ

【学歴】

京都大学工学部建築学科卒業 (2003)、東京大学工学系研究科建築学専攻修士課程修了 (2005)、東京大学工学系研究科建築学専攻博士課程単位取得退学 (2009)

【学位】

工学修士 (東京大学 2005)

【専攻・バックグラウンド】

建築学、東南アジア近代建築・都市史

【所属学会】

日本建築学会、東南アジア学会

●主要業績

○著書 (執筆等)

【分担執筆】

- ・林憲吾 2008年09月 持続学への地図ーインドネシア・ジャカルタにおける遺産資産悉皆調査を事例として. 木村武史編 千年持続学の構築. 未来を拓く人文・社会科学, 13. 東信堂, pp. 41-58.

○論文

【原著】

- ・新田龍希、林憲吾、村松伸 2008年 住宅の形態に見る近代パレンバンの文化交流・融合・混在ーインドネシア・パレンバンの都市環境文化資源に関する研究(その2)ー. 日本建築学会大会学術講演梗概集 :377-378.

○その他の出版物

【報告書】

- ・林憲吾 2008年 都市環境文化資源の活用に向けた段階的手法の開発ーメダン調査を事例としてー. 村松伸編 メダンを事例とした投入資源制約下の適正成長戦略の構想最終報告書. メダンアクションスタディ, 東京大学21世紀COEプログラム「都市空間の持続再生学の創出」, pp. 62-72.

○調査研究活動

【海外調査】

- ・南洋島嶼地域パラオ共和国における持続可能な流域圏マネジメント・モデルに関する集落調査. パラオ共和国・バベルダオブ島, 2009年03月07日-2009年03月18日.

林 直樹

プロジェクト研究員

●1972年生まれ

【学歴】

京都大学農学部農業工学科卒業（1997）、京都大学大学院農学研究科修士課程地域環境科学専攻修了（1999）、京都大学大学院農学研究科博士後期課程地域環境科学修了（2002）

【職歴】

京都大学農学部教務補佐員（2003）、京都大学大学院農学研究科教務補佐員（2004）、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員（2006）

【学位】

博士（農学）（京都大学 2002）

【専攻・バックグラウンド】

農村計画学、農業土木学

【所属学会】

農業土木学会、農村計画学会、環境科学会、人文地理学会、環境社会学会

●主要業績

○外部資金の獲得

【科研費】

- ・過疎地からの集落移転に関する基礎的研究（研究代表者）2007年04月-2009年03月. 若手研究B（19780184）.

BAUSCH, Ilona Renate (ばうし いろーな れなーて)

招へい外国人研究員

●1969年生まれ

【学歴】

ライデン大学日本語・文化学部卒業（オランダ、1994）、ダラム大学東アジア学部大学院博士課程修了（英国、2005）

【職歴】

ライデン大学人文学部日本・朝鮮研究科非常勤講師（2004）、総合地球環境学研究所招へい外国人研究員（2006）、ライデン大学考古学部講師（2007）、総合地球環境学研究所招へい外国人研究員（2008）

【学位】

博士（考古学）、（ダラム大学 2005）、修士（考古学）、（ケンブリッジ大学 1993）

【専攻・バックグラウンド】

考古学

●主要業績

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・ BAUSCH, Ilona Prehistoric Exchange and the Hokuriku Region. NEOMAP Landscape Workshop, Mar 12, 2009–Mar 13, 2009, 総合地球環境学研究所. (本人発表).
- ・ BAUSCH, Ilona Jomon Material Culture, Exchange and Identity in Jomon Japan. “Materiality, Languages and Identity” Workshop, organised by Prof. C. Damm & CAS (Centre for Advanced Study at the Norwegian Academy of Science & Letters), Sep 30, 2008–Oct 03, 2008, Oslo, Norway. (本人発表).
- ・ BAUSCH, Ilona Changing Jomon landscape perception and use, from the perspective of jadeite exchange. “Prehistoric Landscape Shifts in the East Asian Inland Seas” Session at the 4th worldwide conference of Society for East Asian Archaeology (SEAA), Jun 03, 2008, Beijing, China. (本人発表).

○調査研究活動

【国内調査】

- ・ 北海道の新石器化期に関わる調査（浜大樹2遺跡）. 北海道広尾郡大樹町、札幌市, 2008年08月15日–2008年08月26日.
- ・ 北海道および東北地方北部の新石器化期に関わる資料収集. 北海道千歳市、江別市、礼文町、青森県八戸市、青森市, 2008年07月10日–2008年07月19日.

細谷 葵 (ほそや あおい)

プロジェクト研究員

●1967年生まれ

【学歴】

早稲田大学第一文学部卒業（1990）、早稲田大学大学院文学研究科考古学専攻修士課程修了（1992）、英国ケンブリッジ大学考古学部Master of Philosophy課程修了（1993）、早稲田大学大学院文学研究科考古学専攻博士後期課程満期退学（2000）、英国ケンブリッジ大学考古学部Doctor of Philosophy課程修了（2002）

【職歴】

早稲田大学比較考古学研究所客員研究員（2001）、早稲田大学先史考古学研究所客員研究員（2002）、早稲田大学文学部非常勤講師（2003）、明生情報ビジネス専門学校非常勤講師（2003）、秀林日本語学校非常勤講師（2003）、早稲田大学オープン教育センター非常勤講師（2006）

【学位】

文学修士（早稲田大学 1992）、Master of Philosophy（考古学）（ケンブリッジ大学 1993）、Doctor of Philosophy（考古学）（ケンブリッジ大学 2002）

【専攻・バックグラウンド】

植物考古学、民族誌考古学

【所属学会】

日本考古学協会、日本文化人類学会、日本文化財科学会、日本植生史研究会、東南アジア考古学会、日本西アジア考古学会、Cambridge Philosophical Society、Society for American Archaeology

●主要業績

○著書（執筆等）

【分担執筆】

- ・細谷 葵 2009年02月 「伝統」の景観－奄美大島・高倉の現存分布調査－. J. Uchiyama, K. Lindstrom, C. Zeballos, O. Nakamura編 Neolithisation and Modernisation: Landscape History on East Asian Inland Seas. Neomap Interim Report 2008. Research Institute for Humanity and Nature, 京都市北区, pp.171-184.
- ・細谷 葵 2008年11月 貯蔵形態と生業サイクルーバリ島稲作とパプアニューギニア焼畑作の民族誌調査から－. 日本考古学協会2008年度愛知大会実行委員会編 日本考古学協会2008年度愛知大会研究発表資料集. 日本考古学協会, 東京都江東区, pp.309-324.
- ・細谷 葵 2008年09月 コメと倉－バリ島稲作社会の民族考古学調査. 海老澤 衷編 バリ島の水稲文化と儀礼. 講座 水稲文化研究, IV. 早稲田大学水稲文化研究所, 東京都新宿区, pp.87-111.

○論文

【原著】

- ・Leo Aoi Hosoya Mar, 2009 Sacred Commonness: Archaeobotanical approach to Yayoi social stratification- The 'Central Building Model' and Osaka Ikegami Sone site. Senri Ethnological Studies 73 :99-177. (査読付).
- ・D. Fuller, L. Qin, Y. Zhang, Z. Zhao, X. Chen, L.A. Hosoya, G. Sun Mar, 2009 The Domestication Process and Domestication Rate in rice: Spikelet bases from the Lower Yangtze. Science 323 :1607-1610. (査読付).

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・細谷 葵 “過程”の聖化－奄美大島の稲作作業と祭り. 地球研NEOMAP2008年度第6回景観セミナー, 2009年01月30日, 京都市. (本人発表).
- ・細谷 葵 貯蔵形態と生業サイクルーバリ島稲作とパプアニューギニア焼畑作の民族誌調査から. 日本考古学協会2008年度大会, 2008年11月08日-2008年11月09日, 名古屋市. (本人発表).
- ・L.A. Hosoya, I. Nakamura, Y.-I. Sato Japonica Rice was Carried to, not from, Southeast Asia: Genetic approach to the origin of rice cultivation. Workshop on the Origin of Rice Agriculture- The 3rd International Rice Festival of Wan-Nian, Oct 27, 2008-Oct 29, 2008, 中国江西省万年市. (本人発表).
- ・細谷 葵 南島の生業と景観－なぜトロブリアンドのチーフには22人の妻がいるのか. 地球研NEOMAP2008年度第4回景観セミナー, 2008年09月26日, 京都市. (本人発表).
- ・Leo Aoi Hosoya Storing food, for what?: Ethnoarchaeology of storage and agricultural cycles in Bali, Indonesia and Yabam Island, PNG. The 6th World Archaeology Congress, Jun 29, 2008-Jul 04, 2008, アイerland、ダブリン市. (本人発表).
- ・Leo Aoi Hosoya Plant food subsistence strategy and the 'routine-scape' in Japanese and Chinese prehistory. The 4th Worldwide Conference of the Society for East Asian Archaeology, Jun 02, 2008-Jun 05, 2008, 中国北京市. (本人発表).

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- ・細谷 葵 日本の南北と植物食料－植物考古学の視点から. 総合地球環境学研究所・同志社大学理工学部環境システム学科共催・連続公開講座『ユーラシア農耕史－風土と農耕の醸成』, 2009年02月21日, 京都市.

○学会活動（運営など）

【企画・運営・オーガナイズ】

- ・日本考古学協会, 選挙管理委員 (協会理事選挙準備・遂行). 2007年10月01日-2008年09月15日.

プロジェクト研究員

【学歴】

滋賀県立大学環境科学部卒業（1999）、京都大学大学院理学研究科生物科学専攻修士課程修了（2001）、京都大学大学院理学研究科生物科学専攻博士課程修了（2006）

【職歴】

総合地球環境学研究所（2006）

【学位】

博士（理学）（京都大 2006）、修士（理学）（京都大 2001）

【専攻・バックグラウンド】

微生物生態学、陸水学

【所属学会】

日本陸水学会

●主要業績**○論文****【原著】**

- ・Minamoto, T., Honjo, M. N., Uchii, K., Yamanaka, H., Suzuki, A. A., Kohmatsu, Y., Iida, T., Kawabata, Z. Mar, 2009 Detection of cyprinid herpesvirus 3 DNA in river water during, after an outbreak.. *Veterinary Microbiology* 135 :261-266. DOI:10.1016/j.vetmic.2008.09.081. (査読付) .
- ・Matsui, K., Honjo, M., Kohmatsu, Y., Uchii, K., Yonekura, R., Kawabata, Z. Jun, 2008 Detection and significance of koi herpesvirus (KHV) in freshwater environments.. *Freshwater Biology* 53 :1262-1272. DOI:10.1111/j.1365-2427.2007.01874.x . (査読付) .

○会合等での研究発表**【口頭発表】**

- ・源利文、本庄三恵、川端善一郎 琵琶湖におけるコイヘルペスウイルスの分布と季節変化. 第56回日本生態学会, 2009年03月17日-2009年03月21日, 盛岡.
- ・本庄三恵、源利文、松井一彰、内井喜美子、山中裕樹、鈴木新、神松幸弘、飯田貴次、川端善一郎 環境水中に存在するコイヘルペスウイルスの定量. 第73回日本陸水学会, 2008年10月11日-2008年10月13日, 札幌. (本人発表).
- ・Tanaka, N., Itayama, T., Honjo, M., Minamoto, T., Kawabata, Z. Development of a Rapid Concentration System for Virus in Environmental water. 12th International Conference on Integrated Diffuse Pollution Management (IWA DIPCON 2008), Aug 27, 2008, in Khon Kaen, Thailand.
- ・Kawabata, Z., Minamoto, T., Honjo, M. N., Uchii, K., Yamanaka, H., Suzuki, A. A., Kohmatsu, Y. KHV-Carp-Human linkages: Case study in Lake Biwa, Japan. International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages, Jun 11, 2008, in Kyoto, Japan.

【ポスター発表】

- ・山中裕樹、神松幸弘、源利文、本庄三恵、内井喜美子、鈴木新、川端善一郎 湖岸形態と水温分布：魚類への影響の考察. 第56回日本生態学会, 2009年03月17日-2009年03月21日, 盛岡.
- ・松井一彰、本庄三恵、川端善一郎、内井喜美子 大腸菌における遺伝子水平伝播経路を指標にした淡水環境特性の評価. 第24回微生物生態学会, 2008年11月25日-2008年11月28日, 札幌.
- ・Yamanaka, H., Sogabe, A., Kohmatsu, Y., Minamoto, T., Honjo, M. N., Uchii, K., Suzuki, A. A., Omori, K., Kawabata, Z. Relationship of lake morphometry and shore configuration to the temperature distribution in lagoons, and implications for its effect on fish health. International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages, Jun 11, 2008-Jun 12, 2008, in Kyoto, Japan.

- Honjo, M. N., Minamoto, T., Matsui, K., Uchii, K., Yamanaka, H., Suzuki, A. A., Kohmatsu, Y., Iida, T., Kawabata, Z. Quantification method of Koi herpesvirus (KHV) in environmental water using cation-coated filter method and external standard virus. International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages, Jun 11, 2008–Jun 12, 2008, in Kyoto, Japan. (本人発表).
- Minamoto, T., Honjo, M. N., Uchii, K., Yamanaka, H., Suzuki, A. A., Kohmatsu, Y., Kawabata, Z. Detection of koi herpesvirus DNA from natural river water. International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages, Jun 11, 2008–Jun 12, 2008, in Kyoto, Japan.
- Itayama, T., Tanaka, N., Honjo, M. N., Minamoto, T., Kawabata, Z. Development of an on site rapid concentration system for virus in environmental water. International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages, Jun 11, 2008–Jun 12, 2008, in Kyoto, Japan.

○外部資金の獲得

【科研費】

- 水域生態系において懸濁物質がウイルス感染に与える影響(研究代表者) 2008年04月-2011年03月. 若手B (207100135001).

○社会活動・所外活動

【共同研究員、所外客員など】

- 京大大学生態学研究センター, 協力研究員 (水域生態系におけるウイルスの動態解析). 2008年04月-2010年03月.

POPOV Alexander Nikolaevich (ぽぽふ あれくさんだー にこらえう`いっち)

招へい外国人研究員

●1966年生まれ

【学歴】

ロシア極東国立総合大学歴史学部卒業 (1988)

【職歴】

ロシア極東国立総合大学考古学・民族学博物館研究員 (1990)、ロシア極東国立総合大学考古学・民族学博物館主任学芸員 (1994年)、ロシア極東国立総合大学科学博物館副館長 (1999年)、ロシア極東国立総合大学考古学・民族学博物館館長 (2003年)、総合地球環境学研究所招へい外国人研究員 (2008)

【学位】

博士 (ロシア科学アカデミーシベリア支部 考古学・民族学研究所、ノボシビルスク 1996)

【専攻・バックグラウンド】

考古学、人類学

●主要業績

○論文

【原著】

- POPOV, Alexander; TABAREV, Andrei 2008 Neolithic cultures of the Russian Far East: technological evolution cultures sequence. Turkish Academy of Sciences Journal of Archaeology (11) :41-63. (査読付).
- POPOV, Alexander 2008 Burial complexes at the multilayered site Boisman-2 in southern Primorje. Archaeology, Ethnography and Anthropology 34(2) :68-75. (ロシア語) (査読付).

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- POPOV, Alexander Landscape Changes and Ancient Cultures of Holocene in the Continental Far East of Russia. NEOMAP Landscape Workshop at General Meeting, Mar 12, 2009-Mar 13, 2009, Kita-ku, Kyoto. (本人発表).
- POPOV, Alexander ロシア沿海州における新石器化と景観. 文明環境史領域プログラム講演会, Mar 05, 2009, 京都市北区. (本人発表).
- TKACHEV, Sergei; BAZAROV, Kiril; POPOV, Alexander; TABAREV, Andrei; BELUSHKIN, Mikhail Developing of natural landscapes at settlements in southern Primorye (mid. XIX - beg. XX centuries). "Neolithisation and Landscape" NEOMAP Landscape Workshop 2008, Oct 31, 2008-Nov 01, 2008, Kita-ku, Kyoto.
- POPOV, Alexander; TABAREV, Andrei Landscape shift and Neolithic remains of south-western Primorye in the middle Holocene. Prehistoric Landscape Shifts in the East Asian Inland Seas" Session at the 4th worldwide conference of Society for East Asian Archaeology (SEAA), Jun 03, 2008, Beijing, China. (本人発表).

○調査研究活動**【国内調査】**

- 沿海州の新石器化期に関する資料収集. 東京都渋谷区、神奈川県横浜市港北区, 2009年03月24日-2009年03月26日. (POPOV, Alexander、中村大).
- 琉球地方における新石器化期に関連する資料調査. 沖縄県中頭郡読谷村、中頭郡西原町、那覇市, 2009年03月15日-2009年03月18日. (POPOV, Alexander、TABAREV, Andrei、高宮広土、伊藤慎二).
- 沿海州WGに関する資料収集. 東京都文京区, 2009年02月21日-2009年02月22日.
- 沿海州WGに関する資料収集. 東京都多摩市、文京区、八王子市, 2009年02月05日-2009年02月07日.
- 沿海州における新石器化期の資料調査. 中国ハルビン市, 2008年05月30日-2008年06月02日. (POPOV, Alexander、伊藤慎二).

前川 愛 (まえかわ あい)

プロジェクト研究員

●主要業績**○その他の出版物****【解説】**

- 前川愛 2008年 モンゴルの「産業遺産」. 月刊みんぱく (3月号) :15.

○会合等での研究発表**【口頭発表】**

- Ai Maekawa The struggle for the establishment of Mongolian "National Design" in the architecture?: case study interviews with Mongolian architects", International symposium. Oral Histories of Socialist Modernities: Memories and Lived Experiences in Central and Inner Asia, 2008年12月16日-2008年12月17日, ケンブリッジ大学社会人類学科モンゴル・チベット研究ユニット. (本人発表).

○教育**【非常勤講師】**

- 滋賀県立大学, 人間文化学部, 文化人類学特論. 2008年04月-2008年05月.

榎林 啓介 (まきばやし けいすけ)

プロジェクト研究員

●1972年生まれ

【学歴】

熊本大学文学部史学科卒業（1995）、広島大学大学院文学研究科博士課程前期考古学専攻修了（1997）、広島大学大学院文学研究科研究生修了（1998）、中国・北京大学考古系高級進修生修了（2000）、広島大学大学院文学研究科博士課程後期考古学専攻修了（2004）

【職歴】

広島大学大学院文学研究科ティーチング・アシスタント（2001）、広島大学埋蔵文化財調査室教務補佐員（2004）、広島大学大学院文学研究科助手（埋蔵文化財調査室）（2005）、広島大学埋蔵文化財調査室教務補佐員（2007）

【学位】

博士（文学）（広島大学 2004）

【専攻・バックグラウンド】

考古学

【所属学会】

日本考古学協会、考古学研究会、日本中国考古学会、たたら研究会

●主要業績

○著書（編集等）

【編集・共編】

・UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; MAKIBAYASHI, Keisuke (ed.) Jan, 2009 Neolithisation and Landscape: NEOMAP International Workshop. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, 174pp.

○論文

【原著】

・MAKIBAYASHI, Keisuke 2009年01月 Cultivation System and Harvest-Processing System of Chinese Neolithic Agriculture and Their Transformation. UCHIYAMA, Junzo; LINDSTRÖM, Kati; ZEBALLOS, Carlos; NAKAMURA, Oki編 NEOMAP Interim Report 2008. NEOMAP, Kita-ku, Kyoto, pp. 85-94.

・榎林啓介 2008年10月 都市. 日本考古学協会2008年度愛知大会実行委員会編 日本考古学協会2008年度愛知大会研究発表資料集. 日本考古学協会2008年度愛知大会実行委員会, 名古屋市, pp. 438-439.

○その他の出版物

【解説】

・榎林啓介・中村慎一・村上由美子・小柳美柳 2008年12月 世界の遺跡 田螺山遺跡. 考古学研究 55(3) :118-120.

・榎林啓介 2008年05月 考古・文物. 中国研究所編 中国年鑑2008. 社団法人中国研究所, 東京都文京区, pp. 250-252.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

・榎林啓介 中国における日本人の考古・民俗資料の収集. ワークショップ「日本人の中国民具収集に関する事例研究」(奈良大学), 2008年12月08日, 奈良市. (本人発表).

・榎林啓介 中国新石器時代における栽培体系の形成と変容. 日本中国考古学会2008年度大会, 2008年11月22日, 石川県金沢市. (本人発表).

・榎林啓介 中国. 吹田市立博物館平成20年度秋季特別展関連シンポジウム「とりあえずビール! ビールをめぐる

世界の景観」, 2008年11月15日, 大阪府吹田市。(本人発表).

- ・榎林啓介 中国新石器時代における景観の変容-景観考古学から見た中国考古学転換の模索-. 第1回景観セミナー, 2008年05月26日, 京都市下京区。(本人発表).

○調査研究活動

【国内調査】

- ・新石器化期に関する資料調査. 福井県若狭市、滋賀県長浜市, 2008年11月02日. (内山純蔵、GILLAM, Christopher、JORDAN, Peter、SEYOCK, Barbara、ZEBALLOS, Carlos、細谷葵、榎林啓介、中村大).
- ・宋代の墓制に関する資料収集. 広島県東広島市、福岡県福岡市東区, 2008年08月27日-2008年08月30日.
- ・新石器化期に関する資料収集. 広島県庄原市, 2008年08月05日-2008年08月07日. (内山純蔵、榎林啓介).
- ・中国の新石器化期に関する資料収集. 広島県東広島市, 2008年05月17日-2008年05月20日.

【海外調査】

- ・浙江省の新石器化期に関する資料収集. 中国長沙市、武漢市、上海市, 2009年03月15日-2009年03月24日. (中島経夫、中島美智代、細谷葵、榎林啓介).
- ・中国浙江省の新石器化期に関する資料調査. 中国上海市、嘉興市、寧波市, 2009年01月13日-2009年01月22日. (榎林啓介、細谷葵).
- ・先史時代から漢代における考古遺跡のフィールド調査. 中国陝西省西安市, 2008年11月30日-2008年12月04日.
- ・中国の新石器化期に関する資料収集. 石川県金沢市, 2008年11月22日-2008年11月24日.

松永 光平 (まつなが こうへい)

研究員／拠点研究員

【学歴】

慶應義塾大学環境情報学部環境情報学科卒業 (2001)、東京大学新領域創成科学研究科環境学専攻修士課程修了 (2003)、東京大学新領域創成科学研究科環境学研究系自然環境学専攻博士後期課程修了 (2008)

【職歴】

日本学生支援機構駒場国際交流会館レジデントアシスタント (2004)、立命館大学文学部人文学科地理学専攻実習助手 (2007)

【学位】

学士 (環境情報学) (慶應義塾大学 2001)、修士 (環境学) (東京大学 2003)、博士 (環境学) (東京大学 2008)

【専攻・バックグラウンド】

地理学

【受賞歴】

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス科挙状元 (1999)

●主要業績

○論文

【原著】

- ・松永光平 2008 統万城風化剥蝕過程模式的の初歩研究. 中国古都学会 (ed.) 中国古都研究 22巻. 三秦出版社, 中国西安, pp. 467-472. (中国語)
- ・松永光平 2008年 中国統万城の風化削剥過程の初歩的なモデル. 歴史都市防災論文集 2. (査読付).

○外部資金の獲得

【科研費】

- ・ポスト「退耕還林」における水土流失危険度の総合的評価(研究代表者) 2009年-2011年03月. 若手研究(スタートアップ) (21810037-0003).

【その他の競争的資金】

- ・GISを用いた中国黄土高原における水系分布と規定要因の解明 2008年-2009年. 平成20年度東京地学協会研究・調査助成.

源 利文 (みなもと としふみ)

プロジェクト上級研究員

●1973年生まれ

【学歴】

京都大学理学部卒業(1997)、京都大学大学院理学研究科生物科学専攻博士前期課程修了(1999)、京都大学大学院理学研究科生物科学専攻博士後期課程修了(2003)

【職歴】

京都大学生態学研究センター研究機関研究員(2003)、産業技術総合研究所特別研究員(2005)、総合地球環境学研究所プロジェクト上級研究員(2007)

【学位】

博士(理学)(京都大学 2003)、修士(理学)(京都大学 1999)

【専攻・バックグラウンド】

分子生態学、微生物生態学、動物生理学、時間生物学

【所属学会】

日本動物学会、日本時間生物学会、日本生態学会、日本陸水学会

●主要業績

○論文

【原著】

- ・Minamoto, T., Honjo, M. N., Uchii, K., Yamanaka, H., Suzuki, A. A., Kohmatsu, Y., Iida, T., Kawabata, Z. Mar, 2009 Detection of cyprinid herpesvirus 3 DNA in river water during and after an outbreak. *Vet. Microbiol.* 135(3-4) :261-266. DOI:10.1016/j.vetmic.2008.09.081. (査読付).

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・源利文・本庄三恵・川端善一郎 琵琶湖におけるコイヘルペスウイルスの分布と季節変化. 第56回日本生態学会大会, 2009年03月17日-2009年03月21日, 岩手県岩手郡滝沢村、盛岡市. (本人発表).
- ・本庄三恵・源利文・松井一彰・内井喜美子・山中裕樹・鈴木新・神松幸弘・飯田貴次・川端善一郎 環境水中に存在するコイヘルペスウイルスの定量. 日本陸水学会第73回大会, 2008年10月10日-2008年10月13日, 北海道札幌市.
- ・Tanaka, N., Itayama, T., Honjo, M., Minamoto, T., Kawabata, Z. Development of a Rapid Concentration System for Virus in Environmental Water. 12th International Conference on Integrated Diffuse Pollution Management (IWA DIPCON 2008), Aug 27, 2008, Khon Kaen City, Thailand.
- ・Kawabata, Z., Minamoto, T., Honjo, M. N., Uchii, K., Yamanaka, H., Suzuki, A. A., Kohmatsu, Y. KHV-carp-human linkages: a case study in Lake Biwa, Japan. International Symposium on Environmental

Change, Pathogens, and Human Linkages, Jun 11, 2008–Jun 12, 2008, Kyoto, Japan.

【ポスター発表】

- ・山中裕樹・神松幸弘・源利文・本庄三恵・内井喜美子・鈴木新・川端善一郎 湖岸形態と水温分布：魚類への影響の考察. 日本生態学会第56回全国大会, 2009年03月17日-2009年03月21日, 岩手県滝沢村、盛岡市.
- ・松前ひろみ・源利文・花井修二・大石勝隆・安住薫・石渡龍輔・荻島創一・田中博・佐藤矩行・石田直理雄 カタユウレイボヤの概日リズム. 第15回日本時間生物学会学術大会, 2008年11月08日-2008年11月09日, 岡山県岡山市.
- ・Minamoto, T., Honjo, M. N., Uchii, K., Yamanaka, H., Suzuki, A. A., Kohmatsu, Y., Kawabata, Z. Detection of koi herpesvirus DNA from natural river water. International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages, Jun 11, 2008–Jun 12, 2008, Kyoto, Japan. (本人発表).
- ・Itayama, T., Tanaka, N., Honjo, M. N., Minamoto, T., Kawabata Z. Development of an on site rapid concentration system for virus in environmental water. International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages, Jun 11, 2008–Jun 12, 2008, Kyoto, Japan.
- ・Honjo, M. N., Minamoto, T., Matsui, K., Uchii, K., Yamanaka, H., Suzuki, A. A., Kohmatsu, Y., Iida, T., Kawabata, Z. Quantification method of Koi herpesvirus (KHV) in environmental water using cation-coated filter method and external standard virus. International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages, Jun 11, 2008–Jun 12, 2008, Kyoto, Japan.
- ・Yamanaka, H., Sogabe, A., Kohmatsu, Y., Minamoto, T., Honjo, M. N., Uchii, K., Suzuki, A. A., Omori, K., Kawabata, Z. Relationship of lake morphometry and shore configuration to the temperature distribution in lagoons, and implications for its effect on fish health. International Symposium on Environmental Change, Pathogens, and Human Linkages, Jun 11, 2008–Jun 12, 2008, Kyoto, Japan.

○調査研究活動

【国内調査】

- ・全国の一級河川における病原微生物の生態調査. 全国, 2008年07月-2008年08月.
- ・琵琶湖における病原微生物の生態調査. 滋賀県・琵琶湖一帯, 2008年04月-2009年03月.
- ・由良川における病原微生物の生態調査. 京都府・由良川流域, 2008年04月-2009年03月.

○社会活動・所外活動

【共同研究員、所外客員など】

- ・京都大学生態学研究センター, 協力研究員 (淡水域におけるコイヘルペスウイルスの動態解明). 2007年04月-2010年03月.

【その他】

- ・2008年05月09日 『地球環境問題としての病気』、同志社大学「環境システム学概論」ゲストスピーカー、京都府京田辺市

宮崎 英寿 (みやざき ひでとし)

プロジェクト研究員

●1975年生まれ

【学歴】

滋賀県立大学環境科学部卒業 (1999)、滋賀県立大学大学院環境科学研究科修士課程終了 (2000)、京都大学大学院農学研究科博士後期課程単位取得退学 (2007)

【職歴】

日本学術振興会特別研究員 (2003)、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員 (2007)

【学位】

環境科学修士（滋賀県立大学 2001）

【専攻・バックグラウンド】

土壌学

【所属学会】

日本土壌肥料学会、日本国際地域開発学会、システム農学会

●主要業績**○会合等での研究発表****【ポスター発表】**

- ・佐伯田鶴・菅野洋光・宮寄英寿・真常仁志 ザンビア南部州における気象観測. 日本気象学会, 2008年11月19日-2008年11月21日, 仙台.
- ・野呂葉子・真常仁志・宮寄英寿・田中樹・S. Sokotela・小崎隆 ザンビア東部州ミオンボ林における土壌特性値の空間変動 . 日本ペドロジー学会, 2008年04月05日-2008年04月06日, つくば.

○調査研究活動**【海外調査】**

- ・異なる農業生態系における生態レジリアンスの比較調査. ザンビア・南部州, 2009年03月16日-2009年03月31日.
- ・異なる農業生態系における生態レジリアンスの比較調査. ザンビア・南部州, 2008年10月25日-2009年12月18日.
- ・異なる農業生態系における生態レジリアンスの比較調査. ザンビア・南部州, 2008年08月18日-2008年09月18日.
- ・異なる農業生態系における生態レジリアンスの比較調査. ザンビア・南部州, 2008年04月01日-2008年04月25日.

○教育**【非常勤講師】**

- ・同志社大学, 工学部環境システム学科, 環境システム学概論 I. 2008年06月.

村上 由美子（むらかみ ゆみこ）

プロジェクト研究員

●1972年生まれ**【学歴】**

京都大学文学部卒業（1994）、京都大学文学研究科考古学専攻修士課程修了（1997）、京都大学文学研究科考古学専攻博士後期課程単位取得退学（2005）

【学位】

博士（文学）（京都大学 2008）、修士（文学）（京都大学 1997）

【専攻・バックグラウンド】

考古学、植生史学

【所属学会】

考古学研究会、植生史学会、文化財科学会

●主要業績

○著書（執筆等）

【翻訳・共訳】

- ・秋道智彌、内山純蔵、梅津千恵子、長田俊樹、片山一道、佐藤洋一郎、丹野研一、福永健二、村上由美子、森若葉 2008年07月．長田俊樹・佐藤洋一郎編 農耕起源の人類史．地球研ライブラリー，6．京都大学学術出版会，京都市左京区，pp.173-197．原著：ピーター・ベルウッド著 First Farmers: The Origins of Agricultural Societies. Blackwell Publishing ， .第6章を担当．

○論文

【原著】

- ・村上由美子 2008年08月 杵・臼．季刊 考古学（104）：72-76．

○会合等での研究発表

【ポスター発表】

- ・村上由美子、光谷拓実、横田洋三、北原 治 滋賀県哇ノ平遺跡出土材にみる古代の伐採・製材技術．日本文化財科学会 第25回大会，2008年06月14日-2008年06月15日，鹿児島市．

村松 伸（むらまつ しん）

教授

●主要業績

○著書（執筆等）

【分担執筆】

- ・ Shin Muramatsu Jan,2009 Why and How We Should Inherit Urban Environment Cultural Resources:Identifying,Listing,Evaluating,and Making Good Use of Urban Environmental Cultural Resources in Asia. Y.Fujio・T.Noguchi (ed.) Stock Management for Sustainable Urban Regeneration. Springer, pp. 57-65.
- ・村松伸、木村武史、加藤雄三、沖大幹 2008年 千年持続学の確立．木村武史編 千年持続学の構築．人社シリーズ本，13．東信堂，東京都文京区．

○著書（編集等）

【監修】

- ・mAAN INDONESIA Shin Muramatsu (supervisor) May,2008 rumah silaban silaban' s house. ，（英語，その他）

○論文

【原著】

- ・新田龍希・林憲吾・三村豊・村松伸 2008年 住宅の形態に見る近代パレンバンの文化交流・融合・混在 インドネシア・パレンバンの都市環境文化資源に関する研究その2．日本建築学会学術講演梗概集．

○その他の出版物

【報告書】

- ・村松伸編 2008年10月 ジャカルタプレインタビュー調査報告書．，125pp.

【その他の著作（商業誌）】

- ・村松伸 2008年07月 特集「上海」一進化する都市の未来へ．．ヒルズクラブ（30）：2-3．
- ・村松伸 2008年06月 小川一真 落日の紫禁城を記録する．芸術新潮：117．
- ・Shin Muramatsu 2008年04月 I WISH THAT YOU HAVE MANY SILABA. Sketsa（24）：66-67．

○会合等での研究発表

【ポスター発表】

- ・東京大学村松研究室 都市の拡大・縮小の原因を歴史的に解明する：全球都市全史プロジェクト。東京大学生研公開，2008年05月29日-2008年05月31日，東京大学生産技術研究所。

○その他の成果物等

【企画・運営(展示など)】

- ・ワークショップ「第4回ぼくらは街の探検隊発表会2008 アーバン・リテラシィ教育プログラム」，(企画)。2008年05月29日，東京大学生産技術研究所。

【創作活動】

- ・Silaban Workshop (監修) 2008年。DVD，自費作成。(日本語, 英語)
- ・ぼくらはまちの探検隊 (監修) 2008年。DVD，自費作成。

【その他】

- ・2008年 「ジャカルタヘリテイジマップ」

門司 和彦 (もじ かずひこ)

教授

●1953年生まれ

【学歴】

東京大学医学部保健学科卒業 (1976)、東京大学医学部研究生 (1978)、東京大学大学院医学研究科修士課程 (保健学専攻) 終了 (1980)、東京大学大学院医学研究科博士課程 (保健学専攻) 単位取得済退学 (1983)

【職歴】

東京大学医学部助手 (1983)、長崎大学医学部助教授 (1987)、ハーバード大学公衆衛生大学院国際保健武見フェロー (1991-92)、ケンブリッジ大学生物人類学部客員研究員・チャーチルカレッジ准フェロー (1998-2000)、長崎大学医療技術短期大学部教授 (1999)、長崎大学医学部教授 (2001)、長崎大学熱帯医学研究所教授 (2002)、長崎大学熱帯医学研究所附属熱帯感染症研究センター長 (2006)、総合地球環境学研究所客員教授 (2006)、総合地球環境学研究所教授 (2007.10-)

【学位】

保健学博士 (東京大学 1987)、保健学修士 (東京大学 1980)

【専攻・バックグラウンド】

人類生態学・熱帯公衆衛生学

【所属学会】

日本熱帯医学会 (監事2009-2011)、日本民族衛生学会 (幹事)、日本国際保健医療学会 (理事)、日本公衆衛生学会、日本人口学会、日本生態人類学会 (2009年度大会長)、Society of Study of Human Biology (UK)

●主要業績

○著書 (執筆等)

【分担執筆】

- ・大場保・富田晋介・足達慶尚・金田英子・門司和彦 2008年05月 人口転換。秋道智彌編 モンスーンアジアの生態史—地域と地球をつなぐ—。論集モンスーンアジアの生態史，第3巻。弘文堂，東京都，pp.10-25。

○論文

【原著】

- Abe T, Honda S, Nakazawa S, Tuong TD, Thieu NQ, Hung le X, Thuan le K, Moji K, Takagi M, Yamamoto T. Jan, 2009 Risk factors for malaria infection among ethnic minorities in Binh Phuoc, Vietnam.. Southeast Asian J Trop Med Public Health 40(1) :18-29. (査読付) .
- Kagawa M, Tahara Y, Byrne NM, Moji K, Tsunawake N, Hills AP. Oct, 2008 Are Japanese criteria for obesity useful for screening at risk Japanese? Consideration from anthropometric indices-percentage body fat relationships.. Asia Pac J Public Health 20 Suppl. :102-110. (査読付) .
- Tahara Y, Moji K, Honda S, Nakao R, Tsunawake N, Fukuda R, Aoyagi K, Mascie-Taylor N. May, 2008 Fat-free mass and excess post-exercise oxygen consumption in the 40 minutes after short-duration exhaustive exercise in young male Japanese athletes.. J Physiol Anthropol 27(3) :139-143. DOI:10.2114/jpa2.27.139. (査読付) .

○その他の出版物

【報告書】

- 門司和彦 2009年03月 アジアにおけるマラリア制圧 -- 「世界マラリア計画」のその後を追う --. 「シーダー」編集委員会(編集長 秋道智彌編 SEEDer 2009 No.0 地域環境情報から考える地球の未来. , pp.39-43.
- 門司和彦、奥宮清人 2008年11月 ラオス水田農民の健康・疾病プロフィール. 東南アジア学会会報 第89号. , pp.29-30.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- 友川 幸、小林敏生、金田英子、Tiengkham PONGVONGSA、Boungnong BOUPHA、門司和彦 ラオス中南部の農村地域における小学校教師のタイ肝吸感染に関するKAPと保健衛生教育に関する研修経験. 第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会, 2008年10月25日-2008年10月26日, 東京.
- サトウ恵、Tiengkham Pongvongsa、Keomoungkhoun Malaythong、Phimmayoi Inthava、Sanguankiat Surapol、Yoonuan Tippayarat、Homsuan Nirundorn、門司和彦、Boungnong Boupa、Jitra Waikagul ラオス・ラハナム村における適切な寄生虫感染症対策実施のための基礎調査. 第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会, 2008年10月25日-2008年10月26日, 東京.
- 阿部朋子、砂原俊彦、本田純久、トゥオン チン ディン、トゥアン レ カン、中澤秀 介、門司和彦、高木正洋、山本太郎 ベトナム南部の少数民族居住地域における マラリア感染のリスクファクター. 第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会, 2008年10月25日-2008年10月26日, 東京.
- Xangsayarath Phonpadith, 金田英子、Tiengkham Pongvongsa, Boungnong Boupaha, 門 司和彦 ラオスセボン郡における蚊帳使用と熱帯熱マラリアの感染. 第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会, 2008年10月25日-2008年10月26日, 東京.
- Kazuhiko Moji To fill the health gap between rich and poor: The need for the second ORT revolution. Free workshop on poverty, malnutrition, and infectious diseases. 第49回日本熱帯医学会大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会, 2008年10月25日-2008年10月26日, 東京.
- 伊藤 誠、金田英子、門司和彦、Tiengkham Pongvongsa, 坪井敬文、長岡史晃、木村英 作 尿を使ったマラリアの疫学調査は可能か?. 第49回日本熱帯医学会大会・第23回 日本国際保健医療学会学術大会, 2008年10月25日-2008年10月26日, 東京.
- 門司和彦 ラオス水田農民の健康・疾病プロフィール. 東南アジア学会 , 2008年06月07日-2008年06月08日, 大阪市. (本人発表). パネル4「東南アジア生態史の構築に向けて」での口頭発表.
- 竹内 昌平, 門司 和彦, Li Yuesheng, He Yongkang, Zhou Huan, 渡辺 知保, 大塚 柳太郎, 黒田 嘉紀 中国湖南省洞庭湖周辺集落における日本住血吸虫感染症と村民の行動のリスク評価. 平成20年度九州地方会学会, 地方会・研究会記録, 2008年, .産業衛生学雑誌 50(5), 155 ,20080920.

【ポスター発表】

- 蔡 国喜、門司和彦、張 卓、吳 小南、林 旭、張 孔來、李 式堯 国境地域における流動人口の健康保健及びエイズ/性感染症に関する疫学調査. 第49回日本熱帯医学会 大会・第23回日本国際保健医療学会学術大会, 2008年10月

25日-2008年10月26日，東京。

○教育

【非常勤講師】

- ・長崎大学，国際健康開発研究科修士課程，人口動態・集団保健学．2008年04月-2010年03月．7回分を担当．
- ・長崎大学，国際健康開発研究科（修士課程），健康増進・教育学．2008年04月-2010年03月．7回分を担当．
- ・長崎大学，熱帯医学研究3ヶ月コース，熱帯公衆衛生学．2008年04月-2010年03月．毎年、6月に1回3時間の講義を実施．
- ・東京大学，医学系研究科・国際保健学専攻，人類生態学．2008年04月-2010年03月．毎年、3時間の講義を実施「国際保健への人類生態学的アプローチ」．
- ・宮崎大学，医学部，環境保健学．2008年04月-2010年03月．毎年11月ごろ、国際保健に関する講義を3時間実施．

森 若葉 (もり わかは)

プロジェクト上級研究員

【学歴】

京都大学文学部（1993）卒業、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1996）、京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学（2002）

【職歴】

日本学術振興会特別研究員（1996）、京都大学大学院文学研究科研修員（2002）、京都造形芸術大学非常勤講師（2002）、同志社女子大学非常勤講師（2004）、京都大学非常勤講師（2004）、京都大学大学院文学部研究科附属ユーラシア文化研究センター研究科外センター員（2005）、総合地球環境学研究所プロジェクト上級研究員（2006）

【学位】

博士（文学）（京都大学 2005）、修士（文学）（京都大学 1996）

【専攻・バックグラウンド】

シュメール学、言語学

【所属学会】

日本言語学会、オリエント学会

●主要業績

○著書（執筆等）

【翻訳・共訳】

- ・森 若葉 2008年06月 語族は人類の先史に対してどのような意味をもつのか（第9章）、農耕の拡散—考古学と言語学の比較から（第10章）．長田俊樹、佐藤洋一郎編 農耕起源の人類史．地球研ライブラリー，6．京都大学学術出版会，京都市，pp.279-398．原著：ピーター・ベルウッド著 First Farmers: The Origins of Agricultural Societies. Blackwell Publishing，オックスフォード（イギリス），pp.180-251．

○その他の出版物

【解説】

- ・池田 潤，森 若葉 2008年 古代オリエント言語研究の動向—第53回国際アッシリア学会報告．オリエント 50 ；

【報告書】

- ・森 若葉 2009年02月 バビロニア人からみたシュメール語～最近のシュメール語研究によせて．シリア・メソポタミア世界の文化接触：民族・文化・言語研究集会報告集．セム系部族社会の形成・ユーフラテス流域ビシュリ山系

の総合研究, 文部科学省科学研究費 特定領域研究 (研究領域番号:124) , pp. 10-19.

- ・前川和也、森 若葉 2008年 初期メソポタミア史のなかのディルムン、マガン、メルッハ. インダスプロジェクト編 環境変化とインダス文明 2007年度成果報告書. , pp. 155-167.

【その他の著作(会報・ニュースレター等)】

- ・前川和也、森 若葉 2008年 初期メソポタミア史のなかのディルムン、マガン、メルッハ. Integrated Research in the Bishri Mountains on the Middle Euphrates セム系部族社会の形成 (特定領域研究 「セム系部族社会の形成・ユーフラテス流域ビシュリ山系の総合研究」 Newsletter) (11) :14-23.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・Wakaha MORI, Kazuya MAEKAWA Dilmun, Magan and Meluhha in Early Mesopotamian History: 2500-1600 BC . Cultural Relations between the Indus Valley and the Iranian Plateau during the Third Millennium BC. Research Institute for Humanity and Nature, Jun 07, 2008-Jun 08, 2008, Kyoto. (本人発表).
- ・森 若葉 「シュメール文学作品にみられる異国の文物：シュメール、アッカド人からみた周辺世界」. 第51回シュメール研究会, 2008年05月24日-2008年05月25日, 京都大学 (京都市) . (本人発表).

○社会活動・所外活動

【依頼講演】

- ・「楔形文字ーあなたの名前を古代メソポタミアの文字で書いてみよう」. , 2008年12月13日, 三重県多気町多気郷土資料館 (三重県多気町) .

【その他】

- ・2008年06月10日 「楔形文字の世界」兵庫県阪神シニアカレッジ 国際交流学科 (兵庫県尼崎市)

安成 哲平 (やすなり てっぺい)

プロジェクト研究員

●1979年生まれ

【学歴】

弘前大学工学部地球環境学科卒業(2003)、北海道大学地球環境科学研究科地圏環境科学専攻修士課程修了(2005)、北海道大学環境科学院地球圏科学専攻博士課程修了(2008)

【職歴】

北海道大学低温科学研究所 (大学院環境科学院) 21世紀COEリサーチアシスタント(2005)、北海道大学低温科学研究所リサーチアシスタント(2007)、大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所プロジェクト研究員(2008)

【学位】

博士 (環境科学)

【専攻・バックグラウンド】

気象学、雪氷学、気候学

【所属学会】

日本気象学会、日本雪氷学会、American Geophysical Union (AGU), International Glaciological Society (IGS)

【受賞歴】

日本学生支援機構 第一種奨学金 優秀者返還半額免除 (博士後期課程貸与分) (2008)、中谷宇吉郎科学奨励賞 (加賀市) (2009. 2月)

●主要業績

○論文

【原著】

- ・Yasunari, T. J. and K. Yamazaki Feb, 2009 Impacts of Asian dust storm associated with the stratosphere-to-troposphere transport in the spring of 2001 and 2002 on dust and tritium variations in Mount Wrangell ice core, Alaska. Atmos. Environ. 43 :2582-2590. DOI:10.1016/j.atmosenv.2009.02.025. (査読付).

○その他の出版物

【書評】

- ・加賀・中谷宇吉郎科学奨励賞. 北陸日中新聞, 2009年02月17日.
- ・宇吉郎奨励賞2人をたたえ. 北國新聞, 2009年02月17日.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・安成哲平, 白岩孝行, 的場澄人, 佐々木央岳, 東久美子 北部北太平洋域の過去30年のダスト変動: 2001年4月の大規模黄砂の降下量は大きい. 日本気象学会2008年度秋季大会, 2008年11月20日, 仙台. (本人発表).

【ポスター発表】

- ・Teppei J. Yasunari, Koji Yamazaki, Takayuki Shiraiwa, and T Hondoh Importance of spring cyclonic activities in East Asia on Asian dust storm and the Stratosphere-to-Troposphere transport. First International Conference: From Deserts to Monsoons, Jun 01, 2008-Jun 06, 2008, Crete, Greece. (本人発表).

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- ・安成哲平 アイスコアってな～に?～黄砂と成層圏の物質を探る～. 平成20年度中谷宇吉郎科学奨励賞受賞記念講演, 2009年02月, 加賀.
- ・安成哲平 アラスカのアイスコアが語る過去30年の黄砂と成層圏対流圏輸送 (STT) の情報. 京都大学 地球惑星科学専攻 地球科学輻合部特別講演会, 2008年10月, 京都.
- ・安成哲平, 白岩孝行, 的場澄人, 佐々木央岳 降下物モニタリングについてのコメント「北太平洋域自由対流圏高度のダスト変動: 黄砂のケーススタディから季節・経年変動まで」. ダストの動態解明に関する研究集会, 2008年09月, 名古屋.

○その他の成果物等

【創作活動】

- ・「うおつきりんのうた」 (アムール・オホーツクプロジェクトのテーマソングを作曲) 2009年02月.
<http://www.chikyu.ac.jp/AMORE/>.

安元 純 (やすもと じゅん)

プロジェクト研究員

●1977年生まれ

【学歴】

沖縄県立那覇西高等学校卒業(1996)、高知大学農学部生産環境工学科卒業(2001)、高知大学大学院農学研究科生産環境工学専攻修了(2003)、愛媛大学大学院連合農学研究科生物環境保全学専攻修了(2006)

【職歴】

九州大学大学院工学研究院 環境都市部門 学術研究員(2007)、総合地球環境学研究所 プロジェクト研究員(2008)

【学位】

農学博士

【専攻・バックグラウンド】

農業工学・地下水水文学

【所属学会】

地下水学会, 農業農村工学会, 土木学会, 日本地球惑星科学連合, アメリカ地球物理学連合

【受賞歴】

2008年11月: 日本地下水学会春季講演会 若手優秀講演賞受賞

●主要業績

○論文

【原著】

- ・ Mamoru Katsuki, Jun Yasumoto, Yoshinari Hiroshiro & Kenji Jinno 2008 Estimation of groundwater discharge to the sea using a distributed recharge model. From Headwaters to the Ocean -Hydrological Change and watershed management. Taylor & Francis Group, pp.625-630. (査読付).

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・ 安元 純 鳥海山沿岸域におけるラドンをを用いた海底地下水湧出量の推定. 日本地下水学会秋季講演会, 2008年11月, 福岡市. (本人発表).
- ・ 安元 純 広域地下水流動モデルによる有明海への地下水流出量の推定. 日本地球惑星科学連合大会, 2008年05月, 千葉市. (本人発表).
- ・ 安元 純 有明海へ流入する地下水経路の栄養塩負荷量の算定. 日本地下水学会, 2008年05月, 東京. (本人発表).

【ポスター発表】

- ・ 安元 純 Evaluation of submarine groundwater discharge in coastal aquifers at Osaka Bay, Japan by numerical simulation. 2008 AGU Fall Meeting, 2008年12月, サンフランシスコ, アメリカ.
- ・ 安元 純 Tidal effect on submarine groundwater discharge in coastal aquifers at Osaka Bay. IAH2008, 2008年10月, 富山市.

○調査研究活動

【国内調査】

- ・ 鳥海山から海域への地下水流出量の時空間変動を推定することを目的として, 海底湧水の流速測定および水質分析, 海水と地下水の採水及び放射性同位体元素の現地測定. 山形県鳥海山沿岸域, 2008年07月23日-2008年07月27日.
- ・ 地下環境プロジェクト(都市の地下環境に残る人間活動の影響)に係る現地観測手法・技術を申請者が習得する目的で, 有明海の海水と陸域地下水の採水及び放射性同位体元素の現地測定. 有明海沿岸, 2008年07月04日-2008年07月08日.

【海外調査】

- ・ アジア巨大都市における地下水に伴う汚染物質移動の変化を明らかにする目的で, タイ バンコクのチャオプラヤ川河口に自動地下水湧出量計を設置し, 海底地下水湧出の継続モニタリング調査を実施. バンコク, タイ, 2009年02月01日-2009年02月06日.
- ・ アジア巨大都市における地下水流動の変化とそれともなう汚染物質移動の変化を明らかにする目的で, タイ バンコクの深層地下水調査, 浅層地下水調査, 沿岸堆積物採取, ピエゾメピエゾメータによる再循環水の採水を実

施. タイ バンコク, 2008年08月03日-2008年08月13日.

○外部資金の獲得

【その他の競争的資金】

- ・大阪湾御前浜の生物生息環境に海底地下水湧出が及ぼす影響 2008年. 大阪湾圏域における海域環境の再生・創造に係る研究の助成事業 大阪湾広域臨海環境整備センター.

○教育

【非常勤講師】

- ・神戸大学, 農学部, 集中講義「アジアの農業戦略入門」. 2009年03月.
- ・同志社大学, 工学部, 環境システム学概論I. 2008年11月.

谷田貝 亜紀代 (やたがい あきよ)

助教

●1968年生まれ

【学歴】

筑波大学自然科学類地球科学専攻卒業 (1990)、筑波大学大学院博士課程地球科学研究科地理学・水文学 (気候・気象学) 修了 (1996)

【職歴】

宇宙開発事業団地球観測データ解析研究センター招聘研究員 (科学技術特別研究員) (1995)、宇宙開発事業団地球観測データ利用研究センター宇宙開発特別研究員 (1998)、京都大学防災研究所非常勤講師 (COE) (2001)、総合地球環境学研究所研究部助手 (2002)、明治大学非常勤講師兼任 (2003)

【学位】

博士 (理学) (筑波大学 1996)、修士 (理学) (筑波大学 1992)

【専攻・バックグラウンド】

気候学、気象学

【所属学会】

日本気象学会、日本水文・水資源学会、日本地理学会、米国気象学会 (AMS)、米国地球物理学連合 (AGU)

●主要業績

○論文

【原著】

- ・Yatagai, A., P. Xie and P. Alpert 2008 Development of a daily gridded precipitation data set for the Middle East. *Advance in Geosci* 12 :165-170. (査読付) .
- ・Yatagai, A., H. Kawamoto and P. Xie 2008 Products and validation of GAME re-analyses and JRA-25: Precipitation. Extended abstract for Third WCRP International Conference on Reanalysis .
- ・Kitoh, A., A. Yatagai and P. Alpert 2008 Reply to comment by Ben-Zvi and Givati on 'First super-high-resolution model projection that the ancient "Fertile Crescent" will disappear in this century. *Hydrological Research Letters* 2 :46. DOI:10.3178/hrl.2.46. (査読付) .
- ・Yatagai, A., and H. Kawamoto Dec,2008 Quantitative estimation of orographic precipitation over the Himalayas by using TRMM/PR and a dense network of rain gauges. *Proc. SPIE* 7148. DOI:10.1117/12.811943. (査読付) .

○その他の出版物

【報告書】

- ・谷田貝亜紀代 他 2008年 B062 アジアの水資源への温暖化影響評価のための日降水量グリッドデータの作成. 環境省地球環境局総務課研究調査室編 地球環境研究総合推進費 平成19年度研究成果. B062 アジアの水資源への温暖化影響評価のための日降水量グリッドデータの作成, 地球環境研究総合推進費 (B062), pp. 107-138.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・Yatagai, A. A quantitative estimate of orographical precipitation over Himalayas by TRMM/PR and dense rain-gauge network. SPIE, Nov 17, 2008–Nov 21, 2008, New Caledonia. (本人発表).
- ・Takashima, H., A. Yatagai, H. Kawamoto, O. Arakawa and K. Kamiguchi Hydrological balance over northern Eurasia from gauge-based high-resolution daily precipitation data. Hydrochange 2008 in Kyoto, Oct 01, 2008–Oct 03, 2008, Kyoto.
- ・Yatagai, A. The Isotopic Composition of Water Vapor and the Concurrent Meteorological Condition over the Northern Part of the Tibetan Plateau. AMS Mountain Meteorology, Aug 11, 2008–Aug 15, 2008, Vancouver, Canada. (本人発表).
- ・川本温子. 谷田貝亜紀代. 高島久洋. 上口賢治. 荒川理 雨量計に基づいた高分解能グリッド日降水データの作成—APHROデータセット(0.25および0.5度水平分解能)—. 日本気象学会2008年度春季大会, 2008年05月18日–2008年05月21日, 神奈川県横浜市.
- ・高島久洋. 谷田貝亜紀代. 川本温子. 荒川理. 上口賢治 北ユーラシア域における雨量計ベース日降水量格子点データ作成. 日本気象学会2008年度春季大会, 2008年05月18日–2008年05月21日, 神奈川県横浜市.
- ・谷田貝亜紀代 中近東地域の降水・水循環変動の解析. 日本気象学会2008年度春季大会, 2008年05月18日–2008年05月21日, 神奈川県横浜市. (本人発表).

【ポスター発表】

- ・Yatagai, A. Interannual Variation of Summertime Precipitation around the Northern Part of the Tibetan Plateau in China. AGU 2008 Fall Meeting, Dec 15, 2008–Dec 19, 2008, San Francisco.
- ・Yatagai, A., H. Kawamoto, M. I. Nodzu, T. Watanabe, J. Kubota, A. Kitoh, K. Kamiguchi, O. Arakawa, and S. Kanae Asian Precipitation-Highly-Resolved Observational Data Integration Towards Evaluation of the Water Resources (APHRODITE's Water Resources). Conference of APHW in Beijing, 2008, Nov 03, 2008–Nov 05, 2008, Beijing, China.
- ・Yatagai, A., Sugimoto A. and Nakawo M. Isotopic Composition of Water Vapor and Concurrent Meteorological Conditions Around the Arid Regions of China and the Tibetan Plateau. First International Conference: From Deserts to Monsoons, Jun 01, 2008–Jun 06, 2008, Crete, Greece.
- ・Yatagai, A. Interannual Variation in the Atmospheric Branch of the Hydrological Cycle Over the Fertile Crescent. First International Conference: From Deserts to Monsoons, Jun 01, 2008–Jun 06, 2008, Crete, Greece.

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- ・谷田貝亜紀代 APHRDITE's Water Resources. 名古屋大学 (HyARC), Feb 10, 2009, 名古屋.
- ・谷田貝亜紀代 APHRDITE's Water Resources. IGWCO, Feb 02, 2009–Feb 03, 2009, 京都.
- ・谷田貝亜紀代 アジアの水資源への温暖化影響評価のための日降水量グリッドデータの作成. 農業気象環境学研究所, 2008年09月12日, つくば.
- ・谷田貝亜紀代 APHRDITE's Water Resources. 第2回GEOSS アジア太平洋会合水セッション, Apr 14, 2008–Apr 16, 2008, 東京.

○学会活動（運営など）

【企画・運営・オーガナイズ】

- ・Sixth Internatinoal Asia-Pacific Remote Sensing Symposium 2008, Convener (Conference Chair of Remote

Sensing and Modeling of the Atmosphere, Oceans Interactions II). 2008年11月17日-2008年11月21日, Le Meridien Noumea, Noumea New Caledonia. (Certificate of Appreciation for outstanding contribution and dedicated service as conference chair of the Remote sensing and modeling of the atmosphere, oceans, and interactions II conference) .

【組織運営】

- ・水文水資源学会, 理事. 2008年08月-2010年07月.

○外部資金の獲得

【科研費】

- ・長期再解析データによる人間活動を含めた陸域大気水循環の変動の評価(研究代表者) 2007年04月-2009年03月. 日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 (C).
- ・清代档案館資料によるユーラシア乾燥域の降水変動の復元研究(研究分担者) 2007年04月-2010年03月. 日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 (A). 代表: 中尾正義.

【受託研究】

- ・アジアの水資源への温暖化影響評価のための日降水量グリッドデータの作成 2006年04月-2011年03月. 環境省地球環境研究総合推進費, 問題解決型研究 (B062).

山中 裕樹 (やまなか ひろき)

プロジェクト研究員

●1979年生まれ

【学歴】

三重大学生物資源学部卒業 (2002)、京都大学大学院理学研究科博士前期課程修了 (2004)、京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了 (2007)

【職歴】

京都大学生態学研究センター リサーチアシスタント(2004, 2005, 2006)、総合地球環境学研究所 プロジェクト研究員 (2007)

【学位】

博士 (理学) (京都大学 2007)、修士 (理学) (京都大学 2004)

【専攻・バックグラウンド】

生態学、水産学

【所属学会】

日本生態学会、日本魚類学会、日本陸水学会

●主要業績

○論文

【原著】

- ・Toshifumi Minamoto, Mie N. Honjo, Kimiko Uchii, Hiroki Yamanaka, Alata A. Suzuki, Yukihiro Kohmatsu, Takaji Iida, Zen' ichiro Kawabata Mar, 2009 Detection of cyprinid herpesvirus 3 DNA in river water during and after an outbreak. *Veterinary Microbiology* 135 :261-266. DOI:doi:10.1016/j.vetmic.2008.09.081. (査読付) .

山村 則男 (やまむら のりお)

教授

●1947年生まれ

【学歴】

京都大学理学部物理学科卒業（1969）、京都大学理学研究科修士課程修了（1971）、京都大学理学研究科博士課程退学（1975）

【職歴】

佐賀医科大学医学部助教授（1978）、佐賀医科大学医学部教授（1995）、京都大学生態学研究センター教授（1996）、総合地球環境学研究所教授（2007）

【学位】

理学博士（1977）、理学修士（1971）

【専攻・バックグラウンド】

数理生態学、進化生物学

【所属学会】

日本生態学会、日本個体群生態学会、日本進化学会、日本数理生物学会、国際社会性昆虫学会、日本動物行動学会

【受賞歴】

日本生態学会賞（2007）

●主要業績

○論文

【原著】

- ・ Nakazawa, T., Ohgushi, T. and Yamamura, N. Jan, 2009 Food-dependent reproductive adjustment and stability of consumer-resource dynamics. *Population Ecology* 51(1) :105-113. DOI:10.1007/s10144-008-0101-9. (査読付) .
- ・ Nakazawa, T. and Yamamura, N. Jan, 2009 Theoretical considerations for the maintenance of interspecific brood care by a Nicaraguan cichlid fish: behavioral plasticity and spatial structure. *Journal of Ethology* 27(1) :67-73. DOI:10.1007/s10164-008-0085-0. (査読付) .
- ・ Miki, T., Yokokawa, T., Nagata, T. and Yamamura, N. Aug, 2008 Immigration of prokaryotes to local environments enhances remineralization efficiency of sinking particles: A metacommunity model. *Marine Ecology Progress Series* 366 :1-14. DOI:DOI: 10.3354/meps07597. (査読付) .

○その他の出版物

【その他の著作(会報・ニュースレター等)】

- ・ 山村則男 2008年 田舎と都市：人間の移動モデル、第4回生物数学の理論とその応用。数理解析研究所講究録 1597 :301-303.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・ 山村則男 人間移動の数理モデル：都市と田舎。第55回日本生態学会，2008年11月01日，福岡市。（本人発表）。
- ・ 山村則男 土地利用の数理モデル：私有か共有か。第18回日本数理生物学会，2008年09月16日-2008年09月18日，京都市。（本人発表）。
- ・ 山村則男 生態系ネットワークの再生と崩壊。東アジア次世代リーダープログラム，2008年06月09日，京都市。
- ・ 酒井章子・藤田昇・山村則男 マレーシア熱帯林とモンゴル草原の大自然と環境破壊。第25回地球研市民セミ

ナー, 2008年04月18日, 京都市. (本人発表).

山本 圭香 (やまもと けいこ)

プロジェクト研究員

●1974年生まれ

【学歴】

京都大学農学部農芸化学科卒業 (1998)、京都大学大学院農学研究科応用生命科学専攻修士課程修了 (2000)、京都大学大学院農学研究科応用生命科学専攻博士後期課程退学 (2002)、京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻地球物理学分野修士課程修了 (2004)、京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻地球物理学分野博士後期課程修了 (2007)

【職歴】

京都大学理学研究科・講師 (研究機関研究員) (2007)

【学位】

博士 (理学) (2007)、修士 (理学) (2004)、修士 (農学) (2000)

【専攻・バックグラウンド】

測地学

【所属学会】

日本測地学会、American Geophysical Union

●主要業績

○論文

【原著】

- ・ Yamamoto K., Fukuda Y, Doi K, Motoyama H Dec, 2008 Interpretation of the GRACE Mass Trend in Enderby Land, Antarctica. *Polar Science* 2(4) :267-276. DOI:10.1016/j.polar.2008.10.001. (査読付) .
- ・ Yamamoto, K., T. Hasegawa, Y. Fukuda, T. Nakaegawa, Taniguchi, M. Oct, 2008 Improvement of JLG terrestrial water storage model using GRACE satellite gravity data, in Headwaters to the Ocean. Taniguchi, M., Burnett, W.C., Fukushima, Y., Haigh, M., Umezawa, Y. (ed.) From Headwaters to the Ocean. Taylor & Francis Group, London, pp.369-374. (査読付) .
- ・ Hasegawa, T., Fukuda, Y., Yamamoto, K., Nakaegawa, T. Oct, 2008 The 2006 Australian drought detected by GRACE. Taniguchi, M., Burnett, W.C., Fukushima, Y., Haigh, M., Umezawa, Y. (ed.) From Headwaters to the Ocean. Taylor & Francis Group, London, pp.363-367. (査読付) .

○その他の出版物

【解説】

- ・ 谷口真人、山本圭香 2008年 グローバル気候変動と新しい地下水資源量評価 その1 - 衛星GRACEを用いた陸水貯留量評価の可能性. 地下水学会誌 50(4) :291-293.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・ Yamamoto, K., T. Nakaegawa, T. Hasegawa, Y. Fukuda, Taniguchi, M. Study of terrestrial water storage in Africa using GRACE satellite gravity data and JLG terrestrial water storage model. Groundwater & Climate in Africa, Jun 24, 2008-Jun 28, 2008, Kampala, Uganda. (本人発表).
- ・ Yamamoto, K., T. Hasegawa, Y. Fukuda, T. Nakaegawa, Taniguchi, M. Improvement of JLG terrestrial water

storage model using GRACE satellite gravity data. HydroChange 2008, Oct 01,2008-Oct 03,2008, Kyoto, Japan. (本人発表).

- Yamamoto, K., T. Hasegawa, Y. Fukuda, T. Nakaegawa, Taniguchi, M. Improvement of JLG terrestrial water storage model using GRACE satellite gravity data. GRACE Science Team Meeting, Dec 12,2008-Dec 13,2008, San Francisco, USA. (本人発表).
- 山本圭香, 福田洋一、長谷川崇、仲江川敏之、谷口真人 Kaula則による GRACE重力場の時間変動成分のスケーリングについて. 地球惑星科学連合大会, May 25,2008-May 30,2008, 幕張、千葉. (本人発表).
- 山本圭香, 福田洋一、土井浩一郎 GRACEの衛星重力データによる南極氷床変動の研究-気圧補正誤差の除去による経年変化の再計算-. 極域地学シンポジウム, 2008年10月16日-2008年10月17日, 板橋区、東京. (本人発表).
- Hasegawa, T., Fukuda, Y., Yamamoto, K., Nakaegawa, T. and Tamura, Y. 2006 Australian drought detected by GRACE. Gravity, Geoid and Earth Observation, Jun 23,2008-Jun 27,2008, Crete, Greece.
- Hasegawa, T., Fukuda, Y., Yamamoto, K., Nakaegawa, T. The 2006 Australian drought detected by GRACE. HydroChange 2008, Oct 01,2008-Oct 03,2008, Kyoto, Japan.
- Hasegawa, T., Fukuda, Y., Sun, W., Fu, G., Okuno, J., Yamamoto, K. Co-seismic and Post-seismic Gravity Changes caused by the 2004 Sumatra- Andaman earthquake: comparison of GRACE data with SNREI Model. GRACE Science Team Meeting, Dec 12,2008-Dec 13,2008, San Francisco, USA.
- 長谷川崇、福田洋一、仲江川敏之、田村良明、山本圭香 GRACE及びSGによって検出された2006年オーストラリアの大旱魃. 日本測地学会第110回講演会, 2008年10月22日-2008年10月24日, 函館、北海道.

【ポスター発表】

- Yamamoto, K., T. Nakaegawa, Y. Fukuda, Taniguchi, M. Recovery of basin-scale landwater variations using GRACE data for the correction of groundwater monitoring with in-situ gravimetry. XXXVI IAH Congress, Oct 26,2008-Nov 01,2008, Toyama, Japan. (本人発表).
- Yamamoto, K., Fukuda, Y., Doi, K Antarctic Ice Sheet Mass Variation Using GRACE Satellite Gravity Data- Removal of Atmospheric Correction Error and Recalculation of the Interannual Mass Trend-. AGU Fall Meeting, Dec 15,2008-Dec 19,2008, San Francisco, USA. (本人発表).
- 山本圭香, 仲江川敏之、長谷川崇、福田洋一、谷口真人 GRACE衛星重力 データによるJRA-JCDAS LDA and GRiveT Terrestrial Water Storage Modelの検証. 地球惑星科学連合大会, 2008年05月25日-2008年05月30日, 幕張、千葉. (本人発表).
- Taniguchi, M, Yamamoto, K., Sarukkalgige, P R, Regional assessments of groundwater resources by uses of satellite GRACE and GRAPHIC network in Western Australia. AGU Fall Meeting, Dec 15,2008-Dec 19,2008, San Francisco, USA.
- Hasegawa, T., Fukuda, Y., Fu, G., Sun, W., Okuno, J., Yamamoto, K. Coseismic and Postseismic Gravity Changes Associated with the 2004 Sumatra Earthquake: Comparison between GRACE and SNREI model. AGU Fall Meeting, Dec 15,2008-Dec 19,2008, San Francisco, USA.

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- Yamamoto, K., Y. Fukuda, M., Taniguchi, M Study of Sub-basin Scale Groundwater Variations in Asia Using GRACE, Satellite Altimetry and in-situ Data. AGU Fall Meeting, Dec 15,2008-Dec 19,2008, San Francisco, USA.

○教育

【非常勤講師】

- 同志社大学, 工学部環境システム学科, 環境システム学概論 II. 2008年11月-2008年11月.

湯本 貴和 (ゆもと たかかず)

●1959年生まれ

【学歴】

京都大学理学部卒（1982）、京都大学大学院理学研究科植物学専攻修士課程修了（1984）、京都大学大学院理学研究科植物学専攻博士課程修了（1987）

【職歴】

日本学術振興会特別研究員（1987）、神戸大学教養部助手（1989）、神戸大学教養部講師（1992）、神戸大学理学部講師（1992）、京大大学生態学研究センター助教授（1994）、総合地球環境学研究所研究部教授（2003）

【学位】

博士（理学）（京都大学 1987）、修士（理学）（京都大学 1984）

【専攻・バックグラウンド】

生態学

【所属学会】

日本生態学会、日本植物学会、日本熱帯生態学会、日本アフリカ学会、種生物学会、日本植生史学会、野生生物保護学会

●主要業績

○著書（執筆等）

【分担執筆】

- ・湯本貴和・米田 穰 2008年 日本列島に住む人々は何を食べてきたか. 湯本貴和編 食卓から地球環境がみえる-食と農の持続可能性. 地球研叢書. 昭和堂, 京都市左京区, pp. 25-60.
- ・湯本貴和 2008年 身近な自然資源を見直そう. 総合地球環境学研究所編 地球の処方箋-環境問題の根源に迫る. 地球研叢書. 昭和堂, 京都市左京区, pp. 72-75.

○著書（編集等）

【編集・共編】

- ・湯本貴和編 2008年 食卓から地球環境がみえる-食と農の持続可能性. 地球研叢書. 昭和堂, 京都市左京区,

○論文

【原著】

- ・ Imamura, A. & Yumoto, T. 2008 Dynamics of fruit-body production and mycorrhiza formation of ectomycorrhizal ammonia fungi in warm temperate forests in Japan.. *Mycoscience* 49 :42-55. (査読付) .
- ・ Kitamura, S., Yumoto, T., Noma, N., Chuailua, P., Maruhashi, T., Wohandee, P., & Poonswad, P. 2008 Aggregated seed dispersal by wreathed hornbills at a roost site in a moist evergreen forest of Thailand.. *Ecological Research* 23 :943-952. (査読付) .
- ・ Tsujino, R. & Yumoto, T. 2008 Seedling establishment of five evergreen tree species in relation to topography, sika deer (*Cervus nippon yakushimae*) and soil surface environments.. *Journal of Plant Research* 121 :537-546. (査読付) .
- ・ 石丸恵利子、海野徹也、米田 穰、柴田康行、湯本貴和、陀安一郎 2008年 海産魚類の産地同定からみた水産資源の流通の展開—中四国地方を中心とした魚類遺存体の炭素・窒素同位体分析の視角から.. *考古学と自然科学* 57 :1-20. (査読付) .
- ・ 寺川眞理、松井淳、濱田知宏、野間直彦、湯本貴和 2008年 ニホンザル不在の種子島におけるヤマモモの種子散布効果の減少.. *保全生態学研究* 13 :161-167. (査読付) .
- ・ Kusaka, S., Ikarashi, T., Hyodo, F., Yumoto, T. and Katayama, K. 2008 Variability in stable isotope ratios in two Late-Final Jomon communities in the Tokai coastal region and its relationship with sex

and ritual tooth ablation.. Anthropological Science 116 :171-181. (査読付) .

- Yamagiwa, J., Basabose, A. K., Kaleme, K. & Yumoto, T. 2008 Phenology of fruits consumed by a sympatric population of gorillas and chimpanzees in Kahuzi-Biega National Park, Democratic Republic of Congo.. African Study Monographs (Supplementary Issue) 39 :3-22. (査読付) .
- Kitamura, S., Yumoto, T., Poonswad, P., Suzuki, S., & Wohande, P. 2008 Rare seed predating mammals determine seed fate of *Canarium euphyllum*, a large-seeded tree species in a moist evergreen forest, Thailand. Ecological Research 23 :169-177. (査読付) .

○会合等での研究発表

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- 湯本貴和 これからの里山—生物と文化の多様性を見つめて. 日本森林学会公開シンポジウム, 2009年03月26日, 京都大学.
- Yumoto, T. Ecosystem service provided by Satoyama and its sustainable use. Satoyama; nature as culture, 2008年12月13日, 龍谷大学.
- Yumoto, T. Loss of diversity is a global environmental crisis. In search of sustainable well-being 2008, Sep 12, 2008, 東京ステーションコンファレンス.

○学会活動（運営など）

【組織運営】

- 種生物学会, 理事. 2007年01月-2009年12月.
- 野生動物保護学会, 理事 (英文学術誌担当). 2007年01月-2009年12月.
- 日本熱帯生態学会, 評議員. 2007年01月-2009年12月.
- 日本生態学会, 保全生態学研究編集委員長. 2006年01月-2008年12月.

○社会活動・所外活動

【依頼講演】

- 生物と文化の多様性はなぜ必要か. 地球研地域セミナー, 2009年02月13日, 名護市.
- 自然との共生とは?. サイエンスカフェくましろ, 2009年01月17日, 南あわじ市.
- 奄美の自然と人々との関わり. 日本民家集落博物館講座, 2008年11月29日, 豊中市.
- 熱帯雨林を通して見る地球環境. 兵庫県立三原高校特別授業, 2008年11月28日, 南あわじ市.
- 食を通して環境問題を考える. 兵庫県立三原高校特別授業, 2008年11月28日, 南あわじ市.
- 食卓から地球環境が見える. 江東区エコリーダー養成講座, 2008年11月15日, 東京都江東区.
- 熱帯林の自然—その多様性の秘密. 地球環境大学2008講座, 2008年09月27日, 大阪市立自然史博物館.
- 生物多様性とは何か. 滋賀県商工会議所, 2008年09月01日, 大津市.
- 身近な「食」を通し生活環境を考える. 南あわじ市女性農業教室, 2008年08月27日, 南あわじ市.
- 屋久島野外博物館の10年. 屋久島野外博物館構想10周年シンポジウム, 2008年08月24日, 鹿児島県屋久島町.
- 巨大哺乳類と人間:ゾウがいた自然とは?. 忠類ナウマン象記念館開館20周年記念講演会, 2008年08月10日, 北海道幕別町.
- 生物多様性はなぜ重要か?. 科学技術展望懇談会, 2008年08月04日, 東京都千代田区.
- 動物と人間の未来. カフェ山がめ, 2008年07月29日, 沖縄県東村.
- 生物と文化の多様性はなぜ大切か. 沖縄大学・環境文化論講座, 2008年07月28日, 那覇市.
- 森でみつけた共生と共存. 洛北SSH特別講義, 2008年07月16日, 洛北高校.
- 地球環境問題としての「食」. 北区民環境セミナー, 2008年07月12日, 総合地球環境学研究所 .
- 花や果実で動物を操って生きる植物. こころの広場, 2008年06月22日, 京都府庁.

- ・熱帯雨林の生きものたちと人間の未来. 京都精華大学・地球環境学講座, 2008年06月10日, 京都市中京区.
- ・ゆずるは山を歩いてみよう. サイエンスカフェくましる, 2008年04月27日, 南あわじ市.

○教育

【非常勤講師】

- ・京都精華大学, 芸術学部, 生物学. 2006年04月.

LEKPRICHAKUL, Thamana (れくぷりちやくる たまな)

プロジェクト上級研究員

●1959年生まれ

【学歴】

タマサート大学経済学部卒業 (1987)、ハワイ大学経済学研究科修士課程修了 (1992)、ハワイ大学経済学研究科博士課程修了 (2001)

【職歴】

C. Thai Chemical Co., Ltd. (C.タイ化学社) 物流マネージャー (1980)、Asian Institute of Technology (アジア工科大学) エネルギー技術学科研究助手 (1988)、イーストウエストセンター プロジェクト研究助手 (1995)、イーストウエストセンター リサーチ・インターン (1996)、Print Lysue Printing, Limited Partnership総括マネージャー (1998)、イーストウエストセンター人口プログラム客員研究員 (2002)、ハワイ大学経済学部客員研究員 (2004)、総合地球環境学研究所プロジェクト上級研究員 (1-3PR) (2006)

【学位】

博士 (経済学) (ハワイ大学2001)、修士 (経済学) (ハワイ大学1992)

【専攻・バックグラウンド】

保健衛生、人口、社会福祉、開発経済学、経営学

【所属学会】

American Economics Association、Thai Economics Association

【受賞歴】

King Bhumipol's 論文賞 (1986)、国連エッセイ賞 (1987)、タマサート大学経済学部最優秀論文賞 (1987)

●主要業績

○著書 (執筆等)

【翻訳・共訳】

- ・Lekprichakul, T. 2008 Science of Getting Rich. Lekprichakul, T. (2008) "Science of Getting Rich" translated from Wattles, W. (1911) Science of Getting Rich, Thai language. Nontaburi: . Doris & Son Publishing, Nontaburi, Thailand, (その他) Translation of Wattles, W. Science of Getting Rich . Destiny Books , 112pp.

○論文

【総説】

- ・Taro Yamauchi, Thamana Lekprichakul, Takeshi Sakurai, Hiromitsu Kanno, Chieko Umetsu, Sesele Sokotela. Dec,2008 Training Local Health Assitants for a Community Health Survey in a Developing Country:-Longitudinal Monitoring of the Growth and Nutrition of Children in Zambia-. Higher Education and Lifelong Learning 16 :67-75.

渡辺 千香子 (わたなべ ちかこ)

客員准教授

●主要業績

○論文

【原著】

- ・ C. E. Watanabe 2008 The classification of methods of pictorial narrative in Assurbanipal's relief. Proceedings of the 51st Rencontre Assyriologique Internationale, Chicago :321-331. R. D. Biggs et al.,.
- ・ J. Novotny & C. E. Watanabe. 2008 After the Fall of Babylon: A New Look at the Presentation Scene on Assurbanipal Relief BM ME 124945-6". Iraq LXX :105-125.

渡邊 紹裕 (わたなべ つぎひろ)

教授

●1953年生まれ

【学歴】

京都大学農学部農業工学科卒（1977）、京都大学大学院農学研究科修士課程（農業工学専攻）修了（1979）、京都大学大学院農学研究科博士後期課程（農業工学専攻）単位取得退学（1983）

【職歴】

日本学術振興会奨励研究員（1983）、京都大学農学部助手（1984）、京都大学農学部助教授（1989）、大阪府立大学農学部助教授（1995）、鳥取大学乾燥地研究センター助教授（2001）、総合地球環境学研究所研究部助教授（2001）、総合地球環境学研究所研究部教授（2003）、総合地球環境学研究所研究推進戦略センター教授・プログラム主幹（2008）

【学位】

博士（農学）（京都大学1989）、修士（農学）（京都大学1979）

【専攻・バックグラウンド】

農業土木学、灌漑排水学

【所属学会】

農業土木学会、水文・水資源学会、水資源・環境学会、土木学会、日本沙漠学会、国際灌漑排水学会、国際水資源学会、国際水田水環境学会、農村計画学会

【受賞歴】

農業土木学会賞奨励賞（1989）、農業農村工学会賞沢田賞（2008）

●主要業績

○著書（執筆等）

【分担執筆】

- ・ 渡邊紹裕 2009年03月 水を利するー水をあやつる知恵. 水と人の未来可能性ーしのびよる水危機. 地球研叢書. 昭和堂, pp. 37-67.

○著書（編集等）

【編集・共編】

- ・渡邊紹裕共編 2009年03月 水と人の未来可能性—しのびよる水危機. 地球研叢書. 昭和堂, 182pp.

○論文

【原著】

- ・大西暁生・森杉雅史・石峰・井村秀文・渡邊紹裕・福嶋義宏, 2008年 黄河流域の農業用水効率性に関する研究. *Journal of Arid Land Studies* 18(2) :45-55.
- ・Akio Onishi・Masafumi Morisugi・Hidefumi Imaura・Feng Shi・Tsugihiko Watanabe・Yoshihiro Fukushima 2008年 STUDY ON THE EFFICIENCY OF AGRICULTURAL WATER USE IN THE YELLOW RIVER BASIN. *Journal Global Environment Engineering*, 13 :51-67.
- ・T. Nagano・ T. Onishi・ T. Kume・ T. Watanabe・ K. Hoshikawa・ S. Donma, 2008年 Long-term changes in water and salinity management in Lower Seyhan Plain, Turkey. M. Taniguchi・ W.C. Burnett・ Y. Fukushima・ M. Haigh・ Y. Umezawa 編 *From Headwaters to the Ocean: Hydrological Changes and Watershed Management*. CRC Press, pp. 313-319.
- ・YOICHI FUJIHARA・SLOBODANP. SIMONOVIC・FATIH TOPALOGLU・KENJI TANAKA・TSUGIHIRO WATANABE, 2008年 An inverse-modeling approach to assess the impacts of climate change in the Seyhan River basin, Turkey.. *Hydrological Sciences* 53(6) :1121-1136.
- ・Y. Fujihara・ T. Watanabe・ T. Nagano, K. Tanaka・ and T. Kojiri, 2008年 Adapting to climate change on the water resources systems of the Seyhan River Basin in Turkey.. M. Taniguchi,・ W.C. Burnett・ Y. Fukushima・ M. Haigh・ Y. Umezawa 編 *From Headwaters to the Ocean: Hydrological Changes and Watershed Management*. CRC Press, pp. 257-263.
- ・渡邊紹裕 2008年 水田の灌漑. 山路永司・塩沢昌編 *農地環境工学*. 文永堂, pp. 34-40.
- ・A. M. Hao・ T. Watanabe・ T. Haraguchi・ and Y. Nakano, 2008年 Effects of land use on soil physical and chemical properties of sandy land in Horqin, China. . *From Headwaters to the Ocean: Hydrological Changes and Watershed Management*. CRC Press, pp. 123-127.
- ・A. Onishi・ Y. Sato・ T. Watanabe・ Y. Fukushima・ X. Cao, H. Imura・ M. Matsuoka・ M. Morisugi, 2008年 Study on sustainable agricultural production and agricultural water use efficiency in the Yellow River Basin of China.. M. Taniguchi・ W.C. Burnett・ Y. Fukushima・ M. Haigh・ Y. Umezawa 編 *From Headwaters to the Ocean: Hydrological Changes and Watershed Management*. CRC Press, pp. 465-470.

【総説】

- ・小長谷有紀・広瀬伸・渡邊紹裕, 2008年 三人寄れば水土の知第4回 幸運な耕転～田畑の土を整える. *土地改良* (263) :32-37.
- ・小長谷有紀・広瀬伸・渡邊紹裕, 2008年 三人寄れば水土の知, 第3回水利は推理か～地域の水を整える. *土地改良* (262) :28-33.
- ・小長谷有紀・広瀬伸・渡邊紹裕 2008年 三人寄れば水土の知, 第2回 用水は羊水か～田畑の水を整える. *土地改良* (261) :30-35.
- ・小長谷有紀・広瀬伸・渡邊紹裕 2008年 三人寄れば水土の知, 第1回 「水土」とその知. *土地改良* (260) :28-33.
- ・渡邊紹裕 2008年 環境農業の展開と課題～特集に当たって. *学術月報* 61(2) :70-71.
- ・渡邊紹裕 2008年 フィールド報告「白い海」への流れを探る. *人と水* (4) :30-31.
- ・渡邊紹裕、 2008年 水景の名所第6回, 歴史的水利施設-中国四川省岷江「都江堰」-. *人と水* (5) :26-27.
- ・渡邊紹裕、 2008年 世界の水問題と日本の貢献. *農業農村工学誌* 76(5).
- ・渡邊紹裕, 2008年 環境農業の展開と課題. *学術月報* 61(2) :70-71.
- ・渡邊紹裕, 2008年 地球温暖化と世界と日本の水問題. *水資源・環境研究* 21 :15-24.
- ・渡邊紹裕, 水資源 2008年 地球温暖化と世界と日本の水問題, . *水資源・環境研究* 21 :15-24.
- ・渡邊紹裕、 2008年 温暖化がもたらす食料生産・農業への影響. *都市問題* 99(9) :16-21.

○その他の出版物

【その他の著作(会報・ニュースレター等)】

- ・渡邊紹裕・児玉香菜子 2009年02月 「ecosophyー地域のみんなの知恵」をキーワードに. Newsletter (18) :2-3.

○会合等での研究発表

【口頭発表】

- ・渡邊紹裕 「お米と世界」. 独立行政法人国立青少年教育振興機構, 2008年09月23日, .
- ・渡邊紹裕 「地球環境学について」. JENESYS, 2008年06月09日, 京都府京都市.

【招待講演・特別講演、パネリスト】

- ・渡邊紹裕 招待講演, 「世界の水問題と食料・農業」. 外務省, 2009年02月06日, .
- ・渡邊紹裕 招待講演, 「地球温暖化と世界と日本の水問題」、. 行政院農業委員会, 2008年12月26日, 台湾・台北市.
- ・渡邊紹裕 招待講演, 「科学研究費補助金について」. 独立行政法人港湾空港技術研究所, 2008年09月17日, 神奈川県横須賀市.
- ・渡邊紹裕 座長講演, 「灌漑排水」. 農業農村工学会大会講演会, 2008年08月28日, 秋田県秋田市.
- ・渡邊紹裕 招待講演, 「人と自然の関わりのしくみとしての環境」. 京都市地域女性会連合会, 2008年07月31日, 京都府京都市.
- ・渡邊紹裕 招待講演, 「地球温暖化と農業」. 流域政策研究フォーラム, 2008年07月26日, 滋賀県大津市.
- ・渡邊紹裕 招待講演, 「地球温暖化と世界と日本の水問題」. 水資源・環境学会, 2008年06月07日, 京都府京都市.

○学会活動(運営など)

【企画・運営・オーガナイズ】

- ・農業農村工学会大会講演会, オーガナイザー(日本学術振興会事業の活用に向けてー科学研究費補助金や特別研究員についてー). 2008年08月28日, 秋田県秋田市.

○報道等による成果の紹介

【報道機関による取材】

- ・「こちら特捜部『農業での水利用、見直し必要』」. 東京新聞, 2009年03月01日 朝刊, 25面.
- ・「『水土』を根幹に『文化』見直す」. 日本下水道新聞, 2009年01月30日 .
- ・「20年度農業農村工学会大会講演会【沢田賞】受賞者」. 土地改良新聞, 2008年09月15日, 2面.
- ・「Adiyaman大学が国際シンポジウムを主催」. Yenyol 他, 2008年07月08日, 1面.

渡邊 三津子 (わたなべ みつこ)

プロジェクト研究員

●1977年生まれ

【学歴】

奈良女子大学文学部卒業(2000)、奈良女子大学大学院人間文化研究科博士前期課程修了(2002)、奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程修了(2005)

【職歴】

奈良女子大学大学院人間文化研究科RA(2002)、奈良女子大学21世紀COEプログラムRA(2004)、奈良女子大学大学院人間文化研究科博士研究員(2005)、総合地球環境学研究所技術補佐員(2005)、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員(2006)、天理大学非常勤講師(2007, 2008)

【学位】

博士（理学）（奈良女子大学2005）、修士（文学）（奈良女子大学2002）

【専攻・バックグラウンド】

自然地理学、地形学、第四紀学

【所属学会】

日本地理学会、日本第四紀学会、日本沙漠学会、日本地形学連合、日本地震学会

●主要業績**○論文****【原著】**

・渡邊三津子 2008年 黒河中流域の土地被覆変化. 沙漠誌ノート 5 :55-60.

○会合等での研究発表**【口頭発表】**

- ・渡邊三津子・小長谷有紀・秋山知宏・窪田順平 カザフスタン共和国アルマトゥ州における社会主義的近代化の環境史—カザフスタン・ソフホーズを事例として—. 日本地理学会 2009年春季学術大会, 2009年03月28日-2009年03月29日, 帝京大学, 八王子市. (本人発表).
- ・Mitsuko WATANABE, Yuki KONAGAYA, Tomohiro AKIYANA and Jumpei KUBOTA Legacies and Ruins of Socialist Modernization in Almaty Region, Republic of Kazakhstan. International Workshop “Reconceptualizing Cultural and Environmental Change in Central Asia: An Historical Perspective on the Future, 2009年02月01日-2009年02月02日, 総合地球環境学研究所, 京都市. (日本語, 英語, ロシア語) (本人発表).

○調査研究活動**【海外調査】**

- ・総合地球環境学研究所プロジェクト「民族／国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明—中央ユーラシア半乾燥域の変遷（プロジェクト・リーダー：窪田順平）」に関わる現地調査. カザフスタン共和国イリ河中流域, 2009年01月06日-2009年01月21日.
- ・総合地球環境学研究所プロジェクト「民族／国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明—中央ユーラシア半乾燥域の変遷（プロジェクト・リーダー：窪田順平）」に関わる現地調査. カザフスタン共和国イリ河中流域, 2008年09月29日-2008年10月06日.
- ・総合地球環境学研究所プロジェクト「民族／国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明—中央ユーラシア半乾燥域の変遷（プロジェクト・リーダー：窪田順平）」に関わる現地調査. カザフスタン共和国イリ河中流域, 2008年08月01日-2008年08月30日.

○外部資金の獲得**【科研費】**

- ・乾燥・半乾燥地域における歴史地震の人間活動への影響評価に関わる基礎的研究(研究代表者) 2006年04月01日-2009年03月31日. 若手B (18700683).

○教育**【非常勤講師】**

- ・天理大学, 自然地理学概論. 2007年04月-2009年03月.

付録1

研究プロジェクトの参加者の構成（所属機関）

単位：人（のべ人数）

プロジェクト番号	プロジェクト名	総数	総合地球環境学研究所	大学			大学共同利用機関	公的機関	民間機関等	PD 大学院生	その他	海外研究者
				国立	公立	私立						
C-04 (FR4)	北東アジアの人間活動が北太平洋の生物生産に与える影響評価	81	6	31	1	4	1	3	1	5	1	28
C-05 (FR3)	都市の地下環境に残る人間活動の影響	81	6	33	2	8	0	8	0	9	0	15
C-06 (FR2)	病原生物と人間の相互作用環	41	11	12	0	2	0	3	1	3	0	9
C-07 (PR)	温暖化するシベリアの自然と人—水環境をはじめとする陸域生態系変化への社会の適応	41	3	20	0	1	1	4	2	4	0	6
C-FS1	都市をめぐる循環と多様性：人類と地球環境を架橋する巨大で複雑なシステム未来可能性	27	2	15	0	2	0	0	1	4	0	3
C-FS2	水質の地域多様性の探求；循環を基軸にした水管理に向けて	39	3	23	2	4	0	3	0	4	0	0
D-02 (FR3)	日本列島における人間—自然相互関係の歴史的・文化的検討	132	8	37	10	29	4	20	5	18	1	0
D-03 (FR1)	人の生病死と高所環境—3大「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応	42	8	16	2	4	0	2	1	6	2	1
D-04 (FR1)	人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生	71	9	26	0	5	3	6	2	18	0	2
R-03 (FR2)	民族／国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明—中央ユーラシア半乾燥域の変遷	98	10	33	5	16	5	2	2	23	1	1
R-04 (FR1)	熱帯アジアの環境変化と感染症	64	6	20	0	5	0	4	5	10	0	14
R-05 (PR)	アラブ社会におけるなりわい生態系の研究—ポスト石油時代に向けて	54	9	7	0	10	0	3	7	5	2	11
H-02 (FR3)	農業が環境を破壊するとき—ユーラシア農耕史と環境	95	14	30	3	9	5	12	7	0	1	14
H-03 (FR2)	環境変化とインダス文明	54	10	25	2	4	3	1	0	0	0	9
H-04 (FR2)	東アジア内陸の新石器化と現代化：景観の形成史	58	8	7	3	10	5	8	0	0	1	16
H-FS	メソポタミア文明における王朝の興亡と環境	21	1	0	0	4	0	1	0	0	0	15
E-02 (FR5)	流域環境の質と環境意識の関係解明—土地・水資源利用に伴う環境変化を契機として	22	5	10	1	2	0	2	2	0	0	0
E-03 (FR5)	亜熱帯島嶼における自然環境と人間社会システムの相互作用	41	8	16	3	5	0	1	1	4	1	2
E-04 (FR2)	社会・生態システムの脆弱性とレジリエンス	40	8	11	0	2	0	2	2	7	0	8
総計		1102	135	372	34	126	27	85	39	120	10	154

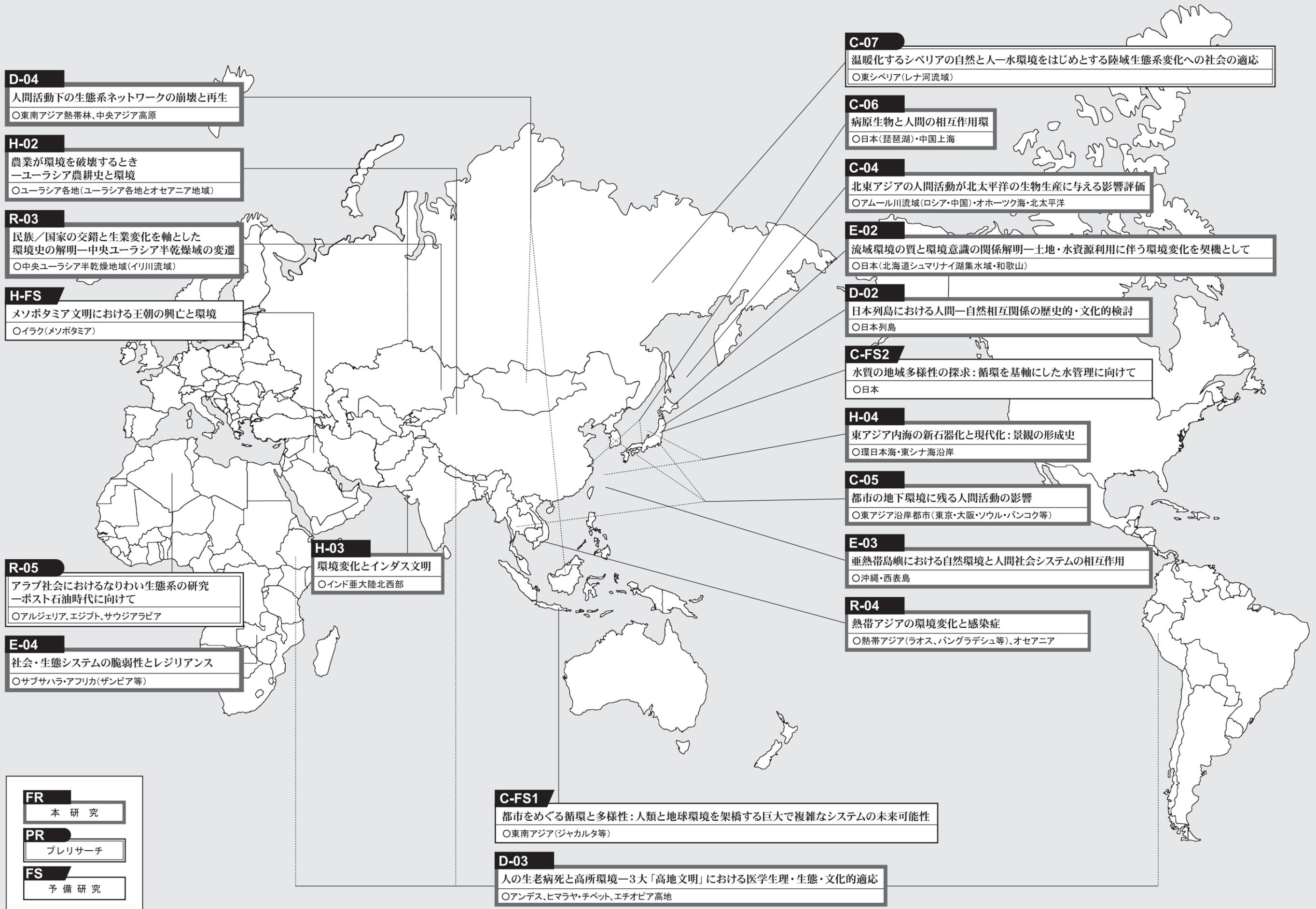
2009年3月31日現在

研究プロジェクトの参加者の構成（研究分野）

単位：人（のべ人数）

プロジェクト番号	プロジェクト名	分野				専門分野
		自然系	人社系	複合系	総数	
C-04 (FR4)	北東アジアの人間活動が北太平洋の生物生産に与える影響評価	54	13	14	81	(自然系) 古環境復元、海洋物理学、海洋化学、生物地球化学、気象学、海洋工学、海洋生物学、環境化学、植物生態学、森林水文学、森林生態学、造林学、水文学、数値モデリング、雪氷化学、雪氷水文学、雪氷生物学、雪氷物理学、大気化学、地球化学、地球環境科学、地球環境分析化学、地質学、土壌科学、土壌生態学、土壌地球化学、水河気候学、プランクトン学、分析化学、界面コロイド科学、火山学、地震学、古海洋学、有機地球化学、古生態学、森林科学、水資源工学 (人社系) 経済地理学、人文地理学、経済学、政治学、農業経済学、考古学、国際法 (複合系) GISモデリング、地理学、海洋動物資源学、生態系管理、リモートセンシング
C-05 (FR3)	都市の地下環境に残る人間活動の影響	44	23	14	81	(自然系) 水文学、火山学、地下水学、地球システム学、地球化学、衛星測地学、地震学、環境解析学、生物地球化学、気象学、同位体水文学、地球熱学、測地工学、水文地形学、地下水科学・固定地球科学、海洋学、陸水物理学、地質学、地下熱学、海洋地質学、同位体年代学、地球環境学 (人社系) 社会開発学、環境経済学、地理学、政治学、環境工学、都市社会地理学、文化地理学・都市研究、社会経済学、マテリアルストック解析、歴史地理学、都市環境学、環境政策学、GIS、都市計画学、人口学、地下環境学、水資源学 (複合系) 環境保全学、環境動態学、地域環境学、地下熱学、微量金属分析、地理学、住空間環境学、地下環境学、地下水学、水資源学
C-06 (FR2)	病原生物と人間の相互作用環	28	5	8	41	(自然系) ナノテクノロジー、生態学、魚類生態学、分子生物学、分子生態学、環境保全学、植物育種学、衛生学、数理生態学、水城生態学、植物生態学、理学、動物生態学、農学、生態系生態学、微生物生態学、環境資源地質学、同位体地球科学、環境毒性学、遺伝情報学、医学 (人社系) 経済学、食文化、環境経済学、社会学 (複合系) 生態学、保健学、衛生学、医学、環境保全、環境医学
C-07 (PR)	温暖化するシベリアの自然と人－水環境をはじめとする陸域生態系変化への社会の適応	27	11	3	41	(自然系) 林学、陸水学、リモートセンシング、モデリング、生態水文学、地球科学、森林気象、植物生理生態学、保全生態学、生態系影響、土木工学、気象学、大気モデル、水・エネルギー循環、生態系モデル、同位体水文学、生態学、動物行動学、河川工学、水文学、気候学、海洋物理・陸水学、林学、生態学、環境保全、年輪年代学 (人社系) 土木工学、社会人類学、国際関係論、社会学、政治学、文化人類学、ロシア経済、記述言語学、歴史学 (複合系) 大気化学、気象学、生態水文学
C-FS1	都市をめぐる循環と多様性：人類と地球環境を架橋する巨大で複雑なシステムの未来可能性	5	9	13	27	(自然系) 交通工学、建築材料工学、リモートセンシング、水文学、都市緑地計画学 (人社系) アジア経済史、中国思想史、宗教学、価値論、経営学、音環境学、文化人類学、地域資源管理学、地理情報システム、環境経済学 (複合系) 建築史、都市史、表象文化論、都市計画学、植民地建築論、東南アジア都市史、東洋都市史、歴史都市人口学、経済地理学、華僑都市論、西洋都市史
C-FS2	水質の地域多様性の探求：循環を基軸にした水管理に向けて	26	4	9	39	(自然系) 資源環境学、地質学、同位体生態学、水文学、地下水年代学、森林水文学、有機地球化学、土壌生物学、持続環境学、植物生理生態学、微量元素鉱物学、生物地球化学、海洋地球化学、岩石学、雪氷学、地球化学、地質研究、農芸化学、分析地球化学、陸水物理学、沿岸海洋学、宇宙化学、大気化学 (人社系) 政治学、社会心理学、財政学、地方財政論、環境社会学 (複合系) 堆積地質学、水圏生態学、資源教育学、環境教育学、環境情報学、資源科学、環境計画
D-02 (FR3)	日本列島における人間－自然相互関係の歴史的・文化的検討	70	54	8	132	(自然系) 生態学、森林生態学、自然人類学、動物生態学、安定同位体生態学、理論生態学、植物系統学、人類学、植物分類学、植物遺伝資源学、古環境学、霊長類学、動物考古学、繁殖生態学、生態人類学、環境デザイン学、植物学、年代測定学、同位体地球化学、古生態学、植物生態学、森林生物学、自然地理学、植生史学、分子生態学、木材構造学、育種学、火山灰編年学、古生物学、集団遺伝学、動物系統学、霊長類生態学、分子系統学、分子系統進化学、植生史、火山地質学、自然史学、木質科学 (人社系) 哲学、文化人類学、環境歴史学、民族学、考古学、歴史学、歴史経済学、言語民族学、民俗学、地理学、生態人類学、日本中世史、人文地理学、環境経済学、コモンス論、旧石器考古学、日本近代史 (複合系) 保全生物学、作物学、古環境学、生態人類学、霊長類学
D-03 (FR1)	人の生病老死と高所環境－3大「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応	19	7	16	42	(自然系) 森林資源学、国際保健学、地生態学、フィールド医学、看護学、循環器内科、時間医学、水資源生態学、自然地理学、生態学、霊長類学、栄養学、森林科学、自然地理学、雪氷学、土壌学、牧畜生態学、気象、気候学、畜産学、老年病学、疫学 (人社系) 民族植物学、資源経済学、人類学、アフリカ地域研究、中国思想史、自然学、チベット仏教、考古学 (複合系) フィールド医学、老年医学、在地農業、文化人類学、農業経済学、民族植物学、人文地理学、地域研究、農業経営学、草地学、神経内科学、霊長類学、環境歴史学、森林生態学、山岳人類学
D-04 (FR1)	人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生	49	19	3	71	(自然系) 理論生態学、相互作用生態学、草原生態学、森林生態学、生態学、昆虫学、樹木生理生態学、昆虫生態学、リモートセンシング、環境生態学、環境科学、物理環境学、数理生態学、土壌学、土壌科学、同位体生態学、森林土壌動物、植物分類学、環境社会学、生物地球化学 (人社系) 文化人類学、社会学、環境経済学、農業経済学、人類学、環境社会学、民俗植物学、地理学、理論社会学、昆虫生態学、地域研究、地域開発学、政治学、経済学、地理学、GIS (複合系) 地域環境学、地球環境学
R-03 (FR2)	民族／国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明－中央ユーラシア半乾燥域の変遷	53	38	7	98	(自然系) 水文学、雪氷コア生物解析、水河変動解析、土壌動態、気候変動解析、リモートセンシング解析、地下水動態、アイスコア解析、雪氷生物、湖底堆積物解析、景観生態、自然地理、土壌有機物モデリング、農地計画、雪氷学、水文モデリング、雪氷生物学、樹木年輪解析、森林・草原生態系、灌漑計画、変動地形、水同位体分析、水循環解析、生態系リスク評価、環境建築デザイン、景観生態学、灌漑農業システム、乾燥地水文学・植物生理、雪氷コア、代替媒体と歴史文献の統合研究 (人社系) カザフ政治史、民族史解析、漢文文献解説・解析、遊牧システム解析、ベルシヤ語文獻解析、中国語文獻解析、カザフ遊牧業調査、考古学、国際河川問題解析、社会人類学調査、新疆農業史、民族学、遊牧形態、東洋史、社会人類学、満州語文獻解析、考古調査、政治学、中央アジア開発史、農業経済、カザフ近現代史、カザフスタン農業史、中国史、中央ユーラシア史、漢文資料解析、東南アジア史、国際河川管理、環境政治学、西南アジア史、文化人類学 (複合系) カザフ民族調査、地域研究、考古学、考古調査、地理調査、カザフ農業経済史
R-04 (FR1)	熱帯アジアの環境変化と感染症	44	10	10	64	(自然系) 感染症学、人口学、森林生態学、寄生虫学、環境疫学、気象変動と疾病、感染症疫学、生物人類学、公衆衛生学、環境微生物学、微生物学、臨床化学、感染症免疫学、環境保健学、マラリア学、国際保健学、ヘルスプロモーション、熱帯環境保健学、災害情報学、国際学校保健学、プライマリヘルスケア、疫学統計、臨床検査学、昆虫生態学、空間疫学、看護学、医昆虫学、疫学、気象学、熱帯医学、国際地域保健学、環境衛生、農学、環境中毒学、人類生態学、免疫学 (人社系) 医学社会学、歴史学、生態人類学、医療史、文化人類学、医療人類学、国際協力、地域研究、林学、社会人類学、国際地域保健学、国際医療協力、プロジェクトマネジメント (複合系) 人類生態学、集団保健学、保健計画学、環境疫学、保健情報、社会医療調査、行動疫学、国際看護学、公衆衛生学、国際農学、社会調査、保健政策学、公衆栄養学、国際地域保健学
R-05 (PR)	アラブ社会におけるなりわい生態系の研究－ポスト石油時代に向けて	22	19	13	54	(自然系) 栄養生理学、生化学、森林生態学、菌類学、植物生理学、水資源管理学、植物生理生態学、森林水文学、土壌水文学、情報工学、緑化学、農芸化学、自然地理学、水文学、樹木生理学、樹木環境生理学、灌漑排水学、都市計画学 (人社系) 考古学、農業経済学、文化人類学、開発社会学、宗教人類学、歴史学、社会学、開発学、教育学 (複合系) 文化人類学、農村開発学、地理学、リモートセンシング、造林学、建築学、生態人類学、畜産学、景観生態学、建築史学、環境地形学、社会人類学
H-02 (FR3)	農業が環境を破壊するとき－ユーラシア農耕史と環境	43	43	9	95	(自然系) 植物遺伝学、育種学、作物育種学、人類学、考古植物学、植物細胞遺伝学、植物分子遺伝学、分子遺伝学、農学、植物遺伝資源学、栽培植物起源学、花粉学、作物学、遺伝学、遺伝進化学、遺伝生態学、雪氷生物学、雑草生態学、地球化学、同位体生物地球科学、植物学、植物細胞学、植物生態学、古環境学、応用動物遺伝学、遺伝資源学、民族植物学、自然学、植物育種・遺伝資源探索 (人社系) 文化人類学、日本文化史・喫茶文化史、哲学、民俗学、日本文化、考古学、中国古代史、倭蘭史、民族学、言語学、中山間地域経営学、人文地理学、地理学、東南アジア考古学、近世農村史、地域計画学、中国文学・シルクロード、日本考古学、アフリカ学、美術史、東洋史 (複合系) 環境考古学、民族植物学、山岳人類学、縄文考古学、狩猟採集民考古学、歴史生態学、建築学、植物考古学
H-03 (FR2)	環境変化とインダス文明	22	24	8	54	(自然系) 農学、自然地理学、考古学、地学、地震学、土木工学、水文学、地球科学、雪氷生物学、地球物理学、年代測定学、資源環境地質学、地質学、地形学、遺伝学、変動地形学、生態学、気候変動学 (人社系) 言語学、考古学、インド学、言語学(カナウル語)、経済学、文化人類学、西アジア史 (複合系) 考古学、DNA考古学、民族学、植物遺伝資源学、動物考古学、植物考古学
H-04 (FR2)	東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史	4	46	8	58	(自然系) 魚類学、景観工学、社会工学、微生物学 (人社系) 先史人類学、民族学、景観考古学、社会言語学、交易史、日本史学、植物考古学、民俗学、景観学、日欧考古学、考古学、日本考古学、文化人類学、中国考古学、英文学、日本語学、食生活学、縄文・欧米考古学、歴史地理、中国民俗学、朝鮮考古学、中世史学、動物行動学、政治学、歴史学、情報電子工学、中世考古学 (複合系) 生態人類学、宗教民俗学、先史人類学、情報文化論、植物考古学、言語情報学、GIS考古学
H-FS	メソポタミア文明における王朝の興亡と環境	6	12	3	21	(自然系) 岩石学、岩石鉱物鉱床学、微細藻類、農業土木学、地球化学、物理学 (人社系) アッシリア学、シュメール学、考古学(古代中近東)、メソポタミア考古学、ヘッタイト学 (複合系) ランドスケープ考古学、人間生態学、人類学、考古学
E-02 (FR5)	流域環境の質と環境意識の関係解明－土地・水資源利用に伴う環境変化を契機として	14	4	4	22	(自然系) 森林水文学、環境動態解析、生物地球化学、森林生態学、森林土壌学、環境科学、水文学、陸水学、植物生態学 (人社系) 社会心理学、環境経済学、農村計画学、社会学 (複合系) 情報学、環境学、社会統計学
E-03 (FR5)	亜熱帯島嶼における自然環境と人間社会システムの相互作用	28	7	6	41	(自然系) 森林水文学、動物行動学、森林生態学、地球物理学、地域環境学、分析化学、植物形態学、動物生態学、植物地理学、昆虫学、植物生態学、同位体生物地球科学、植物生理・生態学、水文地形学、植物学、植物分類学 (人社系) 国際経済学、島嶼経済学、環境情報学、環境社会学、社会経済史、経済学、環境経済学、陶芸学、陶磁器技法論 (複合系) 植物形態学、環境デザイン学、陸水学、動物行動学、染織技術論
E-04 (FR2)	社会・生態システムの脆弱性とレジリエンス	17	15	8	40	(自然系) 大気物理学、土壌環境学、境界農学、リモートセンシング、土壌学、農業気象学、森林生態、作物学、雑草学、気象学、数理生態学、同位体土壌水文学 (人社系) 環境資源経済学、開発経済学、農業経済学、開発学、人類学、人文地理学、ジェンダー人類学、文化人類学、社会学、地理学、経済学 (複合系) 環境地理学、医療経済学、生態人類学、緩和医療学、人類生態学、地理情報学、数理モデル、地域研究、アフリカ地域研究
	総計	575	363	164	1102	

2009年3月31日現在



- FR**
本 研 究
- PR**
プレリサーチ
- FS**
予 備 研 究